高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 131 集

祈年遺跡Ⅳ

国道 195 号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 4 分冊　Ⅷ区

2012.9

(公財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

祈年（きねん）遺跡Ⅳ

国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第4分冊　Ⅷ区

2012.9

（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は平成 19 年 (2007) から平成 21 年 (2009) まで実施した国道 195 号道路改築 (通称あけぼの道路) に伴う埋蔵文化財調査祈年(きねん)遺跡の発掘調査報告書である。

本報告書はⅠ区からⅩ区の調査区の内、Ⅷ区の成果報告である。

2. 祈年遺跡は高知県南国市小籠(こごめ)、東崎、下末松に所在する。

遺跡名は当初「土島田(ししまだ)遺跡」としていたものの、「祈年遺跡」に変更した。

3. (公財) 高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県から委託を受け、発掘調査及び報告書作成を行った。

4. Ⅷ区の発掘調査は平成 20、21 年度に実施した。

発掘調査及び整理作業は (公財) 高知県文化財団埋蔵文化財センターが行った。

「第Ⅲ章　第 1 節 祈年遺跡出土土器の胎土分析」を岡山理科大学 白石 純氏、「第Ⅲ章　第 2 節 重鉱物･火山ガラス、土壌理化学分析、植物珪酸体分析」をパリノ・サーヴェイ株式会社から原稿を戴いた。

本文執筆は前田早苗が土坑、溝跡、その他を前田光雄が行った。

5. 本遺跡の資料等は一括して (公財) 高知県文化財団埋蔵文化財センターが保管する。保有者は高知県教育委員会である。

遺跡名は「祈年遺跡」とし、略記号は「NS」でそれに西暦年度略を冠し、「09-NS」と言う具合に遺物注記等は記録した。

A Faithful student, a sincere freiend. a lover of nature. Holding the belife that in moral as well as in physical questions. "*The ultimate court of appeal is observation and experiment, and not authority*" Such was Matsura.

Edward .S. Mors

本文目次

例言 / 本文目次 / 挿図目次 / 表目次 / 写真図版目次

第Ⅰ章　祈年遺跡の概要と調査経緯

第１節　祈年遺跡の概略　1

遺跡の内容 / 報告書の構成

第２節　地理的・歴史的景観　5

香長平野の地形区分 / 長岡台地 / 周辺の遺跡 / 周辺域の景観 / 香長平野の基準線について

第Ⅱ章　Ⅷ区の調査成果

第１節　Ⅷ区の調査概要　29

Ⅷ区の調査概略 / 調査区の設定 / 調査の方法 / 整理作業方法 /

周辺の微地形 / 下層検出遺構 / 上層検出遺構

第２節　竪穴建物跡 (ST)　43

第３節　掘立柱建物跡 (SB)　155

第４節　壺棺墓 (SG)　183

第５節　土坑 (SK)　209

第６節　竪穴状遺構 (SX)　241

第７節　溝状遺構 (SD)　279

第８節　柱穴跡 (P)　301

第９節　遺物包含層出土遺物　315

第Ⅲ章　自然科学分析

第１節　祈年遺跡出土土器の胎土分析　327

第２節　重鉱物・火山ガラス、土壌理化学分析、植物珪酸体分析　331

文献

写真図版

クレジットタイトル

報告書抄録

挿図目次

第Ⅰ章祈年遺跡の概要と調査経緯

図 1　高知県位置図　1
図 2　南国市位置図　1
図 3　祈年遺跡位置図　2
図 4　祈年遺跡弥生時代・古墳時代住居跡分布図　2
図 5　祈年遺跡古墳時代竈付住居跡分布図　3
図 6　祈年遺跡古墳時代・古代掘立柱建物跡分布図　3
図 7　香長平野地形区分　6
図 8　長岡台地空撮　7
図 9　香長平野横断面図　7
図 10　Ⅸ区土層堆積状況　8
図 11　Ⅵ層出土礫　8
図 12　地形別遺跡分布図　11
図 13　祈年遺跡周辺空撮　13
図 14　岡豊山より廿枝を臨む　14
図 15　国衙周辺　14
図 16　土佐国分寺　14
図 17　比江廃寺塔心礎　14
図 18　比江地域　15
図 19　野中廃寺出土瓦　16
図 20　祈年神社　16
図 21　広井城跡　16
図 22　願勝寺　16
図 23　祈年遺跡周辺小字　18
図 24　祈年遺跡周辺小字　18
図 25　宮ノ前五輪塔　19
図 26　下末松遍路石　19
図 27　香美郡境碑　20
図 28　推定香美郡衙　21
図 29　古代基準線　22
図 30　古代基準線写真　23
図 31　古代南海道　24

第Ⅱ章第１節Ⅷ区の調査概要

図 1-1　調査区配置図　31
図 1-2　下層検出遺構全体図　33
図 1-3　Ⅷ B 区東側下層遺構配置図　34
図 1-4　Ⅷ B 区西側下層遺構配置図　35
図 1-5　Ⅷ A 区東側下層遺構配置図　36
図 1-6　Ⅷ A 区西側下層遺構配置図　37
図 1-7　上層検出遺構全体図　38
図 1-8　Ⅷ B 区東側上層遺構配置図　39
図 1-9　Ⅷ B 区西側上層遺構配置図　40
図 1-10　Ⅷ A 区東側上層遺構配置図　41
図 1-11　Ⅷ A 区西側上層遺構配置図　42

第Ⅱ章第２節竪穴建物跡

図 2-1　竪穴建物跡全体配置図　45
図 2-2　ST1 遺構図　46
図 2-3　ST1 遺物出土状況図　47
図 2-4　ST1 出土遺物実測図　48
図 2-5　ST2 遺構図　49
図 2-6　ST2 遺物出土状況図　50
図 2-7　ST2 出土遺物実測図　51
図 2-8　ST3 遺構図　52
図 2-9　ST3 出土遺物実測図　52
図 2-10　ST5 遺構図　53
図 2-11　ST5 遺物出土状況図　54
図 2-12　ST5 竈図　54
図 2-13　ST5 出土遺物実測図 (1)　55
図 2-14　ST5 出土遺物実測図 (2)　56
図 2-15　ST6 遺構図　57
図 2-16　ST6 遺物出土状況図　57
図 2-17　ST6 出土遺物実測図　58
図 2-18　ST7 遺構図　59
図 2-19　ST7 竈図　60
図 2-20　ST7 出土遺物実測図　60
図 2-21　ST8 遺構図　61
図 2-22　ST8 出土遺物実測図　61
図 2-23　ST9 遺構図　62
図 2-24　ST9 遺物出土状況図　63
図 2-25　ST9 出土遺物実測図　64
図 2-26　ST10 遺構図　65
図 2-27　ST10 出土遺物実測図　66
図 2-28　ST11 遺構図　67
図 2-29　ST11 遺物出土状況図　68
図 2-30　ST11 出土遺物実測図 (1)　69
図 2-31　ST11 出土遺物実測図 (2)　70
図 2-32　ST12 遺構図　72
図 2-33　ST12 竈図　73
図 2-34　ST12 出土遺物実測図　74
図 2-35　ST13 遺構図　75
図 2-36　ST13 出土遺物実測図　77
図 2-37　ST14 遺構図　78
図 2-38　ST14 出土遺物実測図　79
図 2-39　ST17 遺構図　81
図 2-40　ST17 竈図　81
図 2-41　ST17 出土遺物実測図　82
図 2-42　ST18 遺構図　82
図 2-43　ST18 竈図　83
図 2-44　ST18 出土遺物実測図　83

図 2-45　ST19 遺構図　84
図 2-46　ST19 出土遺物実測図　84
図 2-47　ST20 遺構図　86
図 2-48　ST20 竈図　87
図 2-49　ST20 出土遺物実測図　87
図 2-50　ST23 遺構図　88
図 2-51　ST23 竈図　89
図 2-52　ST23 出土遺物実測図　89
図 2-53　ST24 遺構図　90
図 2-54　ST24 竈図　91
図 2-55　ST24 出土遺物実測図　91
図 2-56　ST25 遺構図　92
図 2-57　ST25 遺物出土状況図　93
図 2-58　ST25 出土遺物実測図 (1)　94
図 2-59　ST25 出土遺物実測図 (2)　95
図 2-60　ST26 遺構図　96
図 2-61　ST26 竈図　97
図 2-62　ST26 出土遺物実測図　98
図 2-63　ST30 遺構図　99
図 2-64　ST30 遺物出土状況図　100
図 2-65　ST30 出土遺物実測図 (1)　101
図 2-66　ST30 出土遺物実測図 (2)　102
図 2-67　ST32 遺構図　103
図 2-68　ST32 出土遺物実測図　103
図 2-69　ST33 遺構図　104
図 2-70　ST33 出土遺物実測図　104
図 2-71　ST34 遺構図　105
図 2-72　ST34 竈図　105
図 2-73　ST34 出土遺物実測図　106
図 2-74　ST35 遺構図　107
図 2-75　ST35 遺物出土状況図　108
図 2-76　ST35 出土遺物実測図 (1)　108
図 2-77　ST35 出土遺物実測図 (2)　109
図 2-78　ST38 遺構図　110
図 2-79　ST38 竈図　111
図 2-80　ST38 出土遺物実測図　112
図 2-81　ST39 遺構図　113
図 2-82　ST39 出土遺物実測図　114
図 2-83　ST40 遺構図　114
図 2-84　ST40 竈図　115
図 2-85　ST40 出土遺物実測図　115
図 2-86　ST41 遺構図　116
図 2-87　ST41 出土遺物実測図　117
図 2-88　ST42 遺構図　118
図 2-89　ST42 東竈図　119
図 2-90　ST42 北竈図　119
図 2-91　ST42 出土遺物実測図　120
図 2-92　ST43 遺構図　121
図 2-93　ST43 竈図　122
図 2-94　ST43 出土遺物実測図　122
図 2-95　ST44 遺構図　123
図 2-96　ST44 竈図　124
図 2-97　ST44 出土遺物実測図　124
図 2-98　ST45 遺構図　125
図 2-99　ST45 出土遺物実測図　126
図 2-100　ST46 遺構図　127
図 2-101　ST46 竈図　128
図 2-102　ST46 出土遺物実測図　128
図 2-103　ST47 遺構図　129
図 2-104　ST47 竈図　130
図 2-105　ST47 出土遺物実測図　131
図 2-106　ST48 遺構図　132
図 2-107　ST48 竈図　133
図 2-108　ST48 出土遺物実測図　133
図 2-109　ST49 遺構図　134
図 2-110　ST49 遺物出土状況図　134
図 2-111　ST49 出土遺物実測図 (1)　135
図 2-112　ST49 出土遺物実測図 (2)　136
図 2-113　ST50 遺構図　137
図 2-114　ST50 出土遺物実測図　137
図 2-115　ST51 遺構図　139
図 2-116　ST51 出土遺物実測図 (1)　140
図 2-117　ST51 出土遺物実測図 (2)　141
図 2-118　ST52 遺構図　142
図 2-119　ST52 竈図　142
図 2-120　ST52 出土遺物実測図　143
図 2-121　ST53 遺構図　143
図 2-122　ST53 竈図　144
図 2-123　ST53 出土遺物実測図　144

第Ⅱ章第３節掘立柱建物跡

図 3-1　掘立柱建物跡全体配置図　156
図 3-2　SB1 遺構図　158
図 3-3　SB2 遺構図　159
図 3-4　SB3 遺構図　160
図 3-5　SB4 遺構図　162
図 3-6　SB5 遺構図　163
図 3-7　SB6 遺構図　165
図 3-8　SB7 遺構図　167
図 3-9　SB8 遺構図　168
図 3-10　SB9 遺構図　168
図 3-11　SB10 遺構図　169

図 3-12　SB11 遺構図　170
図 3-13　SB12 遺構図　171
図 3-14　SB13 遺構図　172
図 3-15　SB14 遺構図　173
図 3-16　SB15 遺構図　174
図 3-17　SB16 遺構図　176
図 3-18　SB18 遺構図　177
図 3-19　SB19 遺構図　178
図 3-20　SB20 遺構図　179
図 3-21　掘立柱建物跡出土遺物実測図　180

第Ⅱ章第４節壺棺墓

図 4-1　壺棺墓全体配置図　184
図 4-2　SG1 遺構図　186
図 4-3　SG1・2 出土遺物実測図　187
図 4-4　SG2 遺構図　188
図 4-5　SG3 遺構図　189
図 4-6　SG4 遺構図　190
図 4-7　SG5 遺構図　191
図 4-8　SG3 ～ 5 出土遺物実測図　192
図 4-9　SG6 遺構図　193
図 4-10　SG7 遺構図　193
図 4-11　SG8 遺構図　194
図 4-12　SG9 遺構図　195
図 4-13　SG10 遺構図　196
図 4-14　SG6 ～ 12 出土遺物実測図　197
図 4-15　SG11 遺構図　198
図 4-16　SG12 遺構図　198
図 4-17　SG13 遺構図　199
図 4-18　SG14 遺構図　200
図 4-19　SG15 遺構図　201
図 4-20　SG13 ～ 17 出土遺物実測図　202
図 4-21　SG16 遺構図　203
図 4-22　SG17 遺構図　204
図 4-23　SG18 遺構図　205
図 4-24　SG18 出土遺物実測図　205

第Ⅱ章第５節土坑

図 5-1　土坑全体配置図　210
図 5-2　SK2 出土遺物実測図　212
図 5-3　SK4 遺構図　213
図 5-4　SK4 出土遺物実測図 (1)　213
図 5-5　SK4 出土遺物実測図 (2)　214
図 5-6　SK5 遺構図　215
図 5-7　SK6 遺構図　215
図 5-8　SK5 ～ 7・9 出土遺物実測図　216
図 5-9　SK7 遺構図　217
図 5-10　SK9 遺構図　217
図 5-11　SK12 遺構図　217
図 5-12　SK13 遺構図　218
図 5-13　SK12・13・18 出土遺物実測図　218
図 5-14　SK18 遺構図　219
図 5-15　SK30 遺構図　219
図 5-16　SK32 遺構図　220
図 5-17　SK33 遺構図　220
図 5-18　SK36 遺構図　221
図 5-19　SK30・32 ～ 34・36・38 出土遺物実測図 221
図 5-20　SK38 遺構図　222
図 5-21　SK41 遺構図　222
図 5-22　SK42 遺構図　223
図 5-23　SK49 遺構図　223
図 5-24　SK41・42・49・53 出土遺物実測図　224
図 5-25　SK64 遺構図　225
図 5-26　SK65 遺構図　225
図 5-27　SK66 遺構図　226
図 5-28　SK64 ～ 66 出土遺物実測図　226
図 5-29　SK69 遺構図　227
図 5-30　SK69・77 出土遺物実測図　227
図 5-31　SK77 遺構図　228
図 5-32　SK80 遺構図　228
図 5-33　SK81 遺構図　228
図 5-34　SK84 遺構図　229
図 5-35　SK90 遺構図　229
図 5-36　SK80・81・84 出土遺物実測図　230
図 5-37　SK91 遺構図　231
図 5-38　SK93 遺構図　231
図 5-39　SK97 遺構図　232
図 5-40　SK90・91・93・97 出土遺物実測図　232
図 5-41　SK98・99 出土遺物実測図　233
図 5-42　SK100 遺構図　234
図 5-43　SK101 遺構図　234
図 5-44　SK100・101・104 出土遺物実測図　235
図 5-45　SK106 遺構図　236
図 5-46　SK106 出土遺物実測図　237

第Ⅱ章第６節竪穴状遺構

図 6-1　竪穴状遺構全体配置図　242
図 6-2　SX1 遺構図　245
図 6-3　SX2 遺構図　245
図 6-4　SX3 遺構図　245
図 6-5　SX4 遺構図　245
図 6-6　SX5 遺構図　245

図 6-7　SX6 遺構図　246
図 6-8　SX10 遺構図　246
図 6-9　SX11 遺構図　247
図 6-10　SX15 遺構図　247
図 6-11　SX16・42 遺構図　248
図 6-12　SX19 遺構図　249
図 6-13　SX20 遺構図　250
図 6-14　SX21 遺構図　250
図 6-15　SX22 遺構図　252
図 6-16　SX23 遺構図　253
図 6-17　SX16・42・20 ～ 23 出土遺物実測図　254
図 6-18　SX24 遺構図　255
図 6-19　SX24 ～ 26 出土遺物実測図　256
図 6-20　SX25 遺構図　257
図 6-21　SX27 遺構図　257
図 6-22　SX28 遺構図　257
図 6-23　SX29 遺構図　258
図 6-24　SX30 遺構図　259
図 6-25　SX31 遺構図　259
図 6-26　SX32 遺構図　260
図 6-27　SX33 遺構図　260
図 6-28　SX29 ～ 33 出土遺物実測図　261
図 6-29　SX34 遺構図　262
図 6-30　SX35 遺構図　262
図 6-31　SX34 出土遺物実測図　263
図 6-32　SX36 遺構図　264
図 6-33　SX37 遺構図　264
図 6-34　SX36・37 出土遺物実測図　265
図 6-35　SX38 遺構図　265
図 6-36　SX39 遺構図　265
図 6-37　SX40 遺構図　266
図 6-38　SX38 ～ 40 出土遺物実測図　267
図 6-39　SX41 遺構図　268
図 6-40　SX43・44 遺構図　269
図 6-41　SX45 遺構図　269
図 6-42　SX46 遺構図　270
図 6-43　SX41・43 ～ 46 出土遺物実測図　271
図 6-44　SX47 遺構図　272
図 6-45　SX48 遺構図　273
図 6-46　SX49 遺構図　274
図 6-47　SX50 遺構図　274
図 6-48　SX51 遺構図　274
図 6-49　SX48・49・51 出土遺物実測図　275

第Ⅱ章第７節溝状遺構
図 7-1　溝状遺構全体配置図　280
図 7-2　溝状遺構図 (1)　292
図 7-3　溝状遺構図 (2)　293
図 7-4　溝状遺構図 (3)　294
図 7-5　溝状遺構出土遺物実測図 (1)　294
図 7-6　溝状遺構出土遺物実測図 (2)　295
図 7-7　溝状遺構出土遺物実測図 (3)　296
図 7-8　溝状遺構出土遺物実測図 (4)　297

第Ⅱ章第８節柱穴跡
図 8-1　柱穴跡遺構図 (1)　308
図 8-2　柱穴跡遺構図 (2)　309
図 8-3　柱穴跡出土遺物実測図 (1)　310
図 8-4　柱穴跡出土遺物実測図 (2)　311
図 8-5　柱穴跡出土遺物実測図 (3)　312

第Ⅱ章第９節遺物包含層出土遺物
図 9-1　遺物包含層出土遺物実測図 (1)　321
図 9-2　遺物包含層出土遺物実測図 (2)　322
図 9-3　遺物包含層出土遺物実測図 (3)　323
図 9-4　遺物包含層出土遺物実測図 (4)　324

第Ⅲ章第１節祈年遺跡出土土器の胎土分析
第 1 図　祈年遺跡内出土土器の比較　329
第 2 図　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較　329
第 3 図　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較　329
第 4 図　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較　329
第 5 図　祈年遺跡出土ヒビノキ式土器実体顕微鏡写真　330

第Ⅲ章第２節重鉱物･火山ガラス、土壌理化学分析、植物珪酸体分析
第 1 図　調査地点位置図　332
第 2 図　香長平野の地形と遺跡の立地　332
第 3 図　08-5NS 調査区試料採取位置図　333
第 4 図　Ⅸ区南壁断面の土壌試料採取地点　334
第 5 図　Ⅸ区南壁断面採取土壌、遺構埋土のテフラ・植物珪酸体・土壌理化学分析結果　338
第 6 図　火山ガラスの屈折率測定結果　339

表目次

表 1-1　遺構数一覧表　32
表 1-2　遺構名変更一覧表　32
表 2-1　竪穴建物跡一覧表　43
表 2-2　竪穴建物跡出土遺物観察表　145
表 3-1　掘立柱建物跡一覧表　155
表 3-2　掘立柱建物跡遺物観察表　181
表 4-1　壺棺墓一覧表　183
表 4-2　壺棺墓遺物観察表　206
表 5-1　土坑一覧表　209
表 5-2　土坑遺物観察表　238
表 6-1　竪穴状遺構一覧表　241
表 6-2　竪穴状遺構遺物観察表　276
表 7-1　溝状遺構一覧表　279
表 7-2　溝状遺構遺物観察表　298
表 8-1　柱穴跡遺物観察表　313
表 9-1　遺物包含層遺物観察表　325
第 1 表　重鉱物・火山ガラス比分析結果　337
第 2 表　土壌化学分析結果　339
第 3 表　土壌化学分析結果　339
第 4 表　植物珪酸体分析結果　340

写真図版目次

写真 1　遺跡空撮・Ⅷ B 区
写真 2　遺跡空撮・Ⅷ B 区
写真 3　長岡台地
写真 4　Ⅷ AW 区空撮上層
写真 5　Ⅷ AW 区空撮下層
写真 6　Ⅷ AE 区空撮下層
写真 7　Ⅷ AE 区全景下層、Ⅷ AW 区全景下層
写真 8　Ⅷ BW 区空撮下層
写真 9　Ⅷ BW 区全景上層、Ⅷ BW 区全景下層
写真 10　Ⅷ BE 区空撮上層
写真 11　Ⅷ BE 区空撮下層
写真 12　Ⅷ BE 区全景上層、Ⅷ BE 区全景下層
写真 13　Ⅷ AW 区 ST 群空撮、Ⅷ AE 区 ST 群空撮
写真 14　Ⅷ BW 区 ST 群空撮、Ⅷ BE 区 ST 群空撮
写真 15　ST1
写真 16　ST2
写真 17　ST2、ST3
写真 18　ST5
写真 19　ST6
写真 20　ST7
写真 21　ST8、ST9・ST10
写真 22　ST9
写真 23　ST10
写真 24　ST11
写真 25　ST12
写真 26　ST13
写真 27　ST14
写真 28　ST17
写真 29　ST18、ST19
写真 30　ST20
写真 31　ST23
写真 32　ST24・ST25、ST24、ST25
写真 33　ST25
写真 34　ST26
写真 35　ST30
写真 36　ST30
写真 37　ST30、ST32、ST33
写真 38　ST34
写真 39　ST35
写真 40　ST38
写真 41　ST39
写真 42　ST40
写真 43　ST41
写真 44　ST42
写真 45　ST43
写真 46　ST44
写真 47　ST45
写真 48　ST46
写真 49　ST47
写真 50　ST48
写真 51　ST49
写真 52　ST50
写真 53　ST51
写真 54　ST52・ST53、ST52、ST53
写真 55　Ⅷ AW 区 SB 群空撮、Ⅷ AE 区 SB 群空撮
写真 56　Ⅷ BW 区 SB 群空撮、Ⅷ BE 区 SB 群空撮
写真 57　SB1 ～ SB4
写真 58　SB5 ～ SB7
写真 59　SB8 ～ SB11
写真 60　SB12 ～ SB15
写真 61　SB16、SB18 ～ SB20
写真 62　Ⅷ B 区 SG 群空撮、Ⅷ B 区 SG 群北側部

写真 63　Ⅷ B 区 SG 群南側部、Ⅷ B 区 SG 群
写真 64　SG1、SG2
写真 65　SG3、SG4
写真 66　SG5
写真 67　SG6 ～ SG8
写真 68　SG9、SG10
写真 69　SG11、SG12
写真 70　SG13、SG14
写真 71　SG15、SG16、SG 調査風景
写真 72　SG17、SG18
写真 73　Ⅷ AW 区 SK 群空撮、Ⅷ AE 区 SK 群空撮
写真 74　Ⅷ BW 区 SK 群空撮、Ⅷ BE 区 SK 群空撮
写真 75　SK4 ～ SK6、SK9
写真 76　SK12、SK13、SK32、SK33、SK38、SK41、SK42、SK49
写真 77　SK64、SK66、SK69、SK77、SK80
写真 78　SK84、SK91、SK97、SK100、SK106
写真 79　SK106
写真 80　Ⅷ AW 区 SX 群空撮、Ⅷ AE 区 SX 群空撮
写真 81　Ⅷ BW 区 SX 群空撮、Ⅷ BE 区 SX 群空撮
写真 82　SX1 ～ SX3
写真 83　SX4 ～ SX6
写真 84　SX10、SX11、SX15
写真 85　SX16・SX42、SX19
写真 86　SX20、SX21、SX22 ～ SX28
写真 87　SX22 ～ SX28、SX22
写真 88　SX22 ～ SX25
写真 89　SX26 ～ SX28
写真 90　SX29 ～ SX31
写真 91　SX32 ～ SX34
写真 92　SX35 ～ SX37
写真 93　SX38 ～ SX41
写真 94　SX43 ～ SX47
写真 95　SX45 ～ SX47
写真 96　SX48・SX49、SX48、SX49、SX51
写真 97　Ⅷ AW 区 SD 群空撮、Ⅷ AE 区 SD 群空撮
写真 98　Ⅷ BW 区 SD 群空撮、Ⅷ BE 区 SD 群空撮
写真 99　SD1、SD2
写真 100　SD3、SD8・9
写真 101　SD3・17、SD11・12、SD25
写真 102　SD29・30・35・47、SD46、SD47、SD73、SD94
写真 103　SD91、SD98、SD99・100、SD104
写真 104　C8-14-5P4 ～ C9-7-17P7
写真 105　C9-7-19P1 ～ C9-10-6P1
写真 106　ST1、ST2 出土遺物
写真 107　ST2、ST3、ST5 出土遺物
写真 108　ST5 出土遺物
写真 109　ST5、ST6 出土遺物
写真 110　ST6 ～ ST9 出土遺物
写真 111　ST9 ～ ST11 出土遺物
写真 112　ST11 出土遺物
写真 113　ST11、ST12 出土遺物
写真 114　ST12、ST13 出土遺物
写真 115　ST13、ST14 出土遺物
写真 116　ST14、ST17 ～ ST20 出土遺物
写真 117　ST20、ST23 ～ ST25 出土遺物
写真 118　ST25 出土遺物
写真 119　ST25、ST26、ST30 出土遺物
写真 120　ST30、ST32、ST33 出土遺物
写真 121　ST33 ～ ST35 出土遺物
写真 122　ST35、ST38 ～ ST40 出土遺物
写真 123　ST40 ～ ST45 出土遺物
写真 124　ST45 ～ ST49 出土遺物
写真 125　ST49 出土遺物
写真 126　ST49 ～ ST51 出土遺物
写真 127　ST51 出土遺物
写真 128　ST52、ST53、SB4 ～ SB6、SB9、SB10、SB13、SB14 出土遺物
写真 129　SB15、SB16、SG1、SG2 出土遺物
写真 130　SG2 ～ SG5 出土遺物
写真 131　SG6 ～ SG8 出土遺物
写真 132　SG9 ～ SG12 出土遺物
写真 133　SG13 ～ SG15 出土遺物
写真 134　SG15 ～ SG18 出土遺物
写真 135　SG18、SK2 ～ SK4 出土遺物
写真 136　SK4 ～ SK6 出土遺物
写真 137　SK6 ～ SK32 出土遺物
写真 138　SK33 ～ SK65 出土遺物
写真 139　SK66 ～ SK84 出土遺物
写真 140　SK84 ～ SK101 出土遺物
写真 141　SK101 ～ SK106 出土遺物
写真 142　SK106、SX16 ～ SX22 出土遺物
写真 143　SX22 ～ SX29 出土遺物
写真 144　SX29 ～ SX33 出土遺物
写真 145　SX33、SX34 出土遺物
写真 146　SX34、SX36 出土遺物
写真 147　SX36 ～ SX39 出土遺物
写真 148　SX39 ～ SX48 出土遺物
写真 149　SX48 ～ SX51、SD1 ～ SD3 出土遺物
写真 150　SD3 ～ SD46 出土遺物
写真 151　SD46 ～ SD81 出土遺物

写真 152　SD84 ～ SD104 出土遺物
写真 153　SD104、C8-10-22P1 ～ C9-11-17P1 出土遺物
写真 154　C9-12-6P1 ～ C9-12-6P1、包含層出土遺物
写真 155　包含層出土遺物
写真 156　調査風景

第Ⅰ章　祈年遺跡の概要と調査経緯

第１節　祈年遺跡の概略

1. 遺跡の内容

⑴遺跡の立地

祈年遺跡は高知県南国市の北部の長岡台地上に立地している。沖積平野部は香美郡、長岡郡に跨がることから香長平野と呼ばれ、高知県下では最大の平野部を形成し、穀倉地帯となっている。平野部は東部の物部川の氾濫により形成された平野で微高地上に多くの遺跡が営まれ、南国市域は県下最大の遺跡数を誇る。

特に高知空港周辺一帯の田村遺跡群は弥生時代の集落遺跡として著名であり、高知県の弥生時代の研究史において､特筆される地位を築いている。しかしながら、平野部に対して長岡台地は余り注目されることが少なく、僅かばかりの集落遺跡の調査が行われていたものの、遺跡の立地等について余り着目されることはなかった。

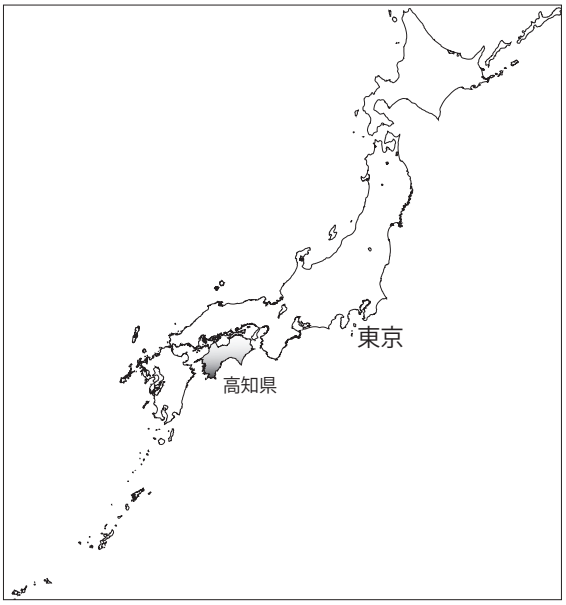


図１　高知県位置図

祈年遺跡の調査が進展するに従い、香長平野部ばかりでなく、長岡台地上にも重要な遺跡が展開していることが判明し、今後台地上の遺跡のあり方に一石を投じそうである。

長岡台地は物部川と国分川に挟まれ、両河川により開析され段丘面を形成している。今のところ段丘面の形成時期は未解明である。高知県ではこうした平坦面を形成する段丘は極めて珍しいものの、考古学的には顧みられることはなかった。

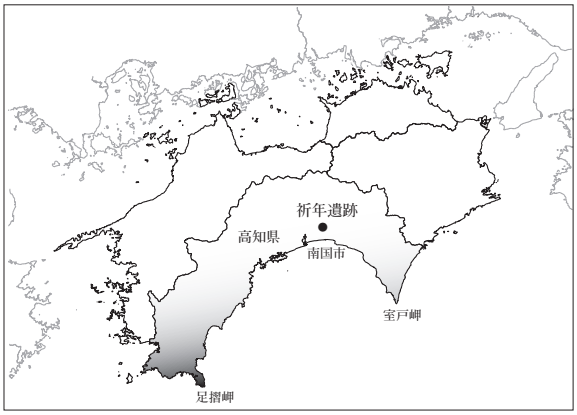


図２　南国市位置図

⑵検出した集落跡

最も古い段階は縄文時代中期の土器、次いで弥生時代後期、古墳時代初頭、古墳時代後半から古代にかけての集落跡を検出した。

弥生時代は前期、中期末から後期初頭は田村遺跡群を拠点として、その後集落は拡散する。祈年遺跡では後期後半から古墳時代初頭の集落が台地上に営まれ始め、径８ｍを超える大型住居跡で集落は成り立っている。また壺棺墓群を 22 基纏まって検出している。

古墳時代初頭を迎え、弥生時代の円形住居跡から方形住居跡と基本枠は変化し、住居構築方法が

明確に変化したことを知ることができる。

祈年遺跡で検出した集落跡は県下では空白の時期に相当するものが多く、特に律令前夜の古墳時代後期の集落跡の竪穴住居跡は造り付けの竈を持つもので、27 軒の竪穴住居跡は県下最多である。国分川を挟んで北側には土佐国府、土佐国分寺、比江廃寺等が控えており、祈年遺跡も古代の中枢地と連動して集落が営まれる。古墳時代終末から奈良前半期の竪穴住居跡はなく、性格不明の竪穴群 SX が数多く構築される。半月形をした形状のものが多く、県下ではこうした類例は未検出である。また、幅員６m の道路状遺構を検出した。南北に縦走しているところから国府域に通じる道路と考えられ、南海道の一部、また伝路の可能性のあるものである。

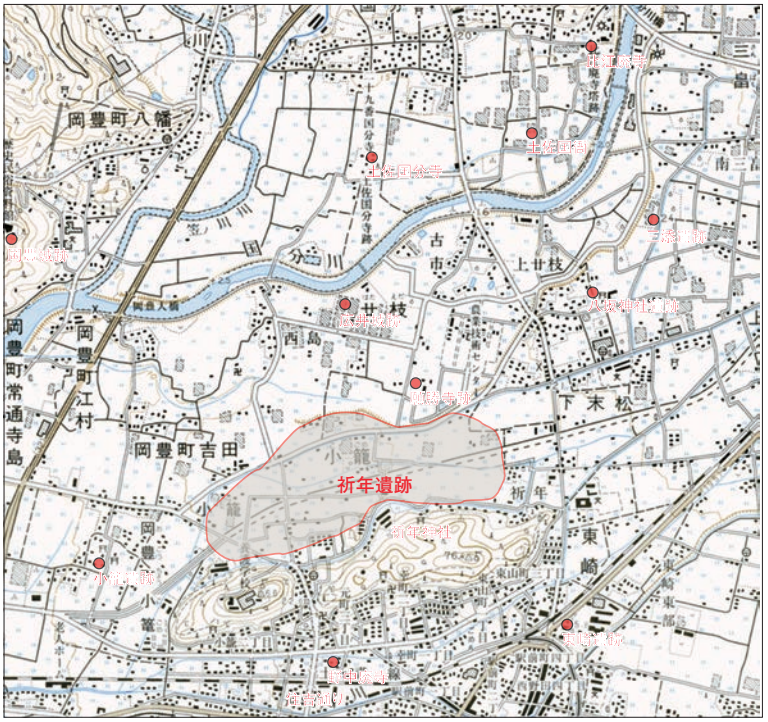


図３　祈年遺跡位置図

⑶本拠地としての祈年遺跡

高知県下での転換期に相当す

図４　祈年遺跡弥生時代・古墳時代住居跡分布図

図５　祈年遺跡古墳時代竈付住居跡分布図

図６　祈年遺跡古墳時代・古代掘立柱建物跡分布図

る時期に空白期が多く、祈年遺跡では空白期を埋める集落跡を検出している。香長平野部に見られなかったあり方は長岡台地が遺跡の立地としてどのようなものだったか考える上で、また高知県の遺跡のあり方を考える上で重要なものとなった。長岡台地上の遺跡は沖積平野部とは違った遺跡立地の本来のあり方を顕現していると考えられる。田村遺跡群をはじめとする沖積平野部の遺跡立地が高知県では通常のあり方と捉えられてきたものの、逆にそうした事例が特異な事象であり、長岡台地上の遺跡が本拠地的な本来のあるべき姿と考えられる。今後、そうした視点からの野外調査が重要となってくるものと考えられる。

2. 報告書の構成

⑴分冊について

祈年遺跡の調査区はⅠ区からⅩ区に分け発掘調査を実施した。長さ約 800m の調査区のため、同じ遺跡でも調査区毎によって遺跡内容は相違する。弥生時代から古墳時代の集落跡の中心地はⅦ区からⅩ区にかけて展開しており、古代の道路状遺構はⅣ、Ⅴ区で検出している。また古代の規格性のある掘立柱建物跡はⅠ、Ⅶ、Ⅷ区に主に展開している。

第１分冊では調査に至る経緯､遺跡の歴史的環境等の序論､及びⅠ区からⅥ区の成果を報告した。各調査区の概要は以下の通りである。Ⅰ区古代掘立柱建物跡群、Ⅱ区古代掘立柱建物跡、Ⅲ区古代掘立柱建物跡群、Ⅳ区古代道路状遺構、Ⅴ区古墳時代後期竈付住居跡群、古代道路状遺構、Ⅵ区縄文時代中期土器、古墳時代後期竪穴状遺構、古代掘立柱建物跡等を掲載している。

第２分冊ではⅨ、Ⅹ区を収録した。Ⅸ区弥生時代後期住居跡群、古墳時代初頭住居跡群、古代掘立柱建物跡柱群、Ⅹ区弥生時代後期住居跡群、古代掘立柱建物跡群を取り上げた。

第３分冊はⅦ区を収録した。弥生時代後期住居跡群、古墳時代後期竈付住居跡群、土坑墓、古代掘立柱建物跡柱群を取り上げた。

本分冊第４分冊ではⅧ区を収録した。本遺跡の中心地で弥生時代後期住居跡群、壺棺墓群、古墳時代初頭住居跡群、古墳時代後期竈付住居跡群、古代掘立柱建物跡群、竪穴状遺構群、近世屋敷跡等検出した。

第２節　地理的・歴史的景観

1. 香長平野の地形区分

香長地域の地形区分は考古学的な視点から捉えられたものは皆無に近い。ここでは考古学的に地形区分を試みる(注1)。また地形区分の名称が未設定であることから、適宜名称を暫定的に付す。大きく分けて高い方から丘陵部、台地部、氾濫扇状地部、沖積地に分けることができる。段丘での区分では上位、中位、下位、低位の区分になる。上位は丘陵部に、中位は台地部、下位・低位は氾濫・沖積地に対応する。

長岡台地と野市台地は形成時期も開析も同じで13万年前の間氷期に段丘面として形成された地形と考えられる。長岡台地と野市台地も共に長岡面(中位面)と呼称したい。この両台地には崖線がよく発達しており、長岡台地北側を国分崖線、南側を岩積崖線、野市台地の物部川に面した崖線を野市崖線、香宗川の方を香宗崖線と呼称しときたい。

香長平野部の遺跡立地は圧倒的に沖積面の遺跡が注目されてきた。また北側の丘陵部裾には谷戸が入り組み発達している。これらは氾濫扇状地と考えられ、久礼田面としときたい。これらの地形は縄文海進後に安定期に入り、離水時期は田村遺跡の例からすると船元式が出ていることから縄文中期頃と考えられる。完新世に形成されたもので、旧石器の遺跡の立地条件とはならないと考えられる。

沖積面については、久礼田面、田村遺跡の様に縄文期に安定した所、それと江戸時代の開拓によりやっと土地利用の可能なところに分かれる。高知の市街地周辺はほとんどが湿地だったところと考えられる。

沖積面は災害との戦いにも関わらず、優先的に土地利用がされたと考えられる。水田、交通の利便性から開発の手が入ったところだと考えられる。それに対して長岡台地、野市台地は中世では開発の手が入らず荒撫地か秣場くらいの土地利用しかされておらず、台地が高燥で水田に適しなかった為と考えられる。野中兼山の用水路開鑿まで開発は遅れる。

しかし、ここ数年、長岡台地、野市台地の縁辺部での調査事例からすると、台地縁辺部の湧水を利用して居住空間となっていたことが徐々に判明し始めている。

2. 長岡台地

⑴長岡台地の規模

長岡台地は南国市の北部及び旧土佐山田町(現香美市)の市街地を含む長さ約８㎞、最大幅２㎞の東西に舌状に延びる台地である。台地上にはほとんど起伏が認められず、なだらかな地形となって

注1:本論の段丘面と地質学での段丘区分は相違する。長岡台地は地質学では「低位段丘」となるが、本論では「中位段丘面」としている。地質学と人間の活動を対象とする考古学では学問的方法論で地形区分の視点が自ずと違ってくる。地質学では地質年代で年代尺度が長く、考古学では年代尺度が短くなる。また気候変動、地形変化が短期間で影響を受けるために段丘面の把握も異なる。例えば第四紀の地質学をそのまま取り込んでみても、縄文海進による地形変化が考古学にはなんら反映されないことになる。ここでは人間の活動領域を現河道まで射程に入れなければならない所以により、低、下、中、上、高位段丘面とした方が人間の土地利用の分析には適している。

いる。標高は土佐山田周辺では海抜 50m、祈年遺跡周辺では海抜 12 ～ 16m である。祈年遺跡のさらに西側の小籠(こごめ)遺跡周辺で沖積扇状地に埋没する。

長岡台地は物部川と国分川の両河川により開析された段丘である。長岡台地北側の国分川は中河川で蛇行し、低地を形成している。物部川は氾濫源が広く、香長平野は物部川により形成されたものである。物部川は大きく流路を変え、古代の条里にも地割り方向の乱れがあり、その蛇行を知ることができ、香長平野部にも島状の微高地が見られる。また旧物部川の河道である小河川が幾筋か香長平野を流れる。

長岡台地の段丘面との境に明確な崖線が見られる。北側と南側にそれぞれ認められ、ここでは北側を国分崖線、南側を岩積崖線と仮称しておきたい。岩積崖線は土佐山田町伏原近辺では比高差 10m 近くを測り、国分崖線は祈年遺跡周辺では３ｍに減じる。崖線下は古代から水田開発が行われ、崖線際の湧水を利用して、谷戸田が発達していたと考えられる。台地上は水利に不便で畑作、秣場として利用されたと考えられる。今の景観になったのは江戸時代の新田開発に伴い物部川からの用水路の開鑿によるものである。

⑵段丘形成

香長平野周辺部で段丘面がいくつか見られる。最下位は物部川の河川敷を含む低位段丘面、続いて香長平野に認められ土佐山田町の岩積周辺の下位段丘面、中位段丘面は長岡台地、野市台地、野市台地の北端の神母台地で明瞭な段丘面を形成している。上位段丘面は判然としないが、土佐山田周辺の中位段丘面より若干高い緩やかな段丘面が山裾に広がっている。これについては段丘面として捉えられるのかどうかは今後の研究によらなければならない。高位面は独立丘陵、山地が該当する。

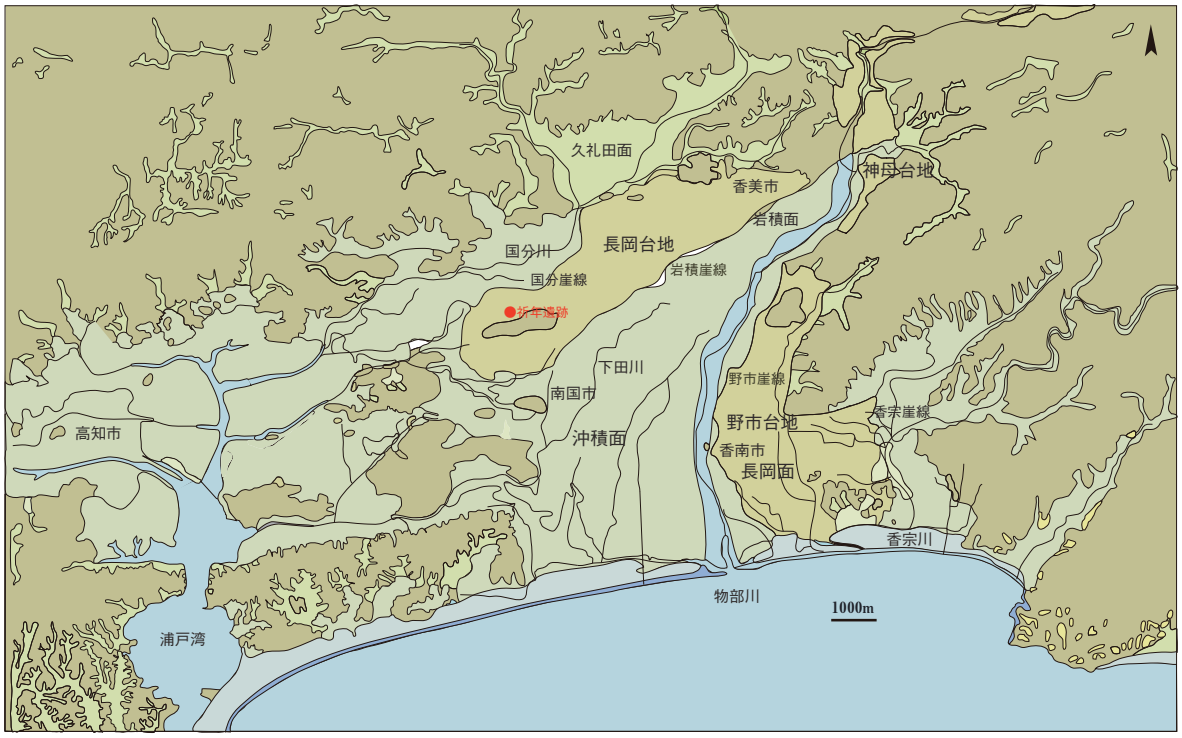


図７　香長平野地形区分 (※パリノ・サーヴェイ株式会社　本報告書第Ⅲ章第２節第２図を加筆修正)

中位段丘面については国分川に形成されたものもあり、国分寺、国衙跡の後背の比江地区に緩やかな段丘面が認められる。香長平野部周辺には計５面の段丘面があった可能性がある。

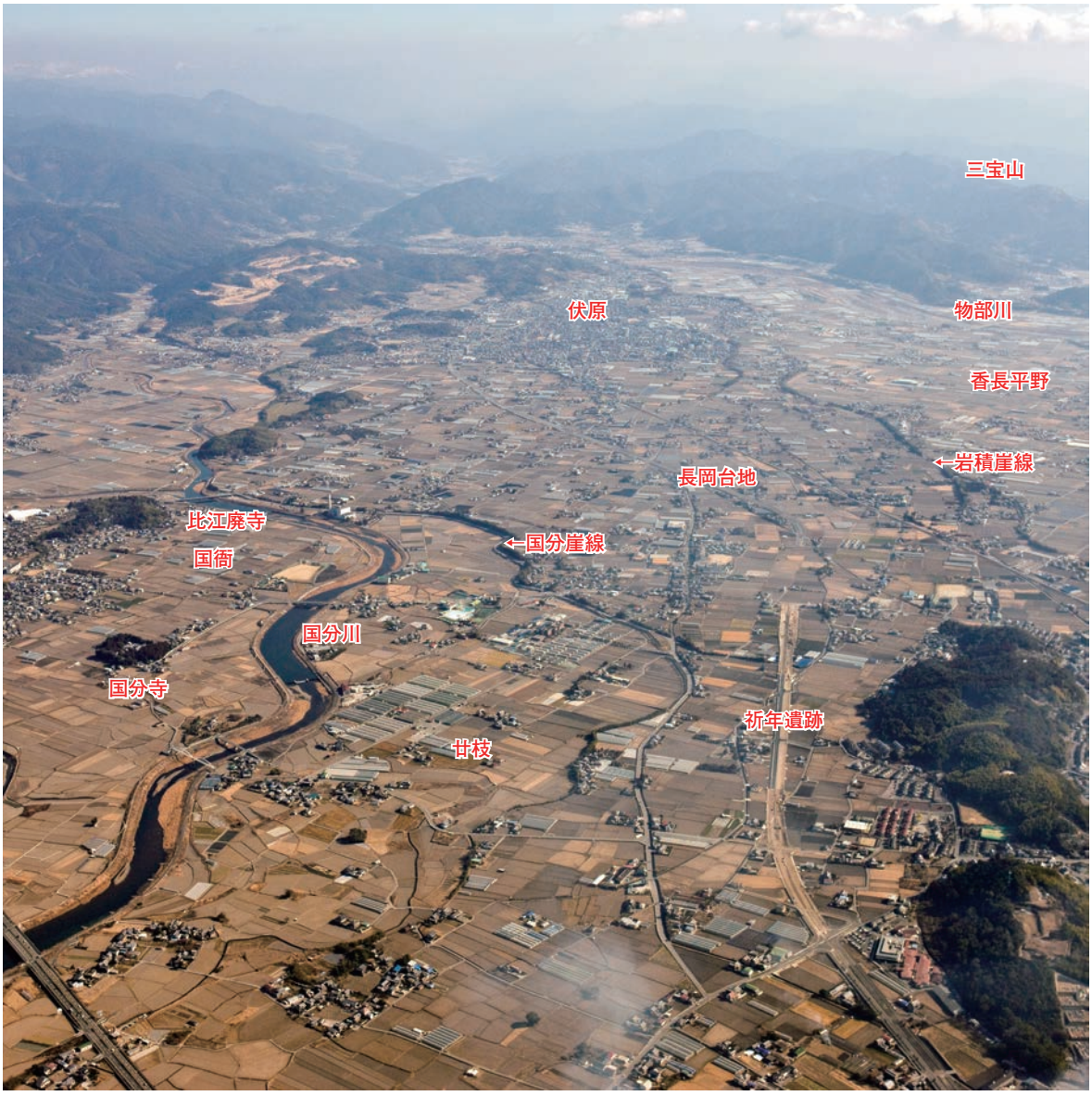


図８　長岡台地空撮 (東より)

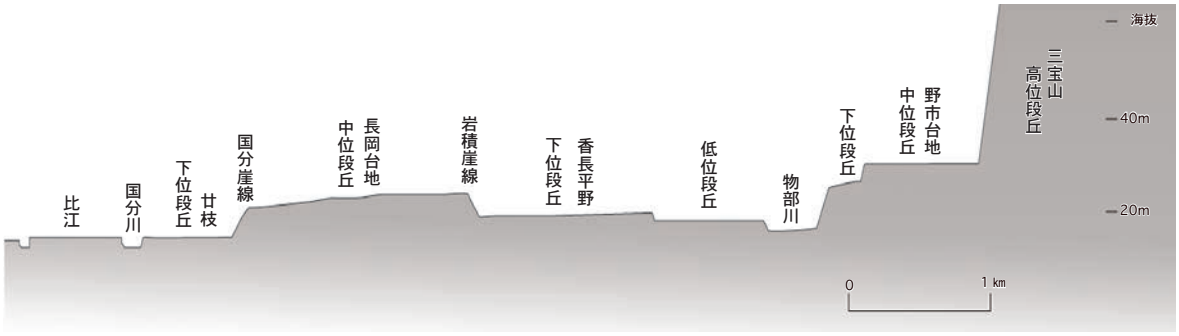


図９　香長平野横断面図 (比江から三宝山の断面、縦横の縮尺は異なる)

⑶土壌堆積

長岡台地の土壌堆積の基盤層は段丘礫層で礫層は下部に行くと砂層混じりである。洪積世と既成事実のように多くの論考では記されている。基盤礫層の礫は径 10 ～ 20cmの亜円礫で大部分が砂岩で僅かにチャートが混じる。祈年遺跡での基本層序は基盤層である礫層 (Ⅵ層)。礫層上面は黄褐色ローム混礫層 (Ⅴ層) で礫は小礫となり、上部に行くに従って小礫を減じる。小礫は更に上の層にまで上がっており、おそらく凍結融解作用の影響と考えられる。黄褐色ロームの層厚は 40 ～ 50cmである。このローム層については風成か水成層かは不明である。また供給源も不明である。ローム層の上は褐色土 (Ⅳ層) で漸移的で粘度を減じる。層厚は 30 cm程度である。遺物は含まない。Ⅲ層暗褐色土の上面が弥生時代等の遺構構築面となる。Ⅱ層は黒褐色土で弥生時代から中世迄の遺物包含層である。２次堆積の鬼界カルデラのアカホヤ混じりで、火山ガラスを多く含む。

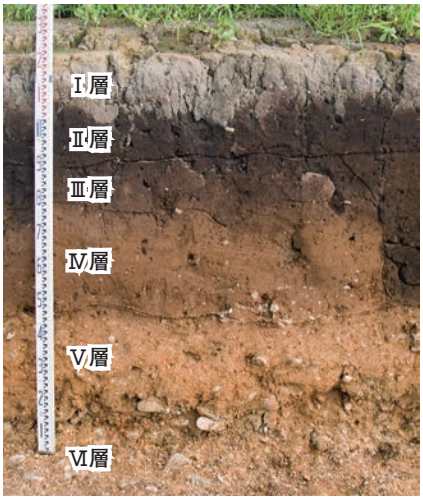


図 10　Ⅸ区土層堆積状況

図 11　Ⅵ層出土礫

⑷長岡台地の形成時期

長岡台地の形成時期については、明確な時期を提示した研究はなく、香長平野部の新期扇状地に対して、物部川の左岸の段丘野市台地と共に古期扇状地と地質区分されている程度である (島田 1979)。

当初、Ⅴ層は旧石器時代、Ⅳ層が縄文時代草創期から早期の堆積物と想定し、長岡台地の礫層は洪積世に形成されたと考えた。Ⅱ層、Ⅲ層中には肉眼でも多くの火山ガラスが含まれていることが容易に判別でき、高知県下では考古学的には２つの火山灰の降灰が知られており、当然上層に見られる火山ガラスはアカホヤ火山灰 (K-Ah) で下層のローム層は洪積世の堆積層と推測した。考古学的に第四紀の姶良火山灰 (AT)、アカホヤ火山灰 (K-Ah) の降灰時期が判明しているテフラ分析を祈年遺跡の土層で試みた。しかしながら、高知県では遺跡での科学分析で姶良火山灰 (AT) の検出例は大月町ナシヶ森遺跡のみで、高知県下では姶良火山灰 (AT) の遺存状態は極めて悪い。分析結果からはアカホヤ火山灰はⅡ、Ⅲ層中で見つかったものの、姶良火山灰は見つからなかった。火山灰分析による長岡台地上の土壌堆積の形成時期は判然としない。そこで考古学的手法で推測してみる。

下位段丘面については縄文時代以降のものと考えられ、高知空港の田村遺跡群から最も古いもので縄文時代中期の船元式が出土しており、若干時期を隔てて縄文時代後期の多量の土器群が出土している。後期の段階では安定した景観となっていたと考えられる。縄文時代では後期の中でも特に中葉段階から下位段丘面に居住区が移動することが知られており、田村遺跡群の場合も同様の現象が認められる。高知平野部の高知市春野町の西分増井遺跡でも同様の事例が知られる。田村遺跡群では九州島に分布域を持つ後期前半の鐘崎式が多量に出土しており、中葉段階になると打製石斧が飛躍的に増大し沖積地への居住空間が広まりを見せ、従来の生業とは違ったあり方を示している。

長岡台地の中位段丘面に位置する祈年遺跡では最も古い遺物はやはり縄文時代中期のもので、該期には安定した環境にあった。つまり、下位段丘面である香長平野が縄文時代中期には離水しており、当然中位段丘面である長岡台地はそれより以前に離水していた蓋然性は極めて高い。

長岡台地では今のところ旧石器時代の遺物は見つかっていない。しかしながら、周辺域では高位面である山地裾野の谷間部には奥谷南遺跡、新改西谷遺跡、また神母台地の中位段丘面の林田遺跡では旧石器時代の角錐状石器が見つかっている。奥谷南遺跡とは遺跡立地が異なり、また林田遺跡も基本層序が乱れており、祈年遺跡と残念ながら土壌堆積状態は比較検討ができない。林田遺跡の場合には段丘面に立地し、基盤層がやはり礫層である程度しか比較検討の材料は極めて乏しい。

今後、地質的に長岡台地の形成時期の解明、長岡台地上に堆積した黄褐色ローム層(Ⅴ層)の供給源、基盤層の礫層(Ⅵ層)の時期の解明が今後の課題となる。解明方法は長岡台地上での旧石器時代遺物の検出、火山灰分析による姶良火山灰の検出が必須となろう。

3. 周辺の遺跡

高知県中央部の地形的区分の観点から遺跡の立地を論じたものはほとんどなく、極僅かに武吉の論考がある程度で(注2)、遺跡の立地地形区分論は極めて低調である(注3)。武吉は弥生時代の遺跡の立地に注目し、「弥生時代の遺跡分布密度の高いエリアの内部では、その後も遺跡数が増加するのに対して、逆の場合には、無遺跡あるいは希薄なままに終わる」と結論付けている。

香長平野部は田村遺跡群をはじめ多くの遺跡の調査が実施されている。対して、長岡台地は旧土佐山田町の伏原遺跡近辺の調査はある程度実施されているものの、南国市域の長岡台地上の遺跡調査は数件でしかない。数少ない遺跡の調査にも関わらず、台地上の遺跡の立地の特性を掴める内容であった。ここでは長岡台地と香長平野部の遺跡間に立地条件により相違するのか、または地形的には相違するものの遺跡内容に違いがないのかどうか、立地条件の相違から見た各時代を概観する。

⑴旧石器時代

周辺域では奥谷南遺跡が最も規模の大きな旧石器時代の遺跡である。それまで、昭和40年(1965年)に南国市に隣接する高知市大津の独立丘陵上で高間原(たかまがはら)古墳の調査の際、石室から偶然チャート製細石刃核1点が出土している。その後、長らく旧石器時代の遺跡に遭遇することはなく、高知県中央部は旧石器時代空白地と考えられてきた。しかしながら、平成8年(1996年)に四国横断自動車道建設に伴い南国市小蓮(こはす)でナイフ形石器、細石刃をはじめとする旧石器時代の遺物が多量に出土した。ほとんどの石器がチャート製で遺跡自体の岩盤がチャートでなっていることから、地産の礫を使用しており、一部サヌカイトが認められる程度である。立地は谷部の傾斜地で回りにはチャートの岩塊が数多く見られ、特に2つのチャートの巨岩に挟まれた空間に旧石器時代から縄文時代早期迄の遺物遺構が見つかっている(注4)。

注2；武吉眞裕「第6節地形と周辺遺跡の分布」『里改田遺跡』(10 － 14頁)

注3；満塩大洸・出原恵三「高知県における後期更新世・完新世の環境変化－第四紀地質学的及び考古学的成果から－」『高知大学学術研究報告 第49巻 自然科学』(67 － 110頁)で地質学と考古学の共同研究として物部川流域等の地質学及び遺跡の立地論の取り組みが行われている。しかしながら、両者からの共通の視座がないため、遺跡立地と地質学が余り融合していない。

注4；旧石器時代、縄文時代については松村信博『奥谷南遺跡Ⅲ』(2001)を参照にした。

香長平野の北部山麓谷部の新改西谷遺跡も立地的には奥谷南遺跡と比較的似通っている。小型のナイフ形石器が纏まって出土している。層は乱れており撹乱層中からの出土である。神母台地に位置する林田遺跡では角錐状石器が１点のみであるが出土している。長岡台地と同様の立地条件を備えており、層位はやはり乱れているものの、今後の台地上の遺跡の分布、あり方からして重要である(注5)。

その他、林田遺跡の近くの物部川対岸の丘陵部で遺物が面採集されている。近辺の旧石器時代の遺跡のあり方は、丘陵部及びその裾野、中位段丘面の縁辺部に展開していると言える。

⑵縄文時代

奥谷南遺跡では局地的ではあるものの草創期、早期の土器、石器類が出土している。高知県で草創期に含まれる遺跡数は少なく、特に中央部では奥谷南遺跡以外では皆無である。草創期の遺跡は高知県中央部西寄りの仁淀川(によどがわ)以西で占められる。仁淀川流域では不動ケ岩屋洞窟遺跡、上流域の愛媛県の上黒岩岩陰遺跡、高知県西部の四万十川(しまんとがわ)流域の十川駄場崎遺跡を上げることができる。この３遺跡については隆起線文土器が出土している。十川駄場崎遺跡及び奥谷南遺跡の２遺跡のみが開地遺跡である。四国西部の愛媛県側でもいくつか草創期の遺跡が知られているものの洞窟遺跡・岩陰遺跡である。

縄文時代早期も草創期と同様で立地はほとんど変わらない。洞窟遺跡・岩陰遺跡は早期迄継続するものが多く、一方で開地遺跡も飛躍的に多くなる。石鏃が多量に出土する遺跡が大半で極僅かに早期の条痕文土器、押型文土器が伴う。祈年遺跡周辺では奥谷南遺跡のみである。手向山式、平栫式等の九州系の土器が出土するのが特徴的である。

前期・中期は高知県では極めて少ない。中央部でも散発的に見られる程度で、奥谷南遺跡では継続的に出土例がある以外は、中期になって初めて中位段丘面の祈年遺跡、下位段丘面の田村遺跡群で見られるようになり、下位段丘面の地質的、気候的安定化は該期に求められそうである。出土量は極めて貧弱であるものの、前期と中期の境で立地上の画期を求めることができる資料となっている。

高知県の縄文時代の大きな画期は後期に認められる。後期になると遺跡数は飛躍的に増大する。周辺域で最も多く遺物が出土したのは田村遺跡群である。田村遺跡群の特徴は豊後水道圏に分布域を持つ平城式、九州島に分布域を持つ鐘崎式等ほとんどが九州系の縄文土器で占められていることである。一方では石鏃等をはじめ石器の石材はサヌカイトに求めており、瀬戸内との繋がりも見逃せない。後期前半の平城式の段階では打製石斧は認められず、それ以降増大する傾向にある。後期前半迄は石鏃、石錘が主たる石器で、後期中葉に新たに打製石斧が加わる石器組成となる。石器と縄文土器が多量に出土するものの、遺構は焼土跡が認められる程度で竪穴住居跡等の構築物は検出していない。これは高知県全般の傾向であり、明確な竪穴住居跡を検出したのは四国山中の本山町松ノ木遺跡のみで居住形態は不明点が多い。田村遺跡群は下位段丘面にまで居住空間が拡散したことが明瞭に分かる遺跡である。

注５：藤方正治『林田遺跡Ⅲ』(52頁、Fig43-136)、剥片として報告されているものの、実物を実見し、チャート製の角錐状石器であることが判明した。林田遺跡は物部川左岸の段丘面に立地している。林田遺跡以外にも周辺域ではナイフ形石器が採集されている。

図 12　地形別遺跡分布図

晩期になるとまた再び遺跡数は激減する。３ケ所のみで林田、栄エ田、田村遺跡群で遺物出土量も貧弱である。田村遺跡群では次の弥生時代前期に爆発的に展開するものの、晩期から継承したものではなく新たな入植の村と考えられる。仁淀川水系の居徳遺跡群では極めて豊富な晩期の資料を得ているものの、物部川水系は空白地帯に近い状況である。

縄文時代は総じて遺跡数は少なく、奥谷南遺跡、田村遺跡群を除き各時代の遺跡が散在する程度である。台地上にも遺跡数は少なく、画期を求める手がかりとなる遺跡が数ケ所存在する程度である。今のところ縄文時代中期から後期に縄文時代の遺跡が顕れるものの、台地縁辺部の調査が少ないこと、踏査が行き届いていないこともあり、縄文時代がいつまで遡るかは不明である。

⑶弥生時代

香長平野ばかりでなく､高知県下の弥生時代を語る際には､田村遺跡群を抜きにしては語れない。田村遺跡群の研究は古く、岡本健児、出原恵三の両氏により多くの論考が世に出ている。田村遺跡群は前期から後期までの大規模集落を形成しており、周辺域の動向は田村遺跡群に左右されるかのように田村遺跡群に連動している。

弥生時代は立地条件でいくつかの群に分かれるのではないかとの想定で、遺跡立地分布作業を行ってみたものの､明確な立地区分は抽出できなかった｡久家隆芳は立地条件による分類ではなく、遺跡群と大きく括り、田村遺跡群の周辺遺跡は「各遺跡単独では短期間で廃絶しているものの、少し範囲をひろげて見てみると前後する時期の遺跡が周辺にあり、限られた範囲のなかを集落が移動している－略－周知の遺跡名にとらわれず遺構・遺物の分布を見れば長期間継続する集落跡として把握されもの(ママ)があるだろう」(久家 2007 p29) と各時期の遺跡群の動向から結論を導き出している (注 6)。これは田村遺跡群の集落内でも同様の傾向が認められる。大規模集落である田村遺跡群の中でも詳細に見ていけば、下位単位毎に住居跡群は時期的変遷を経ながらも継続性を持って成り立っており、上位概念の遺跡も同様の事象で集落間構造が成り立っていると考えられる (注 7)。久家の小地域の遺跡群を継続性のある一つの単位として把握する視点は有効で、今後こうした遺跡分布論が必要となろう。

立地の相違による時期的変遷を見てみた場合に、台地上には後期終末から古墳時代初頭にかけて、多くの遺跡が崖線際に営まれるようになる。長岡台地の西側部では小籠遺跡、祈年遺跡、東崎遺跡、東側部では伏原遺跡、ひびのき遺跡等を上げることができる。野市台地では深渕遺跡、神母台地では林田遺跡が代表例である。台地上ばかりではなく、独立丘陵裾部、山麓谷間部にも小規模ながら多くの遺跡が見られる。

弥生時代は遺跡数の増大と共に可能な限りの立地に占地する現象が認められる。それ以降の時代でも拡散・散在する傾向は認められず、拡散の現象は弥生時代の特徴と言える。おそらくそれは大枠では自然発生的な現象と捉えられる。後の後期古墳の造営は母村を核としているにもかかわらず、緊縛した紐帯は田村遺跡群を除き遺跡間毎に認めがたい。緩やかな紐帯の地域共同体の成立を

注 6:久家隆芳「高知県中央部における弥生～古墳時代の集落について」『土佐山田史談第 31 号』土佐山田史談会､23 － 32 頁、2007

注 7:前田光雄「田村遺跡群弥生時代中後期の集落」『田村遺跡群Ⅱ第９分冊総論』(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター、99 － 136 頁、2006

意味していると考えられる(注8)。

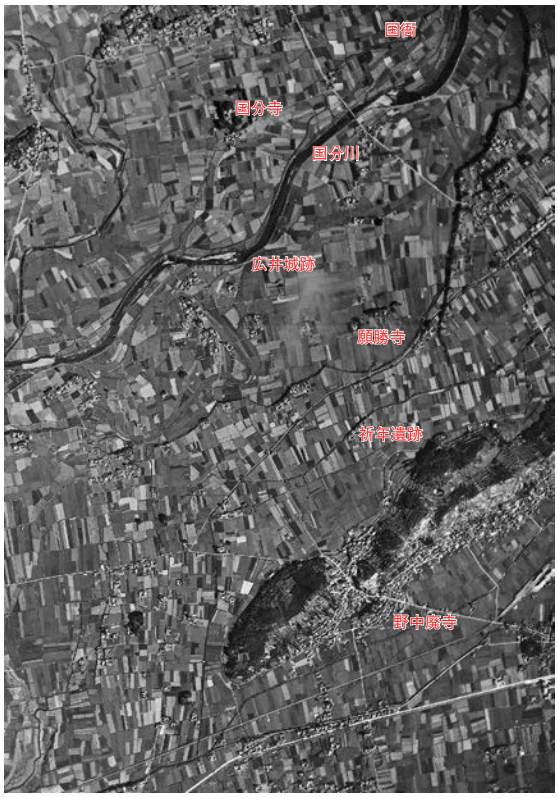


図13　祈年遺跡周辺空撮(昭和22年)

⑷古墳時代

古墳時代は後期になって多くの古墳が築造されるようになる。それまでの前期古墳は皆無に近く、高知県西部の宿毛市に前期古墳が僅か３基認められる程度で、これらについては愛媛県宇和地域の影響の元に築造されたものであろう。香長平野部でも前・中期は皆無に近く、奥谷南遺跡の近くの長畝古墳２号墳、狭間古墳等が僅かに可能性のある程度である。中期については四万十川水系、仁淀川水系で水辺の大規模祭祀が営まれるものの、集落は見つかっておらず、古墳そのものも欠落している。

後期の古墳群は山麓部、独立丘陵に営まれる。特に多く認められるのは土佐山田町の北部新改地域である。また長岡台地の伏原大塚古墳近くの前行周辺、祈年遺跡・東崎遺跡の近くの年越山・坂折山、里改田遺跡近くの井川(ゆうこう)等にそれぞれ群集墳が認められ、県下では他にこうした地域はなく、四万十川水系、仁淀川水系にもほとんど認められない様相で、一極集中とも言える状況である。

一般集落は少なく、それも古墳時代初頭、古墳時代後期の２時期に限られる。古墳時代初頭の集落跡は点在する傾向にある。弥生時代終末から継続するものがほとんどである。しかし、前期初頭から後の時期には継続しない。６～７世紀に属する集落跡は祈年遺跡、伏原遺跡、下ノ坪遺跡、国衙跡等で数は少ない。中位段丘面の台地上に立地するものばかりである。祈年遺跡では６世紀から７世紀の竪穴住居跡が数多く見つかり、造り付けの竈を有する竪穴住居跡である。住居跡の軸方向に規格性があり、計画的村落の萌芽を読み取れる。

⑸古代

ここでは概略を記す。古代の須恵器窯はほとんど一極集中で土佐山田町の北部新改地区の枝谷に立地している。律令期に伴い計画的に築造されたもので、官衙関連に供給されたものと考えられる。地名にも「須江」が認められ、ほとんど一手に須恵器生産が賄われていた。各遺跡の調査で検出されるものは、官衙関連に限られており、また郷関連のもので占められている。大規模条里が香長平

注８：出原恵三「弥生時代前期末・中期初の集落－南四国と瀬戸内沿岸地域の事例から－」『古代文化 第56巻第４号』（13－21頁）で弥生時代前期末から中期初頭の遺跡数の増加は拡大発展したものではなく、小規模単位の集落が等質に拡散したと捉えている。その背景には「遺跡数の増加を単純に、可耕地や生産力の拡大による人口増加、創造的展開に結論つけることはできない」（20頁）とし、「弥生文化の成立期以来の新旧要素が複雑に絡み合った緊張状態を脱し、受容と変容と選択による安定の結果」（20頁）に結論を求めている。中期末から後期初頭の田村遺跡群では出自の異なるグループが同一村落内に居住区を構える事例が知られる。そうした現象は緊張状態が余り強くない社会と考えられる。弥生の村落が離合集散する現象、緊張状態の弛緩の背景はもっと即物的な社会背景を考慮する必要があるかもしれない。

野部には施行されているものの、一般集落は未だ見つかっておらず、一般集落の様相は杳として知れない。

⑹各時代遺跡の立地の概要

①旧石器時代は山麓部、台地縁辺部に限られる。

②縄文時代は旧石器時代と同様の立地条件にあり、一部沖積扇状地に進出が認められる。中期の段階で沖積平野部は安定期に入る。後期には生業の変化の萌芽が認められる。但し農耕ではない。

③弥生時代になると沖積平野部、山麓部をはじめ水田耕作可能な立地、及び台地縁辺部に離散、拡散する。田村遺跡群は前期に入植。その後中核となる。中期以降台地部への進出。後期終末には崖線際に大型住居跡で成り立つ集落。そのまま古墳時代初頭に継続する。

④古墳時代初頭は長岡台地東側部は伏原遺跡等、長岡台地西側部は祈年、東崎、小籠遺跡等が中核を形成している。前中期はほとんど欠落している。後期になると丘陵山麓、独立丘陵に群衆墳が造営される。集落は判然としない。一部台地上に認められ、規格性の萌芽が認められる。

⑤古代は沖積平野部に大規模条里が施行される。８世紀後半から官衙関連遺跡が多くなる。台地縁辺部に官衙関連、沖積扇状地に郷関連の遺跡が顕れる。一般集落は不明。

⑥中近世は台地上の開拓は近世の新田開発に伴い本格化する。丘陵部には中世山城、沖積平野部の下位段丘面に平城が築城される。

図 14　岡豊山より廿枝を臨む

図 15　国衙周辺

図 16 土佐国分寺

図 17 比江廃寺塔心礎

4. 周辺域の景観

⑴祈年遺跡及び周辺域の地形

周辺域の地形は低地と長岡台地の段丘面に大きく分かれ、低地は廿枝（はたえだ）地名で「本田」と呼ばれ、水田耕作の可能な地形であったと考えられる。廿枝の中央部を国分川が流れ、南側は南地と呼ばれ、推定国衙、国分寺、比江（ひえ）廃寺の古代の中枢地である北地に大きく分かれる。

国分川は上流で領石川と新改川が合流し、国分川となる。廿枝郷の下流吉田で支流笠ノ川がさらに合流する。南地では明確な崖線を形成し、長岡台地と沖積平野部が区分できる。対岸の国衙周辺では崖線はあまり明確でないが、国衙の北側で若干それらしき形跡がうかがえる程度である。南地の崖線沿いには防風林が植栽され、長岡台地を囲っている。この景観は江戸時代以降の開拓により形成されたものと考えられるが、今では植林はまばらとなっている。上流域では崖線の高さは４ｍ

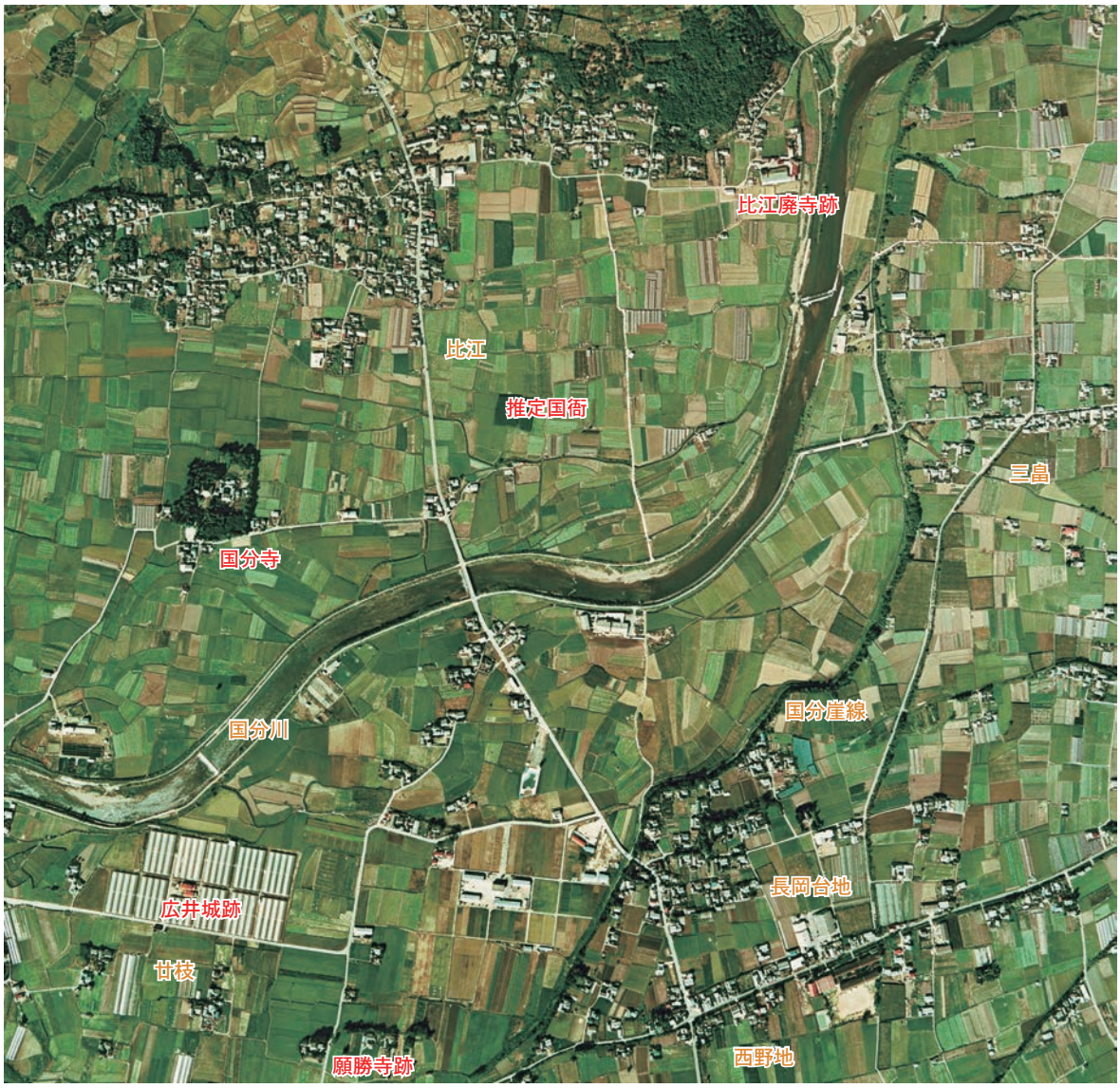


図 18　比江地域（土佐国府・土佐国分寺・比江廃寺跡）

近くあり、下流に行くと吉田辺りでは崖線は不明瞭となる。

国分川は狭い流域でも蛇行し、水田の地割りが乱れていることから旧流路が南地の国分崖線際にもあった可能性がある。中世の長宗我部（ちょうそうかべ）地検帳段階で上廿枝は検地が行われているものの、この周辺は氾濫がたびたびあったと考えられ、生産地としては利用されていたものの、居住区としては不適当なところと考えられる。下流の古市、西島周辺が古代から中世の中枢地で旧地形が微高地となっていたと考えられ、五輪塔初め神社寺院の多くがそちらの方に分布しており、居住区は下流の西島周辺域である。

崖線上の長岡台地はかつては西野地と呼ばれ、水利に不便なところで、水田耕作地として本格的な開拓が始まったのは江戸時代の新田開発の時期、山田堰以降である。それ以前の時期の弥生時代、古代の遺跡も分布しているところから、中世以前に入植が行われているものの、それらは畑作、または崖線下の谷戸田の経営であろう。古代の長岡台地への進出は律令制の崩壊に伴う墾田の可能性が考えられるが、今のところそれを実証する術はない。またその後の中世の地検帳段階では長岡台

地上での開拓はあまり行われていなかったと考えられる。台地の生産形態と開拓史は時代時代により違ってくる。台地は歴史地理学の視点からすると最も遅く人為的手が加わる地形と言える。考古学的視点に立てば全く逆であるが。

図 19　野中廃寺出土瓦

⑵祈年遺跡周辺域の史跡

①祈年及び廿枝

本遺跡名となった「祈年」は本遺跡の南側坂折山の北麓に祈年神社が鎮座していることに因む。『続日本紀』の慶雲２年 (706 年) の条に土左国の「祈年弊帛」を奉る神社として古代からその存在が知られていた。

図 20　祈年神社

祈年遺跡の北側、国分川を挟んで古代の中枢の国府域には土佐国府、土佐国分寺、尼寺と考えられる比江廃寺跡が控えている。

土佐国衙は昭和 52 年 (1977 年) から学術調査を開始し、27 次調査まで発掘を実施しているものの、政庁は未検出である。土佐国分寺も平成５年までに４次調査が行われ、僧坊、金堂の基壇、土塁のそれぞれの一部の調査を行っている。現金堂は中世の段階で長宗我部により再興されたもので、旧基壇は N-16°-E の方位を指し示している。この方位は香長平野の古代条里との兼ね合いで重要である。比江廃寺跡は国衙の北東に位置し、昭和９年に残存している塔心礎が国史跡となり、計５回の調査が実施されており、白鳳期に創建されたと考えられている。

図 21　広井城跡

祈年遺跡の南側坂折山の南麓には野中廃寺があり、２度の発掘調査が実施されているものの、なおざりにされ、報告書が未刊のため、その内容は不明である。ただ僅かに出土した瓦からして平安期の寺院跡であると分かる程度である (注 9)。

図 22　願勝寺

古代の南国市は長岡郡と一部香美郡が含まれていた。長岡郡は登利、殖田、宗部、江村、片山、篠原、大曽の７郷に分かれ、香美郡は旧物部川以西では深渕、石村、物部、田村の４郷に分かれる。今迄の調査で郷の中心となりそうな遺跡は長岡郡では、殖田郷が白猪田遺跡、片山郷が里改田遺跡、大曽郷は西野々遺跡がそれぞれ中心地と考えられる。宗部郷は本遺跡祈年遺跡が含まれ、国府域も宗部郷に含まれる。宗部は蘇我氏との関連が考えられている。香美郡では田村郷が田村遺跡、深渕郷が深渕遺跡、石村郷は岩積遺跡等がそれぞれの郷の

注 9:山本哲也･中山泰弘「野中廃寺」『高知県埋蔵文化財センター年報１』(19 頁) (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター、平成３年 (1991) に公園建設に伴い発掘調査を行っているものの、年報に僅か１頁が報告されただけで本報告は刊行されていない。内容未詳。

中心地と考えられる。

長岡台地上には表層条里は残らないものの、廿枝の低地には条里が残り、田村周辺の香長条里から飛び地として廿枝条里と呼ばれている。

廿枝は中世の段階では国府側も含んでいたものの、江戸時代には国府側(北地)とに分かれ、国府側は国分村、比江村、左右山村に分かれ明治22年には三ケ村が合併し国比左村となり、さらに明治30年には国府村となっている。南地の廿枝は長岡台地上の西野地村と分かれていたものの明治22年には長岡村として合併をしている。

昭和31年には周辺域の村々は合併して後免町となり、さらに昭和34年には南国市となり、廿枝は大字として残ることになる。西野地の大字は残ることなく、三畠、末松等の大字となっている。

廿枝への入植は今のところ判然としていないが、古代の条里が残ることから、古代から律令体制下に組み込まれていたと考えられる。しかしながら、その時代のものについては明確なものはほとんど見られない。明確になるのは中世長宗我部時代である。岡豊城に侵略者長宗我部が居を構え、その眼下の平野部の西側に吉田と東側には廿枝に広井の居館が築かれる。

西野地については、江戸時代の山田堰以降の新田開発に伴う入植と考えられる。「廿枝八百石、野地五千石」と長岡郡では最も豊かな村となっている。新田開発以前は廿枝が本田であったものの、寛永年間の用水路開鑿、石灰の投入による土壌改良以降は台地上の西野地の生産高が廿枝を上回るようになる(注10)。土佐山田にも同じく野地地名が見られ、東の山田野地に対して、西の野地と呼び、山田堰から山田中井川(寛永16年竣工)を通じて繋がる。野地は野路とも標記する。野路とは野中の道のことであり、本来「野地」は「野路」の音読みの当て字の可能性が極めて高い。山田野地から西野地には未開墾地にも関わらず野中に野路が通っていた可能性がある。

②広井城跡関連

中世長宗我部時代、岡豊山の眼下に廿枝と吉田にはそれぞれ居館が配置されていた。廿枝には広井城があり、今では西島園芸団地によりその面影はない。居館は地検帳の「中屋敷」の部分が消滅した遺跡として遺跡台帳には搭載されており、地元の話では城八幡があり、土塁が残っていたとのことである。「中屋敷」の東側には「三平」の小字が残り、おそらく本来は「三ノ塀」と考えられ、また「中屋敷」の南側には「馬場」の小字がある。城八幡は西島園芸団地造成に伴い園芸団地の東側の「三平」に移転し、寄せ集められた五輪塔と共にひっそりと小さな祠が祀られている。

広井の末裔は近傍の野田に移り、野田広井と言われているようである。なお、「中屋敷」の南東部に広井の菩提寺と考えられる「願勝寺」がかつてあったらしく、今でも野田広井は参っているようである。願勝寺は遺跡として搭載されていないものの、土塁状に石黒が残り、その部分から土器(かわらけ)が採集できる。

③周辺の五輪塔

五輪塔は9ケ所で確認している。全て下段の低地の広井城跡周辺に見られる。祈年遺跡の台地上では1基も見つかっていない。ほとんど全てのものが移動していると見られ、田畠の隅、崖線際に寄せ集められている。小字「宮ノ前」の水田にあるものは、広井関係のものと考えられる。この五

注10；武吉眞裕「第Ⅴ章 まとめ」『小籠北遺跡』(43 − 53頁)に長岡台地の灌漑、土壌改良の論考がある。

図 23　祈年遺跡周辺小字 (※●中世五輪塔)

図 24　祈年遺跡周辺小字 (※●中世五輪塔)

輪塔も移動しているとのことである。

中世の段階で台地上に五輪塔が見られないのは、やはり本格的な開発が台地上では行われなかった証左であろうか。祈年遺跡でも中世の遺物、遺構は希薄であった。

図 25　宮ノ前五輪塔

図 26　下末松遍路石

⑶周辺の道関係

廿枝周辺は古代の国府、国分寺等があり古代官道関係、また中世の道、近代の遍路関係があり、古くからの道、そのまま新しい時代にも継承された道があり、錯綜としている。中央部を国分川が流れており、渡しもいくつか存在していた可能性がある。

周辺の古い道は３つ考えられ、１つは国分寺から南に向かい、国分川丹官堰の下流を渡り、広井城跡脇から南進し、年越山を越え、野中廃寺を左手に見て現住吉通りに通じる道である。この道はさらに南に向かい船岡山を迂回し、県道 243 号線田村高須線にぶつかる所に遍路石がある。その近くにも「野地」地名がある。この道は古代の南北道と遍路道が継承されている可能性がある。

２つ目は国衙から南に延びる南北道は国分川の光富堰を渡り上廿枝から国分崖線を上がり、県道 257 号線領石後免線を斜めに通り過ぎ、農道となっているが遍路石のすぐ脇に出る。県道の西 50m の所に農道が所々残っており、鳶ケ池中学校北裏の東西道と交叉する。この南北道はさらに南進して香長中学校近くの西野々遺跡に通じる。一部は遍路道として利用されていたと考えられる。

３つ目は古代官道と考えられ、国衙を起点とした東西道である。西は国分寺に通じる。竹崎論文では古代官道は国衙から国分川を渡り、三畠から香美郡衙の北側に至り、更に堰留（いどめ）神社の線を想定している (注 11)。根拠の一つとして長岡台地上の三畠の「大車」の小字を上げている。長岡台地の地名が古代、中世にまで遡るかどうか不明であり、「大車」が道関係の字かどうかも不明である。長岡台地は江戸時代の開拓によるもので、水田に水を汲み上げるには水車を利用するのが一般的であり、祈年遺跡近くには「水車」の小字が残り、「大車」も水車の意味の可能性があり、道関係の根拠となり得ない可能性がある。「大車」が古代官道とは直接関係ある小字とは考えられない。

道については古代官道、条里に伴うもの、中世の段階のもの、遍路道として注目を浴びている道がそれぞれある。遍路道は特に国家主導で遍路として作道されたものではなく、旧来の道を使われたものである。遍路自体が由来の判然としないものであり、札所自体も道順も特に今の様に確定されたものではない。平野部では村の道、山間部では峠道を「遍路さんも通った道」であり、その意味では遍路道として独自のものは存在し得ないであろうし、その意味で唯一１本の道が遍路道として確定することは困難であろう。遍路さんが頻繁に利用した「遍路さんも通った道」は時代とともに変遷していると考えられる。

注 11：竹崎仁「古代土佐国における物部川流域の歴史地理学的考察」『土佐山田史談 第 28 号』（54 － 84 頁）。祈年遺跡の道路状遺構については、平成 19 年度Ⅳ区で１条の溝が見つかっているだけであったが、この論考より推定して平成 20 年度に東隣のⅤ区でもう１条の溝を検出した。論考の通り住吉通りの延長線上に祈年遺跡の道路状遺構は見つかったことになる。

⑷長岡台地の歴史的疑問点

1. 香長平野及び国府には古代条里が残り、長岡台地上には条里はない。
2. 長岡台地は中世の段階で検地が行われていない。

まず１の長岡台地の広大な平野が水田に適していないと言って、果たして律令体制下に組み込まれなかったのか。２も同様である。長宗我部時代にも荒れ地として開墾が果たして行われなかったか。急峻な山でも山畠として中世には開墾が行われ、検地が行われている所もあるにも関わらず、平坦な長岡台地が果たして全く利用されなかったかである。

長岡台地の開拓は山田堰の開鑿以降と通常考えられてきた。香長平野には古代からの景観が残り、律令期の表層条里地割りが容易に肉眼で捉えることができ、研究が進み、それに対して長岡台地は江戸時代の開拓以降の景観で律令期の景観が隠れて捉えることができず、最初から律令関係の研究対象にならなかっただけではないか。江戸時代の景観の下に、古代の条里景観があるのではないか。

１については、祈年遺跡で江戸時代の下層からは古代の掘立柱建物跡が何棟か見つかり、軸方向が一定していることから、計画的な村落形成が行われていることが判明した。畑作の畝状遺構も見つかり、長岡台地も律令体制下に組み込まれていた可能性が強くなってきた。

２の長岡台地は検地が行われなかったのは、ただ単に荒れ地のため、土地利用が単純になされていなかったかである。長宗我部の本貫地であるにも関わらず、岡豊城の膝元である広大な長岡台地が土地利用されずに果たして放置されたままになっていたかである。

明確な回答は用意できていないものの、中世で水田、畑作が行われていない状態で検地が行われていないとすると、中世の戦国時代には軍馬は必需品と考えられ、広大な台地利用は「牧」ではなかったかと推測して見たものの、小字にもそれらしきものもなく、手がかりは全く掴めない。「牧」以外にも秣場として荒れ地が利用された可能性は当然考えられる。

5. 香長平野の基準線について

⑴南北基準線

香長平野は高知空港の西側を南北に走る通称農免道路、物部川沿いの立田通り、住吉通りを基軸としている。南北線は比較的容易に拾い出すことができるものの、東西の基軸が判然とせず、農免道路 (角度は N-12°-E) から 90 度振り、東西基準線となるものを条里、現道路、米軍空撮を頼りに幾筋か抽出してみた。

南北基準線を西から順繰りに見てみると、南北基準線は農免道路を基軸に東西 10 町毎に配している。

1. 郡境と考えられる農免道路を基軸にすると 20 町西には住吉通りがあり、船岡山、野中廃寺、国分寺が線上にほぼ 10 町毎に配置されている。そして祈年遺跡では道路状遺構を検出している。
2. 農免道路の西 10 町の基準線大埴（おおそね）の南の延長上には西野々、里改田遺跡がある。西野々遺跡では南北の道路状遺構が検出されている。里改田遺跡は長岡郡衙の可能性のある遺跡である。

図 27　香美郡境碑

3. 農免道路は長岡郡と香美郡の郡境と考えられ、香美郡境碑が線上にある。北端には須江駅跡がある。
4. 農免道路 10 町東には軸方向がずれるものの立田通りとなっている。
5. 物部川の東側の野市台地上を通る基準線上で下ノ坪遺跡、深渕遺跡、堰留（いどめ）神社が乗ってくる。

⑵基準線間距離

次にそれぞれの基準線間、中枢史跡の距離を見てみる。住吉通りと農免道路の南北線間は、2.4 ㎞で「町」に換算すると 20 町となり、10 町は約 1.2㎞、1 町は 120m となる。どうして鍵距離が 1.2 ㎞なのかは判然としない。条里の方６町を基準とすれば、109m × 6 町 =654m が基準となるものの、原因は不明である。

調べていく過程で６町ではなく、10 町毎に基本となる南北軸が配置していると考えられる。

律令期に５町で１里としている所もあるらしく、南北道は５町を基本として、その倍数に南北道を配している可能性がありそうである。つまり西から住吉通り、大埇、農免、立田通りが 10 町毎にちょうど割り振られていることになる。

⑶東西基準線

東西基準線は時期的な変遷がある可能性があり、特に東西道は古代から近世まで移り変わり、東西基準線に乗ってこず若干のズレがあるようである。ズレを修正して図示したのが図 29 である。東西基準線は南北基準線の 1.2㎞に対し、1.3㎞と 100m 程広くなっている。

修正した東西基軸は北側から見てみると、

a. 北端の推定須江駅跡の東西基準線を修正すると、隣接する須江上段遺跡の調査では、幅約 60㎝、深さ約 40㎝、60㎝の２条の溝が検出されており、報告書では単なる溝とされているものの、幅員約 4.6m で道路状遺構と考えられるものが存在している (注 12)。周辺の遺物出土からすると８世紀後半代の年代が考えられる。

c. 推定土佐国衙前を通り推定香美郡衙に通じる基準線で、住吉通りとこの線の交叉点近くには国分寺が位置している。この基準線の国衙の南側には「厩ノ尻」の小字が残っている。北の推定国衙跡と香美郡衙推定地を結ぶ基準線はそのまま残っていたと考えられる。

e. 香美郡境碑を通る基準線は南に寄り、江戸時代に迄引き継がれ、街道「大道」となっている。住吉通りとの交叉点には平安時代前期の野中廃寺がある。

g. 里改田遺跡を通る東西線で、里改田遺跡は推定長岡郡衙である。

東西基準線がズレる理由は判然としない。考えられることは時期的な差異で、南北基準線は古代から現代迄そのまま継承されたものの、東西基準線については中世、近世の道が景観となった可能性がある。以下に歴史的事象を南海道、郡の設置等から見てみる。

図 28　推定香美郡衙

注 12；須江上段遺跡の道路状遺構と推測したものは中山泰弘『須江上段遺跡松ノ本地区』所収の図面（15 頁）及び写真図版（PL.6）で判断した。報告書にはただの溝と報告されている。平成７年（1995 年）に発掘調査、報告書刊行は平成 16 年（2004 年）となっており、９年後で忘失したのであろうか。

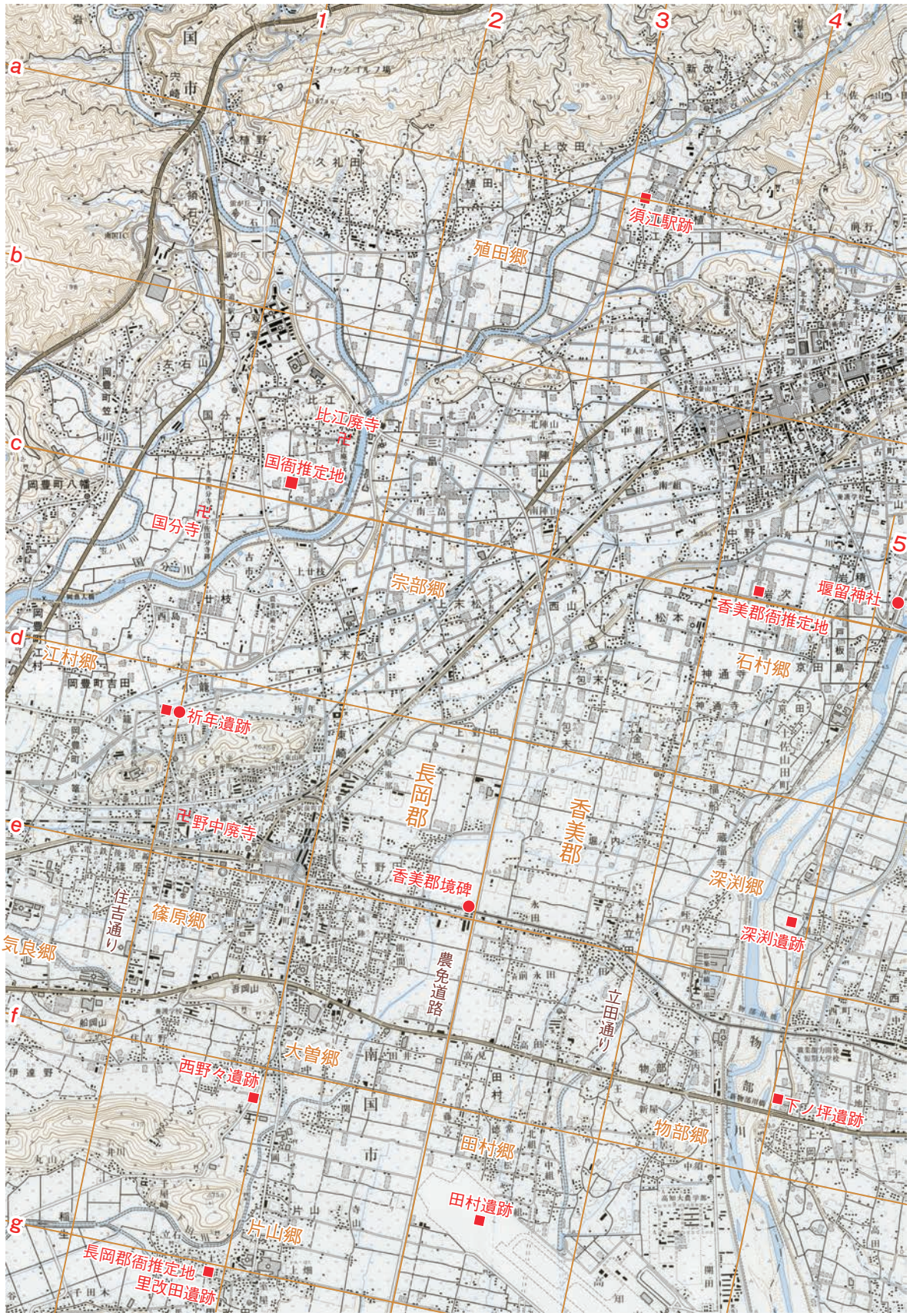


図 29　古代基準線 (※升目南北基準線間隔約 1.2㎞、東西基準線間隔約 1.3㎞、南北軸 N-12° -E である)

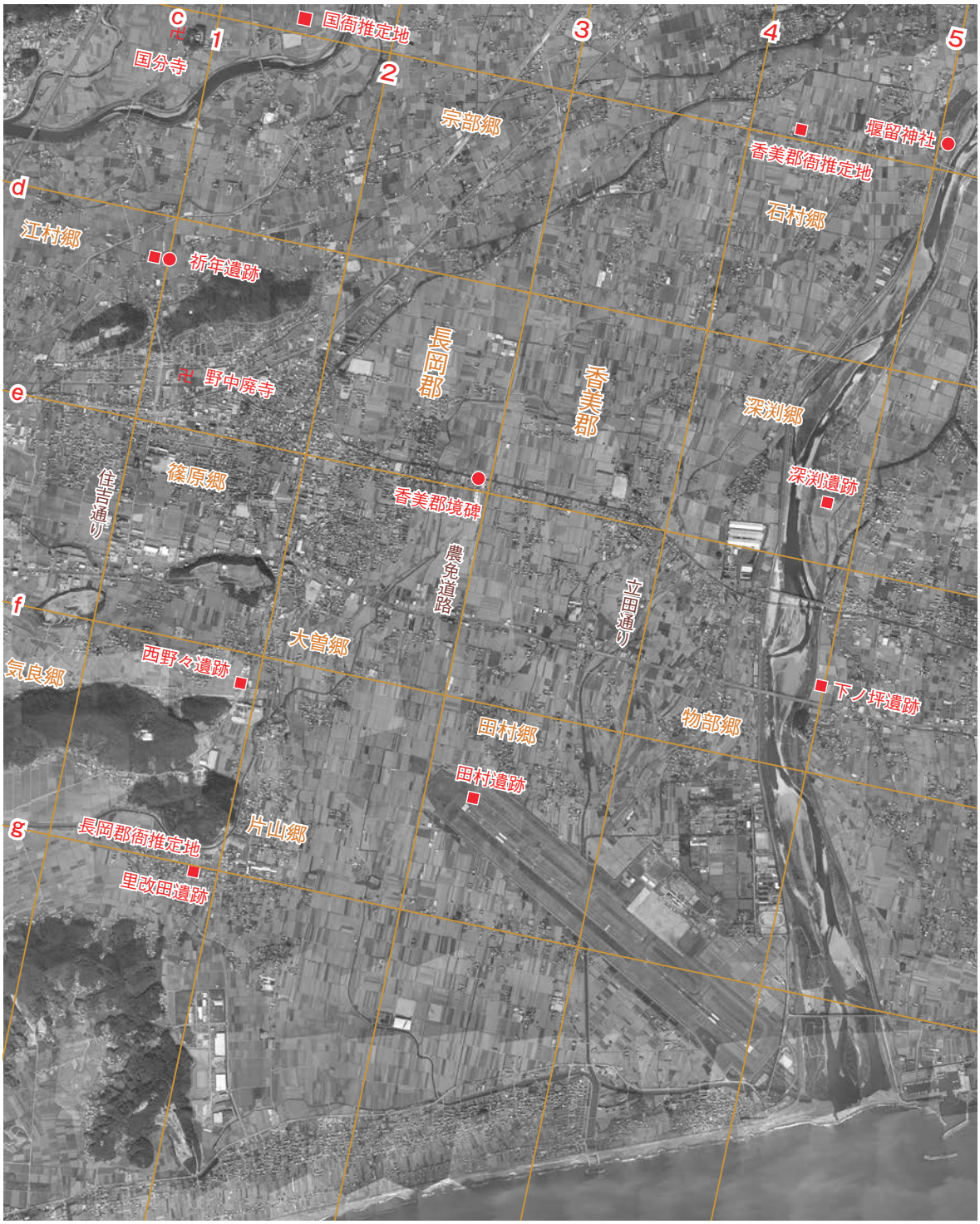


図 30　古代基準線写真 (※升目南北約 1.2㎞、東西 1.3㎞、南北基準軸 N-12° -E である)

⑷南海道

古代の道は官道、伝路、自然村道に大きく分かれ、土佐国の官道は南海道に含まれる。伝路は地方の役所間を繋ぐ県道に相当する。古代の南海道は３時期の変遷が知られている。１期養老以前 (718 年以前)、２期養老新道 (718 年以降)、３期延暦新道 (797 年) に変わる。土佐国へは１期は伊予を経由、２期は伊予回りを廃止し阿波回りに、３期は阿波回りも廃して、四国山脈縦断に変わる。

１期の養老以前の南海道については、諸説があり伊予国府から幡多へ大きく迂回する説があるものの、まだ正確な経路は確定していない。官道には駅が30里毎(現16㎞)に設けられ、距離数からすると土佐西部の幡多迄は大きく迂回しないであろう(注13)。

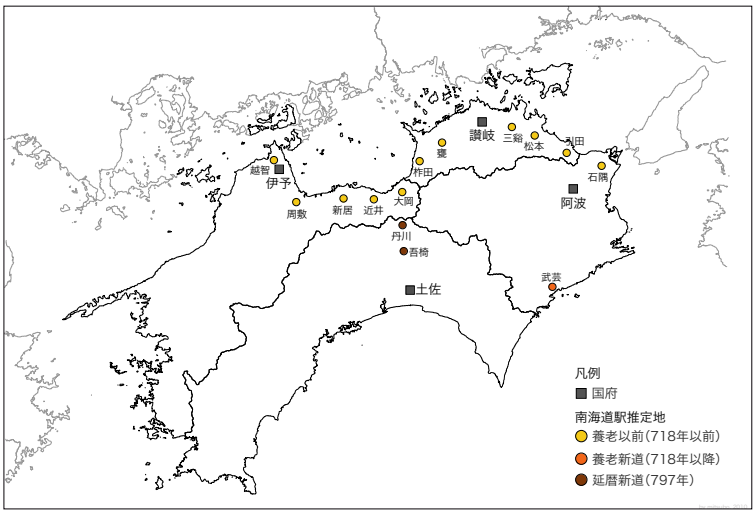


図31　古代南海道（※前田2000より転載）

２期の養老新道については、『続日本紀』養老２年(718年)に「土左国言さく。公・私の使、直に土左を指せども、その道、伊豫国を経。行程迂遠にして山谷険難なり。但し、阿波国は境土相接ぎて往還甚だ易し。請はくは､此の国に就きて通路とせむことをとまうす。これを許す」とあり、「阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人調堅魚六斤　天平七年十月」(735年)の木簡が平城宮跡から出土し､「武芸駅」は現徳島県海部郡牟岐町と考えられることから、阿波の海岸伝いに南海道は変わった。

３期の延暦新道は『日本後紀』延暦16年正月27日(797年)「阿波国の駅家□、伊予国十一、土左国十二を廃し、新たに土左国に吾椅、舟川の二駅を置く」(□は欠字)と延暦新道の開通に伴い翌延暦16年には伊予11、土佐12の駅家が廃止されることになる。「吾椅、舟川」については異説は少なく､「舟川」は大豊町立川､「吾椅」は本山町寺家の「吾橋」ではないかと考えられている。

⑸長岡郡と香美郡

「授土佐国香美郡少領外従六位上物部鏡連家主爵二級・・」(『日本後記』延暦24年805)、及び「土佐国香美郡人物部文連全敷女、授少初位上・・全敷女、同郡物部鏡連家主之妻也・・」(『類従国史』大同5年810)が香美郡について最も古い文献である。長岡郡は土佐郡を割いて、更に長岡郡を割いて香美郡が建郡されたと言われる。しかしながら、これらについては確かなことではなく、史実からは延暦24年(805年)には香美郡が存在したことのみが確実と考えられる。

⑹官衙関連遺跡の軸方位

官衙関連遺跡の大部分が東西南北の基準線上に乗ってくる。国郡関連はこれに合致してくるものの、郷関連の西野々遺跡、田村遺跡、深渕遺跡等は外れる。規格性のある配置の掘立柱建物跡を検出した遺跡で軸方位を見てみると、下ノ坪遺跡では８世紀初頭から８世紀末迄の主要建物跡は概ねN-12°-Eの方位を指し、９世紀になるとN-13°-Eと若干振るようである(注14)。田村遺跡群では８世紀後半のものはN-10°-Eを指すものがやや多く、８世紀末から９世紀初頭になると下ノ坪遺跡と同様にN-13°-Eを指すものが現れる(注15)。下ノ坪遺跡の掘立柱建物跡からは四仙騎獣八稜鏡が出

注13：養老以前の南海道については前田光雄「第４節 １古代駅家について」『松ノ木遺跡Ⅴ』（13 － 15頁）で距離数からして幡多回りを否定し、幡多迂回らずに伊予国府、松山、大洲、宇和、檮原、佐川、伊野、土佐国府経路を提唱している。

土し、県下最大規模の掘立柱建物跡であり、単なる郷、郡関連の施設とは考えられない遺跡である。田村遺跡群は香美郡田村郷の中心地と考えられるものの、下ノ坪遺跡ほどの規格性は認められない。

⑺律令期前夜の軸方位

史料的に不確実ではあるが、『日本書紀』天武４年(675年)に土佐神社(土左大神)が神刀一振を天皇に献上した記事がみえる。土佐神社の軸方位は真北を指している。また国衙周辺は香長条里と合わず、部分的に土佐神社と同一の軸方位を取る地割り、道を抽出することができる。また８世紀から９世紀代の掘立柱建物跡も同様である。長岡台地をはじめ周辺域の竈付きの古墳時代後半から終末の竪穴住居跡も同様の方位を取るものが多く認められる。

⑻基準線の時期

南海道の変遷時期から延暦16年(797年)には推定須江駅跡が設置され、また祈年遺跡、西野々遺跡(注16)、及び須江上段遺跡で道路状遺構が線上に乗ってくる。文献からして長岡郡と香美郡の境が延暦24年(805年)には既に成立していたと考えられる。導き出されることは、香美郡境碑と須江駅跡が農免道路の南北線上に並ぶこと、この南北基準線は香長条里にも一致するものであり、考古学的調査の面からしても、N-12°-Eの南北基準線は８世紀末から９世紀初頭には既に成立していたことになる。さらに土佐神社等からして律令前夜にはN-0°-Eの方位が最も古い段階のものと言えそうである。但し、国衙周辺域では古い方位が律令前夜から後々まで残存していたと考えられる。

歴史地理学からの接近では長岡郡と香美郡の建郡については２説あり、土佐郡から長岡郡と香美郡が同時に割いたとする説(大脇1982)が考古学的見地からしても有力である。大脇が提唱する土佐郡と長岡郡の郡境を小野社と葛木咩社の２つの式内社の並びに求めている。また土佐郡衙が土佐神社より東に４里にあることが文献上知られており、南国市に隣接する高知市布師田周辺が可能性があろう。香美郡衙、長岡郡衙が基準線にほとんど乗り、極めて規格性があることから、土佐郡衙も同様に南北10町基準線に乗ってくる可能性をここでは指摘しておきたい。式内社小野社と葛木咩社とを結ぶ線は10町毎の南北基準線に乗ってこず、土佐郡と長岡郡の郡境は別の地点に求められる可能性がある。土佐郡から割いて長岡郡と香美郡が同時に建郡され、自然地形ではなく明確に条里境に則って長岡郡と香美郡の郡境が設けられた論理からすると、土佐郡と長岡郡の郡境も同じ論理に従い、10町毎の南北基準線に乗ってきて当然と考えられる。

⑼南北基準線と東西基準線の相違

香長平野の基準線の大まかな成立年代は掴めるものの、基準線がどのような規格性で設置されたのかの疑問点を整理してみる。

香美郡境を基本として、1.2㎞毎に南北基準軸が配されており、条里と同方位を取るものの、南

注14；下ノ坪遺跡の掘立柱建物跡軸方位は『下ノ坪遺跡Ⅱ』(124 － 125頁)の古代建物跡規模一覧表を参照した。
注15；高知県下の主だった掘立柱建物跡については筒井三菜「Ⅸ 古代の掘立柱建物跡と遺物」『田村遺跡群Ⅱ 第９分冊 総論』(315 － 341頁)を参考にした。
注16；西野々遺跡の掘立柱建物跡軸方位は「第Ⅳ章考察 4.古代」『西野々遺跡Ⅰ』(208 － 209頁)を参照した。

北基準線は条里境と一致して来ない。しかしながら規格性が認められることから条里制とは違った別の原理に成り立っていた可能性がある。

考えられるのは条坊制の原理を取り込んでいるのではないか。南北基準線は坊に相当し、町にすると約 120m で 10 町で 1.2㎞となることから香長平野に展開する南北基準軸は 1.2㎞の等間隔で配置されていることになる。それに対して、東西基準線は約 109m の条里に一致し、109m × 12 町 =1,308m となり、方６町の２倍でおよそ 1.3㎞の数値を得ることができる。数値的には南北と東西の間隔は条坊と条里の２つの原理に合致している。しかしながら、条里制の土地区画制に条坊制の都市区画制が重なるという類例は果たしてあるのか、浅学にして知らない。

謝辞 「第２節 地理的・歴史的景観」については出原恵三、吉成承三、池澤俊幸、久家隆芳、筒井三菜 ((公財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター)、松村信博、宮地啓介 (高知県香南市文化財センター)、辻康男 (パリノ・サーヴェイ株式会社) の各氏に種々ご教示を頂いた。

参考文献

書籍・論文等

金田章裕、1985、条里と村落の歴史地理学研究、大明堂
前田和男、1979、古代の山田　郷と条里、土佐山田町史、高知県土佐山田町、155 － 174 頁
廣田典夫、1979、考古編、土佐山田町史、高知県土佐山田町、37 － 154 頁
満塩大洸・出原恵三、2000、高知県における後期更新世・完新世の環境変化－第四紀地質学的及び考古学的成果から－、高知大学学術研究報告 第 49 巻 自然科学、高知大学、67 － 110 頁
満塩大洸・出原恵三、2001、第四紀 (人類世紀) における高知県の環境変遷－自然環境と考古学遺跡の変遷史－、高知大学黒潮圏研究所 所報特別号№ 11、高知大学黒潮圏研究所、3 － 78 頁
竹崎　仁、2004、古代土佐国における物部川流域の歴史地理学的考察、土佐山田史談第 28 号、土佐山田史談会、54 － 84 頁
池澤俊幸、1998、4. 下ノ坪遺跡出土の八稜鏡、「緑釉単彩陶器」、古代掘立柱建物跡、下ノ坪遺跡Ⅱ、高知県野市町教育委員会、263 － 265 頁
池澤俊幸、2000、土佐における古代前期の建物群、古代文化第 52 巻第 6 号、古代学協会、368 － 376 頁
池澤俊幸、2006、土佐の古代遺跡と南海道、特別企画展記念シンポジウム古代の南海道を考える、徳島市考古資料館、120 － 139 頁
久家隆芳、2007、高知県中央部における弥生～古墳時代の集落について、土佐山田史談第 31 号、土佐山田史談会、23 － 32 頁
筒井三菜、2006、Ⅸ 古代の掘立柱建物跡と遺物、田村遺跡群Ⅱ 第 9 分冊 総論、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター、315 － 341 頁
廣田佳久、2008、第Ⅳ章考察 4. 古代、西野々遺跡Ⅰ、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター、208 － 209 頁
島田豊寿、1979、第 3 編 古代 第 2 章第 3 節条里、南国市史上巻、高知県南国市、336 － 372 頁
島田豊寿、1979、第 1 編 地理、南国市史上巻、高知県南国市、1 － 31 頁
大脇保彦、1982、土佐の条里、高知の研究 2、清文堂、7 － 39 頁
岡本健児、1979、第二章 弥生前期時代、南国市史上巻、高知県南国市、67 － 180 頁
岡本健児、1979、第 3 編 古代、南国市史上巻、高知県南国市、451 － 461 頁
前田光雄、2000、第 4 節 1 古代駅家について、松ノ木遺跡Ⅴ、高知県本山町、13 － 15 頁
松村信博、2001、奥谷南遺跡Ⅲ、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
武吉眞裕、2000、里改田遺跡、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

報告書

田村遺跡群Ⅱ、2004 － 2006、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
林田遺跡Ⅲ、2005、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
西分増井遺跡Ⅱ、2004、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
栄エ田遺跡、1995、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
小籠遺跡Ⅱ、1996、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
小籠遺跡Ⅲ、1997、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
小籠北遺跡、1999、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
陣山遺跡・陣山北三区遺跡、1997、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
新改西谷遺跡、2002、高知県土佐山田町教育委員会
伏原遺跡Ⅰ、2010、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
深渕遺跡発掘調査報告書、1989、高知県野市町教育委員会
里改田遺跡、2000、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
山田三ツ又遺跡、1997、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
須江上段遺跡松ノ本地区、2004、高知県土佐山田町教育委員会
辺路石南遺跡・五反地遺跡、1999、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
土佐神社西遺跡・土佐神社、2006、高知県高知市教育委員会

奥谷南遺跡Ⅲ、2001、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
ナシヶ森遺跡、2001、高知県大月町教育委員会
林田遺跡Ⅲ、2005、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
西分増井遺跡Ⅱ、2004、(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

第Ⅱ章　Ⅷ区の調査成果

第１節　Ⅷ区の調査概要

1. Ⅷ区の調査概略

Ⅷ区は祈年遺跡の東寄りに位置する (図1-1)。本遺跡の中枢部である。調査担当、調査期間、発掘面積等は以下の通りである。

執筆担当者；前田光雄　前田早苗
調査担当者；近藤孝文　前田光雄
整理作業担当者；前田光雄
調査期間；平成 20 年 6 月 13 日～平成 22 年 3 月 20 日
調査面積；6,880㎡
時代；弥生時代後期～近世
検出遺構;竪穴建物跡 42 軒、掘立柱建物跡 19 棟、壺棺墓 18 基、竪穴状遺構 51 基、土坑 106 基、溝跡 118 条、柱穴跡約 2500 基等
遺物総点数；約 15 万点

2. 調査区の設定

本調査区は祈年遺跡の中枢に相当する。遺構、遺物量は他の調査区を圧倒している。調査区が道路調査ということで細長く長さ 880m、幅 26 ～ 30m のトレンチ状の調査区である。調査区が東西に長いために東側と西側部では遺跡の内容はやや異なってくる。

調査区が長いため､大きく２つにＡ､Ｂと分け､調査区の西側部をⅧＡ区､東側部をⅧＢ区とした。更にそれでも一度に調査を行えないために、ⅧＡ区東側 (ⅧAE区)、ⅧＡ区西側 (ⅧAW区)、ⅧＢ区東側 (ⅧBE区)、ⅧＢ区西側 (ⅧBW区) の４つの小調査区に分割を行い調査を進めた。調査はⅧＢ区東側 (ⅧBE区) →ⅧＢ区西側 (ⅧBW区) →ⅧＡ区東側 (ⅧAE区) →ⅧＢ区西側 (ⅧBW区) の逆順序の東側から進めた。

グリッドは祈年遺跡全体に網をかけており､100m × 100m の大グリッドを南北列をアルファベット、東西列をアラビア数字で呼称し、A1 グリッド、A2 グリッドとした。Ⅷ区は C8 グリッド、C9 グリッドに位置している。更に 20m × 20m の中グリッドに分割し、北西隅から東行千鳥でアラビア数字１から 20 迄付した。中グリッドの 20m 四方の中グリッドを北西隅から東行千鳥で４ｍ × ４ｍの 25 の小グリッドを設けている。グリッド表記は C9-7-1 と言う具合にした。世界測地系Ⅳの公共座標に則っている。祈年遺跡の座標は北緯 33 度 35 分､東経 133 度 38 分である。北は真北を表し、挿図の方位記号は真北を指す。

3. 調査の方法

現地は水田耕作地で表土掘削は重機で行い、その後遺構検出を人力で行う。遺構検出面は基本土

層Ⅲ層である (第Ⅰ章第２節参照)。検出後、写真、半截、土層写真、図面、完堀等の一連の作業を行った。遺構平面図は 1/20 でグリッド単位で作成する。全体図は航測を行う。

遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代後期、古墳時代末から古代、近世と大きく分かれる。遺構構築面はⅢ層で、近世のみがⅡ層であった。しかしながら表土除去後はほとんど同一面で検出しており、検出時に新旧関係を判断して、上層、下層と調査を分けて記録保存を行った。図面、空撮も同じ調査区でも２度に分けて実施した。おそらく近世、それ以前から土地の削平が行われ、弥生時代後期の壺棺墓も表土直下で顔を出すものも認められた。

4. 整理作業方法

遺物洗浄、注記、接合、補填の基礎作業後、出土遺物は細片をも含めると数万点にも及び、報告書掲載遺物は 877 点を抽出した。遺物実測を行った後、複写は土器類が Adobe Illustrator(アドビイラストレーター) で量子化複写 (デジタルトレース) を、石器類は従来の製図ペンで行った。遺構図は現場での測量及び全体図関係は航測図を元に量子化複写を行った。遺物出土状況等は一部製図ペンで複写を行っている。

遺物写真はデジタルカメラで撮影を行い、Adobe Photoshop により現像、加工、修正を行った。

本文編集は Adobe InDesign で編集作業を行った。

整理期間は平成 20 年から発掘調査と並行しながら基礎作業を始め、本格的な報告書作成業務は平成 23 年 4 月からで報告書上梓に漕ぎ着けたのは平成 24 年 9 月であった。

5. 周辺の微地形

独立丘陵で瓢箪形をした２つの坂折山（標高 76.4m）、年越山（標高 66.1m）の北側に祈年遺跡は位置している（図 1-1)。坂折山南面中腹にはかつて４基の後期古墳、年越山には２基の後期古墳が築造されていた。坂折山の北側麓には祈年神社が鎮座している。遺跡の標高は 14m から 15m で現地表面は平坦である。調査を進めて行く中で表層は平坦面を形成しているものの、土地の削平が行われ、改変が行われている為に平坦な地形となっている。Ⅷ区の西側部Ⅶ区からⅥ区にかけては浅い埋没谷を形成していたと考えられ、アカホヤ混じりの流入土が基本土層Ⅱ層、Ⅲ層の上部に被覆していた。また中には弥生時代後期の竪穴建物跡の中にも二次堆積土のアカホヤ混じりが覆土として層位を形成しているケースも認められた。Ⅶ区からⅥ区は丁度年越山と坂折山の鞍部の延長線上に当たり、自然地形は埋没谷を形成し、弥生時代、古墳時代の遺構は極端に少なくなる。しかしながら、Ⅵ区では縄文時代中期の半完形品の縄文土器が出土している。おそらく坂折山の北側裾部は後背湿地を形成していた可能性がある。台地上は高燥で湧水地はなく、遺跡北側の国分崖線でなければ湧水地はないと考えられる。しかしながら、独立丘陵の坂折山、年越山周辺には台地上でも唯一湧水地が存在したと考えられる。祈年遺跡の東南の東崎では本遺跡と同様の遺跡内容である東崎遺跡が展開していることから、台地上でやや崖線から離れた立地にありながらも、広範囲に遺跡が展開しているのはおそらく独立丘陵を取り巻く、湧水、湿地にあったと考えられる。

祈年遺跡の広がりは、予想以上に広範囲で国分崖線際まで弥生土器の表面採集が可能である。東方面では須恵器を数点採集している。東側部は更に回り込んで東崎遺跡が位置しており、西側部の小籠遺跡は長岡台地が沖積地に埋没する地形に位置している。

図 1-1　調査区配置図

6. 下層検出遺構（図 1-2 ～ 6）

表土掘削後、検出した遺構は下層、上層検出遺構として２つに分けて発掘調査を行った。しかしながら、上下層は明確に層位区分できたわけではなく、近世以外はほぼ同一層で検出している。しかしながら、煩雑に切り合い関係があり、溝跡、掘立柱建物跡、土坑、柱穴跡、竪穴状遺構は弥生時代、古墳時代の竪穴建物跡を切って構築されているところから、それらの遺構群を先に調査を行った。土坑、柱穴跡、竪穴状遺構については弥生時代、古墳時代に含まれるものも存在しているものの、上層遺構として取り扱った。航測図面、空撮でも２度に亘り実施しており、上下層として写真図版でも掲載した。全体図関係も上層、下層と分けて掲載してある。

表 1-1　遺構数一覧表

遺構種類	遺構数
竪穴建物跡 ST	42
掘立柱建物跡 SB	19
壺棺墓 SG	18
土坑 SK	106
竪穴状遺構 SX	51
溝状遺構 SD	118
柱穴跡 P	約 2500

下層検出の竪穴建物跡 (ST) は 42 軒で弥生時代後期 10 軒、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭 12 軒、古墳時代後期 20 軒である（図 1-2)。古墳時代後期の竪穴建物跡は造り付けの竈を持つもので、県下では最多である。

弥生時代後期後半は小期で２時期に分かれる。前半は ST25、ST39 の２軒検出しており、ST25 がⅧ区中央部（図 1-4)、ST39 は西側部（図 1-6）に位置している。後半は ST51、ST11、ST13、ST30 の大型の４軒である。調査区東寄りで ST51、ST11 の２軒が隣接している（図 1-3、4)。ST13 は中央よりやや東側に位置し、ST30 は中央よりやや西寄りである。

弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭と考えられるグループは大きく２つに分かれ、東側の一群と西側の一群に分けることができる。東側の一群は ST50、ST6、ST9、ST10、ST1、ST2、ST8、ST14 の８軒である（図 1-3)。西側の一群は ST35、ST49、ST45、ST41 の４軒である（図 1-5、6)。東西の両群共に方形、又は隅丸方形の竪穴建物跡である。土器編年からして、弥生時代か古墳時代かは判断に迷うところである。明らかに古墳時代に組み込まれるものもあり、また住居形態が方形であるところから画期を見いだすことができ、賛否が分かれるものの古墳時代に入れた方が妥当と考えられる。

古墳時代後期に該当する竈を有する時期のものも、東西の２群に大きく分けることができる。東側部は 10 軒、西側部では９軒を検出している。東側部の一群は中央寄りに分布するものが多い。切り合い関係は少なく、ST52、ST53 のみで竈の方向も東方向で、他のものは全て北方向に竈を有する。西側部の一群は密集度が高く、切り合い関係もあり、また隣接して構築されているものが多い。また竈方向も ST38、ST40 の様に北側と東側に２つ有するものもあり、短期間の内に構築されたと考えられる。

表 1-2　遺構名変更一覧表

旧遺構名	新遺構名	時期
ST15	SX41	古代
ST16	SX42	古代
ST21	SX43	古代
ST22	SX44	古代
ST27	SX45	古代
ST28	SX46	古代
ST29	SX47	古代
ST31	SX48・49	古代
SW1	SX50	近世
ST4	SX40	古代
ST36	SX51	古代

弥生時代は竪穴建物跡以外に壺棺群 (SG) を 18 基検出している（図 1-4、5)。ほぼ中央部に隣接して構築されており、集落内で墓域を形成している。壺棺は種々の形態のものが認められ、遺存状態の良い SG5 が典型的なものである。SG5 は土坑を掘削後に意図的に口縁部を打ち欠いた壺棺を斜位に埋納し、鉢で蓋をする。壺棺の時期は弥生時代後期後半でおそらく大型建物跡 ST11、ST13、ST30、ST51 の一群に伴う可能性が高い。

竪穴建物跡、壺棺以外に若干の土坑等 (SK) を下層では検出したに止

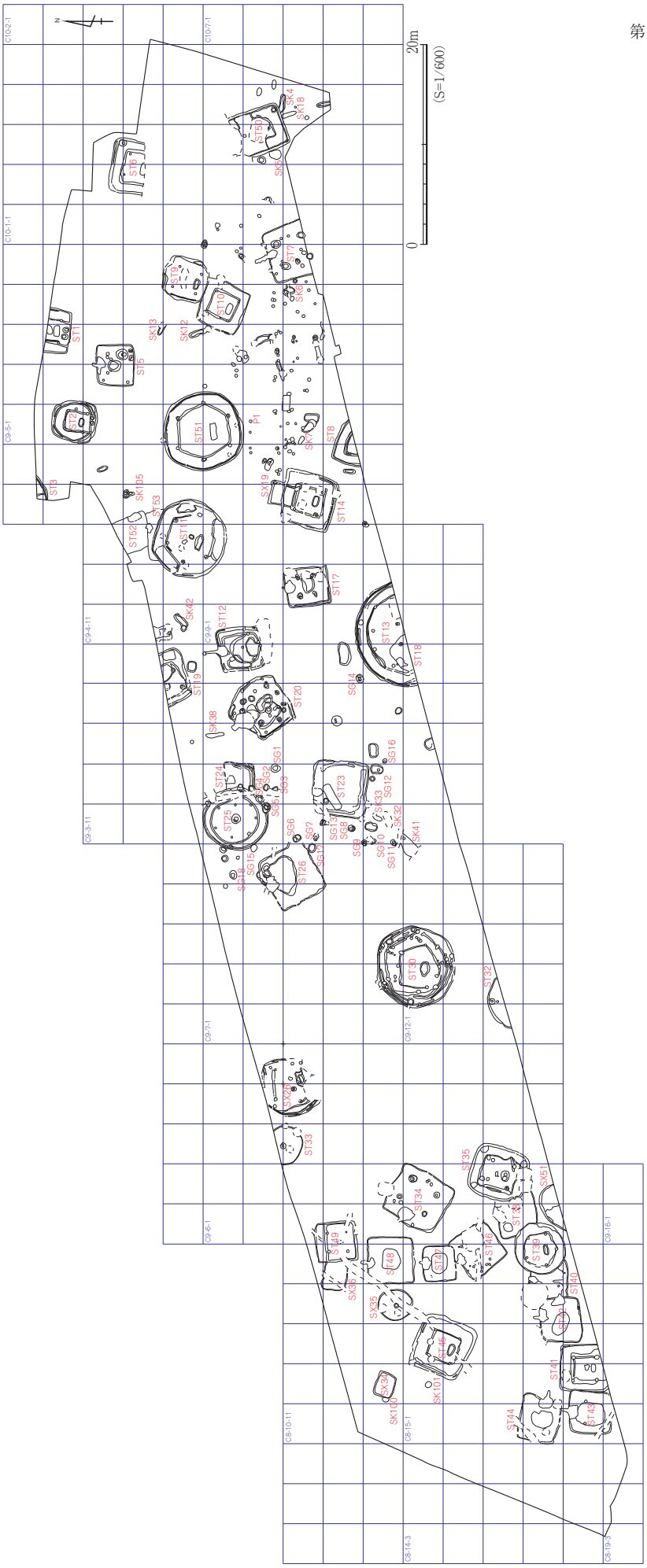


図 1-2　下層検出遺構全体図（弥生～古墳）

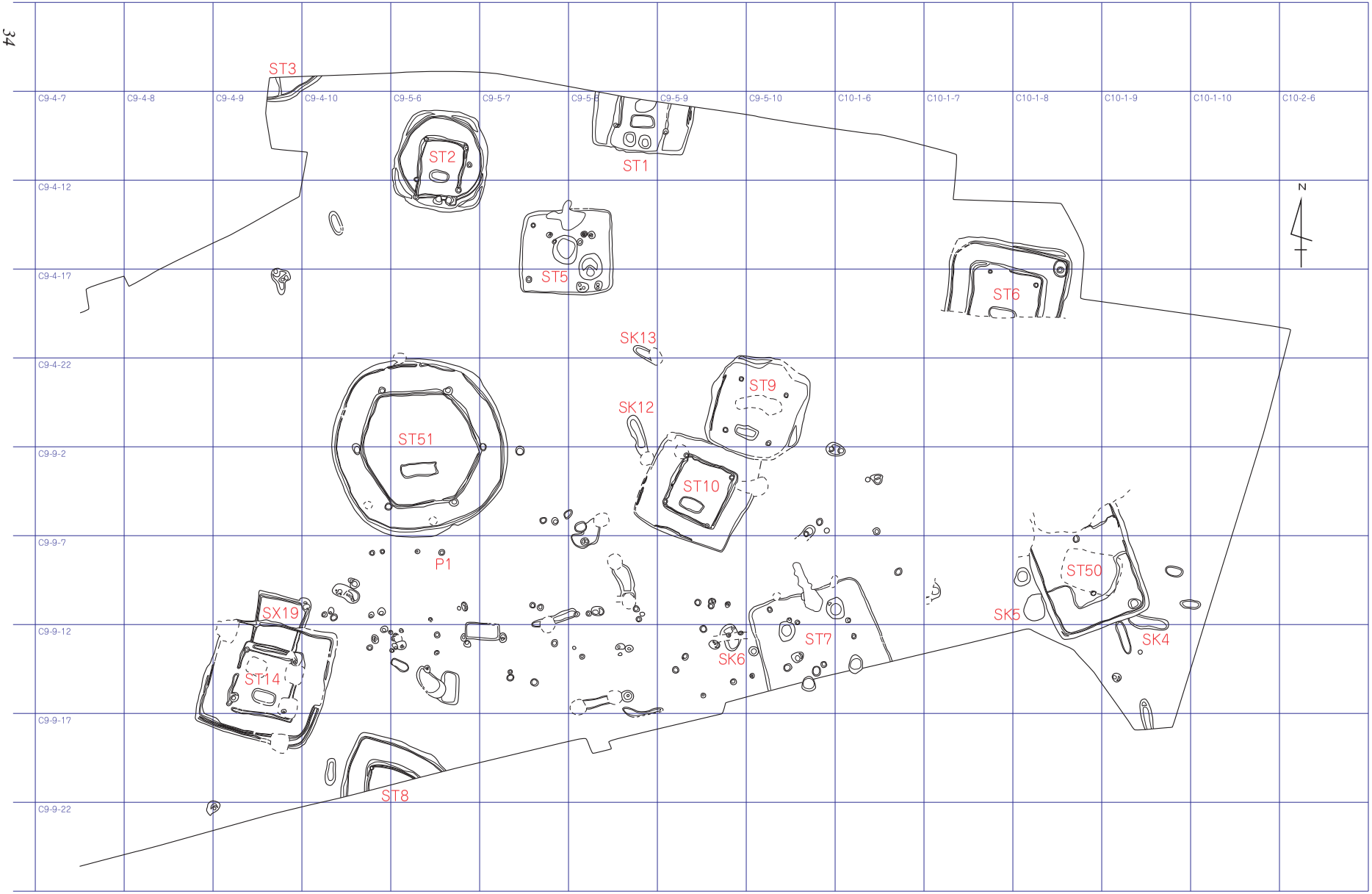


図 1-3　Ⅷ B 区東側下層遺構配置図（弥生～古墳）

まる。土坑群については 106 基検出しているものの、弥生時代のものとしては SK4、５、６等を上げることができる (図 1-3)。Ⅷ B 区の東側で小型の土坑を３基を検出しており、SK4 は凹線文土器が纏まって出土しており、本遺跡で最も古い段階のものである。今回の調査では該期の竪穴建物跡は検出していない。

7. 上層検出遺構（図 1-7 ～ 11）

上層で検出した遺構群は掘立柱建物跡 (SB)、竪穴状遺構 (SX)、土坑 (SK)、溝跡 (SD)、柱穴跡 (P) である (図 1-7)。

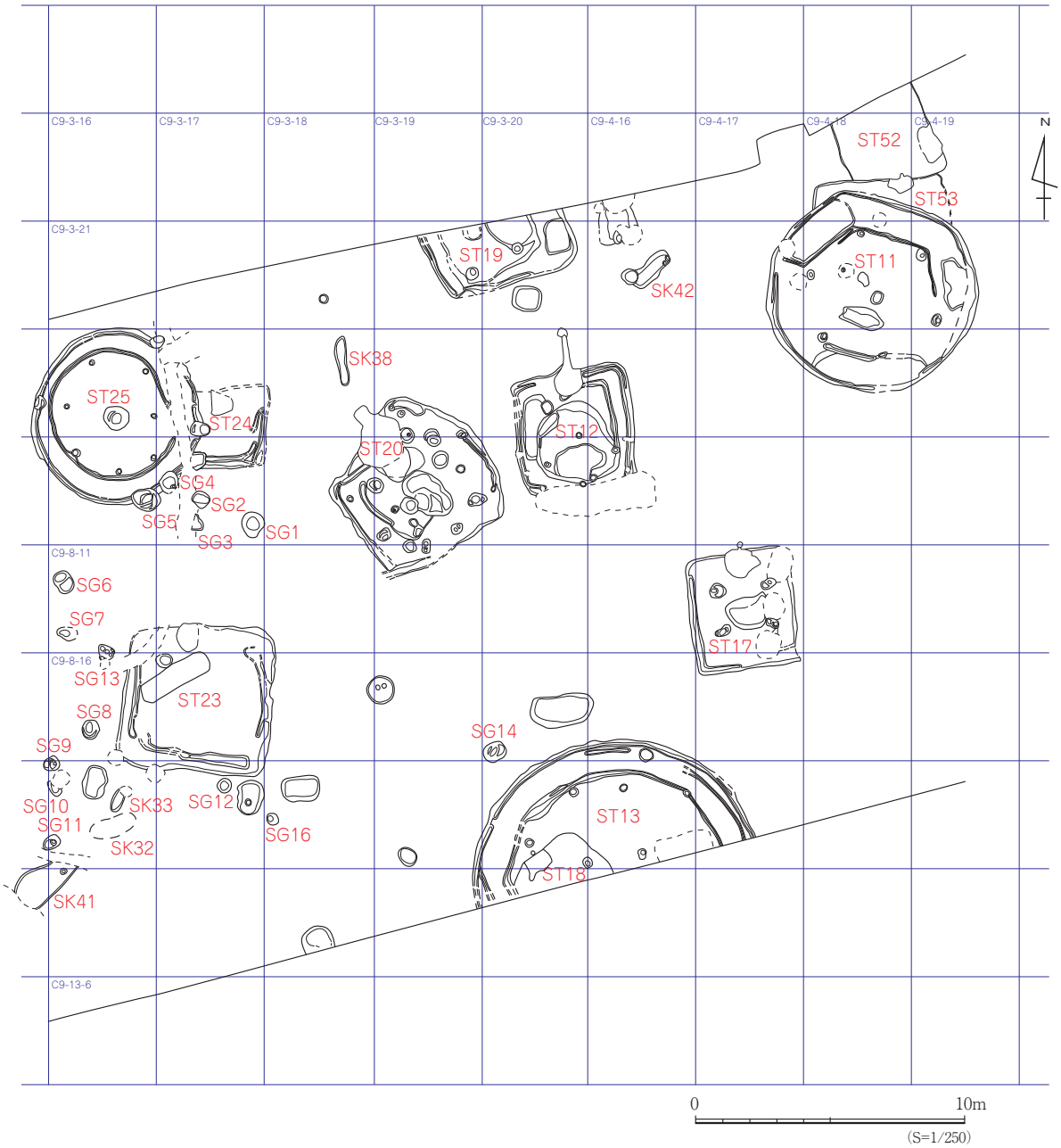


図 1-4　Ⅷ B 区西側下層遺構配置図（弥生～古墳）

掘立柱建物跡は 19 棟を検出している。６世紀後半、７世紀前半、近世のものに分かれるものの、大半が古墳後期から律令期にかけてのものである。本来は古墳時代後期の竪穴建物跡に伴うものもあったと考えられるが、調査の都合上、掘立柱建物跡は上層検出遺構群として調査を行った。６世紀から７世紀のものは調査区の東側部と西側部に大きく分かれる。東側部のものは３間×４間のものが多く (図 1-8)、西側部のものは２間×３間のものが多い (図 1-11)。最大のものは SB5 で柱穴の掘り方は方形である (図 1-8)。

近世の屋敷跡の一部と考えられるものは SB6、SB7、SB20 でⅧ B 区の東側で屋敷溝内で検出している（図 1-8)。SD3、SD17 の北限の溝跡、西限の SD8、SD9 の溝跡が大きく SB6、SB7、SB20

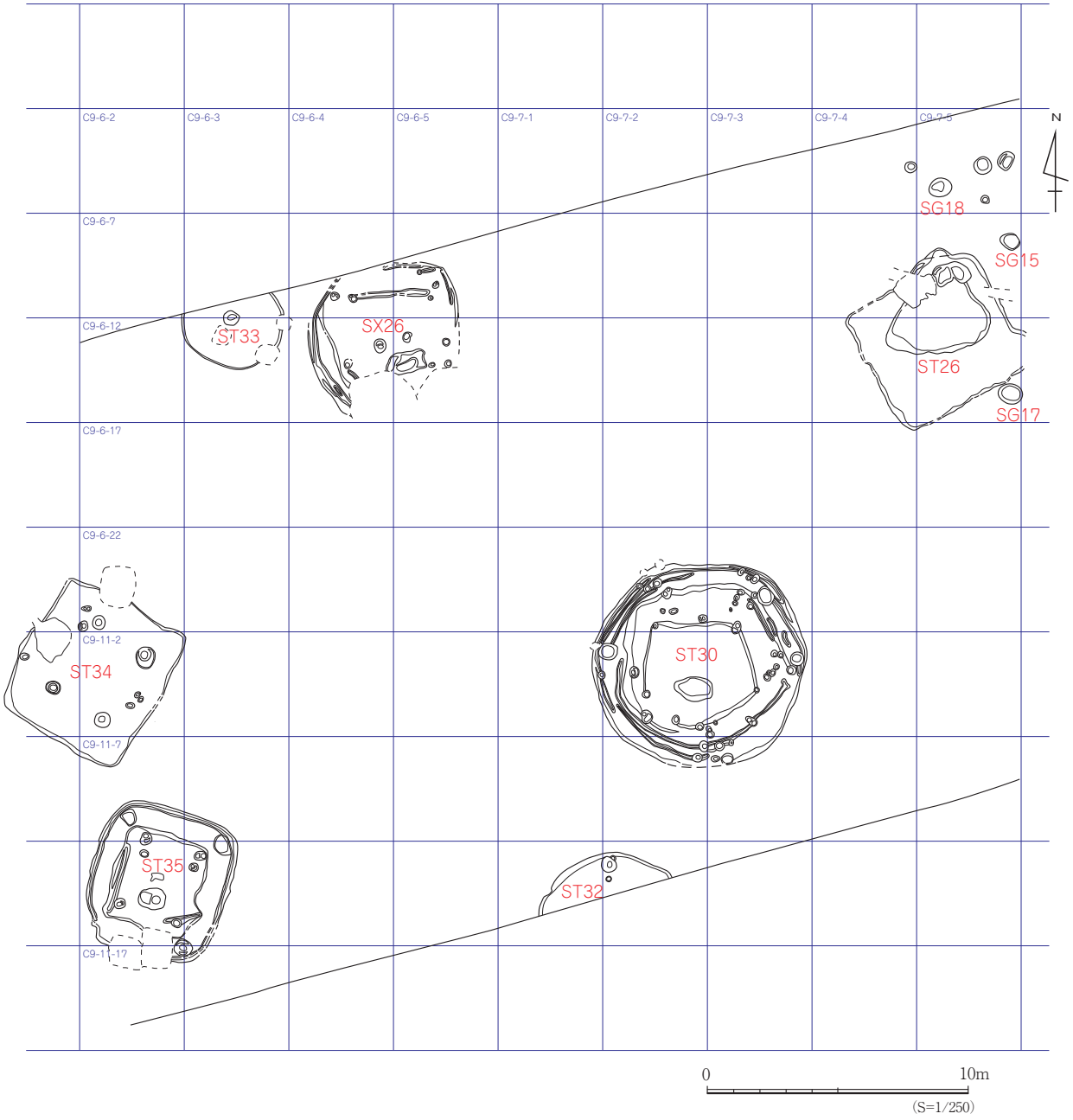


図 1-5　Ⅷ A 区東側下層遺構配置図（弥生～古墳）

を囲う。近世に伴うSXは2種類あり、SX1、SX2、SX4の室跡と考えられる竪穴状遺構とSX5、SX6他のハンダ土坑である。

土坑群は古代のものとしては、SK9、36、80、81、98、106等を上げることができる。SK98、106の9世紀後半から10世紀代のもので土師器坏の底部切り離しは回転ヘラ切りで近傍の小籠遺跡でも同様の土坑を検出している。SK106(図1-9)については方形で階段状テラスが設けられたもので、SX33と同様のもので特徴的な遺構である。SK80、81は古代末に含まれるものである。

SXは近世以外のものを30基近く検出している。小竪穴状遺構で当初竪穴建物跡と想定して調査を進めたものの、竪穴住居跡に伴う炉跡、柱穴等の付帯施設を検出できず、平面形もいびつなものが多いことから、性格不明竪穴状遺構とした(図1-10他)。特にSX22からSX32は一群を形成しており、大溝状に幾つものSXが切り合って構築されている。また他にも幾つか構築されており、特徴的な形態のものであるにも関わらず、その性格、機能は不明である。時期的には須恵器等の出

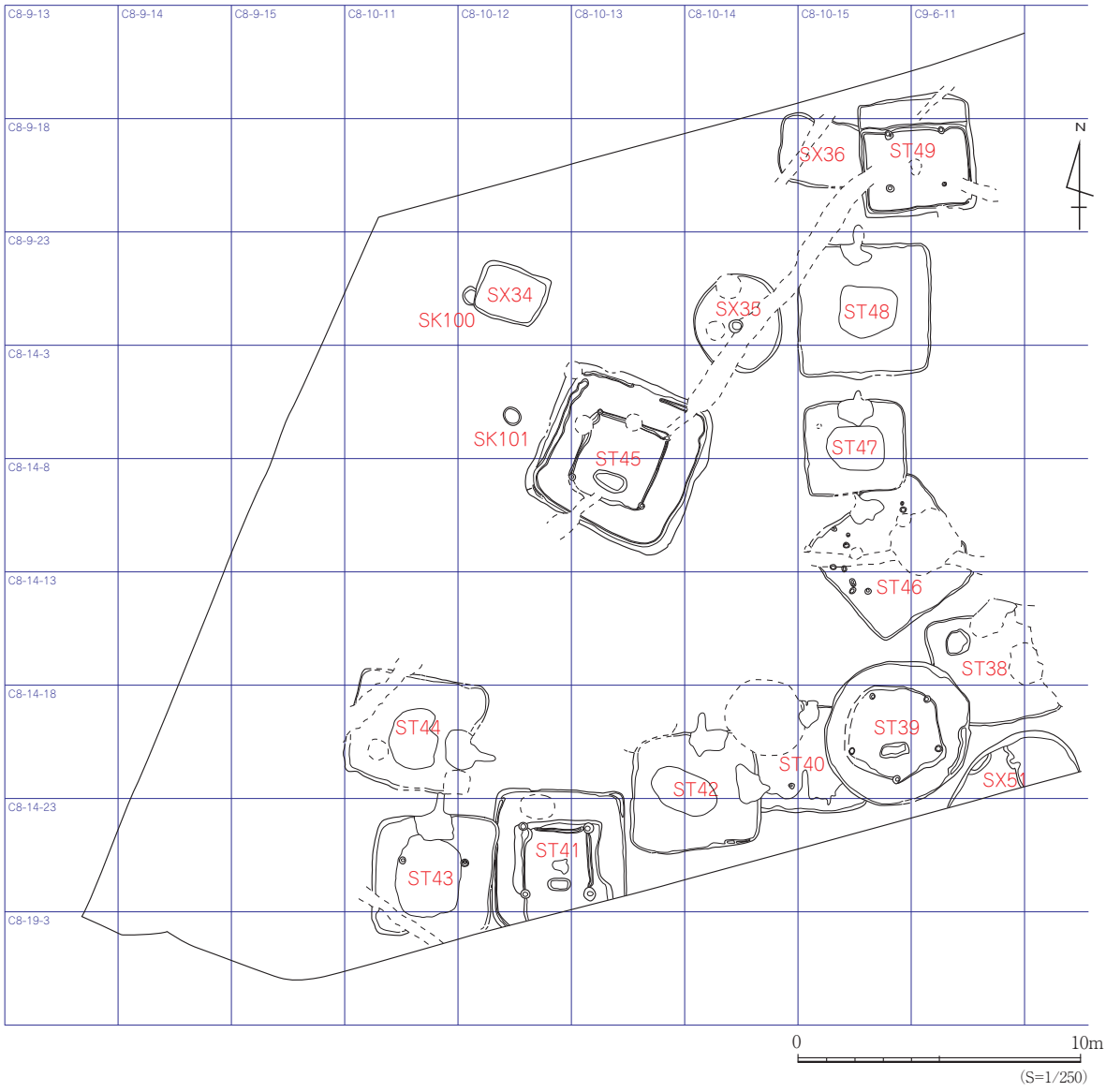


図1-6　Ⅷ A区西側下層遺構配置図（弥生～古墳）

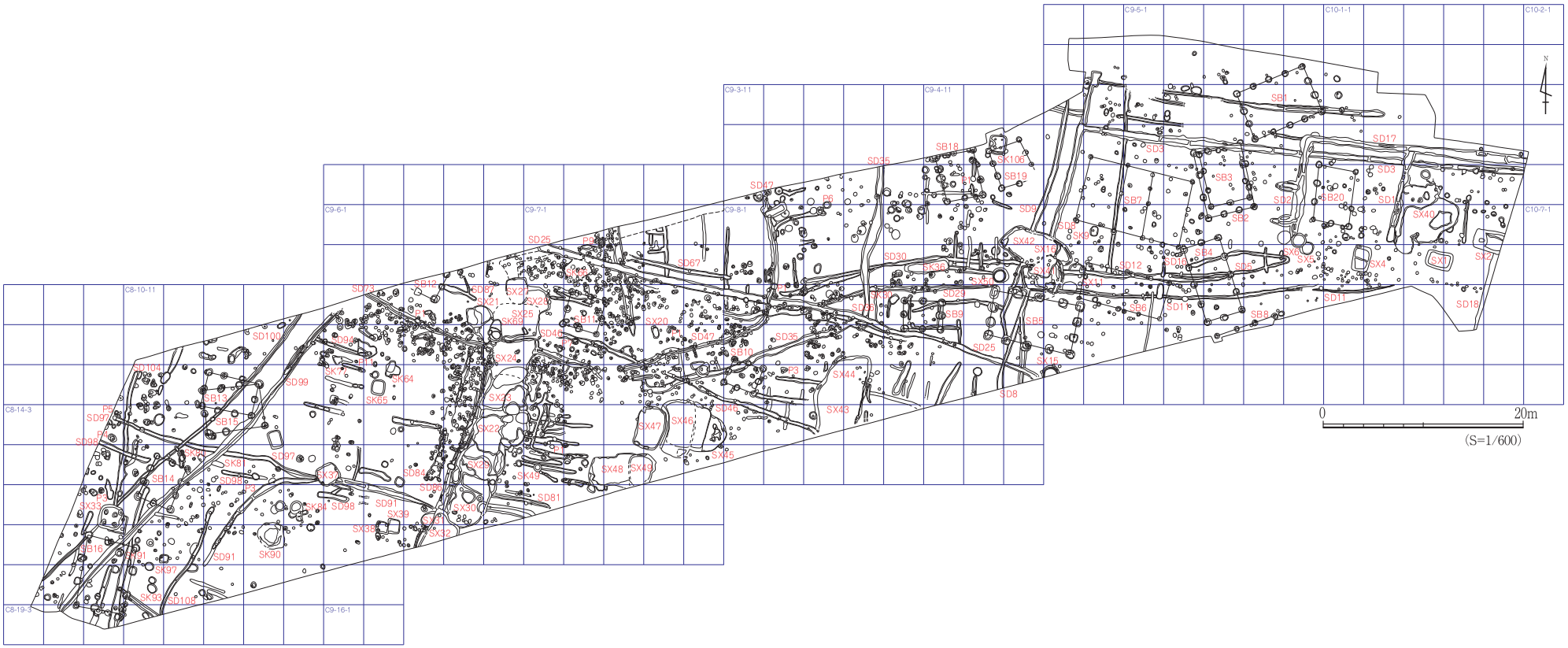


図 1-7　上層検出遺構全体図（古代～近世）

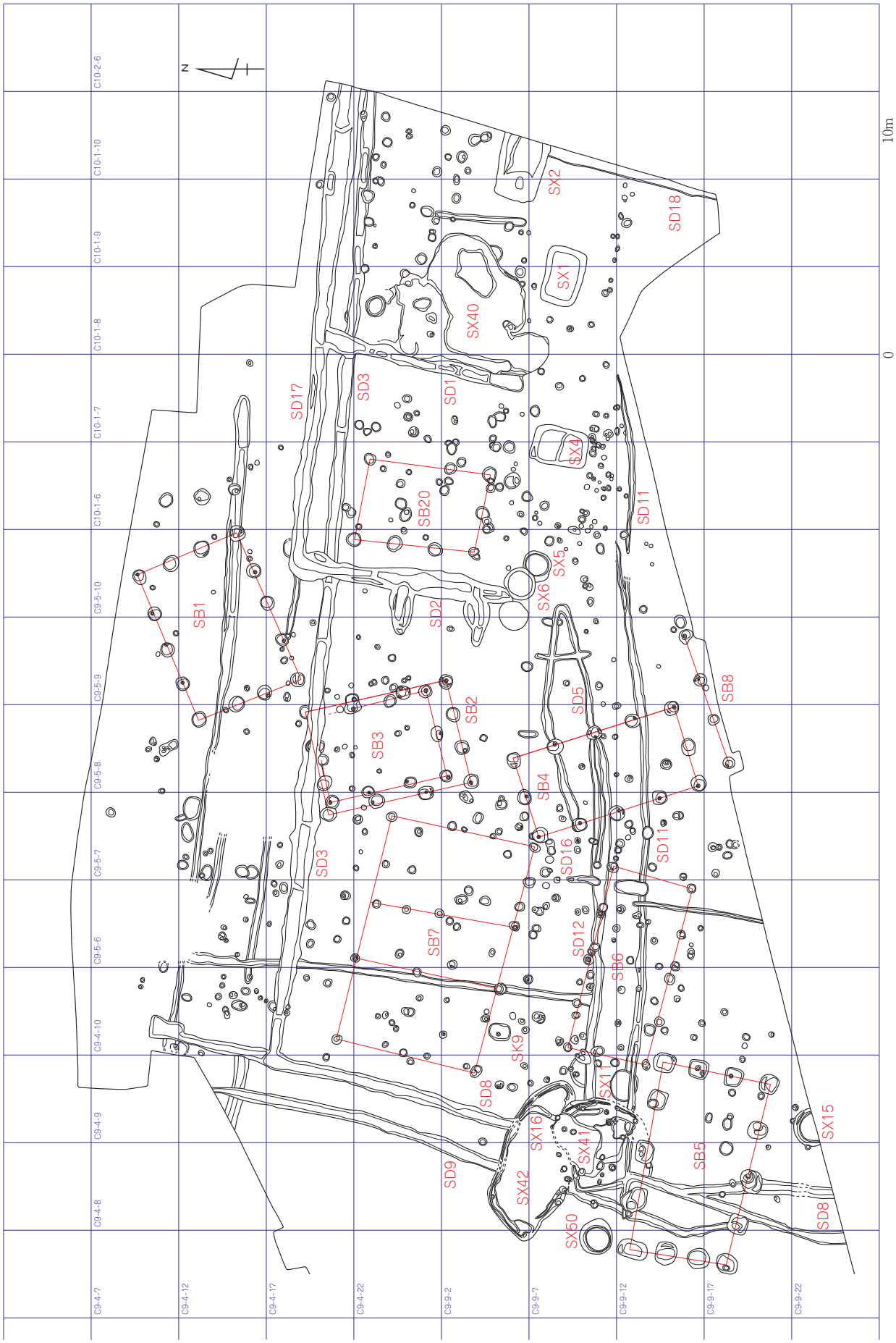


図 1-8　Ⅷ B 区東側上層遺構配置図（古代～近世）

土例からすると古墳時代後期から律令期に跨がるもので、こうした類例は高知県では数少なく、ほとんど注目されることがなかった。

溝状遺構は調査区全域で検出している。調査区東側のものは近世の屋敷溝である (図 1-8)。その他の溝跡についてはやや短く数条のものが平行しているものについては畝、長いものについては坪境の可能性がある。それ以外に２条の溝跡が平行するものについては道の可能性が強い。例として SD11・12(図 1-8)、SD99・100(図 1-11) 等を上げることができる。時期的には SD99・100 が SK80 の 11 世紀代の土坑を切っているところから、古代末から中世の可能性がある。

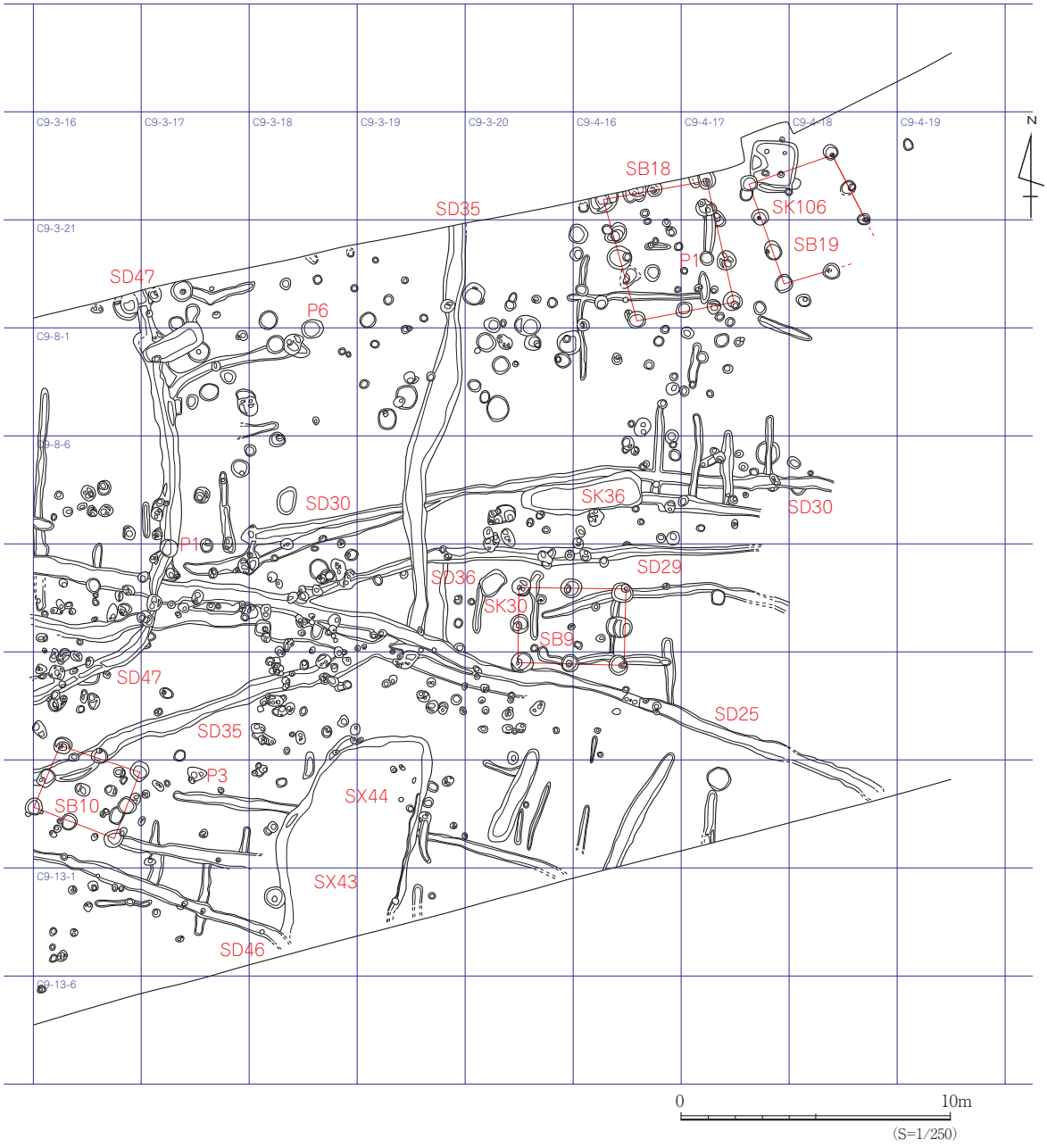


図 1-9　Ⅷ B 区西側上層遺構配置図（古代～近世）

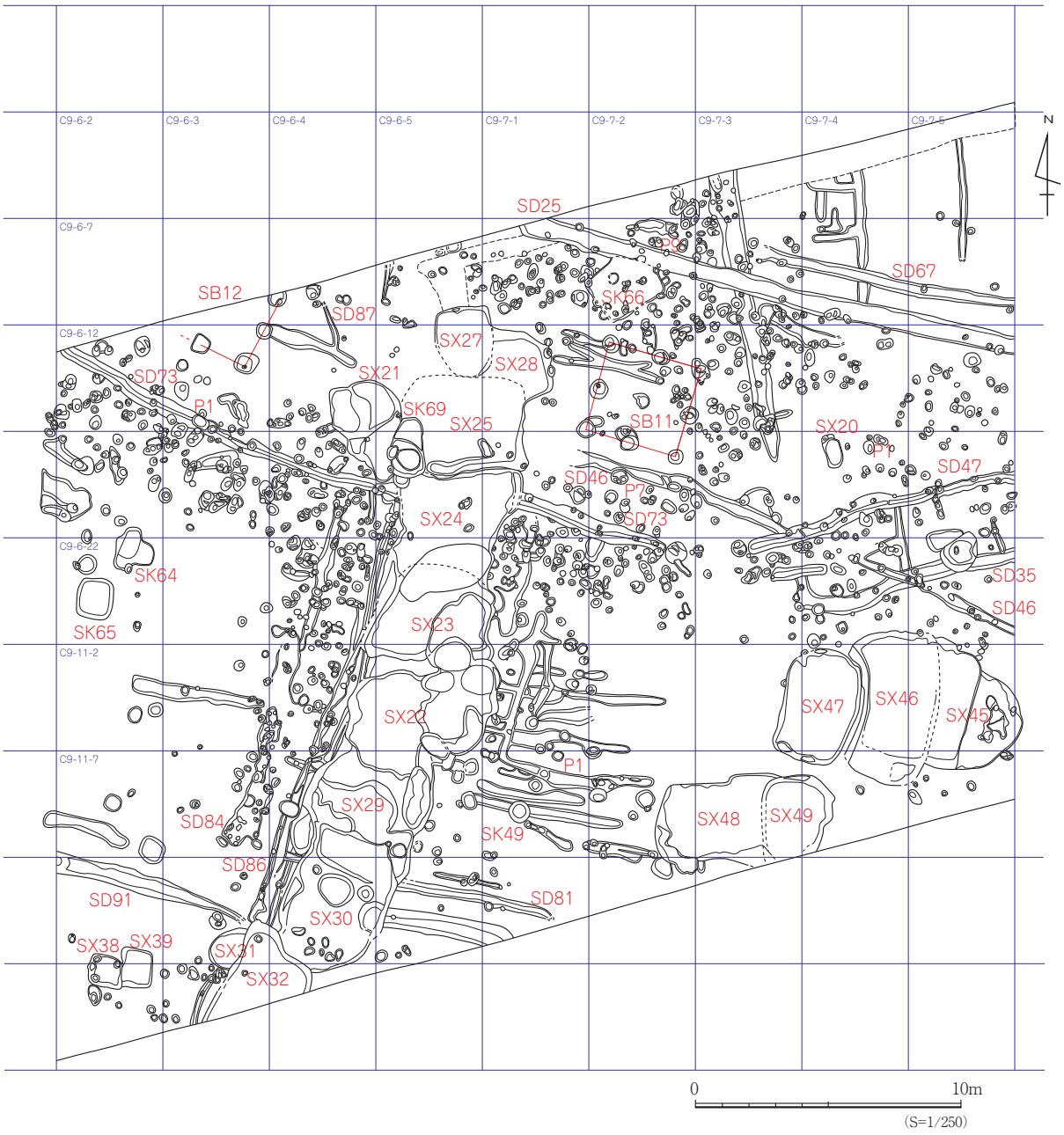


図 1-10　Ⅷ A 区東側上層遺構配置図（古代～近世）

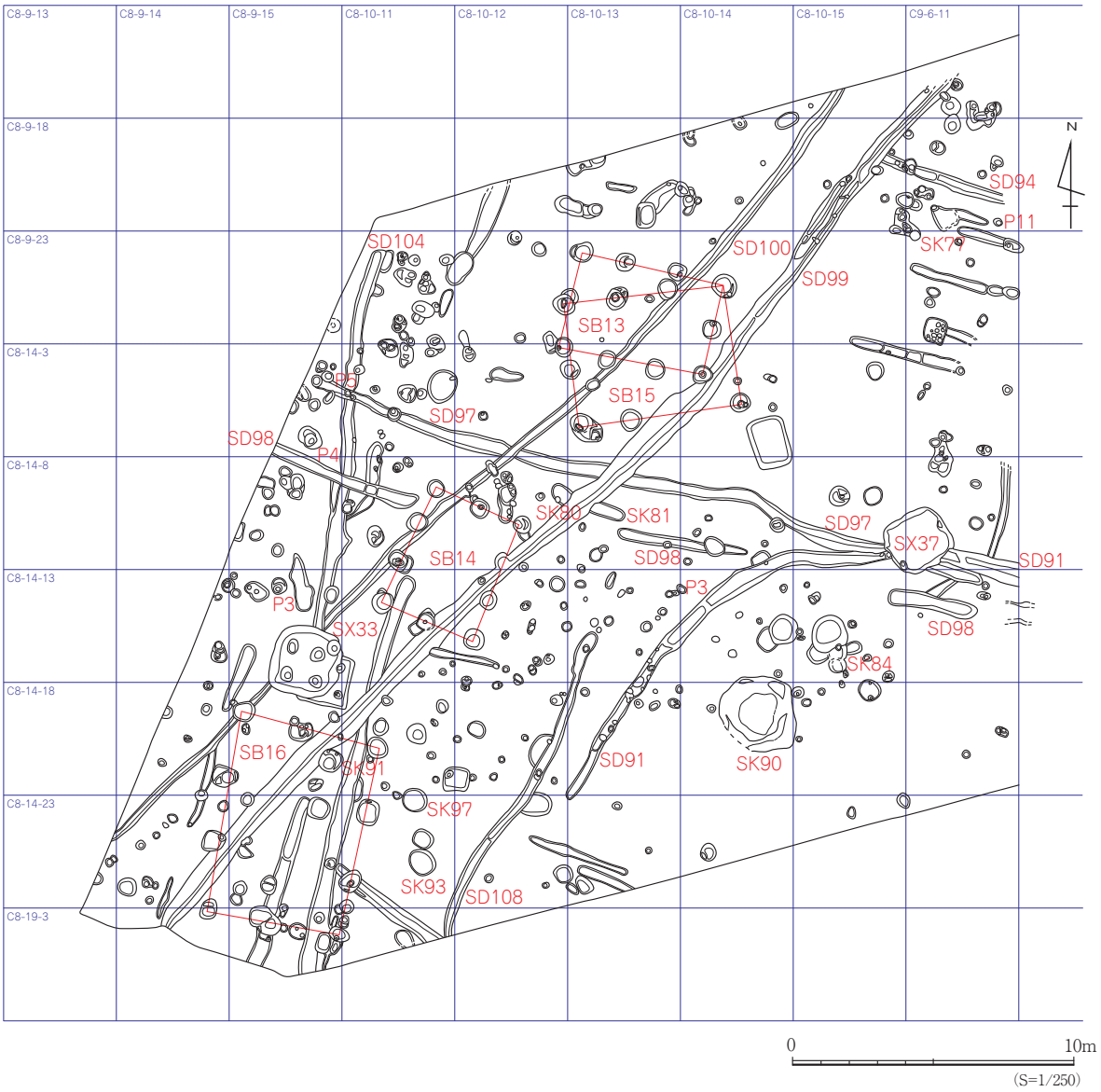


図 1-11　Ⅷ A 区西側上層遺構配置図（古代～近世）

第２節　竪穴建物跡

Ⅷ区では竪穴建物跡 (ST) は総数で 42 軒である。内訳は弥生時代後期後半と考えられるものが 10 軒、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭のものが 12 軒、古墳時代後期が 20 軒である。

弥生時代後期後半に含まれるものは大型のものが比較的多く、最大規模のものは ST13 で径 10.5m を測る大型竪穴建物跡を検出している。他に ST11、30、51 の３軒についても７ｍから８ｍを越すものである。平面形も多角形で六角形を呈する。この４軒については極めて規格性の強い竪穴建物跡である。Ⅶ区でも同様のものを検出しており、該期に六角形を呈する竪穴建物跡が一時期を占めているようである。

弥生末から古墳初頭に含まれる竪穴建物跡は一辺４ｍから５ｍの方形または長方形の平面形を呈し、ベッド状遺構を有し、主柱穴は４本を基本とする。Ⅷ区の調査区内では東側部と西側部に大きく２群に分かれ、中央部は空白地帯となっている。この時期のものについては、ほとんど時期差が認められず、また後に継続しないという時期的な特徴がある。

古墳時代後期の竪穴建物跡は造り付けの竈を持つものである。竈の位置は北竈が最も多く、次いで東竈、北西竈、北竈と東竈の２基を有するものも僅かに認められる。切り合い関係からして北竈より東竈の竪穴建物跡が新しい。規模は４ｍから５ｍの方形のものが多く、深さは極めて浅く確認面から 10㎝足らずのものが多い。また主柱穴､ベッド状遺構､周溝等は持たないのが特徴である。分布は西側で９軒が纏まって検出している。また中央部より東寄りにもある程度の距離を保ち、11 軒を検出した。ST7 から東では該期の建物跡は検出していない。竈付きの竪穴建物跡は高知県下では最も多い。これ以降は竪穴建物跡は消滅する。

なお、ST4、15、16、21、22、27、28、29、31、36、37 については SX に変更したもの、欠番にしたものである。

尚、弥生土器の編年は出原恵三 (「土佐地域」『弥生土器の様式と編年四国編』木耳社、2000) に依る。

表 2-1　竪穴建物跡一覧表

ST 番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模 (m)	規模 (m)	深さ (m)	付帯施設	切り合い
ST1	Ⅷ BE	C9-5-8 他	弥生末～古墳初	方形？	N-10° -E	4.4	(2.2)	0.6	ベッド	
ST2	Ⅷ BE	C9-5-6 他	弥生後期	多角形	N-12° -E	4.5	4.1	0.4	ベッド	SD15・21 切られる
ST3	Ⅷ BE	C9-4-4 他	弥生後期？	円形？		(1.9)		0.37		
ST5	Ⅷ BE	C9-5-12 他	古墳後期	方形	N-0°	4.1	3.8	0.22	北竈	SD19・21 切られる
ST6	Ⅷ BE	C10-1-17 他	弥生末～古墳初	隅丸方形	N-12° -E	(5.2)	(3.4)	0.3	ベッド	SD1・3・17・21 切られる
ST7	Ⅷ BE	C9-10-15 他	古墳後期	方形？	N-21° -W	5.6	(3.4)	0.12	北竈	SB17、SD11 切られる
ST8	Ⅷ BE	C9-9-20 他	弥生末～古墳初	方形？	N-17° -E	(4.1)	(1.9)	0.43	ベッド	SD24 切られる
ST9	Ⅷ BE	C9-5-25 他	弥生末～古墳初	隅丸方形	N-22-° -E	4.6	(4.3)	0.28		ST10 切る、SK8、SD2 切られる
ST10	Ⅷ BE	C9-10-4 他	弥生末～古墳初	方形	N-22° -E	4.7	(4.4)	0.34	ベッド	ST9、SB2・3、SX7、SK3、SD2・7 切られる
ST11	Ⅷ BW	C9-4-23 他	弥生後期	多角形	N-20° -E	7.4	7.2	0.43	ベッド	ST53、SB19、SD8・9 切られる
ST12	Ⅷ BW	C9-8-5 他	古墳後期	方形	N-8° -W	4.4	(4.3)	0.3	北竈	SK36、SD30・33 切られる
ST13	Ⅷ BW	C9-8-25 他	弥生後期	多角形	N-10° -W？	10.5	(4.7)	0.31	ベッド	ST18、SD27・49・58 ～ 63 切られる
ST14	Ⅷ BE	C9-9-14 他	弥生末～古墳初	隅丸方形	N-18° -E	5.5	(5.4)	0.35	ベッド	SB5・6、SX19、41、SK26、SD11 切られる
ST17	Ⅷ BW	C9-9-12 他	古墳後期	方形	N-9° -W	4.3	(4.2)	0.3	北竈	SB5、SD9・28・29・64 切られる
ST18	Ⅷ BW	C9-8-25 他	古墳後期	方形？	N-61° -W	(2.4)	(1.9)	0.08	北西竈	ST13 切る、SD27・60・61 切られる
ST19	Ⅷ BW	C9-3-25 他	古墳後期	隅丸方形？	N-15° -W	5.3	(2.2)	0.27	ベッド	SD35 切られる
ST20	Ⅷ BW	C9-8-9 他	古墳後期	長方形	N-37° -W	5.7	4.6	0.17	北竈	SD29・30・35 切られる
ST23	Ⅷ BW	C9-8-17 他	古墳後期	隅丸方形	N-8° -E	5.5	5.6	0.18	北竈	SB10、SK47、SD26・35・47 切られる

ST 番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模 (m)	規模 (m)	深さ (m)	付帯施設	切り合い
ST24	Ⅷ BW	C9-8-2 他	古墳後期	隅丸方形？	N-4° -E	(3.6)	(3.1)	0.16	北竈	SD44・45・47 切られる
ST25	Ⅷ BW	C9-8-1 他	弥生後期	円形	N-7° -E	6.6		0.35		ST24、SG4・5、SK44、SD47 切られる
ST26	Ⅷ AE	C9-7-14 他	古墳後期	方形	N-27° -W	5.6	5.2	0.07	北竈	SD25・67・70・71 切られる
ST30	Ⅷ AE	C9-7-22 他	弥生後期	多角形	N-5° -E	8.2	7.7	0.5	ベッド	SX47・48、SK59、SD90 切られる
ST32	Ⅷ AE	C9-12-11 他	弥生後期？	円形？	N-27° -W?	(5.1)	(1.3)	(0.4)	ベッド	SD81 切られる
ST33	Ⅷ AE	C9-6-13 他	弥生後期？	円形？	N-9° -W?	(3.9)		0.16		SB12、SK73、SD88 切られる
ST34	Ⅷ AE	C9-6-22 他	古墳後期	方形	N-57° -W	5.4	5.8	0.08	北西竈	SK65、SD82・96・102 切られる
ST35	Ⅷ AE	C9-11-12 他	古墳初	隅丸方形	N-12° -E	5.5	5.2	0.36	ベッド	ST38、SX38・39、SK61、SD83・84・97・113 切られる
ST38	Ⅷ AW	C9-11-11 他	古墳後期	隅丸方形	N-12° -W	3.9	(3.8)	0.06	北竈、東竈	ST35・39 切る、SX38、SD98 切られる
ST39	Ⅷ AW	C8-15-20 他	弥生後期	円形	N-9° -W	5.4		0.23		ST38・40、SK96 切られる
ST40	Ⅷ AW	C8-15-19 他	古墳後期	方形	N-2° -E	(4.0)	3.8	0.05	北竈	ST39 切る、ST42、SK90 切られる
ST41	Ⅷ AW	C8-15-22 他	弥生末～古墳初	隅丸方形	N-0°	4.7	(4.8)	0.43	ベッド	ST43、SK103、SD91・108・111・112 切られる
ST42	Ⅷ AW	C8-15-18 他	古墳後期	隅丸長方形	N-0°	4.6	4.2	0.17	北竈、東竈	ST40, SK104 切る、SK90 切られる
ST43	Ⅷ AW	C8-15-21 他	古墳後期	隅丸方形	N-2° -E	4.3	4.2	0.19	北竈	ST41 切る、ST44、SK92・93、SD108・110 切られる
ST44	Ⅷ AW	C8-15-16 他	古墳後期	方形	S-77° -E	4.1	4.1	0.14	東竈	ST43 切る、SK97、SD99・106 切られる
ST45	Ⅷ AW	C8-15-3 他	弥生末～古墳初	隅丸方形	N-23° -E	5.7	5.6	0.54	ベッド	SB13・15、SK80・81、SD97 ～ 100 切られる
ST46	Ⅷ AW	C8-15-10 他	古墳後期	方形	N-33° -W	4.7	4.4	0.11	北竈	ST47、SX37、SD91・97・98 切られる
ST47	Ⅷ AW	C8-15-5 他	古墳後期	方形	N-3° -W	3.6	3.3	0.08	北竈	ST46 切る
ST48	Ⅷ AW	C8-10-25 他	古墳後期	方形	N-0°	4.6	4.7	0.15	北竈	SD82・96・99 切られる
ST49	Ⅷ AW	C8-10-20 他	弥生末～古墳初	方形	N-5° -W	4.0	3.9	0.45	ベッド	SX36 切る、SK77・98、SD94・99 切られる
ST50	Ⅷ BE	C10-6-8 他	弥生末～古墳初	方形	N-22° -W	(4.6)	4.7	0.52	ベッド	SX1・40 切られる
ST51	Ⅷ BE	C9-5-21 他	弥生後期	多角形	N-7° -W	8.2		0.53	ベッド	SB7、SD15 切られる
ST52	Ⅷ BW	C9-4-18 他	古墳後期	長方形	N-68° -E	3.5	(3.2)	0.06	東竈	ST53、SB19 切られる
ST53	Ⅷ BW	C9-4-18 他	古墳後期	長方形	N-0°	5.4	3.6	0.13	北竈	ST11・52 切る、SB19、SD9 切られる

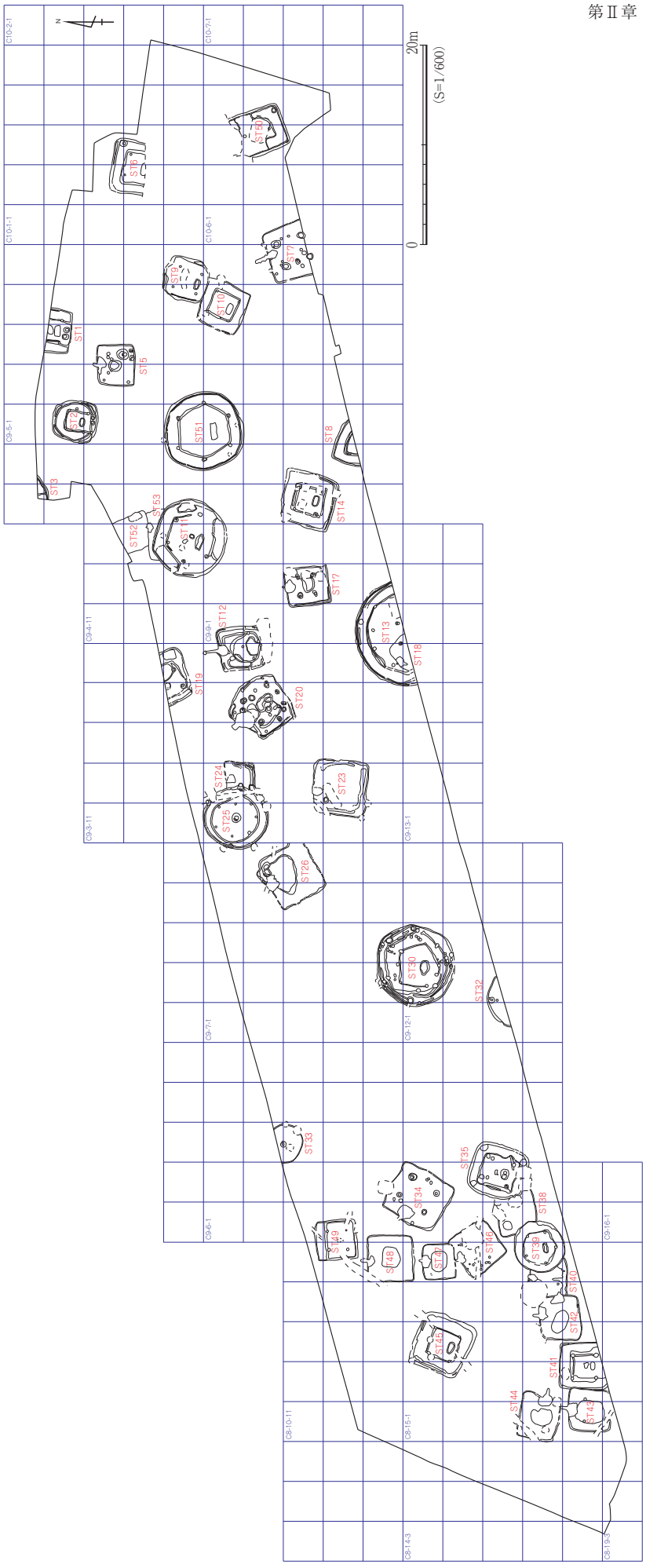


図 2-1　竪穴建物跡全体配置図

ST1(図 2-2 ～ 4)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-8 他　**切り合い関係**；－

時期；弥生末～古墳初　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-10°-E　**規模**；4.4 × (2.2)m ×深さ 0.6m

覆土；上層は暗褐色土主体、下層は黄褐色土がブロック状に混じる、中央部では焼土が少量混じる

柱穴；数 (2)　主柱穴数 2　主柱穴 P1(径 18 ×深さ 30cm)、P2(径 22 ×深さ 30cm)

炉跡；形状長楕円形　規模 110 × 60cm×深さ 10cm　覆土黒色土

ベッド；2 両脇　削り出し　ベッド 1 幅 90 ×高さ 10cm、ベッド 2 幅 100 ×高さ 10cm

周溝；2 条　東壁際　ベッド 1 際　幅 15 ～ 20 ×深さ 5cm　**その他付帯施設**；建物跡内土坑 2 基　SK1 皿状、径 50 ×深さ 22cm、SK2 皿状、壺底部№ 9、径 56 ×深さ 22cm

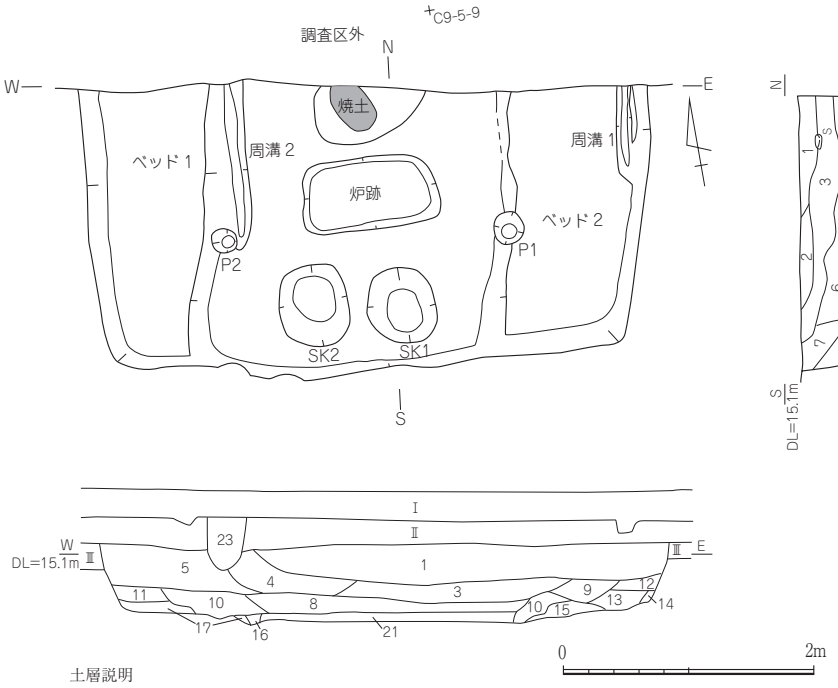
出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、搬入土器

所見；Ⅷ BE 区の北側に位置し、半分程を検出し、調査区外へと広がる。グリッドは C9-5-8 と C9-5-9 グリッドに跨がる。ST1 とほぼ同時期と考えられる住居跡 ST2、６、８、９、10、14、50 がⅧ B 区に構築されている。ST2 が 6 m 程西に位置している。

ST1 の遺構検出面は基本土層Ⅲ層で建物跡床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は北側部分が調査区外へと広がるものの方形を呈すると考えられる。規模は南辺が長さ 4.1m、深さ 0.5 から 0.6m を測る。主軸方位は N-10°-E で若干東に振る。

覆土は上層に暗褐色土が被覆する。中層は褐色土、下層は黄褐色土ブロックが混じる。

炉跡は長楕円形でおそらくやや南寄りに構築されているものと考えられる。炉跡の北側にも径 40 cm程の範囲に焼土が広がる。主柱穴は 2 本検出しているが本来は 4 本柱と考えられる。検出した主柱穴は径 20cm 前後で深さ 30cm を測るしっかりしたものである。ベッドは東西の両壁のみに残



土層説明

Ⅰ	褐灰色土　耕作土	11	黒褐色土
Ⅱ	黒褐色土	12	暗褐色土　黄褐色中ブロック含む
Ⅲ	黒褐色土	13	暗褐色土
1	暗褐色土　遺物含む	14	暗褐色土
2	暗褐色土　遺物含む	15	暗褐色土　黄褐色土含む
3	暗褐色土　黄褐色粒・黒色ブロック含む	16	暗褐色土
4	暗褐色土	17	暗褐色土　黄褐色土含む
5	暗褐色土	18	黒褐色土　黄褐色粒・黒色粒含む
6	黒褐色土　黒色土・黄褐色粒含む	19	黒褐色土
7	暗褐色土　黄褐色粒含む	20	黒色土
8	暗褐色土	21	黒褐色土　黄褐色土混入
9	暗褐色土	22	黒色土　炉跡
10	暗褐色土　黄褐色小ブロック含む	23	黒褐色土

図 2-2　ST1 遺構図

り、南壁では検出できなかった。幅１ｍ弱の削り出しベッドで高さは10cm足らずである。他に建物跡内土坑を２基検出している。南壁際に径50cm強のものを２基並んで検出した。SK2からは甕等が出土している。

遺物出土状況は覆土の中層に大型礫、炉跡近くの焼土の上層で甕等の土器がやや纏まって出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-4 №１～ 11)

№１は弥生土器複合口縁壺である。口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。口径は 14.6cmを測る。肩部は張り、胴部は丸味を有する。整形は口縁、頸部外面がハケ、胴部はタタキ、ハケである。内面は指ナデ、ハケ、指頭を施す。胎土は小礫を多量に含む。２は広口壺で口縁部が大きく開く。口径は 31.2cmで、口縁端部を拡張する。内外面共にナデ整形である。胎土に白色鉱物粒と金雲母を微量含む。搬入品と考えられる。

３から６は甕である。３は口径 13.8cmのやや小型の甕である。口縁部は緩やかに外反するタタキ出し口縁である。頸部は僅かにくびれ、肩部はなだらかで長胴である。底部はやや丸底気味の小さな平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はナデである。器肉は薄い。胎土に小礫を含む。４も同様の甕で口径は 17.6cmを測る中型の甕である。口縁部は外反し、肩部はなだらかである。整形は口縁部内外がハケ、胴部がタタキ、内面はハケ、ナデである。外面上半に煤が付着する。５は口径 12.4cmの小型の甕である。口縁部が「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。整形は口縁部外面がナデ、胴部がタタキ、内面はハケ整形である。６は口径 10.6cmの小型の甕である。口縁部は外傾し、肩部は張らない。最大径は口縁部にある。整形は外面がヘラミガキ、内面が粗いハケである。

７、８は鉢である。７は口径 12.6cmの中型である。底部は丸底気味で体部は緩やかに開く。整形は外面がタタキ、内面は落剥しているものの、部分的にハケ調整が見られる。８は口径 9.5cmの小型の鉢である。小さな平底で、体部やや直立気味である。整形は外面上半は部分的に指頭、ナデ、外面下半、内面はハケ調整である。

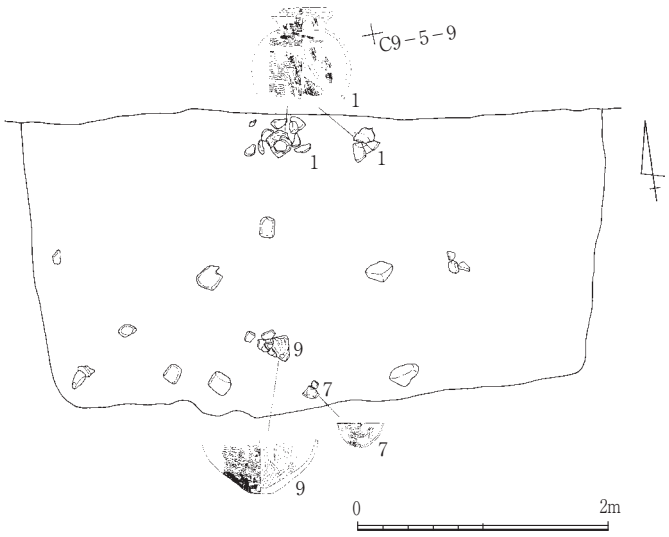


図 2-3　ST1 遺物出土状況図

９、10 は底部破片である。９は竪穴建物跡内土坑２(SK2) 出土の壺の底部破片と考えられる。平底で体部は大きく開く。整形は外面胴部、底部はタタキ、ハケ、内面は指ナデである。10 は鉢の可能性のある底部破片である。やや小振りの平底である。体部は開く。整形は外面がタタキ､内面にはヘラケズリ痕を残す。

11 は砂岩製の叩石である｡長さ 8.4cm、幅 6.1cm、重さ 343g の楕円礫で一端部に敲打痕が認められる。表面にも僅かに擦痕が残る。

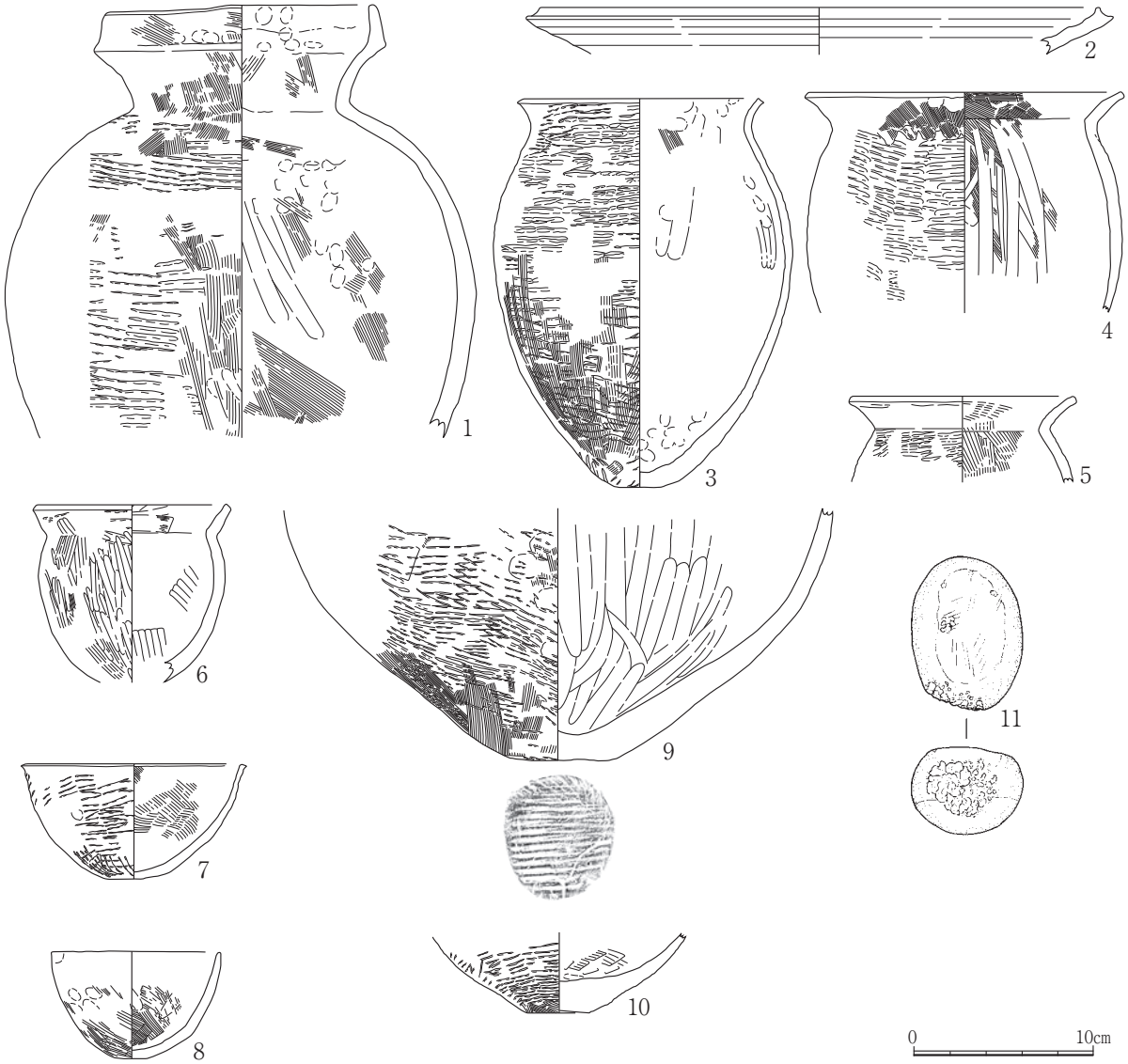


図 2-4　ST1 出土遺物実測図

ST2(図 2-5 ～ 7)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド** C9-5-6 他　**切り合い関係**；SD15・21 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；多角形　**主軸方向**；N-12° -E

規模；4.5 × 4.1m ×深さ 0.4m　**覆土**；上層黒褐色土、中層暗褐色土

柱穴；数 6　主柱穴数 4　主柱穴 P1 ～ 4

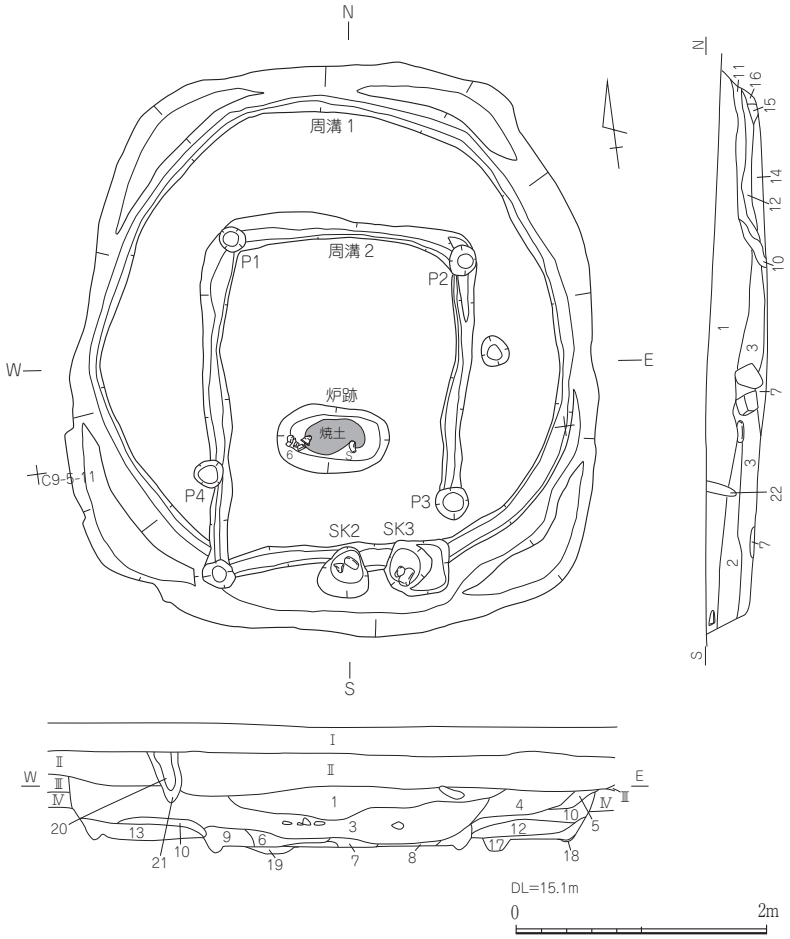
炉跡；形状長楕円形　規模 92 × 55cm×深さ 9cm　覆土焼土

ベッド；全周、造り付け　**周溝**；2 条　**その他付帯施設**；建物跡内土坑 2 基

出土遺物；弥生土器片、甕、壺、鉢、搬入土器、土製支脚、石包丁

所見；Ⅷ BE 区の北側に位置し、グリッドは C9-5-6 と C9-5-11 に跨がる。都合上、北側の半分の調査行い、次いで南側も掘り完掘を行った。また、用水路の為、南北土層は途切れ途切れになっている。ST1 が 6 m 程東に位置している。

ST2 の遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は多角形である。



土層説明

Ⅰ　褐灰色土　耕作土
Ⅱ　黒褐色土　褐灰色小ブロック含む
Ⅲ　黒褐色土　褐色ブロック含む
Ⅳ　黒色土
1　黒褐色土　褐灰色ブロック含む
2　黒褐色土
3　暗褐色土　土器・礫含む
4　暗褐色土
5　黒褐色土
6　黒色土　褐色小ブロック含む
7　黒褐色土
8　暗褐色土　褐色小ブロック含む
9　褐色土　小ブロック・礫含む
10　にぶい黄褐色土　明赤褐色ブロック・黒色土、褐色ブロック多量含む
11　黒褐色土　黄褐色土混入
12　黒褐色土　にぶい黄褐色小ブロック含む
13　暗褐色土
14　黄褐色土　貼床
15　黒色土　壁溝
16　黒褐色土
17　褐色土　黒褐色ブロック含む
18　褐色土
19　褐色土　黒褐色小ブロック含む
20　黒褐色土　褐灰色小ブロック含む
21　黒褐色土　褐灰色ブロック含む
22　黒色土　褐灰色小ブロック含む

図 2-5　ST2 遺構図

壁際の周溝からすると六角形になる可能性がある。規模は径 4.5m、深さ 0.4m を測る。主軸方位は炉跡を中心とすると N-12° -E でやや東に振る。

覆土は上層黒褐色土、中層暗褐色土がレンズ状に被覆する。

炉跡は中心よりやや南寄りに位置する。規模は 92 × 55cm、深さ 9cmの長楕円形を呈する。主柱穴は４本で周溝２内に穿たれている。径 20cmから 30cmで深さは 40cmから 50cmありしっかりしている。ベッドは造り付けで全周し、南側部分は狭くなっている。周溝は壁際及びベッド際に掘られている。壁際の周溝１は六角形に回り、ベッド際の周溝２は長方形である。他に南側で浅い皿状の土坑を２基検出している。

遺物出土状況は中央部で纏まって出土している。特に炉跡の 20cm程上で礫、土器が出土した。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-7 №１～ 15)

№１から３は弥生土器壺である。１は短頸壺で口縁部は直立気味である。口径は 12.8cmである。

整形は口縁部外面がタタキ、ナデ、内面はヨコハケである。２、３は広口壺で口縁部が外反して大きく開く。２は口縁端部を僅かに拡張する。整形は共に内外面共にハケである。

４から７は甕である。４は砲弾形の甕で、口径 14.1cmを測り、口縁部が「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。胴部最大径は中央部にあり 16.6cmを測る。底部は小さな平底である。整形は外面が上半タタキ、下半はタタキとナデ、内面はハケ、ヘラケズリ、ナデを施す。底裏にもタタキを施す。器肉は薄い。５も砲弾形で口径はやや小さく 12.7cmである。口縁部は「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。胴部最大径は中央部で 16.6cmを測る。底部は小さな平底である。整形は口縁部内外面共にハケ、胴部外面上半はタタキ、下半はタタキ、ハケ、内面上半はハケ、ナデ、下半はハケである。６は口縁部は短く緩やかに外反する。口径 13.8cmである。肩部は張らない。整形は外面がタタキ、内面はハケ、ナデである。器肉はやや薄い。７は口縁部は強く外反し、口唇部は僅かに肥厚する。肩部は張らない。整形は口縁部外面がナデ、胴部はハケ、内面はハケである。

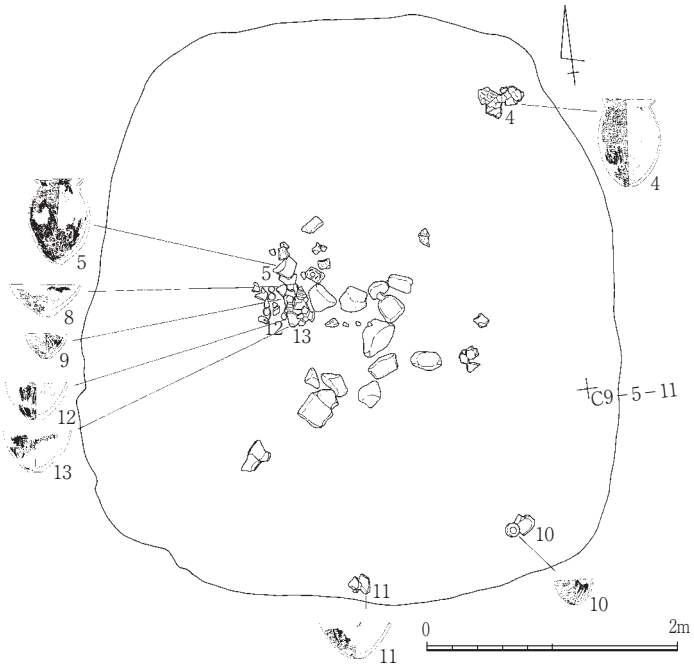


図 2-6　ST2 遺物出土状況図

８から 10 は鉢である。８は大型の鉢である。口径 18.5cmを測る。やや突出気味の小さな底部から体部は僅かに丸味を持ち大きく開く。整形は外面がタタキ、ナデ、内面がハケ、ナデである。９、10 は碗状の小型の鉢である。ほぼ完形品である。やや突出気味の小さな底部から体部は僅かに丸味を持ち立ち上がる。外面がタタキ、ナデ、内面はハケ、ナデである。

11 から 13 は甕の底部破片と考えられる。小さな平底で、体部はやや丸味を持って立ち上がる。底径は４cm前後を測る。整形は外面にタタキ、ハケが認められ、内面はハケかナデを施す。

14 は土製の支脚である。中実で、円柱状を呈し、裾部はやや開く。上部は径 7.2cmを測り平らである。器肉は厚い。整形は全面を指頭とナデで仕上げる。

15 は砂岩製の石包丁である。長さ 7.6cm、幅 6.5cm、厚さ 1.6cm、重さ 108g である。調整は粗く、裏面は大きく一次剥離痕を残し、刃部の作成も一度のみの調整である。表面は自然面である。両側縁に打ち欠きで抉入部を作出する。背部は並列剥離で厚い。

ST3(図 2-8、9)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-4-4 他　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半？　**形状**；円形？　**主軸方向**；－

規模；(1.9)m ×深さ 0.37m　**覆土**；褐色土主体

柱穴；－　**炉跡**；－　**ベッド**；－　**周溝**；1 条　幅 14cm×深さ 5cm

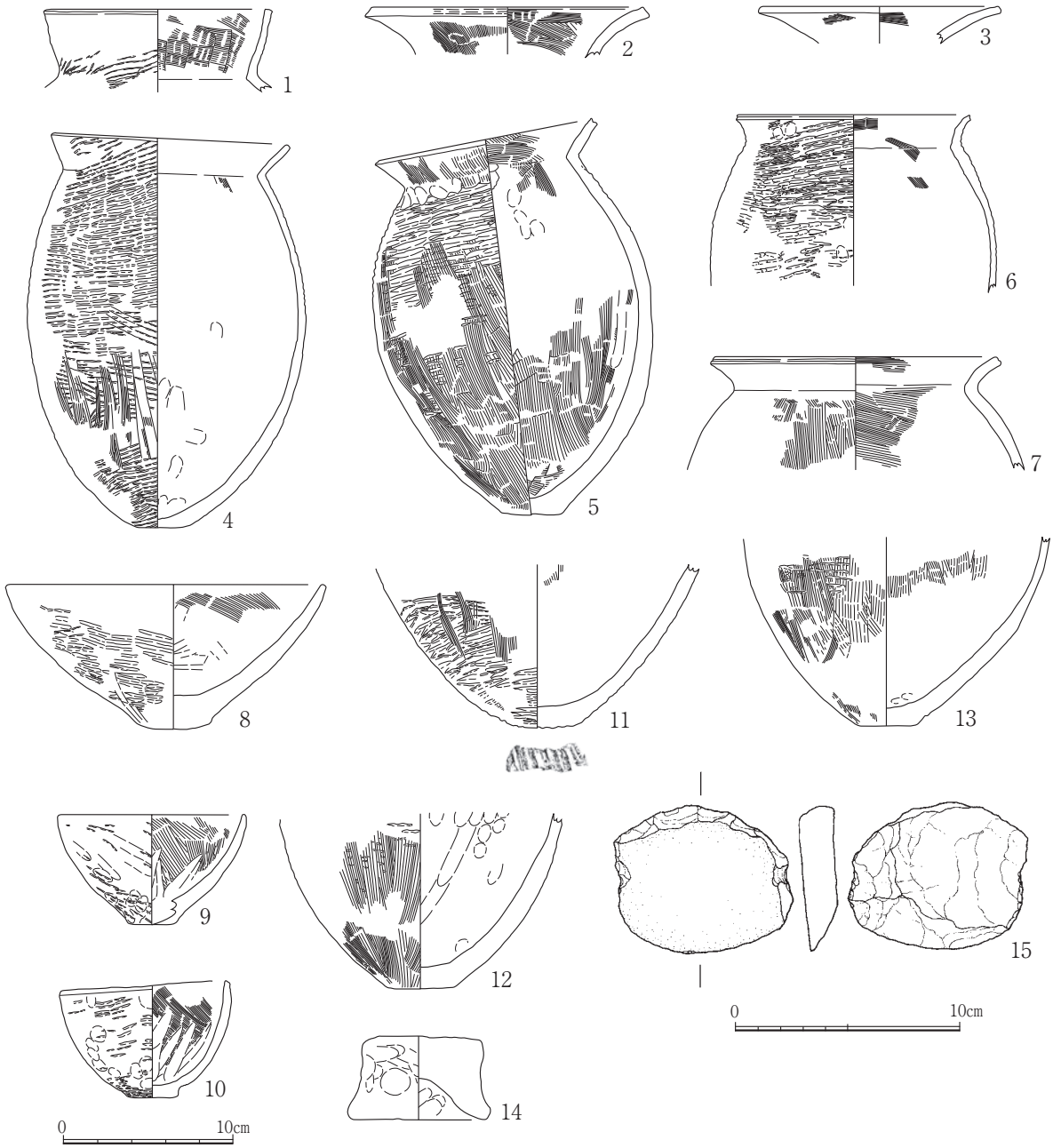


図 2-7　ST2 出土遺物実測図

その他付帯施設；－

出土遺物；弥生土器片、甕、鉢

所見；Ⅷ BE 区の北西に位置し、グリッドは C9-4-4 他である。ST3 の遺構検出面は基本土層Ⅲ層上面で床面はⅣ層に掘り込まれている。調査区内では極部分的に確認したのみで全貌は不明である。平面形は円形の可能性があるものの不確かである。規模は確認した部分で 1.9m、深さは 0.37m である。主軸方位は不明である。

覆土は褐色土が厚くレンズ状に堆積し、床面は褐色土に黄褐色ブロックが混じる。

炉跡、主柱穴は調査区内では検出できていない。ベッドも調査部分では確認できていない。周溝は壁際で検出している。幅 14cm、深さ５cmである。

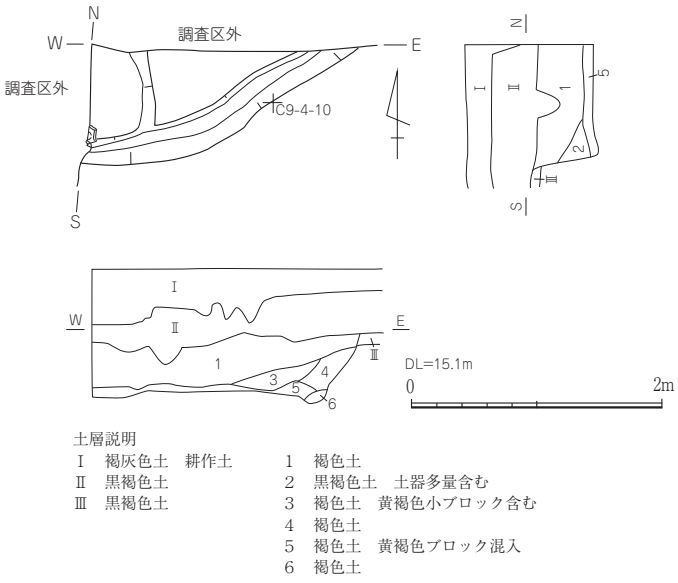


図 2-8　ST3 遺構図

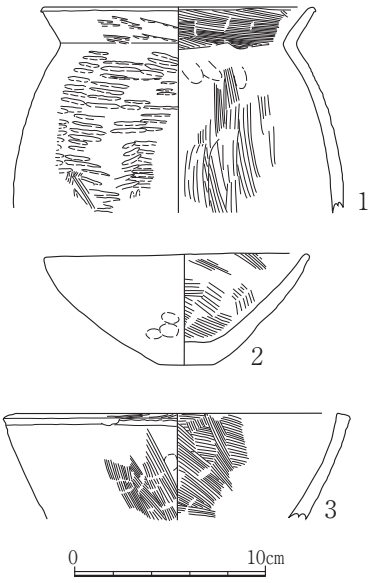


図 2-9　ST3 出土遺物実測図

遺物は纏まったものはなく、床面近くでやや大型の破片が出土しているのみである。

本竪穴建物跡の所属時期は遺物は少ないものの弥生時代後期後半の可能性がある。

出土遺物 (図 2-9 №1 ～ 3)

№1 は弥生土器甕である。口縁部は「く」字状に外傾し、口径 14.2cmを測る。肩部なだらかである。整形は外面がタタキ、内面はハケ、ナデである。

２、３は鉢である。２はやや小型で口径は 13.7cmを測る。小さな平底から体部は開く。整形は外面がナデ、内面はハケである。３は体部が直立気味で口唇部は平坦である。整形は内外面共にハケである。

ST5(図 2-10 ～ 14)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-12 他　**切り合い関係**；SD19・21 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-0°

規模；4.1 × 3.8m ×深さ 0.22m　**覆土**；黒色土主体　**柱穴**；－

竈；位置・北　竈壁位置・中央部　構築材範囲 (92) × 80cm×深さ 12cm　覆土・黒色土、焼土　煙道長さ 40 ×幅 30cm　袖補強材・礫　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土師器甕、甑

その他付帯施設；建物跡内土坑２基

出土遺物；須恵器甕、横瓶、坏、土師器甕、甑

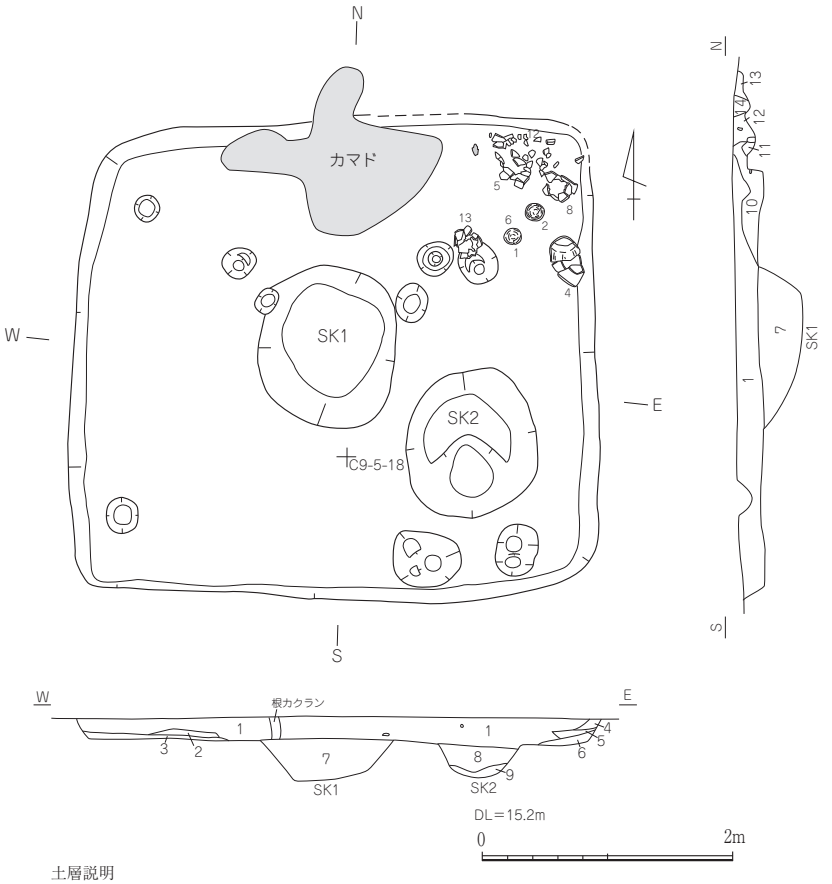
所見；Ⅷ BE 区の北寄りに位置し、グリッドは C9-5-12、C9-5-13 他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面もⅢ層でⅣ層にまで掘り込まれていない。平面形はほぼ方形で規模は 4.1 × 3.8m、深さは 0.22m と浅い。主軸方位は N-0° で真北を指す。

覆土は黒色土の単一層が被覆し、床面で黒褐色土が薄く認められる程度である。

竈は北壁の中央部に構築されている。竈床面の掘り方は皿状で長さ 95cm、幅 80cm、深さは 12cm である。袖等の構築材の規模は建物跡壁面際で幅 130cmである。煙道は建物跡より外部に設けられており、SD21 が丁度裁ち切るように横走しているものの、部分的に煙道は残存している。壁際よ

り長さ 40cm、幅 30cmである。掘り方を伴い深さ８cmである。竈本体部分より向かって左側にやや片寄っている。袖は黄褐色粘土質で構築されており幅 30cm強である。高さは断面図箇所で 30cm弱である。左袖には角礫を立てたような状態で袖補強材として使われている。焼成部には多量の焼土が認められた。また竈内から土師器甕、甑が出土している。

主柱穴については建物跡内で８基程の柱穴を検出しているものの、本建物跡に伴うかどうかは不明である。ベッド、周溝も未検出である。建物跡中央部及び南東床面で土坑を検出している。SK1 は径 65cmの楕円形で深さ 22cmで皿状を呈している。SK2 についてもほぼ同規模のものである。



土層説明
1　黒色土
2　黒褐色土　明褐色ブロック混入
3　黒褐色土
4　黒褐色土　炭含む
5　黒褐色土　炭・赤褐色小ブロック含む
6　黒褐色土　炭含む
7　黒褐色土　褐色ブロック・土器含む SK1
8　黒褐色土　SK2
9　黄褐色土　SK2
10　暗褐色土　土器・炭含む
11　明褐色土　暗褐色土混入、土器含む
12　黒褐色土　土器含む
13　黒褐色土
14　黒褐色土

図 2-10　ST5 遺構図

遺物出土状況は北東隅で纏まって遺物が出土している。須恵器横瓶、坏身、蓋の一組、土師器甕が出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-13、14 №1 ～ 14)

№1、２は須恵器坏身である。共に小型で１の口径は 12.7cm、２は 12.5cmである。１は受け部が短く内傾し、底部は回転ヘラケズリ調整を施す。２は受け部が短く外反気味である。底部は平底で回転ヘラ切り後、ナデ調整である。

３は須恵器甕か壺の頸部と考えられる。頸部は外反し、櫛歯と沈線を施す。肩部内面には同心円文タタキが残る。４は横瓶で口縁部が欠損する。最大径は胴部中央にあり 44cmを測る。頸部は９cmである。整形は外面が格子タタキ、カキ目、内面が同心円文タタキである。

５から 12 は土師器甕または甑である。５は口径 18.8cmで口縁部が外反し、肩部はなだらかである。胴部下半は丸味を持ち、最大径は 23cmである。丸底である。整形は胴部外面がハケ、内面はハケ、ナデである。胎土に砂粒を多く含む。６は口径 20.0cmで口縁部が外反し、肩部は張らない。長胴甕か。

整形は胴部外面がハケ、内面はハケ、ナデである。胎土に砂粒を多く含む。７はやや小型甕で口径 16.5cmである。口縁部はやや外反する。肩部は張らず､長胴甕か｡整形は胴部外面がナデ、内面はヘラケズリである。８は甑の可能性が高い。口縁部は僅かに外反するのみで、口径は 17.1cmである。肩部、胴部は張らず、長胴である。底部が欠損しているため判然としないが、寸胴の甑と考えられる。整形は口縁部が内外面共にナデ、胴部外面が粗いハケ、内面も粗いハケ、ナデである。内外面共に煤が付着する。９、10 は口縁部が緩やかに外反し、９は口径 16.0cmを測る。肩部、胴部は張らない。整形は口縁部内外面共にナデ、胴部はハケ、ナデである。11 は口縁部が直線的でやや外傾する。口径 24cmを測り、広い。胴張甕か。整形は口縁部内外面共にハケ、ナデである。12 は口径 24.8cmを測る大型の丸甕である。口縁部は直立気味で、口唇端部を強く沈線状にナデる。頸部はナデにより短くくびれる。肩部は張らず、胴部下半から底部に丸味を持ち、底部は丸底気味である。粘土帯を部分的に残す。整形は内外面共にナデである。

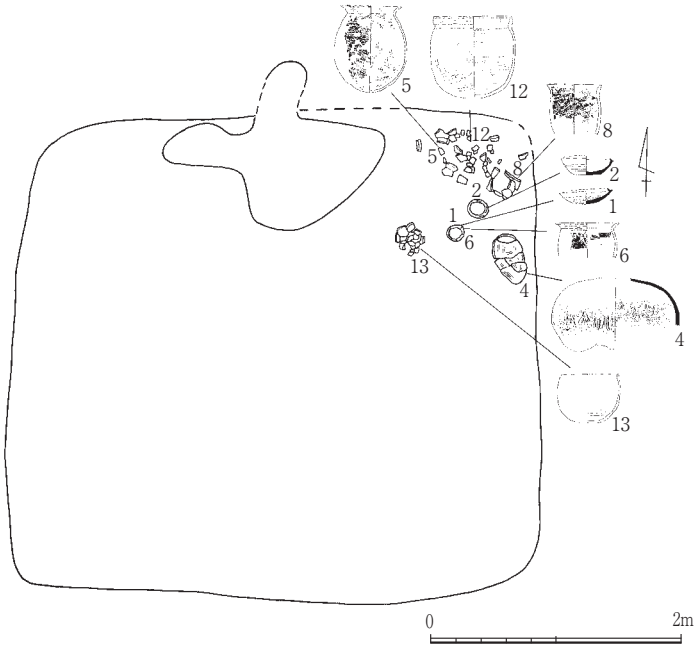
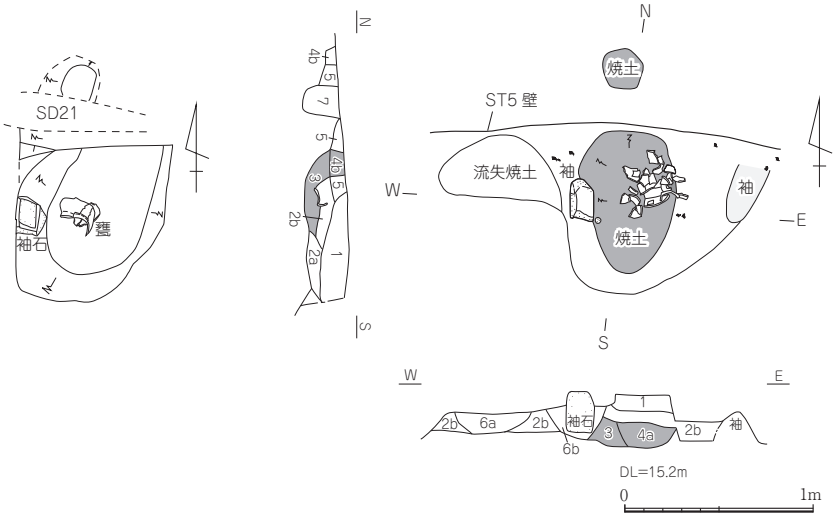


図 2-11　ST5 遺物出土状況図



土層説明
1　黒色土
2 a 黒褐色土　小ブロック
2 b 黒褐色土　小ブロック
3　黒色土　焼土混入
4 a 焼土
4 b 焼土
5　褐色土　焼土含む
6 a 黒褐色土　アカホヤ多量
6 b 黒褐色土　焼土混入
7　黒色土　SD21 覆土

図 2-12　ST5 竈図

13 はボール状の鉢である。口径 17.9cmを測る。口縁部は直立し、口唇部はやや平坦である。胴部下半に丸味を持ち、底部は丸底である。表面は部分的に落剥しているものの、整形は内外面共にナデである。14 は甑の把手である。瘤状で指頭による整形である。煤が付着する。

ST6(図 2-15 ～ 17)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-1-17 他　**切り合い関係**；SD1・3・17・21 に切られる

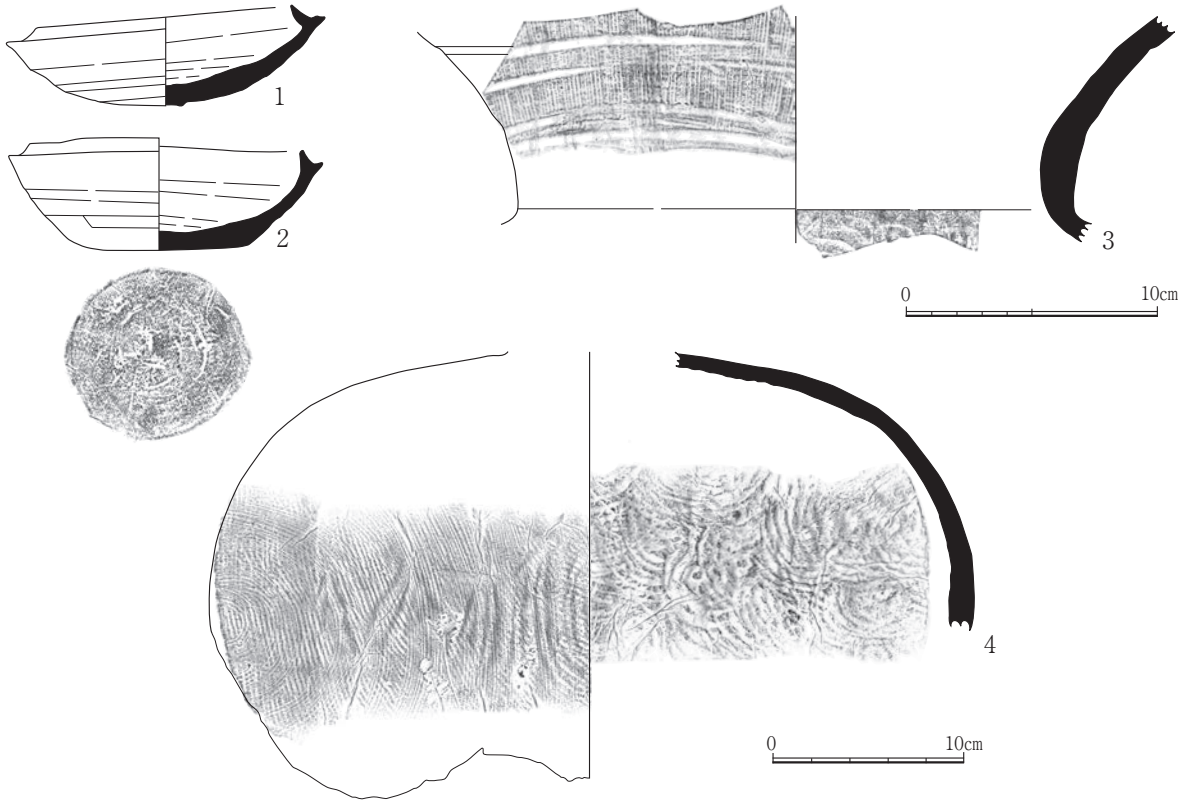


図 2-13　ST5 出土遺物実測図 (1)

時期；弥生末～古墳初　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-12° -E

規模；(5.2) × (3.4)m ×深さ 0.3m　**覆土**；黒褐色粘質土主体

柱穴；数 (2)　主柱穴数 (2)　主柱穴 P1、2

炉跡；形状長楕円形　規模 125 × (45)cm×深さ 13cm　覆土黒褐色粘質土、炭化物多量

ベッド；全周 ?、造り付け　**周溝**；2 条　幅 12cm×深さ 5cm

その他付帯施設；建物跡内土坑 1 基

出土遺物；弥生土器甕、鉢、高坏、土製支脚

所見；Ⅷ BE 区の北東に位置し、グリッドは C10-1-17、C10-1-18 他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層上面で床面はⅣ層に掘り込まれている。近世の SD3・17 等に寸断されるように南側は壊されている。また西壁部分も削平を受けている。平面形は方形か長方形と考えられ隅丸である。規模は残存部で一辺5.2m程度を測る。深さは30cm程である。主軸方位はN-12° -Eを指し、やや東に振る。

覆土は黒褐色粘質土主体で床面近くになると黄色土ブロックが混じり始める。

炉跡は長楕円形で規模は長軸 125cm、短軸 45cm、深さ 13cmを測り、覆土には炭化物を多量に含む。主柱穴は本来４本と考えられるものの、２本検出したに止まる。径 20cm弱で P1 の深さは８cmと浅い。P2 の深さは 36cmである。ベッドは壁に沿って全周する可能性が強い。残存しているところで幅 80cm程度、高さは床面から 22cmの造り付けである。周溝は壁際とベッド際を巡る。幅 10cmから 15cmで深さは３cmから５cmで浅い。それ以外のものとしては北東隅のベッド上で建物跡内土坑を１基検出している。長軸 74cmの楕円形で深さ 21cmを測る。皿状に落ち込んだ後更に一段柱穴状に落ち込む。

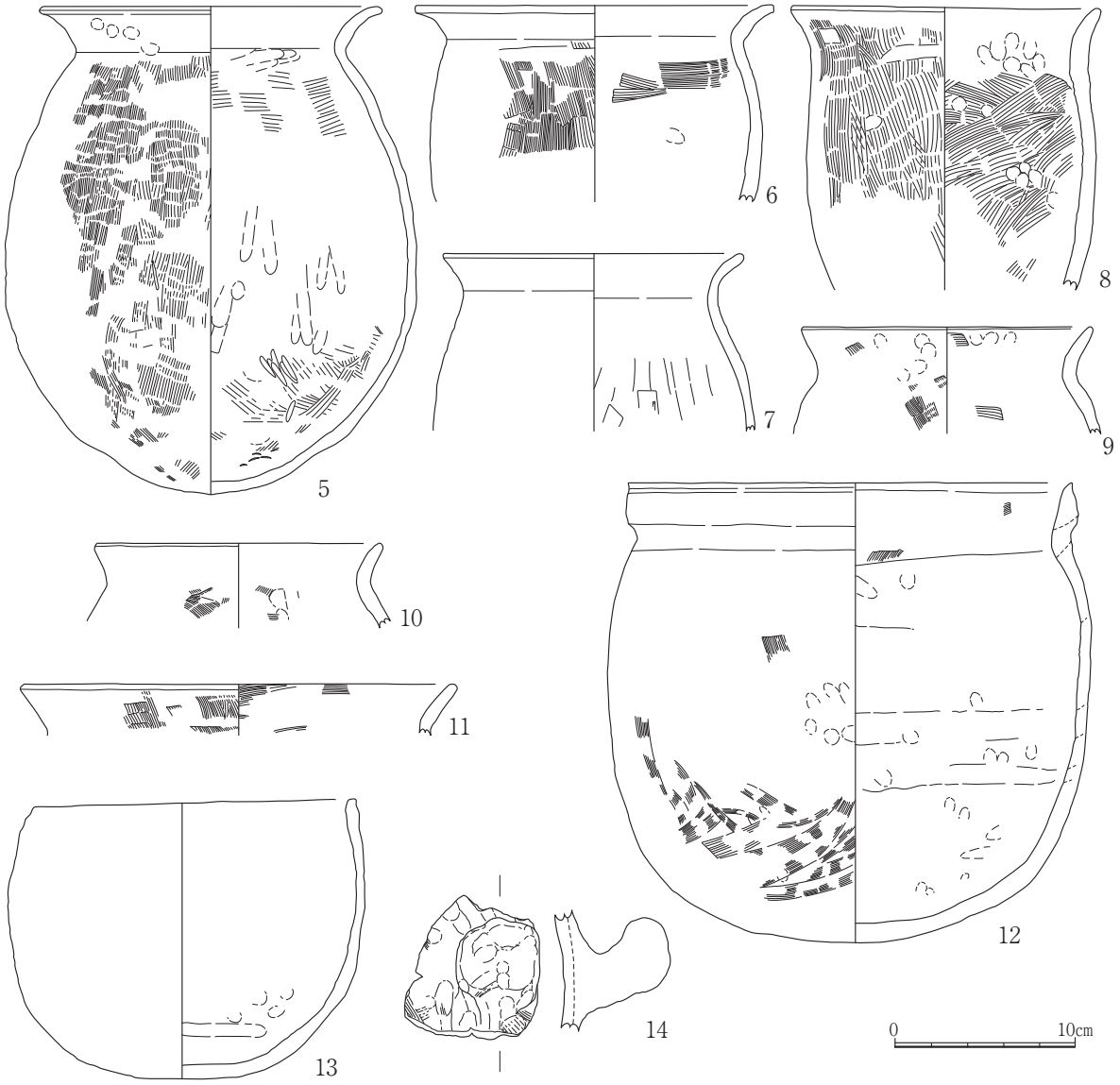


図 2-14　ST5 出土遺物実測図 (2)

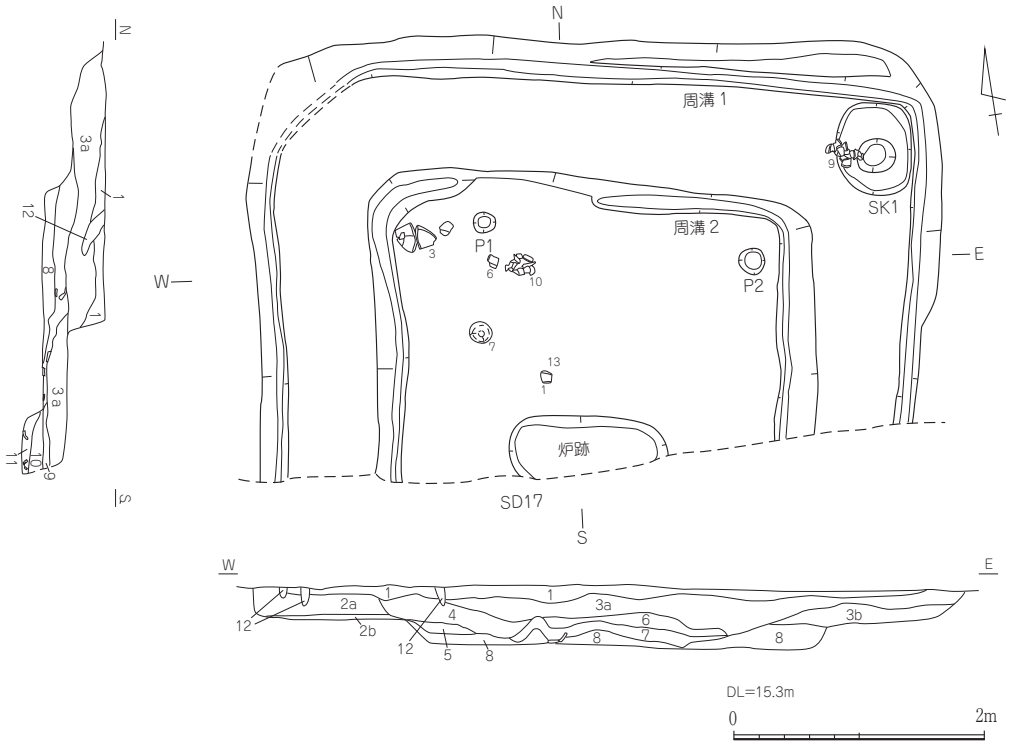
遺物出土状況は床面で弥生土器甕、鉢が出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-17 №1 ～ 13)

№1 から 3 は弥生土器甕である。1 は口径 15.0cmを測る。口縁部は「く」字状に外傾し、胴部はやや張る。整形は口縁部外面がハケ、内面がナデ、胴部外面はタタキ、ハケ、内面がハケである。外面には煤が付着する。2、3 は小さな平底の底部破片である。底径は共に 3.8cmを測る。整形は外面がタタキ、ハケ、内面がナデである。

4 から 9 は鉢である。4 は大型の鉢で口径 24.2cmを測る。口縁部は短く屈曲する。体部は大きく開き、体部下半はすぼまる。整形は口縁部外面がナデ、内面がハケ、外面胴部がハケ、内面がナデである。5 から 9 は碗状の鉢で口縁部が開く。最大径のものは 6 で 22cm、最小径のものは 7 で 16cmを測る。底部は欠損しているものが多く判然としないが、完形品の 7 は丸底気味のものである。整形は外面にタタキ、ハケを施し、内面はハケのものが多い。5 の外面には型作り痕のひび割れが



土層説明

1　黒褐色土　土器、黄色ブロック含む
2 a 黒色土　土器、黄色ブロック含む
2 b 黒色土　黄色ブロック含む
3 a 黒褐色土　土器、灰色ブロック含む
3 b 黒褐色土　黄色ブロック多量含む
4　黒褐色粘質土　土器、黄色・褐色ブロック含む
5　黒褐色粘質土　黄色ブロック多量含む
6　黒色土　黄色ブロック含む
7　黒褐色土　灰色ブロック含む
8　黒色粘質土　黄色・灰色ブロック、土器含む
9　黒色粘質土　炭化物多量含む、炉跡覆土
10　黒褐色土　黄色ブロック含む、炉跡覆土
11　黒褐色土　黄褐色ブロック、炭化物多量含む、炉跡覆土
12　黒褐色粘質土

図 2-15　ST6 遺構図

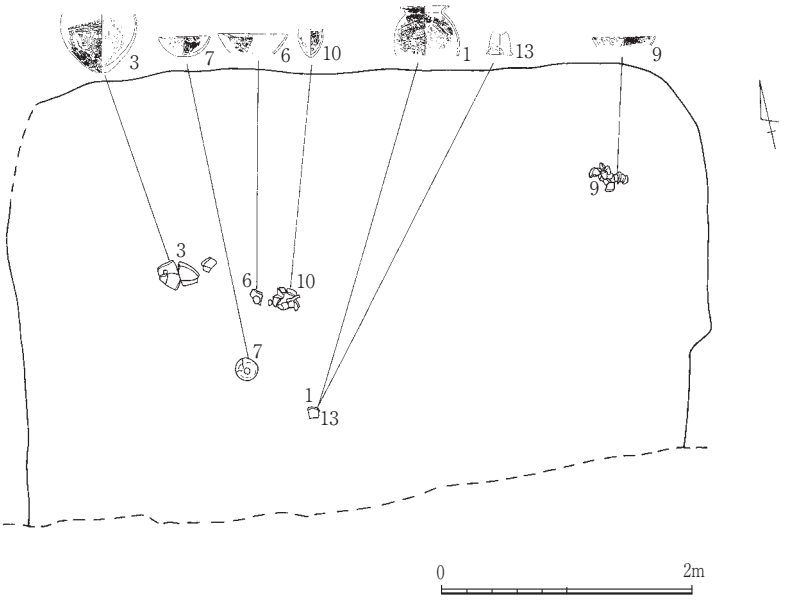


図 2-16　ST6 遺物出土状況図

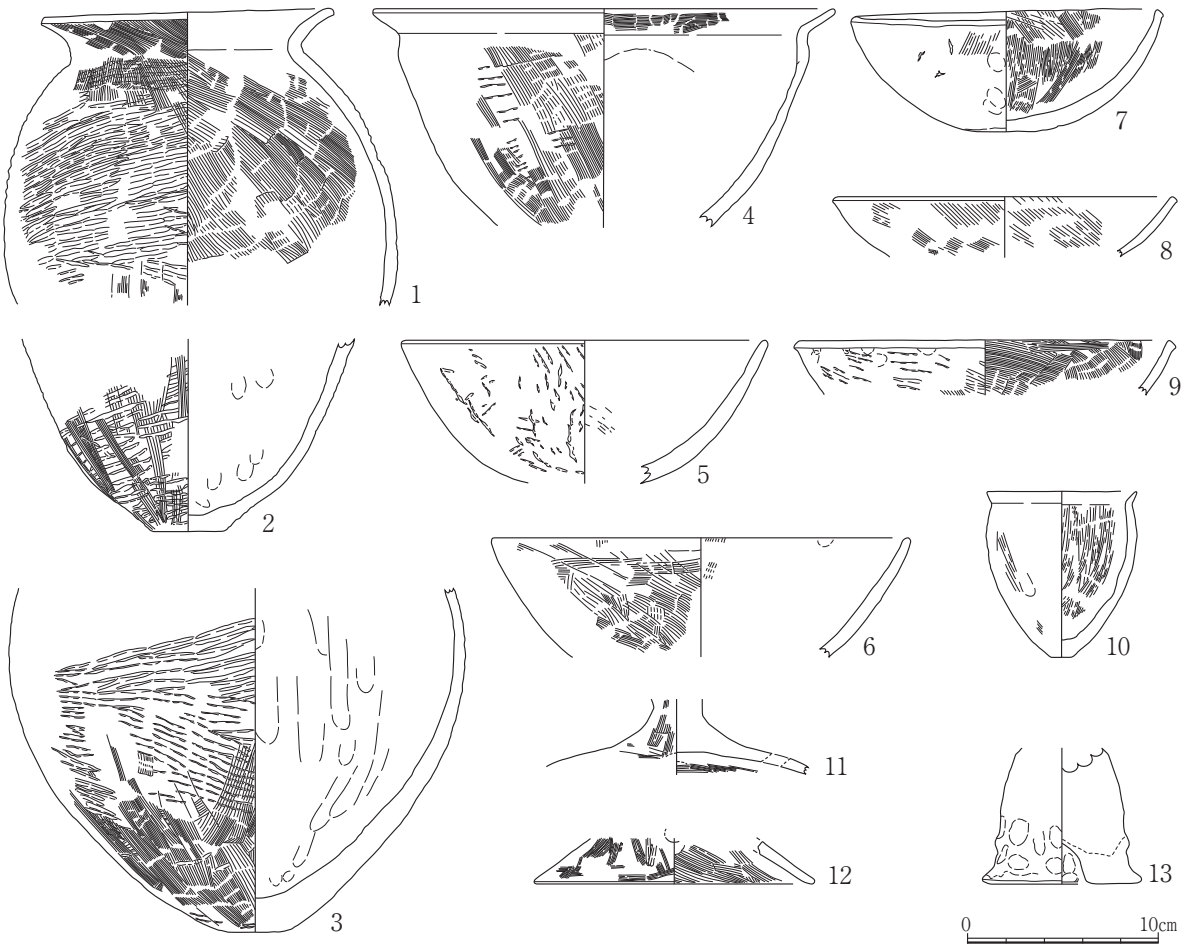


図 2-17　ST6 出土遺物実測図

認められる。また５以外は焼成が堅致である。

10 は小型の甕である。口径 7.8cm、器高 8.8cmを測る。口縁部は短く外傾し、体部はすぼまり、底部は小さな平底で径 1.2cmである。整形は外面がハケの後、ミガキを施す。内面は指頭、ハケである。

11、12 は高坏の裾部である。共に裾は開く。12 の径は 14.8cmである。12 には円形の透かし孔を持つ。整形は内外面共にハケである。

13 は土製支脚である。手づくね整形で、裾部分のみ中空である。脚底面は平坦である。

ST7(図 2-18 ～ 20)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-15 他　**切り合い関係**；SD11 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-21° -W

規模；5.6 × (3.4)m ×深さ 0.12m　**覆土**；上層黒色土、下層暗褐色土

柱穴；(13)　主柱穴数 4　主柱穴 P1 ～ 4

竈；位置・北　竈壁位置・中央部　構築材範囲 88 × 74cm×深さ 5cm　覆土・褐色土　煙道長さ 142 ×幅 24cm　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無

その他付帯施設；－

出土遺物；須恵器坏蓋、坏身、土師器甑

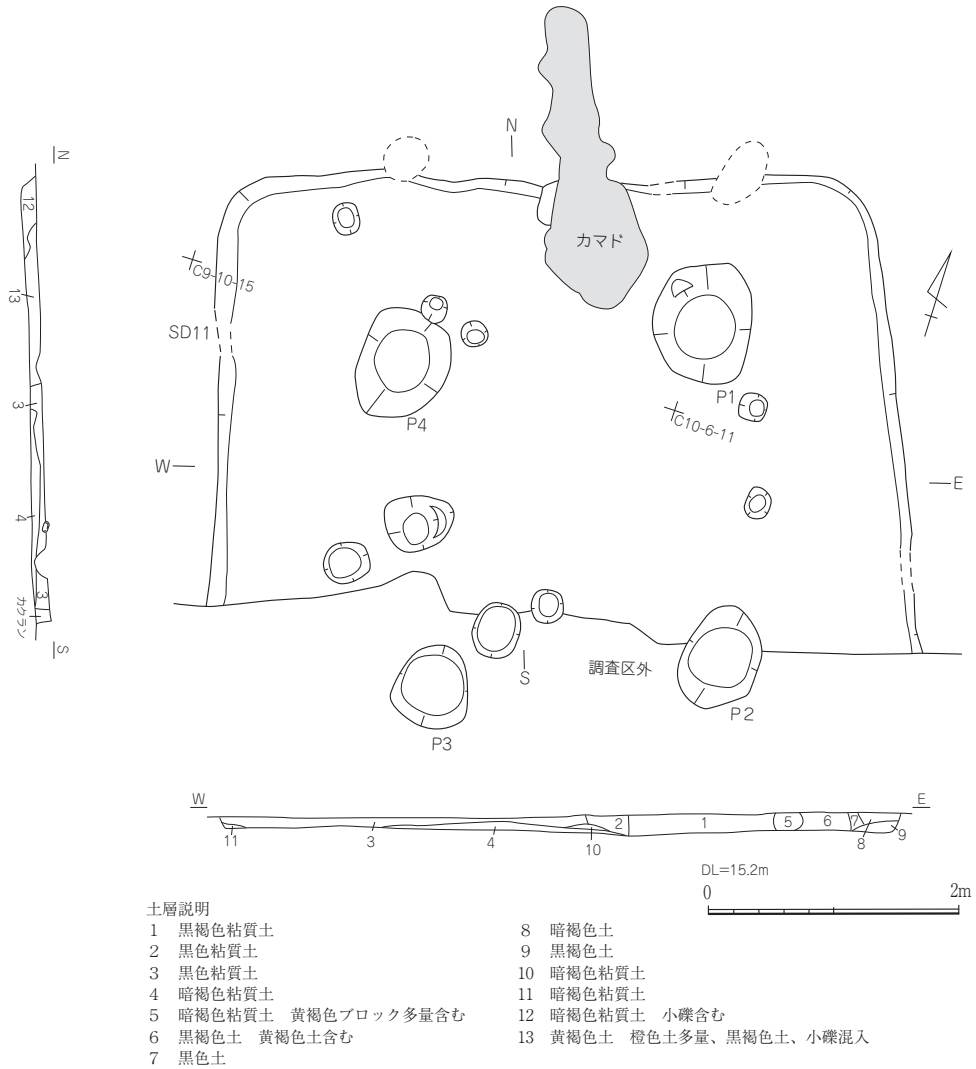


図 2-18　ST7 遺構図

所見；Ⅷ BE 区の南東に位置し、グリッドは C9-10-10、C9-10-15 他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面もⅢ層下面である。建物跡の南側半分程は調査区外に広がり、調査区の境では撹乱を受けている。平面形は調査区外へと広がるものの方形か長方形と考えられる。規模は東西の一辺は 5.6m、深さは 12㎝と浅い。主軸方位は N-21° -W で西に振る。SD11、また柱穴跡等に切られる。

覆土は上層に黒色土が被覆し、下層は暗褐色土である。

造り付けの竈は北壁の中央部に位置する。残存状況は余り良くない。掘り方の規模は 88 × 74cm で皿状を呈し深さは５㎝と浅い。他の柱穴跡２基が掘られており、煙道部にも他の柱穴跡の掘り込みがある。煙道は壁外に長く構築されている。長さ 142cm、幅 24cm、浅い掘り込みを伴い９㎝の深さである。竈本体は中央部に焼成部が設けられ、両脇に袖が付く。焼成部は焼土が多量に残り、袖は褐色土で構築され、焼土が混じる。補強材、天井石、支脚等は検出していない。竈内からも遺物は出土していない。

調査区境が撹乱を受けており、撹乱除去後に P2、P3 を検出し、一部拡張を行った。主柱穴は当初 SB17 としていたものの柱間距離が 2.5m あり、また方位が本竪穴建物跡と同方向であること、また竪穴建物跡の四隅に配置しているところから主柱穴に変更した。規模は径 60cmから 95cmで深

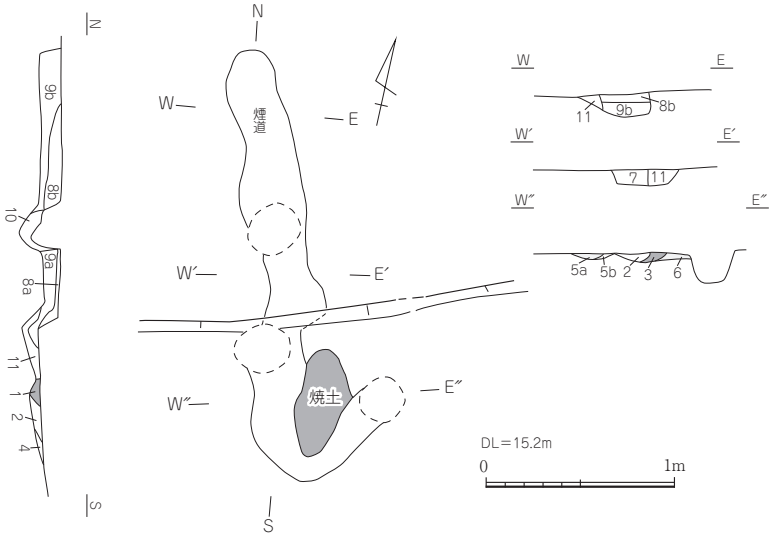
さは 56cmから 65cmである。

遺物は覆土中より須恵器坏蓋、土師器甑把手が出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-20 №.1 ～ 3)

№.1 は須恵器坏蓋である。口径 13.2cmを測る。器高は低く、口縁端部は丸味を持つ。かえりは端部から離れやや段状に近い。天井部は回転ヘラケズリ整形である。2 は須恵器坏身である。口径 13.1cmを測る。口縁部はやや開き、口唇部は丸味を持つ。内外面共にヨコナデ整形である。3 は土師器甑の把手部分である。やや小さな突起状の把手で、整形は指頭、ナデである。



土層説明
1　焼土　焼成部
2　褐色粘質土　焼土混入、焼成部
3　赤色土　焼土、焼成部
4　褐色粘質土
5 a 褐色土　焼土混入、袖部
5 b 褐色粘質土
6　暗褐色粘質土　袖部
7　褐色土　黄色ブロック多量、焼土混入、煙道部
8 a 黄色粘質土
8 b 黄色粘質土
9 a 黒色粘質土
9 b 黒色粘質土　黄色小ブロック混入
10　黒色粘質土
11　黒色粘質土

図 2-19　ST7 竈図

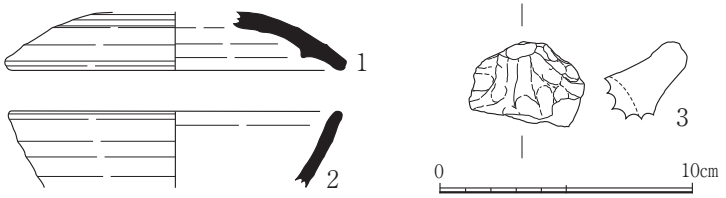


図 2-20　ST7 出土遺物実測図

ST8(図 2-21、22)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-20 他　**切り合い関係**；SD24 に切られる

時期；弥生末～古墳初　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-17° -E　**規模**；(4.1) × (1.9)m ×深さ 0.43m

覆土；上層暗褐色土、下層黒褐色土　**柱穴**；数 (1)　主柱穴数 (1)　主柱穴 P1

炉跡；－　**ベッド**；全周 ?、造り付け　**周溝**；2 条　幅 17cm×深さ 4cm

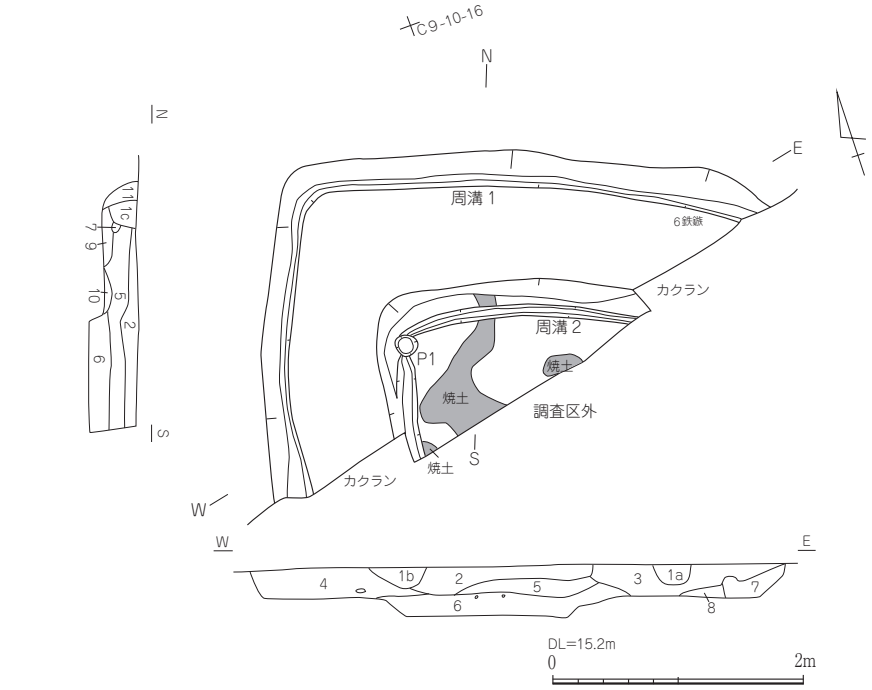
その他付帯施設；－

出土遺物；弥生土器壺、甕、高坏、搬入土器、土製支脚、鉄鏃

所見；Ⅷ BE 区の南西に位置し、グリッドは C9-9-20、C9-10-16 に跨がる。ほぼ同時期の ST14 が北西部に隣接している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。南側は調査区外へと広がる。調査区内では半分程検出したに止まる。平面形は方形か長方形と考えられる。規模は調査区内では長さ 4.1m である。深さは 43cmと比較的深い。主軸方位は N-17° -E で東に若干振る。

覆土は上層に暗褐色土が被覆し、下層には黒褐色土が堆積する。

炉跡は調査区内では検出できていない。主柱穴はベッド際の北西隅で P1 を検出した。径 22cm、深さ 28cmを測る。ベッドは造り付けで幅 70cmから 80cmで高さ 16cmを測る。周溝は 2 条検出している。壁際の周溝 1 と建物跡掘り方調査の際にベッド際の下層から周溝 2 を検出している。



土層説明

1 a 黒色土　黒褐色土混入	3　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック多量、土器含む	7　黒色粘質土
1 b 黒色粘質土	4　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック多量、土器・小礫含む	8　黒色粘質土
1 c 黒色土	5　黒褐色粘質土	9　黒褐色粘質土
2　黒褐色粘質土　土器含む	6　黒褐色粘質土　土器含む	10　褐色粘質土
		11　黒褐色粘質土

図 2-21　ST8 遺構図

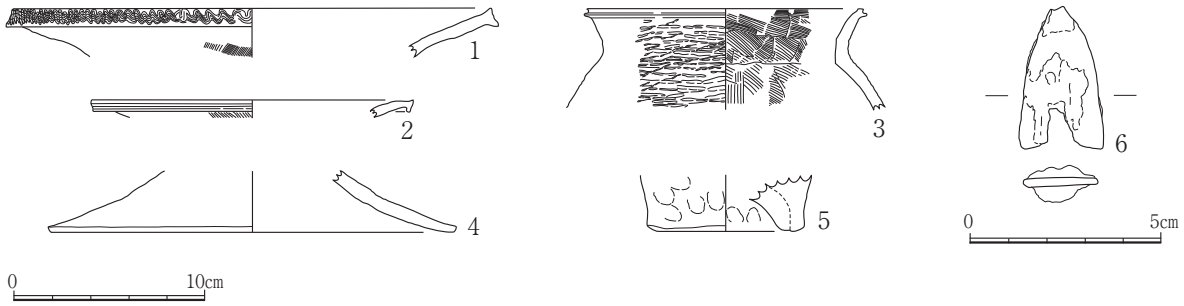


図 2-22　ST8 出土遺物実測図

遺物出土状況は覆土から僅かに出土したのみである。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-22 №1 ～ 6)

№1、２は弥生土器壺である。１は広口壺で口縁部は大きく開く。口縁部に櫛描波状文を施す。整形は外面がナデ、ハケ、内面がナデである。２は搬入品である。口縁部は開き、口唇部を僅かに下方に拡張する。整形は外面がハケ、内面はナデである。器肉はやや薄く、堅致である。

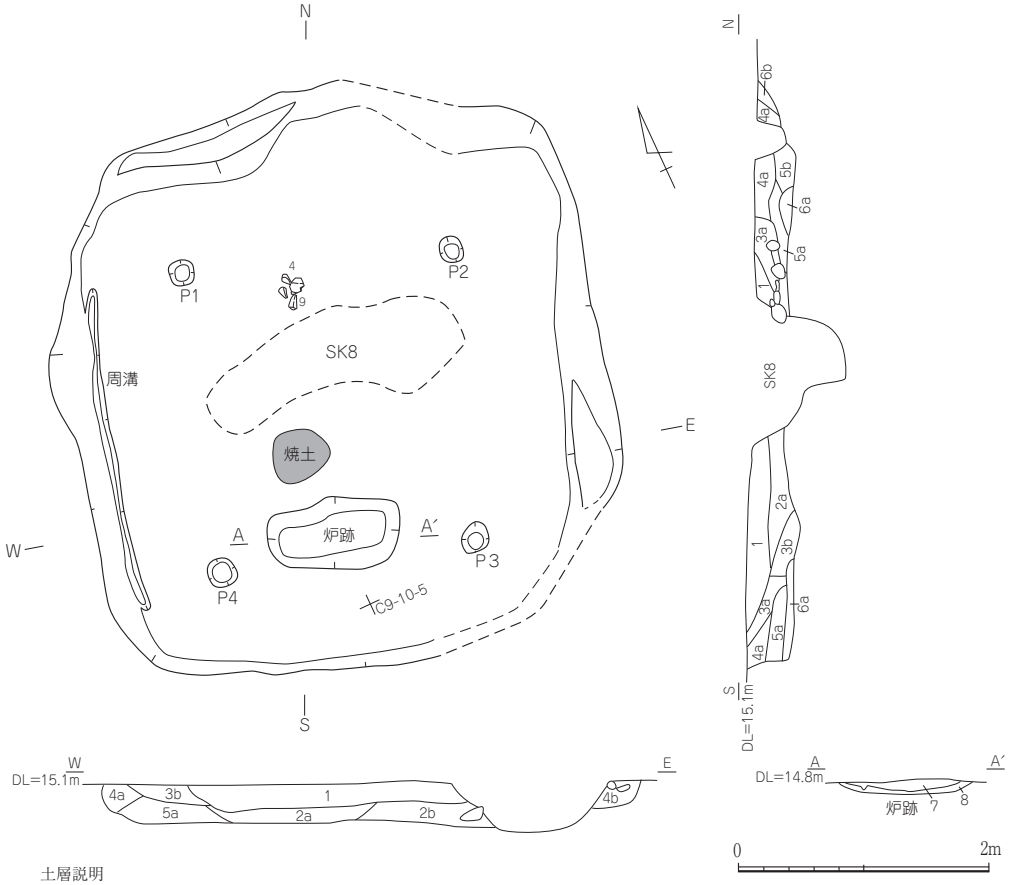
３はタタキ整形の小型の甕である。口径は 14.5㎝である。口縁部は外反する。整形は外面がタタキ、内面はハケ整形である。４は高坏の裾部破片である。底径は 21.2㎝で、裾部は大きく開く。整

形は内外面共にナデ整形である。５は支脚の脚部である。底径 8.2cmを測る。中実の低脚部で整形は指頭である。色調はややピンク色を帯びる。

６は鉄鏃である。長さ 3.8cm、幅 2.1cm、厚さ 0.2cmを測る。基部は凹基で側縁は外彎する。

ST9(図 2-23 ～ 25)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-25 他　**切り合い関係**；ST10 を切る、SK8、SD2 に切られる
時期；弥生末～古墳初　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-22° -E
規模；4.6 × (4.3)m ×深さ 0.28m
覆土；暗褐色粘質土主体　**柱穴**；数 4 主柱穴数 4 主柱穴 P1 ～ 4
炉跡；形状長楕円形　規模 104 × 57cm×深さ 10cm　覆土褐色土、焼土
ベッド；－　**周溝**；1 条　幅 12cm×深さ 4cm　**その他付帯施設**；－
出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、高坏、支脚、砥石
所見；Ⅷ BE 区の中央部に位置し、グリッドは C9-5-24、C9-5-25 他に跨がる。ほぼ同時期の ST10 が南側に位置し、ST9 が切る。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平



土層説明
1　暗褐色粘質土　粒状褐色ブロック混入、炭化物含む
2 a 暗褐色粘質土　焼土（明赤褐色）混入、炭化物含む
2 b 暗褐色粘質土　炭化物、20 ㎝弱礫含む
3 a 黒褐色粘質土　焼土混入、礫・炭化物含む
3 b 黒褐色粘質土　焼土多量混入、炭化物含む
4 a 暗褐色粘質土　炭化物含む
4 b 暗褐色粘質土　10 ㎝弱礫含む
5 a 黒褐色粘質土　炭化物含む
5 b 黒褐色粘質土
6 a 暗褐色粘質土　粒状褐色ブロック混入
6 b 暗褐色粘質土
7　明赤褐色土　土器・礫・炭化物含む、焼土
8　褐色土　黒褐色ブロック、土器・炭化物含む

図 2-23　ST9 遺構図

面形は東側を近世の溝 SD2 に切られているものの、隅丸方形になるものと考えられる。規模は南北辺が 4.6m、東西辺 4.3m で深さは 28cmである。主軸方位は N-22° -E で東に振る。

覆土は暗褐色粘質土が被覆する。下層には焼土と炭化物が広範囲で広がっており焼失建物跡と考えられる。

炉跡は長楕円形で長辺 104cm、短辺 57cm、深さ 10cmである。焼土が全体を覆う。炉跡から 20cm程北側で径 40cm程の範囲で焼土を検出している。主柱穴は 4 基検出している。径 21cmから 26cmで深さ 30cmから 40cmでほぼ同規模の主柱穴である。ベッドは検出していない。周溝は西壁際のみで幅 12cm、深さ 4 cm足らずである。

遺物出土状況は浮いた状態で多量の礫が出土している。特に北側部では住居跡がある程度埋没した過程で北方向から円礫の投棄が行われている。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-25 №1 ～ 13)

№1 は弥生土器広口壺である。口径 16.6cmを測り、口縁部は外傾する。整形は内外面共にハケである。２は口縁部、頸部を欠損する。長頸壺の可能性がある。小型で最大径は胴部中央にあり 9.2 cmを測り、やや算盤玉状になる。底部は丸底である。整形は外面がミガキ、内面は下半がハケ、上半は指頭である。

３、４は甕である。３は口径 15.5cmを測り、口縁部は「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。整形は外面がタタキ､内面はハケである。４は小型甕で口径は 12.0cmである。口縁部は外反し、肩部はなだらかである。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケである。

５から 10 は鉢である。５は口縁部が短く外反し、体部は丸味を持つ。口径 18.8cmを測る。整形は外面がタタキ、ナデ、口縁部内面はハケ、胴部がハケ、ナデである。６は口径 23.0cmを測る大型品である。口縁部は大きく開く。底部は平底気味である。整形は外面がタタキ、ナデ、内面はハケである。７は箱形に近い器形で口径 17.4cm、器高 8.9cmを測り、やや深い鉢である。底部は平底で 7.6cmを測る。整形は外面はミガキ、内面もハケの後ミガキを施す。８は口径 17.5cmを測り、口縁部は外傾気味にやや開く。整形は外面がハケ、ナデ、内面はハケである。９はやや小型の鉢で口径は 13.7cmである。底部は小さな尖底状である。外面はナデ、内面がハケ整形である。10 もやや小型で口径が 12.5cmである。体部は直立気味である。口唇部は平坦で内外面にヨコナデを施

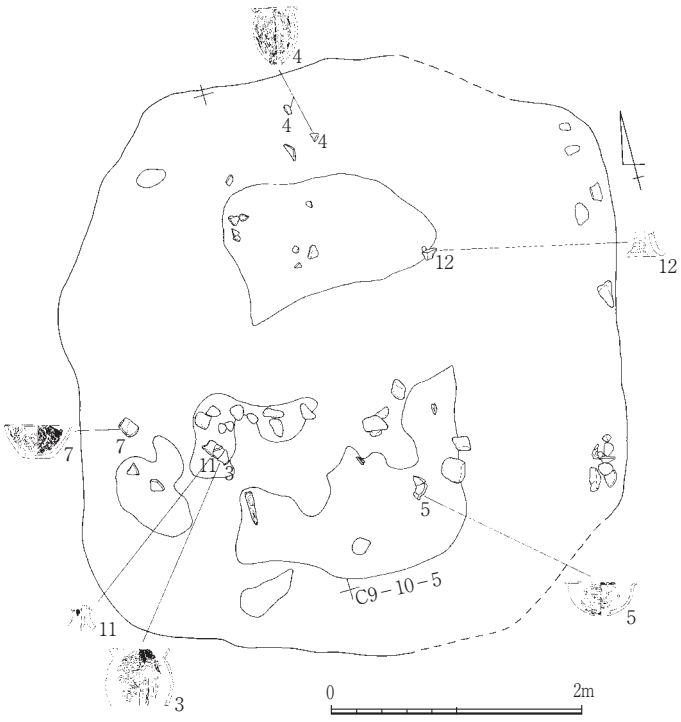


図 2-24　ST9 遺物出土状況図

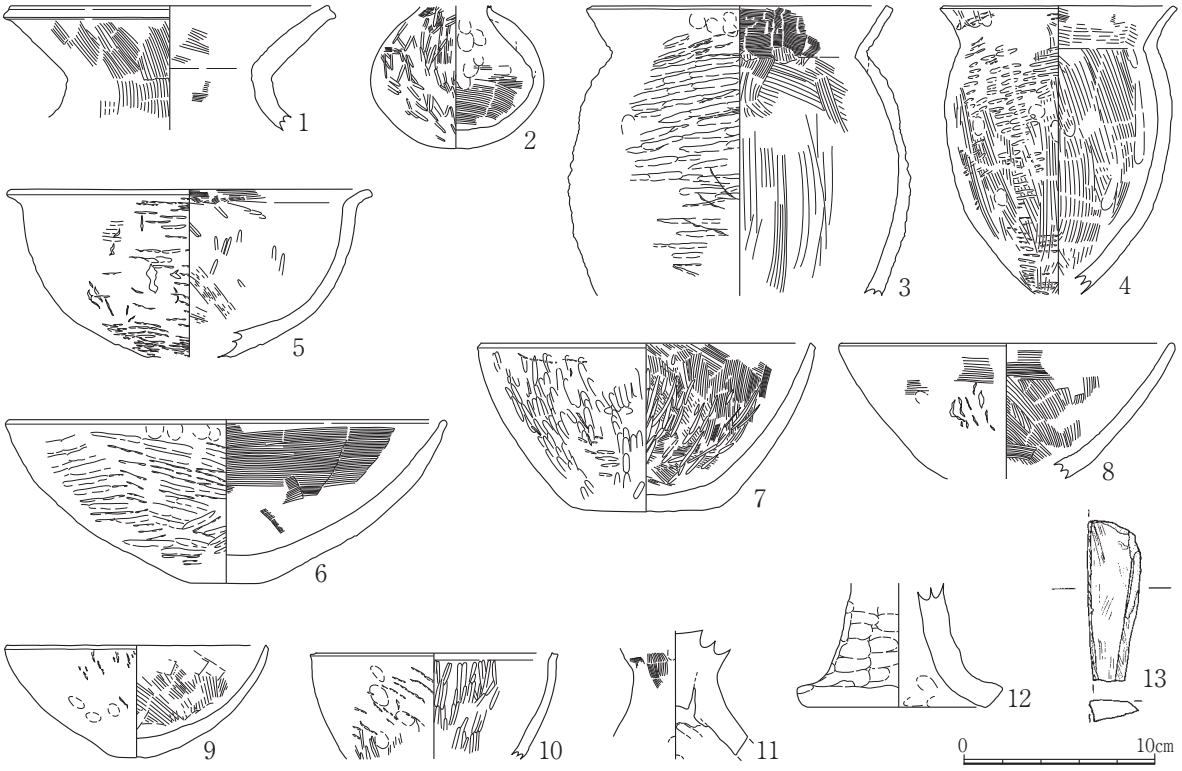


図 2-25　ST9 出土遺物実測図

す。体部は外面がタタキの後ナデ、内面はミガキを施す。

11 は高坏の分厚い脚部で、外面が指頭、ハケ、ナデ、内面はナデ整形である。

12 は土製支脚の脚部である。中空で脚部は面取り状に成形しやや角張る。裾部は短く開く。整形は指頭、ナデである。

13 は砥石である。一面のみ残存する。他は折断、落剥しており、落剥箇所を再利用しており、部分的に使用跡が残る。石質は頁岩か。

ST10(図 2-26、27)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-4 他　**切り合い関係**；ST9、SB2・3、SX7、SK3、SD2・7 に切られる

時期；弥生末～古墳初　**形状**；方形　**主軸方向**；N-22° -E　**規模**；4.7 × (4.4)m ×深さ 0.34m

覆土；暗褐色粘質土主体　　**柱穴**；数 4　主柱穴数 4　主柱穴 P1 ～ 4

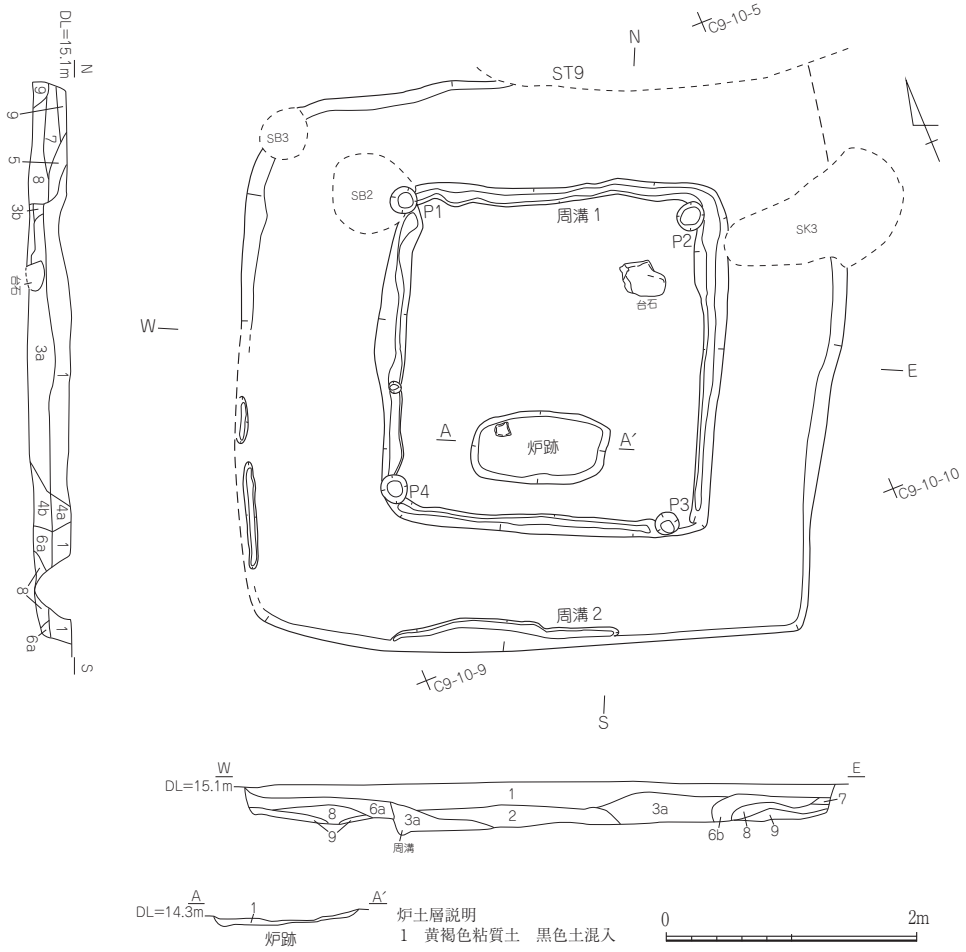
炉跡；形状楕円形　規模 105 × 58cm×深さ 6cm　覆土黄褐色粘質土　**ベッド**；全周、削り出し

周溝；2 条　幅 14cm×深さ 7cm

出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢

所見；Ⅷ BE 区の中央部に位置し、グリッドは C9-10-4 他である。ほぼ同時期の ST9 が北側に位置し、ST10 が切られる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は北側を ST9 に切られているものの、方形になるものと考えられる。規模は南北辺は残存長で 4.4m、東西辺 4.7m で深さは 34cmである。主軸方位は ST9 と同じく N-22° -E で東に振る。

覆土は暗褐色粘質土が被覆する。



土層説明
1　暗褐色粘質土　炭化物含む
2　黒褐色粘質土
3 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、中礫含む
3 b 暗褐色粘質土　焼土（明赤褐色）混入
4 a 黒褐色粘質土　炭化物含む
4 b 黒褐色粘質土　礫・炭化物含む
5　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色土混入、上部に暗褐色土堆積
6 a 黄褐色粘質土　ローム、ベッド
6 b にぶい黄褐色粘質土　粒状黄褐色土混入、ローム、ベッド
7　暗褐色粘質土
8　黒褐色粘質土　粒状褐色ブロック混入
9　褐色粘質土　削出しベッド、地山

図 2-26　ST10 遺構図

炉跡は楕円形で長辺 105cm、短辺 58cm、深さ 6cmで、ST9 の炉跡と規模がほとんど同じである。主柱穴は４基検出している。径 18cmから 22cmで深さ 42cmから 58cmで掘り方はしっかりしている。ベッドは削り出しで全周する。幅 75cmから 120cmで高さは床面から８cmである。周溝はベッド際のものは全周する。幅 14cm、深さ７cm足らずである。

遺物出土状況は炉跡から土器片、床面北東で台石が出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-27 №１～５)

№１は弥生土器広口壺である。口径 19.2cmを測り、口縁部はやや外反気味に開く。口唇部は平坦である。整形は内外面共にハケ、ナデである。２は小型の甕である。口径は 12.6cmである。口縁部はやや外傾する。整形は外面がタタキ、ナデ、内面はハケ、ナデである。３、４は鉢である。口径は共に 20cm前後を測る。口縁部は開き、３の整形は内外面共にナデ、ハケである。４の整形は外

面がハケ、内面がナデである。

5は砂岩製の大型の台石である。長さ29.8cm、幅27.2cm、厚さ12.0cm、重さ15kgである。扁平な河原石で一端部は部分的に欠損する。表裏面に敲打痕が認められる。

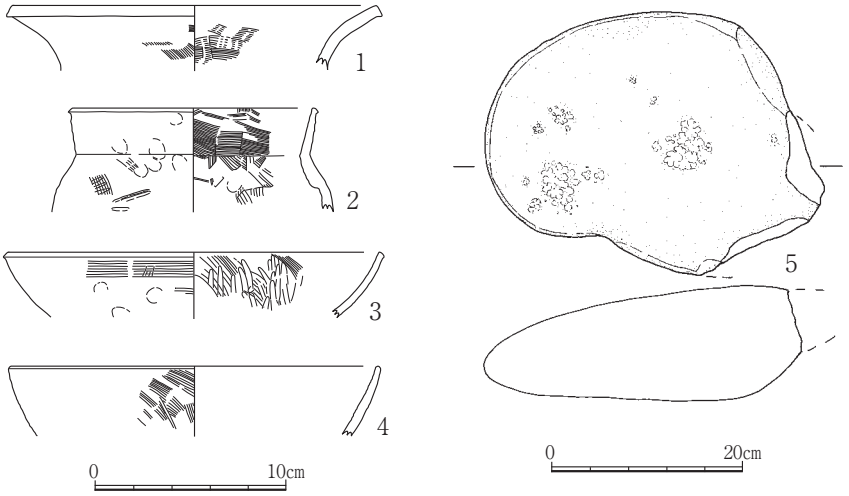


図2-27　ST10出土遺物実測図

ST11(図2-28～31)

調査区；ⅧBW　**グリッド**；C9-4-23他　**切り合い関係**；ST53、SB19、SD8・9に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；多角形　**主軸方向**；N-20°-E

規模；7.4×7.2m×深さ0.43m

覆土；暗褐色粘質土主体、下層焼土、炭化材混入

柱穴；数6　主柱穴数6　主柱穴P1～6

炉跡；形状不整楕円形1基　地床炉1基　炉跡1 規模160×76cm×深さ12cm　覆土焼土主体　炉跡2 規模50×40cm

ベッド；部分的に有り

周溝；2条　周溝1 幅14cm×深さ7cm　周溝2 幅16cm×深さ3cm

その他付帯施設；－

出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、高坏、土製支脚、土製有孔円盤、鉄製鑓

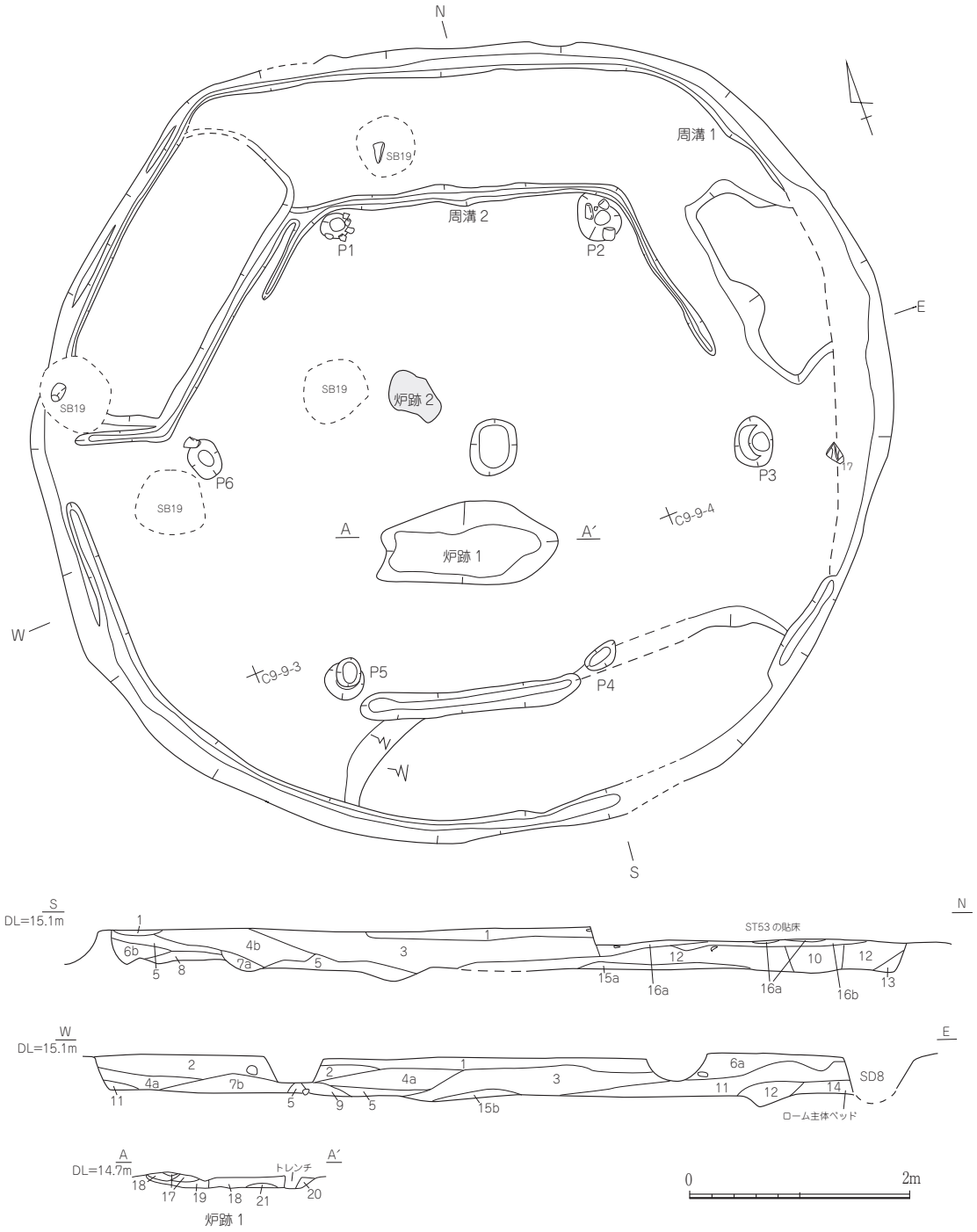
所見；ⅧBW区の東端に位置し、グリッドはC9-4-23、C9-4-24他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。古墳時代後期のST53、近世の溝SD8、SD9に切られる。ST53はST11の上層に貼り床を構築している。近世のSD8、SD9は東壁及び床面も破壊している。東側にほぼ同時期、同規模、同形態のST51が位置している。

平面形は丸味を持った多角形で六角形を呈する。特にベッド際周溝2は六角形に掘り込まれている。規模は7.4×7.2m、深さ0.43mを測る大型の建物跡である。炉跡を基軸線にすると主軸方位はN-20°-Eで東に振る。

覆土は暗褐色粘質土を主体とする。下層には焼土、炭化物、炭化材を多量に含む。

炉跡は掘り方を伴う炉跡1、炉跡2は地床炉である。炉跡1の形状はやや乱れた楕円形で規模は160×76cm、深さ12cmを測る。覆土は焼土が主体である。炉跡2は炉跡1から80cm程北側で径50cm程の範囲が赤化している。

柱穴は幾つか検出しているものの主柱穴はベッド際の角に位置するもののみが主柱穴で他は掘立柱建物跡の柱穴である。6基が主柱穴となる。等間隔で配置しており、中心部より60°の角度で約2.4mの距離間隔で正六角形の規格性を持って穿たれている。ST51も同様の規格性を持っている。規模は径がやや小さく18cmから36cmである。深さはしっかりしており35cmから55cmを測る。



土層説明

1　暗褐色粘質土　土器含む
2　暗褐色粘質土　粒状黄褐色土混入、中礫含む
3　暗褐色粘質土　黄褐色中ブロック多量、土器・炭化物含む
4 a 暗褐色粘質土　中礫含む
4 b 暗褐色粘質土　焼土含む
5　明赤褐色粘質土　暗褐色土混入、焼土
6 a 暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック、中礫含む
6 b 暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
7 a 暗褐色粘質土　炭化物含む
7 b 暗褐色粘質土　黄褐色土混入、焼土・土器含む
8　暗褐色粘質土　黄褐色土多量、黒色土混入、土器・炭化物含む
9　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色土多量混入、炭化物含む
10　黒色粘質土　土器含む
11　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
12　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック、小・中礫含む
13　黒色粘質土　褐灰色・黄褐色土混入、炭化物含む
14　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色中ブロック、小礫含む
15 a 暗褐色粘質土　焼土・炭化物含む
15 b 暗褐色粘質土　炭化物含む
16 a 暗褐色粘質土
16 b 暗褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入、小礫・土器含む
17　黒色粘質土
18　明赤褐色粘質土　暗褐色土、炭化物含む、焼土
19　黒褐色粘質土　焼土、小礫含む
20　暗褐色粘質土　焼土多量混入
21　暗褐色粘質土　炭化物含む

図 2-28　ST11 遺構図

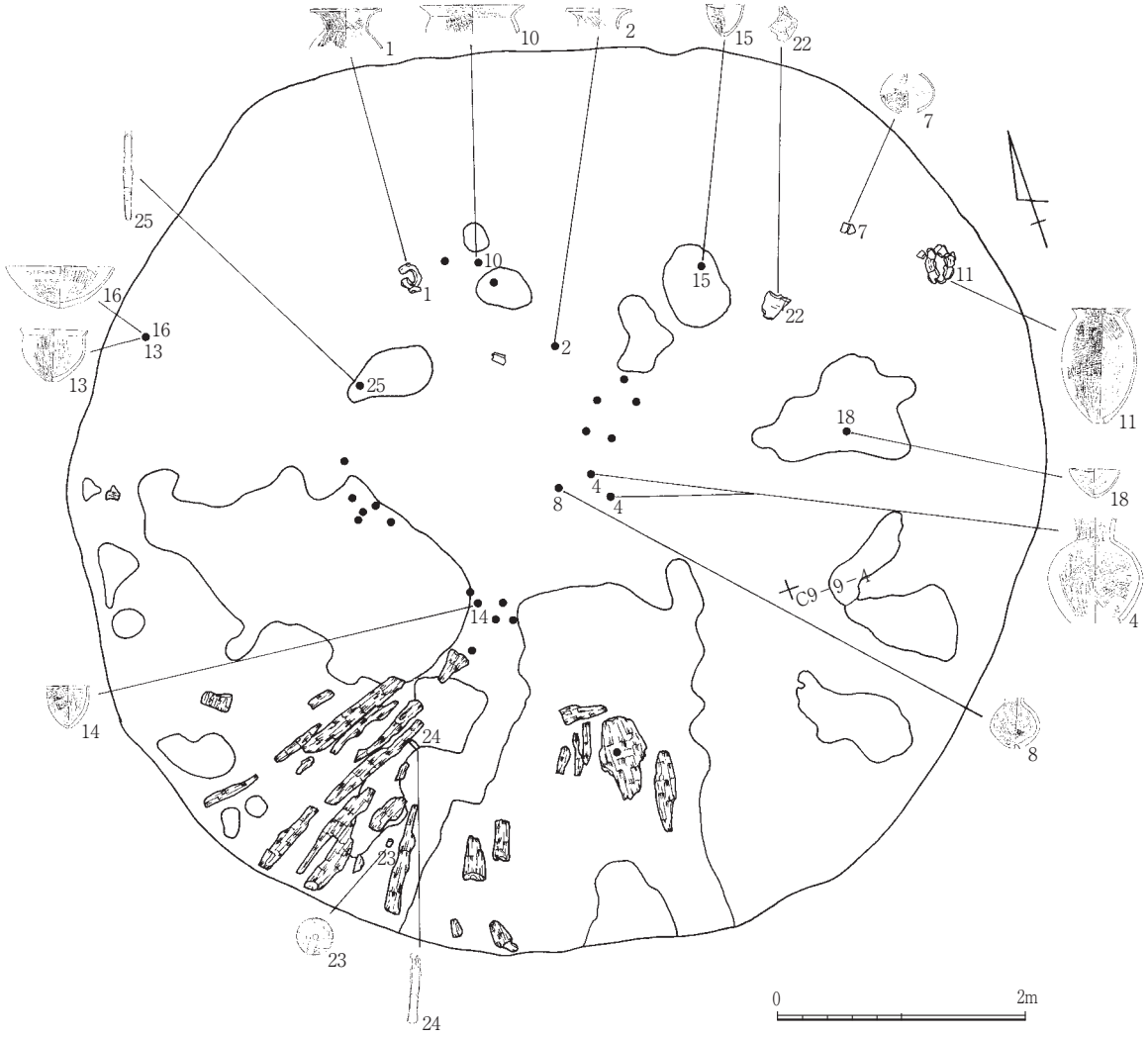


図 2-29　ST11 遺物出土状況図

P1、P2 は柱穴の回りに拳大の礫で根固めをしている。

ベッドは部分的にしか検出していない。造り付けのベッドの有る部分とない部分を交互に配置しており、３ケ所でベッドを確認している。北西部のベッドで長さ 2.5m、幅 1.3m、床面より高さ 14 cmを測る。周溝 2 はベッド際を巡る。角々に主柱穴を穿っている。幅 16cm、深さは３cmと浅い。周溝 1 は壁際を巡る。幅 14cm、深さ７cmである。

遺物出土状況は上層で若干礫の投棄が認められる。南側では炭化材、焼土が顕著に認められ、焼失建物跡である。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物､及び建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-30、31 №.1 ～ 25)

№.1 から 8 は弥生土器壺である。１から４は広口壺、５から８は長頸壺と考えられる。1 は口径 16.5cmを測り、口縁部はやや開き、口唇部を僅かに拡張する。頸部はやや立ち上がり、肩部はなだらかである。整形は内外面共にハケである。２も同様である。３の口縁部は余り開かず、頸部が立ち上がる。整形は内外面共にハケである。４は口縁部が欠損するものの広口壺と考えられる。頸部は立ち上がり、肩部はなだらかである。胴部最大径はやや上半にあり 22.2cmを測る。整形は外面が

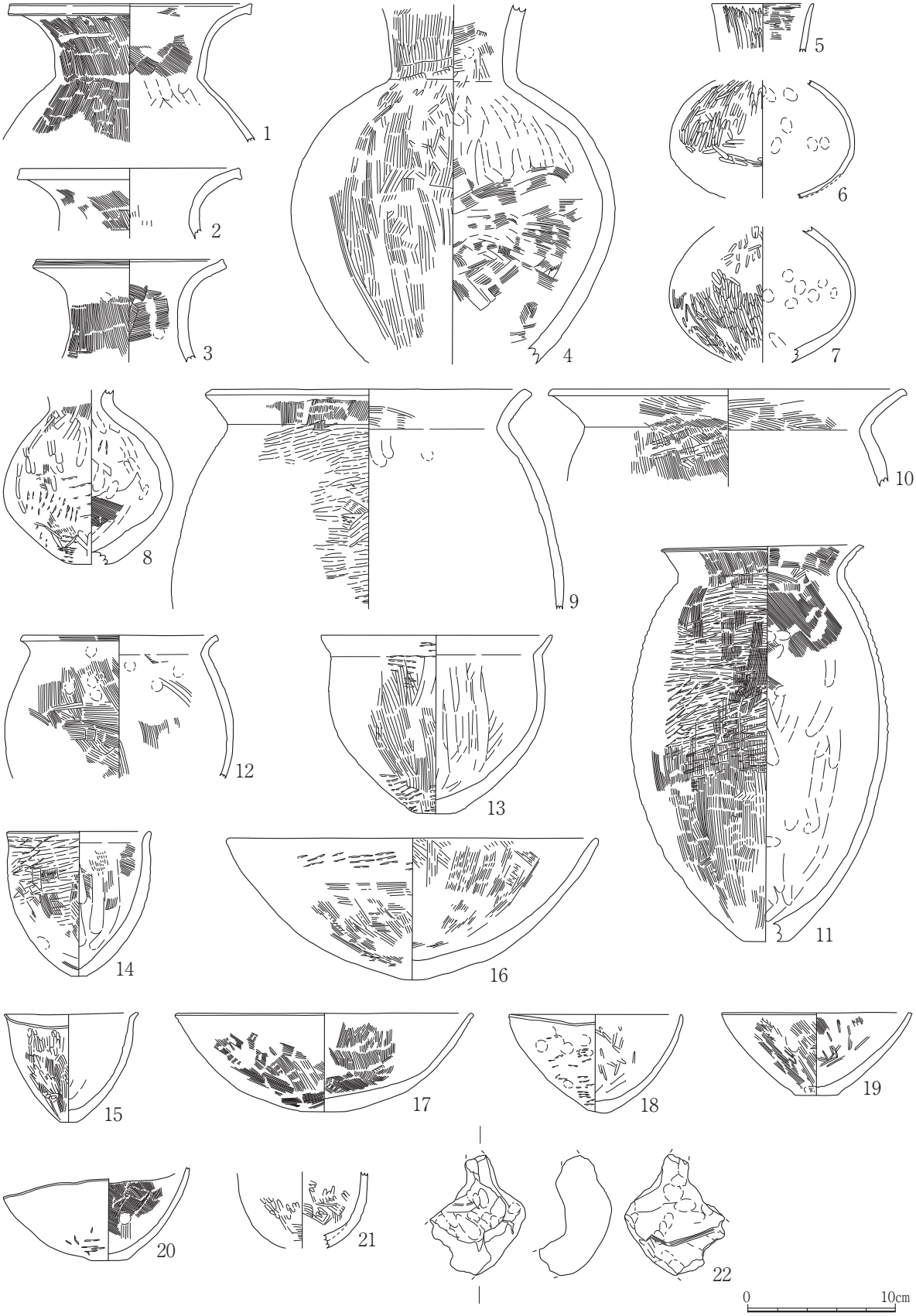


図 2-30　ST11 出土遺物実測図 (1)

粗いハケ、内面はナデ、ハケである。

５は長頸壺の口縁部と考えられる。口径は 6.8cmである。頸部は直立気味で、器肉は薄い。整形は外面がミガキ、内面はハケである。６、７は長頸壺の胴部破片と考えられ、口頸部は共に欠損する。器肉は薄く、整形は外面がミガキ、内面は指頭、ナデである。７は外面に黒斑が見られ、内面は黒色である。８も口頸部は欠損するものの長頸壺と考えられる。胴部の最大径は中央部にあり 11.6cmを測る。底部は小さな平底である。全体的に６、７より器肉が厚い。整形は外面にタタキ痕が残存している。

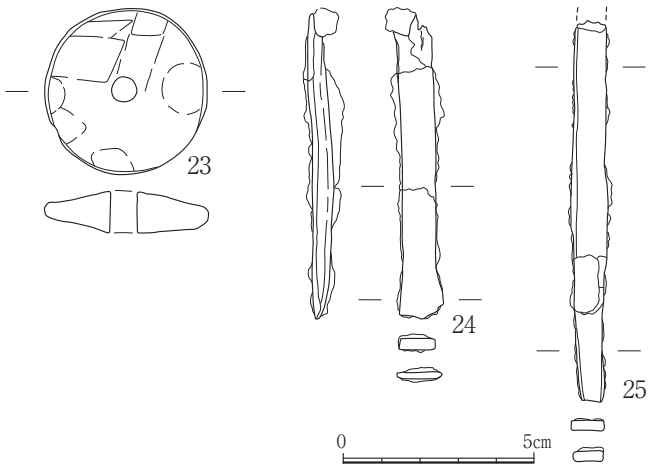


図 2-31　ST11 出土遺物実測図 (2)

９から 12 は甕である。９は口径 21.4cmを測るやや大型の甕である。口縁部が「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。整形は外面口縁部がハケ、胴部がタタキ、内面はナデ、ハケである。10 も口径 23.8cmを測るやや大型の甕である。口縁部は「く」字状に大きく外傾し、肩部はなだらかである。整形は外面口縁がハケ、胴部がタタキ、ハケ、内面はナデ、ハケである。11 はほぼ完形品の中型の甕である。法量は口径 13.3cm、器高 27.1cm、胴部最大径は中央部で 17.6cm、底径 3.1cmである。砲弾形を呈し、口縁部は「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。底部は小さい平底である。整形はタタキを基本とする。外面口縁はハケ、胴部上半はタタキ後、ハケ、下半はハケである。内面は上半がハケ、下半はナデである。12 は口径 13.2cmの小型の甕である。口縁は緩やかに外反し、肩部、胴部は張らない。整形は内外面共にハケである。器肉は薄く、堅致である。

13 から 20 は鉢である。13 から 15 は口縁部を短く屈曲させたものである。13 は口径 15.8cm、器高 12.2cm、底径 2.8cmを測る。口縁部は「く」字状に外傾し、胴部は僅かに丸味を持つ。底部は平底である。整形は外面にタタキ目を残す。14 は口径 9.7cm、器高 9.9cm、底径 1.1cmを測る小型の鉢である。口縁部は短く僅かに屈曲し、胴部には張りがなく、下半はすぼまる。底部は尖底気味である。外面にタタキ目を残す。15 はほぼ完形品で口径 8.9cm、器高 7.5cm、底径 1.2cmを測る小型の鉢である。口縁部は短く僅かに屈曲し、下半はすぼまる。底部は尖底気味である。

16 から 20 は口縁部がくびれずに開く形態のものである。16 は口径 25.2cmを測る大型品である。口縁部が大きく開き、底部は丸底である。外面にタタキ目を残す。17 も口径 20.0cmを測る大型品である。口縁部が大きく開き、底部は丸底である。整形は内外面共にハケである。18 から 20 は小型のものである。18 は口径 11.7cm、器高 6.8cmで口縁部は開き、胴部下半はすぼまり、底部は尖底である。整形はタタキ目を残す。19 は口径 13.0cm、器高 5.7cm、底径 3.0cmを測る。口縁部は開き、胴部下半はすぼまり、底部は平底である。整形は内外面がハケである。20 はほぼ完形品で口径 12.8cm、器高 6.4cm、底径 2.5cmを測る小型の鉢である。口縁部は開き、下半やや丸味を持つ。底部は平底である。外面にタタキ目を残す。外面には小さな亀裂が幾筋か走る。

21 は高坏である。脚部、口縁端部を欠損する。体部は丸味を持つ。整形は外面がナデ、ミガキ、内面底がハケである。

22 は土製支脚である。下半は欠損し、受け部の一部分が残存する。角状を呈する。整形は指頭、ナデである。

23 は土製有孔円盤である。中央部はやや厚みを増し、円孔を焼成前に穿つ。ナデ、指頭整形である

24、25 は鉄製品である。24 は一端部が広がり鑓の可能性がある。断面は長方形である。25 は鑓の柄部分か。一端部はやや細くなる。断面は長方形である。

ST12(図 2-32 ～ 34)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-5 他　**切り合い関係**；SK36、SD30A・33 に切られる
時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-8° -W
規模；4.4 × (4.3)m ×深さ 0.3m　**覆土**；黒色粘質土主体　**柱穴**；－
竈；位置・北壁　竈壁位置・中央部　構築材範囲長さ 95 ×幅 105cm×深さ 5cm　覆土・赤褐色粘質土　煙道長さ 165 ×幅 22cm　袖補強材・礫　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器片
周溝；2 条　周溝 1 幅 14cm×深さ 5cm　周溝 2 幅 17cm×深さ 7cm
その他付帯施設；中央部床面落ち込み　形状不整形 深さ 15 ～ 25cm
出土遺物；須恵器坏身、壺、土師器甕、叩石
所見；Ⅷ BW 区の中央部やや北寄りに位置し、グリッドは C9-8-5、C9-9-1 他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面もⅢ層下面に掘り込まれ、一部はⅣ層にまで掘り込まれている。平面形は南壁が SK36 に切られているものの方形を呈するものと考えられる。規模は一辺 4.4m、深さは 30 cmと浅い。主軸方位は N-8° -W で僅かに西に振る。

覆土は黒色粘質土を主体とする。

竈は北壁の中央部に位置し、焼成部の掘り方は長さ 67cm、幅 35cm、深さ 4cmと浅い。竈の構築材は黒褐色粘質土で全体が被熱する。袖等の構築材の範囲は長さ 95cm、幅 105cmである。袖部分の幅は 25cm程である。右袖部分に礫の補強材が認められる。また焚き口部分の上層で砂岩の自然礫が出土しているものの天井石ではない。

煙道は長く、長さ 1.6m、幅 0.22m で先端部は柱穴状になる。先端部の径は 36cm、深さ 18cmである。煙道部そのものの深さも 15cm程度であり、先端部が特に深く掘り込まれているわけではない。先端部には径 22cmの大型礫が出土しており、砂岩の自然礫で赤化している。煙道部先端の煙出におかれていた為に被熱したと考えられる。本遺跡では他にこうした類例は認められない。焼成部は赤化し、土器片が出土したに止まる。

柱穴は幾つか検出しているものの、本建物跡に伴う主柱穴は未確認である。

周溝は２条検出している。壁際のほぼ全周と東側壁より 25cm程内側でもう１条検出した。

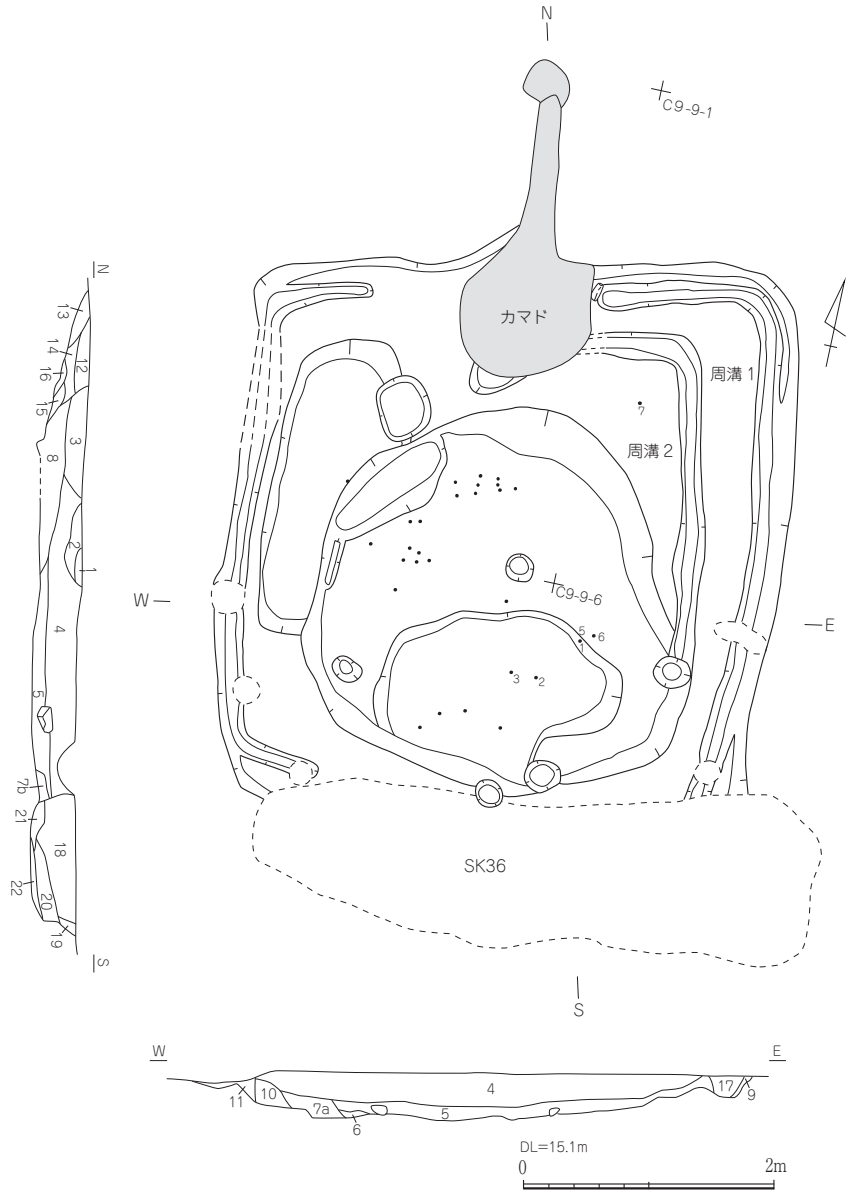
中央部床面で不整形の３× 2.8m、深さ 15cmから 25cmの皿状の掘り方を検出した。建物跡の構築の際に掘削されたものと考えられ、こうした中央部を掘り下げた類例が幾つか認められる。

遺物は覆土中から須恵器坏身、坏蓋が各４点出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-34 №１～ 11)

№１から６は須恵器である。１から３は坏身である。３点共に小型で受け身を有する。１は口径



土層説明

1　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色小ブロック多量含む
2　黒褐色粘質土
3　暗褐色粘質土　黒色・褐色小ブロック混入
4　黒色粘質土
5　黒色粘質土　黄褐色小ブロック、礫混入
6　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色土混入
7 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色小ブロック、土器混入
7 b 暗褐色粘質土　小礫多量、粒状黄褐色小ブロック混入
8　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
9　暗褐色粘質土　褐色小ブロック含む
10　黒褐色粘質土　黄褐色・黒色小ブロック混入
11　黒褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
12　暗褐色粘質土　黒色小ブロック多量、粒状黄褐色小ブロック、小礫混入
13　暗褐色粘質土　粒状黄褐色小ブロック、小礫混入
14　暗褐色粘質土　粒状黄褐色小ブロック、炭含む
15　暗褐色粘質土
16　黄褐色粘質土　黒色土混入
17　黒色土　Pit 覆土
18　黒色粘質土　SK36 覆土
19　暗褐色粘質土　SK36 覆土
20　黒色粘質土　SK36 覆土
21　黒褐色粘質土　SK36 覆土
22　黒褐色粘質土　SK36 覆土

図 2-32　ST12 遺構図

12.8cm、器高 2.8cm、底径 7.6cmを測る。受け部は短く、底部切り離しヘラケズリで平底である。外面にはロクロ目が残る。２は口径 12.7cmで底部は欠損するため判然としないが部分的にヘラケズリが認められる。３は口径 11.0cmで更に小型で器高 2.9cm、底径 6.5cmを測る。底部はヘラケズリで粗い。

４、５は壺か甕の口縁部と底部破片である。４は素口縁で、口縁部は大きく開く。５は底径 7.4cmを測る丸底である。外面は回転ヘラケズリである。

6は鉢と考えられる。口径26.3cmを測る。口縁部はやや開き気味に直線的に立ち上がる。口唇部は平坦である。

7から10は土師器の甕である。7は口径17.6cmを測り、口縁部は「く」字状に外傾し、口唇部は僅かに丸味を持つ。肩部はなだらかで張らない。整形は外面がナデ、内面はナデとヘラナデが顕著である。8は口径19.7cmで口縁部は外反し、素口縁である。整形は外面がナデ、ハケ、内面がナデである。9は口径19.4cmを測り、口縁部は外反し、素口縁である。整形は内外面共にナデである。10は胴部が欠損するものの、胴張甕の可能性がある。口径は21.2cmを測り、口縁部は外反する。内外面共にナデ整形である。

11は砂岩製の叩石である。扁平な楕円形で中央部、側縁部の一部に敲打痕が認められる。

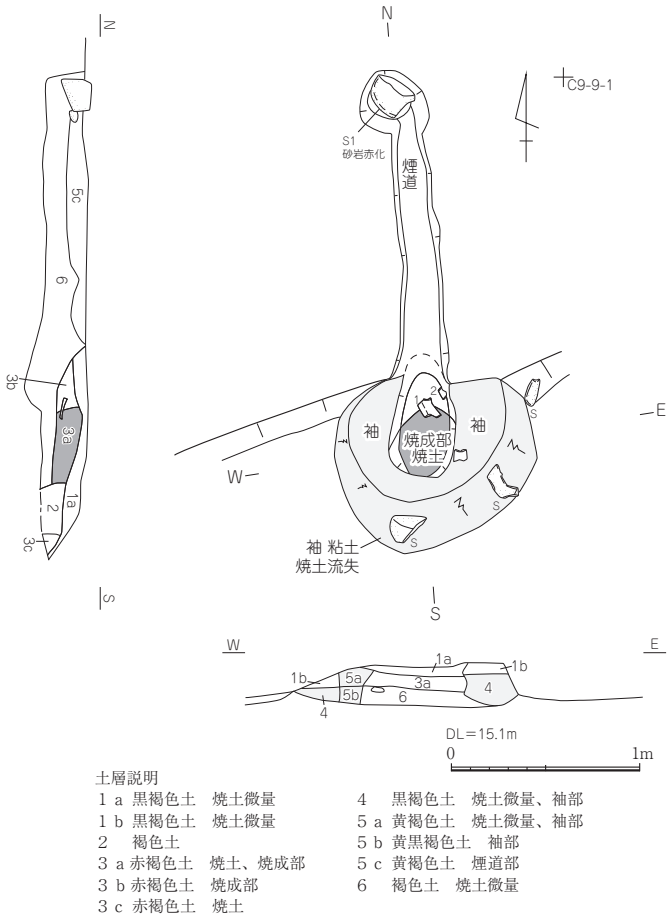


図2-33　ST12竈図

ST13(図2-35、36)

調査区；ⅧBW　**グリッド**；C9-8-25他　**切り合い関係**；ST18、SD27・49・58～63に切られる
時期；弥生後期後半　**形状**；多角形　**主軸方向**；N-10°-W?
規模；10.5×(4.72)m×深さ0.31m
覆土；上層暗褐色粘質土主体　**柱穴**；数9　主柱穴数(6)　主柱穴P1～6
炉跡；－　**ベッド**；造り付け　幅0.8～1.1m×高さ3cm
周溝；3条　幅15cm×深さ5cm
その他付帯施設；建物跡内土坑1基
出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、高坏、土玉、鉄鏃、投弾
所見；ⅧBW区の東南部に位置し、半分程しか検出しておらず、南半分は調査区外へと広がる。グリッドはC9-8-25、C9-9-21他に跨がる。古墳時代後期のST18が真上に構築されており、竈を検出している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は丸味を持った多角形と考えられ、六角形になる可能性が強い。規模は検出した範囲内で10.5mを測る超大型竪穴建物跡で本遺跡では最大である。主軸方位はP4、P5を基軸線に採るとN-10°-Wになる。

覆土は暗褐色粘質土が厚く被覆する。

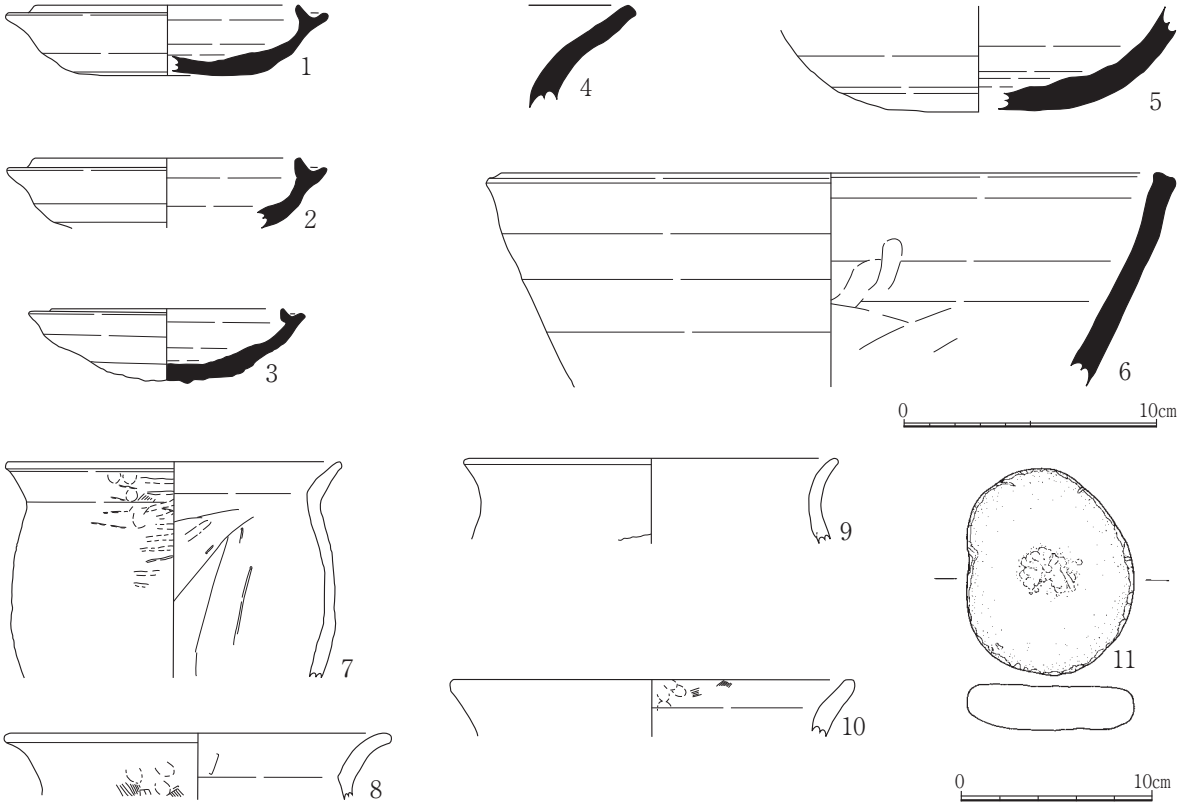


図 2-34　ST12 出土遺物実測図

炉跡は未検出で調査区外である。主柱穴は６本検出している。ベッド際で４本、中央部で２本である。規模からしてベッド際の主柱穴は７、８本だった可能性がある。ベッド際の P1 から P4 の径は 24cmから 36cmで深さは 43cmから 48cmである。中央部の P5、P6 は径 25cm、18cm、深さ 44cm、46cmでベッド際のものと大差ない。P3 から P6 は小礫で柱穴の回りを囲い根固めを行っている。ベッドは造り付けで幅 80cmから 110cm、高さは床面より３cm程度で低いベッドである。周溝は３条検出した。内１条は東側部のベッドを除去後に検出しており、建物跡の拡張が行われた可能性がある。

ベッド上で土坑 SK1 を検出している。径 50cm、深さ９cmで土器が若干纏まって出土している。

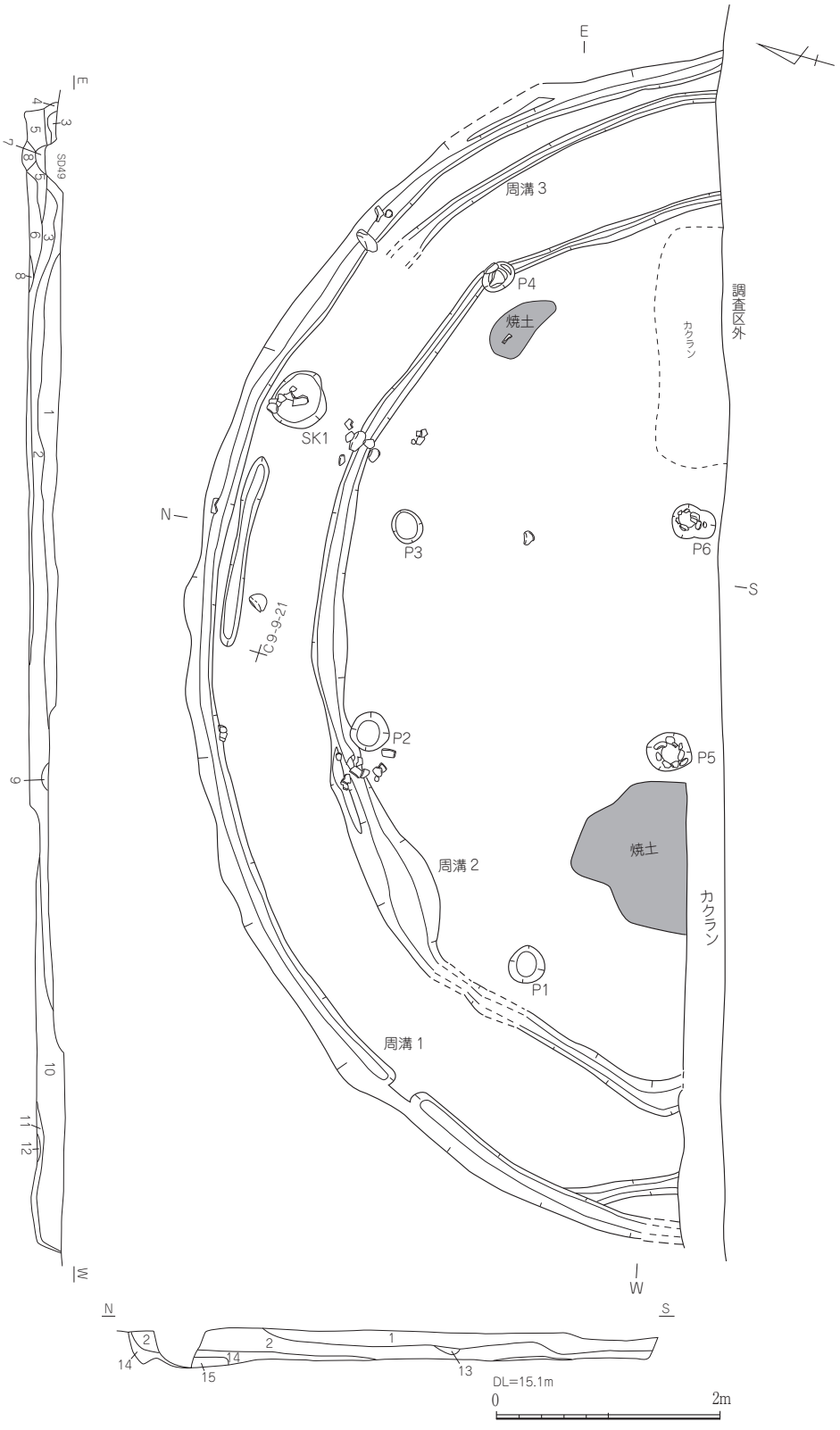
南西部の床面で焼土を 1.3m 程の範囲で検出している。また他でも若干焼土が出土しているものの、余り纏まりは認められず、炭化材も認められていないところから、焼失建物跡とは考えられない。

遺物出土状況はベッドの際、P2 の近くで土器がやや纏まって出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-36 №１～ 23)

№１から７は弥生土器壺と考えられる。１から４は広口壺で口縁部が外反して大きく開く。１は口径 16.1cmを測り、口唇部を僅かに拡張する。肩部はなだらかである。外面下半にタタキ目を残す。２は口径 17.8cmを測り、口唇部を僅かに拡張する。肩部はなだらかである。３は口径 16.2cmを測る。４は口径 20.4cmを測る。口縁部を拡張し、櫛描波状文を施す。５は長頸壺で口径は 8.6cmである。口縁部は直立し、器肉は薄い。整形は外面がミガキ、内面にはハケを施す。６、７は広口壺の胴部破片と考えられる。６は最大径 26.2cmを測り、丸味を持ち、頸部近くはすぼまる。整形は外面がタタキ、ハケ、内面は粗いヘラナデである。７は胴部下半で平底である。体部は丸味を持ち、最大径



土層説明

1　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
2　黒褐色土
3　暗褐色土　赤褐色土含む
4　黒色土　黒ボク
5　暗褐色土　黄褐色ブロック含む
6　黒褐色土　黄褐色小ブロック含む
7　黒褐色土
8　黒色土　黄褐色土混入、黒ボク
9　黒褐色土
10　暗褐色土　遺物含む
11　黒褐色土
12　黒褐色土　黄褐色土混入
13　黒褐色土
14　暗褐色土　黄褐色土含む
15　暗褐色土

図 2-35　ST13 遺構図

は 28cmを測る。整形は外面がハケでタタキを僅かに残す。内面はナデ、ハケである。

８から 10 は小型甕である。８は口径 11cmを測る。口縁部は短く外反し、肩部はなだらかである。整形は外面がハケ、内面はナデ、ハケである。９は口径 9.2cm、器高 10cm、底径 2.3cmを測る。口縁部は拡張して直立する。頸部は短く外反し、肩部はなだらかで、胴部は張る。底部は小さな平底である。器肉は薄く、整形は外面下半がミガキ、内面はヘラケズリ、ナデである。10 は胴部破片である。最大径は胴部中央にあり 13cmを測る。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はナデ、ハケである。

11 から 14 は鉢である。11 は口径 18.3cm、器高 8.3cm、底径 1.4cmを測る大型のものである。口縁部は大きく開き、口唇部は平坦である。底部は小さな平底である。12 は底部がやや突出した平底のものである。口径 13cm、器高 4.6cm、底径 2.6cmを測る。口縁部は大きく開き、体部下半は僅かに丸味を持つ。13 は底部が尖底のものである。口径 12.2cmを測り、歪みが生じている。14 は手づくねの鉢である。口径 6.4cm、器高 4..8cmを測る。底部は丸底である。内外面共に指頭、ナデ、ハケである。15 から 18 は高坏である。15 には僅かに坏部が残るものの、他は裾、脚部破片である。15 は坏部が僅かに残存し、脚部は短く、裾は開く。透かし円孔を有する。やや摩耗するものの、ミガキを施す。16 は底径 15.5cmを測る。脚部は短く、裾は大きく開く。透かし円孔を有し、ミガキを施す。17 も同様に裾部破片で底径 15.0cmを測る。裾は大きく開く。ミガキを施す。18 は脚部破片で、筒状の中空である。外面は落剥摩耗しているため整形は判然としないが、内面はハケ、ナデである。

19 は土玉である。算盤玉状を呈する。径 2.5cm、厚さ 1.8cmで僅かに扁平である。中央に焼成前に径 4mmの円孔を穿つ。

20、21 は鉄製品である。20 は有茎鏃で長さ 4.7cm、厚さ 0.5cm、重さ 4.5g を量る。頭部は菱形を呈し、茎の断面は長方形である。21 は長さ 3cmの残欠である。幅がやや広く厚さがないところから鑓の一部の可能性がある。

22 は砂岩製の投弾である。重さ 61g で卵形である。23 は台石である。亜角礫で長さ 20.6cm、幅 20.9cm、厚さ 10.4cm、重さ 6.72kg である。一部欠損する。表面の中央部は摩耗し、擦痕が認められる。被熱する。

ST14(図 2-37、38)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-14 他　**切り合い関係**；SB5、6、SX19、41、SK26、SD11 に切られる

時期；弥生末～古墳初　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-18° -E

規模；5.5 × (5.4)m ×深さ 0.35m

覆土；暗褐色粘質土主体

柱穴；主柱穴数 4　主柱穴 P1 ～ 4

炉跡；形状楕円形　規模 108 × 54cm×深さ 8cm　覆土黒色粘質土

ベッド；造り付け　幅 70 ～ 100cm×高さ 14cm

周溝；3 条　幅 8cm×深さ 3cm

その他付帯施設；－

出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、高坏、鉄鏃、磨石

所見；Ⅷ BE 区の南西部に位置し、グリッドは C9-9-14、C9-9-15 他に跨がる。３m 程東南に同時期

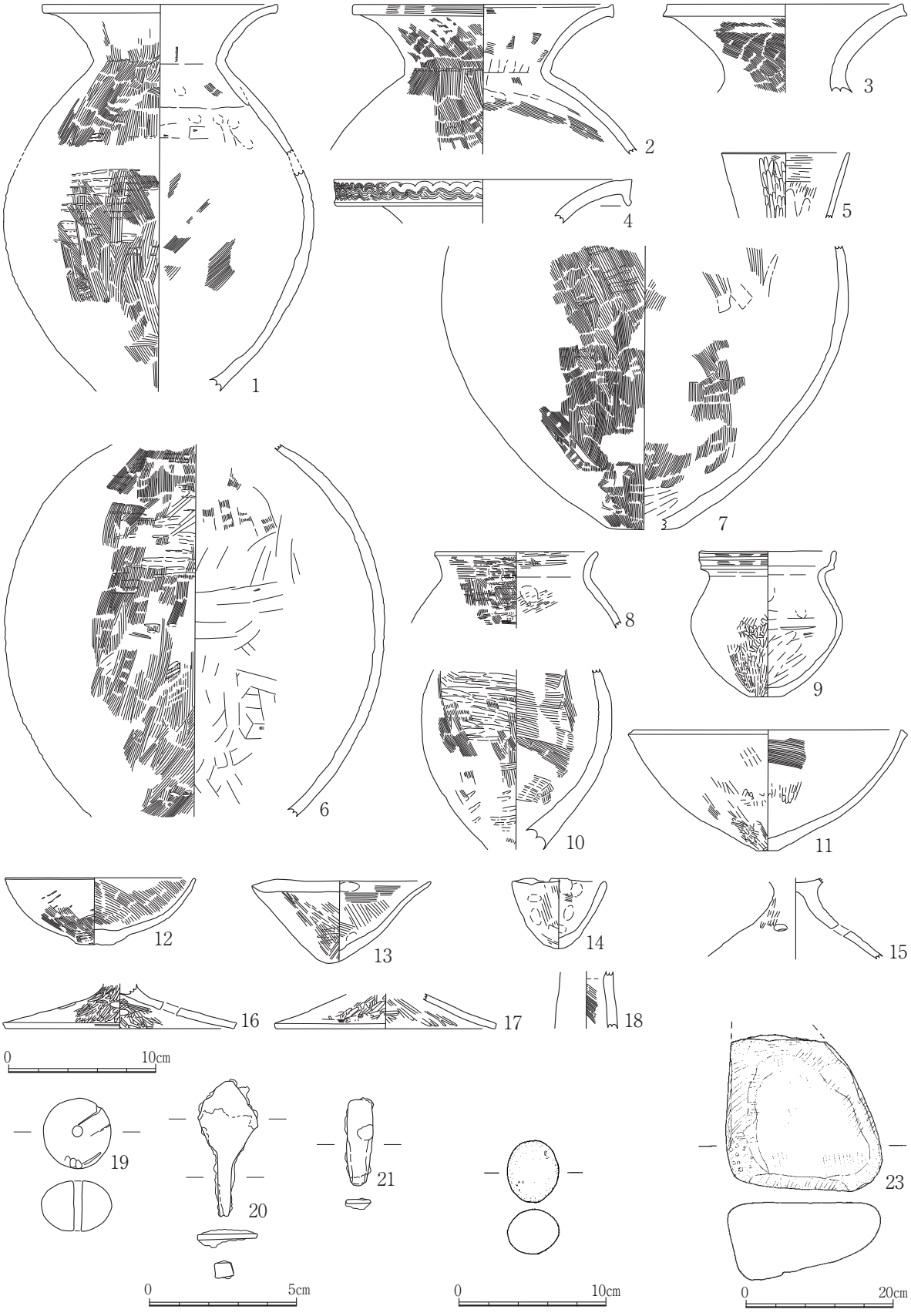
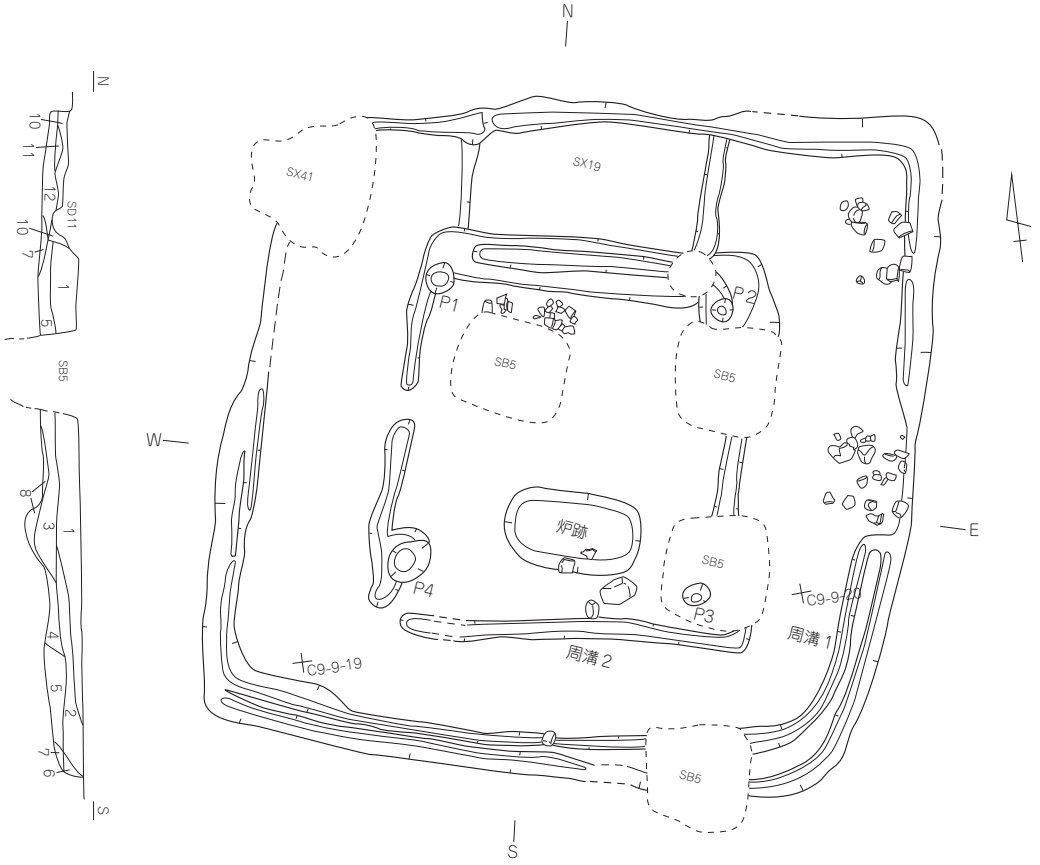


図 2-36　ST13 出土遺物実測図



土層説明

1	暗褐色土　粒状黒色・黄褐色土、遺物含む	7	暗褐色土　黄褐色・黒色土含む
2	暗褐色土　粒状黒色・黄褐色土含む	8	黒色土
3	暗褐色土　焼土混入、炭化物含む	9	暗褐色土　粒状黄褐色土含む
4	暗褐色土　焼土混入、炭化物含む	10	暗褐色土　SX19 覆土
5	暗褐色土　粒状黄褐色・黒色土含む	11	暗褐色土　SX19 覆土
6	黒褐色土　黄褐色小ブロック含む	12	黒褐色土　SX19 覆土

図 2-37　ST14 遺構図

の ST8 が隣接する。SB5 の柱穴５基が本竪穴建物跡を切る。また北側部は古代の SX19、41 にも壊される。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は北側部を一部破壊されているものの隅丸方形になるものと考えられる。規模は一辺約 5.5m で深さは 30cm強である。主軸方位は N-18° -E で東に振る。ST8 とほぼ同一方位を採る。

覆土は上層を暗褐色粘質土が厚く被覆する。下層も暗褐色粘質土で黄褐色土塊が混じる。

炉跡はやや南寄りに位置し、楕円形で規模は長径 108cm、短径 54cmで深さ８cmと浅い。覆土は黒色粘質土で焼土が混じる。炉跡の南側には大型礫が出土している。主柱穴は４本でベッド際の四隅に穿たれている。径 14cmから 26cmでやや小さく、深さは 28cmから 45cmを測りしっかりした掘り方を持つ。ベッドは壁際を全周するものと考えられるが部分的に破壊されている。検出したところでは幅 70cmから 100cmで高さは床面より 14cmとやや低い。周溝は壁際とベッド際で検出している。部分的に途切れるもののほぼ全周している。南側部分では２条になるところも認められる。北側は

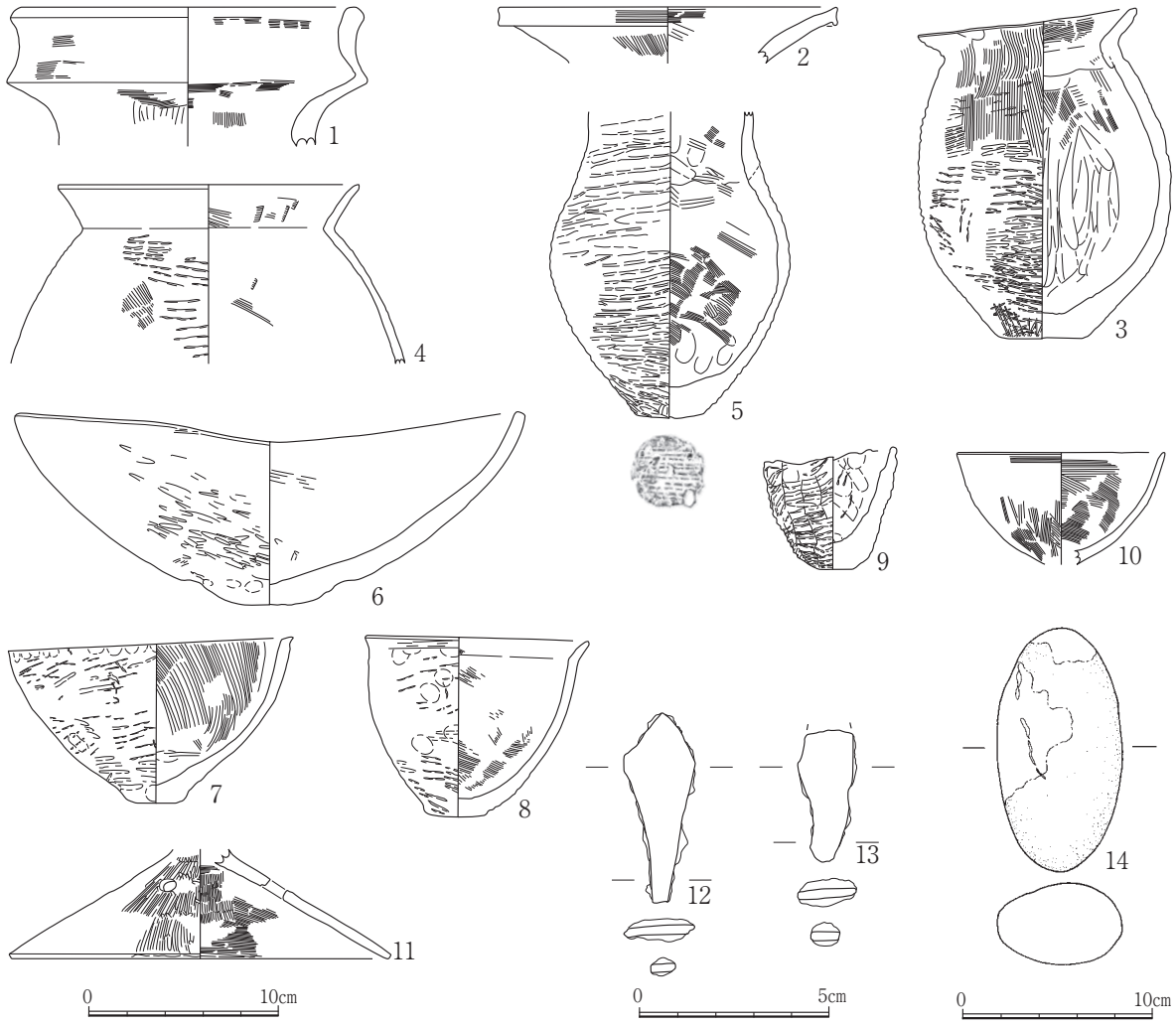


図 2-38　ST14 出土遺物実測図

SX19 と切り合い関係にあるものの、SX19 の底面で ST14 の周溝を検出した。

遺物出土状況は東壁で２ケ所、床面北側部で１ケ所の遺物集中を検出している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-38 №1 ～ 14)

№1、２は弥生土器壺である。１は口径 17.8cmを測る複合口縁壺である。口縁部は外反気味に長く立ち上がり、口唇部は丸味を持つ。頸部は反る。整形は内外面共にハケ、ナデである。２は広口壺で口径 18cmを測る。口縁部は大きく開き、口縁端部をやや拡張する。整形は内外面共にナデ、ハケである。

３から５は甕である。３はやや小型で口径 11.6cm、器高 17.7cm、底径 4.7cmを測る。口縁部は外反し、胴部は張らない。平底である。器肉は厚い。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はナデ、ハケである。４は口径 16cmを測る。口縁部は外傾し、胴部は張らない。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はナデ、ハケである。５は口縁部を欠損する。肩部はなだらかで、平底である。整形は外面がタタキ、内面はナデ、ハケである。

６から９は鉢である。６は口径 26.4cm、器高 10.3cm、底径 3.6cmの大型品である。口縁部は大きく開き、底部はやや丸底気味である。整形は外面がタタキ、ナデ、ミガキ、内面はナデ、ハケである。７はやや大型の完形品である。口径 15.2cm、器高 8.5cm、底径 3cmを測る。口唇部は平坦で、体部は丸味を持つ。底部は突出気味の平底である。整形は外面がタタキ、ナデ、内面がナデ、ハケである。８は口縁部が僅かにくびれるものである。口径 11.8cm、器高 9.7cm、底径 3cmのやや小型品である。整形は外面がタタキ、ナデ、内面がナデ、ハケである。９は小型の鉢である。口径 6.9cm、器高 6.5cm、底径 1.8cmである。体部は直線的に立ち上がり、平底である。器肉は厚い。整形は外面に顕著にタタキを残し、内面は指頭、ナデである。

10、11 は同一個体の高坏と考えられる。10 は坏部で体部に丸味を持つ。口径は 11cmで口縁部は僅かにくびれる。11 は裾部で底径 20.1cmを測り、大きく開く。円形透かしを有し、整形は外面がミガキ、内面はハケで焼成は堅致である。

12、13 は鉄鏃である。12 は長さ 5cm、厚さ 0.2cm、重さ 8g を量る。有茎鏃で、頭部は菱形である。茎の断面は長方形である。13 は頭部を欠損する。茎の断面は長方形である。

14 は磨石である。楕円礫で側縁等に赤色顔料が付着する。砂岩製である。

ST17(図 2-39 ～ 41)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-9-12 他　**切り合い関係**；SB5、SD9・28・29・64 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-9° -W

規模；4.3 × (4.2)m ×深さ 0.2m

覆土；黒褐色粘質土主体

柱穴；主柱穴数４　主柱穴 P1 ～ 4

竈；位置・北壁　竈壁位置・中央部　構築材範囲長さ (90) ×幅 115cm×深さ 5cm　覆土・黄褐色土粘質土、焼成部赤褐色土焼土　煙道長さ (45) ×幅 (12)cm　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無

周溝；1 条　幅 15cm×深さ 5cm

その他付帯施設；中央部掘り込み　不整形 (1.3) × 1.2m ×深さ 14cm

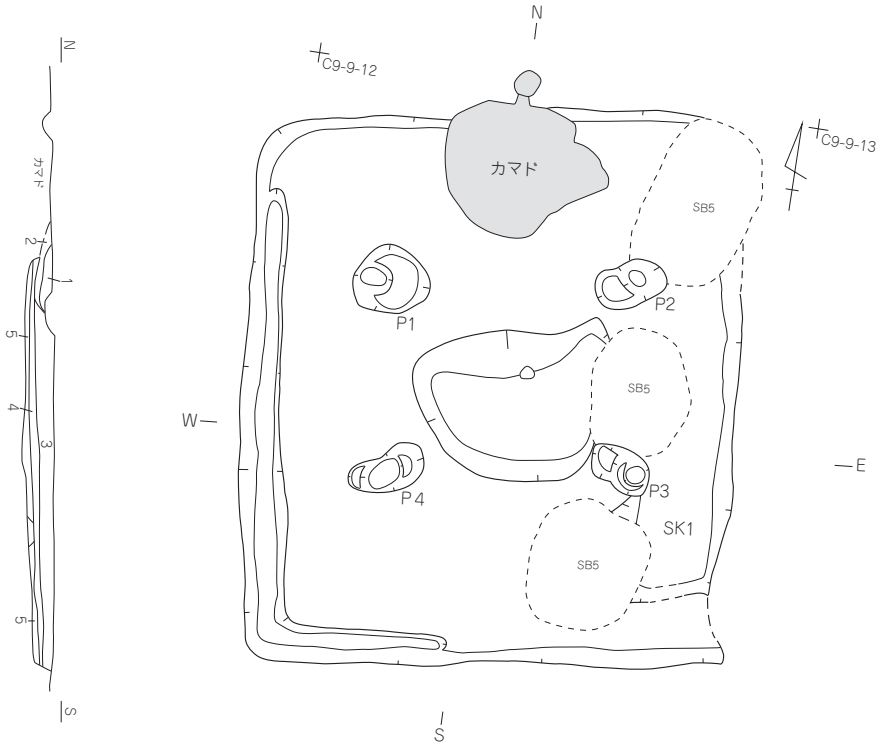
出土遺物；須恵器坏蓋、坏身、土師器鉢

所見；Ⅷ BW 区の東端に位置する。グリッドは C9-9-11、C9-9-12 他に跨がる。SB5 の柱穴３本に東側を壊され、また土坑にも壊されている。西北に同時期の ST12 が４m 程離れて位置している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は方形と考えられ、規模は一辺 4.3m を測り、深さは 20cmである。主軸方位は N-9° -W で若干西に振り、ST12 とほぼ同じである。また規模等も似ている。

覆土は黒褐色粘質土が全体を被覆し、床面に近い層は黄褐色粘質土塊が混じる。

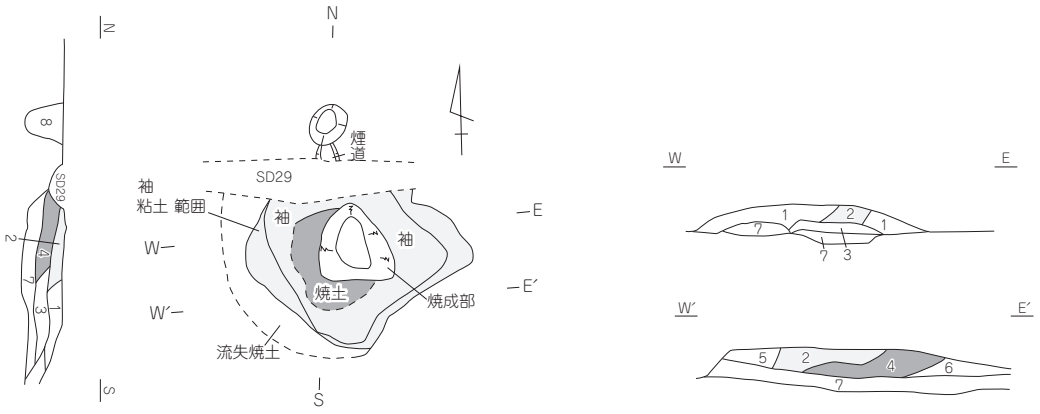
竈は１基で北壁中央部に造り付けられる。規模は建物跡の北壁が溝により壊されており復元で長さ 90cm、両袖幅 115cmである。焼成部の掘り方は長さ 40cm、幅 37cmでやや不整形で深さは５cmと浅い。煙道も長さは判然としない。竈は黄褐色粘質土で構築されており、袖補強材、天井石、支脚、竈内遺物等はない。焼成部は被熱して赤化している。

主柱穴は４本で床面中央部に配置する。径 27cmから 38cmで、深さは浅いもので 29cm、深い P1



土層説明
1　黒褐色土
2　暗褐色土　粒状黄褐色土、遺物含む
3　黒褐色土
4　黒褐色土　粒状黄褐色土含む
5　暗褐色土　黄褐色小ブロック含む

図 2-39　ST17 遺構図



土層説明
1　黒褐色土
2　黄褐色粘質土　焼土、袖、黒色土混入
3　黄色粘質土　黒色土混入、焚口
4　赤褐色土　焼土、焼成部
5　黄褐色粘質土
6　黒褐色土　黄褐色ブロック混入
7　褐色粘質土
8　黒色土

図 2-40　ST17 竈図

で 40㎝を測る。竈を持つ建物跡で主柱穴を有する例は極めて少ない。周溝は西壁で検出しているのみである。中央部では不整形の浅い落ち込みを検出している。長軸 1.1m、短軸 0.6m、深さ 14㎝のもので竪穴建物跡に伴うものと考えられる。

遺物出土状況は№３は建物内 SK1 からの出土である。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-41 №１～３)

№１、２は須恵器坏蓋と坏身である。１の天井部はやや平坦で手持ちヘラケズリで粗い。２は口径 17.0㎝で小型のものである。受け部は短く立ち上がる。

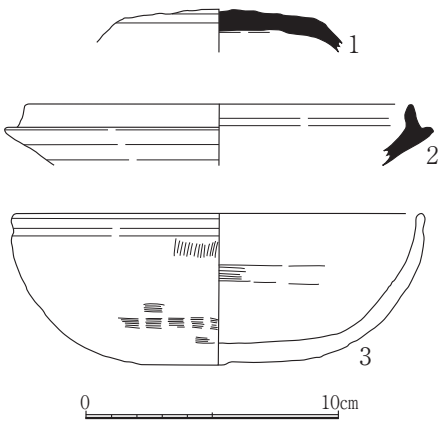


図 2-41　ST17 出土遺物実測図

３は土師器鉢か。口径 16㎝、器高 6㎝を測り、碗状の器形である。口縁部外面が沈線状に括れ、体部は丸味を持つ。底部はやや丸底気味で、手持ちヘラケズリで粗い。他はロクロナデである。色調は赤褐色を呈する。

ST18(図 2-42 ～ 44)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-25 他　**切り合い関係**；ST13 を切る、SD27・60・61 に切られる
時期；古墳後期　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-61° -W
規模；(2.4) × (1.9)m ×深さ 0.08m
覆土；暗褐色粘質土　**柱穴**；－
竈；位置・西壁　竈壁位置・中央部？　構築材範囲長さ (55) ×幅 (120)㎝×深さ (4)㎝　覆土・黒褐色土　煙道長さ (33) ×幅 (14)㎝　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器片
出土遺物；土師器甕
所見；Ⅷ BW 区の東南部に位置し、1/3 程しか検出しておらず、南側は調査区外へと広がる。グリッドは C9-8-25、C9-9-21 他に跨がる。ST13 の真上に構築している。幅 35㎝の SD27 がど真ん中を壊している。また調査区境際も撹乱を受けており、遺存状態は極めて悪い。遺構検出面、床面共に ST13 の覆土中である。建物跡の北東隅部分を検出に止まるものの、平面形は方形または隅丸方形になるものと考えられる。規模は北西部辺が 2.4m、東辺が 1.9m のみを検出した。深さは８㎝と極めて浅い。主軸方位は N-61° -W で大きく西に振る。

覆土は黒褐色粘質土が主体で一部暗褐色粘質土が見られる。層厚が薄い。

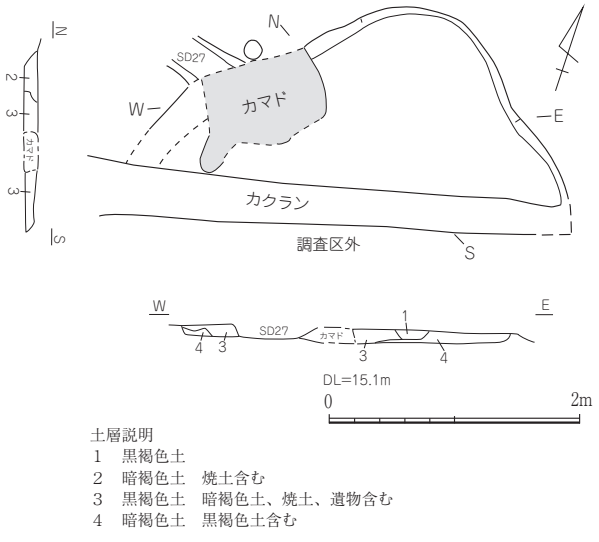


図 2-42　ST18 遺構図

竈は西壁中央部に造り付けられている。遺存状態が極めて悪く、更に竈の中央部をSD27が壊しており、部分的に袖、焼成部が残存していた。竈全体の大きさは長さ55cm、幅120cmである。焼成部の規模は長さ47cm、幅55cm、深さ4cmで焼土が残る。袖は黄褐色粘質土で構築されており、右袖の幅は22cm程度で左袖はほとんど残存しない。袖補強材は認められない。煙道は不明確で壁より18cm程離れたところに柱穴状のものを検出し、焼土が残っていることから煙道の可能性が強い。天井石、支脚等は検出していない。竈内からは土器片が若干纏まって出土している。

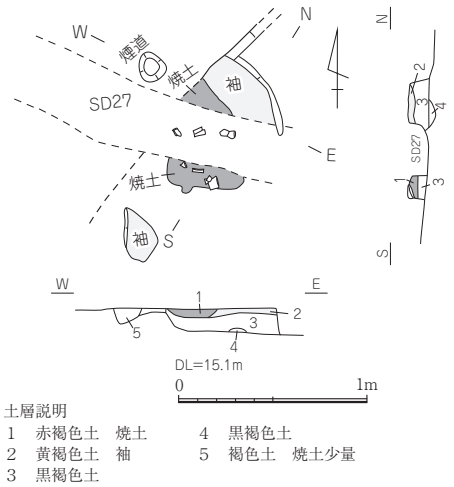


図2-43　ST18竈図

主柱穴等の付帯施設は未検出であった。

遺物出土状況は竈内から出土した№1の土師器甕のみである。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物(図2-44№1)

№1は土師器甕である。口径18.2cmを測る。口縁部は短く緩やかに外反する。肩部､胴部は張らない。摩耗し、内外面ナデか？。

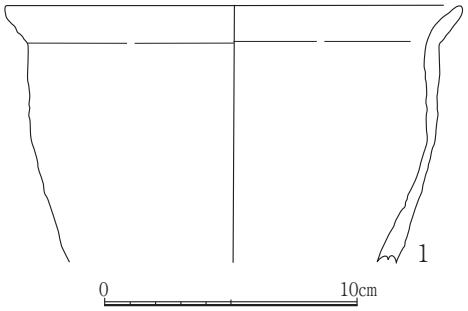


図2-44　ST18出土遺物実測図

ST19(図2-45、46)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-3-25他　**切り合い関係**；SD35に切られる

時期；古墳後期　**形状**；隅丸方形？　**主軸方向**；N-15°-W

規模 5.3 × (2.2)m ×深さ0.27m

覆土；上層黒褐色粘質土、下層黒褐色土粘質土に黄褐色土塊混入　**柱穴**；－

竈；未検出　**ベッド**；造り付け　幅70～150cm×高さ6cm

周溝；1条　幅8cm×深さ5cm

その他付帯施設；土坑

出土遺物；須恵器坏身、土師器甕、鉢、台付鉢、叩石

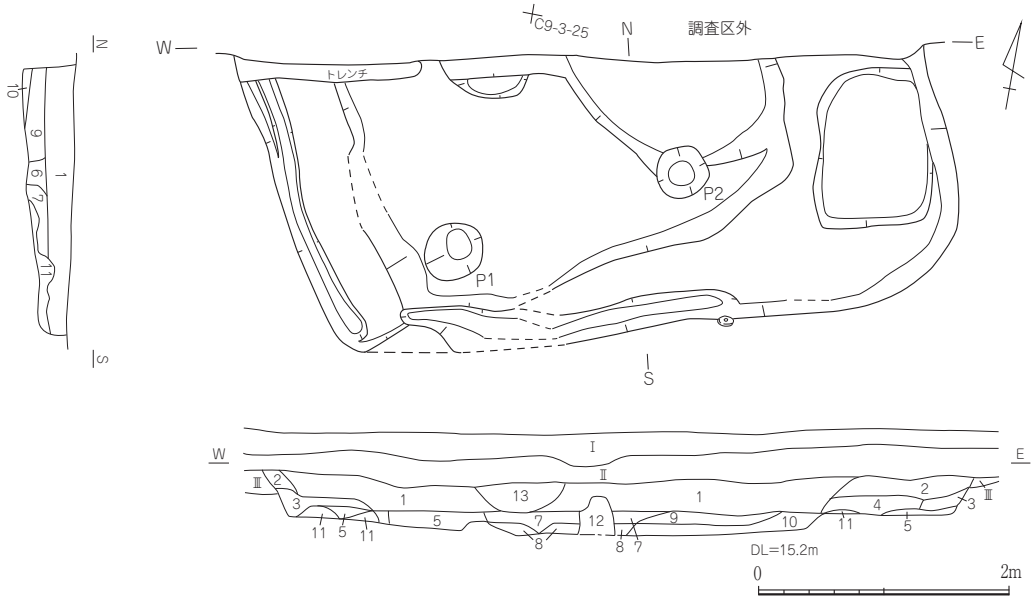
所見；Ⅷ BW区中央北端に位置し、グリッドC9-3-24、C9-3-25に跨がる。検出したのは南側半分程で残りは調査区外へと広がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は隅丸方形か単なる方形と考えられる。規模は南辺が5.3mで南北は不明である。深さは27cmで掘り方はしっかりしている。主軸方位はN-15°-Wで西に振る。

覆土は上層に黒褐色粘質土が被覆する。床面近くは黒褐色粘質土に黄褐色土塊が混入し、貼床となっている。

主柱穴は南の両脇のP1、P2の2本は可能性がある。P1は径40cm、深さ26cm、P2は径34cm、深さ25cmである。ベッドは南西部では極めて狭く、東側部は広くなっている。高さは床面より6

cm程で黄褐色粘質土に黒褐色粘質土の混じる土である。ベッドと認識したものは単なる中央部掘り込みに伴い壁際が残され、ベッド状を呈しただけの可能性がある。

遺物出土状況は包含層より土器等が若干出土した程度である。



土層説明

Ⅰ　耕作土	6　黒褐色土　褐色土混入
Ⅱ　黒褐色土　遺物包含層	7　暗褐色土　赤褐色土含む
Ⅲ　黒褐色土	8　暗褐色土　黒色土混入
1　黒褐色土　粒状黄褐色土含む	9　暗褐色土　黄褐色ブロック混入
2　黒褐色土	10　黒褐色粘質土
3　黒褐色土	11　黄褐色粘質土　黒色土混入
4　黒褐色土	12　黒色土
5　黒褐色土　黒色土混入	13　黒褐色土　SD35 覆土

図 2-45　ST19 遺構図

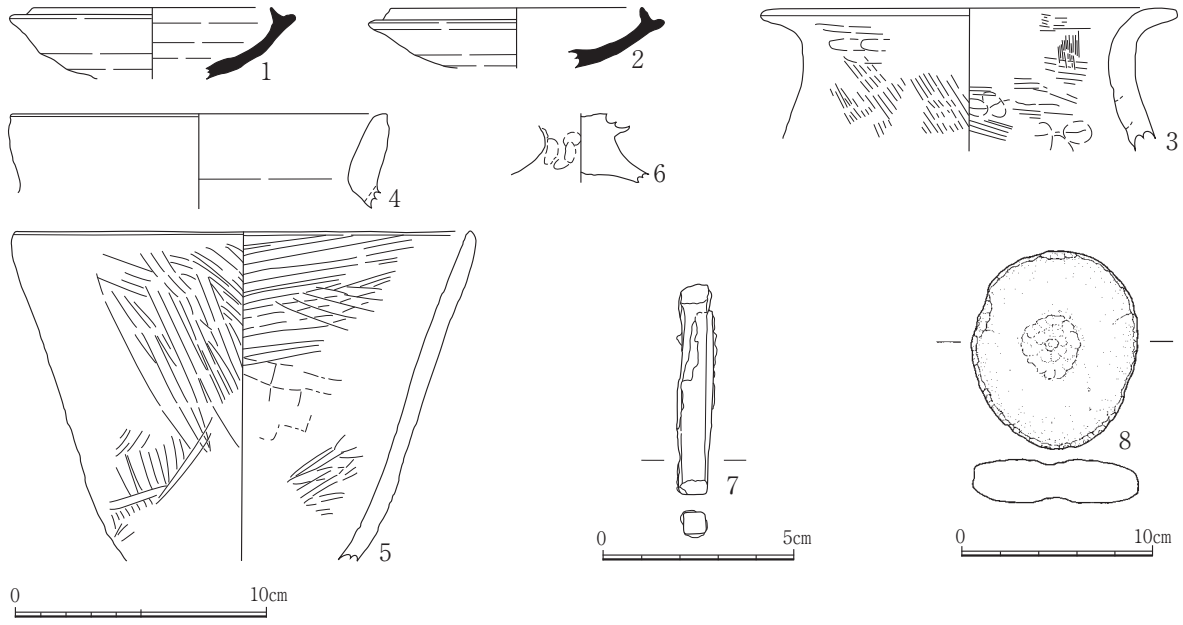


図 2-46　ST19 出土遺物実測図

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-46 №1 ～ 8)

№1、２は須恵器坏身である。小型のもので１は口径 11.3cmである。受け部は短い。外面に自然釉が掛かる。２は口径 11.7cmでやはり受け部は短い。

３、４は土師器甕である。３は口径 16.6cmで口縁部は強く外反する。肩部は張らない。整形は口縁部がナデ、他はハケである。４は口径 14.8cmで口縁部は直立する胴の張る丸甕と考えられる。整形は内外面共にナデである。

５は口径 18cmの鉢である。体部は直立気味に僅かに開き、素口縁である。整形は口唇部がヨコナデ、体部内外面共に粗いハケである。

６は台付鉢の脚部と考えられる。台部は短く開く。整形は指頭、ナデ、鉢部内面はハケである。

７は不明鉄製品である。断面が方形である。

８は叩石で長さ 10.3cm、厚さ 2.3cm、重さ 311g である。扁平な楕円礫を素材とする。中央部表裏面共に敲打痕で凹む。側縁部も全周敲打痕が顕著に認められる。砂岩製である。

ST20(図 2-47 ～ 49)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-9 他　**切り合い関係**；SD29・30・35 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-37° -W

規模；5.7 × 4.6m ×深さ 0.17m　**覆土**；黒褐色粘質土主体

竈；位置・北壁　竈壁位置・やや東寄り　構築材範囲長さ 95 ×幅 155cm×深さ 9cm　覆土・黄褐色粘質土　煙道長さ 55 ×幅 35cm　袖補強材・袖石　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器片

その他付帯施設；中央部掘り込み

出土遺物；須恵器坏蓋、坏身、壺、土師器甕、鉄鏃

所見；Ⅷ BW 区中央部やや西寄りに位置し、グリッドは C9-8-9 他に跨がる。ST12 が東側に ST24 が西側に位置している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は長方形で東壁は立ち上がりが判然としないでやや丸味を持った形に掘り上がっている。規模は南北辺 5.7m、東西辺 4.6m で深さ 0.17m で浅い。主軸方位は N-37° -W で西に振る。

覆土は黒褐色粘質土で層厚は薄い。床面には黒褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じる。

竈は北壁のやや東寄りに片寄る。竈の規模は長さ 95cm、幅 155cmで構築材の流出は長さ 160cm、幅 155cmである。焼成部の掘り方は長さ 65cm、幅 75cmの楕円形の掘り方で深さは 9cm程度である。焼土を確認している。焼土は焚き口部､袖部でも確認している。袖の幅は 30cmから 40cm程である。構築材は黄褐色粘質土で右袖からは袖石が出土している。煙道は壁外に延び長さ 55cm、幅 35cmを測る。天井石､支脚等はない。焚き口部から土器片が出土している。竈周辺には貼床が認められた。

柱穴は竪穴建物跡内からいくつか検出しているものの、本竪穴建物跡に伴わない。竪穴建物跡の中央部では 2m × 1.3m の楕円形で深さ 18cmの落ち込みを検出している。

完掘写真では周溝等が伴うものとなっているが、実際に周溝が伴っていたかは不明である。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-49 №1 ～ 7)

№1 は須恵器坏蓋である。天井部はやや平坦で、手持ちヘラケズリを施し粗い。２は坏身で口径

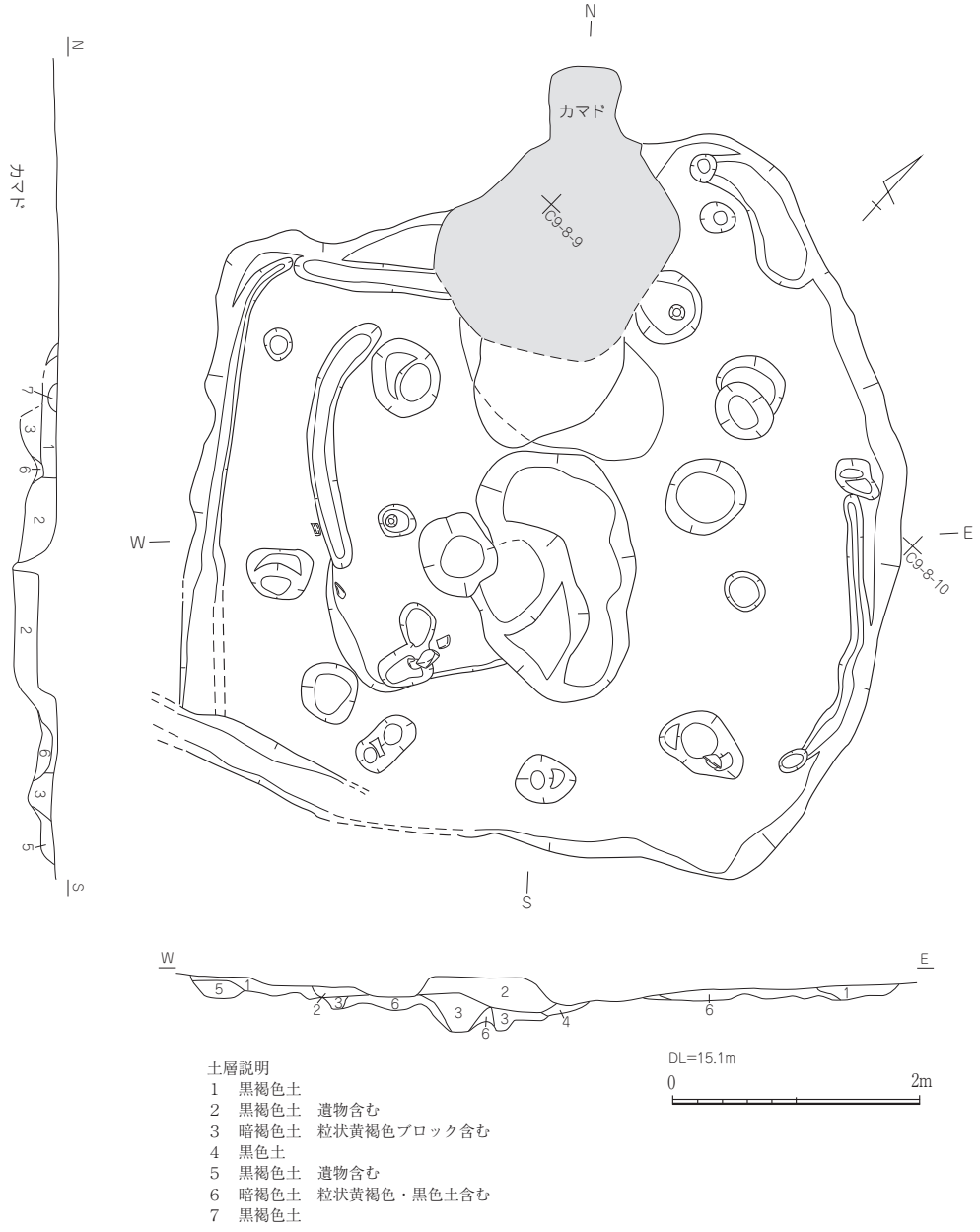


図 2-47　ST20 遺構図

13.2cmの小型のものである。受け部は短い。

３、４は須恵器の壺と考えられる。３は口径 19.5cmを測る。口縁部は直立し、僅かに肥厚し、口唇部は平らである。肩部は張る。整形は胴部外面が平行タタキ、内面は同心円当て具痕である。４は口径 24cmを測る。口縁部は肥厚し、内側端部は突き出る。口唇部上端は平坦である。内外面共に自然釉が掛かる。

５、６は土師器甕である。５は口径 16.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、肩部張らない。整形は外面がナデ、内面はヘラケズリを明瞭に残す。６は口径 20.8cmを測る。口縁部は外反する丸甕である。整形は内外面共にナデである。

７は鉄鏃である。有茎方頭式で鏃部の長さ 6.4cm、先端部の幅は 3.3cmを測る。茎は部分的に破損している。残存重量は 13.3g である。

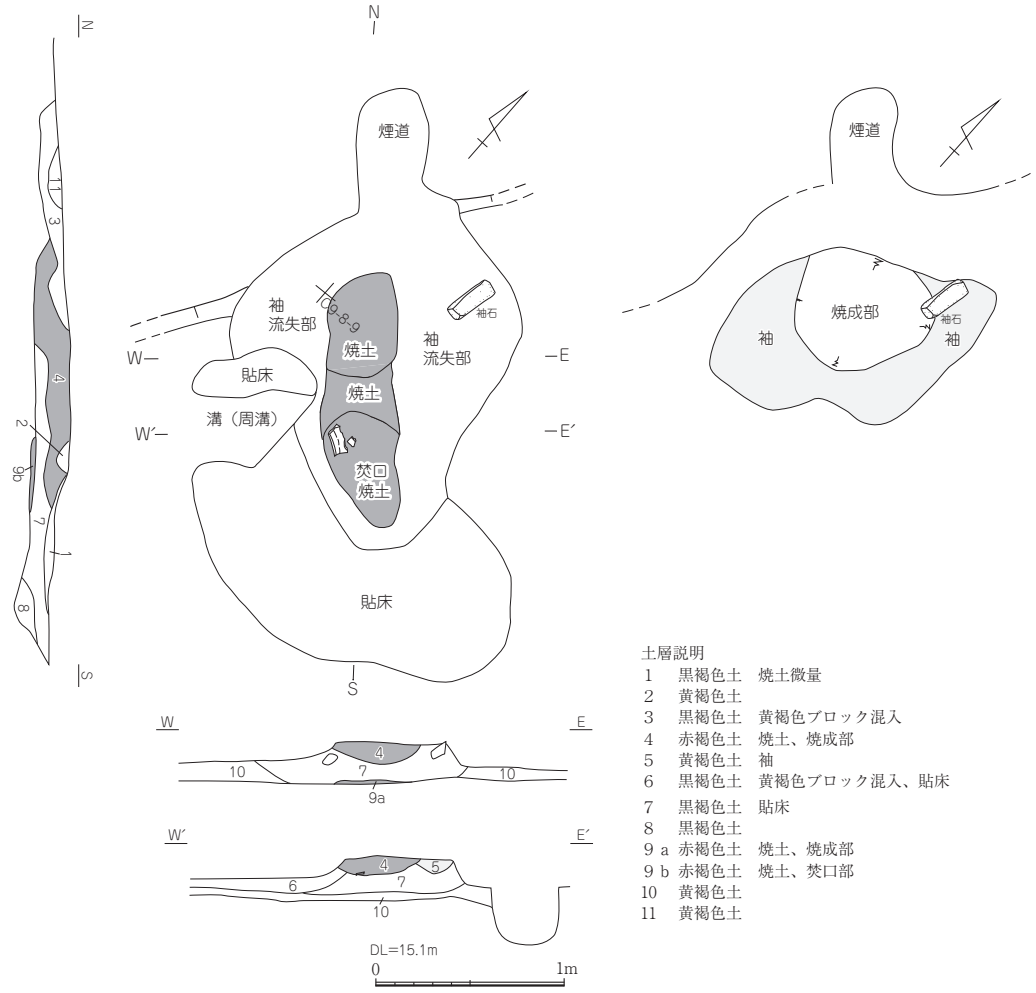


図 2-48　ST20 竈図

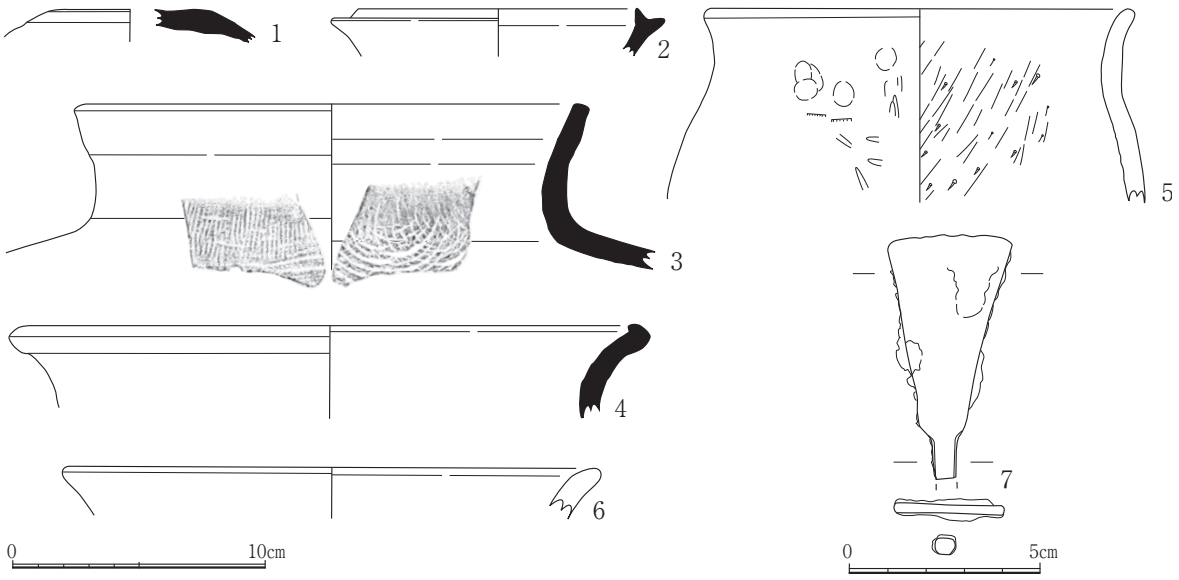


図 2-49　ST20 出土遺物実測図

ST23(図 2-50 ～ 52)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-17 他　**切り合い関係**；SB10、SK47、SD26・35・47 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-8° -E

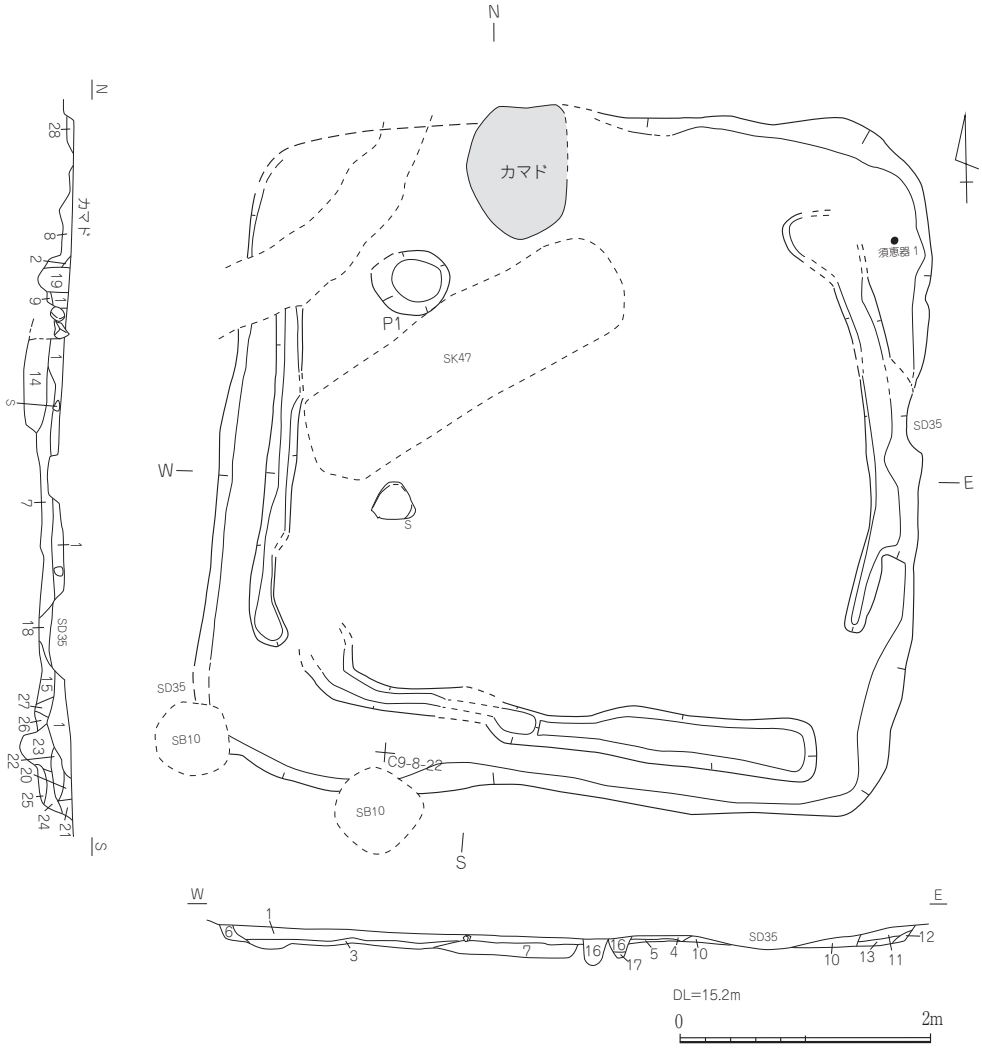
規模；5.5 × 5.6m ×深さ 0.18m

覆土；上層黒褐色粘質土、貼床暗褐色粘質土に黄褐色土塊　**柱穴**；－

竈；位置・北壁　竈壁位置・やや西寄り　構築材範囲長さ (110) ×幅 (80)cm×深さ 4cm　覆土・暗褐色粘質土　煙道不明　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器片

出土遺物；須恵器蓋、叩石、台石

所見；Ⅷ BW 区の西に位置し、グリッドは C9-8-17 他である。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は



土層説明

1　黒褐色粘質土　土器、小～大礫含む
2　暗褐色粘質土
3　黒褐色粘質土　褐色土混入、土器含む
4　黒褐色粘質土
5　黒褐色粘質土　黄褐色土混入
6　暗褐色粘質土
7　暗褐色粘質土　黄褐色・明黄褐色小ブロック、土器、小・中礫混入
8　暗褐色粘質土　粒状褐色小ブロック・土器・小礫多量混入
9　暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
10　黄褐色粘質土　暗褐色土多量混入
11　暗褐色粘質土
12　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック混入
13　黄褐色粘質土　暗褐色土混入
14　黒色粘質土
15　黄褐色粘質土　暗褐色土混入
16　黒褐色粘質土
17　暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
18　暗褐色粘質土　粒状黄褐色土、小・中礫混入
19　黒色粘質土
20　暗褐色粘質土
21　黒褐色粘質土
22　褐色粘質土
23　黒褐色粘質土　黄褐色土多量混入
24　黒褐色粘質土
25　褐色粘質土　黒褐色土多量混入
26　黄褐色粘質土
27　暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
28　暗褐色粘質土

図 2-50　ST23 遺構図

Ⅳ層上面に掘り込まれている。北側部分はSD26、SD47に中央部をSD35に切られる。また多くの柱穴が竪穴建物跡を穿って壊している。それでも平面形は隅丸方形になるものと考えられ、規模は5.6m、5.5mで深さは18cmと浅い。主軸方位はN-8°-Eで僅かに東に振る。

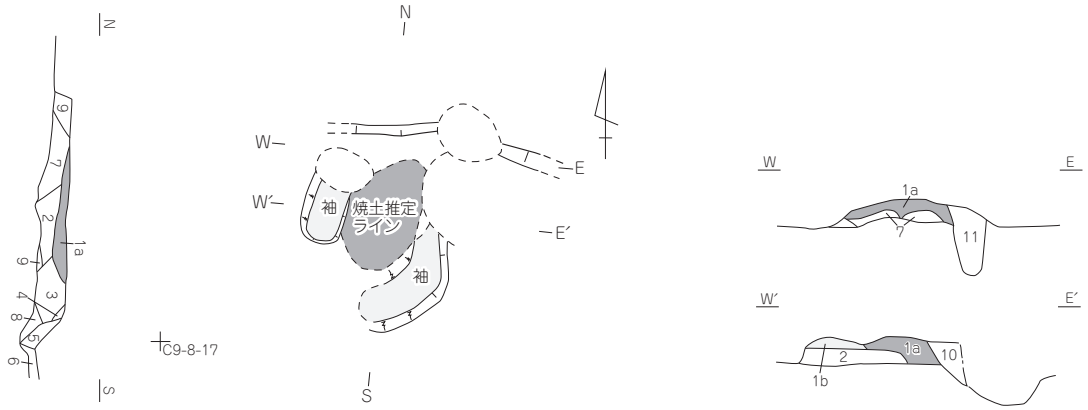
覆土は上層が黒褐色粘質土が薄いながらも被覆している。下層は貼床で暗褐色粘質土で黄褐色土塊が混じる。

竈は北壁でやや西側に片寄る。大部分が溝跡、柱穴跡に壊され遺存状態は極めて悪い。部分的に焼土、袖構築粘土を検出したに止まる。残存部で規模は長さ110cm、幅80cmである。焼成部は40×70cm程度と考えられ深さ4cm程で焼土が多量に残る。袖も壊れており残存幅30cm強である。煙道はSD26に破壊されている。袖補強材、天井石、支脚等は出土していない。袖部分からは土器片が僅かに出土している。

主柱穴等についても不明である。多くの柱穴を検出しているものの、本竪穴建物跡に伴うかどうかは不明である。

遺物出土状況は北東部で須恵器蓋№1、また西南部で台石、礫が床面から出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。



土層説明

1 a 赤黒褐色粘質土　焼土多量
1 b 赤黒褐色粘質土　焼土多量、袖
2　暗褐色粘質土　焼土微量
3　暗褐色粘質土　褐色小ブロック、焼土少量、袖
4　黒褐色粘質土
5　黒褐色粘質土
6　黒褐色粘質土
7　褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　暗褐色粘質土　SD覆土
10　黒褐色粘質土　別Pit
11　黒褐色粘質土　別Pit

図2-51　ST23竈図

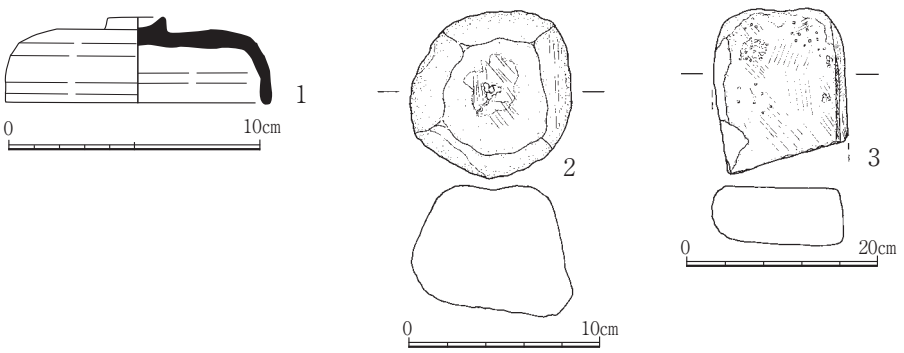


図2-52　ST23出土遺物実測図

出土遺物 (図 2-52 №.1 ～ 3)

№.1 は須恵器蓋である。高坏の蓋の可能性がある。口径 10.4cmを測る。天井部は平らで、凹んだ鈕が付く。口縁部は直立気味で口唇端部がやや膨らむ。

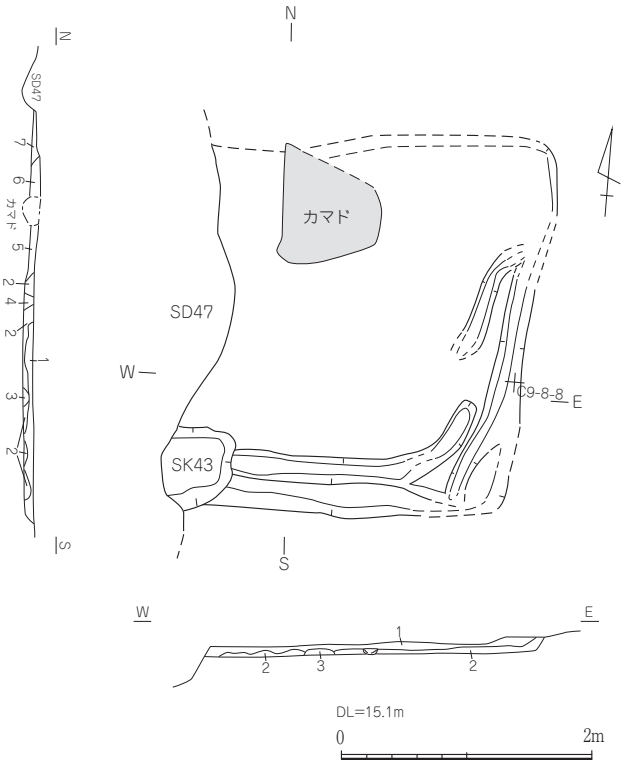
２は叩石である。亜角礫で長さ 8.7cm、厚さ 6.8cm、重さ 720g を量る。ほとんどの面を使用しており、一面が凹む。砂岩製である。３は台石で一端部が折損する。残存長さは 16.7cmである。表面は摩耗し、擦痕、敲打痕が認められる。やや凹む。砂岩製である。

ST24(図 2-53 ～ 55)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-2 他　**切り合い関係**；SD44・45・47 に切られる
時期；古墳後期　**形状**；隅丸方形？　**主軸方向**；N-4° -E
規模；(3.0) × (2.7)m ×深さ 0.16m
覆土；黒褐色粘質土主体　**柱穴**；－
竈；位置・北壁　竈壁位置・中央？　構築材範囲長さ (62) ×幅 (78)cm×深さ 5cm　覆土・褐色粘質土、焼土粒　煙道－　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無
その他付帯施設；－
出土遺物；須恵器壺片、土師器坏、甕
所見；Ⅷ BW 区の北西に位置し、グリッドは C9-8-2 他である。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に掘り込まれている。北側を SD44、西側を SD47 に壊されている。西側には弥生時代後期の ST25 があるものの、ST25 では ST24 の壁面を検出することができなかった。しかしながら平面形は隅丸方形になるものと考えられる。規模は南北軸は 3.6m か３m である。北壁はなだらかで立ち上がりが不明瞭であったためと更に SD44 があるために判然としなかった。検出した竈が流出せず原位置を留めていれば３m、流出していた場合には 3.6m まで広がる可能性がある。東西軸は SD47 の為に西壁は確認できていない。深さは 16cmと遺存状態は極めて悪い。主軸方位は N-4° -E で僅かに東に振る。

覆土も残りが悪く、薄く黒褐色粘質土が被覆する。

竈の遺存状態も悪く、北壁側に位置する。南北軸が 3.6m の場合には竈は流出し



土層説明
1　黒褐色土　土器含む
2　暗褐色粘質土　褐色土多量、小・中礫混入、土器含む
3　褐色粘質土　暗褐色土混入
4　褐色粘質土
5　暗褐色粘質土　黄褐色中ブロック多量混入、土器含む
6　黄褐色粘質土
7　黒褐色粘質土　土器含む

図 2-53　ST24 遺構図

ていることになる。北東部は皿状の土坑に破壊されている。また西側も柱穴跡で破壊されている。残存規模は 62cm、78cmで深さは５cmである。煙道､袖補強材､天井石、支脚、竈内遺物等は検出していない。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-55 №.1 ～ 3)

№.1 は須恵器壺片と考えられる。肩部近くの破片の可能性がある。表面に格子目タタキが認められる。

２は土師器坏である。口径 12.8cmを測る。口縁部は僅かに内弯気味に立ち上がる。整形は内外面共に回転ナデである。３は土師器甕である。口径 20.0cmを測る。口縁部は短く屈曲気味に外傾する。整形は口縁部がヨコハケ、内面がタテハケである。

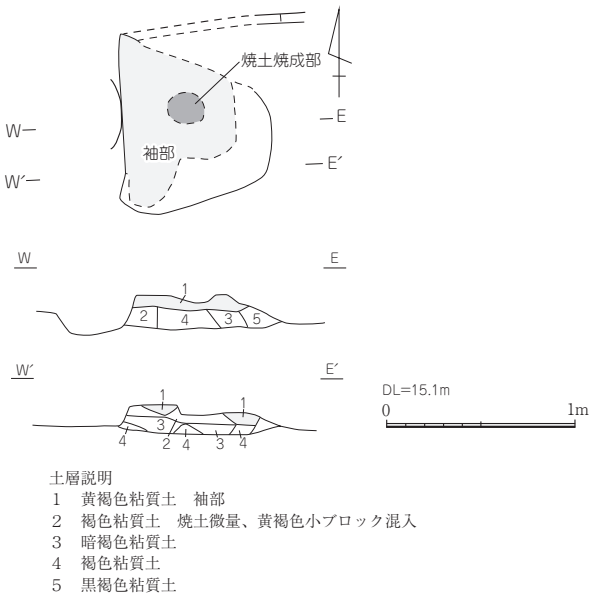


図 2-54　ST24 竈図

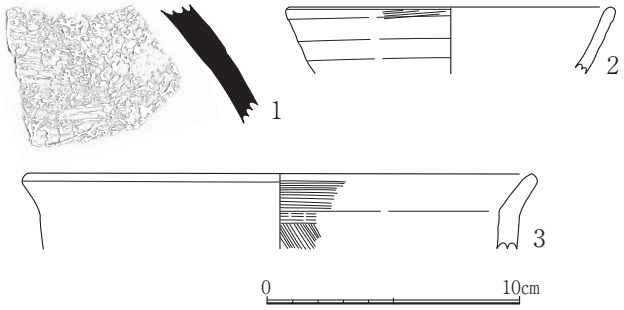


図 2-55　ST24 出土遺物実測図

ST25(図 2-56 ～ 59)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-1 他

切り合い関係；ST24、SG4・5、SK44、SD47 に切られる

時期；弥生後期Ⅴ期　**形状**；円形　**主軸方向**；N-7° -E

規模；径 6.6m ×深さ 0.35m

覆土；黒褐色粘質土主体、下層暗褐色粘質土に黄褐色粘質土塊

柱穴；主柱穴 P1 ～ 7

炉跡；形状楕円形 規模 94 × 82cm×深さ 40cm　覆土黒褐色粘質土　ベッド；－

周溝；2 条　周溝 1 幅 14cm 深さ 5cm　周溝 2 幅 10cm×深さ 5cm

その他付帯施設；大型柱穴 3 基 (P8 ～ 10)

出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、石包丁、石鏃、叩石

所見；Ⅷ BW 区西端に位置し、グリッドは C9-8-1、C9-8-2 他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。東側部を SD47、上層には古墳時代後期の ST24 が構築されている。南側では SG4、SG5、南西部では SG15 がそれぞれ切っている。平面形は円形で径 6.6m、深さ 25cmから 35cmを測る。主軸方位は P3 と P7 を軸線に採ると N-7° -E で僅かに東に振る。

覆土は上層に黒褐色粘質土が 20cm程被覆している。床直上は暗褐色粘質土で黄褐色粘質土塊が混じる。

炉跡はほぼ中央に位置し、長軸 94cmの楕円形で深さ 40cmと深い掘り方を有する。覆土はレンズ

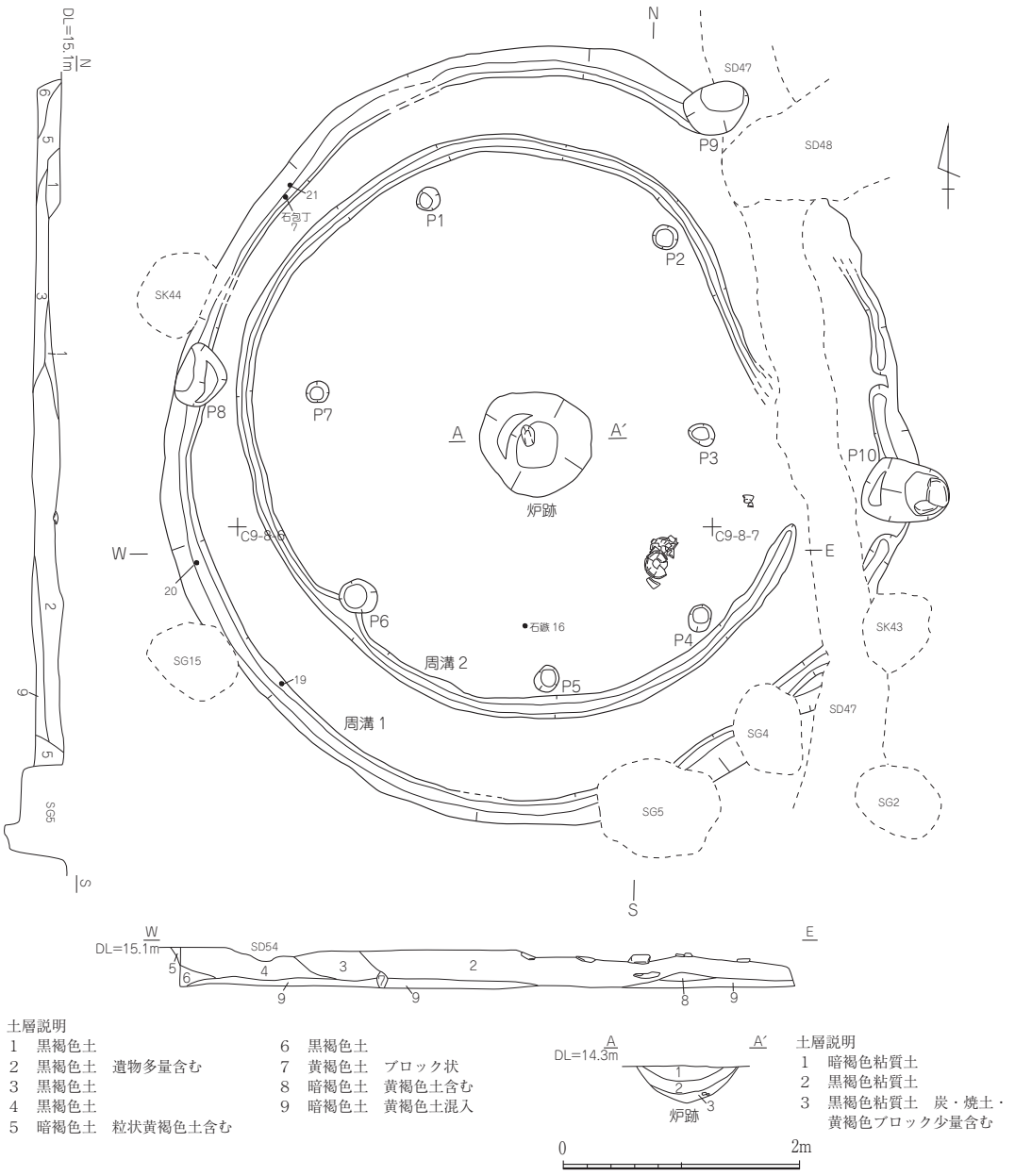


図 2-56　ST25 遺構図

状に堆積し３層に分層できる。下層は黒褐色粘質土で炭化物、焼土が少量混じる。チャート製の楕円礫が炉中央部より出土している。炉床面より僅かに浮いた状態であった。主柱穴は７本検出した。径 18cmから 24cmでやや小さく、深さは 34cmから 54cmでしっかりした掘り方を持つ。周溝は２条検出した。壁際の周溝１と内側の周溝２である。周溝１は壁際に沿っているものの、周溝２は壁に沿わず、壁とは同心円にはならない。周溝１と周溝２に挟まれた部分がベッド状遺構になるものの、床面との比高差がないところから、ベッドは検出できていない。

壁際の３ケ所に大きな柱穴跡 P8 から P10 の３基を検出している。ほぼ似たような形態で同じように本建物跡の壁に沿うように穿たれているところから、本建物跡に伴うと判断した。P8 は西側壁際に位置し、径 50cm、深さ 48cmで柱穴は斜めに掘り込まれている。P9 は北東の壁際に位置し、径 52cm、深さ 43cmで柱穴はやはり斜めに掘り込まれている。P10 は東南の壁際に位置し、径 48cm

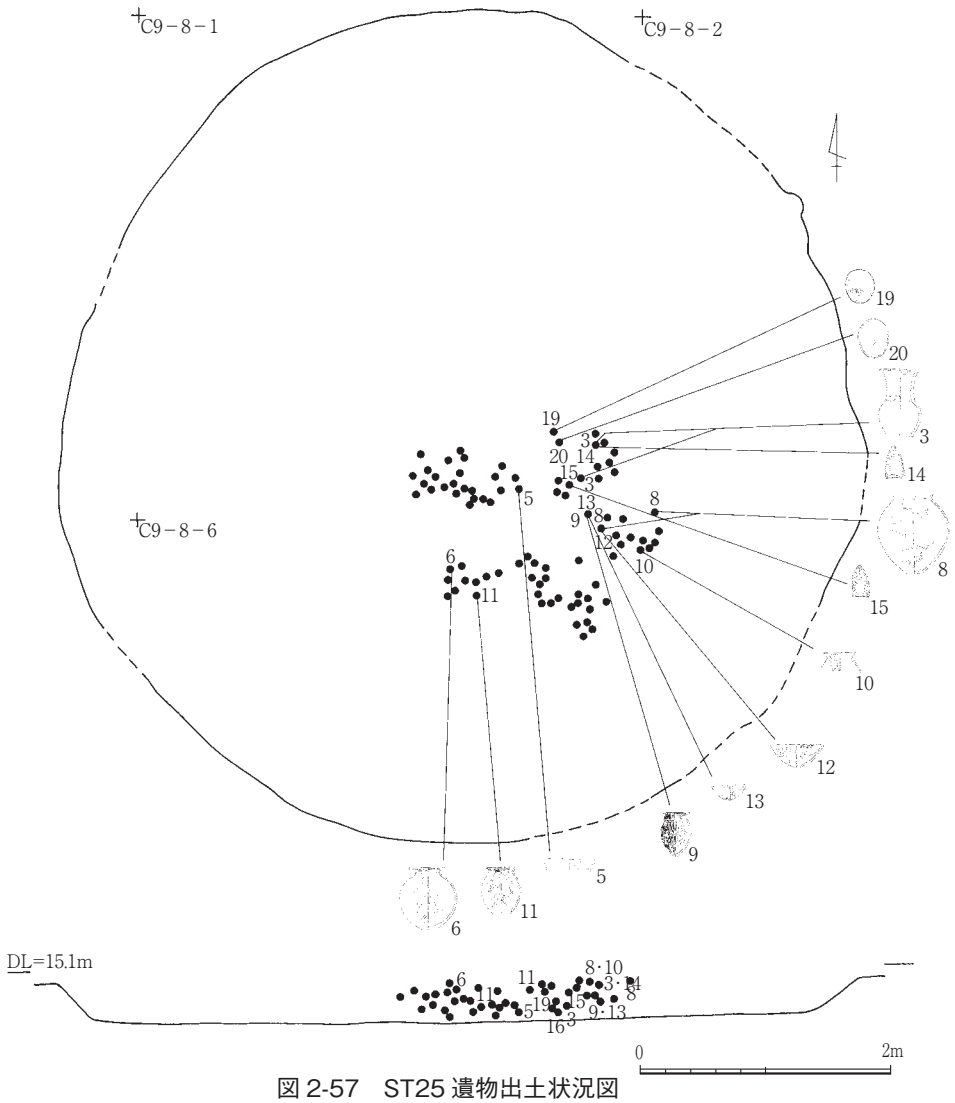


図 2-57　ST25 遺物出土状況図

× 72㎝で深さ 46㎝である。底面には扁平な砂岩の大礫と半截された礫が埋置されていた。これらの大型の柱穴跡については機能性格については不明である。

遺物出土状況は建物跡中央部の上層で多量の土器が出土している。埋没過程で投棄されたものと考えられる。また北東部で石鏃が散らばって３点出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-58、59 №.1 ～ 21)

№.1 から 13 は弥生土器である。1 から 8 は壺である。9 から 11 は甕である。鉢は 12､13 である。

石器も比較的多く､石包丁､石鏃､叩石が出土している。14 から 16 は石鏃である。共に大型品で、扁平な剥片素材である。14 には礫皮を残す。調整は縁辺部に施し、主要剥離を大きく残す。全てサヌカイト製である。

17、18 は打製石包丁である。17 は粘板岩か。刃部が摩耗する。18 はチャート製である。礫皮を部分的に残す。両端に抉入部を作出する。刃部は部分的に摩耗する。

19 から 21 は叩石である。全て砂岩製である。やや扁平な円礫を素材とする。19 の側縁部は面取り状に平坦となる。線状の敲打痕が見られる。20、21 も側縁部の使用が顕著である。

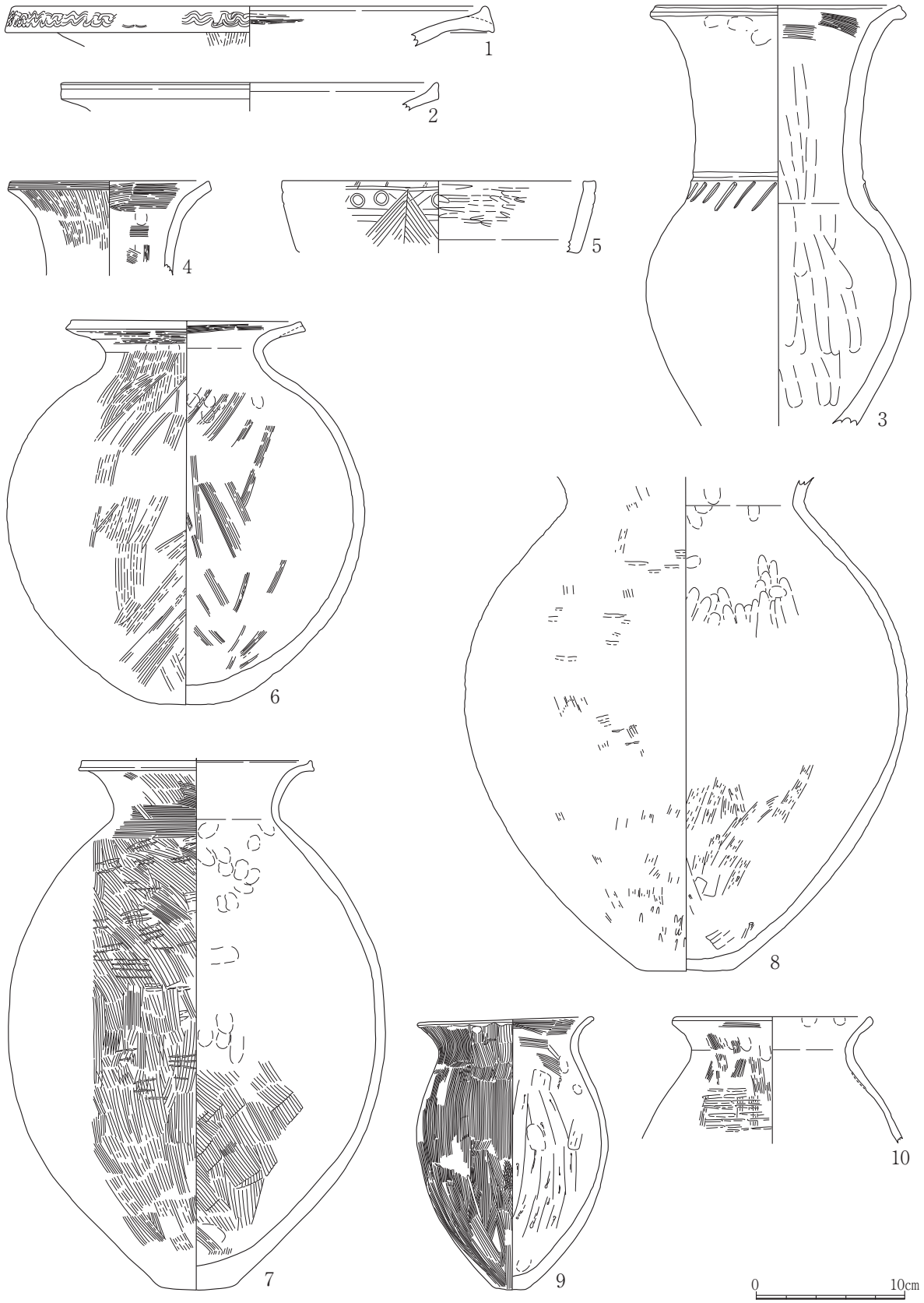


図 2-58　ST25 出土遺物実測図 (1)

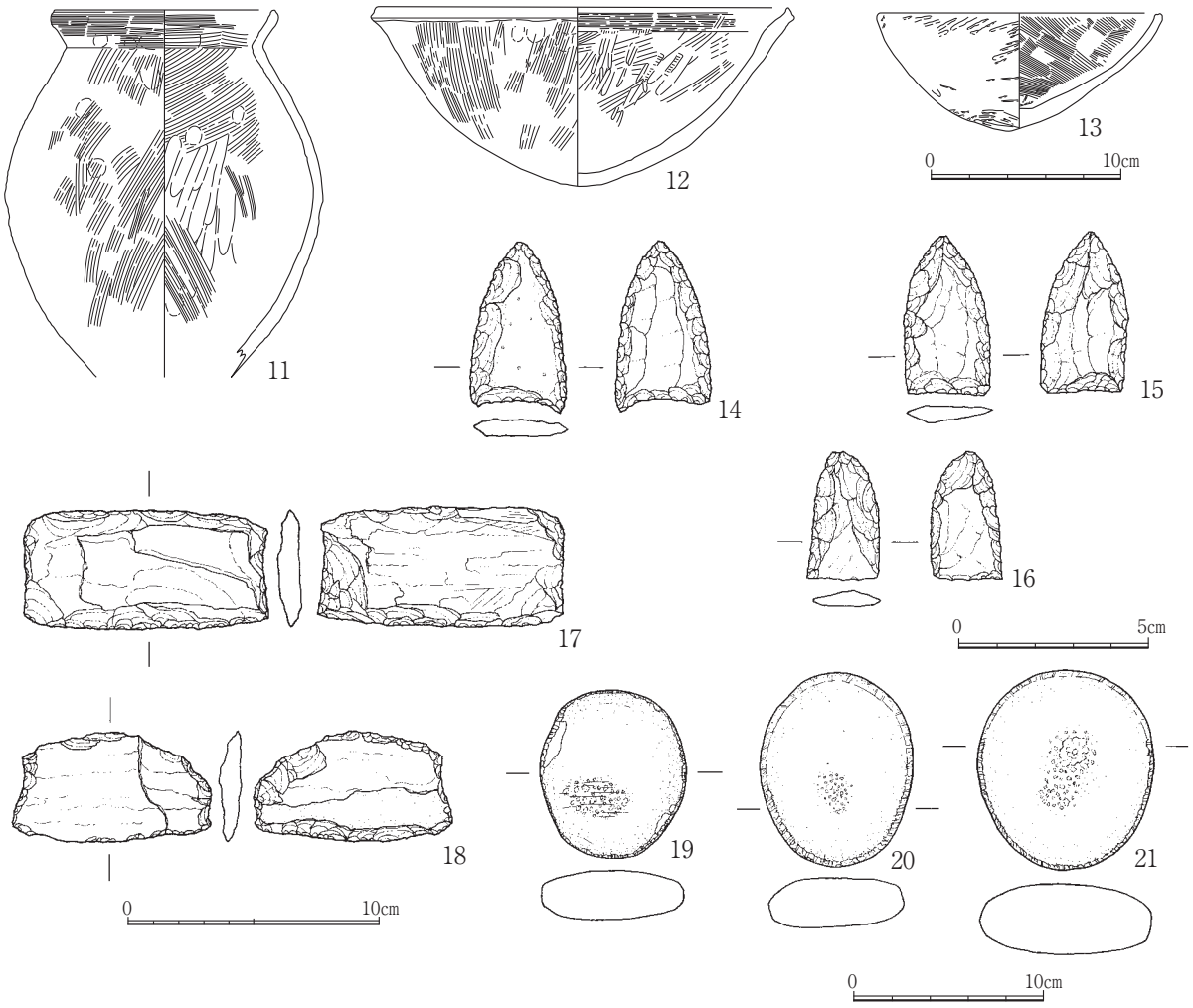


図 2-59　ST25 出土遺物実測図 (2)

ST26(図 2-60 ～ 62)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-14 他　**切り合い関係**；SD25・67・70・71 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-27° -W

規模；5.6 × 5.2m ×深さ 0.07m

覆土；黒褐色粘質土主体、床面は貼床　**柱穴**；－

竈；位置・北壁　竈壁位置・中央部　構築材範囲長さ (120) ×幅 (100)cm×深さ 3cm　覆土・黄褐色粘質土　煙道－　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器片

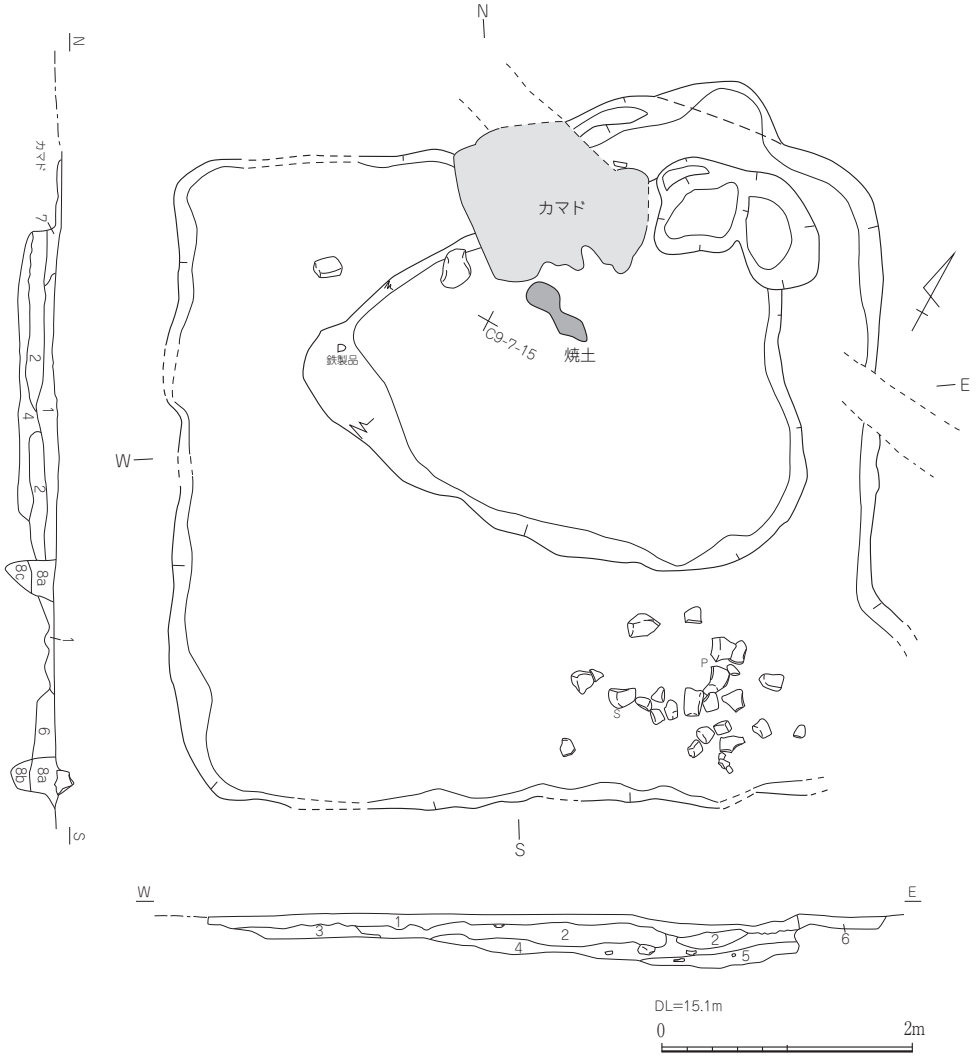
その他付帯施設；建物跡北側部掘り込み

出土遺物；須恵器高坏、壺、甕、土師器甕

所見；Ⅷ AE 区の東に位置し、グリッドは C9-7-14、C9-7-15 他に跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層上面で床面はⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は方形で規模は一辺 5.6m 程で深さは 7 ㎝と極めて浅い。主軸方位は N-27° -W で西に振る。

覆土は上層に黒褐色粘質土が被覆する。床は貼床で黄褐色粘質土である。貼床の下には中央部に掘り込みが認められ、褐色土塊の混じる黒褐色粘質土である。

竈は北壁の中央部に位置する。SD67 が右袖部分を破壊しており、遺存状態は良くない。建物跡



土層説明

1	黒褐色粘質土　粒状褐色ブロック、黄褐色ブロック含む	6	褐灰色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
2	にぶい黄褐色粘質土　粒状褐色ブロック含む	7	褐灰色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
3	黒褐色粘質土　褐色ブロック混入	8 a	黒褐色粘質土
4	黒褐色粘質土　10～15 ㎝礫含む、粒状褐色ブロック混入	8 b	黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
5	黒褐色粘質土　粒状黄褐色・褐色ブロック混入	8 c	黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入

図 2-60　ST26 遺構図

の北半分は大きく掘削され、その後貼床を施し、竈も貼床の上に黄褐色粘質土で構築されている。規模は構築粘土等の範囲は推定で長さ 1.2m、幅 1m である。焼成部も半分程壊されており、焼成部の規模は径 38㎝、深さ 3㎝である。袖は左袖が残存しており幅 48㎝で黄褐色粘質土で構築されている。南側には焚き口部の焼土が広がる。それ以外にも流出焼土が認められる。竈内から土器片が出土しているものの、袖補強材、天井石、支脚等は出土していない。竈からやや離れて南西部に大型礫が床面から浮いた状態で出土している。砂岩製でやや赤化する。煙道は未検出である。

遺物出土状況は南東隅で破損礫が床面から僅かに浮いた状態で纏まって出土しており、本建物跡に伴うかどうかは判然としない。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-62 №.1 ～ 8)

№.1 から 4 は須恵器である。 1 は高坏または長頸壺の口縁部か。口径 10.4㎝を測る。口縁部は僅

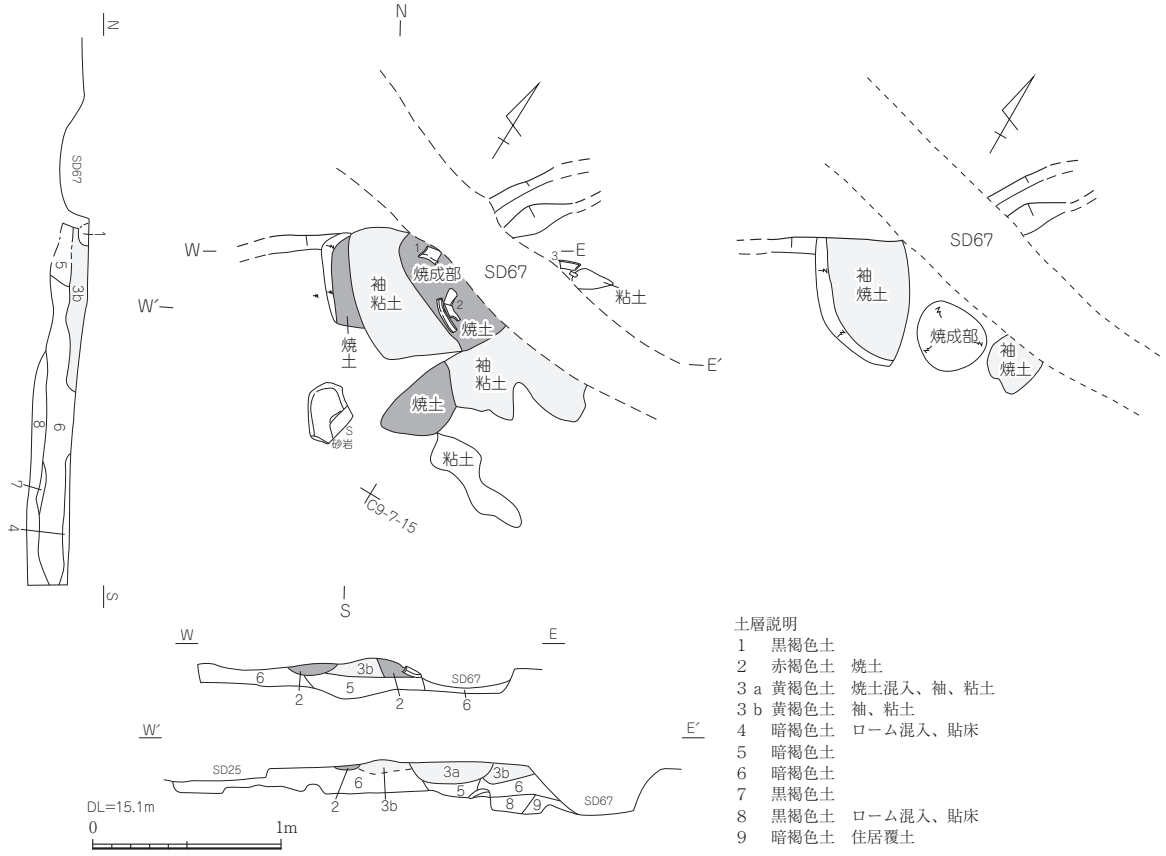


図 2-61　ST26 竈図

かに外反し、下半に沈線が巡る。2 は壺の口縁部で口径 30.6cmを測る大型品である。口縁部は受け口状を呈し､口唇部は内側に肥厚する。口縁部には櫛描波状文を施す。3 は壺の底部と考えられる。高台が付き、腰部は丸味を持つ。4 は甕か壺の胴部破片である。整形は外面がカキ目、内面が渦巻き当て具で器肉薄い。

5 から 7 は土師器甕である。5 は口径 21.2cmを測る。口縁部は短く強く外反し､肩部は張らない。整形は口縁部内外面がナデ、外面胴部がハケ、内面胴部はヘラケズリである。色調は黄白色を呈する。6 は口径 18.6cmを測る。口縁部は短く外反し、口唇部は丸味を持ち、肩部は張らない。整形は口縁部内外面共にナデ、外面がハケ、内面はヘラケズリである。7 は口径 25.3cmを測る大型品である。口縁部は強く屈曲し、肩部は張らない。整形は口縁部内外面共にナデ、外面がハケ、内面はヘラケズリである。

8 は扁平な鉄滓である。混入品の可能性がある。

ST30(図 2-63 ～ 66)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-22 他　**切り合い関係**；SX47・48、SK59、SD90 に切られる

時期；弥生後期後半Ⅵ 1 期　**形状**；多角形　**主軸方向**；N-5° E

規模；8.2 × 7.7m ×深さ 0.5m　**覆土**；上層黒褐色粘質土主体、下層暗褐色粘質土に焼土、炭化物混入　**柱穴**；主柱穴 P1 ～ 12

炉跡；形状楕円形　規模 145 × 95cm×深さ 11cm　**ベッド**；削り出し、造り付け　2 段

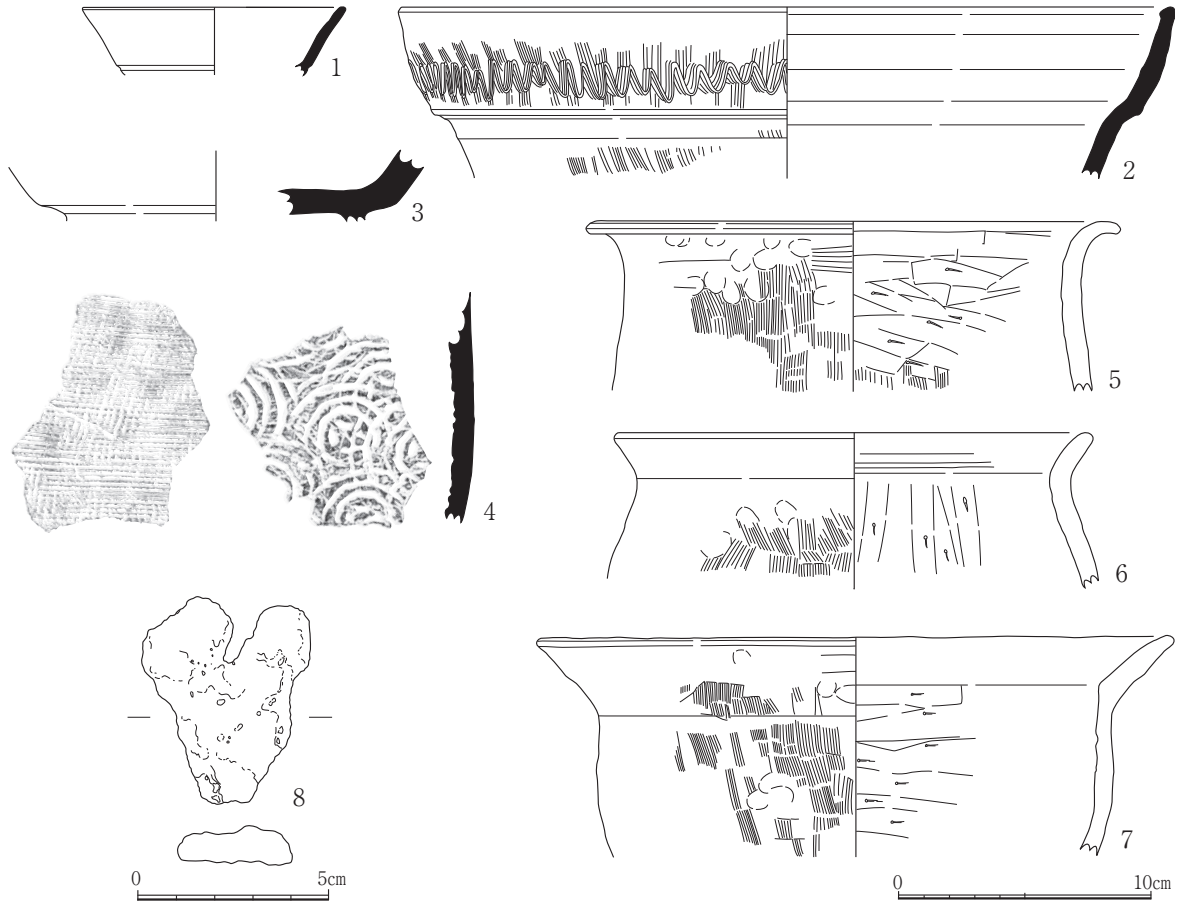


図 2-62　ST26 出土遺物実測図

周溝；3 条以上　幅 15 ～ 20cm × 深さ 2cm

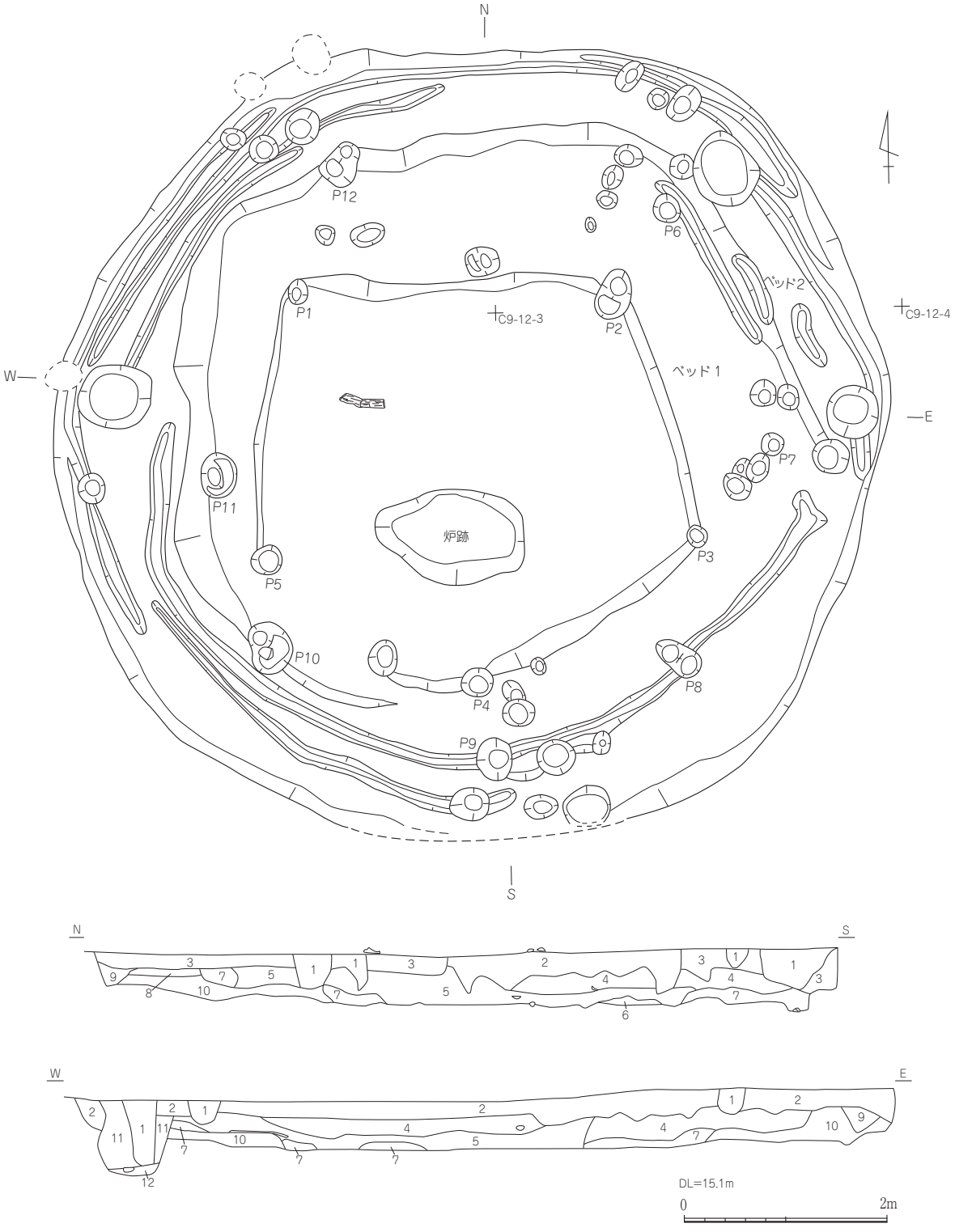
その他付帯施設；建物跡内土坑

出土遺物；弥生土器多量、叩石等、炭化材

所見；Ⅷ AE 区の東寄りに位置し、グリッドは C9-7-22、C9-12-2 他に大きく跨がる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅤ層に深く掘り込まれている。東側及び南側で SX47、SX48 に接する。平面形は丸味を持った多角形で七角形になる可能性がある。規模は 8.2m で本遺跡では ST13 の 10.5m に次ぐ大きさである。深さは 50cmで基本土層のⅤ層の礫層まで掘り込まれている。主軸方位は炉跡を基軸にすると N-5° E で僅かに東に振る。

覆土は上層が黒褐色粘質土が被覆し、中層から下層は暗褐色粘質土で下層になると焼土、炭化物を含む。

炉跡は調査の誤りで土層観察をせずに掘り上げてしまった為に詳細は不明である。掘り方は 145cm、95cmのやや不整形の楕円形である。皿状に落ち込み深さは 11cmで、礫層まで掘り込まれていた。ベッドは２段検出しており、内側のベッド際の隅で主柱穴を５基確認している。更に外側のベッド際では７基検出した。P1 から P5 の内側の主柱穴と外側の P6 から P12 の２組が同時に存在したかどうかは不明である。周溝を３条以上検出しているところから、拡張または建て直しが行われている可能性があるとすれば、２組の柱穴群は拡張・建て直しに伴い、それぞれ時期を違えた柱穴群の可能性が残されている。本建物跡は極めて大型の建物の為、主柱穴と支柱の関係にあった可能性も



土層説明

1　黒褐色土　新しい遺構覆土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土　2層よりやや明るい
4　暗褐色粘質土　黄褐色粘土質小ブロック含む
5　暗褐色粘質土　黄褐色粘土質小ブロック、小礫含む
6　暗褐色粘質土　焼土混入
7　暗褐色粘質土　焼土多量
8　暗褐色粘質土　ベッド
9　暗褐色粘質土　周溝
10　暗褐色粘質土　黄褐色粘土質ブロック多量
11　暗褐色粘質土
12　暗褐色粘質土　黄褐色粘土質ブロック含む

図 2-63　ST30 遺構図

ある。柱穴の大きさはP1からP5の径が17cmから30cm、深さ24cmから36cmである。P6からP12は径がやや一回り大きく24cmから44cm、深さ26cmから35cmである。P6からP12の組み合わせのものは、瓢箪形に２つの柱穴が少し場所を変えて穿たれているところから、柱の建て替えが行われたものと考えられる。他にも柱穴は多数検出しているものの、深さ10cm足らずのもので、上層の柱穴の底面か、本建物跡に伴うとしても主柱穴とはなり得ないものばかりである。P1からP5の柱間は北側のP1とP2が3.1mで他より50cm程広い。外側のP6からP12については柱間は不規則な並びをしている。

ベッドは２段検出した。内側ベッド１は幅120cmから80cmで高さは床面から８cmである。ベッドの内区は五角形となっており、その角に主柱穴が穿たれている。ベッド２の幅が不揃いで70cmから100cm程である。高さはベッド１が６cmから10cm程度である。周溝はベッド２の上で２条を検出しており、途切れ途切れのものを入れると３条以上になりそうである。

本竪穴建物跡は焼失建物跡と考えられ焼土、炭化物を検出した。焼土はベッド２の外区、壁際か

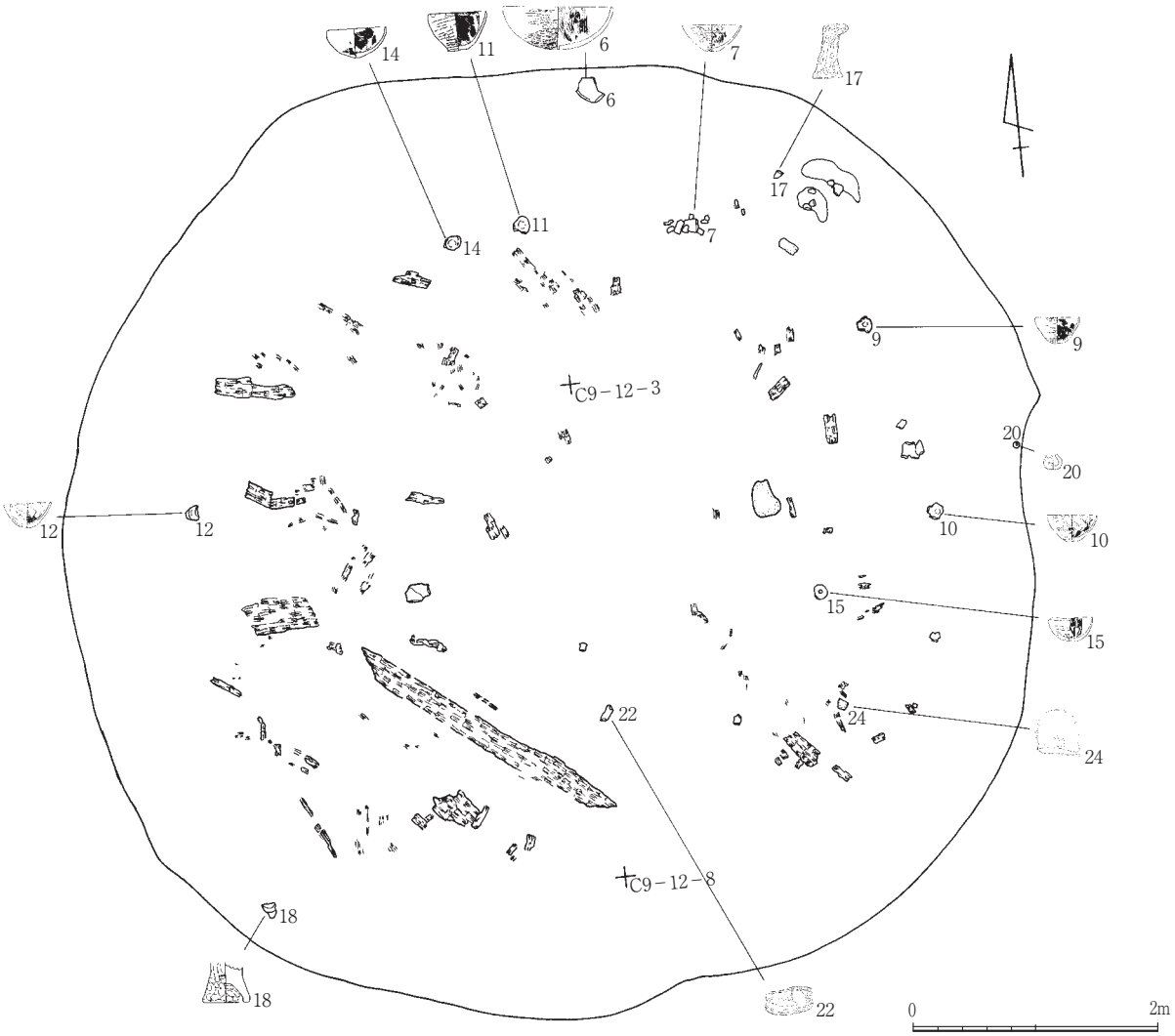


図 2-64　ST30 遺物出土状況図

ら 50cmから 100cm程の範囲には認められず、内側部に厚く堆積している。また中央部径 2m の範囲にも焼土は認められない。炭化物は南西部で建築部材と考えられる大きなものを検出している。長さ 2.4m、幅 18cmで柱の可能性が強い。他にも西南部には炭化材が多く出土している。

遺物出土状況は北側部から東側部にかけてのベッド１とベッド２の境で、一定の間隔を保ち、鉢、叩石等が出土しており、極めて稀な出土状況を示している。叩石の出土した上段では赤化した粘土塊が出土している。土坑に伴うことから粘土の貯蔵穴で建物焼失の際に貯蔵粘土が赤化したものと

図 2-65　ST30 出土遺物実測図 (1)

考えられる。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-65、66 №.1 ～ 26)

№.1 から 16 は弥生土器で 1 、 2 は壺、 3 、 4 は甕、 5 から 16 は鉢である。17 から 19 は器台、20 は珍袖壺、21 は土製円盤である。22 から 26 は石器である。22 は打製石包丁、23 は朱の付着した石杵、24 から 26 は叩石である。

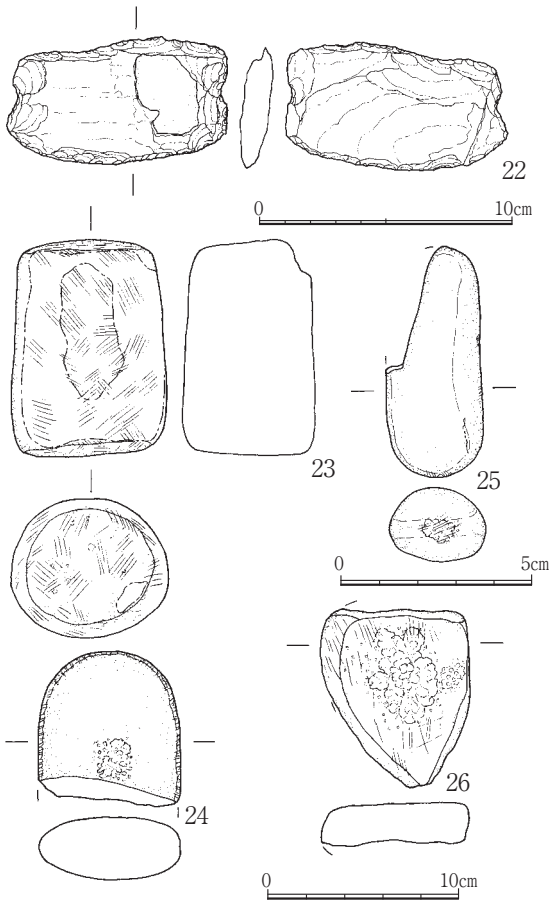


図 2-66　ST30 出土遺物実測図 (2)

ST32(図 2-67、68)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-11 他　**切り合い関係**；SD81 に切られる

時期；弥生後期？　**形状**；円形？

主軸方向；N-27° -W ？

規模；(5.1) × (1.3)m ×深さ (0.4)m

覆土；上層暗褐色土、床面暗黄褐色土に黄色土塊少量

柱穴；－　**炉跡**；－　**ベッド**；－　**周溝**；－

その他付帯施設；建物内土坑

出土遺物；弥生土器甕、鉢

所見；Ⅷ AE 区の東南部に位置し、グリッドは C9-12-11、C9-12-12 に跨がるものの、大部分が調査区外で、1/4 程度を検出したに止まる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は多角形の可能性があるものの、判然としない。規模は検出した長さでは 5.1m、深さ 40cmと掘り方は比較的しっかりしている。

柱穴は 1 基検出している。P1 は径 20cm、深さ 38cmである。主柱穴の可能性があるものの不明である。壁際で土器の入った土坑を検出している。径 57cm、深さ 25cmである。炉跡、ベッド、周溝等は不明である。

覆土は上層が暗褐色土、床面近くが暗黄褐色土で黄色土塊が少量入る。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-68 №.1 ～ 3)

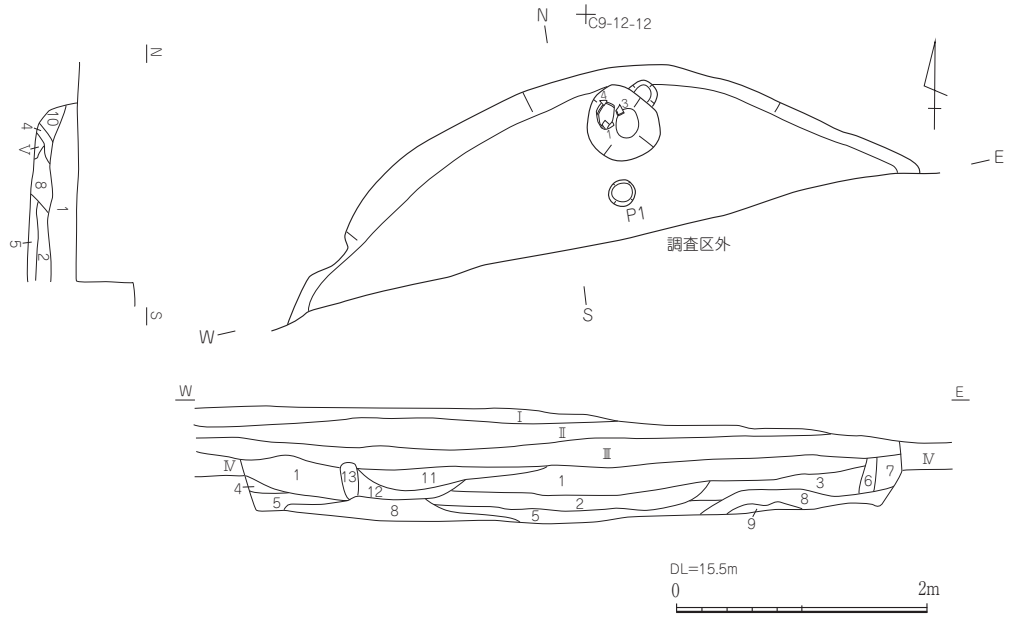
№.1 は弥生土器甕、 2 、 3 は鉢である。

ST33(図 2-69、70)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-13 他

切り合い関係；SB12、SD88 に切られる

時期；弥生後期？　**形状**；円形？　**主軸方向**；N-9° -W?



土層説明

Ⅰ　耕作土	1　暗褐色土	8　暗黄褐色土　黄色ローム主体
Ⅱ　暗褐色土	2　褐色土	9　黒褐色土　ローム混入
Ⅲ　黒褐色土	3　褐色土	10　褐色土　黄色小ブロック多量含む
Ⅳ　暗褐色土	4　黒褐色土	11　暗褐色土　SD 覆土
Ⅴ　黄褐色粘質土	5　暗黄褐色土　黄色小ブロック含む	12　褐色土　SD 覆土
	6　暗褐色土	13　暗褐色土　SD 覆土
	7　褐色土	

図 2-67　ST32 遺構図

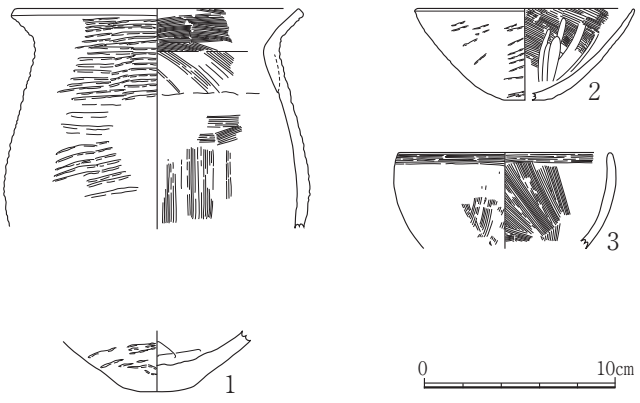


図 2-68　ST32 出土遺物実測図

規模；径 (3.9)m ×深さ 0.16m

覆土；上層暗褐色粘質土、下層黒褐色粘質土

炉跡；形状円形　規模 60 × 55cm×深さ 18cm　覆土暗褐色粘質土

柱穴；－　**ベッド**；－　**周溝**；－

その他付帯施設；－

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ AE 区の西北に位置する。グリッドは C9-6-8、C9-6-13 に跨がる。調査区内で検出したのは 1/2 程度で北側は更に調査区外へと広がる。SB12 に切られる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は円形の可能性が強く、規模は径 3.9m、深さ 16cmである。小型で極めて浅い建物跡である。主軸方位は炉跡と考えられる土坑を軸線に採ると N-9° -W と若干西に振る。

覆土は上層に暗褐色粘質土が被覆し、下層は黒褐色粘質土である。

炉跡と考えられる掘り込みは中央部で検出している。規模は 60cm、55cmの若干楕円形になり、深さは 18cmである。主柱穴、ベッド、周溝等は検出していない。

遺物出土状況は南東部床面で砂岩製の台石が出土している。西側部で甕№ 1 が出土している。

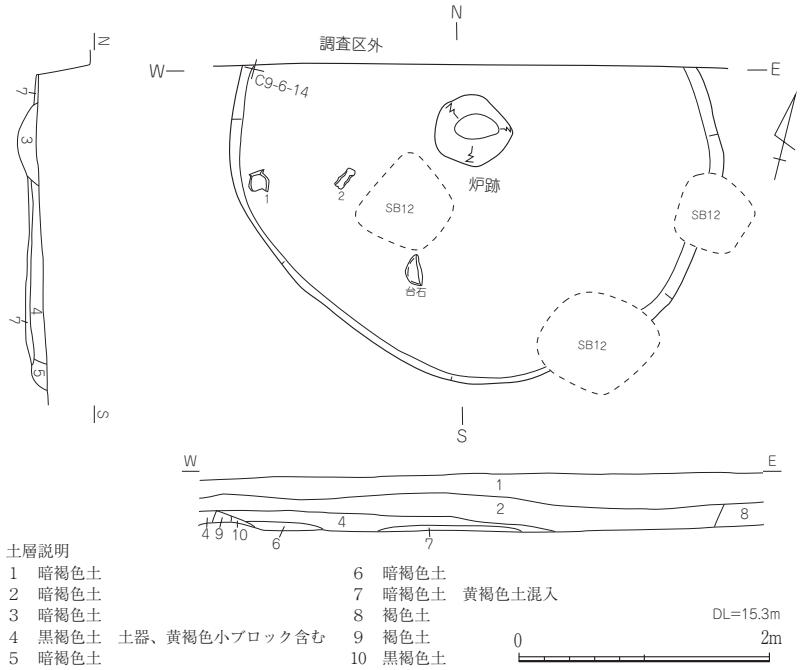


図 2-69　ST33 遺構図

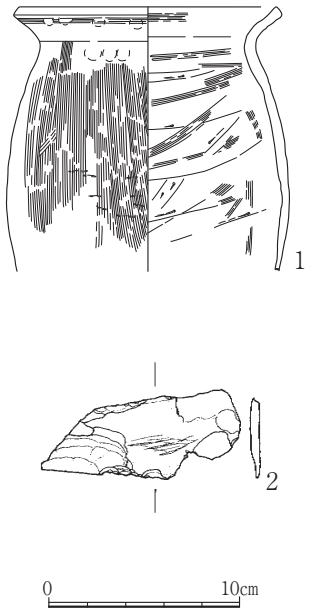


図 2-70　ST33 出土遺物実測図

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-70 №1、2)

№1 は弥生土器甕、2 は石包丁の未製品か。

ST34(図 2-71 ～ 73)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-22 他　**切り合い関係**；SK65、SD82・96・102 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-57° -W

規模；5.4 × 5.8m ×深さ 0.08m

覆土；上層暗褐色粘質土、床面貼床褐色粘質土に黄褐色粘質土塊混入

柱穴；主柱穴 P1 ～ 4

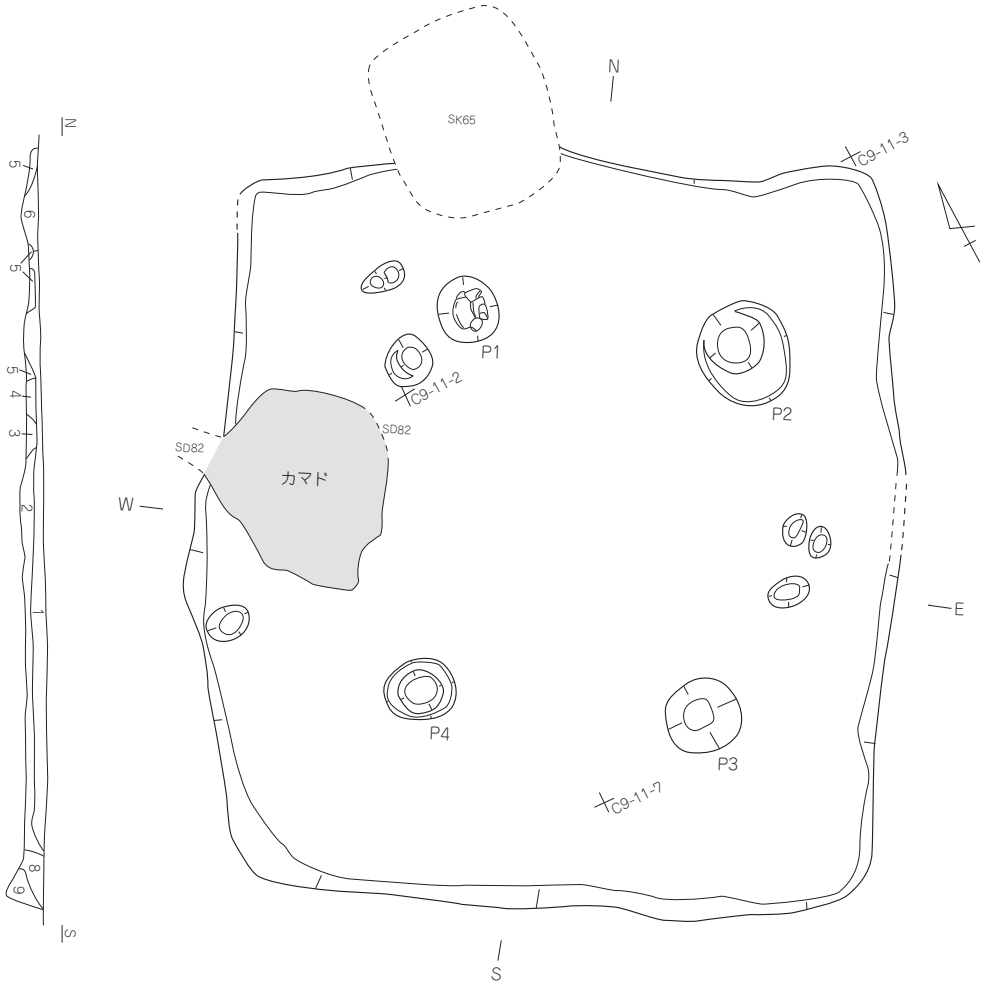
竈；位置・西壁　竈壁位置・中央部　構築材範囲長さ 130 ×幅 155cm 深さ 8cm　覆土・褐色粘質土、焼土　煙道－　袖補強材・袖石　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無

出土遺物；須恵器坏蓋、壺

所見；Ⅷ AE 区の西端中央部に位置し、グリッドは C9-6-22、C9-11-2 他に跨がる。すぐ西側にはほぼ同時期の ST46、47、48 が配置している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は長方形で 5.4m、5.8m、深さ 8 ㎝と極めて浅い。SD82 に中央部を切られ、北側部では SK65 にも切られている。主軸方位は竈を軸線に採ると N-57° -W と大きく西に振る。

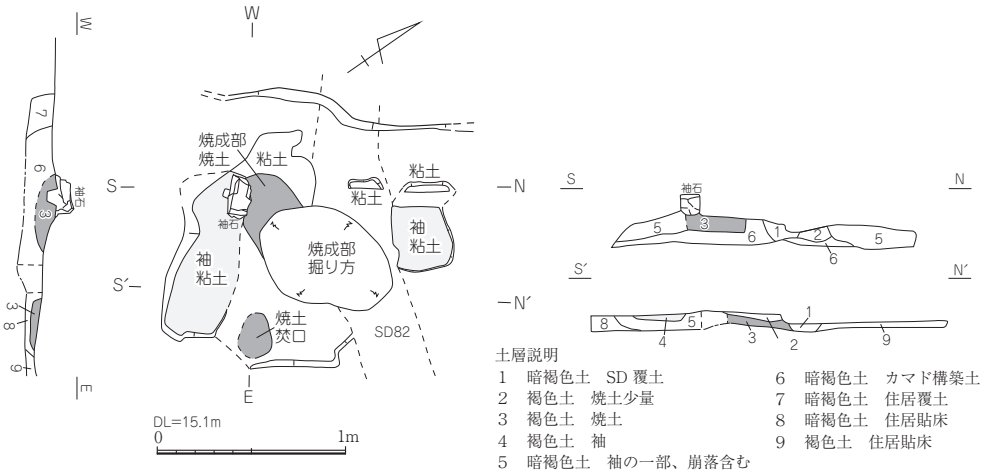
覆土は上層に褐色粘質土が薄く被覆し、床面は貼床で褐色粘質土に黄褐色粘質土塊が混じる。

竈は西北壁中央部に構築されている。左袖部分は SD82 の小溝に破壊されている。相対的に遺存状態は良くない。構築粘土等の規模は長さ 1.3m、幅 1.55m である。焼成部の掘り方は楕円形の皿状を呈し径 74cm、深さ 8 ㎝である。構築土は褐色土で焼土を多く含んでいる。袖は右側が幅 30cm、左袖は SD82 に壊されているものの遺存部で幅 36cm程である。右袖からはチャート製の角礫が出



土層説明
1　暗褐色土
2　褐色土　黄褐色土多量混入
3　にぶい黄褐色土
4　暗褐色土　黄褐色土混入
5　黄褐色土　暗褐色土混入
6　にぶい黄褐色土　黄褐色ブロック多量混入
7　暗褐色土　黄褐色土混入
8　褐色土　土師器含む
9　暗褐色土　黄褐色ブロック、土器、小礫含む

図 2-71　ST34 遺構図



土層説明
1　暗褐色土　SD 覆土
2　褐色土　焼土少量
3　褐色土　焼土
4　褐色土　袖
5　暗褐色土　袖の一部、崩落含む
6　暗褐色土　カマド構築土
7　暗褐色土　住居覆土
8　暗褐色土　住居貼床
9　褐色土　住居貼床

図 2-72　ST34 竈図

土しており赤化している。煙道は未検出である。天井石、支脚、竈内遺物等も未検出である。

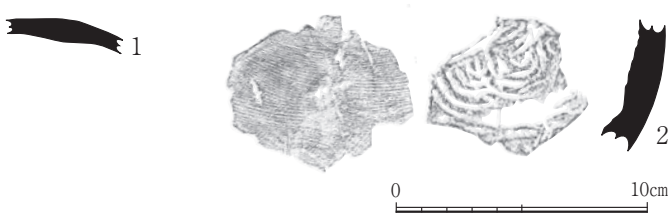


図 2-73　ST34 出土遺物実測図

建物跡内で幾つか柱穴を検出した。P1 から P4 は比較的しっかりした掘り方を持つ。径 54cmから 82cm、深さ 45cmから 72cmである。他の時期の掘立柱建物跡の一部の可能性を考慮してみたものの、建物跡の外側には同規模の主柱穴は未検出であることから、また丁度建物跡の四隅に配置していることから本建物跡の主柱穴の可能性が高い。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-73 №1、2)

№1 は須恵器坏蓋、２は須恵器壺か甕の胴部破片である。

ST35(図 2-74 ～ 77)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-11-12 他　**切り合い関係**；ST38、SX38・39、SK61、SD83・84・91・113 に切られる

時期；古墳初頭　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-12° -E

規模；5.5 × 5.2m ×深さ 0.36m

覆土；暗褐色粘質土主体

柱穴；主柱穴 P1 ～ 4

炉跡；炉跡 1 形状楕円形 規模 102 × 80cm×深さ 22cm　炉跡 2 地床炉 形状不整形 規模 45 × 20cm

ベッド；造り付け　幅 70 ～ 80cm×高さ 15cm

周溝；2 条　幅 14 ～ 20cm×深さ 7 ～ 10cm

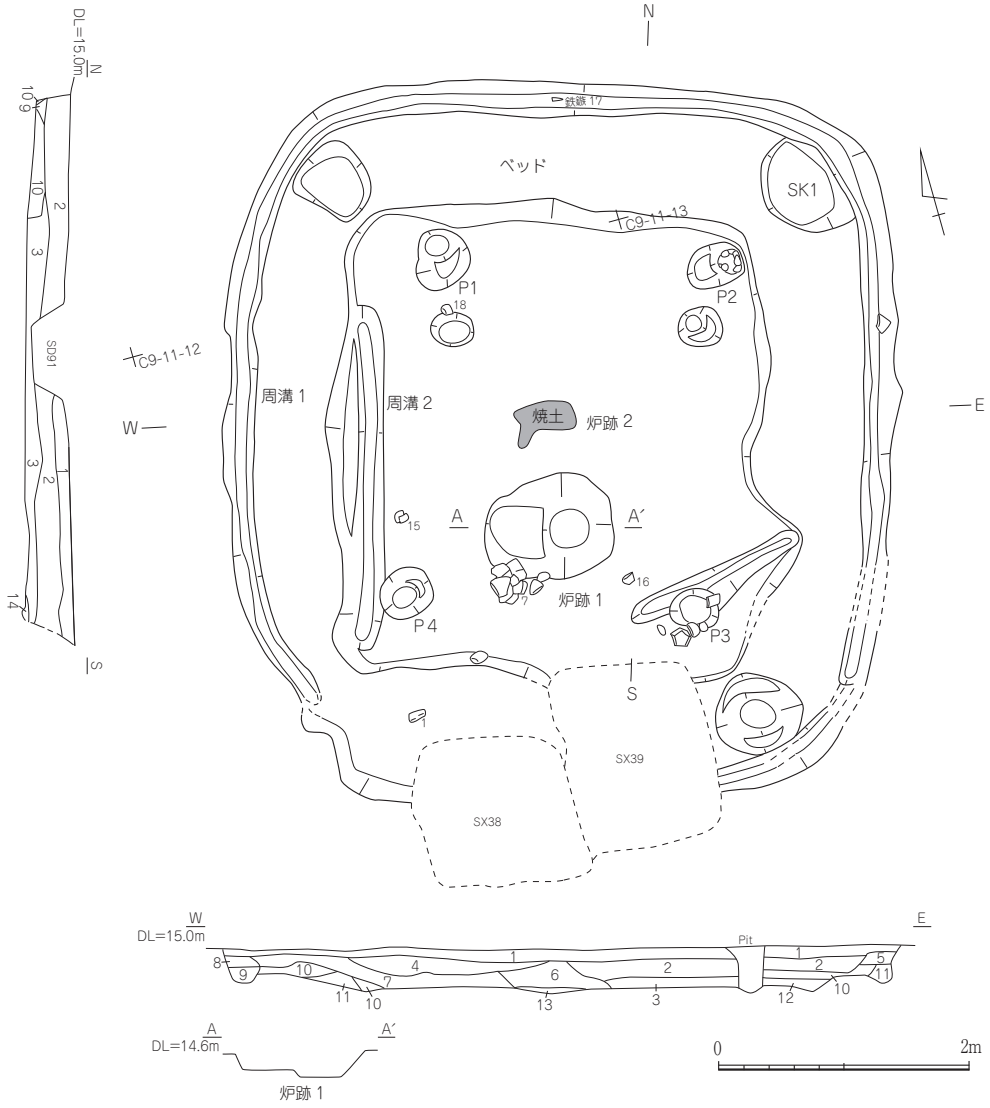
その他付帯施設；建物跡内土坑

出土遺物；土師器壺、甕、鉢、搬入甕、器台、鉄鏃、砥石

所見；Ⅷ AE 区の西南部に位置し、グリッドは C9-11-12、C9-11-13 他に跨がる。調査は都合により２回に分けて行った。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層下面に掘り込まれている。西側には古墳時代後期の ST38 が上面に構築されている。南壁は SX38、SX39 に壊されている。平面形は隅丸方形で規模は一辺 5.5m で深さは 36cmとしっかりした掘り方を持つ。主軸方位は炉跡を軸線に採ると N-12° -E でやや東に振る。

覆土は上層に暗褐色粘質土が厚く被覆し、下層には黄褐色粘質土塊が混入する。

炉跡は２基検出している。炉跡 1 は楕円形で掘り方を伴うものである。規模は 102cm、80cm、深さ 22cmで焼土が伴う。炉跡 1 のすぐ北側には炉跡 2 の地床炉を検出した。45cm程の不整形の範囲に焼土のみを確認した。主柱穴は P1 から P4 で径 34cmから 38cm、深さ 43cmから 49cmで比較的規模の似通ったもので、ベッドの角に穿たれている。ベッドは造り付けで全周し、幅 70cmから 80cmで高さは床面から 15cm程度である。周溝は２条検出している。幅 15cm、深さ 10cm程度のものである。壁際の周溝 1 は全周し、ベッド際周溝 2 は西側のみであるが、造り付けのベッドを除去後の住居の掘り方確認の調査の際に下層からベッドに下から新たな周溝を検出した。それと P1、P2 の北側の



土層説明

1　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
2　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
3　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
4　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
5　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
6　暗褐色土　黄褐色ブロック、褐色土混入、土器含む
7　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
8　黒褐色土
9　暗褐色土
10　褐色土　黄褐色ブロック多量、土器含む
11　黒褐色土　黄褐色ブロック多量含む
12　黒褐色土　黄褐色土多量混入
13　明赤褐色土　黒色ブロック小量、小礫含む、焼土
14　褐色土

図 2-74　ST35 遺構図

主柱穴は瓢箪形を呈しており、主柱穴の掘り直しが行われた可能性があり、建物跡の建て替えか拡張が行われた可能性がある。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-76、77 №.1 ～ 18)

№.1 から 3 は土師器壺である。4 から 6 は甕で、4 は搬入品である。7 から 15 は鉢で 14、15 は皿状の浅い鉢で指頭圧痕が残る。16 は器台である。17 は鉄鏃の茎か。18 は砂岩製の砥石である。

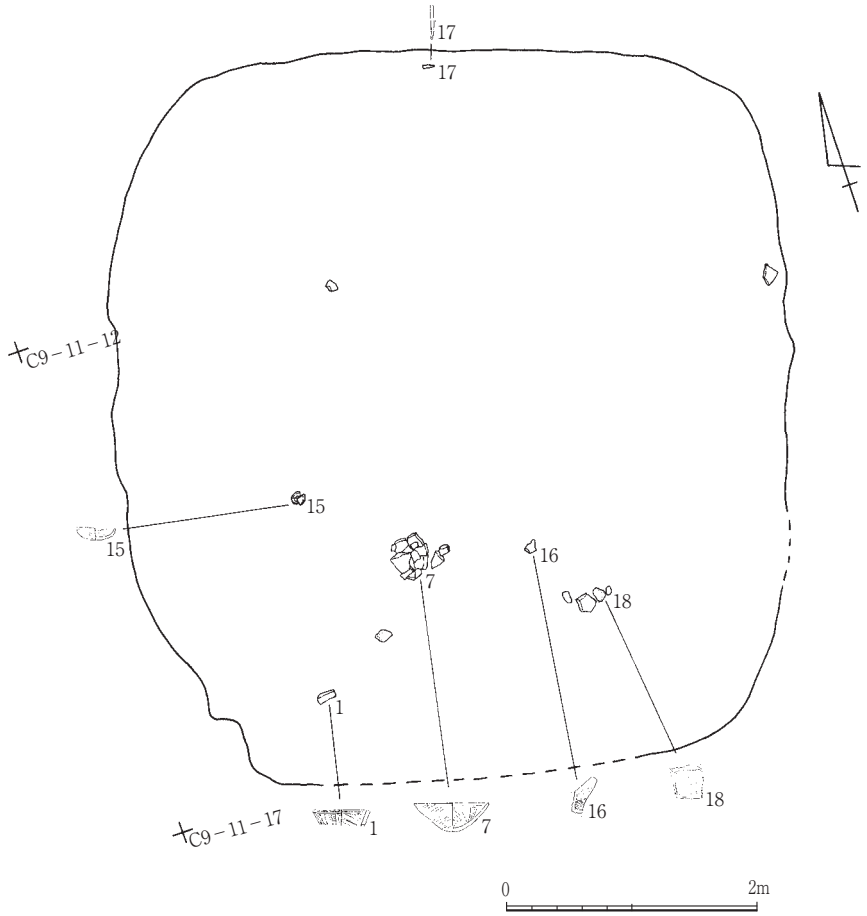


図 2-75　ST35 遺物出土状況図

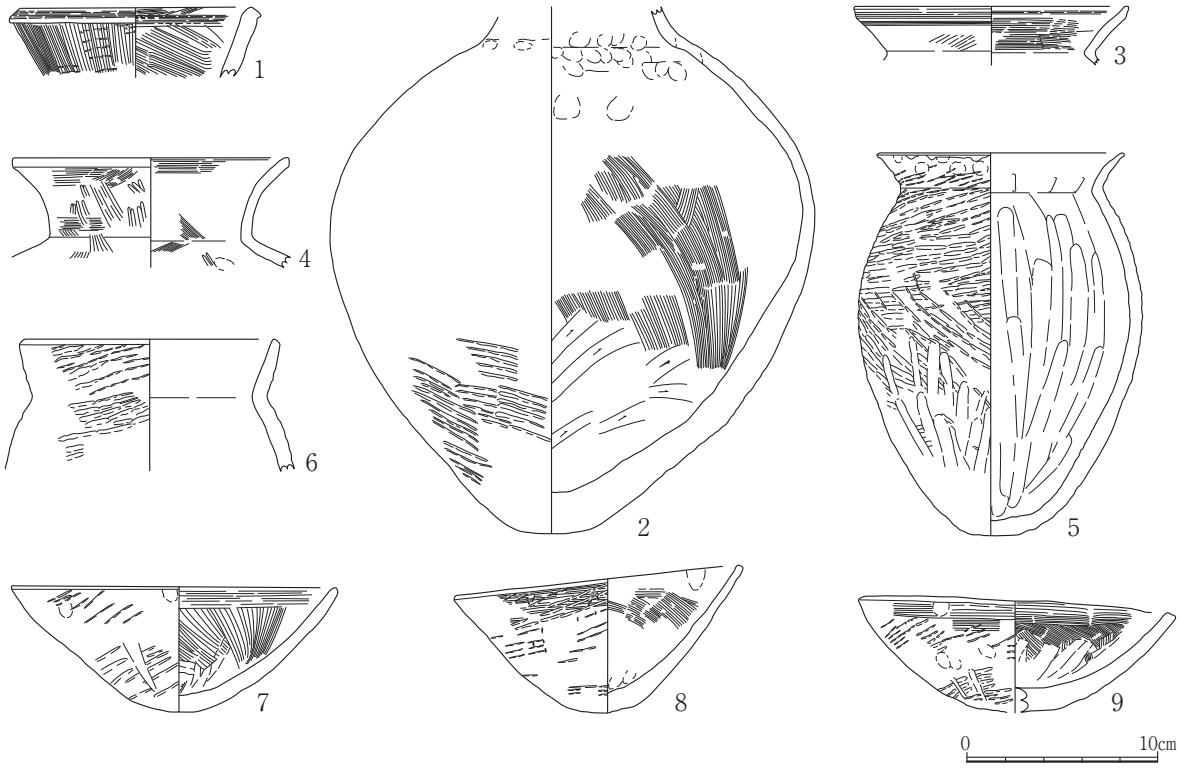


図 2-76　ST35 出土遺物実測図 (1)

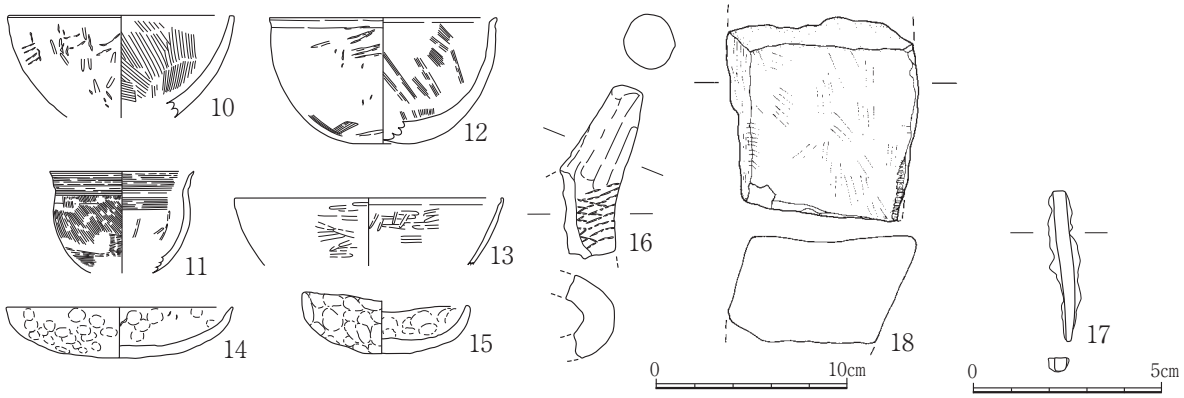


図 2-77　ST35 出土遺物実測図 (2)

ST38(図 2-78 ～ 80)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C9-11-11 他　**切り合い関係**；ST35・39 を切る、SX38、SD98 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；隅丸方形？　**主軸方向**；N-12° -W

規模；3.9 × (3.8)m ×深さ 0.06m

覆土；暗褐色粘質土主体

竈；東竈　位置・東　竈壁位置・やや右寄り？　構築材範囲長さ (108) ×幅 (145)cm　焼成部掘り方・長さ 32 ×幅 52cm×深さ 3cm　覆土・褐色粘質土、焼土　煙道－　袖補強材・袖石 (砥石)　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無

北竈　位置・北壁　竈壁位置・やや右寄り？　構築材範囲長さ 75 ×幅 114cm　焼成部掘り方・長さ 32 ×幅 36cm×深さ 13cm　覆土･明褐色粘質土、焼土　煙道長さ 65 ×幅 14cm　袖補強材･礫　支脚･無　天井石・無　竈内遺物・無

出土遺物；須恵器坏、横瓶、砥石、台石

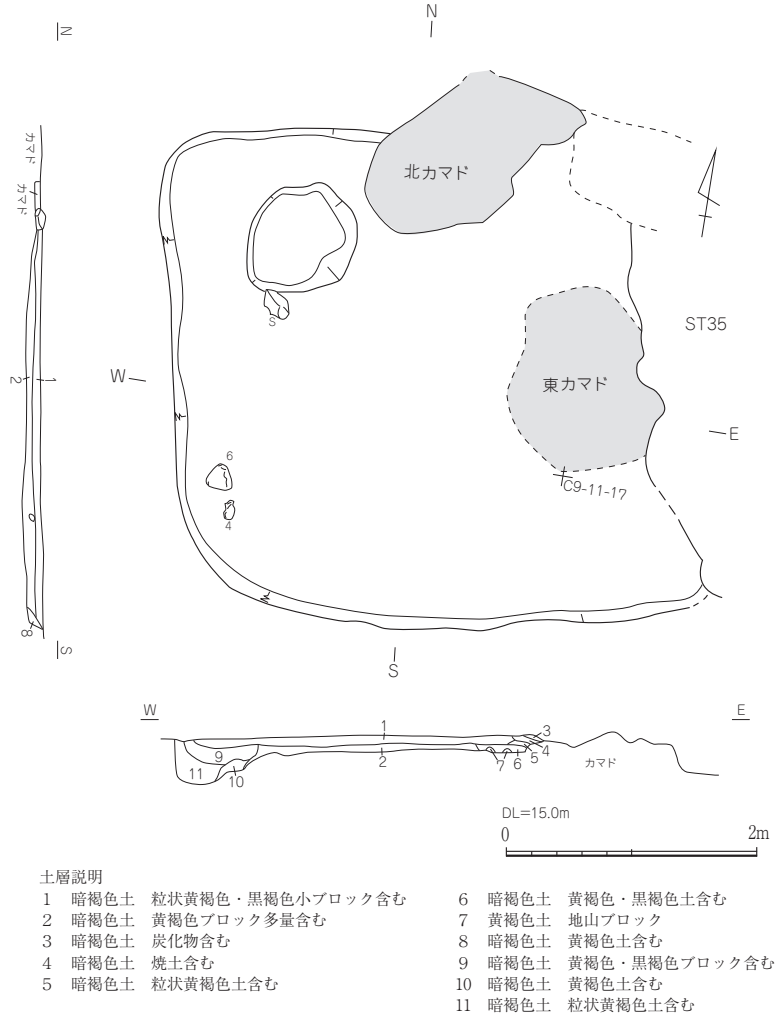
所見；Ⅷ AW 区の南端に位置し、グリッドは C9-11-11 他に跨がる。東側に ST35、西側に ST39 が配置しており、両方の竪穴建物跡の上層に構築されていた。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層下面に掘り込まれている。ST35 の上に構築されていた為に東壁部分が判然としていないものの平面形は方形と考えられる。規模は 3.9m である。主軸方位は北竈を軸線に採ると N-12° -W で西に若干振る。

覆土は上層に薄く暗褐色粘質土が被覆し、床面は黄褐色粘質土塊が混じる。

竈は２基検出しており、北壁の北竈は本建物跡に確実に伴うと考えられる。しかしながら東竈は遺存状態が良いものの、本建物跡の東壁の立ち上がりが判然としておらず、東竈は建物跡内で検出したような状況からして、別の建物跡に伴う可能性も若干残されている。

北竈は北壁の中央部近くに構築されていると考えられる。部分的に新しい柱穴に壊されている。規模は構築粘土からして長さ 75cm、幅 114cmで、焼成部の規模は長さ 32cm、幅 36cm、深さ 13cmである。焼土が多量に出土しており、袖部は幅 40cm程である。左袖からは大型の台石№ 5 が出土しており、更にその下からは須恵器№ 1 が出土している。煙道は壁外に設けられ、長さ 65cm、幅 14cmで先端部は他の柱穴により壊されている。

東竈は建物跡の壁を検出することができず、全貌は不明である。焼土が多量に広範囲に遺存して



土層説明

1　暗褐色土　粒状黄褐色・黒褐色小ブロック含む
2　暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
3　暗褐色土　炭化物含む
4　暗褐色土　焼土含む
5　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
6　暗褐色土　黄褐色・黒褐色土含む
7　黄褐色土　地山ブロック
8　暗褐色土　黄褐色土含む
9　暗褐色土　黄褐色・黒褐色ブロック含む
10　暗褐色土　黄褐色土含む
11　暗褐色土　粒状黄褐色土含む

図 2-78　ST38 遺構図

おり、100cm以上の範囲で焼土と竈構築粘土を検出した。焼成部掘り方は長さ 32cm、幅 36cm、深さ 13cmで袖の幅は 25cm程度である。左袖より 20cm程離れて砥石№3が出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-80 №1 ～ 6)

№1は大型の須恵器坏、2は横瓶の口縁部破片である。３、4は砂岩製の大型の砥石である。５、６は砂岩製の台石である。

ST39(図 2-81、82)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-20 他　**切り合い関係**；ST38・40、SK96 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；円形　**主軸方向**；N-9° -W

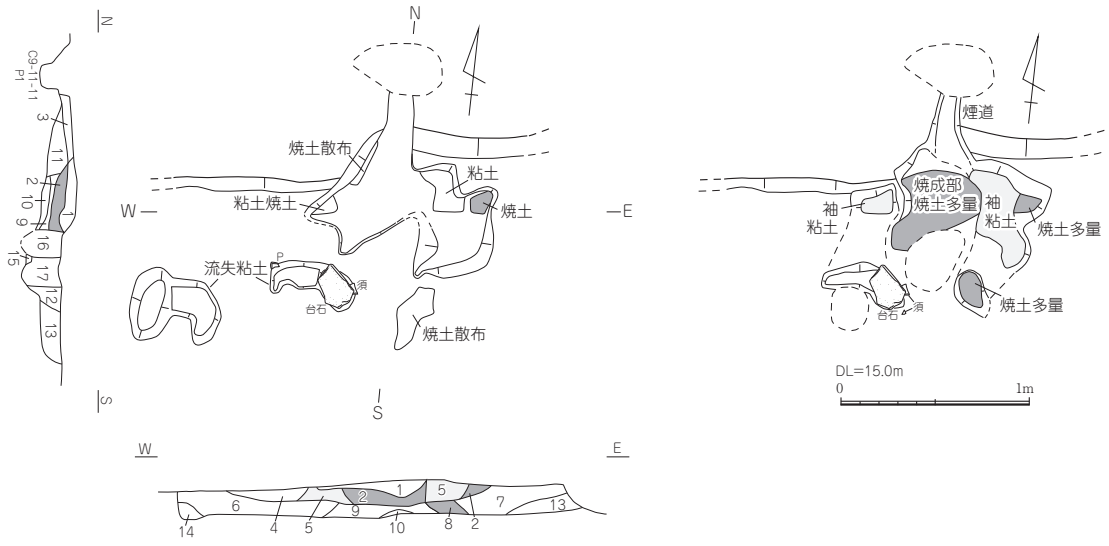
規模；径 5.4m ×深さ 0.23m　**覆土**；暗褐色粘質土主体　**柱穴**；主柱穴 P1 ～ 5

炉跡；形状楕円形　規模 103 × 57cm×深さ 11cm　覆土暗褐色粘質土、焼土

ベッド；造り付け、全周　幅 80 ～ 110cm×高さ 6 ～ 11cm

周溝；2 条　周溝 1 幅 12cm×深さ 1cm　周溝 2 幅 8cm×深さ 2cm　**その他付帯施設**；－

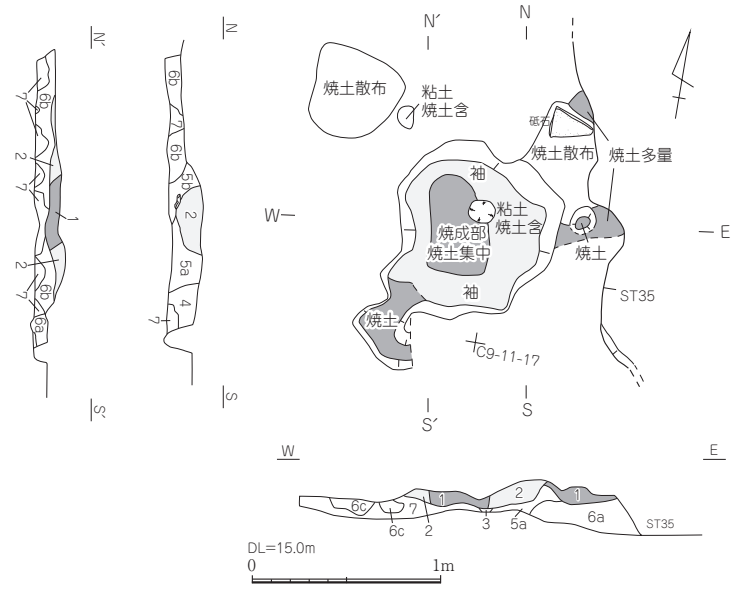
出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、支脚、叩石



土層説明

1　黒褐色土
2　明褐色土　焼土（赤褐色土）多量混入、炭化物含む
3　暗褐色土
4　暗褐色土　黄褐色中ブロック、粒状焼土含む
5　黄褐色土　袖
6　暗褐色土
7　暗褐色土
8　明褐色土　焼土多量混入、炭化物含む
9　暗褐色土　褐色土混入
10　褐色土
11　褐色土
12　暗褐色土　にぶい黄褐色土混入
13　褐色土　暗褐色土多量混入
14　暗褐色土　褐色土多量混入
15　褐色土
16　黒褐色土
17　黒褐色土

北カマド



土層説明

1　暗褐色土　焼土（明赤褐色・赤褐色）多量混入
2　黄褐色土　焼土混入、粘土、袖
3　黒褐色土
4　黒褐色土　褐色小ブロック混入
5 a 褐色土　粘土
5 b 褐色土
6 a 黒褐色土　粒状黄褐色ブロック混入
6 b 黒褐色土　褐色ブロック混入
6 c 黒褐色土
7　褐色土

東カマド

図 2-79　ST38 竈図

所見；Ⅷ AW 区の南端に位置し、グリッドは C8-15-20 他である。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層に掘り込まれている。古墳時代後期の ST38、ST40 が上層に構築されているものの、上面の破壊のみで床面までは達していない。

平面形は円形で径 5.4m、深さ 0.23m の中型の建物跡である。主軸方位は炉跡を軸線にすると

N-9° -W で僅かに西に振る。

覆土は上層は暗褐色粘質土が被覆し、下層になると黄褐色粘質土となる。

炉跡は中央より南寄りに位置し、ややいびつな楕円形である。規模は長軸 103cm、短軸 57cm、深さ 11cmで比較的しっかりした掘り方を持つ。下層には焼土が認められる。主柱穴は５基検出しており、径 18cmから 27cm、深さ 44cmから 50cmの深い柱穴跡である。ベッドは主柱穴５本を囲む五角形を呈し、幅 80cmから 110cm、高さは床面から 10cm程度の造り付けである。周溝はベッド除去後の建物跡掘り方検出の際に２条検出した。２条共途切れ途切れで壁際とベッド際で主柱穴を繋ぐような形で検出した。

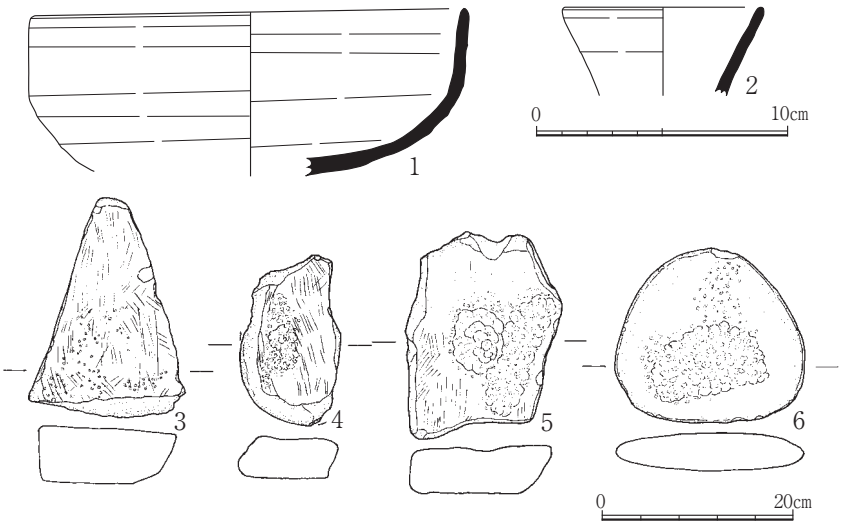


図 2-80　ST38 出土遺物実測図

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-82 №1 ～ 13)

№1 は弥生土器広口壺である。２から５は甕、６から 11 は鉢である。12 は支脚、13 は砂岩製の叩石である。

ST40(図 2-83 ～ 85)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-19 他　**切り合い関係**；ST39 を切る、ST42、SK90 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-2° -E

規模；(4.0) × 3.8m ×深さ 0.05m　**覆土**；暗褐色粘質土主体　**柱穴**；－

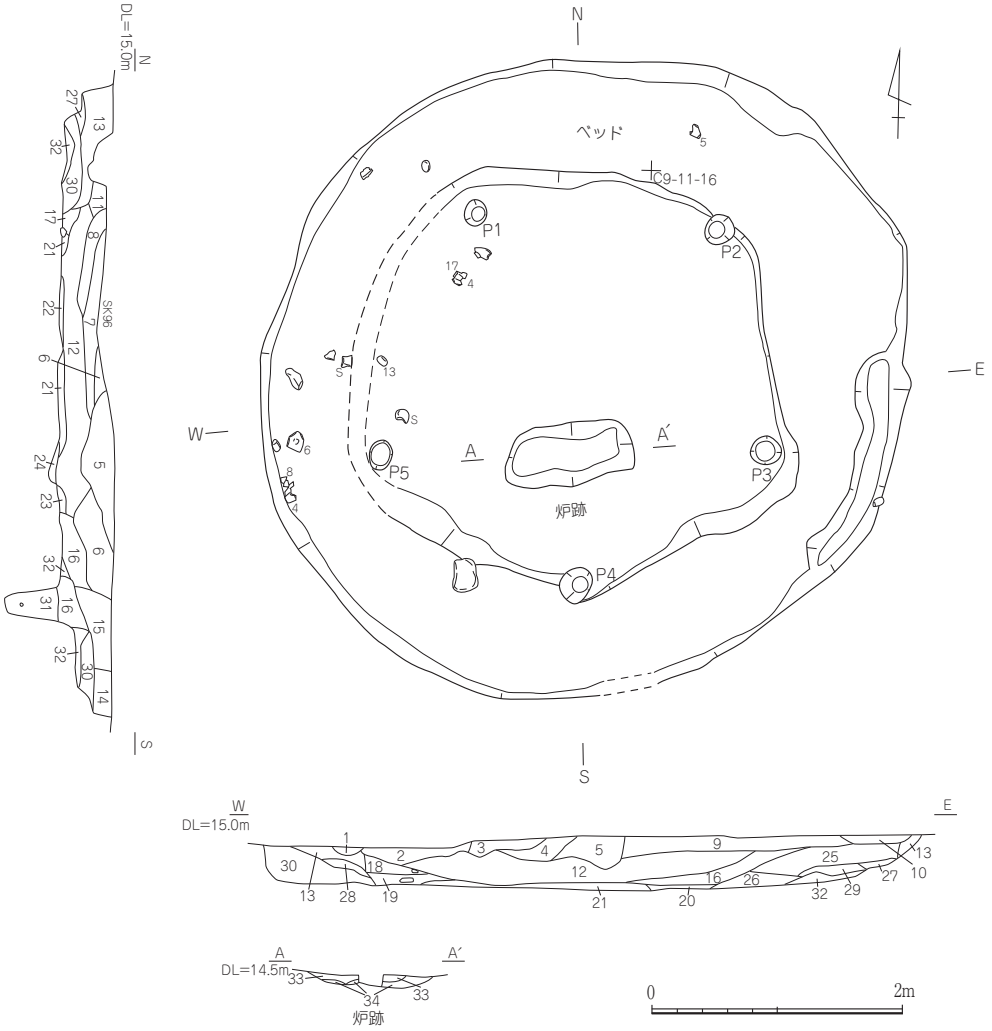
竈；位置・北　竈壁位置・中央？　構築材範囲長さ 95 ×幅 (70)cm　掘り方長さ 56 ×幅 (31)cm×深さ 7cm　覆土・暗褐色粘質土、焼土多量　煙道長さ 15cm×幅 (17)cm　袖補強材・－　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器細片

出土遺物；須恵器壺、土師器甕、叩石

所見；Ⅷ AW 区の南端に位置し、グリッドは C8-15-19、C8-15-20 他に跨がる。ほぼ同時期の ST42 に西壁を切られ、東床面は弥生時代後期の ST39 の上面に構築している。北西床面は SK90 に壊されている。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に浅く掘り込まれている。平面形は方形と考えられ、規模は南北軸が約４m、東西軸は 3.8m である。深さは５cmと極めて浅い。主軸方位はほぼ真北で N-2° -E である。

覆土は暗褐色粘質土が５cm程薄く被覆しているだけであった。床面中央部は貼床となっていた。

竈は北壁の中央部に位置している。構築材の遺存は悪く、黄褐色粘質土が僅かに残る程度であった。焼成部は比較的明確に焼土が残存していた。構築材の範囲は径約 90cm程度である。焼成部の掘り方は長さ 56cm、幅 31cm、深さ 7cmである。左袖部は判然とせず、右袖は黄褐色粘質土で構築



土層説明

1　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
2　にぶい黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
4　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
5　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
6　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
7　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック多量含む
8　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
9　黒褐色粘質土
10　暗褐色粘質土
11　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
12　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入、炭化物含む
13　褐色粘質土　小礫多量混入
14　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
15　にぶい黄褐色粘質土
16　暗褐色粘質土
17　暗褐色粘質土
18　暗褐色粘質土　焼土（明赤褐色）混入、土器含む
19　暗褐色粘質土　中礫、炭化物含む
20　暗褐色粘質土
21　にぶい黄褐色粘質土　焼土多量混入
22　にぶい黄褐色粘質土　炭化物多量混入
23　黒褐色粘質土　炭化物多量混入
24　黒色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
25　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
26　暗褐色粘質土　焼土・小礫多量混入
27　黄褐色粘質土
28　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色土混入
29　黒色粘質土
30　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック混入
31　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック混入
32　黄褐色粘質土　暗褐色土混入、小礫含む
33　暗褐色粘質土　焼土混入
34　黒色粘質土　炭化物多量混入

図 2-81　ST39 遺構図

されており幅 20㎝程度である。煙道は僅かに壁外に設けられ長さ 15㎝である。袖補強材、天井石、支脚等は認められていない。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-85 №1 ～ 3)

№1 は須恵器壺、２は土師器甕、３は砂岩製の叩石である。

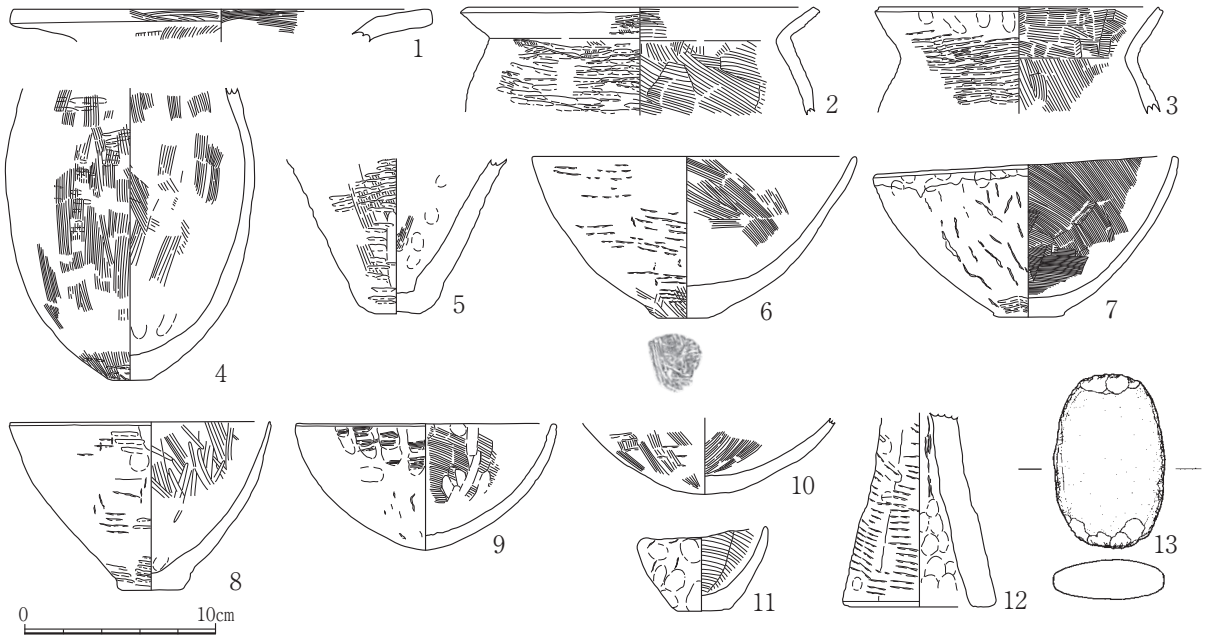


図 2-82　ST39 出土遺物実測図

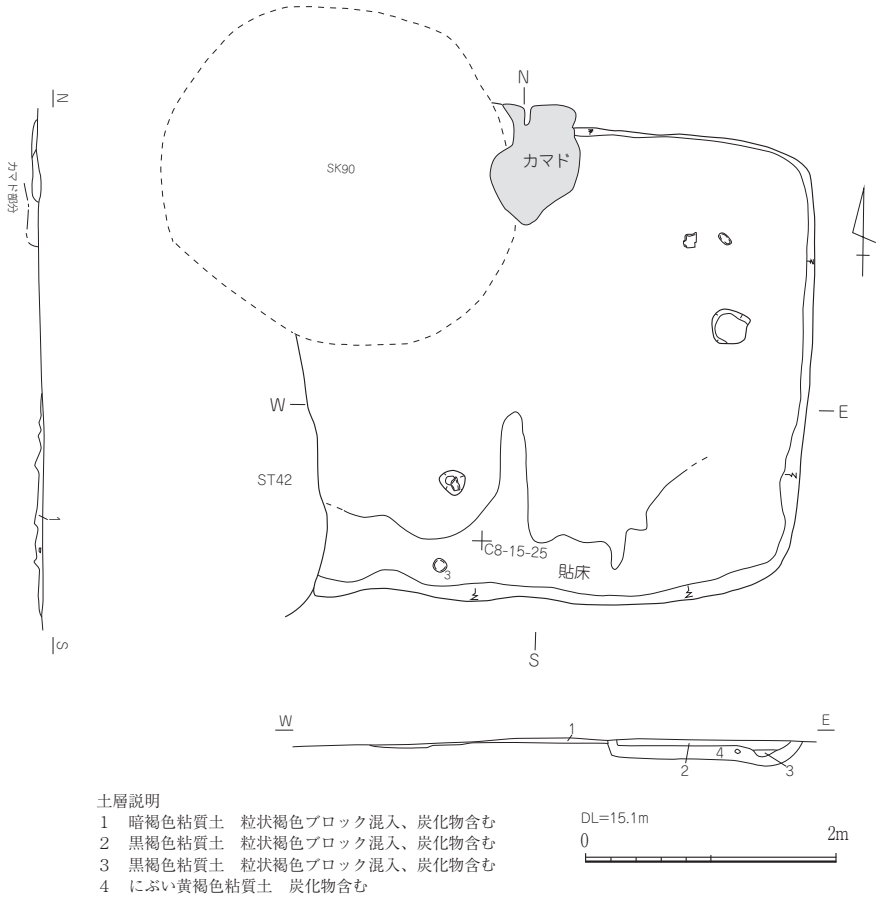
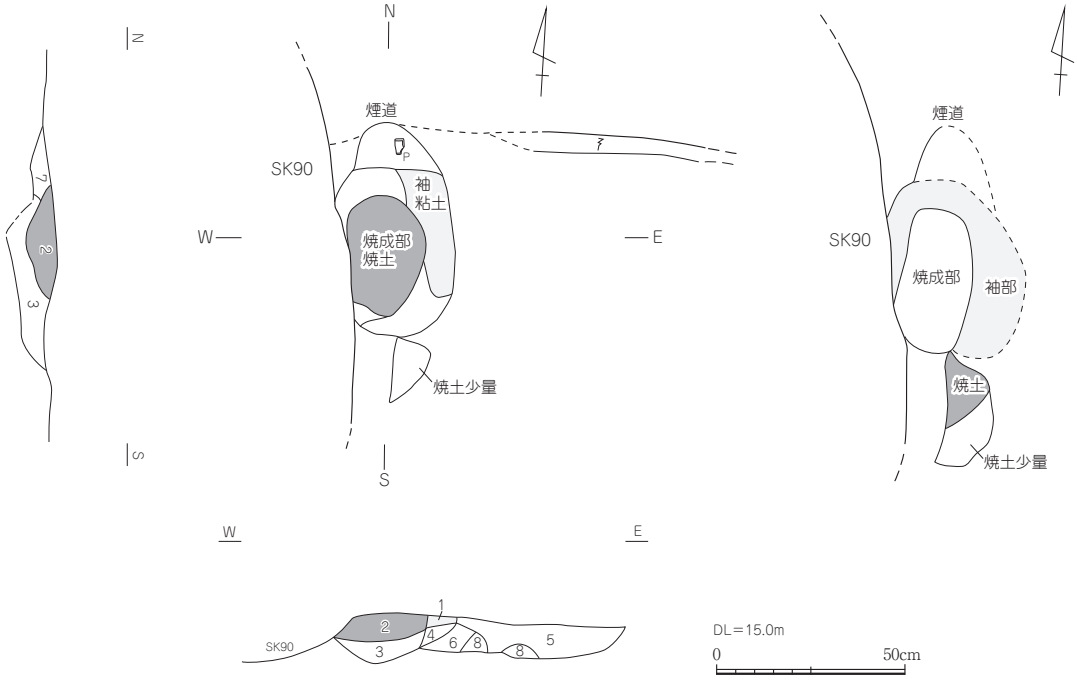


図 2-83　ST40 遺構図



土層説明
1　褐色土　炭化物含む、袖
2　暗褐色土　焼土（明赤褐色・赤褐色）多量混入、焼成部
3　暗褐色土　炭化物含む
4　黒褐色土　炭化物含む
5　暗褐色土　粒状褐色ブロック混入、炭化物含む
6　暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
7　黒褐色土
8　褐色土

図 2-84　ST40 竈図

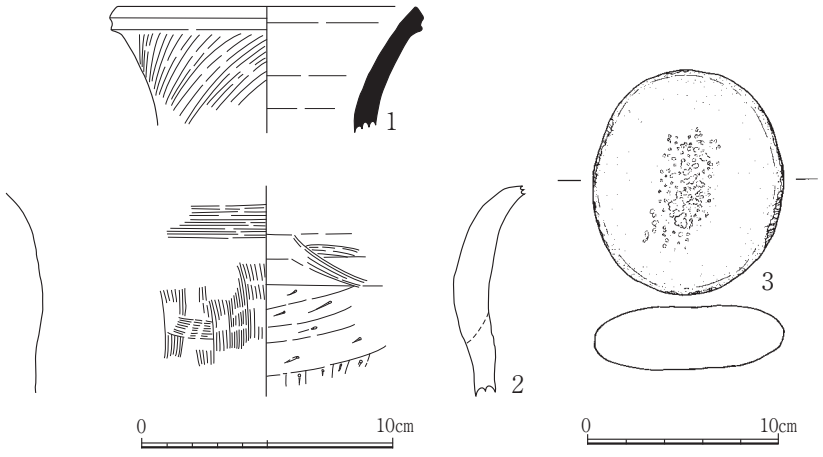
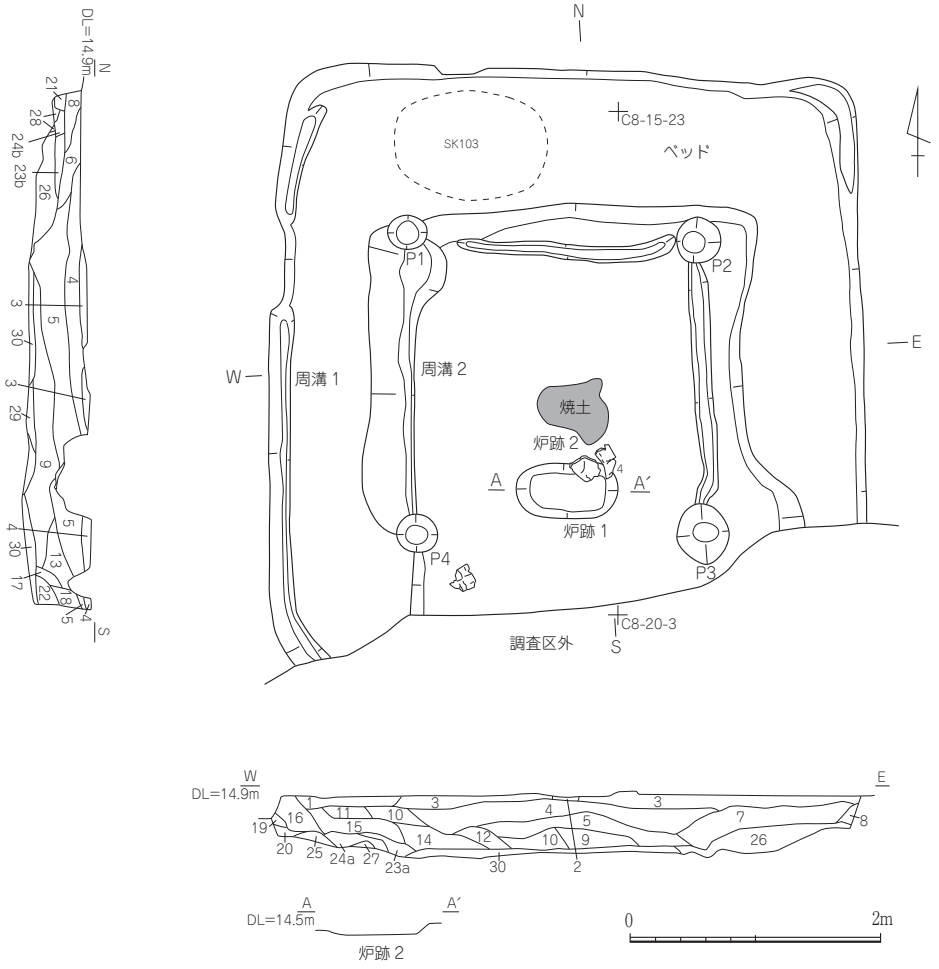


図 2-85　ST40 出土遺物実測図

ST41（図 2-86、87）
調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-22 他
切り合い関係；ST43、SK103、SD91・108・111・112 に切られる
時期；弥生末～古墳初
形状；隅丸方形　**主軸方向**；N-0°
規模；4.7 × (4.8)m × 深さ 0.43m

覆土；暗褐色粘質土、貼床　**柱穴**；主柱穴 P1 ～ 4
炉跡；炉跡 1 形状楕円形 規模 80 × 45cm×深さ 3cm 覆土暗褐色粘質土、焼土　炉跡 2 地床炉 形状不整形 規模 55cm 覆土焼土　**ベッド**；造り付け　全周　幅 80 ～ 110cm×高さ 11cm
周溝；2 条　周溝 1 幅 8cm×深さ 6cm　周溝 2 幅 10 ～ 15cm×深さ 4cm　**その他付帯施設**；－
出土遺物；弥生土器甕、鉢、高坏、鉄鎌
所見；Ⅷ AW 区の南端に位置し、グリッドは C8-15-22、C8-15-23 他に跨がる。南壁は検出できておらず、調査区外へと広がる。西側を古墳時代後期の ST43 に壊される。遺構検出面は基本土層Ⅲ



土層説明

1	暗褐色土	17	暗褐色土　褐色ブロック含む
2	暗褐色土	18	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量、小礫・炭化物含む
3	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む	19	暗褐色土
4	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、小礫含む	20	暗褐色土　小礫含む
5	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器・小礫含む	21	暗褐色土
6	暗褐色土	22	暗褐色土　土器・小礫含む
7	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、炭化物・小礫含む	23 a	暗褐色土　褐色・黄褐色ブロック、小礫含む
8	暗褐色土　黒褐色ブロック混入、粒状黄褐色ブロック含む	23 b	暗褐色土　褐色ブロック多量混入
9	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む	24 a	暗褐色土　粒状黄褐色・褐色・黒褐色ブロック含む
10	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む	24 b	暗褐色土
11	暗褐色土	25	暗褐色土　褐色ブロック含む
12	暗褐色土　小礫含む	26	暗褐色土　褐色・黒褐色ブロック含む
13	暗褐色土	27	褐色土　小礫含む
14	暗褐色土	28	暗褐色土
15	暗褐色土	29	暗褐色土　焼土（明赤褐色）多量含む
16	暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、小礫含む	30	暗褐色土　粒状黄褐色・黄褐色ブロック含む

図 2-86　ST41 遺構図

層で床面はⅣ層に掘り込まれている。平面形は隅丸方形になる。規模は東西が 4.7m、南北は 4.8m 以上である。深さは 43cmとしっかりと掘り込まれている。主軸方位は真北を指し N-0° である。

覆土は暗褐色粘質土が主体である。床面は貼床である。

炉跡は２基検出した。炉跡１は南寄りに構築されており、楕円形で掘り方を有する。規模は長径 80cm、短径 45cm、深さ 3cmである。焼土を含む。炉跡２は地床炉で炉跡１より 20cm程離れて北側に位置する。焼土が 55cm程の範囲に不整形に広がっていた。

主柱穴は４本検出した。ベッドの四隅に穿たれている。径 30cmから 42cm、深さ 41cmから 48cmで、南西部の P4 のみが 29cmとやや浅かった。ベッドは全周すると考えられる。造り付けベッドで

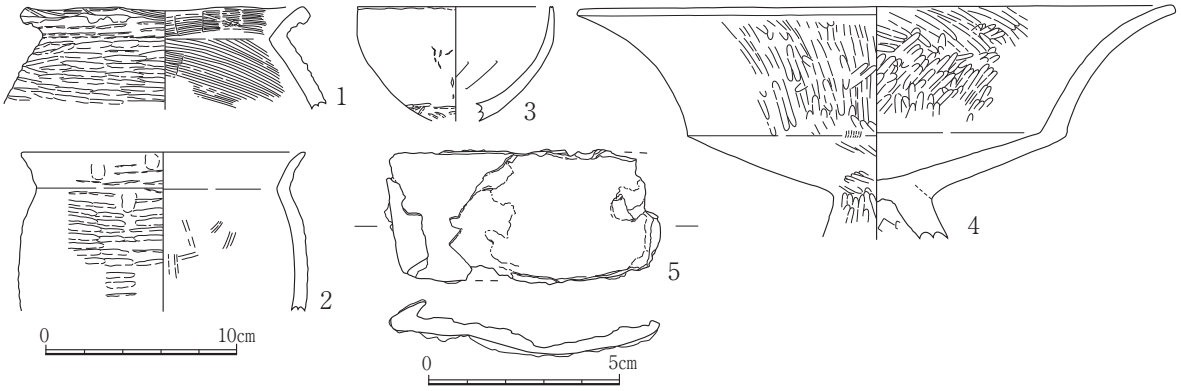


図 2-87　ST41 出土遺物実測図

幅 80cmから 110cmで高さは床面より 11cmである。黄褐色粘質土と黒褐色粘質土での造り付けであるが、建物跡の掘り方の段階で僅かに床面より高くなっていた。周溝は壁際の周溝 1 とベッド際の周溝 2 である。周溝 1 は全周せず西壁に一部認められる。周溝 2 は南側では検出していない。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-87 №1 ～ 5)

№1、2 は弥生土器甕、3 は鉢、4 は大型の高坏である。5 は鉄鎌と考えられる。

ST42(図 2-88 ～ 91)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-18 他　**切り合い関係**；ST40、SK104 を切る、SK90 に切られる
時期；古墳後期　**形状**；隅丸長方形　**主軸方向**；N-0°
規模；4.6 × 4.2m ×深さ 0.17m　**覆土**；暗褐色粘質土主体、貼床　**柱穴**；－
竈；東竈　位置・東壁　竈壁位置・中央部　構築材範囲長さ 75 ×幅 135cm　掘り方規模長さ 42 ×幅 46cm×深さ 6cm　覆土･暗褐色粘質土、黄褐色粘質土、焼土　煙道長さ 38 ×幅 32cm　袖補強材･礫　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・須恵器坏
北竈　位置・北壁　竈壁位置・中央部　規模長さ 85 ×幅 80cm　掘り方規模長さ 36 ×幅 32cm×深さ 4cm　覆土･暗褐色粘質土、黄褐色粘質土、焼土　煙道長さ 60 ×幅 34cm　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無
その他付帯施設；中央部掘り込み
出土遺物；須恵器坏、壺、長頸壺、台石
所見；Ⅷ AW 区の南端に位置し、グリッドは C8-15-18、C8-15-19 他に跨がり、東側はほぼ同時期の ST40 の上に東竈が構築されている。北東部角は SK90 に切られる。北西部は風倒木の SK104 の上に床面を構築している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に浅く掘り込まれている。平面形は東西軸が 40cm程長く隅丸長方形となる。規模は東西軸 4.6m、南北軸 4.2m、深さ 17cmと浅い。主軸方位は真北を指し N-0° である。

覆土は暗褐色粘質土が主体で床面は貼床となる。中央部には掘り込みが認められ同じく暗褐色粘質土に黄褐色粘質土塊が混じる土質である。

竈は 2 基検出した。東竈は ST40 の上に構築されており、構築粘土等の範囲は 75cm、135cmで、

焼成部の掘り方は 42cm× 46cm、深さ 6 cmである。焼成部で多量の焼土を検出した。袖部は黄褐色粘質土で構築されており、両袖共幅 20cm程度である。焼成部の上層には天井部の黄褐色粘質土が崩落している。煙道は壁外に設けられており、規模は長さ 38cm、幅 32cmである。袖補強材は右袖の奥に礫が出土しているものの、補強材として使用されたものかどうかは不明である。天井石、支脚は出土していない。竈の前庭部から須恵器坏№ 1 が出土している。

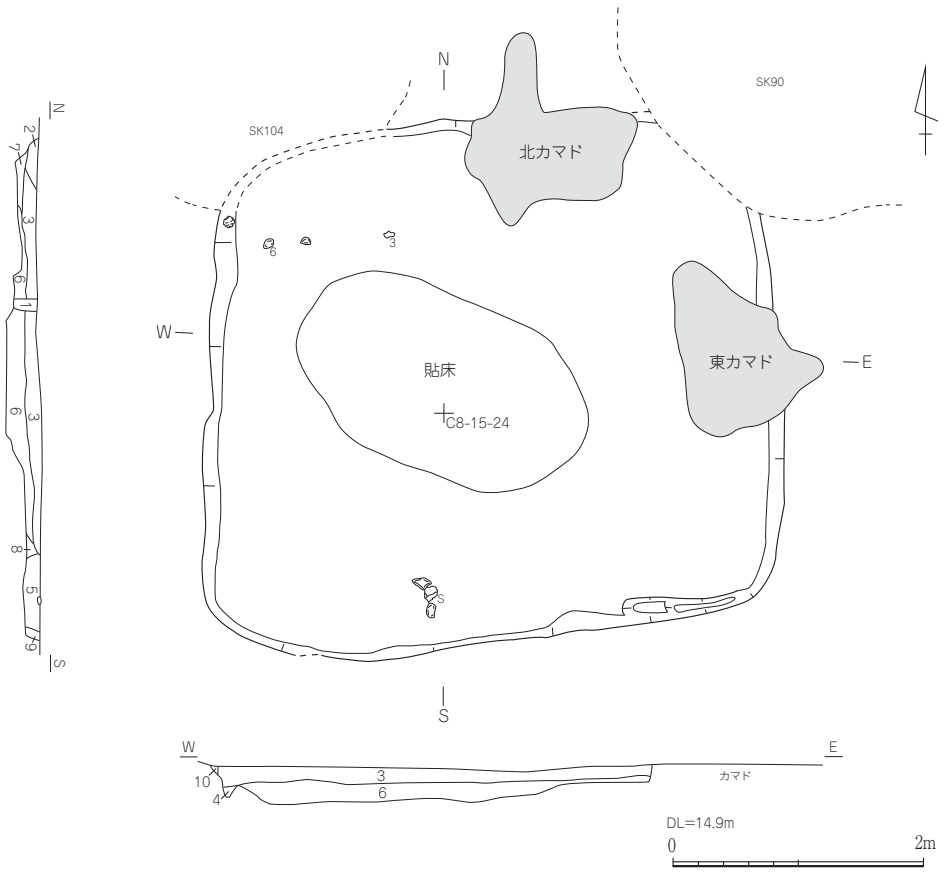
北竈は北壁の中央部に位置し、遺存状態は余り良くない。構築粘土等の残りは悪く、焼土が少量確認した。規模は 85cm、80cmで、焼成部掘り方は長さ 36cm、幅 32cm、深さ 4 cmである。焼成部で僅かに焼土を検出した。袖も明瞭な粘土は認められないが、幅 20cm弱である。煙道は壁外に設けられており、長さ 60cmと比較的長い。幅は天井石、支脚等は出土していない。

建物跡の床面中央部は長さ 2.9m、幅 1.5m、深さ 10cmの楕円形の掘り込みを検出している。掘削後に床面は貼床を施している。中からは遺物は出土していない。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

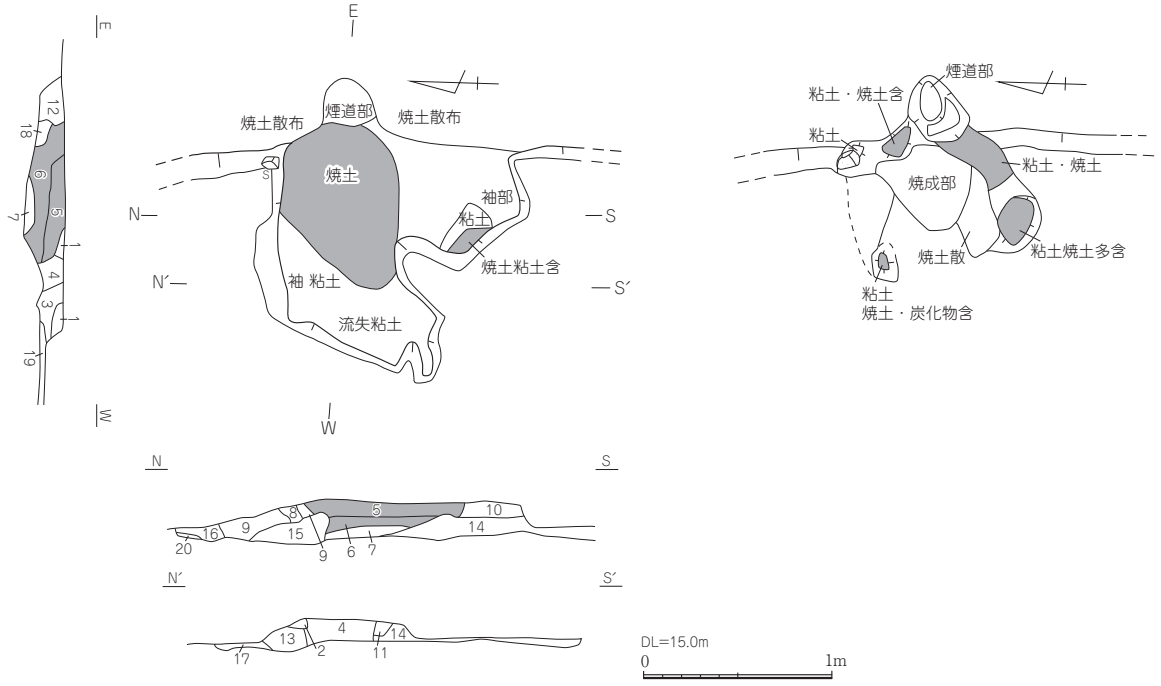
出土遺物 (図 2-91 №. 1 ～ 6)

№. 1 から 3 は須恵器坏、 4 は長頸壺、 5 は壺、 6 は砂岩製の台石である。



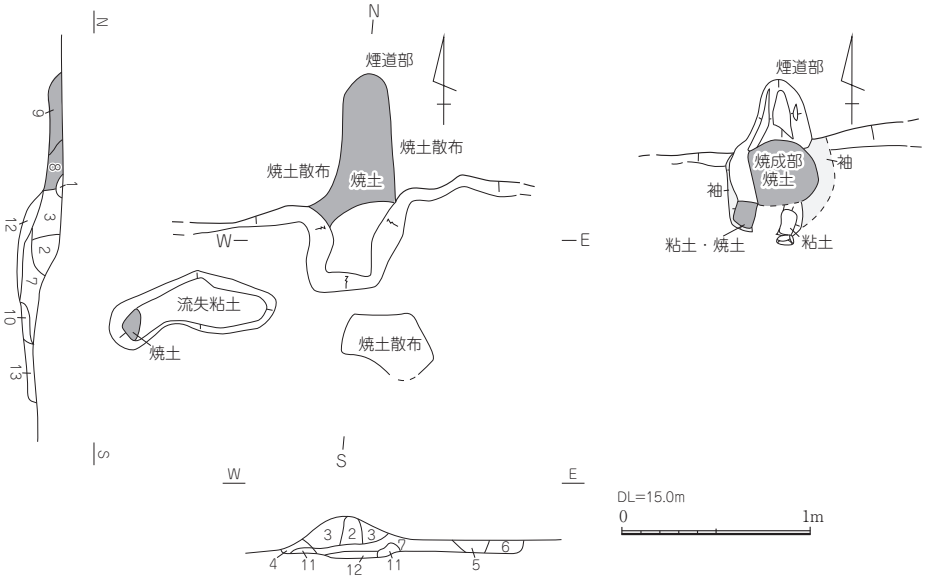
土層説明
1　暗褐色土
2　にぶい黄褐色土　粒状黄褐色・黒褐色ブロック、小礫、焼土（明赤褐色）含む
3　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器・小礫含む
4　暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
5　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
6　暗褐色土　粒状黄褐色・黄褐色ブロック、小礫含む
7　暗褐色土　焼土少量、粒状黄褐色ブロック含む
8　暗褐色土　黄褐色ブロック含む
9　黄褐色土
10　黄褐色土　別遺構

図 2-88　ST42 遺構図



土層説明
1　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック・黒褐色ブロック、褐色ブロック含む
2　黄褐色土
3　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
4　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量含む
5　にぶい黄褐色土　粒状黄褐色ブロック多量、焼土、土器・小礫含む
6　にぶい黄褐色土　粒状黄褐色ブロック、焼土（明赤褐色）多量、小礫含む
7　にぶい黄褐色土　焼土含む
8　にぶい黄褐色土　黄褐色ブロック多量含む
9　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
10　暗褐色土　にぶい黄褐色土混入、粒状黄褐色ブロック多量含む
11　暗褐色土
12　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
13　黒色土　粒状黄褐色ブロック含む
14　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、焼土含む
15　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
16　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
17　暗褐色土　黄褐色ブロック含む
18　褐色土
19　褐色土　暗褐色ブロック含む
20　黄褐色土

図 2-89　ST42 東竈図



土層説明
1　黒褐色土
2　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック混入
3　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、黒色土混入
4　暗褐色土　黄褐色土多量混入
5　暗褐色土　黄褐色土多量混入、焼土含む
6　暗褐色土　黄褐色土多量混入
7　暗褐色土　黄褐色ブロック、焼土粒、粒状礫多量混入
8　暗褐色土　粒状黄褐色土・焼土混入
9　暗褐色土　焼土粒、炭化物含む
10　黒褐色土　暗褐色ブロック含む
11　黄褐色土
12　褐色土　暗褐色ブロック含む
13　黄褐色土　住居貼床部

図 2-90　ST42 北竈図

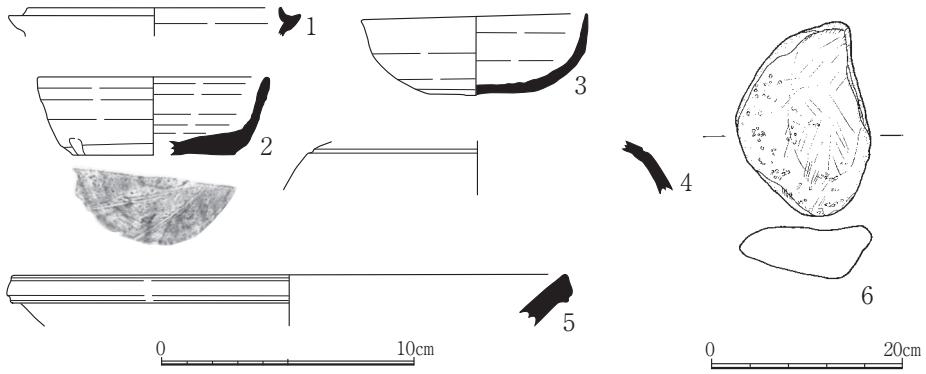


図 2-91　ST42 出土遺物実測図

ST43(図 2-92 ～ 94)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-21 他　**切り合い関係**；ST41 を切る、ST44、SK92・93、SD108・110 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-2° -E

規模；4.3 × 4.2m ×深さ 0.19m　**覆土**；暗褐色粘質土主体、貼床　**柱穴**；P1、2

竈；位置・北壁　竈壁位置・中央部　構築材範囲長さ 90 ×幅 130cm　焼成部掘り方長さ 70 ×幅 55cm×深さ 5cm　覆土・黄褐色粘質土、焼土　煙道長さ (72) ×幅 27cm　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器片

その他付帯施設；中央部掘り込み

出土遺物；須恵器坏蓋、提瓶、土師器甕、鉢

所見；Ⅷ AW 区の南西端に位置し、グリッドは C8-15-21、C8-15-22 他に跨がる。東側の ST41 の西壁の一部を切り、古墳時代後期のほぼ同時期の ST44 に煙道は切られている。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は隅丸方形で一辺が約 4.3m で深さ 19cmと浅い。主軸方位はほぼ真北を指し N-2° -E である。

覆土は暗褐色粘質土が薄く被覆し、床面は貼床である。

竈は北壁の中央部に構築されている。構築材の範囲は 90cm、130cmで遺存状態は良い。焼成部の掘り方は長さ 70cm、幅 55cm、深さ５cmである。竈のど真ん中に径 16cmの掘り込みがあるものの、別の時期の柱穴跡と考えられる。袖は黄褐色粘質土で構築されており、左袖は幅は 24cmである。右袖は壊されており不明であるものの、礫が残存しており、補強材の可能性がある。煙道は長いものの先端はST44 に切られている。残存長で長さ 72cmである。煙道の中には礫が２点出土している。用途は不明である。

主柱穴の可能性のある柱穴を２基検出している。北寄りの床面に穿たれており、径 22cm、27cm、深さ 54cm、36cmのものである。

中央部ではやや乱れた円形の中央部掘り込みを検出した。径 1.4m、深さ 15cmである。また建物跡の中央部は中央部落ち込みを被覆して貼床となっている。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-94 №１～ 6)

№１は須恵器坏蓋、２は須恵器提瓶か。３から５は土師器甕、６は鉢である。

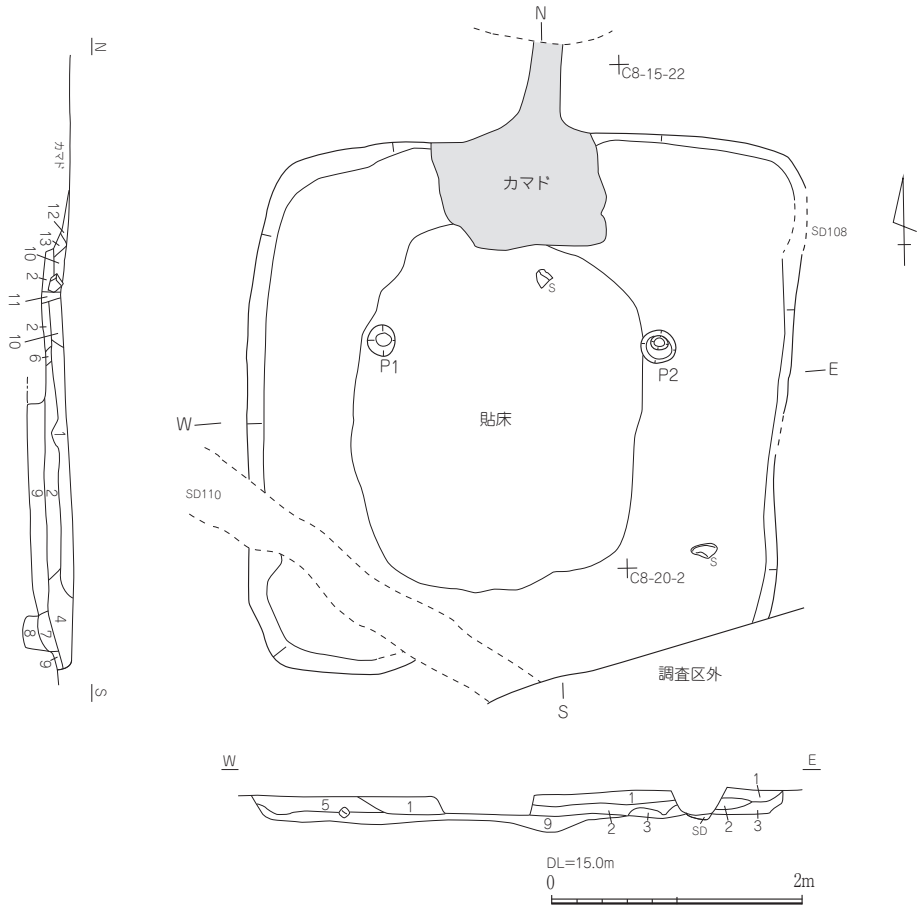


図 2-92　ST43 遺構図

ST44(図 2-95 ～ 97)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-16 他　**切り合い関係**；ST43 切る、SK97、SD99・106 切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；S-77° -E

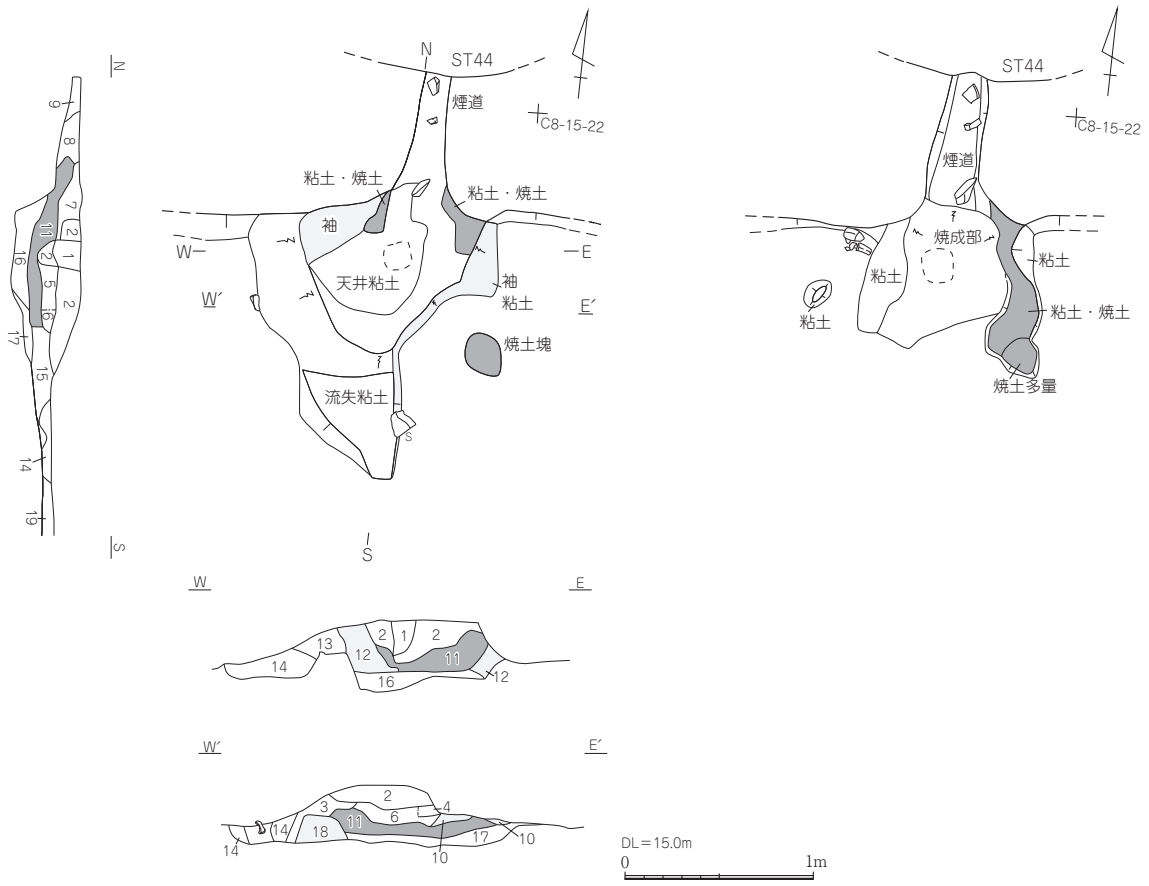
規模；4.1 × 4.1m ×深さ 0.14m　**覆土**；暗褐色粘質土、貼床　**柱穴**；－

竈；位置・東壁　竈壁位置・やや南寄り　構築材範囲長さ 105 ×幅 137cm　焼成部規模長さ 90 ×幅 100cm×深さ 9cm　覆土・黒褐色粘質土、焼土　煙道長さ 105 ×幅 28cm　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無

その他付帯施設；中央部掘り込み

出土遺物；須恵器坏、高台付坏、壺、高坏、土師器甕

所見；Ⅷ AW 区の南西部に位置し、グリッドは C8-15-16、C8-15-17 他に跨がる。南側に位置する ST43 の竈煙道を切る。他の ST43 以外の溝等の全ての遺構には切られる。古代の溝 SD99 が北西部を斜めに壊し、西側部の壁は判然としなかった。また SB16 の P1 にも壊されている。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は浅くⅣ層上面に掘り込まれている。壁が浅いため立ち上がりが判然とし



土層説明

1　暗褐色土
2　にぶい黄褐色土　粒状黄褐色ブロック含む、天井粘土
3　黒色土　粒状黄褐色ブロック、小礫含む
4　黒褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
5　暗褐色土
6　にぶい黄褐色土
7　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、焼土（明赤褐色）含む
8　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
9　にぶい黄褐色土
10　黄褐色土　にぶい黄褐色土混入、袖、粘土
11　にぶい黄褐色土　焼土多量含む、焼成部
12　にぶい黄褐色土　黄褐色ブロック含む、袖、粘土
13　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
14　にぶい黄褐色土
15　暗褐色土　黄褐色ブロック、土器含む
16　暗褐色土　にぶい黄褐色ブロック混入
17　にぶい黄褐色土
18　にぶい黄褐色土　黄褐色ブロック含む、袖、粘土
19　暗褐色土　住居貼床

図 2-93　ST43 竈図

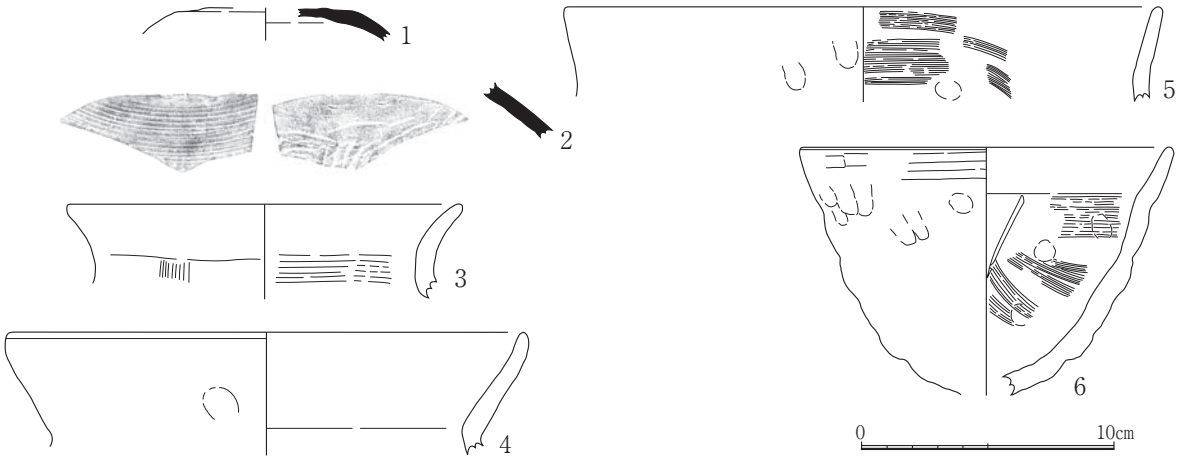
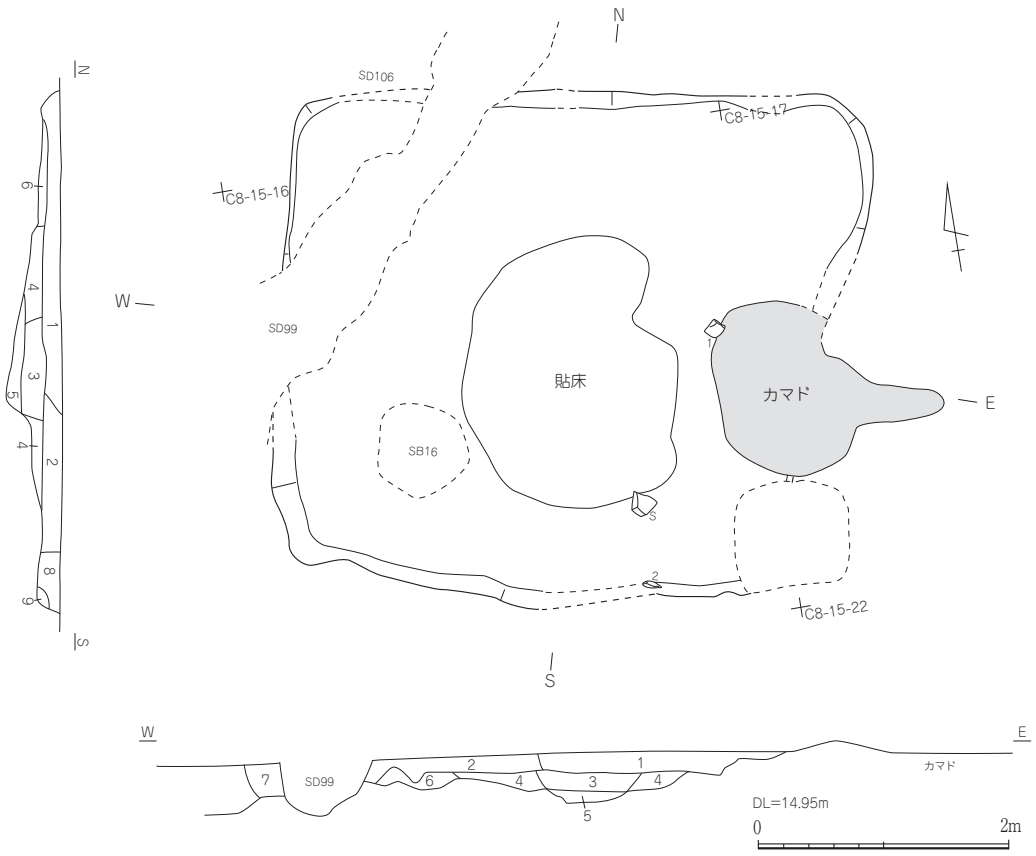


図 2-94　ST43 出土遺物実測図



土層説明
1　暗褐色土　粒状黄褐色・黄褐色ブロック、土器・礫・炭化物含む
2　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
3　黒褐色土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック、礫・炭化物含む
4　にぶい黄褐色土　褐色ブロック多量混入、土器・炭化物・礫含む
5　黒褐色土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む
6　褐色土　暗褐色ブロック混入
7　暗褐色土　別遺構
8　暗褐色土　別遺構
9　暗褐色土　別遺構

図 2-95　ST44 遺構図

ないものの平面形は方形と考えられる。規模は一辺 4.1m のやや小型で深さは 14cmである。主軸方位は竈を軸線に採ると、竈が東竈のため S-77° -E となっている。

覆土は暗褐色粘質土が被覆し、床面は貼床で中央部掘り込みの上面も貼床となっている。

竈は東壁でやや南側に片寄る。竈構築材の範囲は長さ 105cm、幅 137cmで遺存状態は良いものの、部分的に新しい柱穴等に壊されている箇所もある。焼成部の掘り方は長さ 90cm、幅 100cm、深さ 9 cmである。袖は黒褐色粘質土で構築されており、左袖は別の柱穴に壊されているものの 15cmから 20cm、右袖は残存部で 25cmを測る。

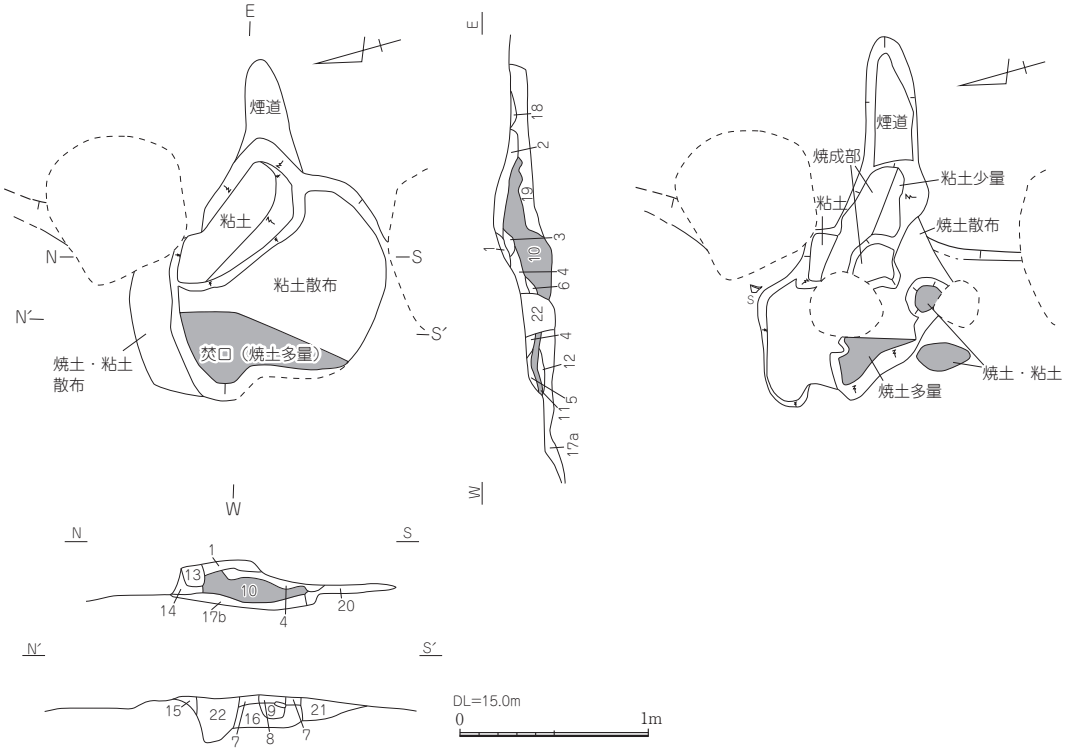
焼成部には焼土が 12cm程の厚さで残存しており、更にその上には天井部の粘土が５cm程の厚さで遺存していた。袖補強材、天井石、支脚、竈内遺物は検出していない。煙道は壁外に長さ 105cm、幅 28cmで先端部近くで焼土を確認している。

中央部床面の貼床の下で掘り込みを検出した。不整形の掘り込みで長軸 2.16m、短軸 1.71m で深さ７cmである。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-97 №１～５)

№１は須恵器坏、２は高台付坏、３は壺、４は高坏、５は土師器甕である。



土層説明

1	黒褐色土　粒状黄褐色土含む	8	暗褐色土　黄褐色土混入	15	暗褐色土　焼土混入
2	暗褐色土　粒状黄褐色土、焼土含む	9	暗褐色土　焼土混入、粘土	16	黒褐色土　粒状褐色土、焼土混入
3	黒褐色土　黄褐色ブロック混入	10	明赤褐色土　暗褐色土混入、焼土	17 a	黒褐色土　粒状褐色土、焼土混入
4	黒褐色土	11	明赤褐色土　焼土	17 b	黒褐色土　粒状褐色土混入、床
5	暗褐色土　粒状黄褐色土、焼土含む	12	黒褐色土	18	暗褐色土　焼土混入
6	黄褐色土	13	黄褐色土　粘土	19	暗褐色土
7	黒褐色土　粒状黄褐色土混入	14	黒褐色土	20	黒褐色土　住居覆土
				21	黒褐色土
				22	暗褐色土

図 2-96　ST44 竈図

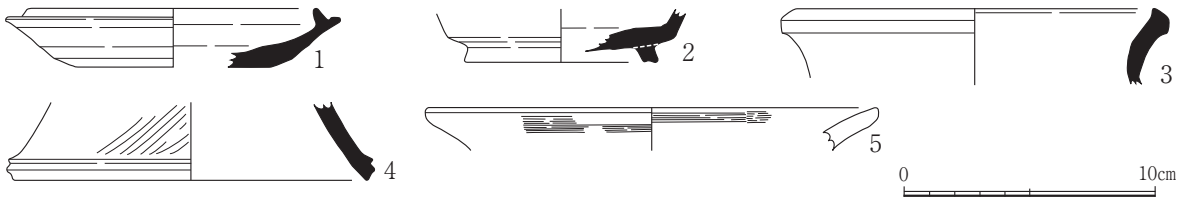


図 2-97　ST44 出土遺物実測図

ST45(図 2-98、99)

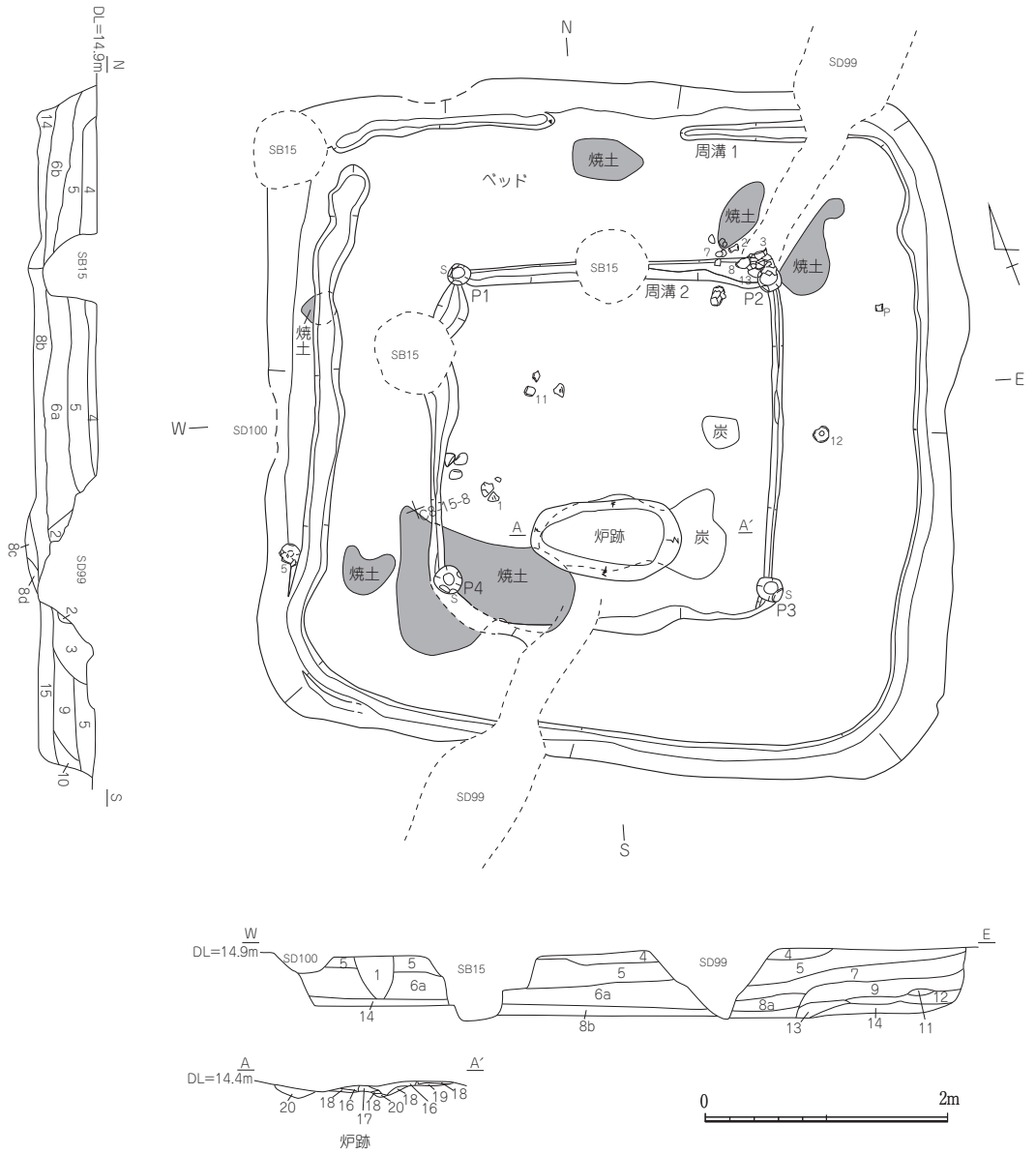
調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-3 他　**切り合い関係**；SB13・15、SK80・81、SD97 ～ 100 に切られる

時期；弥生末～古墳初　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-28° -E

規模；5.7 × 5.6m ×深さ 0.54m

覆土；上層黒褐色粘質土、中層暗褐色粘質土、下層貼床、焼土混じり　**柱穴**；主柱穴 P1 ～ 4

炉跡；形状楕円形　規模 124 × 66cm×深さ 8cm　覆土黒褐色粘質土、焼土



土層説明

1　暗褐色粘質土　別遺構
2　黒褐色粘質土　別遺構
3　暗褐色粘質土　別遺構
4　黒褐色粘質土
5　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
6 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
6 b 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック、焼土（赤褐色）混入、炭化物含む
7　黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
8 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
8 b 暗褐色粘質土
8 c 暗褐色粘質土　炭化物含む
8 d 暗褐色粘質土　焼土（明赤褐色）・炭化物含む
9　暗褐色粘質土　粒状黄褐色・黒褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
10　暗褐色粘質土　粒状黄褐・黒褐色ブロック混入、炭化物含む
11　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック、焼土（赤褐色）含む
12　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
13　暗褐色粘質土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック混入
14　黒褐色粘質土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック混入
15　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む
16　にぶい黄褐色粘質土　粒状小礫多量混入
17　暗褐色粘質土　黄褐色土混入
18　黒色土　炭化物多量混入
19　にぶい黄褐色粘質土　暗褐色土混入
20　暗褐色粘質土　小礫多量、黄褐色ブロック混入

図 2-98　ST45 遺構図

ベッド；造り付け　幅 110cm×高さ 12cm

周溝；2 条　周溝 1 幅 12 ～ 24cm×深さ 4 ～ 10cm　周溝 2 幅 10 ～ 16cm×深さ 2cm

その他付帯施設；－

出土遺物；弥生土器甕、鉢、高坏、甑、鏃

所見；Ⅷ AW 区の西側部に位置し、グリッドは C8-15-3、C8-15-4 他に跨がる。SB13、SB15、

SD99、SD100 に切られる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面はⅣ層下面にまで深く掘り込まれている。平面形は隅丸方形で一辺が約 5.7m で深さ 54cmと深い。主軸方位は炉跡を軸線に採るとN-28° -E である。

覆土は上層が黒褐色粘質土、中層が暗褐色粘質土、下層は貼床となり焼土が若干混じる。

炉跡は南寄りに位置し、楕円形で規模は長軸 124cm、短軸 66cm、深さ 8cmの大型の炉跡である。炭化物、焼土が混じる。主柱穴は４本でベッドの四隅で検出した。径 18cmから 22cm、深さ 31cmから 37cmで径は小さいものの掘り方はしっかりしている。P1 は扁平な礫で根固めをしている。ベッドは造り付けで全周し、幅 110cmと広く、高さは床面から 12cmである。周溝は壁際の周溝１とベッド際の周溝２の２条である。周溝１はほぼ全周し、西壁部では壁から若干はずれる。周溝２については掘り方調査の段階で検出した。造り付けのベッド除去後に南壁際近くまで長く穿たれていた。本来ベッドは「コ」字状を呈していた可能性がある。

遺物出土状況はベッド際と床面の中央部近くで№７から９の鉢がまとまって出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-99 №１～ 14)

№１から４は弥生土器甕である。５から 11 は鉢である。12 は高坏、13 は鉢状の甑、14 は鉄製の鑿である。

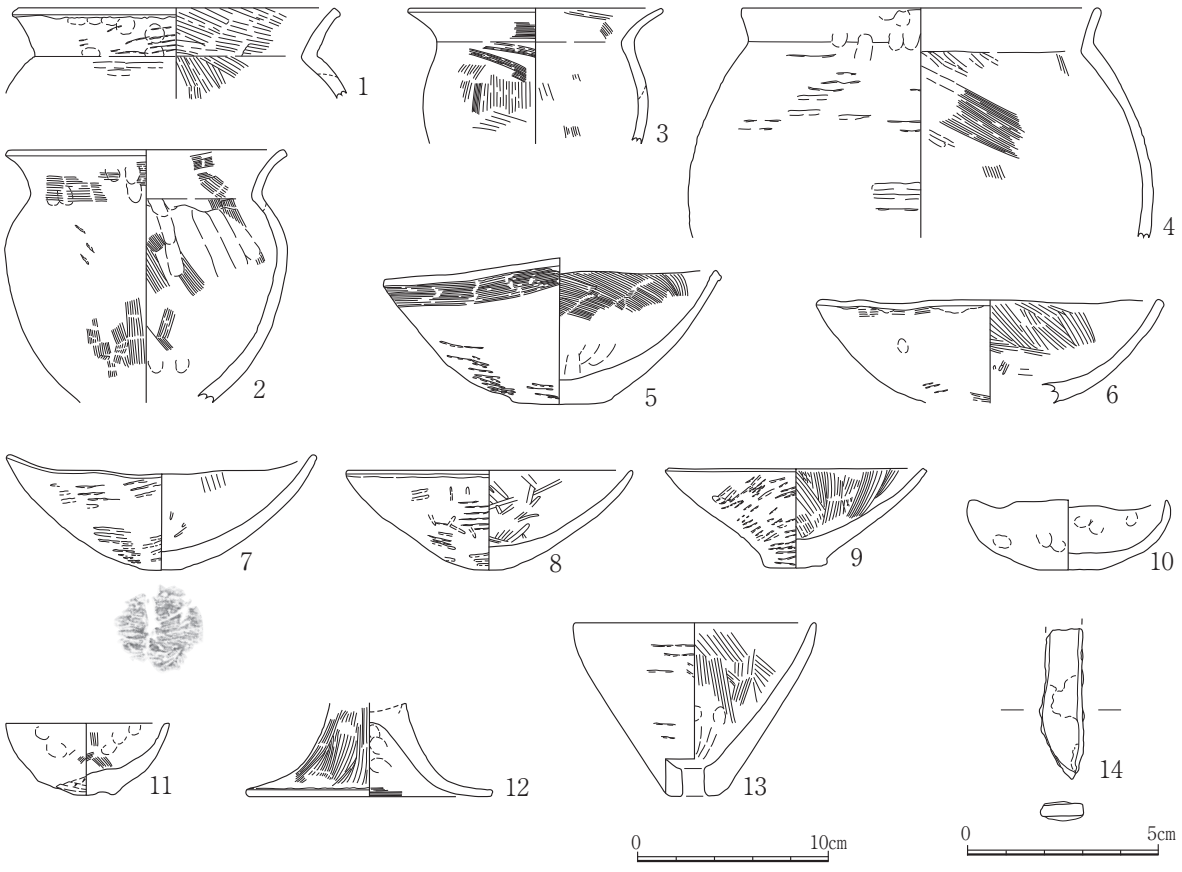


図 2-99　ST45 出土遺物実測図

ST46(図 2-100 ～ 102)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-10 他　**切り合い関係**；ST47、SX37、SD91・97・98 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-33° -W

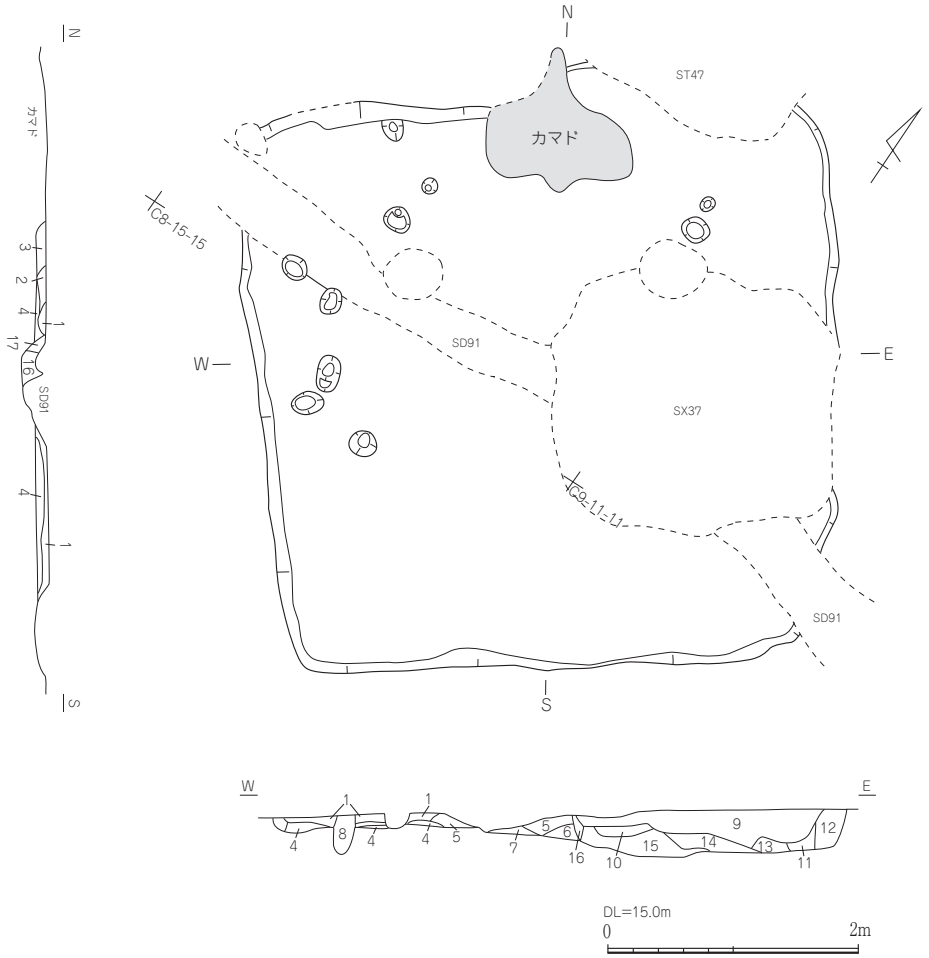
規模；4.7 × 4.4m ×深さ 0.11m

覆土；暗褐色粘質土主体　**柱穴**；－

竈；位置・北　竈壁位置・中央　構築材範囲長さ 70 ×幅 116cm　焼成部掘り方長さ 80 ×幅 44cm×深さ 3cm　覆土・黄褐色粘質土、焼土　煙道長さ 34 ×幅 30cm　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・土器

その他付帯施設；－

出土遺物；土師器甕、叩石



土層説明

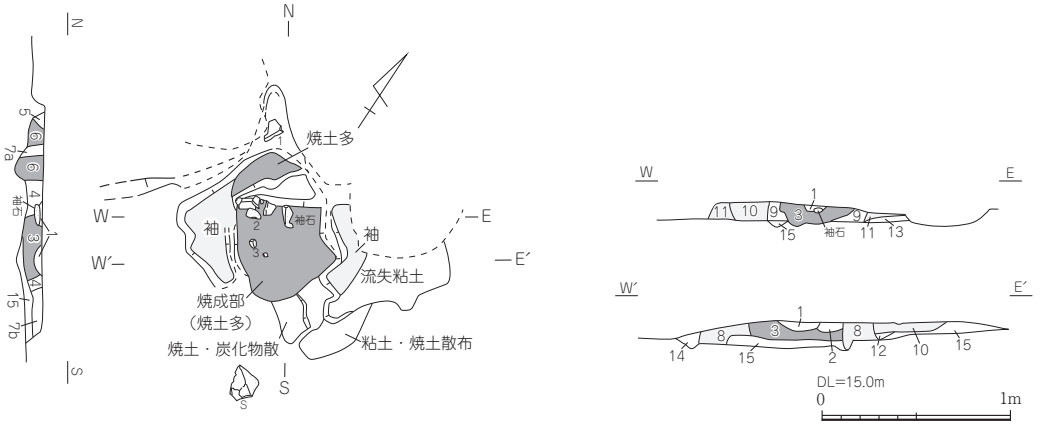
1　暗褐色粘質土
2　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
3　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色土混入
4　褐色粘質土　暗褐色土混入
5　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
6　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
7　暗褐色粘質土
8　暗褐色粘質土　黄褐色中ブロック含む
9　暗褐色粘質土
10　暗褐色粘質土　黄褐色土混入
11　黒褐色粘質土
12　黒褐色粘質土　暗褐色土混入
13　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
14　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック、焼土・炭化物含む
15　暗褐色粘質土　黄褐色・黒褐色ブロック含む
16　暗褐色粘質土
17　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む

図 2-100　ST46 遺構図

所見；Ⅷ AW 区に位置し、グリッドは C8-15-10、C8-15-15 他に跨がる。SX37 に東側部を大きく壊され、北東部の隅の一部をほぼ同時期の ST47 に切られる。SD91 他にも大きく切られている。また小柱穴も幾つか穿たれているものの本建物跡に伴うものではないと考えられる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は浅くⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は方形と考えられる。規模は南北軸が 4.4m、東西軸が 4.7m で深さは 11cmと極めて浅い。主軸方位は N-33° -W で西に振る。

覆土は薄く暗褐色粘質土が被覆し、床面は褐色粘質土である。

竈は北壁の中央部に構築されている。構築材粘土、焼土の範囲は長さ 0.7m、幅 1.16m と広範囲に亘っている。建物跡は浅いものの竈は比較的良い状態で遺存している。焼成部の掘り方は長さ 65cm、幅 44cmで比較的大きな掘り方を有する。深さは３cmで浅い。焼土が 10cm程の厚さで残っている。焼成部の奥の上部で礫が出土しているものの、用途は不明である。焼成部下層からは土器がやや纏まって出土している。袖は黄褐色粘質土で構築されており、右袖は部分的に壊されている。袖幅は 20cmから 25cm程度である。煙道は壁外に設けられており、壁際の幅が広く、幅に比較して



土層説明
1　暗褐色土　黄褐色土混入
2　にぶい黄褐色土　焼土（明赤褐色）・黄褐色土混入
3　明褐色土　焼土・炭化物混入
4　にぶい黄褐色土　粒状黄褐色土混入
5　暗褐色土
6　にぶい黄褐色土　焼土多量混入、炭化物少量
7 a 暗褐色土
7 b 暗褐色土
8　暗褐色土　小礫多量、黄褐色土・焼土混入、袖、炭化物少量
9　にぶい黄褐色土　焼土・黄褐色土混入
10　黄褐色土　暗褐色土混入、袖
11　黄褐色土　暗褐色土、袖、小礫多量混入
12　明褐色土　焼土・炭化物混入
13　暗褐色土
14　暗褐色土
15　にぶい黄褐色土　暗褐色土混入、貼床

図 2-101　ST46 竈図

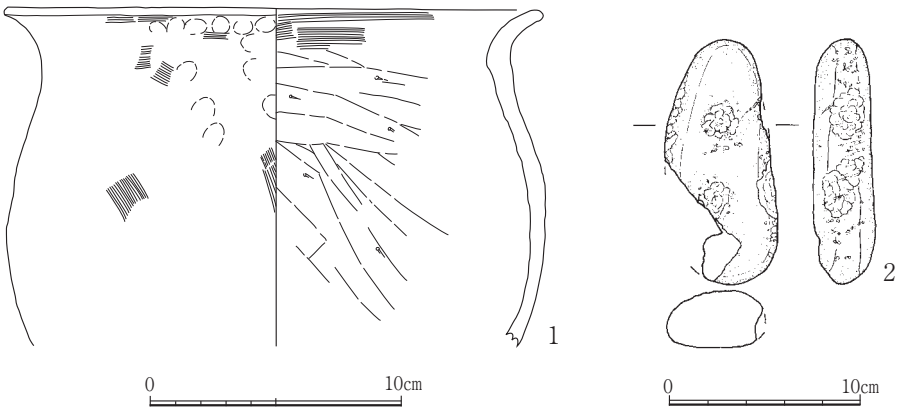


図 2-102　ST46 出土遺物実測図

長さは短い為に三角形状を呈する。長さは78cmで煙道部に焼土が認められ、先端部煙出部には蓋をするような形で礫が置かれている。天井石、支脚は出土していない。柱穴は幾つか検出しているものの、本建物跡に伴うものではないと考えられる。

遺物出土状況は竈内から出土した№1の土師器甕、2の叩石だけ実測図に取り上げた。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-102 №1、2)

№1は土師器甕、2は砂岩製の叩石である。

ST47(図 2-103 ～ 105)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-5 他　**切り合い関係**；ST46 を切る

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-3° -W

規模；3.6 × 3.3m ×深さ 0.08m

覆土；暗褐色粘質土主体、貼床　**柱穴**；－

竈；位置・北壁　竈壁位置・中央　構築材範囲長さ 160 ×幅 140cm　焼成部掘り方長さ 60 ×幅 65cm×深さ 7cm　覆土・褐色粘質土、焼土　煙道長さ 28 ×幅 18cm　袖補強材・袖石　支脚・無　天井石・無

その他付帯施設；中央部掘り込み

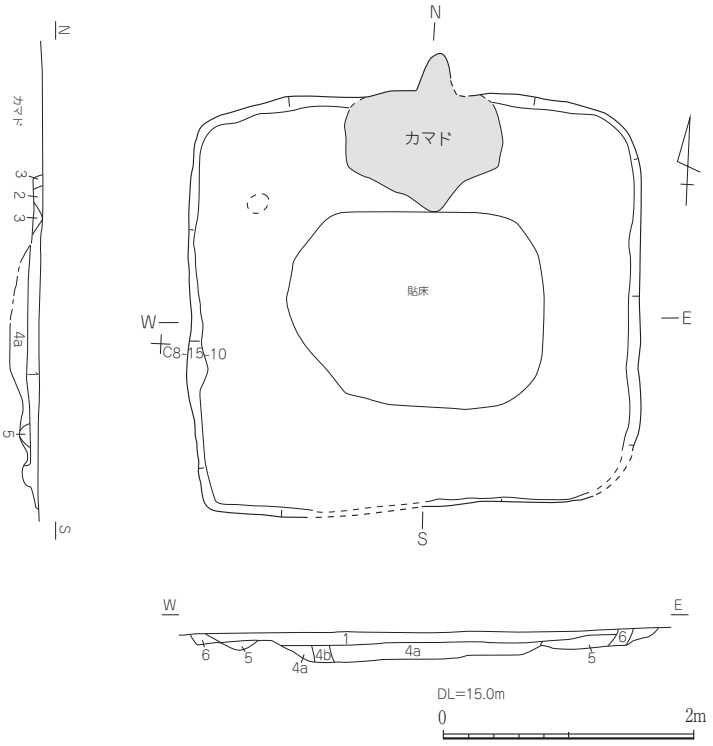
出土遺物;須恵器坏蓋、坏身、高坏、土師器甕、鉄鏃

所見；Ⅷ AW 区に位置し、グリッドは C8-15-5、C8-15-10 に跨がる。南側の ST46 と隣接し、ST46 の一部を壊す。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は浅くⅣ層上面に掘り込まれている。

平面形は方形である。規模は南北軸が 3.3m、東西軸が 3.6m で小型である。深さも 8cmと浅い。主軸方位は N-3° -W でほぼ真北を指す。

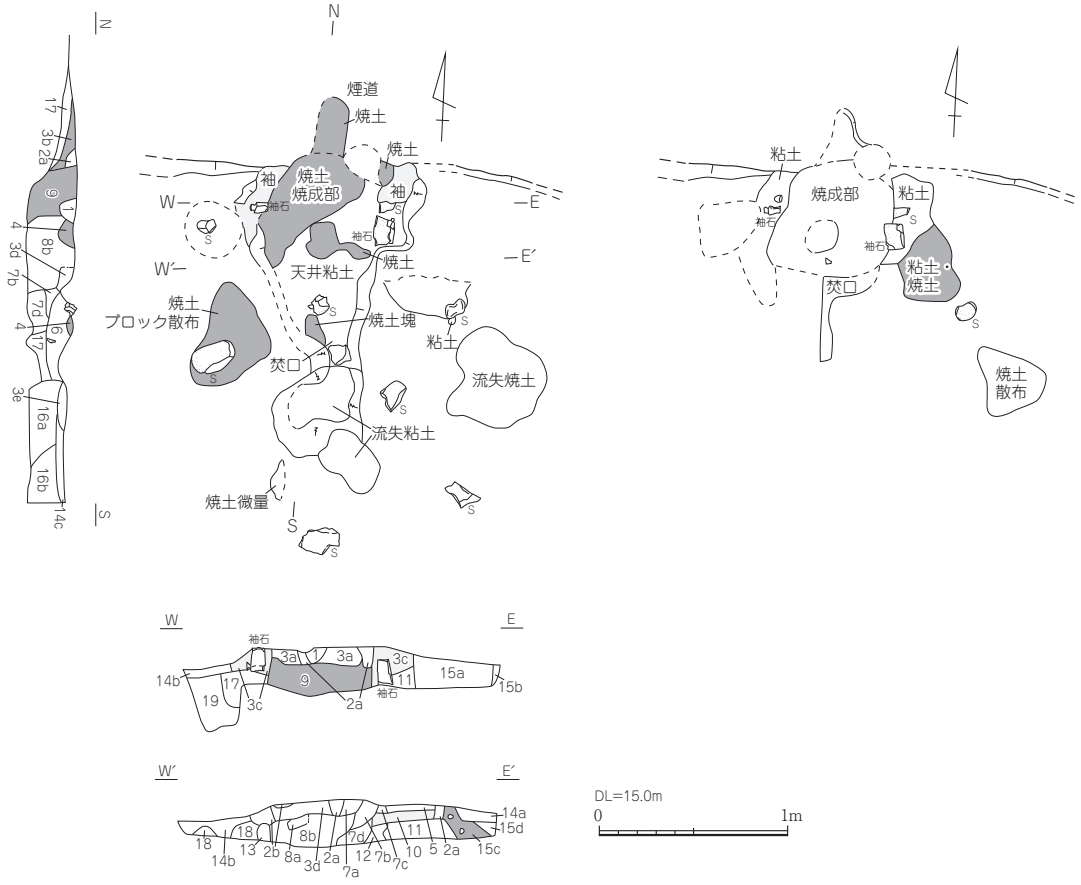
覆土は暗褐色粘質土が薄く被覆している。床面は貼床である。

竈は北壁の中央部に位置する。長さ 140cm、幅 160cmの範囲に構築材、焼土が広がる。焼成部は長さ 60cm、幅 65cm、深さ 7cmで多量の焼土が伴う。焼成部の上には天井部の土層も遺存していた。袖は褐色粘質土で幅 20cm強である。左右の袖には補強材



土層説明
1　暗褐色粘質土　粒状黄褐色・黄褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
2　暗褐色粘質土　焼土（赤褐色）混入
3　暗褐色粘質土　小礫含む
4 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色・黄褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
4 b 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、土器・炭化物含む
5　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
6　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む

図 2-103　ST47 遺構図



土層説明

1　明黄褐色土　粘土天井
2 a 黒褐色土
2 b 黒褐色土　暗褐色ブロック混入
3 a 褐色土　粒状明黄褐色ブロック・焼土（明赤褐色ブロック）混入、炭化物含む、天井粘土
3 b 褐色土　焼土・粘土混入、煙道部
3 c 褐色土　袖石含む、袖粘土
3 d 褐色土　天井粘土
3 e 褐色土　流失粘土
4　赤褐色土　焼土ブロック
5　暗褐色土　粒状褐色ブロック・黄褐色ブロック混入
6　黒褐色土　粒状褐色ブロック混入、炭化物含む
7 a 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む
7 b 暗褐色土　炭化物含む
7 c 暗褐色土
7 d 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入、炭化物含む
8 a 暗褐色土　明黄褐色ブロック混入
8 b 暗褐色土　焼成部
9　暗褐色土　焼土多量混入、炭化物含む、焼成部
10　暗褐色土　明黄褐色ブロック、焼土多量混入、炭化物含む、袖
11　暗褐色土　褐色ブロック混入、炭化物含む
12　褐色土
13　暗褐色土
14 a 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入、炭化物含む
14 b 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
14 c 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
15 a 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入、炭化物含む、住居覆土
15 b 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
15 c 暗褐色土　焼土・3㎝位礫含む
15 d 暗褐色土　焼土・炭化物含む
16 a 暗褐色土　褐色ブロック混入、住居中央部落ち込み
16 b 暗褐色土　褐色ブロック混入、住居中央部落ち込み
17　暗褐色土　褐色ブロック混入、炭化物含む
18　褐色土
19　黄褐色土

図 2-104　ST47 竈図

の袖石が伴う。煙道は壁外に設けられ長さ 28㎝、幅 18㎝で焼土が出土している。

中央部床面下ではやや乱れた楕円形の中央部掘り込みを検出した。長軸 2m、短軸 1.4m、深さ 9㎝である。床面は掘り込みを被覆して貼床となっている。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-105 №.1 ～ 6)

№.1 は須恵器坏蓋、2、3 は坏身、4 は高坏、5 は土師器甕、6 は鉄鏃の茎と考えられる。

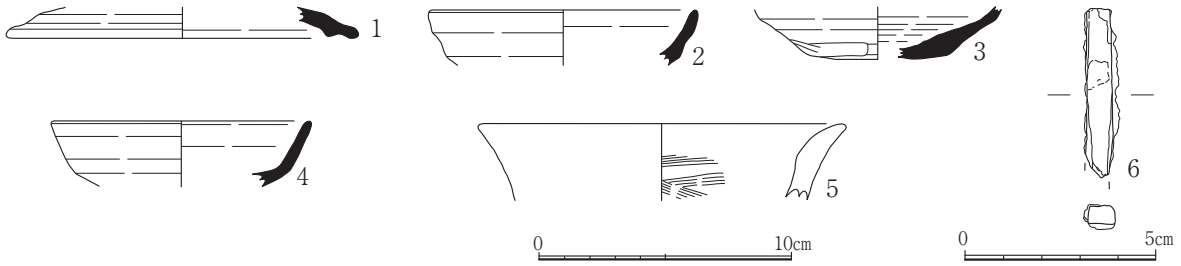


図 2-105　ST47 出土遺物実測図

ST48(図 2-106 ～ 108)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-25 他　**切り合い関係**；SD82・96・99 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；方形　**主軸方向**；N-0°

規模；4.6 × 4.7m ×深さ 0.15m

覆土；暗褐色粘質土主体　**柱穴**；－

竈；位置・北壁　竈壁位置・中央　構築材範囲長さ 75 ×幅 140cm　焼成部掘り方長さ 66 ×幅 68cm ×深さ 7cm　覆土･暗褐色粘質土、焼土　煙道長さ 60 ×幅 27cm　袖補強材･無　支脚･無　天井石･有？　竈内遺物・須恵器坏蓋

その他付帯施設；中央部掘り込み

出土遺物；須恵器坏蓋、坏身、土師器甕、高坏

所見；Ⅷ AW 区に位置し、グリッドは C8-10-25、C8-15-5 他に跨がる。南側にはほぼ同時期の ST47、東側には ST34 が隣接している。SD99 に北西隅を壊されている。また柱穴が幾つか検出しているが本竪穴建物跡に伴うものではない。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は浅くⅣ層上面に掘り込まれている。平面形は方形である。規模は南北軸が 4.6m、東西軸が 4.7m のやや小型で深さは 15cmと浅い。主軸方位は N-0° で真北を指す。

覆土は暗褐色粘質土が薄く被覆している。

竈は北壁中央部に構築されている。構築粘土、焼土の範囲は長さ 75cm、幅 140cmで遺存状態はやや悪い。焼成部は長さ 66cm、幅 68cm、深さは浅く 7 cmである。焼土が厚く堆積しており、天井部も残存しており、更に天井石の可能性のある扁平な礫が焚き口部上部で出土している。袖部は両袖とも幅 25cm程度である。袖石等の補強材は検出していない。煙道部は壁外に設けられ長さ 60cm、幅 27cmで焼土が若干出土している。竈袖からは№ 1 の須恵器坏蓋が出土している。

中央部床面下では楕円形の中央部掘り込みを検出した。長軸 2m、短軸 1.5m、深さ 20cmである。床面は掘り込みを被覆して貼床となっている。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

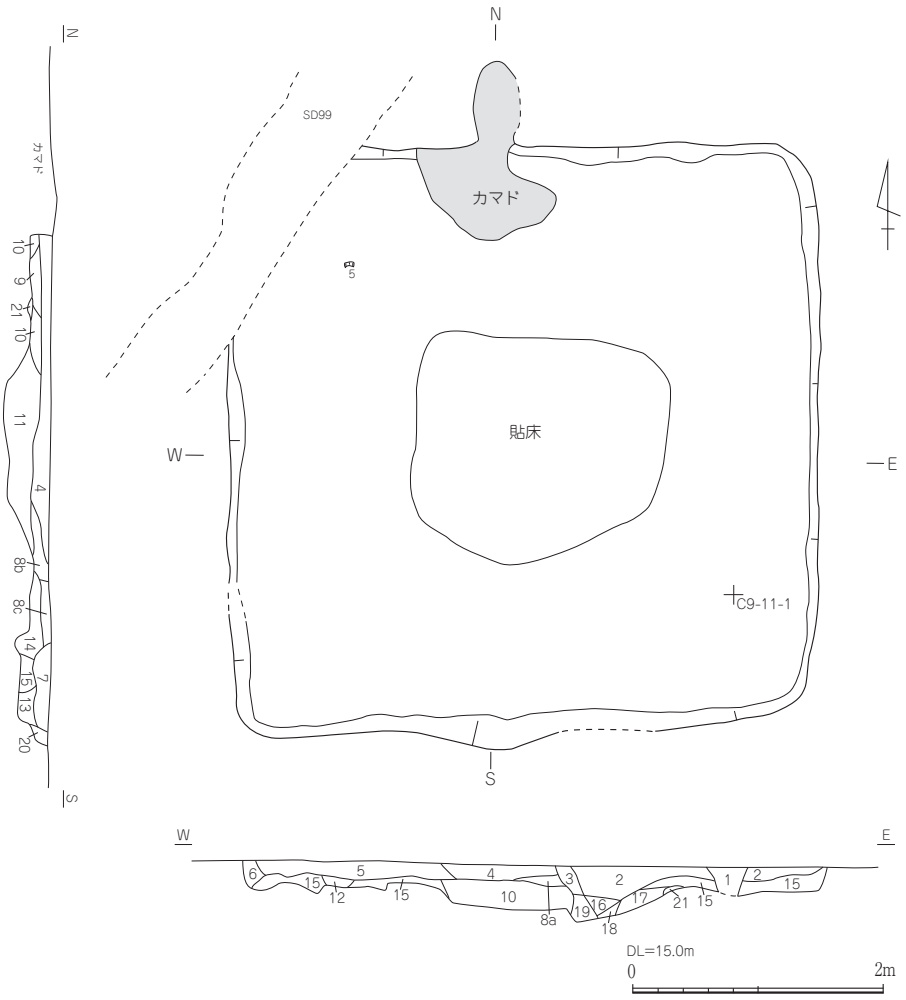
出土遺物 (図 2-108 № 1 ～ 7)

№ 1 から 5 は須恵器坏で 1 は蓋、2 、3 は坏身、4 、5 は坏身底部、6 は土師器甕、7 は高坏である。

ST49(図 2-109 ～ 112)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-20 他　**切り合い関係**；SX36 を切る、SK77・98、SD94・99 に切られる

時期；弥生末～古墳初　**形状**；方形　**主軸方向**；N-5° -W

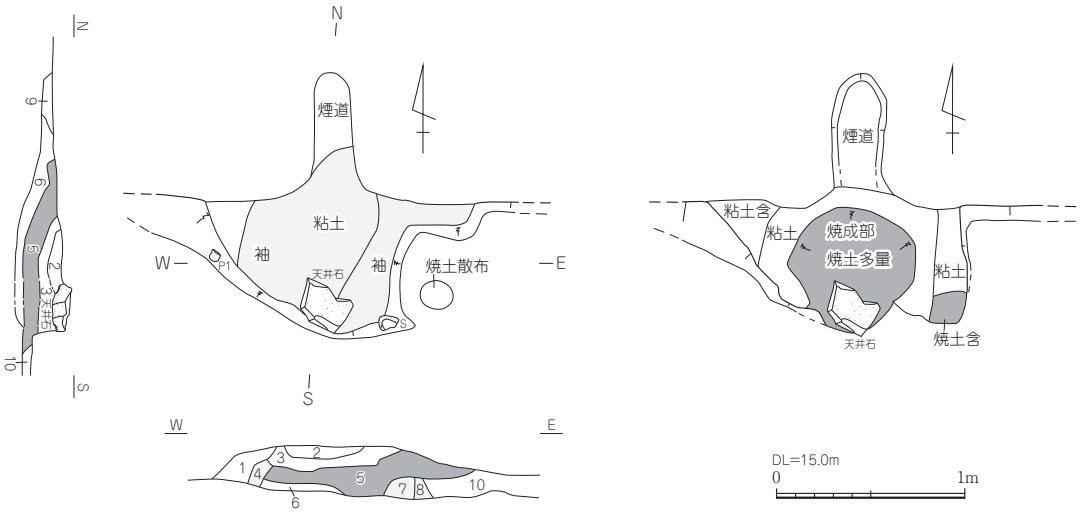


土層説明

1　暗褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
4　暗褐色粘質土　黄褐色・黒褐色ブロック含む
5　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
6　暗褐色粘質土　黄褐色・褐色ブロック多量混入
7　暗褐色粘質土
8 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
8 b 暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
8 c 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
9　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
10　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
11　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
12　暗褐色粘質土　黄褐色土混入
13　暗褐色粘質土　黄褐色・褐色ブロック多量混入
14　褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
15　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
16　暗褐色粘質土
17　暗褐色粘質土
18　暗褐色粘質土
19　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
20　にぶい黄褐色粘質土
21　黄褐色粘質土　暗褐色土混入

図 2-106　ST48 遺構図

規模；4.0 × 3.9m ×深さ 0.45m　**覆土**；黒褐色土、暗褐色土　**柱穴**；主柱穴 P1 ～ 4
炉跡；地床炉　焼土範囲 74 × 46cm
ベッド；北壁際のみ　**周溝**；1 条　幅 15 ～ 20cm×深さ 5cm
出土遺物；弥生土器壺、甕、甑、鉢、支脚、叩石
所見；Ⅷ AW 区の北端に位置し、グリッドは C8-10-20、C9-6-16 に跨がる。弥生時代後期後半の SX36 を切る以外は他の SD94、SD99、SK77、SK98 に切られる。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は深く、Ⅳ層下面からⅤ層上面の礫層にまで掘り込まれている。平面形は方形である。規模は南北軸が 4.0m、東西軸が 3.9m でやや小型である。深さは 45cmと深く、壁は直立気味に立ち上がる。主軸方位は N-5° -W でほぼ真北を指す。



土層説明
1　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック混入
2　暗褐色土　礫含む、天井粘土
3　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物多量、礫含む、天井粘土
4　にぶい褐色土　焼土（赤褐色）混入、袖
5　暗褐色土　焼土多量、黄褐色ブロック混入、礫・炭化物含む、焼成部
6　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、焼土混入
7　黄褐色土　礫・炭化物含む、袖
8　黄褐色土　袖
9　暗褐色土　煙道部
10　暗褐色土　住居貼床

図 2-107　ST48 竈図

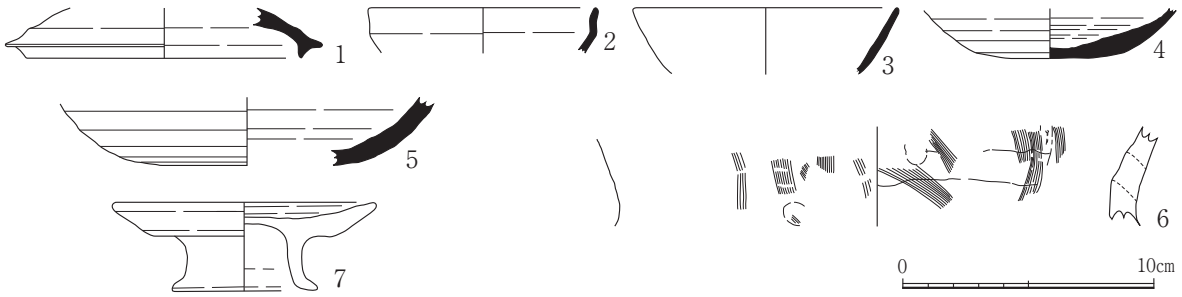


図 2-108　ST48 出土遺物実測図

覆土はレンズ状堆積をしており、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土が交互に堆積し、下層になると黄褐色粘質土塊が混じり、焼土も混じる。中層では床面から少し浮いた状態で遺物が多量に出土している。

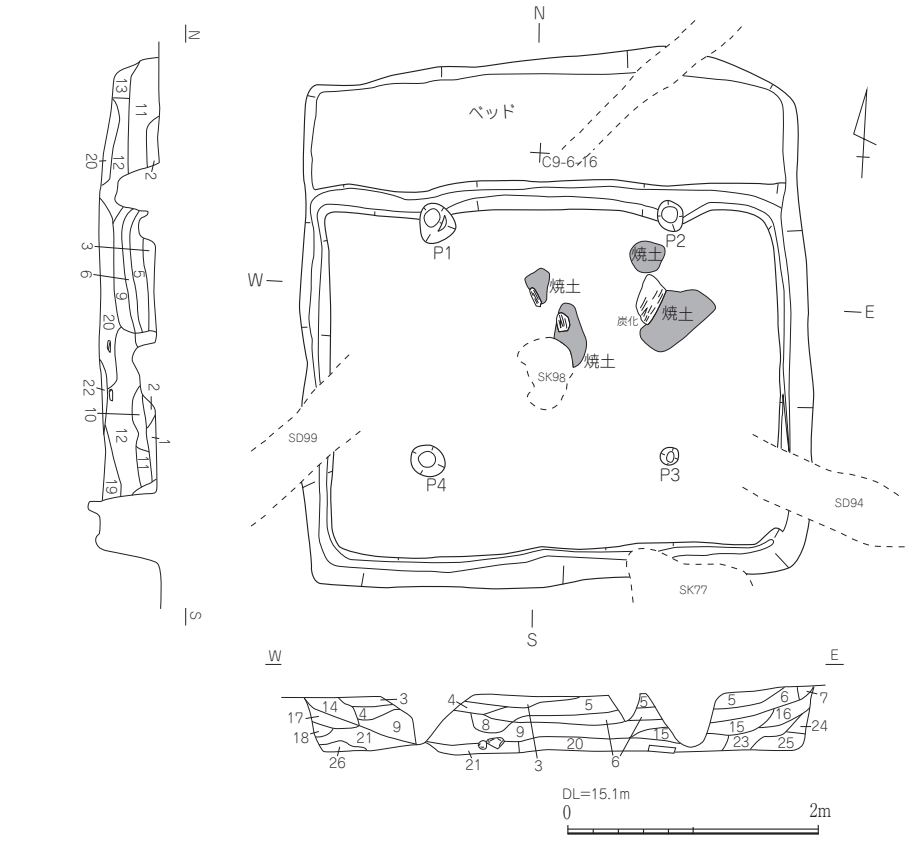
炉跡は掘り込みが判然とせず、炭化物と焼土を長軸 74cm、短軸 46cmの範囲で確認した。主柱穴は 4 本確認している。径 14cmから 26cm、深さ 24cmから 29cmである。径は小さいものの掘り方はしっかりしている。ベッドは北壁のみで検出した。幅約 80cm、高さは床面から約 15cmである。造り付けベッドである。周溝は北側ではベッド際を巡り、他は壁際に沿っている。

遺物出土状況は南側部で土器が多量に出土し、礫も伴う。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-111、112 №.1 ～ 26)

№.1 から 8 は弥生土器壺である。9 から 14 は甕、15 は甑、16 から 23 は鉢である。24、25 は支脚、26 は砂岩製の叩石である。



土層説明

1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土 粒状黄褐色土含む
4 暗褐色土 遺物含む
5 暗褐色土 黄褐色土混入
6 黒褐色土 粒状黄褐色土、遺物含む
7 黒褐色土
8 暗褐色土 粒状黄褐色土混入
9 暗褐色土 黄褐色土含む
10 黒褐色土 黄褐色土含む
11 暗褐色土 褐色土含む
12 暗褐色土 黄褐色土混入、遺物多量含む
13 暗褐色土 粒状黄褐色土含む
14 暗褐色土 黄褐色土混入
15 黒褐色土 遺物含む
16 暗褐色土 褐色土含む
17 黒褐色土
18 暗褐色土 黄褐色土含む
19 黒褐色土 粒状黄褐色土、炭化物含む
20 暗褐色土 粒状黄褐色土、遺物含む
21 暗褐色土
22 黒色土
23 暗褐色土 粒状黄褐色土含む
24 黒褐色土
25 暗褐色土 粒状黄褐色土含む
26 暗褐色土 黄褐色土含む

図 2-109　ST49 遺構図

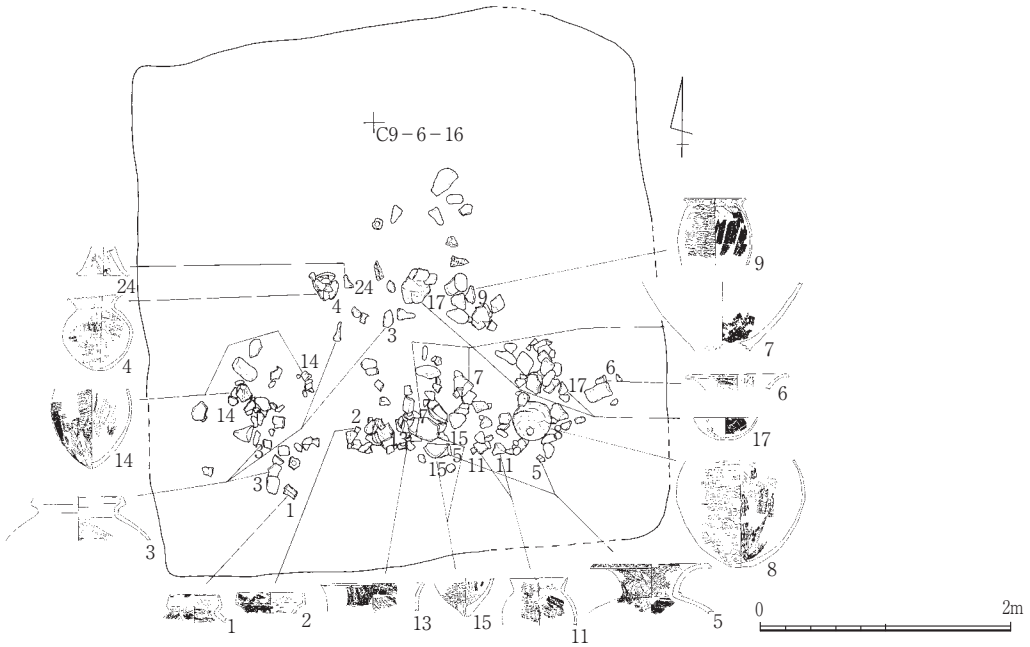


図 2-110　ST49 遺物出土状況図

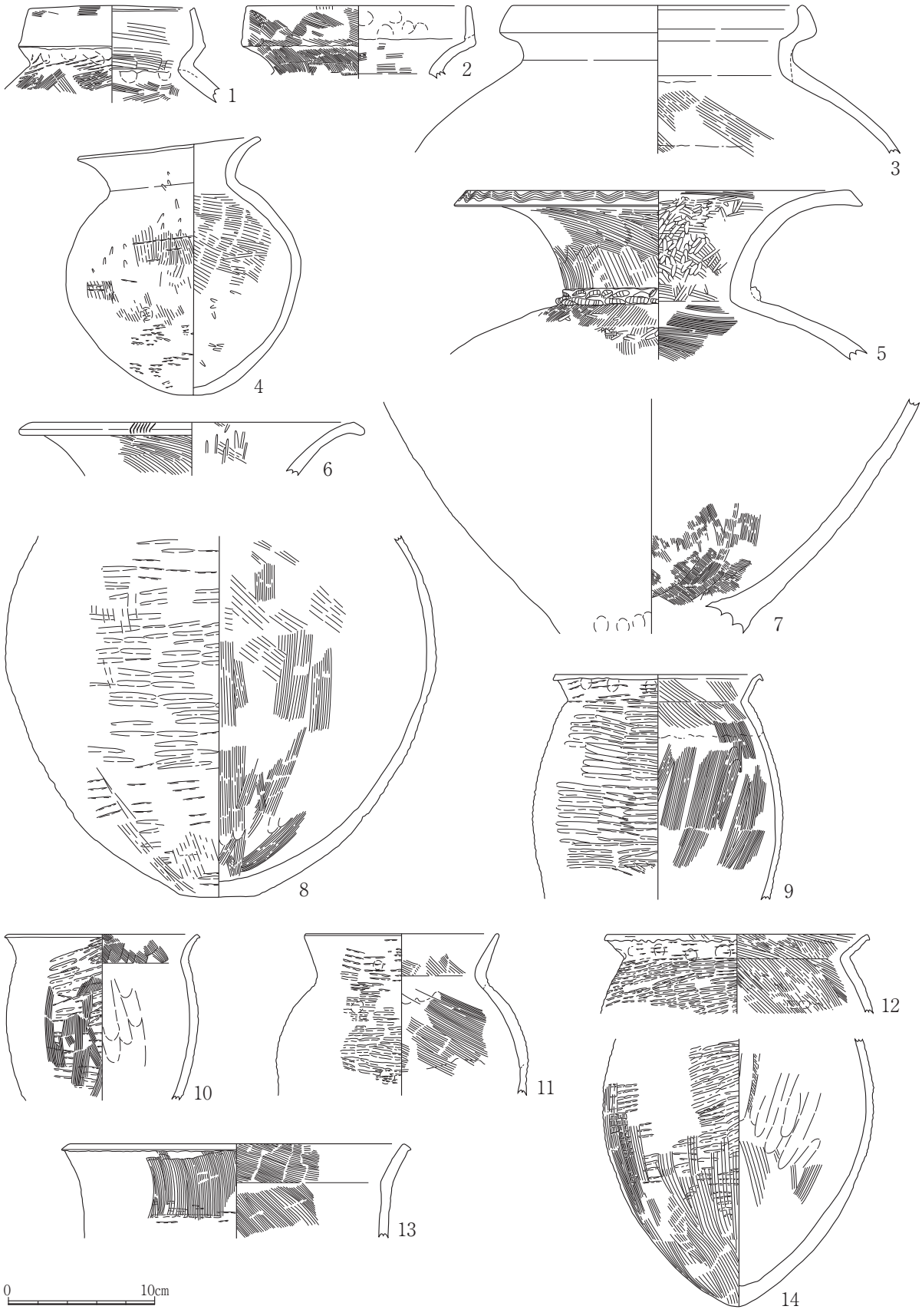


図 2-111　ST49 出土遺物実測図 (1)

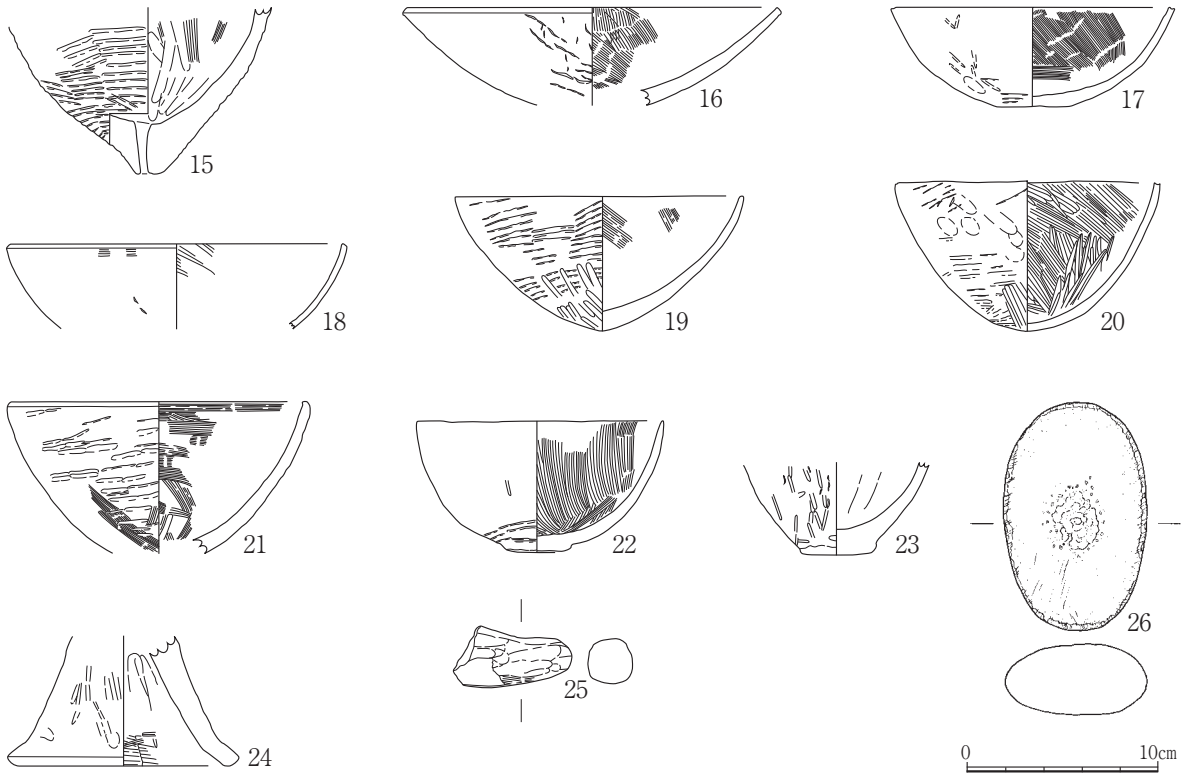


図 2-112　ST49 出土遺物実測図 (2)

ST50(図 2-113、114)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-8 他　**切り合い関係**；SX1・40 に切られる

時期；弥生末～古墳初　**形状**；方形　**主軸方向**；N-22° -W　**規模**；(4.63) × 4.7m ×深さ 0.52m

覆土；暗褐色土　**柱穴**；主柱穴 P1、2　**炉跡**；－　**ベッド**；造り出し　幅 90cm×高さ 18cm

周溝；1 条　幅 14cm×深さ 9cm　**その他付帯施設**；建物内土坑

出土遺物；弥生土器甕、鉢、高坏

所見；Ⅷ BE 区の東端に位置し、グリッドは C10-6-8、C10-6-9 他に跨がる。建物跡の中心部は近世の SX1 に壊され、北壁も古代の SX40 に壊されている。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は深くⅣ層下面に掘り込まれている。規模は東西軸が 4.6m 南北軸が北壁を壊されており 4.7m 以上となるものの、平面形は方形と考えられる、深さは 52cmと深い。主軸方位は N-22° -W と西に振る。

覆土は上層には黒褐色粘質土、下層には暗褐色粘質土が厚く堆積していた。

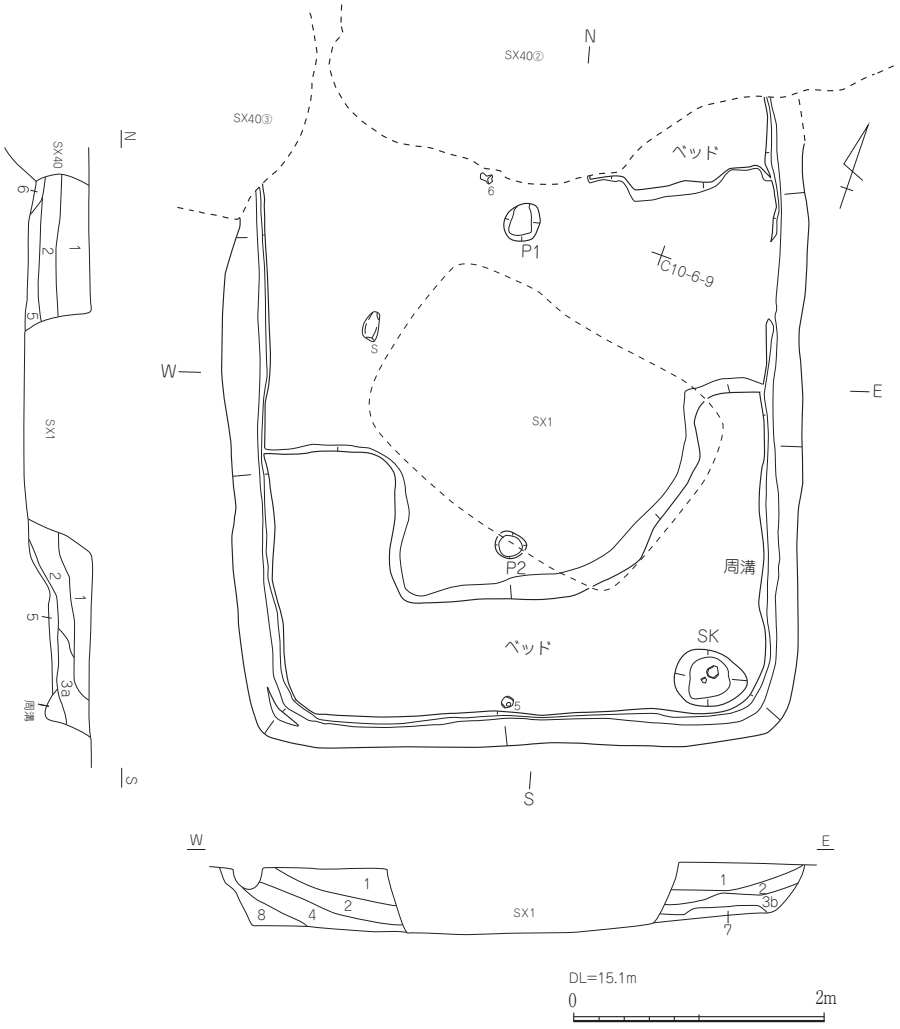
炉跡は近世の SX1 に壊されているものと考えられ検出できていない。主柱穴は２本である。中央ラインに２本が北南に配置している。径約 25cm、深さ 40cmでほぼ同規模で掘り方はしっかりしている。ベッドは南側で検出している。幅 90cm、高さ 15cmである。北側は SX40 に壊されており、判然としないが部分的にベッドらしきものを検出している。周溝は壁際を巡る。

南東隅のベッド上で土坑を検出している。径約 60cm、深さ 19cmで土器が出土している。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる。

出土遺物 (図 2-114 №１～ 6)

№１から３は弥生土器甕、４、５は鉢、６は高坏である。



土層説明

1　黒褐色土　遺物含む
2　暗灰褐色土
3 a 暗褐色土
3 b 暗褐色土
4　暗褐色土
5　暗褐色土　黄褐色土混入
6　暗褐色土　ベッド
7　暗褐色土　粒状黄褐色・にぶい黄褐色土含む、ベッド
8　黒褐色土

図 2-113　ST50 遺構図

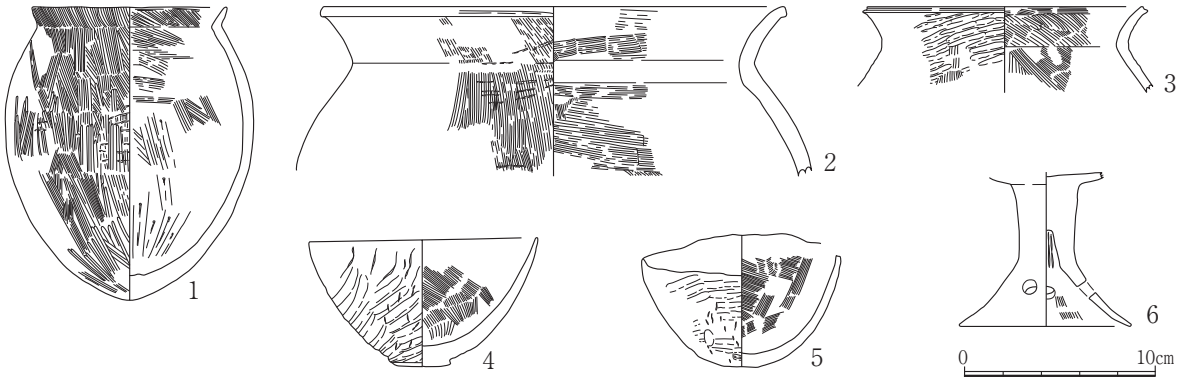


図 2-114　ST50 出土遺物実測図

ST51(図 2-115 ～ 117)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-21 他　**切り合い関係**；SB7、SD15 に切られる
時期；弥生後期後半　**形状**；多角形　**主軸方向**；N-7° -W
規模；径 8.2m ×深さ 0.53m
覆土；暗褐色粘質土主体
柱穴；主柱穴 P1 ～ 6
炉跡；形状長方形　規模 160 × 60cm×深さ 12cm　覆土暗褐色粘質土、炭化物
ベッド；削り出し＋造り付け　全周、幅 1.3m ×高さ 0.24m
周溝；2 条　周溝 1 幅 16cm×深さ 7cm　周溝 2 幅 12cm×深さ 13cm
その他付帯施設；－
出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、高坏、線刻土器、鉄鏃？
所見；Ⅷ BE 区の西寄りに位置し、グリッドは C9-5-21、C9-10-1 他に跨がり、4 m 程西には同時期、同規模の ST11 が位置している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は深く、Ⅳ層下面にまで掘り込まれて遺存状態は良い。平面形はベッドの内区では六角形となるるものの、外壁では明確な六角形とはならず不明瞭な丸味を持った多角形である。規模は径 8.2m、深さ 0.53m で ST13 の 10.5m に次ぐ大きさである。主軸方位は炉跡を軸線に採ると N-7° -W である。

覆土は暗褐色粘質土を主体として、下層になるにつれて、黄褐色粘質土塊が増え、床面近くでは焼土が認められた。

炉跡は中心よりやや南寄りに位置し、長方形を呈する。規模は大きく長軸 1.6m、短軸 0.6m、深さ 12cmで炭化物が多量に入っていた。この時期のものには小振りの地床炉が伴うのが一般的であるが検出できていない。

主柱穴は 6 基検出している。ベッド端の角に穿たれている。等間隔で配置しており、中心部より 60° の角度で 2.8m から 3 m の距離間隔で正六角形の規格性を持っている。ST11 も同一規格を有する。柱穴の大きさは径 30cmから 36cm、深さ 56cmから 71cmで極めてしっかりした掘り方を持つ。

ベッドの内区は正六角形で幅 1.3m、高さは床面より 24cmである。建物跡の掘り方の際にベッドは中心床面より 15cm程高く削り出し、更に 10cm程かさ上げを行っている。周溝はベッド際と壁際に設けられている。

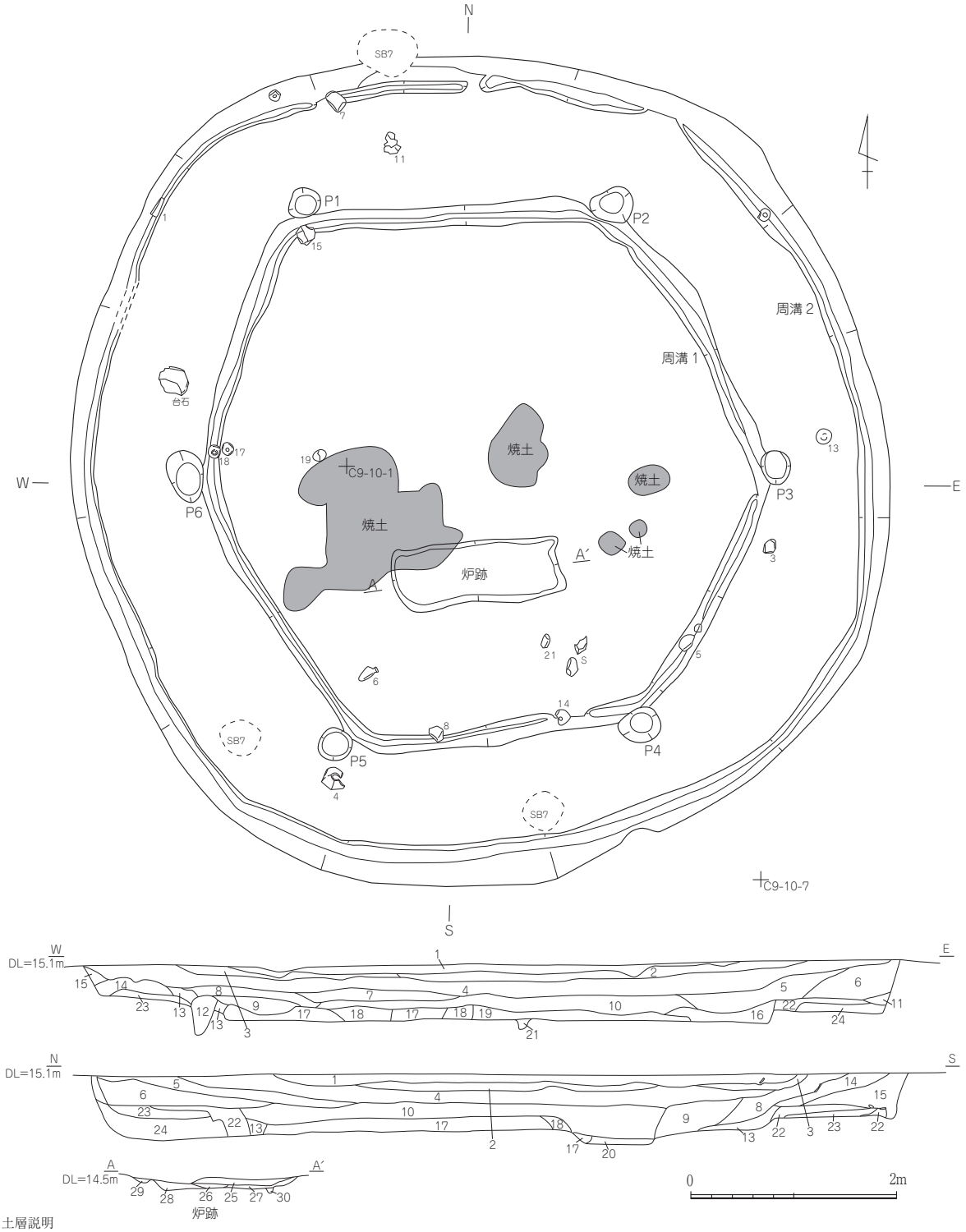
本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物､及び建物跡の形態からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 2-116、117 №1 ～ 25)

№1 から 3 は弥生土器壺、4 から 7 は甕、8 から 22 は鉢、23 は高坏、24 は線刻土器、25 は鉄鏃の茎か。

ST52(図 2-118 ～ 120)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-4-18 他　**切り合い関係**；ST53、SB19 に切られる
時期；古墳後期　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-68° -E
規模；3.5 × (3.2)m ×深さ 0.06m　**覆土**；黒褐色粘質土
竈；位置・東壁　竈壁位置・南寄り　構築材範囲長さ 114 ×幅 170cm　焼成部掘り方長さ (74) ×幅 44cm×深さ 10cm　覆土・赤褐色粘質土、焼土　煙道－　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無



土層説明

1　黒褐色土
2　黒褐色土　暗褐色土含む
3　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
4　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
5　暗褐色土　粒状黄褐色・黒色土混入
6　暗褐色土　粒状黄褐色土混入
7　暗褐色土　黒褐色土、粒状黄褐色・黒色土混入
8　暗褐色土　粒状黄褐色・黒色土混入
9　暗褐色土　粒状黄褐色土含む、黒褐色土混入
10　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
11　暗褐色土　黒褐色土混入
12　黒褐色土　粒状黄褐色土含む
13　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
14　暗褐色土　粒状黄褐色・黒色土含む
15　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
16　暗褐色土　粒状黄褐色土含む、黒褐色土混入
17　暗褐色土　粒状黄褐色・焼土含む
18　焼土塊
19　暗褐色土　粒状黄褐色土・焼土塊含む
20　黒褐色土　粒状黄褐色土含む
21　灰褐色土　遺物含む
22　黄褐色土　暗褐色土混入、炭化物含む
23　暗褐色土　黄褐色土含む
24　黄褐色土　地山
25　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
26　暗褐色土　粒状黄褐色土、炭化物含む
27　暗褐色土　粒状黄褐色土多量、黄褐色ブロック、炭化物含む
28　暗褐色土　粒状黄褐色土多量、黄褐色ブロック含む
29　黄褐色土
30　黄褐色土

図 2-115　ST51 遺構図

図 2-116　ST51 出土遺物実測図 (1)

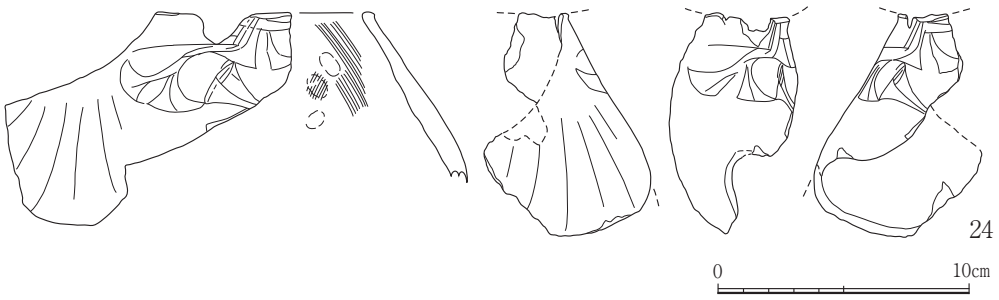


図 2-117　ST51 出土遺物実測図 (2)

竈内遺物・無

出土遺物；土師器甕

所見；Ⅷ BW 区の東北端に位置し、グリッドは C9-4-18、C9-4-19 他に跨がる。北壁は調査区外へと広がる為に不明である。南壁はほぼ同時期の ST53 に壊されているものの、南東隅部分をかろうじて検出している。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面も同じく深くⅢ層下面で極めて浅い。規模は南北軸が残存長さ 3.2m、東西軸は 3.5m の小型で、深さは極めて浅く 6 ㎝である。平面形は長方形の可能性が強い。主軸方位は竈を軸線に採ると N-68° -E である。

覆土は黒褐色粘質土のほぼ単一層である。

竈は東壁で南側に片寄る。構築材範囲は長さ 114㎝、幅 170㎝でほとんどが焼土である。中央部近くを径 70㎝の柱穴が壊している。また上面は削平を受けていると考えられる。焼成部の掘り方は径約 44㎝で深さ 10㎝程度である。袖は 40㎝前後の幅を有する。煙道は壁外に極僅かに焼土を検出したものの、明確な掘り方を検出するに至らなかった。袖補強材、天井石、支脚等は検出していない。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 2-120 №1)

№1 は土師器の甕である。

ST53(図 2-121 ～ 123)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-4-18 他　**切り合い関係**；ST11・52 を切る、SB19、SD9 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-0°

規模；5.3 × 3.6m ×深さ 0.13m　**覆土**；黒褐色粘質土主体　**柱穴**；－

竈；位置・北壁　竈壁位置・やや東寄り　構築材範囲長さ 52 ×幅 56㎝　焼成部掘り方長さ 28 ×幅 18㎝×深さ 5㎝　覆土・明赤褐色粘質土　煙道長さ 18 ×幅 10㎝　袖補強材・無　支脚・無　天井石・無　竈内遺物・無

その他付帯施設；－

出土遺物；須恵器坏身、長頸壺、壺、瑯

所見；Ⅷ BW 区の北東部に位置し、グリッドは C9-4-18、C9-4-23 他に跨がる。ほぼ同時期の ST52 を壊し、また大型建物跡 ST11 の上に床面を構築している。東壁は SD9 に壊される。遺構検出面は基本土層Ⅲ層で床面は浅く、同じくⅢ層中である。

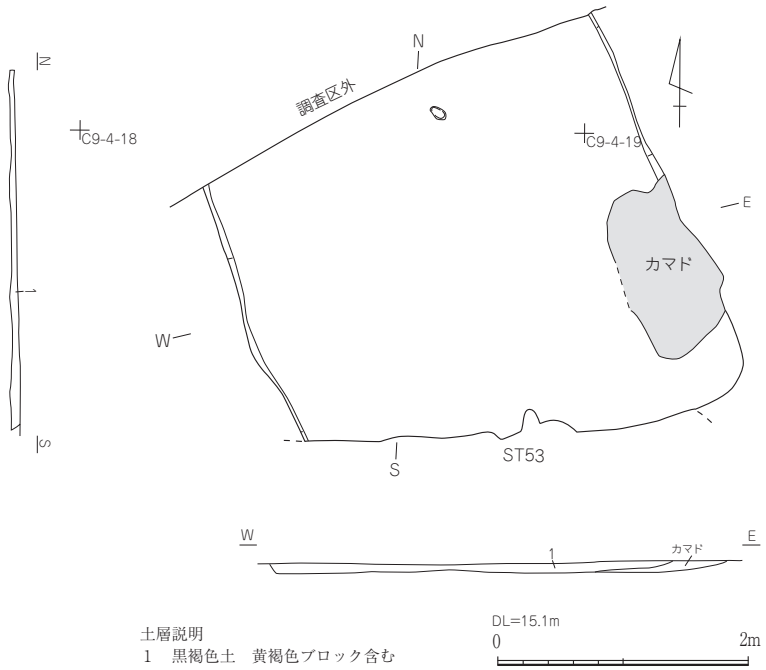


図 2-118　ST52 遺構図

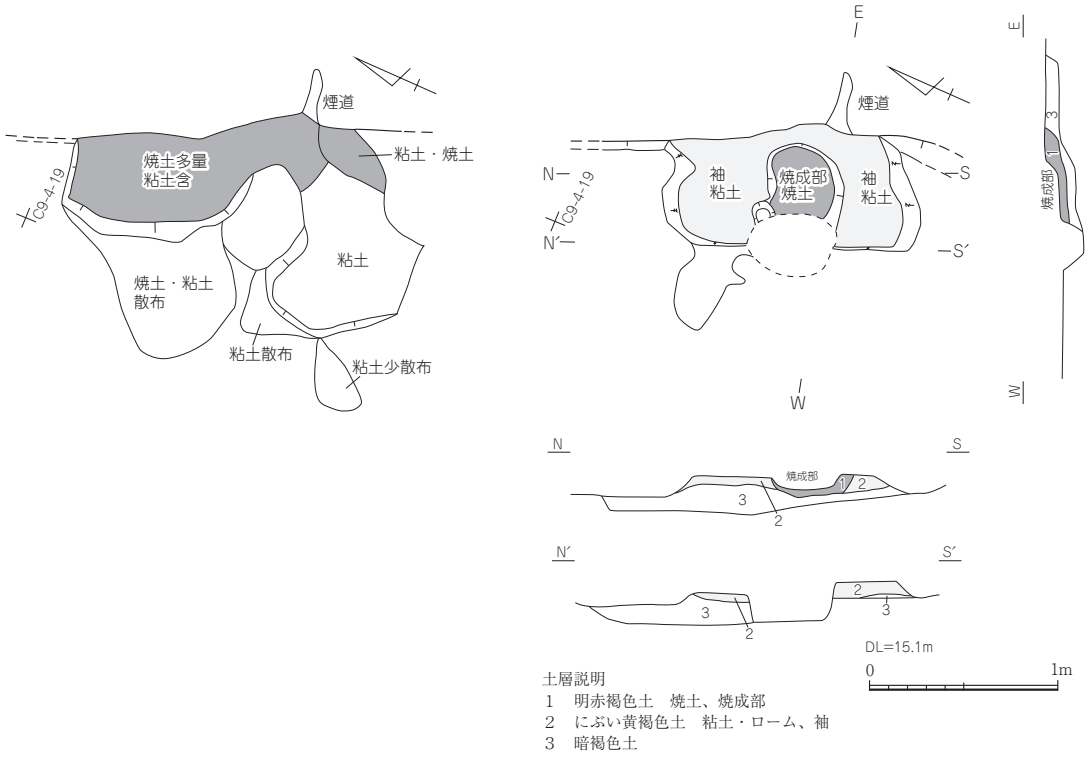


図 2-119　ST52 竈図

平面形は長方形で、規模は東西軸5.4m、南北軸3.6mで深さ13cmである。主軸方位は真北を指しN-0°である。

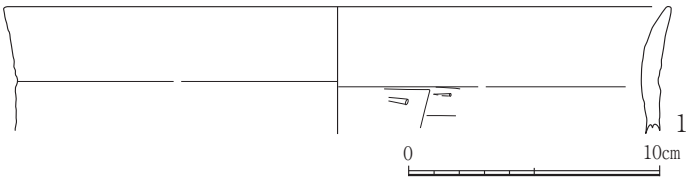


図2-120　ST52出土遺物実測図

覆土はST11の暗褐色粘質土の上に床面を構築して、黒褐色粘質土が被覆している。ST52も同様の黒褐色粘質土であるが、ST53の方が同じ黒褐色粘質土でも若干明るく、新旧関係が判別できた。

竈は北壁でやや東側に片寄る。煙道はST52にまで延びている。焼土、構築粘土は流出しており、広範囲に広がっている。しかしながら実際の規模は長さ52cm、幅56cmで、焼成部は長さ28cm、幅18cm、深さ5cmでやや小型のものである。焼成部からは焼土が多量に出土している。焼成部の焼土の上には褐色粘質土が覆っており、天井部と考えられる。袖は暗褐色粘質土で構築されており、幅約20cmである。袖部、天井部の補強材は検出していない。煙道部は壁外に延び長さ18cm、幅10cmで若干焼土が混じる程度で掘り方は検出できなかった。

本竪穴建物跡の所属時期は出土遺物、及び建物跡の形態からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物(図2-123№1～5)

№1、2は須恵器坏身、3は長頸壺か横瓶の口縁部、4は壺の肩部か。5は甕の口縁部と考えられる。

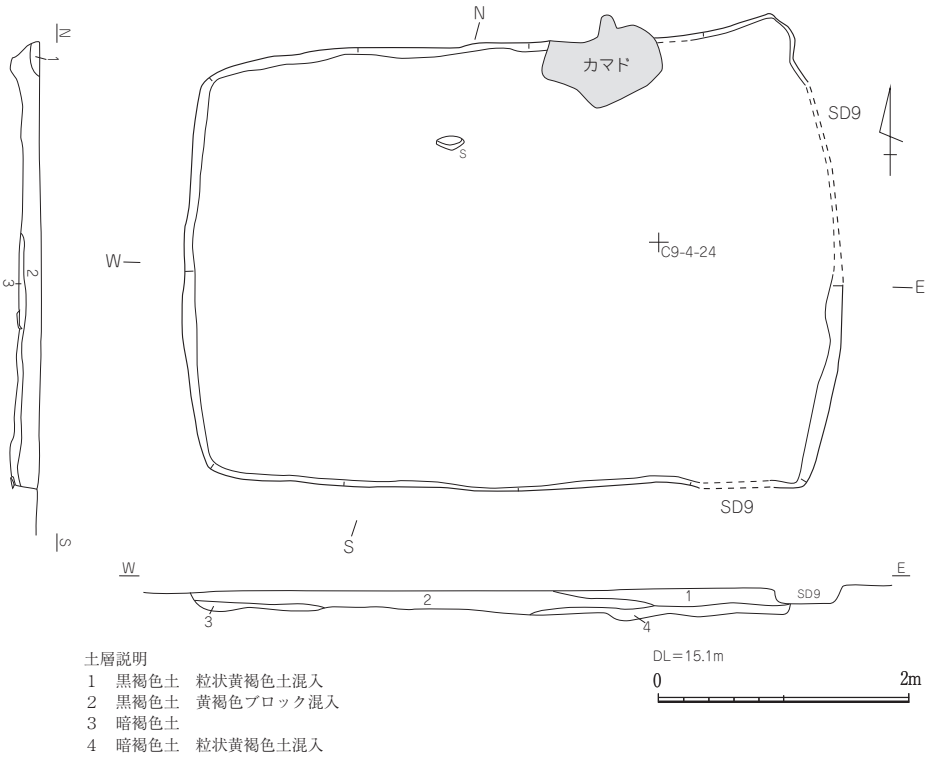


図2-121　ST53遺構図

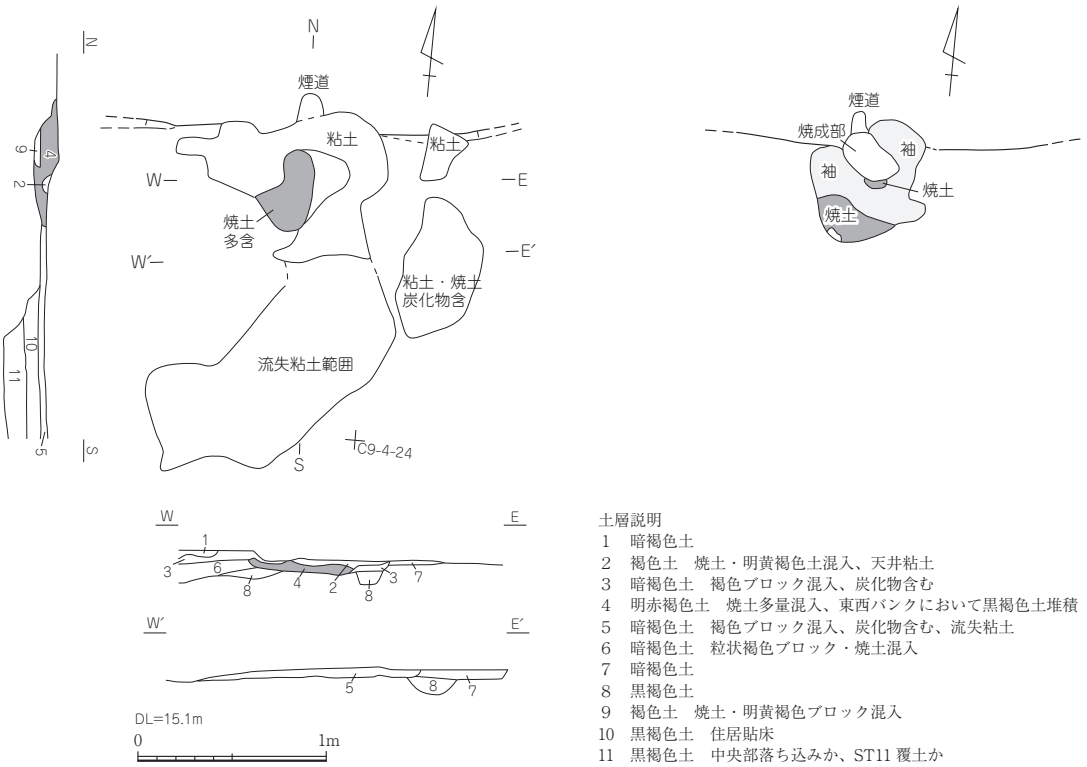


図 2-122　ST53 竈図

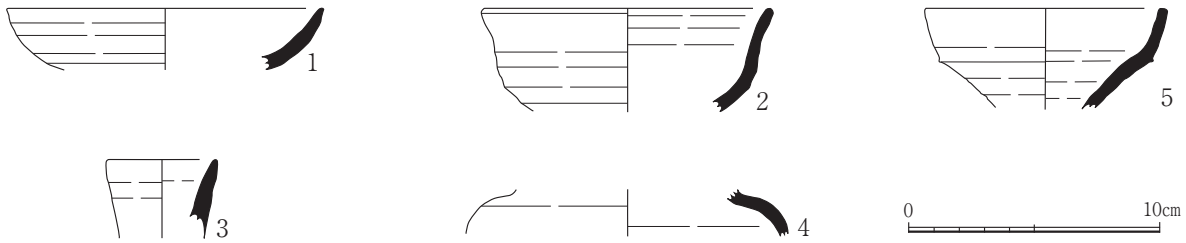


図 2-123　ST53 出土遺物実測図

表 2-2　竪穴建物跡出土遺物観察表 (※法量のカッコ内数値は復元、または残存値である。以下同)

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 2-4	ST1 －№ 1、2	1	弥生土器	壺	14.6			口縁やや内傾気味立ち上がる、肩部張る、胴部丸味、口縁、頸部ハケ、胴部タタキ、ハケ	小礫多量
図 2-4	ST1	2	弥生土器	壺	(31.2)			広口壺、口縁大きく開く、口縁端部やや拡張、内外面ナデ	白色鉱物粒、金雲母微量
図 2-4	ST1	3	弥生土器	甕	(13.8)	21.9	2.5	口縁は緩やかに外反、肩部なだらか、底部やや丸味のある小さな平底、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、器肉薄い、外面上半煤付着	小礫少量
図 2-4	ST1	4	弥生土器	甕	(17.6)			口縁外反、肩部なだらか、口縁内外ハケ、胴部タタキ、内面ハケ、ナデ、外面上半煤付着	小礫少量
図 2-4	ST1	5	弥生土器	甕	(12.4)			口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、口縁外面ナデ、胴部タタキ、内面ハケ	小礫少量
図 2-4	ST1	6	弥生土器	甕	(10.6)			口縁外傾、肩部張らず、外面ヘラミガキ、内面粗いハケ	小礫少量
図 2-4	ST1 －№ 3	7	弥生土器	鉢	(12.6)	6.5	2.0	丸底気味、体部緩やかに開く、外面タタキ、内面落剥、部分的にハケ	小礫少量
図 2-4	ST1	8	弥生土器	鉢	(9.5)	6.0	2.0	小さな平底、体部やや直立気味、外面上半部分的に指頭、ナデ、内外面ハケ	小礫少量
図 2-4	ST1 － SK2- №1	9	弥生土器	壺・底部			5.5	平底、体部大きく開く、胴部、底部タタキ、ハケ、内面指ナデ	小礫少量
図 2-4	ST1 －№ 1	10	弥生土器	鉢？・底部			3.5	体部開く、外面タタキ、内面ヘラケズリ	小礫少量
図 2-4	ST1	11	石器	叩石	長 8.4	厚 4.9	重 343	一端部敲打痕、表面擦痕	砂岩
図 2-7	ST2	1	弥生土器	壺	(12.8)			口縁短く直立、肩部張る、口縁外面タタキ、ナデ、内面ヨコハケ	小礫微量
図 2-7	ST2	2	弥生土器	壺	(16.0)			口縁外反して大きく開く、端部僅かに拡張、内外面ハケ	小礫微量
図 2-7	ST2	3	弥生土器	壺	(14.0)			口縁外反して大きく開く、内外面ハケ	小礫少量
図 2-7	ST2 －№ 1	4	弥生土器	甕	(14.1)	22.7	2.2	砲弾形、口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、胴部最大径中央部 16.6㎝、小さい平底、外面上半タタキ、下半タタキ、ナデ、底裏タタキ、内面ハケ、ヘラケズリ、ナデ、器肉薄い	小礫少量
図 2-7	ST2 －№ 6	5	弥生土器	甕	(12.7)	23.7	3.6	砲弾形、口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、胴部最大径中央部 16.6㎝、小さい平底、口縁内外面ハケ、胴部外面上半タタキ、下半タタキ、ハケ、内面上半ハケ、ナデ、下半ハケ	砂粒多量、小礫少量
図 2-7	ST2 －№ 13	6	弥生土器	甕	(13.8)			口縁短く緩やかに外反、肩部張らず、外面タタキ、内面ハケ、ナデ、器肉薄い	砂粒多量、小礫少量
図 2-7	ST2	7	弥生土器	甕	(16.6)			口縁強く外反、口唇僅かに肥厚、肩部張らず、口縁外面ナデ、胴部ハケ、内面ハケ	砂粒微量
図 2-7	ST2 －№ 6	8	弥生土器	鉢	18.5	8.6	4.5	大型、やや突出気味の小さな底部、体部僅かに丸味を持ち大きく開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 2-7	ST2 －№ 6	9	弥生土器	鉢	11.0	6.5	2.8	小型、碗状、やや突出気味の小さな底部、体部僅かに丸味を持ち立ち上がる、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-7	ST2 －№ 12	10	弥生土器	鉢	9.8	7.0	3.0	小型、碗状、やや突出気味の小さな底部、体部僅かに丸味を持ち立ち上がる、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-7	ST2 －№ 11	11	弥生土器	甕・底部			(4.5)	小さな平底、体部やや丸味を持って立ち上がる、外面タタキ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-7	ST2 －№ 6	12	弥生土器	甕・底部			4.0	小さな平底、体部やや丸味を持って立ち上がる、外面タタキ、ハケ、内面ナデ	小礫多量
図 2-7	ST2 －№ 6	13	弥生土器	甕・底部			3.4	小さな平底、体部やや丸味を持って立ち上がる、外面タタキ、ハケ、内面ナデ	小礫多量
図 2-7	ST2	14	土製品	支脚	7.2	5.0	8.2	円柱状、中実、裾やや開く、上部平ら、器肉厚い、指頭、ナデ	小礫微量
図 2-7	ST2	15	石器	石包丁	長 7.6	幅 6.5	重 108	表面自然面、裏面一次剥離、両側縁に打ち欠き抉入、背部厚く並列剥離、刃部大きく二次調整	砂岩

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
図 2-9	ST3	1	弥生土器	甕	(14.2)			口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、外面タタキ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-9	ST3 －№1	2	弥生土器	鉢	(13.7)	5.9	2.9	やや小型、小さな平底、体部開く、外面ナデ、内面ハケ	小礫少量
図 2-9	ST3	3	弥生土器	鉢	(18.3)			体部直立気味、口唇平坦、内外面ハケ	砂粒微量
図 2-13	ST5 －№2	1	須恵器	坏身	12.7	4.0		やや小型、器高低い、受け部短く内傾、底部回転ヘラケズリ調整	白色小礫少量
図 2-13	ST5 －№3	2	須恵器	坏身	12.5	4.5	7.0	やや小型、器高低い、受け部短く外反気味、底部平底回転ヘラ切り、ナデ調整	微白色鉱物粒少量
図 2-13	ST5	3	須恵器	甕・頸部				頸部外反、櫛歯、沈線、内面肩部タタキ	精良
図 2-13	ST5 －№4	4	須恵器	横瓶・胴部				口縁欠損、最大径 44cm、頸部 9cm、外面格子タタキ、カキ目、内面同心円文タタキ	微白色鉱物粒、砂粒少量
図 2-14	ST5 －№5	5	土師器	甕	(18.8)	27.3		口縁外反、肩部なだらか、胴部下半丸味、丸底、胴部外面ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
図 2-14	ST5 －№2	6	土師器	甕	20.0			口縁外反、肩部張らず、胴部外面ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
図 2-14	ST5	7	土師器	甕	16.5			口縁やや外反、肩部張らず、胴部外面ナデ、内面ヘラケズリ	砂粒少量
図 2-14	ST5 －№6	8	土師器	甑	17.1			口縁僅かに外反するのみ、肩部、胴部張らず、口縁内外面ナデ、胴部外面粗いハケ、内面粗いハケ、ナデ、内外面煤付着	微砂粒多量
図 2-14	ST5	9	土師器	甕	(16.0)			口縁緩やかに外反、肩部、胴部張らず、口縁内外面ナデ、胴部ハケ、ナデ	小礫多量
図 2-14	ST5	10	土師器	甕	(15.8)			口縁緩やかに外反、肩部張らず、口縁内外面ナデ、胴部ハケ、ナデ	小礫多量
図 2-14	ST5 － SK2	11	土師器	甕	(24.0)			口縁直線的、やや外傾、口縁内外面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 2-14	ST5 －№5	12	土師器	甕	(24.8)	25.8		丸甕、口縁直立気味、頸部短く僅かにくびれる、肩部張らず、胴部下半から底部丸味、丸底気味、粘土帯残す、内外面ナデ	砂粒多量
図 2-14	ST5 －№1	13	土師器	鉢	17.9	15.7		ボール状の鉢、口縁直立、口唇やや平坦、胴部下半丸味、丸底、内外面ナデ	砂粒、小礫多量
図 2-14	ST5	14	土師器	甑・把手				把手部分、瘤状、指頭	砂粒少量
図 2-17	ST6 －№5・7	1	弥生土器	甕	15.0			口縁「く」字状に外傾、胴部やや張る、口縁外面ハケ、内面ナデ、外面胴部タタキ、ハケ、内面ハケ、外面煤付着	砂粒少量
図 2-17	ST6 －№3	2	弥生土器	甕・底部			3.8	小さな平底、体部やや直立気味、外面タタキ、ハケ、内面ナデ	砂粒、小礫少量
図 2-17	ST6 －№2	3	弥生土器	甕・底部			3.8	小さな平底、体部下半僅かに丸味、外面タタキ、ハケ、内面ナデ	砂粒、小礫多量
図 2-17	ST6 －№5	4	弥生土器	鉢	(24.2)			口縁短く屈曲、大きく開く、体部下半すぼまる、口縁外面ナデ、内面ハケ、外面胴部ハケ、内面ナデ	小礫少量
図 2-17	ST6 －上層	5	弥生土器	鉢	(19.0)			体部開く、表面やや摩耗、外面タタキ、ナデ、内面ナデ、体部ヒビ割れ	小礫多量
図 2-17	ST6	6	弥生土器	鉢	(21.8)			体部大きく開く、外面ハケ、内面ナデ、堅致	精良、砂粒微量
図 2-17	ST6 －№6	7	弥生土器	鉢	16.0	6.6	4.9	完形品、口唇平坦、体部丸味、底部丸底気味、外面ナデ、内面ハケ	砂粒少量
図 2-17	ST6	8	弥生土器	鉢	(17.6)			体部開く、口唇平坦、内外面ハケ、堅致	砂粒微量
図 2-17	ST6 －№1	9	弥生土器	鉢	(19.3)			体部開く、口唇平坦、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、堅致	小礫少量
図 2-17	ST6 －№5	10	弥生土器	小型甕	(7.8)	8.8	(1.2)	小型、口縁短く外傾、体部すぼまり、底部小さな平底、外面ハケ、ミガキ、内面指頭、ハケ	砂粒微量
図 2-17	ST6 －№8	11	弥生土器	高坏・裾部				裾部大きく開く、外面ナデ、ミガキ、裏ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-17	ST6	12	弥生土器	高坏・裾部			(14.8)	裾部開く、端部丸味、円形透かし孔、内外面ハケ、堅致	小礫少量
図 2-17	ST6 －№7	13	土製品	支脚			(8.1)	手づくね、裾部分のみ中空、脚底面平坦、指頭、ナデ	小礫少量
図 2-20	ST7	1	須恵器	坏蓋	(13.2)			器高低い、端部丸味、かえり端部から離れやや段状に近い、天井部回転ヘラケズリ	白色鉱物粒少量

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 2-20	ST7	2	須恵器	坏身	(13.1)			口縁やや開く、口唇丸味、内外面ヨコナデ	白色鉱物粒少量
図 2-20	ST7	3	土師器	甑・把手				把手部分のみ、やや小さな突起状の把手、指頭、ナデ	小礫微量
図 2-22	ST8	1	弥生土器	壺	(25.2)			広口壺、口縁大きく開く、櫛描波状文、外面ナデ、ハケ、内面ナデ	砂粒少量
図 2-22	ST8	2	弥生土器	壺	(17.0)			口縁開く、口唇僅かに下方に拡張、外面ハケ、内面ナデ	小礫微量
図 2-22	ST8	3	弥生土器	甕	(14.5)			やや小型、口縁外反、外面タタキ、内面ハケ	小礫微量
図 2-22	ST8	4	弥生土器	高坏・裾部			(21.2)	裾部大きく開く、内外面ナデ	砂粒少量
図 2-22	ST8	5	土製品	支脚・脚部			(8.2)	中実の低脚部、指頭、色調ややピンクかかる	小礫少量
図 2-22	ST8 － T1	6	金属製品	鉄鏃	長 3.8	幅 2.1	重 4.4	凹基、側縁外彎	鉄
図 2-25	ST9	1	弥生土器	壺	(16.6)			広口壺、口縁外傾、内外面ハケ	小礫多量
図 2-25	ST9	2	弥生土器	壺				口縁欠損、胴部僅かに算盤玉に近い、丸底、外面ミガキ、内面底ハケ、上半指頭	精良
図 2-25	ST9 －№ 2	3	弥生土器	甕	(15.5)			口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
図 2-25	ST9 －№ 16	4	弥生土器	甕	(12.0)			小型、口縁外反、肩部なだらか、底部すぼまる、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫少量
図 2-25	ST9 －№ 1	5	弥生土器	鉢	(18.8)			丸底？、体部丸味、口縁短く外反、外面タタキ、ナデ、内面口縁ハケ、胴部ハケ、ナデ	砂粒少量
図 2-25	ST9	6	弥生土器	鉢	(23.0)	8.7	(3.9)	大型、口縁大きく開く、平底、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
図 2-25	ST9 －№ 5	7	弥生土器	鉢	(17.4)	8.9	7.6	器高高い、底部平底、外面ミガキ、内面ハケ、ミガキ	小礫少量
図 2-25	ST9	8	弥生土器	鉢	(17.5)			口縁外傾気味にやや開く、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	小礫多量
図 2-25	ST9 －№ 19	9	弥生土器	鉢	(13.7)	5.9	2.4	口縁やや開く、底部小さな尖底状、外面小さな亀裂、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
図 2-25	ST9	10	弥生土器	鉢	(12.5)			口縁やや直立気味、口唇平坦、口唇内外面ヨコナデ、外面タタキ、ナデ、内面ミガキ	砂粒微量
図 2-25	ST9 －№ 2	11	弥生土器	高坏・脚部				分厚い脚部、外面指頭、ハケ、ナデ、内面ナデ	砂粒微量
図 2-25	ST9 －№ 6	12	土製品	支脚・脚部			(9.3)	中空、脚部面取り状に角ばる、裾部短く開く、指頭、ナデ	砂粒少量
図 2-25	ST9	13	石器	砥石	長 (8.3)	厚 (1.05)	重 (43)	一面のみ残存、他は折断、落剥、再利用で落剥箇所使用	頁岩
図 2-27	ST10	1	弥生土器	壺	(19.2)			口縁外反気味に開く、口唇平坦、内外面ハケ、ナデ	砂粒微量
図 2-27	ST10	2	弥生土器	甕	(12.6)			小型、口縁やや外傾、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 2-27	ST10	3	弥生土器	鉢	(20.1)			口縁開く、内外面ナデ、ハケ	砂粒微量
図 2-27	ST10	4	弥生土器	鉢	(19.4)			口縁開く、外面ハケ、内面ナデ	砂粒微量
図 2-27	ST10 －№ 2	5	石器	台石	長 29.8	厚 12.0	重 15000	大型扁平礫、一端部欠損、表裏面に敲打痕少しあり	砂岩
図 2-30	ST11 －№ 32	1	弥生土器	壺	16.5			広口壺、口縁やや開く、口唇僅かに拡張、頸部やや立ち上がる、肩部なだらか、内外面ハケ	砂粒少量
図 2-30	ST11 －№ 23	2	弥生土器	壺	(14.8)			広口壺、口縁やや開く、口唇僅かに拡張、頸部やや立ち上がる、内外面ハケ	礫多量
図 2-30	ST11	3	弥生土器	壺	(12.6)			広口壺、口縁余り開かない、頸部立ち上がる、内外面ハケ	砂粒少量
図 2-30	ST11 －№ 13・14	4	弥生土器	壺				広口壺？、口縁欠損、頸部立ち上がる、肩部なだらか、胴部最大径 22.2㎝、外面粗いハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒少量
図 2-30	ST11	5	弥生土器	壺	(6.8)			長頸壺、直立気味、器肉薄い、外面ミガキ、内面ハケ	精良
図 2-30	ST11 －№ 34	6	弥生土器	壺				長頸壺、口頸部欠損、胴部最大径 12.6㎝、器肉薄い、外面ミガキ、内面指頭、ナデ	砂粒微量
図 2-30	ST11 －№ 37	7	弥生土器	壺				長頸壺、口頸部欠損、胴部最大径 12.7㎝、器肉薄い、外面ミガキ、黒斑、内面指頭、ナデ、黒色	砂粒微量

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 2-30	ST11 －№ 15	8	弥生土器	壺			3.4	長頸壺？、口頸部欠損、胴部最大径 11.6cm、下膨れ、底部小さな平底、器肉厚い、外面タタキ、ミガキ、ハケ、内面指頭、ナデ、ハケ	礫少量
図 2-30	ST11 －№ 31	9	弥生土器	甕	(21.4)			口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、外面口縁ハケ、胴部タタキ、内面ナデ、ハケ	小礫多量
図 2-30	ST11 －№ 25	10	弥生土器	甕	(23.8)			口縁「く」字状に大きく外傾、肩部なだらか、外面口縁ハケ、胴部タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-30	ST11 －№ 36	11	弥生土器	甕	13.3	27.1	3.1	砲弾形、口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、胴部最大径中央部 17.6cm、小さい平底、外面口縁ハケ、胴部上半タタキ、ハケ、下半ハケ、内面上半ハケ、下半ナデ	小礫多量
図 2-30	ST11	12	弥生土器	甕	(13.2)			口縁緩やかに外反、肩部、胴部張らず、内外面ハケ	小礫少量
図 2-30	ST11 －№ 22	13	弥生土器	鉢	(15.8)	12.2	2.8	口縁「く」字状に外傾、胴部僅かに丸味、平底、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-30	ST11 －№ 2	14	弥生土器	鉢	(9.7)	9.9	1.1	口縁短く僅かに屈曲、胴部張りなし、下半すぼまる、底部尖底気味、口縁外面タタキ、ナデ、胴部タタキ、下半ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 2-30	ST11 －№ 35	15	弥生土器	鉢	8.9	7.5	1.2	口縁短く僅かに屈曲、下半すぼまる、底部尖底気味、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-30	ST11 －№ 22	16	弥生土器	鉢	(25.2)	9.7		大型、口縁大きく開く、底部丸底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫少量
図 2-30	ST11 －№ 40	17	弥生土器	鉢	(20.0)	6.7	3.2	大型、口縁大きく開く、底部丸底、内外面ハケ	小礫多量
図 2-30	ST11 －№ 39	18	弥生土器	鉢	11.7	6.8		口縁開く、下半すぼまる、尖底、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	小礫少量
図 2-30	ST11	19	弥生土器	鉢	(13.0)	5.7	3.0	口縁開く、下半すぼまる、平底、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 2-30	ST11	20	弥生土器	鉢	12.8	6.4	2.5	口縁開く、下半やや丸味、平底、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ、外面小さな亀裂	砂粒少量
図 2-30	ST11	21	弥生土器	高坏・坏部		5.2		脚部、口縁欠損、体部丸味、外面ナデ、ミガキ、内面底ハケ	精良
図 2-30	ST11 －№ 23	22	土製品	支脚				下半は欠損、受け部角状、指頭、ナデ	小礫少量
図 2-31	ST11 －№ 30	23	土製品	有孔円盤	径 4.4	孔径 0.7	重 18.7	中央部やや厚み、円孔を中央に焼成前に穿つ、ナデ、指頭	砂粒少量
図 2-31	ST11 －№ 28	24	金属製品	不明鉄製品	長 (8.2)	厚 (0.3)	重 (9)	先端部僅かに広がる、断面長方形	鉄製
図 2-31	ST11 －№ 29	25	金属製品	不明鉄製品	長 (10.0)	厚 (0.3)	重 (10)	柄部分か、一端部はやや細くなる、断面長方形	鉄製
図 2-34	ST12 －№ 7	1	須恵器	坏身	(12.8)	2.8	(7.6)	小型、受け部短い、底部切り離し粗い、平底、外面ロクロ目	白色鉱物粒微量
図 2-34	ST12 －№ 6	2	須恵器	坏身	(12.7)			小型、受け部短い、底部ヘラケズリ	白色鉱物粒微量
図 2-34	ST12 －№ 5	3	須恵器	坏身	11.0	2.9	6.5	小型、受け部短い、底部ヘラケズリ、粗い	精良
図 2-34	ST12	4	須恵器	壺				壺？、素口縁、口縁開く	白色鉱物粒微量
図 2-34	ST12 －№ 1	5	須恵器	壺			(7.4)	壺？、丸底、回転ヘラケズリ	精良
図 2-34	ST12 －№ 8	6	須恵器	鉢	(26.3)			口縁やや開き気味に直線的に立ち上がる、口唇平坦	白色鉱物粒微量
図 2-34	ST12 －竈№ 1	7	土師器	甕	(17.6)			口縁「く」字状に外傾、口唇僅かに丸味、肩部なだらか、外面ナデ、内面ナデ、ヘラナデ	小礫少量
図 2-34	ST12	8	土師器	甕	(19.7)			口縁外反、素口縁、外面ナデ、ハケ、内面ナデ	小礫少量
図 2-34	ST12	9	土師器	甕	(19.4)			口縁外反、素口縁、内外面ナデ	砂粒少量、白色鉱物粒少量
図 2-34	ST12	10	土師器	甕	(21.2)			口縁外反、素口縁、胴張甕か、内外面ナデ	砂粒少量
図 2-34	ST12	11	石器	叩石	長 10.9	厚 2.4	重 388	扁平楕円礫、中央部、側縁の一部にも敲打痕	砂岩
図 2-36	ST13 －№ 1、2	1	弥生土器	壺	(16.1)			広口壺、口縁外反、口唇僅かに拡張、肩部なだらか、外面口縁ナデ、胴部ハケ、下半タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒少量

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
図 2-36	ST13 －№ 4、SK1 № 1	2	弥生土器	壺	(17.8)			広口壺、口縁外反、口唇僅かに拡張、肩部なだらか、外面ハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒少量
図 2-36	ST13 －№ 8	3	弥生土器	壺	(16.2)			広口壺、口縁外反、口唇僅かに拡張、外面ハケ、内面ナデ	砂粒多量
図 2-36	ST13	4	弥生土器	壺	(20.4)			広口壺、口縁外反、拡張、櫛描波状文、内外面ナデ	砂粒多量
図 2-36	ST13	5	弥生土器	壺	(8.6)			長頸壺、口縁部直立、器肉薄い、外面ミガキ、内面ハケ	砂粒微量
図 2-36	ST13 －№ 3	6	弥生土器	壺・胴部				壺胴部、最大径 26.2cm、丸味、頸部近くすぼまる、外面タタキ、ハケ、内面粗いヘラナデ	小礫多量
図 2-36	ST13 － SK1、P3 № 1	7	弥生土器	壺・底部			(5.0)	壺胴部下半、平底、体部丸味、最大径 28cm、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫多量
図 2-36	ST13 －№ 6、7	8	弥生土器	甕	(11.0)			小型、口縁短く外反、肩部なだらか、外面ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-36	ST13	9	弥生土器	甕	(9.2)	10.0	2.3	小型、口縁拡張して直立、頸部外反、肩部なだらか、胴部張る、平底、器肉薄い、外面下半ミガキ、内面ヘラケズリ、ナデ	小礫少量
図 2-36	ST13	10	弥生土器	甕・胴部				小型、最大径胴部中央 13cm、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒多量
図 2-36	ST13	11	弥生土器	鉢	(18.3)	8.3	1.4	口縁大きく開く、口唇平坦、底部小さな平底、内外面ハケ、ミガキ	砂粒少量
図 2-36	ST13 － SK1 № 1	12	弥生土器	鉢	(13.0)	4.6	2.6	口縁大きく開く、体部下半僅かに丸味、底部突出した平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫少量
図 2-36	ST13	13	弥生土器	鉢	12.2	5.8		口縁開く、歪み、底部尖底、内外面ハケ	小礫微量
図 2-36	ST13	14	弥生土器	鉢	6.4	4.8		小型、手づくね、丸底、内外面指頭、ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-36	ST13 － P3 № 1	15	弥生土器	高坏・裾部				坏部僅かに残存、脚部短く裾開く、透かし円孔、やや摩耗、ミガキ	小礫少量
図 2-36	ST13	16	弥生土器	高坏・裾部			(15.5)	脚部短く、裾大きく開く、透かし円孔、ミガキ	砂粒微量
図 2-36	ST13	17	弥生土器	高坏・裾部			(15.0)	裾大きく開く、ミガキ	砂粒微量
図 2-36	ST13	18	弥生土器	高坏・裾部				脚部、中空、筒状、内面ハケ、ナデ、外面落剥摩耗	砂粒微量
図 2-36	ST13	19	土製品	土玉	長 2.5	厚 1.8	重 8.9	算盤玉状、中央に径 4㎜の円孔、ナデ	精良
図 2-36	ST13	20	金属製品	鉄鏃	長 4.7	厚 0.5	重 4.5	有茎鏃、頭部菱形、茎断面長方形、錆付着	鉄
図 2-36	ST13	21	金属製品	不明鉄製品	長 (3.0)	厚 (0.2)	重 (1.0)	鑓？、断面長方形	鉄
図 2-36	ST13	22	石器	投弾	長 4.2	厚 3.0	重 61	卵形	砂岩
図 2-36	ST13 － S1	23	石器	台石	長 20.6	厚 10.4	重 6720	亜角礫、表面中央摩耗、擦痕、一部欠損、被熱	砂岩
図 2-38	ST14 －№ 10、11	1	弥生土器	壺	(17.8)			複合口縁壺、口縁外反気味に長く立ち上がる、口唇丸味、頸部反る、内外面ハケ、ナデ	小礫少量
図 2-38	ST14	2	弥生土器	壺	(18.0)			広口壺、口縁大きく開く、口縁端部やや拡張、内外面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14	3	弥生土器	甕	11.6	17.7	4.7	やや小型、口縁外反、胴部張らず、平底、器肉厚い、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14 －№ 12	4	弥生土器	甕	(16.0)			口縁外傾、胴部張らず、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14 －№ 2	5	弥生土器	甕				小型、口縁欠損、肩部なだらか、平底、外面タタキ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14	6	弥生土器	鉢	(26.4)	10.3	3.6	大型、口縁大きく開く、やや丸底気味、外面タタキ、ナデ、ミガキ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14 －№ 7	7	弥生土器	鉢	15.2	8.5	3.0	完形品、口唇平坦、体部丸味、底部突出気味の平底、外面タタキ、ナデ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14 －№ 1	8	弥生土器	鉢	11.8	9.7	3.0	口縁括れ僅かに外傾、余り開かず、平底、外面タタキ、ナデ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
図 2-38	ST14 －№ 9	9	弥生土器	鉢	6.9	6.5	1.8	小型、直線的に立ち上がる、平底、器肉厚い、外面タタキ、内面指頭	小礫微量
図 2-38	ST14	10	弥生土器	高坏・坏部	(11.0)			体部丸味、口縁僅かにくびれる、内外面ハケ、№ 11 と同一か	精良
図 2-38	ST14	11	弥生土器	高坏・裾部			(20.1)	裾部大きく開く、円形透かし、外面ミガキ、内面ハケ、堅致、№ 10 と同一か	

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径、重(g)	特徴	胎土、材質
図 2-38	ST14	12	金属製品	鉄鏃	長(5.0)	厚(0.2)	重(8.0)	有茎鏃、頭部菱形、茎断面長方形、錆付着	鉄
図 2-38	ST14 － P3	13	金属製品	鉄鏃・基部	長(3.6)	厚(0.3)	重(4.6)	有茎鏃、頭部欠損、茎断面長方形、錆付着	鉄
図 2-38	ST14 －№ 2	14	石器	磨石	長 12.9	厚 4.4	重 530	楕円礫、赤色顔料付着	砂岩
図 2-41	ST17	1	須恵器	坏蓋				天井部やや平坦、手持ちヘラケズリ、粗い	精良
図 2-41	ST17	2	須恵器	坏身	(17.0)			受け部短く立ち上がる、摩耗	砂粒微量
図 2-41	ST17 － SK1	3	土師器	鉢	(16.0)	6.0		口縁外面沈線、括れ、体部丸味、底部やや丸底気味、底部手持ちヘラケズリ、粗い、他はロクロナデ	砂粒微量
図 2-44	ST18	1	土師器	甕	(18.2)			口縁短く緩やかに外反、肩部、胴部張らず、摩耗、内外面ナデ？	砂粒微量
図 2-46	ST19	1	須恵器	坏身	(11.3)			小型、受け部短い、外面自然釉	精良
図 2-46	ST19	2	須恵器	坏身	(11.7)			小型、受け部短い、外面自然釉	精良
図 2-46	ST19	3	土師器	甕	(16.6)			口縁強く外反、肩部張らず、口縁部ナデ、他はハケ	小礫多量
図 2-46	ST19	4	土師器	甕	(14.8)			口縁直立、丸甕、内外面ナデ	小礫少量
図 2-46	ST19	5	土師器	鉢	(18.0)			体部直立気味に僅かに開く、素口縁、口唇ヨコナデ、体部内外粗いハケ	砂粒多量
図 2-46	ST19	6	土師器	台付鉢				台部短く開く、指頭、ナデ、鉢内面ハケ	小礫少量
図 2-46	ST19	7	金属製品	不明鉄製品	長(5.5)	厚(0.6)	重(7.7)	断面方形	鉄
図 2-46	ST19	8	石器	叩石	長 10.3	厚 2.3	重 311	扁平な楕円礫、中央部表裏面共敲打痕、側縁全周敲打痕	砂岩
図 2-49	ST20	1	須恵器	坏蓋				天井部やや平坦、手持ちヘラケズリ、粗い	精良
図 2-49	ST20 － SK4	2	須恵器	坏身	(13.2)			小型、受け部短い	精良
図 2-49	ST20	3	須恵器	壺	(19.5)			口縁直立、僅か肥厚、口唇平ら、肩部張る、胴部外面平行タタキ、内面同心円当て具	精良
図 2-49	ST20 －№ 1	4	須恵器	壺	(24.0)			口縁肥厚、内側に突き出る、口唇上端平坦、内外面自然釉	精良
図 2-49	ST20 －竈№ 1	5	土師器	甕	16.6			口縁緩やかに外反、肩部張らず、外面ナデ、内面ヘラケズリ	小礫少量
図 2-49	ST20	6	土師器	甕	(20.8)			口縁外反、丸甕、内外面ナデ	小礫少量
図 2-49	ST20	7	金属製品	鉄鏃	長(6.4)	幅 3.3	重(13.3)	有茎方頭式、茎破損	鉄
図 2-52	ST23	1	須恵器	蓋	10.4	3.4		天井部平ら、凹んだ鈕、口縁直立気味、口唇端部やや膨らむ	精良
図 2-52	ST23 －№ 20	2	石器	叩石	長 8.7	厚 6.8	重 720	亜角礫、ほとんどの面を使用、一部凹む	砂岩
図 2-52	ST23 －№ 26	3	石器	台石	長(16.7)	厚(6.1)	重(2380)	一面摩耗、擦痕、敲打痕、やや凹む、一端部折損	砂岩
図 2-55	ST24	1	須恵器	壺・胴部				肩部近くか、表面格子目タタキ	精良
図 2-55	ST24	2	土師器	坏	(12.8)			口縁僅かに内弯気味、内外面回転ナデ	精良
図 2-55	ST24	3	土師器	甕	(20.0)			口縁部短く屈曲気味に外傾、内外面ハケ	砂粒少量
図 2-58	ST25 － SK1	1	弥生土器	壺	(32.0)			口縁開く、拡張、波状文、内外面ハケ	小礫少量
図 2-58	ST25	2	弥生土器	壺	(25.3)			口縁開く、受け口状に上方に摘み上げる	砂粒少量
図 2-58	ST25 －№ 1、4、6	3	弥生土器	壺	(16.6)			広口壺、口縁開く、口縁端部僅かに拡張、ナデ、頸部長い、肩部ハケ状原体列点文、肩部張らず、外面ナデ、内面上部ハケ、頸部、胴部強いナデ	小礫多量
図 2-58	ST25	4	弥生土器	壺	(13.4)				
図 2-58	ST25 －№ 9	5	弥生土器	壺	(21.2)				
図 2-58	ST25	6	弥生土器	壺	15.5	26.1	(4.6)		
図 2-58	ST25	7	弥生土器	壺	(15.6)	(36)	5.4		
図 2-58	ST25 －№ 42、43、44	8	弥生土器	壺			6.8		
図 2-58	ST25 －№ 45	9	弥生土器	甕	11.6	18.6	2.1		
図 2-58	ST25 －№ 42	10	弥生土器	甕	(13.2)				
図 2-59	ST25 －№ 32、34	11	弥生土器	甕	(11.6)				
図 2-59	ST25	12	弥生土器	鉢	21.8	9.6	2.6		
図 2-59	ST25	13	弥生土器	鉢	(14.9)	6.3			
図 2-59	ST25 － S 1	14	石器	石鏃	長 4.5	幅 2.6	重 7		
図 2-59	ST25 － S 2	15	石器	石鏃	長 4.2	幅 2.3	重 5		
図 2-59	ST25 － S 3	16	石器	石鏃	長 3.4	幅 1.9	重 3		
図 2-59	ST25 － S 4	17	石器	石包丁	長 9.6	幅 4.6	重 57		
図 2-59	ST25	18	石器	石包丁	長 7.8	幅 4.3	重 40		
図 2-59	ST25 － S 8	19	石器	叩石	長 8.9	厚 2.6	重 275.8		

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 2-59	ST25 － S 7	20	石器	叩石	長 10.3	厚 2.5	重 385.6		
図 2-59	ST25 － S 6	21	石器	叩石	長 10.5	厚 3.7	重 540		
図 2-62	ST26	1	須恵器	高坏	(10.4)			高坏または長頸壺の口縁か、僅かに外反、沈線	精良
図 2-62	ST26	2	須恵器	壺	(30.6)			受け口状、口唇内側に肥厚、口縁櫛描波状文	精良
図 2-62	ST26	3	須恵器	壺・底部			(11.8)	高台付、腰やや丸味	白色鉱物粒少量
図 2-62	ST26	4	須恵器	甕				甕か壺、外面カキ目、内面渦巻き当て具、器肉薄い	砂粒少量
図 2-62	ST26 －№ 3	5	土師器	甕	(21.2)			口縁短く強く外反、肩部張らず、口縁内外面ナデ、外面ハケ、内面ヘラケズリ、色調黄白色	小礫少量
図 2-62	ST26 －№ 1	6	土師器	甕	(18.6)			口縁短く外反、口唇丸味、肩部張らず、口縁内外面ナデ、外面ハケ、内面ヘラケズリ	小礫多量
図 2-62	ST26 －№ 2	7	土師器	甕	(25.3)			口縁強く屈曲、肩部張らず、口縁内外面ナデ、外面ハケ、内面ヘラケズリ	小礫多量
図 2-62	ST26 － P15	8	鉄	鉄滓			重 24	やや扁平、厚みがない	鉄

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 2-65	ST30 － P1	1	弥生土器	壺			
図 2-65	ST30	2	弥生土器	壺	(11.9)		
図 2-65	ST30	3	弥生土器	甕	(11.7)		
図 2-65	ST30	4	弥生土器	甕			3.0
図 2-65	ST30	5	弥生土器	鉢	(8.1)		
図 2-65	ST30 －№ 1	6	弥生土器	鉢	(25.0)	(10.2)	(3.0)
図 2-65	ST30 －№ 6	7	弥生土器	鉢	(13.6)	6.3	2.6
図 2-65	ST30	8	弥生土器	鉢	12.8	7.4	
図 2-65	ST30 －№ 9	9	弥生土器	鉢	(10.2)	6.2	3.5
図 2-65	ST30 －№ 11	10	弥生土器	鉢	(11.6)	6.4	(2.8)
図 2-65	ST30 －№ 5	11	弥生土器	鉢	(9.2)	6.4	3.4
図 2-65	ST30 －№ 3	12	弥生土器	鉢	(11.0)	(6.3)	2.5
図 2-65	ST30	13	弥生土器	鉢	10.8	5.2	2.7
図 2-65	ST30 －№ 4	14	弥生土器	鉢	(9.4)	4.8	
図 2-65	ST30 －№ 13	15	弥生土器	鉢	10.2	6.2	3.4
図 2-65	ST30	16	弥生土器	鉢	(7.4)		3.5
図 2-65	ST30 －№ 7	17	弥生土器	器台			7.2
図 2-65	ST30 －№ 4	18	弥生土器	器台			7.2
図 2-65	ST30	19	弥生土器	器台			
図 2-65	ST30 －№ 12	20	弥生土器	珍袖壺			
図 2-65	ST30	21	土製品	円盤	径 4.4	孔径 0.9	重 18
図 2-66	ST30	22	石器	石包丁	長 8.7	幅 5.1	重 63
図 2-66	ST30 －№ 8	23	石器	石杵	長 11.3	厚 7.3	重 1180
図 2-66	ST30 －№ 14	24	石器	叩石	長 (7.8)	厚 3.3	重 (312.9)
図 2-66	ST30	25	石器	叩石	長 12.1	厚 3.9	重 (318.2)
図 2-66	ST30 － P4	26	石器	叩石	長 (9.3)	厚 (2.2)	重 (266.3)
図 2-68	ST32	1	弥生土器	甕	(15.0)		3.8
図 2-68	ST32	2	弥生土器	鉢	(11.5)	4.9	(3.0)
図 2-68	ST32	3	弥生土器	鉢	(11.2)		
図 2-70	ST33 －№ 1	1	弥生土器	甕	(13.6)		
図 2-70	ST33	2	石器	石包丁未製品？	長 (8.8)	幅 4.2	重 (30)
図 2-73	ST34	1	須恵器	坏蓋			
図 2-73	ST34	2	須恵器	壺			
図 2-76	ST35	1	土師器	直口壺	12.2		
図 2-76	ST35	2	土師器	壺		(27.9)	
図 2-76	ST35	3	土師器	壺	(14.3)		
図 2-76	ST35	4	土師器	甕	(14.4)		
図 2-76	ST35	5	土師器	甕	12.8	20.3	(3.0)
図 2-76	ST35	6	土師器	甕	(13.2)		
図 2-76	ST35 －№ 3	7	土師器	鉢	17.1	6.7	
図 2-76	ST35	8	土師器	鉢	15.0	7.8	
図 2-76	ST35	9	土師器	鉢	15.9		
図 2-77	ST35	10	土師器	鉢	(11.8)		
図 2-77	ST35	11	土師器	鉢	(7.6)		
図 2-77	ST35	12	土師器	鉢	(12.0)	6.7	(3.2)
図 2-77	ST35	13	土師器	鉢	(14.1)		
図 2-77	ST35	14	土師器	鉢	(11.9)	2.7	
図 2-77	ST35 －№ 2	15	土師器	鉢	8.7	3.3	
図 2-77	ST35 －№ 5	16	土師器	器台			
図 2-77	ST35 － T 1	17	鉄器	鉄鏃？	長 4.0	幅 0.4	重 1.7
図 2-77	ST35 － S 1	18	石器	砥石	長 (10.5)	厚 (5.5)	重 (1000)
図 2-80	ST38 －竈№ 5	1	須恵器	坏	17.0		
図 2-80	ST38	2	須恵器	横瓶	(7.8)		
図 2-80	ST38 －№ 3	3	石器	砥石	長 23.1	厚 5.9	重 2680
図 2-80	ST38 －№ 2	4	石器	砥石	長 (17.8)	厚 (4.3)	重 (1240)
図 2-80	ST38 －竈№ 1	5	石器	台石	長 20.0	厚 5.0	重 2590
図 2-80	ST38 －№ 1	6	石器	台石	長 18.3	厚 4.0	重 1920
図 2-82	ST39	1	弥生土器	壺	(22.0)		
図 2-82	ST39	2	弥生土器	甕	(18.3)		
図 2-82	ST39	3	弥生土器	甕	(14.8)		
図 2-82	ST39 －№ 4、10	4	弥生土器	甕			2.4
図 2-82	ST39 －№ 5	5	弥生土器	甕・底部			(3.0)
図 2-82	ST39 －№ 9	6	弥生土器	鉢	(17.0)	8.6	2.6
図 2-82	ST39 －№ 4	7	弥生土器	鉢	15.7	8.5	3.7

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 2-82	ST39 －No. 10	8	弥生土器	鉢	(13.7)		3.4
図 2-82	ST39	9	弥生土器	鉢	(13.6)	6.7	
図 2-82	ST39	10	弥生土器	鉢・底部			
図 2-82	ST39 － P1	11	弥生土器	鉢	6.7	4.5	2.8
図 2-82	ST39	12	土製品	支脚・脚部			(8.1)
図 2-82	ST39 －No. 6	13	石器	叩石	長 9.1	厚 2.1	重 293
図 2-85	ST40 －No. 4	1	須恵器	壺	(11.8)		
図 2-85	ST40	2	土師器	甕			
図 2-85	ST40 －No. 30	3	石器	叩石	長 11.8	厚 3.3	重 575
図 2-87	ST41	1	弥生土器	甕	14.5		
図 2-87	ST41	2	弥生土器	甕	(15.0)		
図 2-87	ST41	3	弥生土器	鉢	(10.2)		
図 2-87	ST41 －No. 1、2	4	弥生土器	高坏・坏部	31.3		
図 2-87	ST41	5	鉄器	鉄鎌	長 (7.1)	幅 (3.4)	重 (24)
図 2-91	ST42 －竈	1	須恵器	坏	(11.6)		
図 2-91	ST42 －No. 1	2	須恵器	坏	(9.0)	3.1	(6.4)
図 2-91	ST42 －No. 2	3	須恵器	坏	8.9	3.3	4.8
図 2-91	ST42	4	須恵器	長頸壺・肩部			
図 2-91	ST42	5	須恵器	壺	(21.9)		
図 2-91	ST42 －No. 1、4	6	石器	台石	長 20.2	厚 13.8	重 1760
図 2-94	ST43	1	須恵器	坏蓋			
図 2-94	ST43	2	須恵器	提瓶			
図 2-94	ST43	3	土師器	甕	(15.6)		
図 2-94	ST43 －竈	4	土師器	甕	(20.4)		
図 2-94	ST43 －竈	5	土師器	甕	(23.5)		
図 2-94	ST43 －竈No. 1	6	土師器	鉢	(14.6)		
図 2-97	ST44	1	須恵器	坏	(13.3)	2.4	(7.6)
図 2-97	ST44	2	須恵器	高台付坏			(7.5)
図 2-97	ST44	3	須恵器	壺	(14.2)		
図 2-97	ST44	4	須恵器	高坏・裾部			(14.0)
図 2-97	ST44	5	土師器	甕	(17.8)		
図 2-99	ST45	1	弥生土器	甕	(16.7)		
図 2-99	ST45 －炉跡No. 13	2	弥生土器	甕	(14.6)		
図 2-99	ST45 －No. 12	3	弥生土器	甕	(13.4)		
図 2-99	ST45	4	弥生土器	甕	(18.7)		
図 2-99	ST45 －No. 1	5	弥生土器	鉢	17.4	7.8	5.3
図 2-99	ST45	6	弥生土器	鉢	(17.8)		
図 2-99	ST45 －No. 3、13	7	弥生土器	鉢	(16.0)	6.1	(2.4)
図 2-99	ST45 －No. 12	8	弥生土器	鉢	(15.0)	5.3	
図 2-99	ST45	9	弥生土器	鉢	(13.4)	5.3	3.3
図 2-99	ST45 －炉跡	10	弥生土器	鉢	(10.4)	3.7	(3.2)
図 2-99	ST45 －No. 7	11	弥生土器	鉢	(8.6)	3.8	
図 2-99	ST45 －No. 2	12	弥生土器	高坏・裾部			12.8
図 2-99	ST45 －No. 12	13	弥生土器	甑	(12.6)	(9.2)	2.9
図 2-99	ST45	14	鉄器	鑓	長 (4.0)	幅 1.1	重 (5)
図 2-102	ST46	1	土師器	甕	21.0		
図 2-102	ST46	2	石器	叩石	長 (12.9)	厚 (3.0)	重 (310)
図 2-105	ST47 －竈	1	須恵器	坏蓋	(14.0)		
図 2-105	ST47	2	須恵器	坏	(10.6)		
図 2-105	ST47	3	須恵器	坏・底部			(5.6)
図 2-105	ST47	4	須恵器	高坏・坏部	(10.2)		
図 2-105	ST47	5	土師器	甕	(14.3)		
図 2-105	ST47 －竈	6	鉄製品	鉄鏃・茎	長 (4.4)	幅 (0.7)	重 (3)
図 2-108	ST48	1	須恵器	坏蓋	(12.6)		
図 2-108	ST48 －竈	2	須恵器	坏	(8.9)		
図 2-108	ST48	3	須恵器	坏	(10.4)		
図 2-108	ST48	4	須恵器	坏・底部			(5.8)
図 2-108	ST48 －No. 4	5	須恵器	坏・底部			(8.8)
図 2-108	ST48 －竈No. 1	6	土師器	甕			
図 2-108	ST48 －No. 1	7	土師器	高坏	(10.3)	(3.6)	5.8
図 2-111	ST49 －No. 77	1	弥生土器	壺	(11.4)		
図 2-111	ST49 －No. 66	2	弥生土器	壺	(15.4)		
図 2-111	ST49 －No. 31、33、74、78	3	弥生土器	壺	(20.0)		
図 2-111	ST49 －No. 29	4	弥生土器	壺	(12.4)	17.9	

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 2-111	ST49 －No. 6、46、49、57、SK98	5	弥生土器	壺	(26.4)		
図 2-111	ST49 －No. 3	6	弥生土器	壺	(22.2)		
図 2-111	ST49 －No. 40、44、47	7	弥生土器	壺・底部			
図 2-111	ST49 －No. 1	8	弥生土器	壺・胴部			5.5
図 2-111	ST49 －No. 19	9	弥生土器	甕	(14.1)		
図 2-111	ST49 －No. 9	10	弥生土器	甕	(13.1)		
図 2-111	ST49 －No. 11	11	弥生土器	甕	(13.2)		
図 2-111	ST49	12	弥生土器	甕	(18.0)		
図 2-111	ST49 －No. 48	13	弥生土器	甕	(23.1)		
図 2-111	ST49 －No. 65、69、70	14	弥生土器	甕・胴部			
図 2-112	ST49 －No. 47	15	弥生土器	甑・底部			1.3
図 2-112	ST49	16	弥生土器	鉢	(19.6)		
図 2-112	ST49 －No. 14、27	17	弥生土器	鉢	(14.5)	5.3	3.8
図 2-112	ST49	18	弥生土器	鉢	(17.5)		
図 2-112	ST49	19	弥生土器	鉢	(15.1)	7.1	
図 2-112	ST49 －No. 80	20	弥生土器	鉢	13.5	8.0	
図 2-112	ST49	21	弥生土器	鉢	(15.7)		
図 2-112	ST49	22	弥生土器	鉢	(13.0)	7.0	(3.3)
図 2-112	ST49	23	弥生土器	鉢・底部			3.7
図 2-112	ST49 －No. 28	24	土製品	支脚・脚部			12.2
図 2-112	ST49	25	土製品	支脚・受け部			
図 2-112	ST49	26	石器	叩石	長 11.9	厚 3.7	重 507.7
図 2-114	ST50	1	弥生土器	甕	(10.2)	15.5	
図 2-114	ST50	2	弥生土器	甕	(24.3)		
図 2-114	ST50	3	弥生土器	甕	(14.4)		
図 2-114	ST50 － P1	4	弥生土器	鉢	12.0	6.8	3.1
図 2-114	ST50 －No. 50	5	弥生土器	鉢	10.4	7.1	1.8
図 2-114	ST50 －No. 2	6	弥生土器	高坏・脚部			9.0
図 2-116	ST51 －No. 14	1	弥生土器	壺・頸部			
図 2-116	ST51	2	弥生土器	壺・底部			
図 2-116	ST51	3	弥生土器	壺	(19.3)		
図 2-116	ST51 －No. 10	4	弥生土器	甕	16.0	23.9	3.8
図 2-116	ST51 －No. 4	5	弥生土器	甕	12.7	22.5	(3.0)
図 2-116	ST51 －No. 9	6	弥生土器	甕	(13.2)	15.2	2.1
図 2-116	ST51 －No. 12	7	弥生土器	甕	(13.6)		
図 2-116	ST51 －No. 8	8	弥生土器	鉢	(23.2)	7.4	
図 2-116	ST51	9	弥生土器	鉢	(21.1)		
図 2-116	ST51	10	弥生土器	鉢	(25.4)		
図 2-116	ST51 －No. 13	11	弥生土器	鉢	(14.4)	6.2	
図 2-116	ST51	12	弥生土器	鉢	(14.4)	7.7	1.6
図 2-116	ST51 －No. 2	13	弥生土器	鉢	14.8	6.7	
図 2-116	ST51 －No. 7	14	弥生土器	鉢	15.0	5.5	
図 2-116	ST51	15	弥生土器	鉢	(15.6)	5.0	4.2
図 2-116	ST51	16	弥生土器	鉢	11.2	4.5	3.1
図 2-116	ST51 －No. 17	17	弥生土器	鉢	11.8	7.0	
図 2-116	ST51 －No. 18	18	弥生土器	鉢	12.3	7.6	2.3
図 2-116	ST51 －No. 16	19	弥生土器	鉢	(11.5)	8.2	1.4
図 2-116	ST51	20	弥生土器	鉢	8.7	9.2	1.2
図 2-116	ST51 －No. 6	21	弥生土器	鉢	(9.2)	7.0	3.5
図 2-116	ST51	22	弥生土器	鉢	(7.4)		
図 2-116	ST51	23	弥生土器	高坏・脚部			(20.9)
図 2-117	ST51	24	弥生土器	線刻土器			
図 2-116	ST51	25	鉄製品	鉄鏃？	長 (3.5)	幅 (1.0)	重 (4)
図 2-120	ST52 － 竈	1	土師器	甕	(26.2)		
図 2-123	ST53	1	須恵器	坏	(12.4)		
図 2-123	ST53	2	須恵器	坏	(11.4)		
図 2-123	ST53	3	須恵器	長頸壺？	(4.2)		
図 2-123	ST53	4	須恵器	壺・肩部？			
図 2-123	ST53	5	須恵器	甕	(9.3)		

第３節　掘立柱建物跡

Ⅷ区では 19 棟の掘立柱建物跡 (SB) を検出した。柱穴跡は膨大な数で掘立柱建物跡になるかどうか判然としないものも多数含まれており、実際の棟数は増えるものと考えられる。しかしながら現場での発掘調査での所見を大事にし掘立柱建物跡と認定したもののみを取り上げる。

掘立柱建物跡の柱穴跡からの遺物出土例は極めて少なく、時期を特定できるものは極めて少なかった。それでも大まかな時期区分を行うと６世紀後半、７世紀前半、近世に大まかに分かれる。

６世紀から７世紀のものは調査区の東側部と西側部に大きく分かれる。西側部のものは２間×３間のものが多く、東側部のものは３間×４間のものが多い。最大のものは SB5 で柱穴の掘り方は方形である。

近世の屋敷跡の一部と考えられるものは SB6、SB7、SB20 でⅧ B 区の東側で屋敷溝内で検出している。

SB17 については欠番にした。当初単独の掘立柱建物跡と判断したものの、柱間距離等からして類例がないため、ST7 の主柱穴とした。

表 3-1　掘立柱建物跡一覧表

SB 番号	調査区	グリッド	時期	桁行	梁間	柱間距離 (m)	面積 (㎡)	柱穴形状	柱穴平均径 (m)	柱穴平均深さ (m)	柱痕平均径 (m)	軸方向	切り合い
SB1	Ⅷ BE	C9-5-14 他	古墳～古代	4	3	1.74	37.44	円形	0.65	0.35	0.09	N-67° -E	SD21 切られる
SB2	Ⅷ BE	C9-5-23 他	古墳～古代	3	3	1.95	32.3	円形	0.64	0.43	0.10	N-12° -W	SB3、ST10、SK12・13 切る
SB3	Ⅷ BE	C9-5-23 他	古墳～古代	3	2	1.88	22.96	円形	0.58	0.34	0.08	N-12° -W	ST10、SK12・13 切る、SB2 切られる
SB4	Ⅷ BE	C9-10-13 他	古墳末	4	2	1.91	28.9	円形	0.67	0.44	0.13	N-18° -W	SK23 切る、SD4・11・12 切られる
SB5	Ⅷ BE	C9-9-12 他	古墳後期	4	3	1.92	43.7	方形	0.88	0.60	0.26	N-77° -W	ST14・17 切る、SX50、SD8・9 切られる
SB6	Ⅷ BE	C9-9-10 他	近世	4	1	2.42	32.3	円形	0.42	0.50	0.18	N-76° -W	ST14、SK25、SD5・15 切る
SB7	Ⅷ BE	C9-4-25 他	近世	3	2		69.96	円形	0.45	0.42	0.18	N-75° -W	ST51、SD15 切る
SB8	Ⅷ BE	C9-10-14 他	古墳～古代	(3)	–	(2.04)	–	円形	0.52	0.38	0.09	N-72° -E	
SB9	Ⅷ BW	C9-8-15 他	古代？	2	2	1.69	10.9	円形	0.73	0.49	0.16	N-89° -W	SD39 切る、SD25・28・40 切られる
SB10	Ⅷ BW	C9-8-21 他	古墳後期	2	2	1.64	8.0	円形	0.64	0.32	0.09	N-67° -W	ST23 切る、SD35 切られる
SB11	Ⅷ AE	C9-7-12 他	古墳～古代	2	2	1.74	12.24	円形	0.68	0.36	0.22	N-73° -W	C9-7-17P8 切る
SB12	Ⅷ AE	C9-6-13 他	古墳～古代	(1)	(2)	(1.35)	–	円形	0.68	0.37	0.11	N-63° -W	ST33 切る
SB13	Ⅷ AW	C8-10-23 他	古墳後期	3	2	1.72	17.68	円形	0.71	0.42	0.11	N-80° -W	ST45、SB15、SX35 切る、SD99・100 切られる
SB14	Ⅷ AW	C8-15-6 他	古代	3	2	1.54	15.3	円形	0.68	0.36	0.13	N-24° -E	SD99・100・106 切られる
SB15	Ⅷ AW	C8-10-23 他	古墳末	3	2	1.98	25.52	円形	0.78	0.69	0.21	N-82° -E	ST45、SX35 切る、SB13、SD99・100 切られる
SB16	Ⅷ AW	C8-14-20 他	古代	3	2	2.35	32.9	円形	0.80	0.42	0.24	N-11° -E	ST44 切る、SD99・100・110・115 切られる
SB18	Ⅷ BW	C9-4-16 他	古墳～古代	3	2	1.68	17.39	円形	0.68	0.34	0.25	N-13° -W	SK42・46 切る
SB19	Ⅷ BW	C9-4-17 他	古墳～古代	3	2	(1.39)	15.58	円形	0.59	0.50	0.10	N-19° -W	ST11 切る、SK106 切られる
SB20	Ⅷ BE	C9-5-25 他	近世	3	2		20.18	円形	0.60	0.19		N-6° -E	

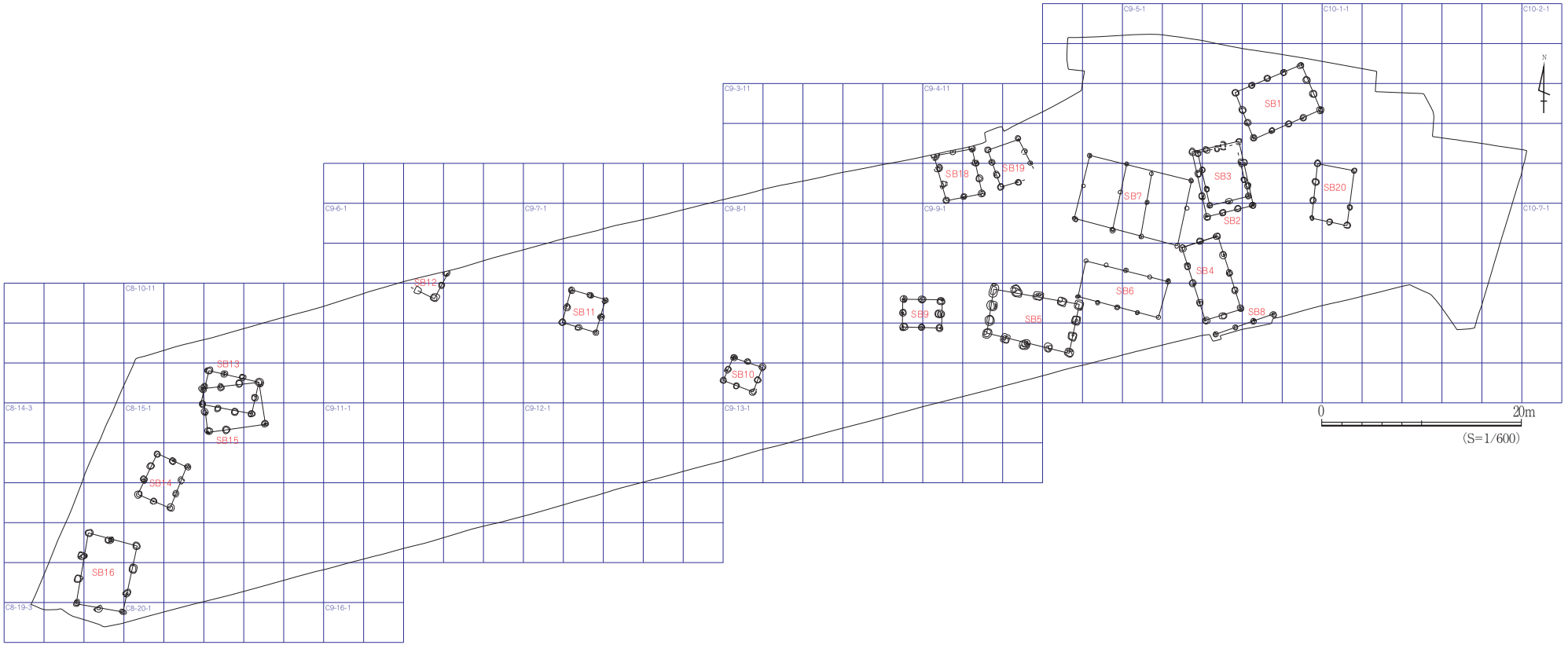


図 3-1　掘立柱建物跡全体配置図

SB1(図 3-2)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-14 他　**切り合い関係**；SD21 に切られる

時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-67° -E

規模；桁行 4 間×梁間 3 間　桁行 7.2m ×梁間 5.2m　柱間距離 桁行 1.50 ～ 1.98m(平均 1.81m)　梁間 1.44 ～ 1.93m(平均 1.66m)　面積 37.44㎡

柱穴数；14　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.65m ×深さ平均 0.35m

覆土；黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器甕片、弥生土器細片

所見；Ⅷ BE 区の北側部に位置し、グリッドは C9-5-14、C9-5-15 他に跨がる。西南側に SB2、SB3 が近接している。桁行 4 間、梁間 3 間の東西棟である。桁行 7.2m、梁間 5.2m でやや大きな掘立柱建物跡である。主軸方位は N-67° -E である。柱穴形状は円形で径 56㎝から 72㎝で、64㎝から 66㎝のものが多く、深さは 23㎝から 46㎝で 32㎝程のものが多い。断面は「U」字状を呈する。８基で柱痕を検出した。底面に 14㎝程で底面より更に 10㎝程の掘り込みが認められる。柱痕の位置は底面の中央部が多いものの、中には壁際に片寄るものも若干認められるが、柱並びの軸線上には乗っている。覆土は黒褐色粘質土を基本として、人為的な水平堆積を示しているものが多い。

遺物出土状況は P6 から須恵器甕片のみで他は混入品の弥生土器細片であった。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。

SB2(図 3-3)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-22 他　**切り合い関係**；SB3、ST10、SK12・13 を切る、SD3 に切られる

時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-12° -W

規模；桁行 3 間×梁間 3 間　桁行 6.6m ×梁間 4.9m　柱間距離 桁行 2.10 ～ 2.48m(平均 2.22m)　梁間 1.42 ～ 1.75m(平均 1.55m)　面積 32.3㎡

柱穴数；12　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.64m ×深さ平均 0.43m

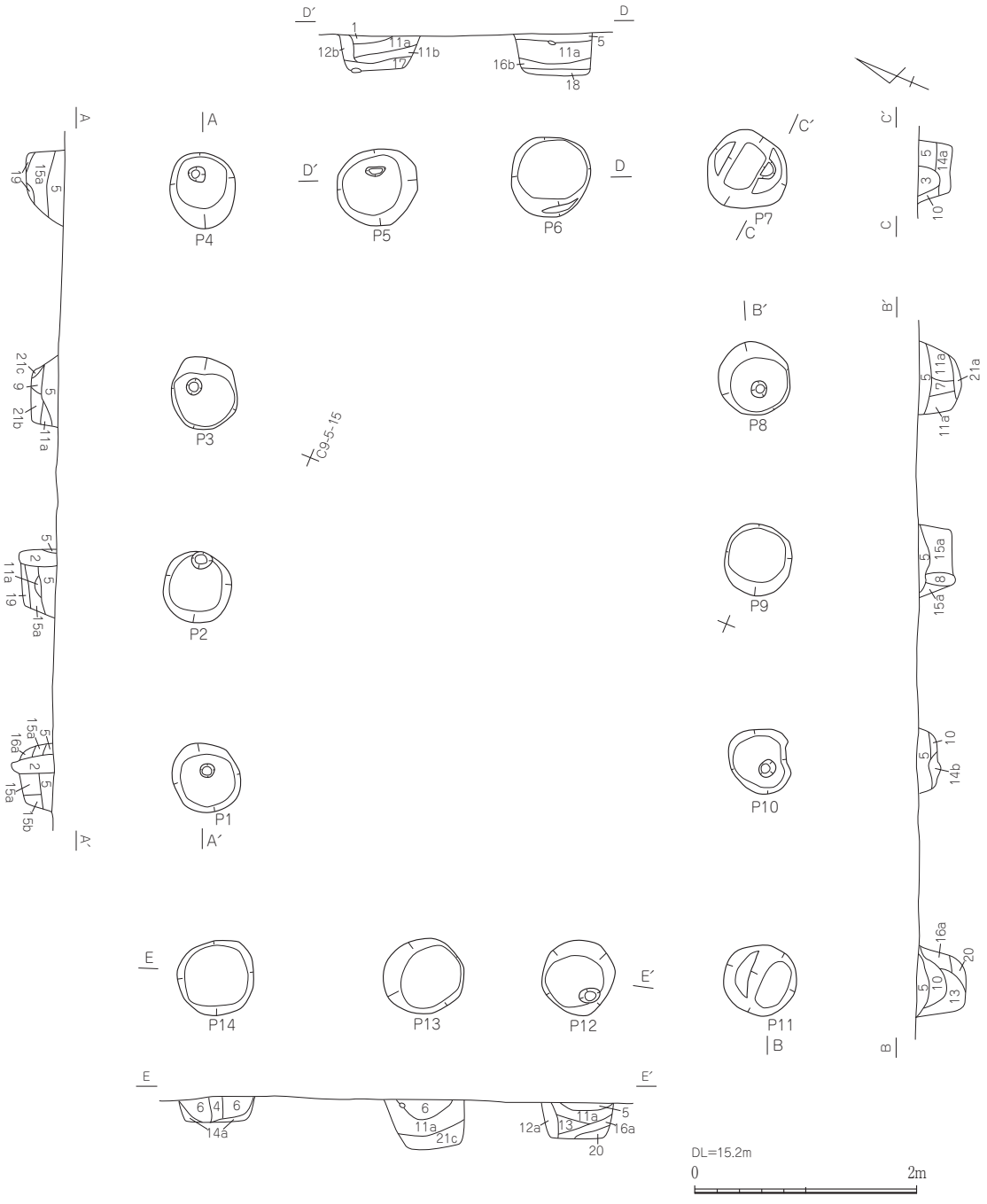
覆土；褐色粘質土主体、黄褐色粘質土塊含む

出土遺物；須恵器甕片、弥生土器細片

所見；Ⅷ BE 区の中央部に位置し、グリッドは C9-5-22、C9-5-23 他に跨がる。ほぼ同時期の SB3 と重複するように構築されており、本掘立柱建物跡が新しい。SB3 とは建て替えの関係にあった可能性が強い。桁行、梁間共に３間であるが、南北列が長く南北棟である。桁行 6.6m、梁間 4.9m である。北列の柱穴は近世の SD3 に部分的に壊されている。柱穴形状は円形で最小径 58㎝から最大径 74㎝で平均 64㎝、深さは確認面から平均 43㎝である。底面は丸味を持ち断面は「U」字状である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。柱痕が認められ、底面より更に 10㎝程掘り込む。柱痕並びはほぼ一直線に並ぶ。覆土は褐色粘質土で黄褐色粘質土塊を含み、水平堆積で人為的な堆積状態を示している。

遺物出土状況は P10 から須恵器甕片のみで他は混入品の弥生土器細片であった。

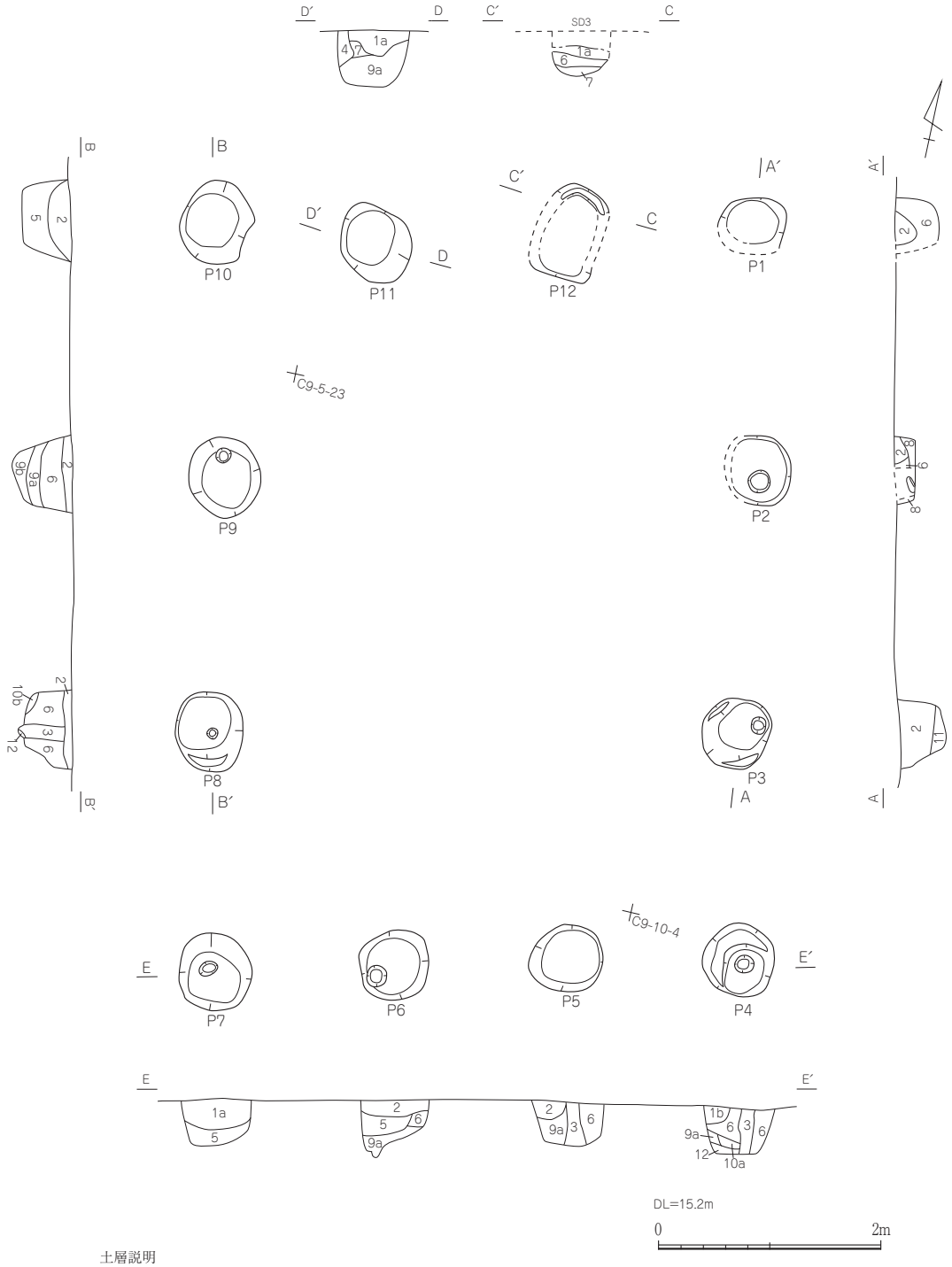
所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。



土層説明

1　黒色土
2　黒褐色土　粒状明褐色土含む、柱痕
3　黒色土
4　暗褐色土　灰色混入
5　黒褐色土
6　暗褐色土
7　黒褐色土　灰色土混入、柱痕
8　褐色土　黒色ブロック含む
9　黒褐色土
10　暗褐色土
11 a 黒褐色土
11 b 黒褐色土
12 a 黒褐色土
12 b 黒褐色土
13　黒褐色土
14 a 暗褐色土
14 b 暗褐色土
15 a 黒色土
15 b 黒色土
16 a 黒褐色土
16 b 黒褐色土
17　黒褐色土
18　黒色土
19　黒色土　地山ブロック（黄褐色）多量含む
20　暗褐色土
21 a 黒褐色土
21 b 黒褐色土　地山混入
21 c 黒褐色土　地山混入

図 3-2　SB1 遺構図



土層説明

1 a 暗褐色土	8　褐色土
1 b 暗褐色土	9 a 暗褐色土
2　褐色土	9 b 暗褐色土　黄褐色小ブロック含む
3　褐色土　柱痕	10 a 黄褐色土　暗褐色小ブロック少量含む
4　褐灰色土	10 b 黄褐色土　褐色小ブロック少量含む
5　暗褐色土	11　黄褐色土
6　褐色土	12　黄褐色土　地山
7　黒褐色土	

図 3-3　SB2 遺構図

SB3(図 3-4)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-23 他　**切り合い関係**；SB2 に切られる、ST10、SK12・13 を切る

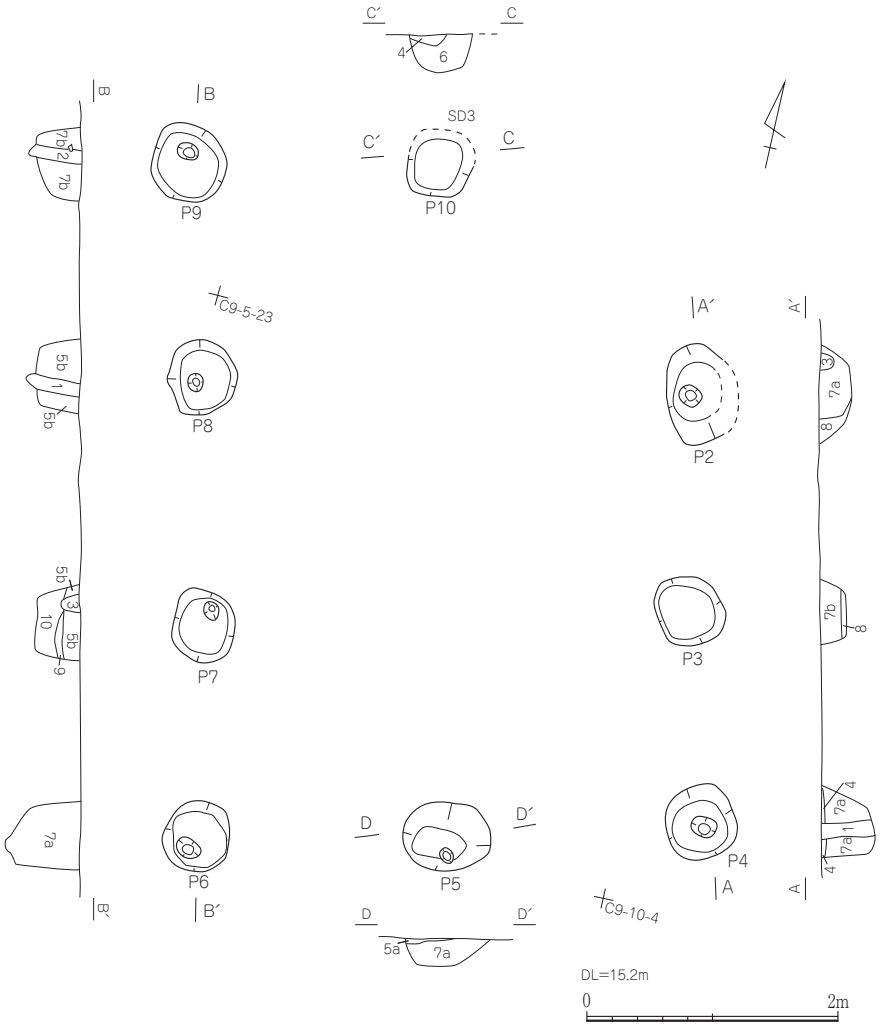
時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-12° -W

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 5.6m ×梁間 4.1m　柱間距離 桁行 1.72 ～ 1.92m(平均 1.79m) ×梁間 1.97 ～ 2.09m(平均 2.02m)　面積 22.96㎡

柱穴数；(9)　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.58m ×深さ平均 0.34m

覆土；黒褐色粘質土

出土遺物；弥生土器細片



土層説明

1　黒褐色土　粒状黄褐色小ブロック含む、柱痕
2　黒色土　粒状黄褐色小ブロック含む、柱痕
3　暗褐色土　粒状黄褐色小ブロック含む、柱痕
4　暗褐色土
5 a 黒褐色土
5 b 黒褐色土
6　黒褐色土
7 a 黒色土
7 b 黒色土
8　黒褐色土
9　褐色土
10　暗褐色土　帯状黄褐色大ブロック含む

図 3-4　SB3 遺構図

所見；Ⅷ BE 区の中央部に位置し、グリッドは C9-5-22、C9-5-23 他に跨がる。ほぼ同時期の SB2 と重複するように構築されており、本掘立柱建物跡が古い。SB2 とは建て替えの関係にあった可能性が強い。桁行 3 間 5.6m、梁間 2 間 4.1m の南北棟である。北列の柱穴は近世の SD3 に部分的に壊され、北東隅は検出できていない。柱穴形状は円形で最小径 50㎝から最大径 68㎝で平均 58㎝、深さは確認面から平均 34㎝である。底面は丸味を持ち断面は「U」字状である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。柱痕が認められ、底面より更に 10㎝弱程掘り込む。柱痕並びはほぼ一直線に並ぶ。覆土は黒褐色粘質土で黄褐色粘質土塊を含み、水平堆積で人為的な堆積状態を示している。

遺物出土状況は混入品の弥生土器細片のみであった。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。

SB4(図 3-5、21)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-13 他　**切り合い関係**；SK23 を切る、SD4・11・12 に切られる

時期；古墳後期末　**主軸方向**；N-18° -W

規模；桁行 4 間×梁間 2 間　桁行 7.6m ×梁間 3.8m　柱間距離 桁行 1.84 ～ 2.01m(平均 1.92m) ×梁間 1.85 ～ 1.94m(平均 1.88m)　面積 28.9㎡

柱穴数；12　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.67m ×深さ平均 0.44m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏身、弥生土器細片

所見；Ⅷ BE 区の中央部南に位置し、グリッドは C9-10-7、C9-10-13 他に跨がる。周辺には SB 2・3・8 が隣接する。桁行 4 間 7.6m、梁間 2 間 3.8m の南北棟である。4 間×２間のものはⅧ区では本例のみである。N-18° -W で西に振り、南側の SB8 とは 90° の角度差である。柱穴形状は円形で、径平均は 67㎝、深さ平均 44㎝である。柱痕も検出しており径 13㎝程度で、底面より更に５㎝程度掘り込まれている。柱穴覆土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊が混入する。堆積状況は梁の P6、P12 は浅く、ほぼ単一層である。他のものについては人為的に埋め戻しを行ったと考えられ、水平堆積となるものと、柱痕と埋め土の２層のみの覆土となるものに分かれる。

所属時期は出土遺物、規模からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 3-21 №.1)

№.1 は須恵器坏身である。

SB5(図 3-6、21)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-12 他　**切り合い関係**；ST14・17 を切る、SX50、SD8・9 に切られる

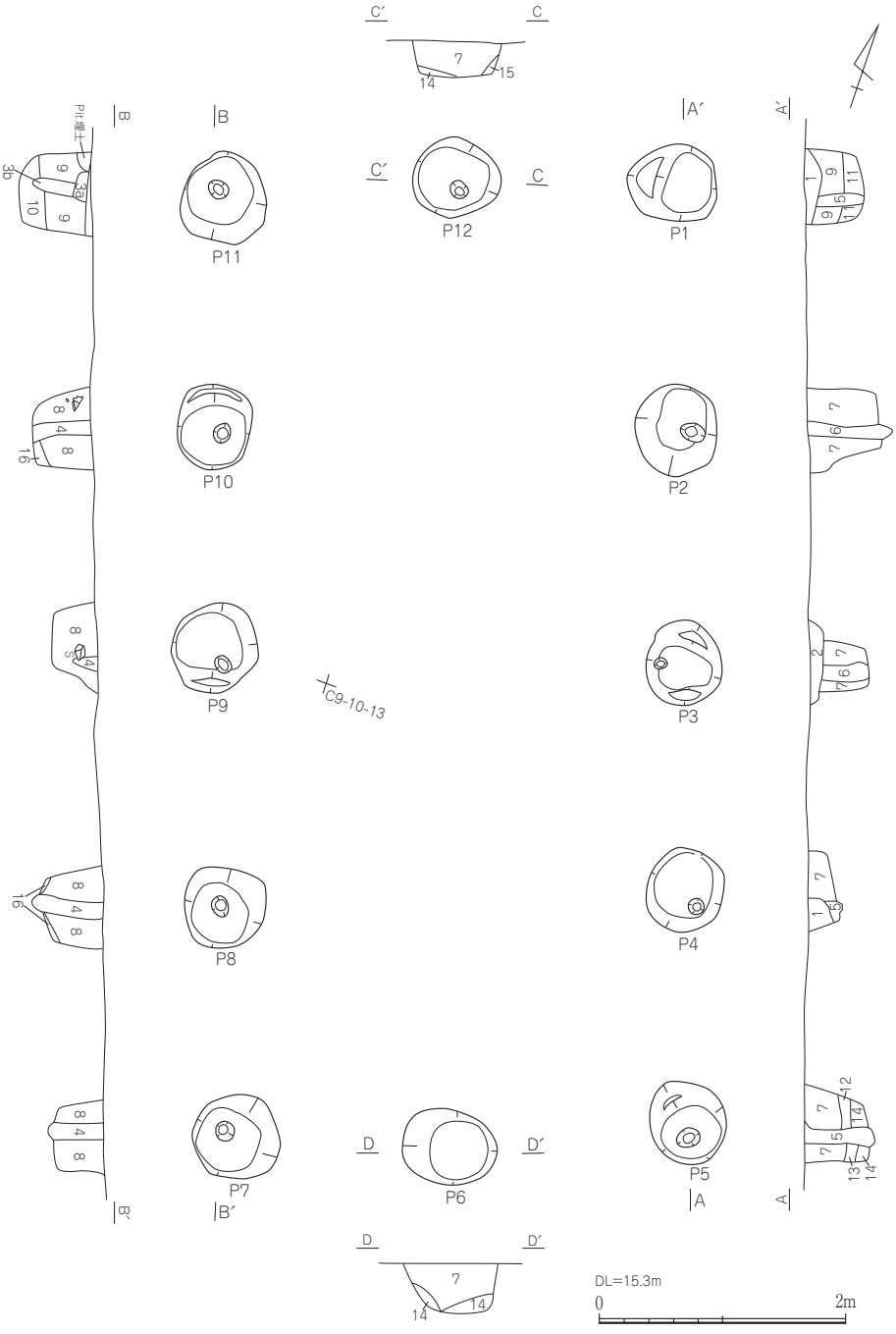
時期；古墳後期　**主軸方向**；N-77° -W

規模；桁行 4 間×梁間 3 間　桁行 8.56m ×梁間 5.1m　柱間距離 桁行 1.95 ～ 2.40m(平均 2.16m) ×梁間 1.40 ～ 1.86m(平均 1.59m)　面積 43.7㎡

柱穴数；14　**柱形状**；方形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.88m ×深さ平均 0.60m

覆土；暗褐色粘質土

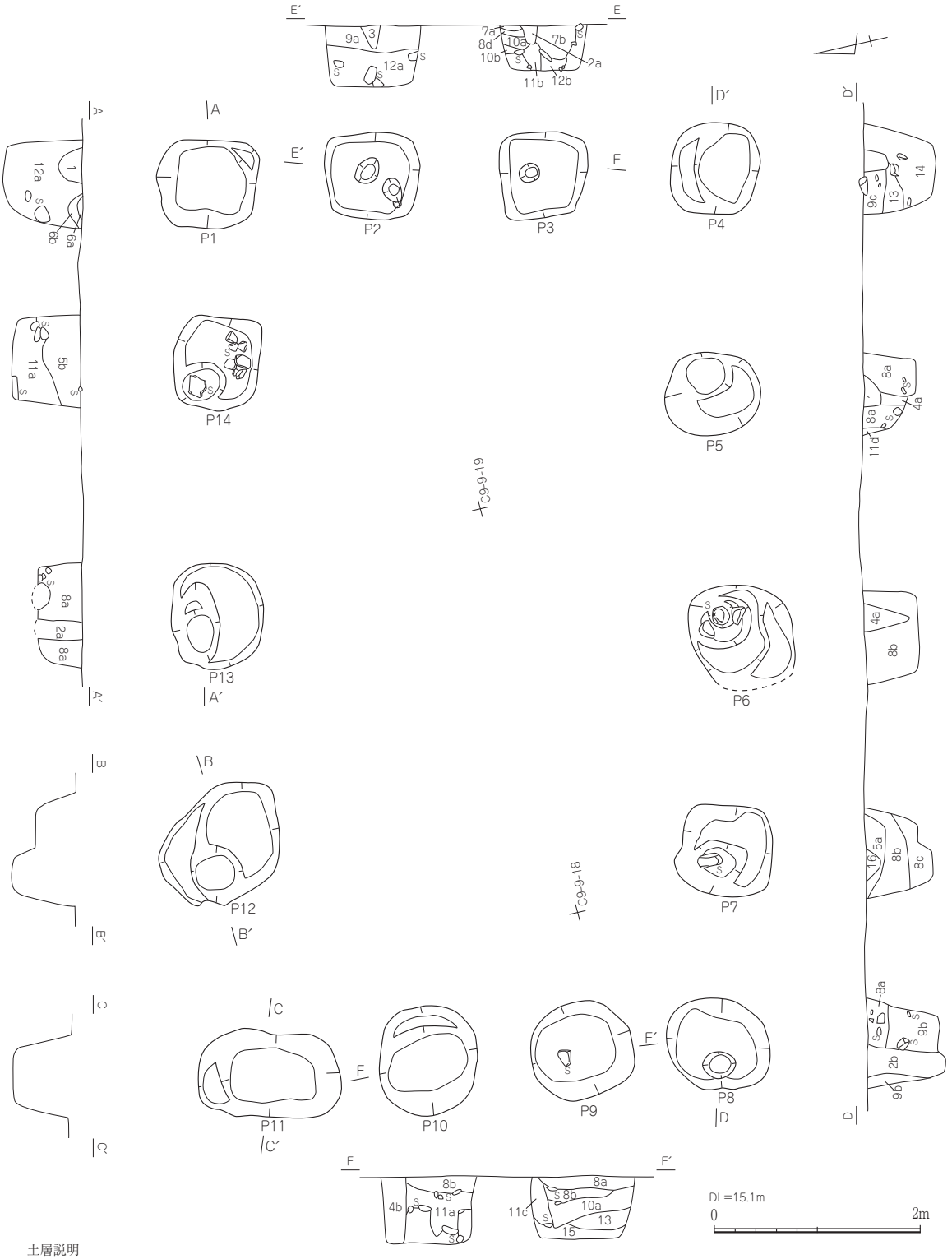
出土遺物；須恵器坏身、壺、土師器盤



土層説明

1　褐色土
2　暗褐色土
3 a 黒褐色土
3 b 黒褐色土
4　黒褐色土　黄褐色ブロック多量含む、柱痕
5　褐色土　黄褐色ブロック含む、柱痕
6　暗褐色土　柱痕
7　暗褐色土
8　黒褐色土
9　褐色土
10　黒色土　ガラス質、火山灰
11　暗褐色土
12　暗褐色土　黄褐色中ブロック含む
13　黄褐色土　暗褐色ブロック含む
14　暗褐色土
15　にぶい黄褐色土　黄褐色ブロック混入
16　褐色土

図 3-5　SB4 遺構図



土層説明

1　黄褐色土　暗褐色土混入
2 a 暗褐色土
2 b 暗褐色土　黄褐色小ブロック、小礫多量混入
3　黒褐色土
4 a 褐色土
4 b 褐色土　黄褐色小ブロック多量含む
5 a 暗褐色土　黄褐色ブロック下部に多量含む
5 b 暗褐色土
6 a 暗褐色土
6 b 暗褐色土
7 a 褐色土　黄褐色小ブロック含む
7 b 褐色土　礫混入
8 a 黒褐色土　礫混入
8 b 黒褐色土
8 c 黒褐色土　黄褐色大ブロック含む
8 d 黒褐色土
9 a 黄褐色土
9 b 黄褐色土　暗褐色土混入、小～大礫多量含む
9 c 黄褐色土　褐色土、小～大礫多量混入
10 a 褐色土
10 b 褐色土
11 a 暗褐色土　小～大礫混入
11 b 暗褐色土　礫混入
11 c 暗褐色土　にぶい黄褐色土多量混入
11 d 暗褐色土
12 a 褐色土　小～大礫多量混入
12 b 褐色土　小～大礫多量混入
13　黒色土
14　黄褐色土　褐色土、小～大礫混入
15　黄褐色土　黒褐色土、中礫多量混入
16　黒褐色土　SD9 覆土

図 3-6　SB5 遺構図

所見；Ⅷ BW 区とⅧ BE 区の両方に跨がる。グリッドは C9-9-12、C9-9-13 他に跨がっている。近くには SB6 が隣接しているものの、SB6 は近世である。４m 程西側に SB9 があるものの、規模、方位が違っている。弥生末から古墳初頭の ST14、古墳時代後期の竈付き ST17 を切っているものの、他の SD 等には全て切られている。桁行４間 8.56m、梁間３間 5.1m で東西棟である。Ⅷ区では最大規模の掘立柱建物跡である。棟方位は N-77° -W である。柱穴形状は方形か丸味のある方形である。柱穴の規模は 88㎝で大型で、深さにはばらつきがあり浅いもので 42㎝、深い P1、P10 は 78㎝を測る。柱痕は認められ、径 20㎝強である。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊を多量に含む。水平堆積を見せるもの、柱痕と埋め戻しの単一層からなるものに分かれる。また中礫で根固めを行うものも認められる。

遺物出土状況は P10 から須恵器坏蓋が２点、他の柱穴跡からも須恵器坏、蓋が出土している。

所属時期は出土遺物、規模からして古墳時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 3-21 №１～ 6)

№１から４は須恵器坏身である。５は壺の胴部上半の破片である。６は土師器盤の底部と考えられる。

SB6(図 3-7、21)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-10 他　**切り合い関係**；ST14、SK25、SD5・15 を切る

時期；近世　**主軸方向**；N-76° -W

規模；桁行４間×梁間１間　桁行 8.5m ×梁間 3.8m　柱間距離 桁行 1.98 ～ 2.48m(平均 2.10m) ×梁間 3.8m　面積 32.3㎡

柱穴数；10　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.42m ×深さ平均 0.50m

出土遺物；菊皿

所見；Ⅷ BE 区に位置し、グリッドは C9-9-10、C9-10-11 他に跨がる。桁行４間 8.5m、梁間１間 3.8m である。東西棟で方位は N-76° -W である。桁行の柱間距離はほぼ２m か２m 強である。北列の P9 と P10 間がやや広く 2.4m、南列の P2 と P3 が 2.3m である。柱穴形状は円形で、径平均で 42㎝、深さ平均 50㎝である。柱痕のあるものもあり、20㎝弱である。

P8 より近世陶磁器№１が出土しており、本掘立柱建物跡は単独で成り立っているものではなく、北側に展開している SB7 と近世屋敷跡を構成する建物跡の一部と考えられる。SB7 の軸方向は N-75° -W でほぼ同一方位を採る。また屋敷溝である SD8・9 とも 90° の方位違いの関係にあることから、屋敷跡の一部である。

所属時期は出土遺物、規模からして近世である。

出土遺物 (図 3-21 №１)

№１は陶磁器皿である。

SB7(図 3-8)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-4-25 他　**切り合い関係**；ST51、SD15 を切る

時期；近世　**主軸方向**；N-75° -W

規模；桁行３間×梁間２間　桁行 10.6m ×梁間 6.6m　柱間距離 桁行 2.7 ～ 4.0m(平均 3.5m) ×梁間

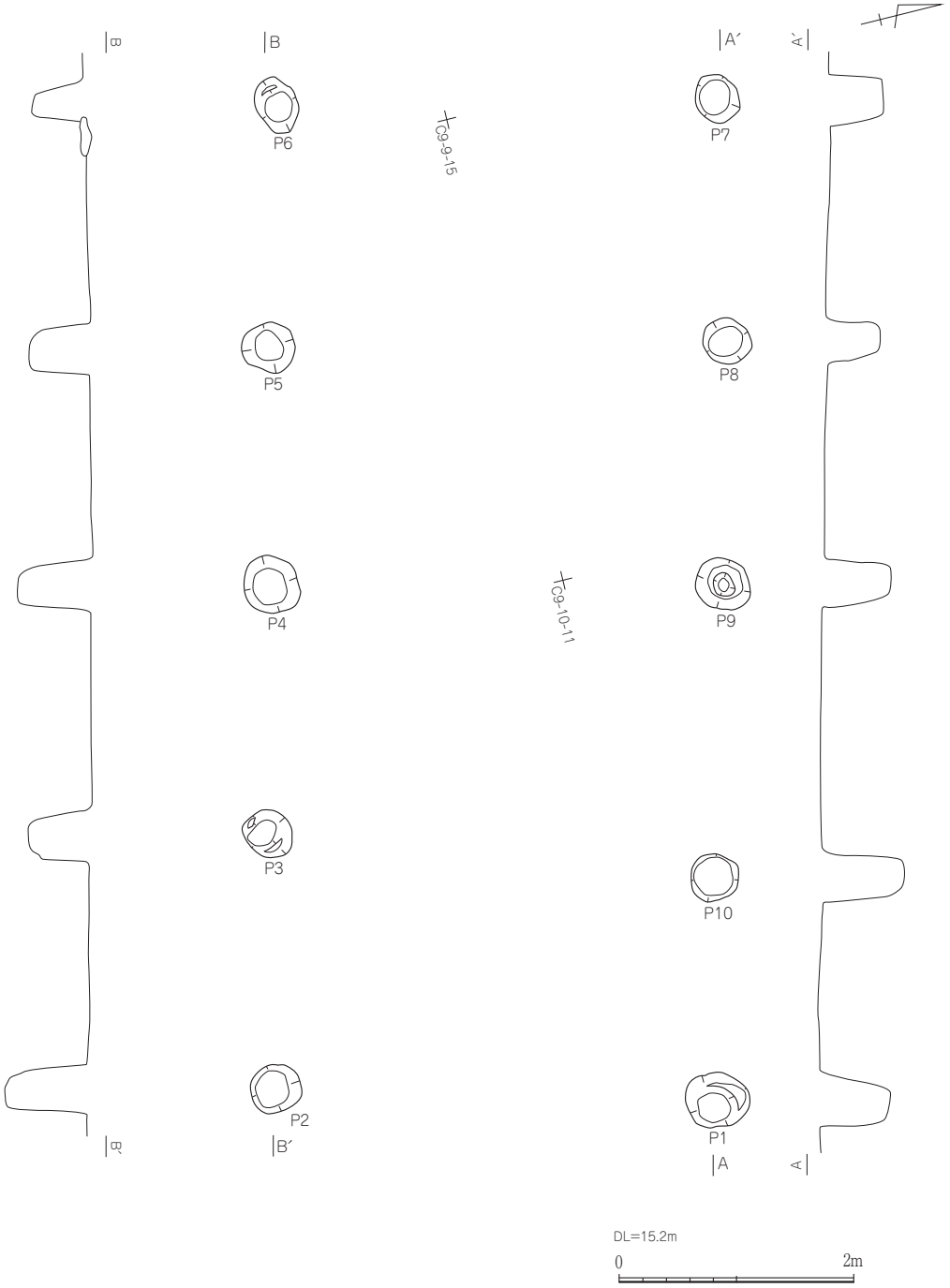


図 3-7　SB6 遺構図

2.7 ～ 3.4m(平均 3.1m)　面積 69.96㎡

柱穴数；12　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.45m ×深さ平均 0.42m

覆土；黒褐色粘質土

出土遺物；－

所見；Ⅷ BE 区の西寄りに位置し、C9-4-25 グリッド他に大きく展開している。桁行 3 間 10.6m、梁間 2 間 6.6m で大きい。柱穴形状は円形で、径平均 45㎝、深さ平均 42㎝程度である。柱痕が認められるもの、礫の入るものが認められる。覆土は単純なものが多く、黒褐色粘質土の単一層のも

のが比較的多かった。

所属時期は近世と考えられる。屋敷溝と考えられるSD8・9に囲まれた屋敷跡で、それも母屋の可能性が強い。

SB8(図3-9)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-14 他　**切り合い関係**；－

時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-72°-E

規模；桁行 (3) 間×梁間－　桁行 (6.2)m ×梁間－　柱間距離 桁行 1.86 ～ 2.20m(平均 2.04m) ×梁間－ (平均－)　面積－

柱穴数；(4)　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.52m ×深さ平均 0.38m

覆土；黒色粘質土

出土遺物；－

所見；Ⅷ BE 区の南端に位置し、グリッドは C9-10-14、C9-10-18 他に跨がる。調査区外に広がり、調査区内で検出した柱穴は 4 本で 3 間のみである。おそらく東西棟で検出した柱穴は桁行と考えられ、桁行 6.2m である。軸方位は N-72°-E である。柱穴形状は円形で、径平均 52㎝、深さ平均 38㎝である。検出した位置が地境で上層は地境の溝が掘られており、柱穴径、深さは残欠である。柱痕は認められた。覆土は複雑な堆積のものは認められず、黒色粘質土か黒褐色粘質土の水平堆積か単一層である。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。

SB9(図3-10、21)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-15 他　**切り合い関係**；SD39 を切る、SD25・28・40 に切られる

時期；古代？　**主軸方向**；N-89°-W

規模；桁行 2 間×梁間 2 間　桁行 3.9m ×梁間 2.8m　柱間距離 桁行 1.82 ～ 2.15m(平均 1.97m) ×梁間 1.35 ～ 1.48m(平均 1.41m)　面積 10.9㎡

柱穴数；8　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.73m ×深さ平均 0.49m

覆土；黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏蓋、須恵器甕片

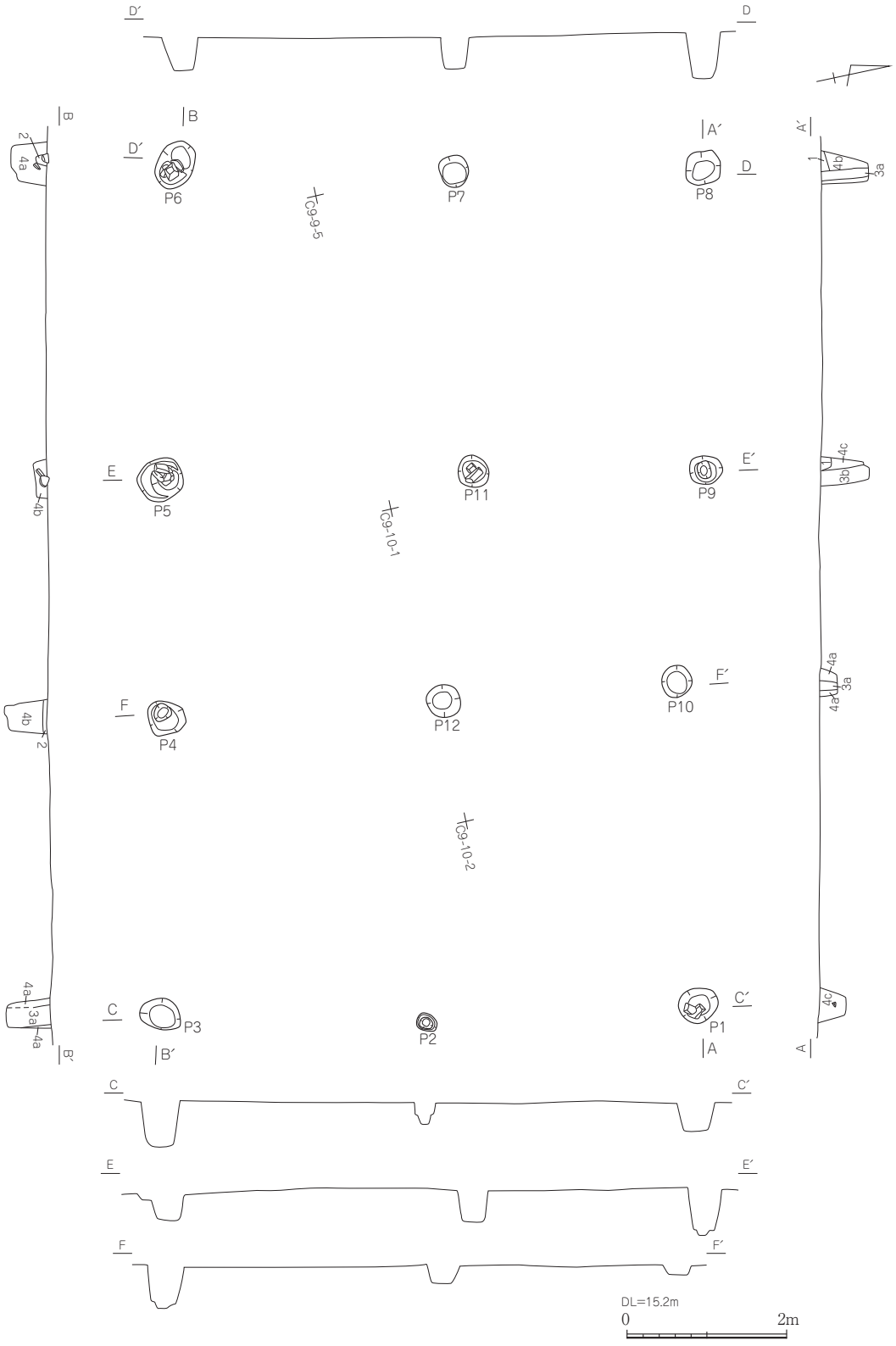
所見；Ⅷ BW 区のやや東寄りに位置し、グリッドは C9-8-15、C9-9-11 他に跨がる。桁行、梁間共に 2 間で東西の列が長く桁行 3.9m、梁間 2.8m である。軸方位はほぼ真東を向き N-89°-W である。柱穴形状は円形で径平均 73㎝、深さ平均 49㎝で比較的大きい。柱痕も検出している。覆土は水平堆積のものが多く、黒褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊が混じる。

遺物出土状況は P5 から須恵器坏が出土している。また P4 からは須恵器甕片が出土した。

所属時期は出土遺物、規模からして古代か。

出土遺物 (図 3-21 №1)

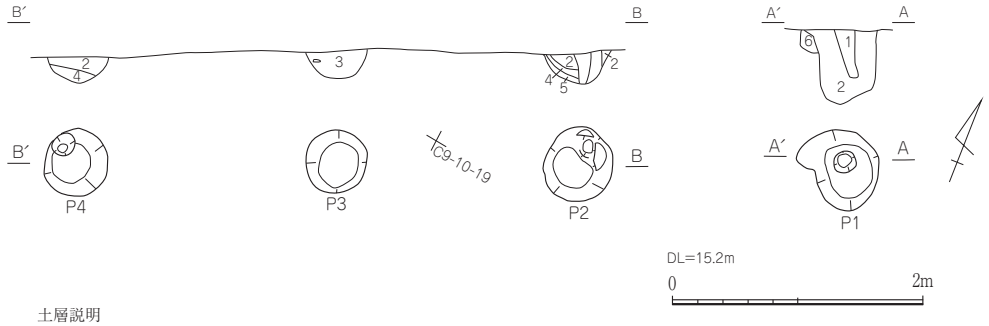
№1 は須恵器坏身の底部である。



土層説明

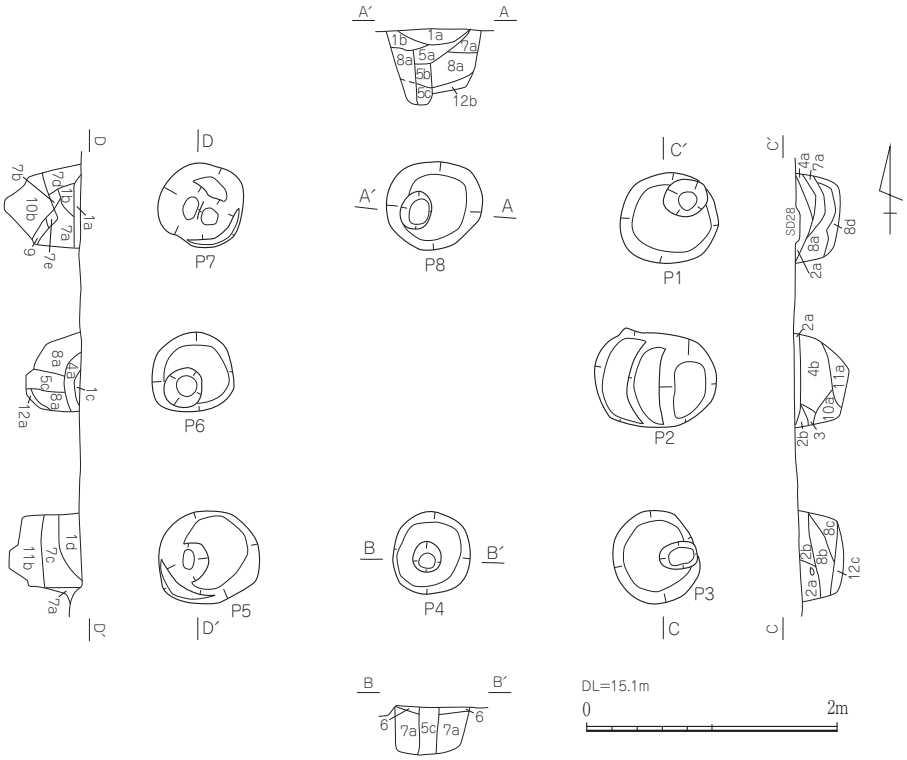
1　黒褐色土
2　暗褐色土
3 a 黒褐色土
3 b 黒褐色土　黄褐色ブロック多量含む
4 a 黒褐色土
4 b 黒褐色土　黄褐色ブロック多量含む
4 c 黒褐色土

図 3-8　SB7 遺構図



土層説明
1　黒褐色土　粒状褐色小ブロック含む、柱痕
2　黒色土
3　黒色土　小礫混入
4　黒色土　黄褐色小ブロック多量混入
5　黒色土
6　にぶい黄褐色土

図 3-9　SB8 遺構図



土層説明
1 a 暗褐色土
1 b 暗褐色土
1 c 暗褐色土　黄褐色土多量混入
1 d 暗褐色土　褐色土混入
2 a 黒褐色土
2 b 黒褐色土
3　暗褐色土
4 a 黒色土
4 b 黒色土
5 a 暗褐色土
5 b 暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
5 c 暗褐色土　粒状黄褐色土混入
6　暗褐色土　黄褐色ブロック多量混入
7 a 黒褐色土
7 b 黒褐色土
7 c 黒褐色土　中央部に黄褐色土混入
7 d 黒褐色土　褐色中ブロック含む
7 e 黒褐色土　褐色小ブロック含む
8 a 黒色土
8 b 黒色土
8 c 黒色土　黄褐色土含む
8 d 黒色土　黄褐色土多量混入
9　褐色土　暗褐色土混入
10 a 暗褐色土　黄褐色土・小礫多量混入
10 b 暗褐色土　粒状褐色小ブロック混入
11 a 黒褐色土　黄褐色土・小礫多量混入
11 b 黒褐色土　褐色土多量混入
12 a 黄褐色土　黒褐色土混入
12 b 黄褐色土　黒色土多量混入
12 c 黄褐色土

図 3-10　SB9 遺構図

SB10(図 3-11、21)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-21 他　**切り合い関係**；ST23 を切る、SD35 に切られる

時期；古墳後期　**主軸方向**；N-67° -W

規模；桁行 2 間×梁間 2 間　桁行 3.2m ×梁間 2.5m　柱間距離 桁行 1.41 ～ 1.82m(平均 1.60m) ×梁間 1.28 ～ 1.32m(平均 1.27m)　面積 8㎡

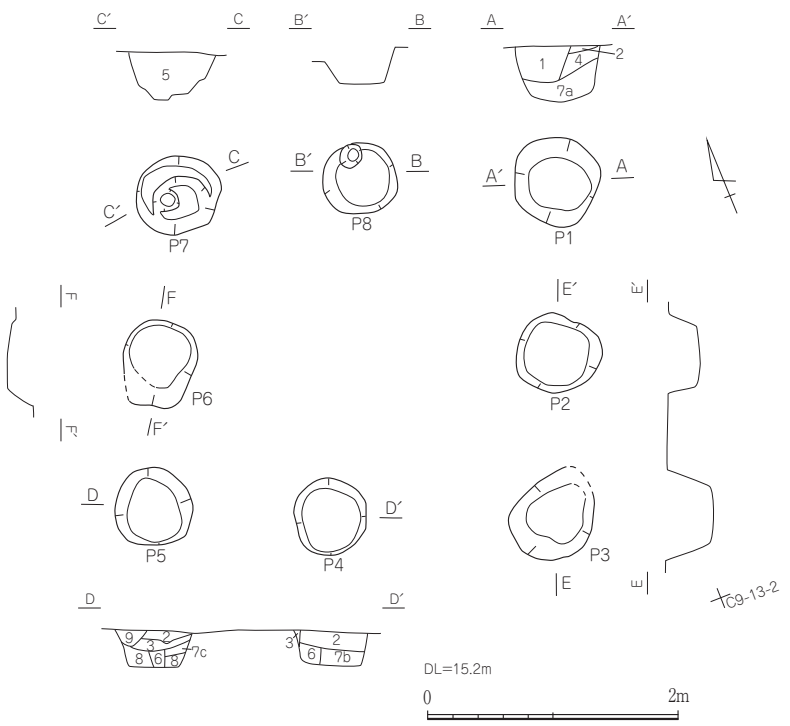
柱穴数；8　**柱形状**；円形

柱痕；有　**柱穴規模**；径平均 0.64m ×深さ平均 0.32m

覆土；黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器甕

所見；Ⅷ BW 区の西端に位置し、グリッドは C9-8-16、C9-8-21 他に跨がる。古墳時代後期の竈付き竪穴建物跡 ST23 の一部を壊している。



土層説明
1　黒褐色土　褐色小ブロック多量混入
2　黒褐色土
3　暗褐色土　黄褐色ブロック混入
4　黒色土
5　暗褐色土　黒色・黒褐色・黄褐色小ブロック多量含む
6　黒褐色土
7 a 黒褐色土　褐色土多量混入
7 b 黒褐色土　黄褐色ブロック混入
7 c 黒褐色土
8　暗褐色土　黄褐色ブロック混入
9　黒褐色土　Pit 覆土

図 3-11　SB10 遺構図

桁行、梁間共に 2 間で東西列が長く、桁行 3.2m、梁間 2.5m である。軸方位は N-67° -W である。柱穴形状は円形で径平均 64㎝、深さ平均 32㎝である。間数、規模等は比較的 SB9・11 に似る。柱痕も検出している。覆土は黒褐色粘質土が主体で黄褐色粘質土塊が混入し、乱れた層位を示している。

所属時期は判然としないが古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 3-21 №1)

№1 は須恵器甕の口頸部と考えられる。

SB11(図 3-12)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-12 他　**切り合い関係**；C9-7-17P8 を切る

時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-73° -W

規模；桁行 2 間×梁間 2 間　桁行 3.6m ×梁間 3.4m　柱間距離 桁行 1.64 ～ 1.96m(平均 1.78m) ×梁間 1.62 ～ 1.84m(平均 1.70m)　面積 12.24㎡

柱穴数；8　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.68m ×深さ平均 0.36m

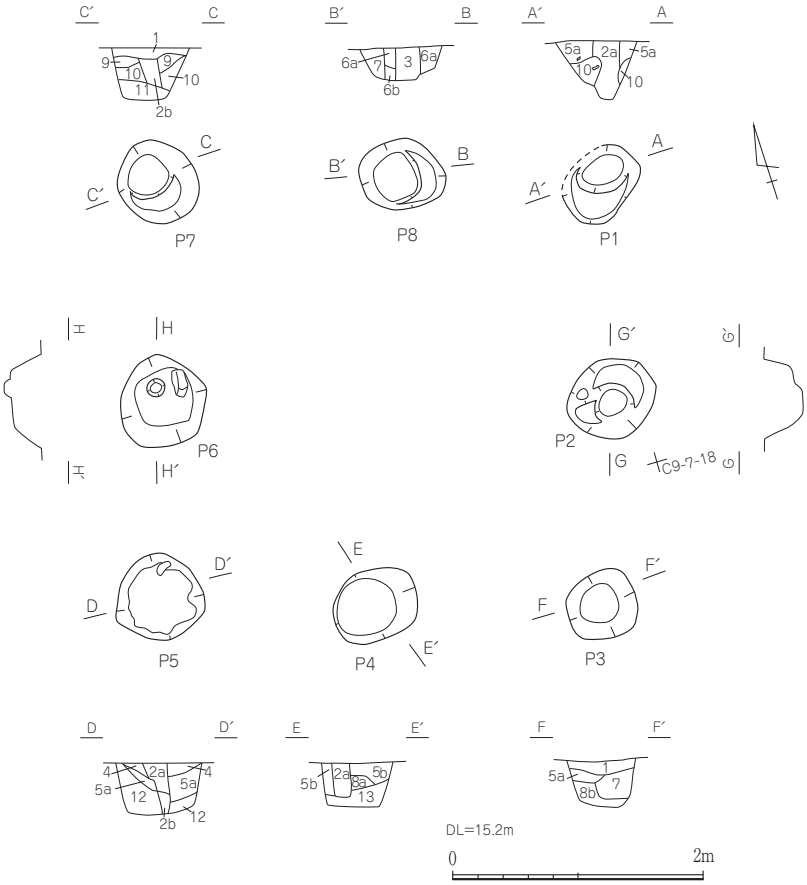
覆土；黒褐色粘質土

出土遺物；－

所見；Ⅷ AE 区の東寄りに位置し、グリッドは C9-7-12、C9-7-17 他に跨がる。桁行、梁間共に 2

間で東西列が若干長く、桁行 3.6m、梁間 3.4m である。軸方位は N-73° -W である。柱穴形状は円形で径平均 68㎝、深さ平均 36㎝である。間数、規模等は SB9・10 に比較的似る。柱痕も検出している。覆土は黒褐色粘質土が主体で黄褐色粘質土塊が混入し、人為的な埋め戻しを行った土層を示しているものが多い。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。



土層説明
1 黒褐色土
2 a 黒褐色土 柱痕
2 b 黒褐色土 柱痕
3 褐色土
4 黒褐色土
5 a 褐色土
5 b 褐色土 黄色ブロック多量含む
6 a 黒褐色土
6 b 黒褐色土
7 黒褐色土
8 a 黒色土
8 b 黒色土 黄色土混入
9 黄色土 黒色土混入
10 黒褐色土 黄色ブロック多量含む
11 褐色土
12 黄褐色土
13 黄色土 褐色土混入

図 3-12 SB11 遺構図

SB12(図 3-13)

調査区；Ⅷ AE **グリッド**；C9-6-13 他

切り合い関係；ST33 を切る

時期；古墳～古代

主軸方向；N-63° -W

規模；桁行 1 間以上×梁間 2 間？ 桁行 (1.84)m × 梁間 (2.76)m 柱間距離 桁行 1.84m(平均 1.84m) ×梁間 1.20 ～ 1.56m(平均 1.38m) 面積 －

柱穴数；(4) **柱形状**；円形 **柱痕**；有 **柱穴規模**；径平均 0.68m ×深さ平均 0.37m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；－

所見；Ⅷ AE 区の北端に位置し、グリッドは C9-6-13 他である。調査区外に広がる為に全貌は不明である。弥生時代後期後半の竪穴建物跡 ST33 を切る。調査区内で検出した柱穴は 4 基で桁行 1 間、梁間 2 間のみである。東西列の P4 と P3 の柱間が 1.8m と長く東西棟と考えられる。軸方位は N-63° -W である。SB9・10・11 と近似する掘立柱建物跡の可能性がある。柱穴形状は僅かに隅丸方形に近い円形である。規模は径平均 68㎝、深さ平均 37㎝である。柱痕が認められる。覆土は暗褐色粘質土が主体で黄褐色粘質土塊が混入し、水平堆積である。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。

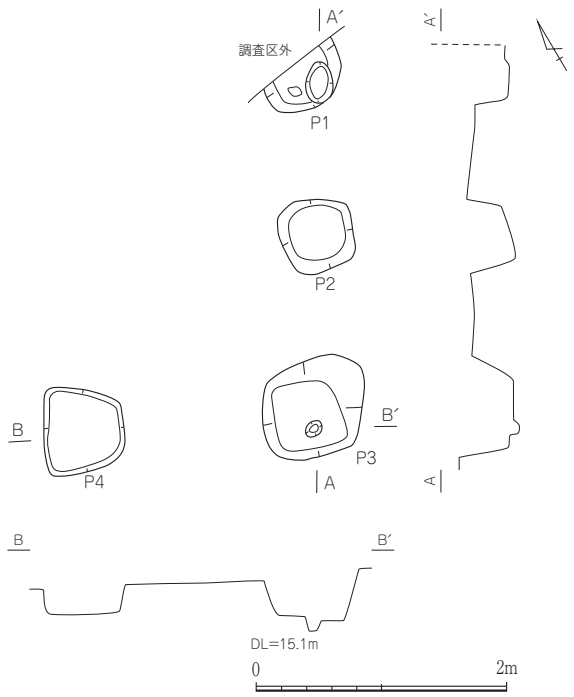


図 3-13　SB12 遺構図

SB13(図 3-14、21)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-23 他　**切り合い関係**；ST45、SB15、SX35 を切る、SD99・100 に切られる

時期；古墳後期　**主軸方向**；N-80° -W

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 5.2m ×梁間 3.4m　柱間距離 桁行 1.58 ～ 2.00m(平均 1.77m) ×梁間 1.40 ～ 1.80m(平均 1.65m)　面積 17.68㎡

柱穴数；10　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.71m ×深さ平均 0.42m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏身

所見；Ⅷ AW 区に位置し、グリッドは C8-10-23、C8-10-24 他に跨がる。弥生末から古墳初頭の ST45 を切り、SB15 も切るものの、SB15 とは時期的には近いと考えられる。桁行 3 間 5.2m、梁間 2 間 3.4m である。東西棟で軸方位は N-80° -W である。柱穴形状は円形で、径平均 71㎝、深さ平均 42㎝でしっかりした掘り方を有する。P1 は SB15P1、P7 は SB15P8 と重なっている。柱痕はほとんどの柱穴で認められている。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊が混入し、水平堆積をしているものが多く、人為的な埋め戻しが行われている。

遺物出土状況は P5 から須恵器坏身が出土している。

所属時期は出土遺物、規模からして古墳時代後期と考えられる。

出土遺物 (図 3-21 №1)

№1 は須恵器坏身である。

SB14(図 3-15、21)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-6 他　**切り合い関係**；SD99・100・106 に切られる

時期；古代　**主軸方向**；N-24° -E

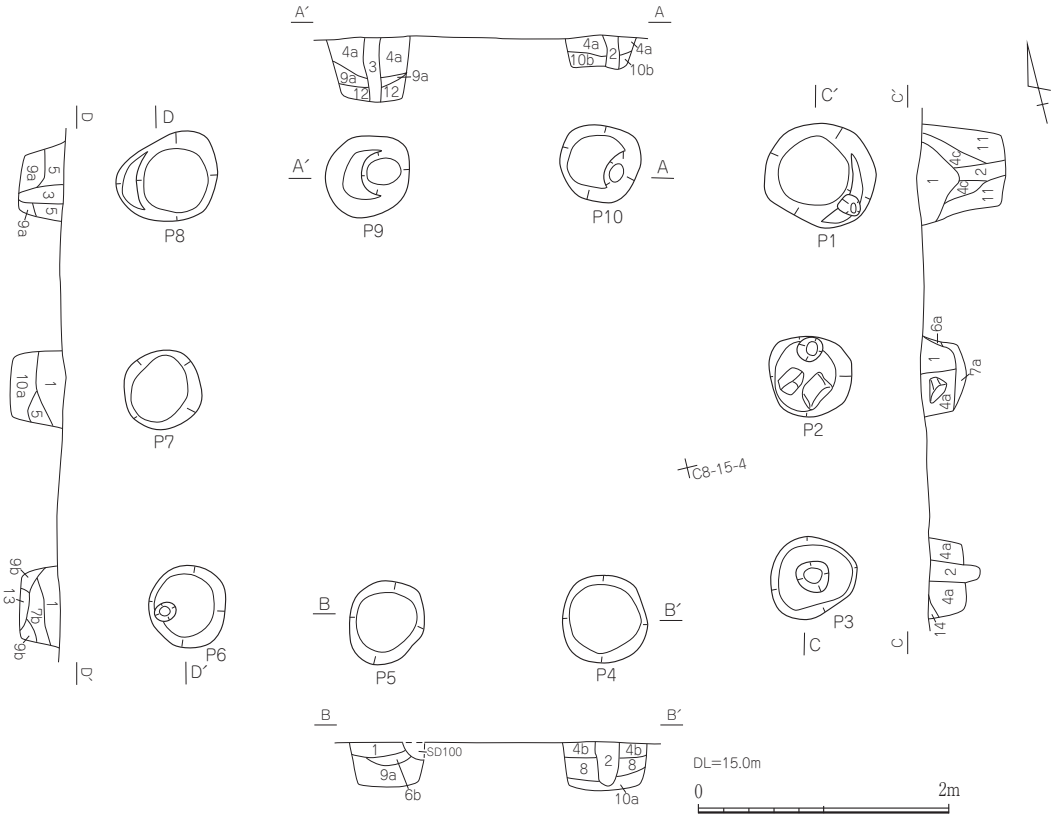
規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 4.5m ×梁間 3.4m　柱間距離 桁行 1.34 ～ 1.54m(平均 1.47m) ×梁間 1.46 ～ 1.78m(平均 1.64m)　面積 15.3㎡

柱穴数；10　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.68m ×深さ平均 0.36m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；土製品器台、緑釉陶器細片

所見；Ⅷ AW 区の西側部に位置し、グリッドは C8-15-6、C8-15-7 他に跨がる。SD99・100 に切られる。北側には SB13･15、南側には SB16 が配置している。南北棟で桁行 3 間 4.5m、梁間 2 間 3.4m で軸方位は N-24° -E で SB16 に若干近い方位を採る。柱穴形状は円形で柱穴規模は径平均で 68㎝、深さ平均 36㎝で掘り方はしっかりしている。柱痕の残るものは少ない。覆土は暗褐色粘質土が主



土層説明

1　暗褐色土　黄褐色粒一面に含む
2　暗褐色土　柱痕
3　黒褐色土　黄褐色粒含む、柱痕
4 a 暗褐色土　黄褐色粒一面に含む
4 b 暗褐色土
4 c 暗褐色土　暗灰褐色土一面に含む
5　黒褐色土　黄褐色粒含む
6 a 暗褐色土
6 b 暗褐色土　黄褐色粒含む
7 a 暗褐色土　黄褐色粒多量含む
7 b 暗褐色土
8　暗褐色土　黄褐色粒含む
9 a 暗灰褐色土　黄褐色粒含む
9 b 暗灰褐色土
10 a 暗褐色土　黄褐色粒含む
10 b 暗褐色土　黄褐色粒多量含む
11　黒褐色土　黄褐色ブロック含む
12　褐灰色土
13　黄褐色土　地山
14　暗褐色土　SD99 覆土

図 3-14　SB13 遺構図

体で黄褐色粘質土塊が多量に混入するものが多く、水平堆積のもの、層位が乱れたものも認められているものの、人為的な埋め戻しを行っている。

P4 から土製品器台、P10 から緑釉陶器と考えられる細片が出土している。

所属時期は出土遺物、規模からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 3-21 №1)

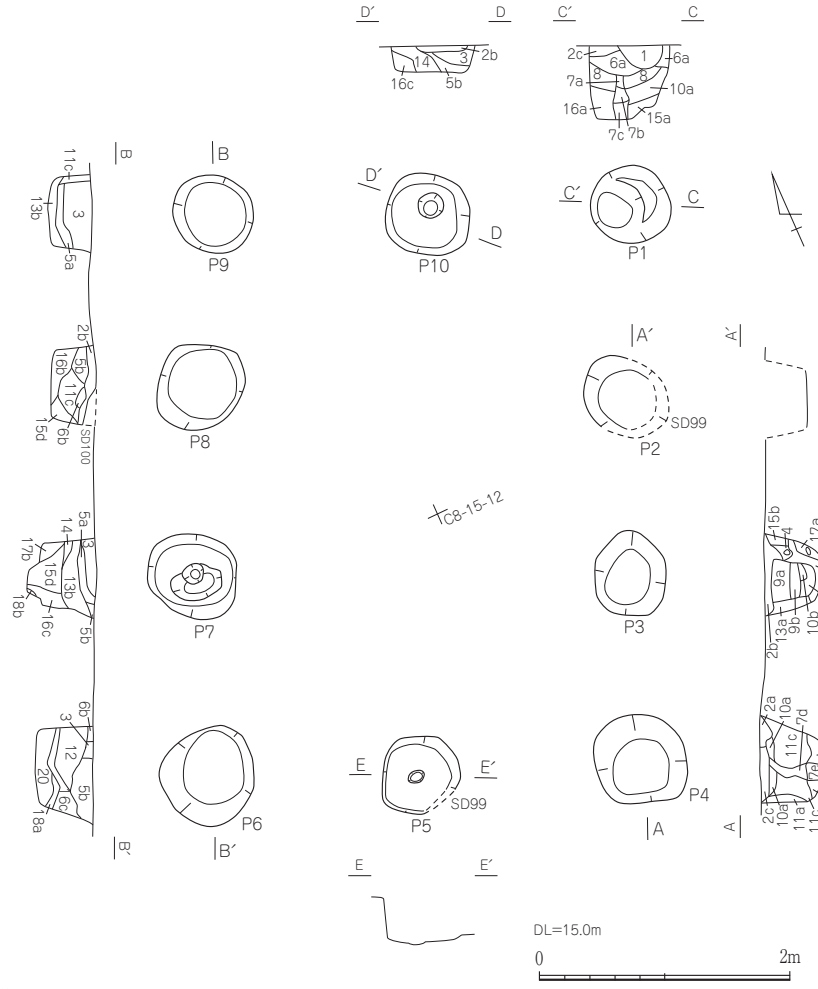
№1 は器台と考えられる。

SB15(図 3-16、21)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-23 他　**切り合い関係**；ST45、SX35 を切る、SB13、SD99・100 に切られる

時期；古墳後期　**主軸方向**；N-82° -E

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 5.8m ×梁間 4.4m　柱間距離 桁行 1.83 ～ 1.96m(平均 1.87m) ×梁間 2.06 ～ 2.36m(平均 2.21m)　面積 25.52㎡



土層説明

1　暗褐色土
2 a 暗褐色土　褐色ブロック混入
2 b 暗褐色土
2 c 暗褐色土
3　暗褐色土
4　褐色土　3～4 ㎝程の礫含む
5 a 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
5 b 暗褐色土
6 a 暗褐色土　褐色・黄褐色ブロック混入
6 b 暗褐色土
7 a 暗褐色土
7 b 暗褐色土
7 c 暗褐色土
7 d 暗褐色土　炭化物含む
7 e 暗褐色土　黄褐色ブロック混入
8　暗褐色土　黄褐色・褐色・黒褐色ブロック混入、土器含む
9 a 暗褐色土　黄褐色ブロック、黒褐色土混入
9 b 暗褐色土　黄褐色ブロック、黒褐色土混入
10 a 黒褐色土
10 b 黒褐色土
11 a 暗褐色土
11 b 暗褐色土　黒褐色土ブロック混入
11 c 暗褐色土　黄褐色・黒褐色ブロック混入
12　にぶい黄褐色土　黒褐色・暗褐色ブロック、黄褐色ブロック多量含む
13 a 黒褐色土
13 b 黒褐色土
14　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量含む
15 a 暗褐色土
15 b 暗褐色土
15 c 暗褐色土
15 d 暗褐色土
16 a 暗褐色土
16 b 暗褐色土　黄褐色ブロック含む
16 c 暗褐色土
17 a 暗褐色土　黄褐色・黒褐色ブロック混入
17 b 暗褐色土
18 a 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
18 b 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
19　褐色土　炭化物・黒褐色ブロック含む
20　にぶい黄褐色土　暗褐色土混入

図 3-15　SB14 遺構図

柱穴数；(8)　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.78m ×深さ平均 0.69m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏身

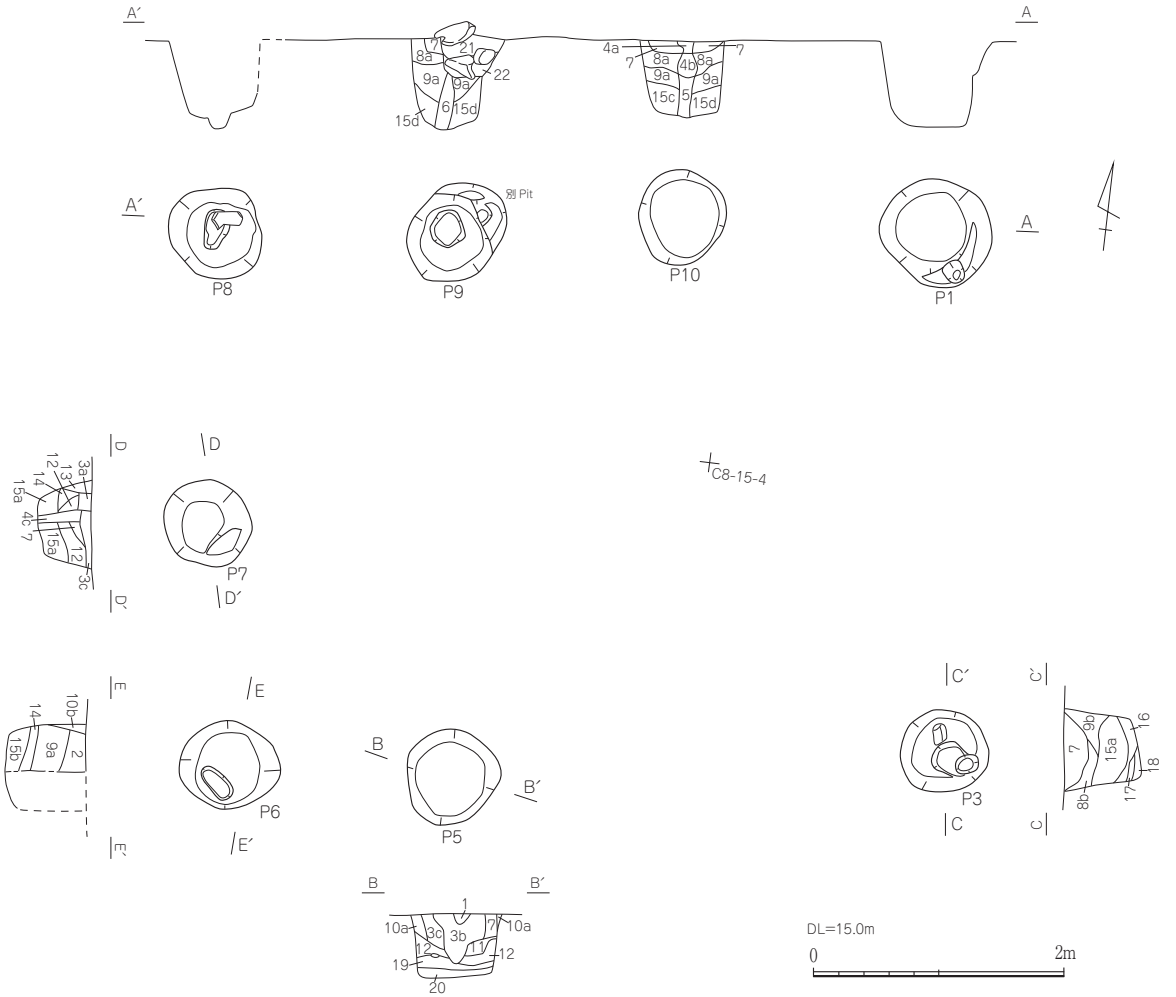
所見；Ⅷ AW 区に位置し、グリッドは C8-10-23、C8-10-24 他に跨がる。弥生末から古墳初頭の ST45 を切り、SB13 に切られるものの、SB13 とは時期的には近いと考えられる。東列の柱穴 1 基が SD99 により壊されて検出できていない。桁行 3 間 5.8m、梁間 2 間 4.4m で SB13 より若干大きい。東西棟で軸方位は N-82° -E である。SB13 は N-80° -W で 18° の方位の違いがある。柱穴形状は円形で、径平均 78㎝、深さ平均 69㎝で SB13 よりも更にしっかりした掘り方を有する。P1 は SB13P1、P8

はSB13P7と重なっている。柱痕はほとんどの柱穴で認められている。P9から大型礫が上層で出土している。近世の柱穴が重複していた可能性が強い。またP10からは須恵器坏身が出土した。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊が多量に混入し、水平堆積をしているものが多く、人為的な版築状に埋め戻しが行われている。

所属時期は出土遺物、規模からして7世紀後半と考えられる。

出土遺物(図3-21 №1)

№1は須恵器坏身である。



土層説明

1　褐色土　黄褐色土多量混入
2　褐色土　暗褐色土混入
3a 黒褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
3b 黒褐色土
3c 黒褐色土
4a 暗褐色土
4b 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
4c 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
5　暗黄灰色土　粒状黄褐色ブロック含む
6　黒褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
7　暗褐色土　土器含む
8a 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、黒褐色ブロック含む
8b 暗褐色土　黄褐色ブロック含む
9a 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、黒褐色ブロック含む
9b 暗褐色土　黄褐色ブロック含む
10a 暗褐色土
10b 暗褐色土
11　黒褐色土
12　褐色土　黄褐色小ブロック多量混入
13　褐色土　黄褐色小ブロック含む
14　暗褐色土
15a 暗褐色土　黄褐色小ブロック含む
15b 暗褐色土　黄褐色土多量混入、小・中礫含む
15c 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量、黒褐色ブロック含む
15d 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量含む
16　にぶい黄褐色土
17　暗褐色土
18　にぶい黄褐色土
19　褐色土　黄褐色小ブロック、暗褐色土混入
20　褐色土
21　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量、土器・礫含む
22　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、礫含む

図3-16　SB15遺構図

SB16(図 3-17、21)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-14-20 他　**切り合い関係**；ST44 を切る、SD99・100・110・115 に切られる

時期；古代　**主軸方向**；N-11° -E

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 7.0m ×梁間 4.7m　柱間距離 桁行 2.14 ～ 2.76m(平均 2.41m) ×梁間 2.00 ～ 2.76m(平均 2.26m)　面積 32.9㎡

柱穴数；10　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.80m ×深さ平均 0.42m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；土師器坏、甕

所見；Ⅷ AW 区の西南部に位置し、グリッドは C8-14-20、C8-14-25 他に跨がる。古墳時代後期の竪穴建物跡 ST44 を切り、SD99 に切られる。南北棟で桁行 3 間 7.0m、梁間 2 間 4.7m である。軸方位は N-11° -E でやや東に振る。柱穴の形状は円形で、径平均 80㎝、深さ平均 42㎝で径が大きい分類に入る。礫の入る柱穴が 4 基認められている。また柱痕の認められるものもあり、覆土は暗褐色粘質土を主体とし黄褐色粘質土塊が多量に混入し、レンズ状堆積となるものが多い。

遺物出土状況は P2 から土師器坏、甕が出土している。P1 から須恵器坏身が出土しているものの混入品と考えられる。

所属時期は出土遺物、規模からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 3-21 №.1 ～ 4)

№.1 は土師器坏、２、３は甕である。４は須恵器坏で混入品と考えられる。

SB18(図 3-18)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-4-16 他　**切り合い関係**；SK42・46 を切る

時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-13° -W

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 4.7m ×梁間 3.7m　柱間距離 桁行 1.35 ～ 1.94m(平均 1.58m) ×梁間 1.66 ～ 1.96m(平均 1.82m)　面積 17.39㎡

柱穴数；10　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.68m ×深さ平均 0.34m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；－

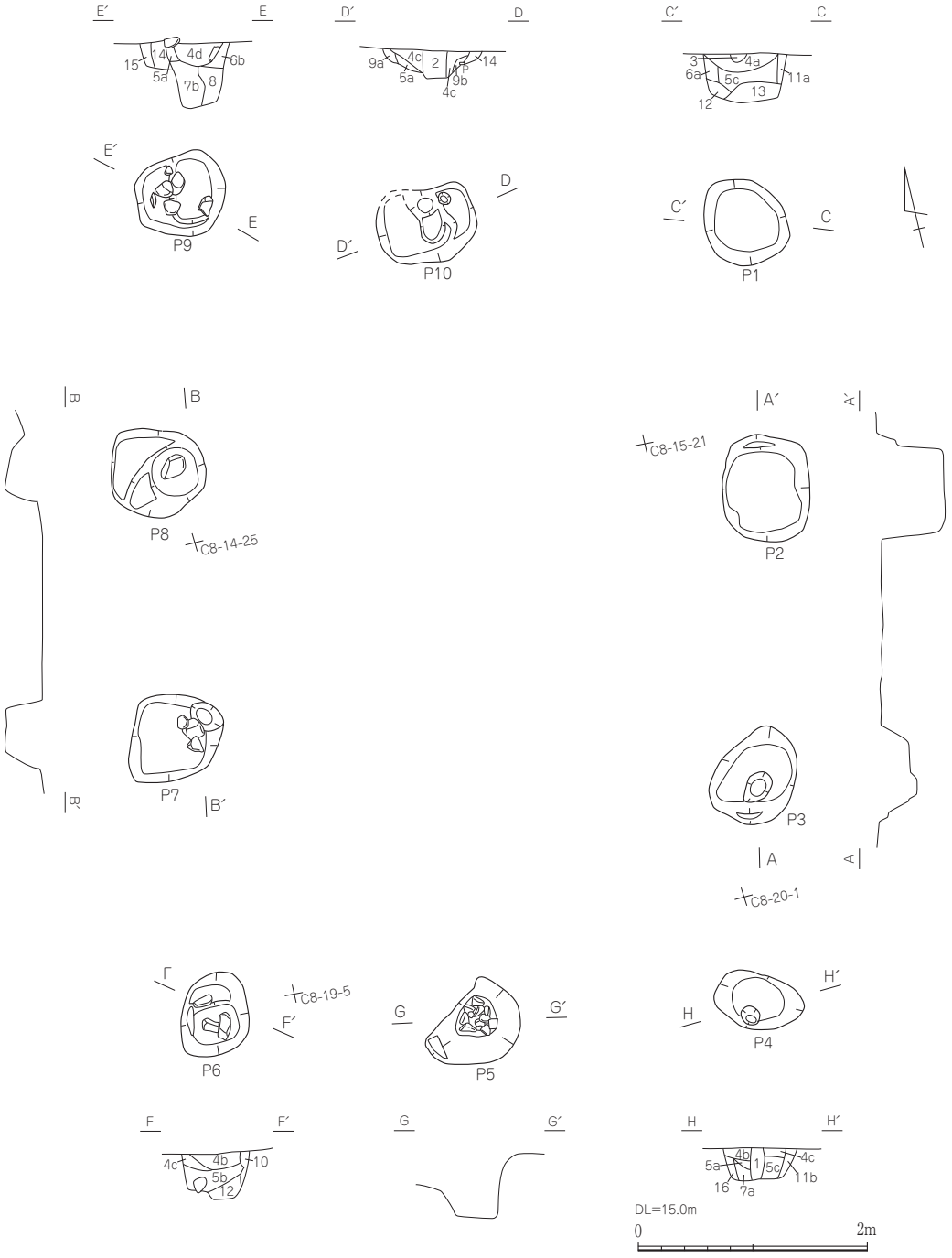
所見；Ⅷ BW 区の北東に位置し、グリッドは C9-4-16、C9-4-17 他に跨がる。東側には SB19 が 2 m 程離れて位置している。南北棟で桁行 3 間 4.7m、梁間 2 間 3.7m で軸方位は N-13° -W でやや西に振る。柱穴形状は円形で、径平均 68㎝、深さ平均 34㎝で掘り方はしっかりしている。柱痕の残る柱穴が認められ、25㎝と大きな柱痕である。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊が混入し、水平堆積を見せるものもあり、人為的な埋め戻しが行われている。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。

SB19(図 3-19)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-4-17 他　**切り合い関係**；ST11 を切る、SK106 に切られる

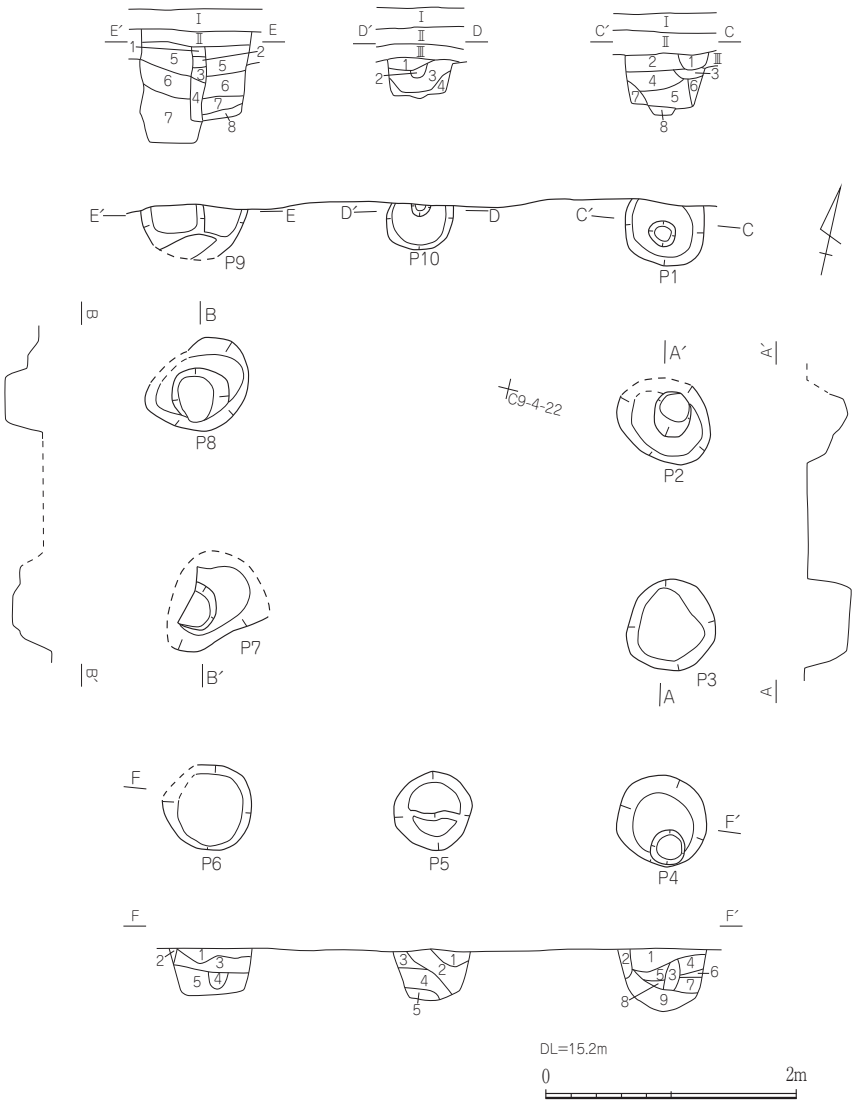
時期；古墳～古代　**主軸方向**；N-19° -W



土層説明

1　黒褐色土　柱痕
2　暗褐色土　柱痕
3　暗褐色土
4 a 暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
4 b 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
4 c 暗褐色土
4 d 暗褐色土　大礫含む
5 a 暗褐色土
5 b 暗褐色土　大礫含む
5 c 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
6 a 暗褐色土　炭化物含む
6 b 暗褐色土　褐色ブロック混入
7 a 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
7 b 暗褐色土
8　暗褐色土　黄褐色ブロック混入
9 a 褐色土
9 b 褐色土　暗褐色土多量混入
10　黄褐色土　暗褐色土混入
11 a 暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む
11 b 暗褐色土
12　暗褐色土
13　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック多量、小礫含む
14　暗褐色土
15　暗褐色土　褐色ブロック混入
16　にぶい黄褐色土　黄褐色土混入

図 3-17　SB16 遺構図



土層説明

P1
Ⅰ　褐灰色土　礫混入
Ⅱ　黒褐色土　土器混入
Ⅲ　黒褐色土
1　黒褐色土
2　黒色土　黒褐色土混入
3　黒褐色土
4　黒褐色土　土器、黄褐色大ブロック、黒色土混入
5　黒褐色土　黒色土混入
6　黒褐色土
7　黒色土　黒褐色土混入
8　黄褐色土

P4
1　暗褐色土
2　暗褐色土
3　褐色土　暗褐色土混入、柱痕
4　暗褐色土
5　黒褐色土　粒状黄褐色土混入
6　黒色土
7　黒褐色土　黄褐色ブロック混入
8　黒褐色土
9　黒褐色土

P5
1　黒褐色土
2　黒褐色土　褐色小ブロック含む
3　黒褐色土
4　暗褐色土　黄褐色小ブロック含む
5　黄褐色土　黒褐色土混入

P6
1　褐色土　暗褐色・黄褐色ブロック多量混入
2　にぶい黄褐色土
3　暗褐色土　黒褐色土多量混入
4　黒色土　黄褐色小ブロック混入
5　褐色土　黄褐色・黒褐色土多量混入

P9
Ⅰ　褐灰色土
Ⅱ　黒褐色土
1　暗褐色土
2　褐色土
3　暗褐色土
4　暗褐色土　褐色小ブロック多量混入
5　黒褐色土
6　暗褐色土　黄褐色小ブロック、小礫混入
7　暗褐色土　中礫含む
8　黄褐色土　暗褐色土混入

P10
Ⅰ　褐灰色土
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　黒褐色土　小礫混入
1　黒色土
2　黒褐色土
3　黒色土
4　黒色土　小礫混入

図 3-18　SB18 遺構図

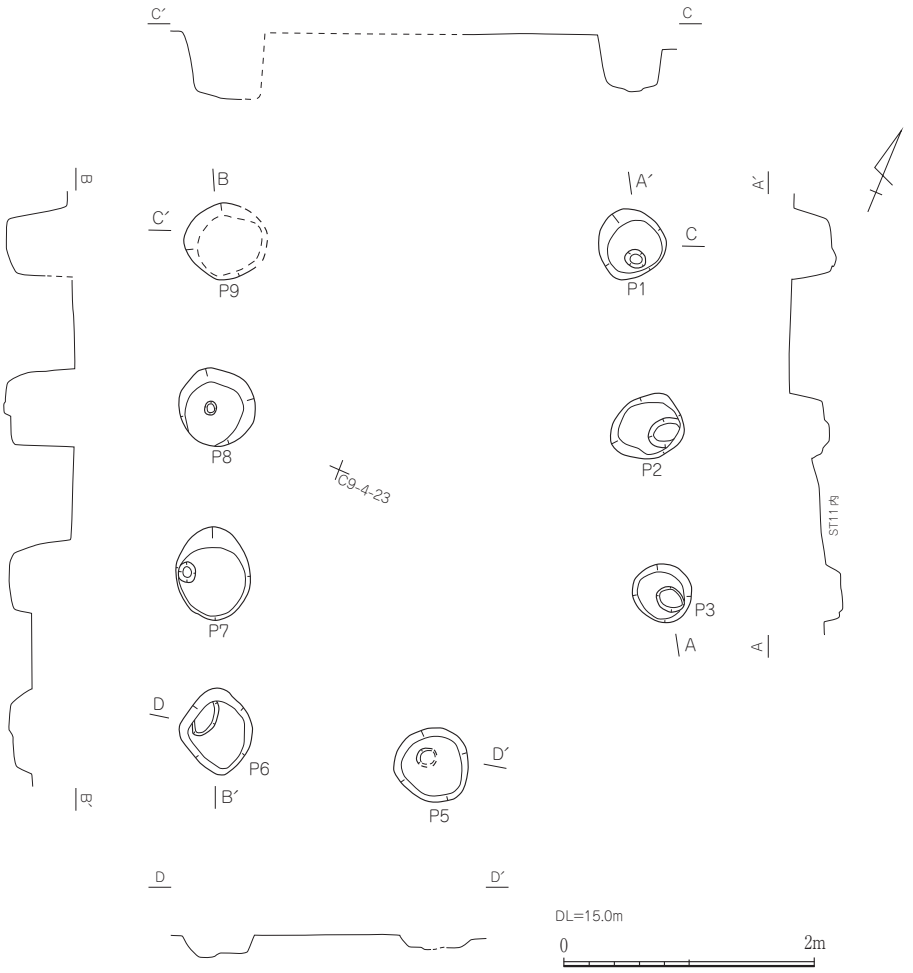


図 3-19　SB19 遺構図

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 4.1m ×梁間 3.8m　柱間距離 桁行 1.18 ～ 1.41m(平均 1.31m) ×梁間 1.80m(平均 1.80m)　面積 15.58㎡

柱穴数；(8)　**柱形状**；円形　**柱痕**；有　**柱穴規模**；径平均 0.59m ×深さ平均 0.50m

覆土；暗褐色粘質土

出土遺物；－

所見；Ⅷ BW 区の北東に位置し、グリッドは C9-4-17、C9-4-18 他に跨がる。西側には SB18 が 2 m 程離れて位置している。ST11 の上に構築されている。また北列は古代の SK106 に壊されている。南北棟で桁行 3 間 4.1m、梁間 2 間 3.8m で軸方位は N-19° -W で西に振る。柱穴形状は円形で、径平均 59㎝、深さ平均 50㎝で掘り方はしっかりしている。柱痕の残る柱穴が認められる。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土塊が多量に混入し、人為的な埋め戻しが行われている。

所属時期は判然としないが古墳時代から古代と考えられる。

SB20(図 3-20)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-25 他　**切り合い関係**；－

時期；近世　**主軸方向**；N-6° -E

規模；桁行 3 間×梁間 2 間　桁行 5.5m ×梁間 3.6m　柱間距離桁行 1.76 ～ 1.89m(平均 1.82m) ×梁

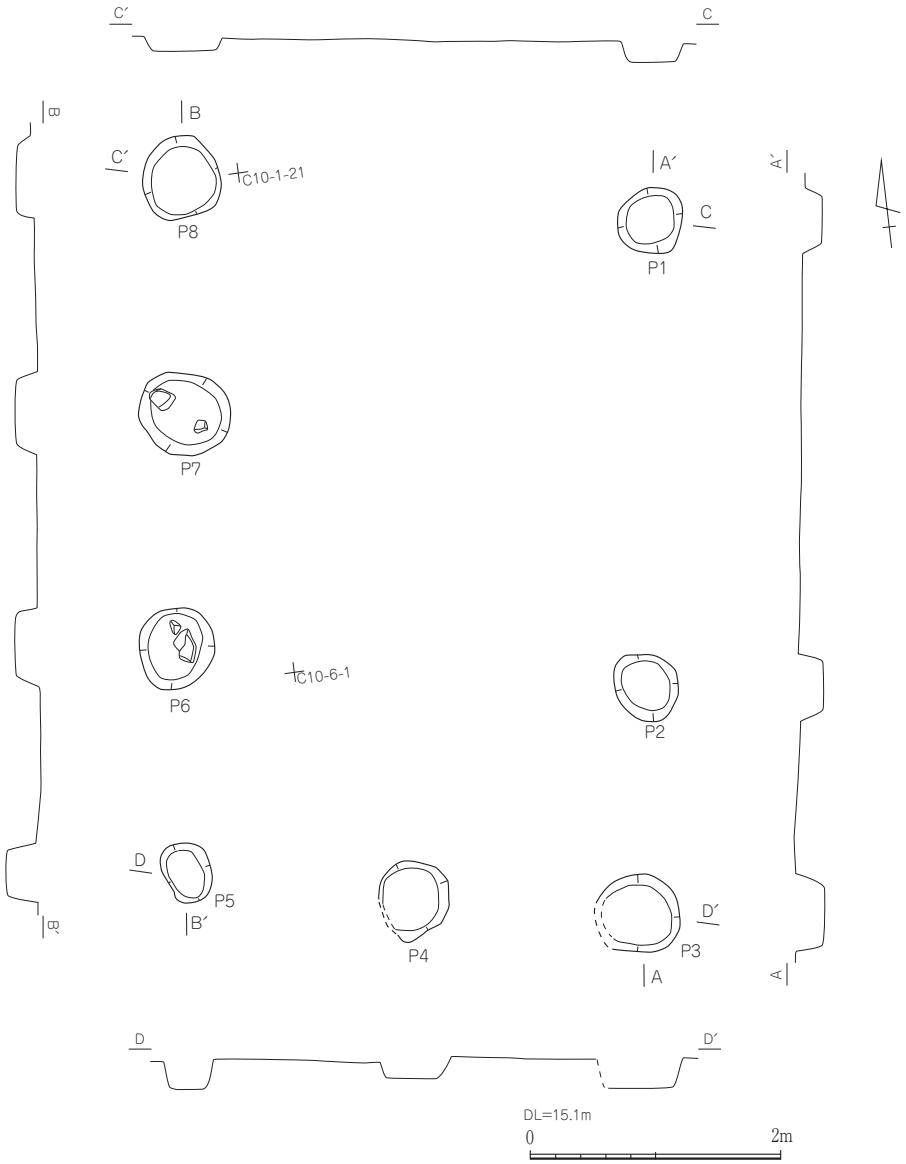


図 3-20　SB20 遺構図

間 1.80 ～ 1.81m(平均 1.80m)　面積 20.18㎡

柱穴数；(8)　**柱形状**；円形　**柱痕**；無　**柱穴規模**；径平均 0.60m ×深さ平均 0.19m　**覆土**；－

出土遺物；－

所見；Ⅷ BE 区の西側部に位置し、グリッドは C9-5-25 である。すぐ西側に近世の SD2 と並行して構築されている。柱穴の径は 60㎝とやや大きいものの、掘り方は 19㎝と浅い。底面には根石と考えられる礫が入るものも認められる。

所属時期は規模、位置からして近世と考えられる。柱穴の平面規模は古墳時代から古代の掘立柱建物跡と似るものの、掘り方が浅いこと、根石が入る点が異なる。また近世の溝 SD2(N-9° -E) と軸方向が近いことから近世と判断した。

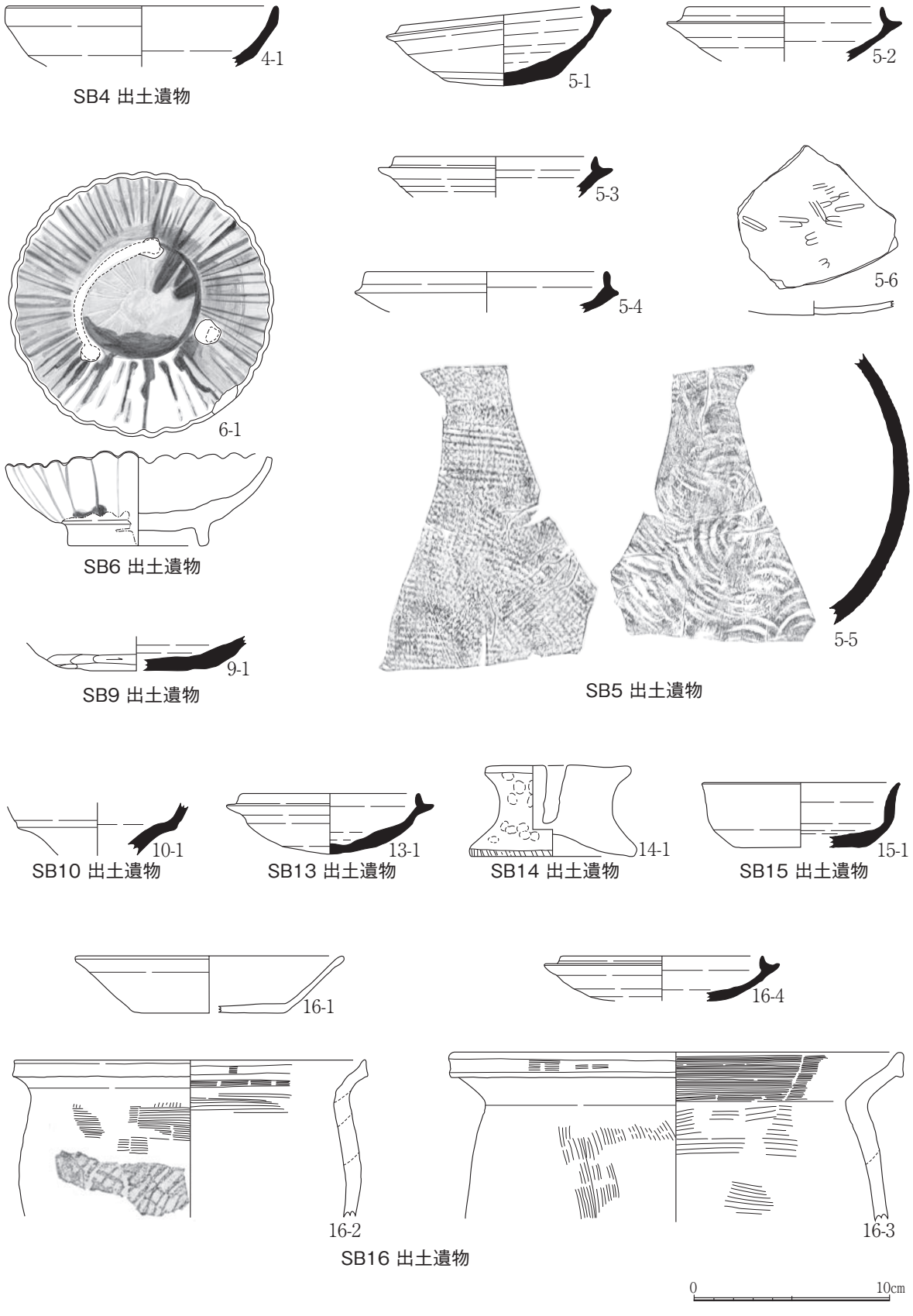


図 3-21　掘立柱建物跡出土遺物実測図

表 3-2　掘立柱建物跡遺物観察表

図版番号	遺構名・出土地点	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径
図 3-21	SB4 － P8	1	須恵器	坏	(13.7)		
図 3-21	SB5 － P13	1	須恵器	坏	11.6	4.1	5.8
図 3-21	SB5 － P10	2	須恵器	坏	(12.0)		
図 3-21	SB5 － P8	3	須恵器	坏	(12.0)		
図 3-21	SB5 － P12	4	須恵器	坏	(13.5)		
図 3-21	SB5 － P2	5	須恵器	壺・胴部			
図 3-21	SB5 － P12	6	土師器	盤・底部			
図 3-21	SB6 － P8	1	陶磁器	皿	13.3	4.8	7.2
図 3-21	SB9 － P5	1	須恵器	坏・底部			
図 3-21	SB10 － P6	1	須恵器	甕・口頸部			
図 3-21	SB13 － P5	1	須恵器	坏	(10.6)		
図 3-21	SB14 － P4	1	土製品	器台	7.3	4.7	8.4
図 3-21	SB15 － P10	1	須恵器	坏	(10.0)	3.3	(6.8)
図 3-21	SB16 － P2	1	土師器	坏	(13.5)	2.9	(8.0)
図 3-21	SB16 － P2	2	土師器	甕	(17.9)		
図 3-21	SB16 － P2	3	土師器	甕	(23.0)		
図 3-21	SB16 － P1	4	須恵器	坏	(12.0)		

第４節　壺棺墓

Ⅷ区では壺棺墓(SG)を18基検出した。壺棺墓群を形成しており、こうした類例は高知県下では初めてである。西側調査区のⅦ区では２基、東端調査区のＸ区でも２基検出しており、本遺跡では合計22基となった。

位置はⅧＡ区調査区の東側部とⅧＢ区調査区の西側部の境近くで一群を形成している。その中でも中心部は南北に８ｍ程の幅の中に14基が集中しており、北西部に１基(SG18)、南東部に２基(SG12、16)、更に１基(SG14)が離れて構築されている。

壺棺の形態は埋納土坑に正位、斜位、横位のそれぞれの埋置方法が認められる。上部を後世に削平を受けているものが多く、埋置形態を明確にし得ないものもあるが正位７基、斜位８基、横位２基、不明１基である。逆位のものは本調査区では検出していないものの、Ｘ区で最大級の大型のものを検出している。SG9は入り子のもので唯一である。壺棺の口縁部は意図的に打ち欠き、蓋をするものが多い。削平を受けているため全てについて分類はしがたいが、７例が確実に蓋が伴うものである。蓋は鉢を利用するものが多く、中には壺を転用するものも認められる。SG8、12、14の３例は蓋が壺のものである。鉢を利用するものが６例である。後の９例の半数は不明である。

埋納土坑の形態は楕円形を基本とし、円形のものも認められる。楕円形10基、円形６基、不整形のものが２基である。埋納土坑の規模については削平を受けている為に実際の大きさで分類するのは極めて困難である。それでも検出状況からして最大のものはSG5で長径１ｍを超える。主として80cmから70cm台のものが最も多く９基である。最小のものはSG16で径47cmである。他にも40cm台のものを検出しているものの、削平を受けているために実際の規模は更に大きくなる。深さもやはりSG5が最も深く84cmを測る。

壺棺の埋置方法は埋納土坑を掘削後、壺棺本体を安定させる為に５cm程埋め戻し、埋置する。また更に数個の礫を壺棺の下に敷くものもある。

表4-1　壺棺墓一覧表

SG番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	壺棺状態	切り合い
SG1	Ⅷ BW	C9-8-7	弥生後期	円形		(0.86)		(0.27)	大型壺正位、上半部欠損	SD30・56切られる
SG2	Ⅷ BW	C9-8-7	弥生後期	楕円形	N-82°-W	(0.72)	(0.58)	(0.39)	壺斜位、蓋有り、半欠損	SD47切られる
SG3	Ⅷ BW	C9-8-7	弥生後期	円形？		(0.45)		(0.15)	壺正位、大部分欠損	SD47切られる
SG4	Ⅷ BW	C9-8-7	弥生後期	楕円形	N-14°-E	0.84	0.65	0.4	壺斜位、蓋有り、半欠損	ST25切る、SD47切られる
SG5	Ⅷ BW	C9-8-6	弥生後期	楕円形	N-80°-W	1.04	0.84	0.4	壺斜位、蓋有り、残存良い	ST25切る
SG6	Ⅷ BW	C9-8-11	弥生後期	楕円形	N-31°-W	0.82	0.66	(0.2)	広口壺、大部分欠損	SD25・54切られる
SG7	Ⅷ BW	C9-8-11	弥生後期	楕円形	N-83°-W	(0.8)	(0.43)	(0.22)	大部分欠損	SD26切られる
SG8	Ⅷ BW	C9-8-16	弥生後期	楕円形	N-4°-E	0.72	0.64	0.32	壺斜位、蓋有り、半欠損	
SG9	Ⅷ BW	C9-8-16他	弥生後期	楕円形	N-69°-E	0.6	0.46	0.28	壺正位、蓋入り子状	
SG10	Ⅷ BW	C9-8-21	弥生後期	円形	N-31°-W	(0.54)	(0.36)	(0.06)	壺正位？、大部分欠損	SB10、SD35切られる
SG11	Ⅷ BW	C9-8-21他	弥生後期	不整形	N-53°-E	0.66	0.46	0.25	壺斜位？、大部分欠損	SD46切られる
SG12	Ⅷ BW	C9-8-22	弥生後期	円形	N-41°-W	0.54		0.35	壺斜位、蓋有り、残存やや良い	
SG13	Ⅷ BW	C9-8-11他	弥生後期	不整形	N-41°-W	0.68	0.47	0.26	壺正位？、大部分欠損	
SG14	Ⅷ BW	C9-8-20他	弥生後期	楕円形	N-69°-E	0.86	0.67	0.41	壺横位、蓋有り、やや欠損	
SG15	Ⅷ AE	C9-7-10	弥生後期	楕円形	N-71°-W	0.78	0.62	0.14	壺正位？、大部分欠損	
SG16	Ⅷ BW	C9-8-23	弥生後期	円形		0.47		0.35	小型壺正位？半欠損	
SG17	Ⅷ AE	C9-7-15	弥生後期	楕円形	N-19°-E	0.94	0.78	0.33	大型壺横位、上半部欠損	
SG18	Ⅷ AE	C9-7-5	弥生後期	円形	N-3°-W	0.86	0.73	0.24	大型壺横位、半欠損	

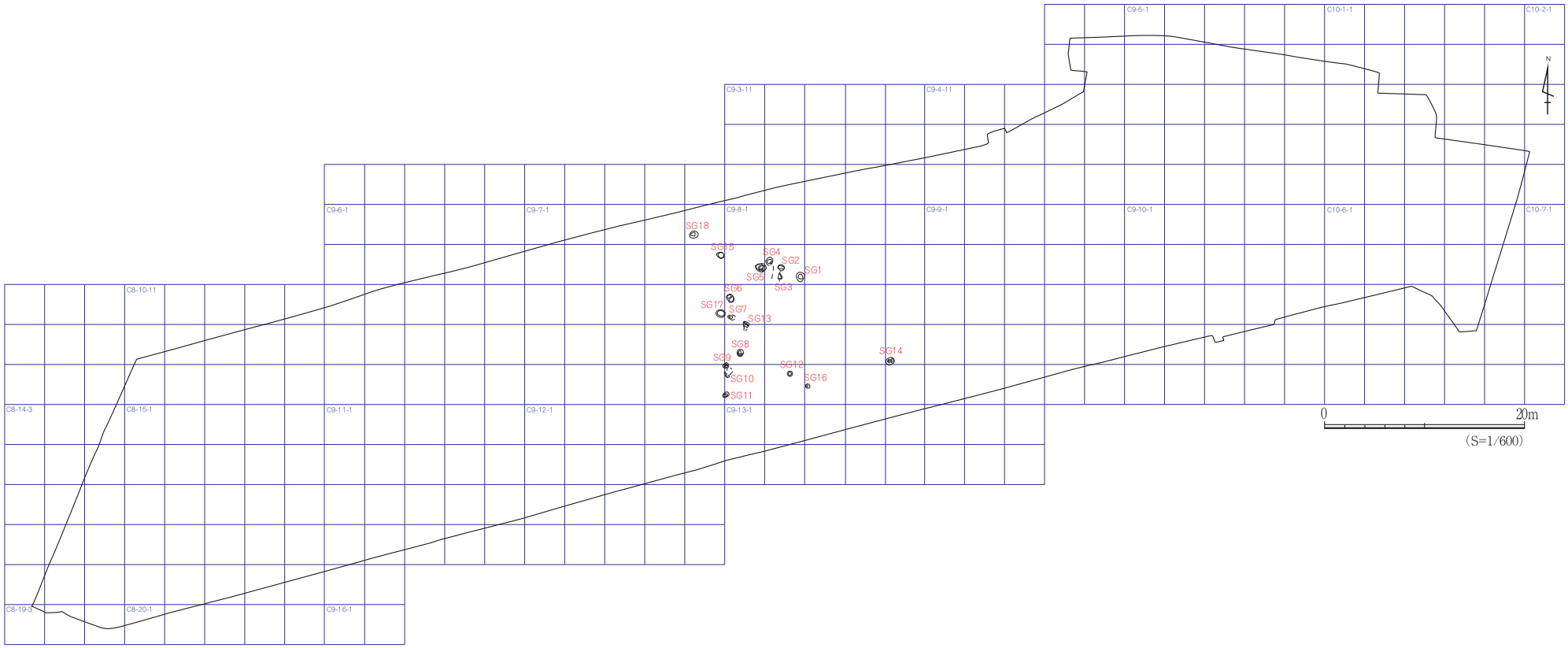


図 4-1　壺棺墓全体配置図

方位については壺棺を横位、または斜位に埋置するものについては、口縁部方向を頭位とすると、東方向のものが多い。

時期は弥生時代後期後半に相当する。検出した壺棺は口縁部を欠損するものがほとんどで、中にはSG6、14、18では打ち欠いた口縁部破片が伴って出土する例からして、複合口縁壺を壺棺に使用していた可能性がある。大型壺で器形は卵形で胴部はタタキ整形、内面はハケ整形のものが多い。底部は平底でやや丸味を持つものが多い。蓋については中型壺を転用するものも認められるものの、基本は大型鉢である。タタキ整形で口縁部をタタキ伸ばし、口縁部が短く外反する鉢である。片口部を有するものも認められる。

こうした大型壺、大型鉢は竪穴建物跡から出土する例は僅少である。しかしながら、口縁部を打ち欠くことから、壺棺用に特別に制作されたものではなく、転用品と考えられる。蓋の鉢についても転用品と考えられる。

これらの壺棺群は弥生時代後期後半の竪穴建物跡に伴うものと考えられる。ST11、13、30、51の径7mから10mの大型の多角形住居跡に伴う可能性が強い。

SG1（図 4-2、3）

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-7　**切り合い関係**；SD30・56 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；径 (0.86)m ×深さ (0.27)m　**形状**；円形

主軸方向；－　**覆土**；黒褐色粘質土、黒色粘質土

出土遺物；弥生大型壺 2 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部、C9-8-7 グリッドに位置する。壺棺群の北東部に位置する。西側に隣接して SG2、3 とは 1.4m 程離れる。西側部を古代と考えられる溝 SD56 に部分的に壊されている。埋納土坑は 1/4 程が破壊され、南側部分の上端の一部を溝 SD30 に削られている。壺棺本体は上部が後世の削平を受け削り取られ、1/2 以下しか残存していない。

埋納土坑は円形で残存部径 0.86m、深さ 0.27m を測り、壁は緩やかに立ち上がる。断面形態は緩やかな「U」字状を呈する。底面径は 0.52m で僅かに凹む。

壺棺本体№1 の大型壺は土坑の中心部に正位の状態で埋置されていた。壺棺群の中でも大型の分類に含まれる。底部は土坑底面から 4 ㎝程浮いている。胴部上半部は後世に削平され、大きく欠損している。壺棺本体の外側には壺の破片№2 が部分的に取り巻くように出土している。上部が削平されている為に№2 が蓋として使われていたかどうかは不明である。

土坑内の覆土は黒褐色粘質土の単一層、壺棺本体内は黒色粘質土である。

壺棺内からは他の遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

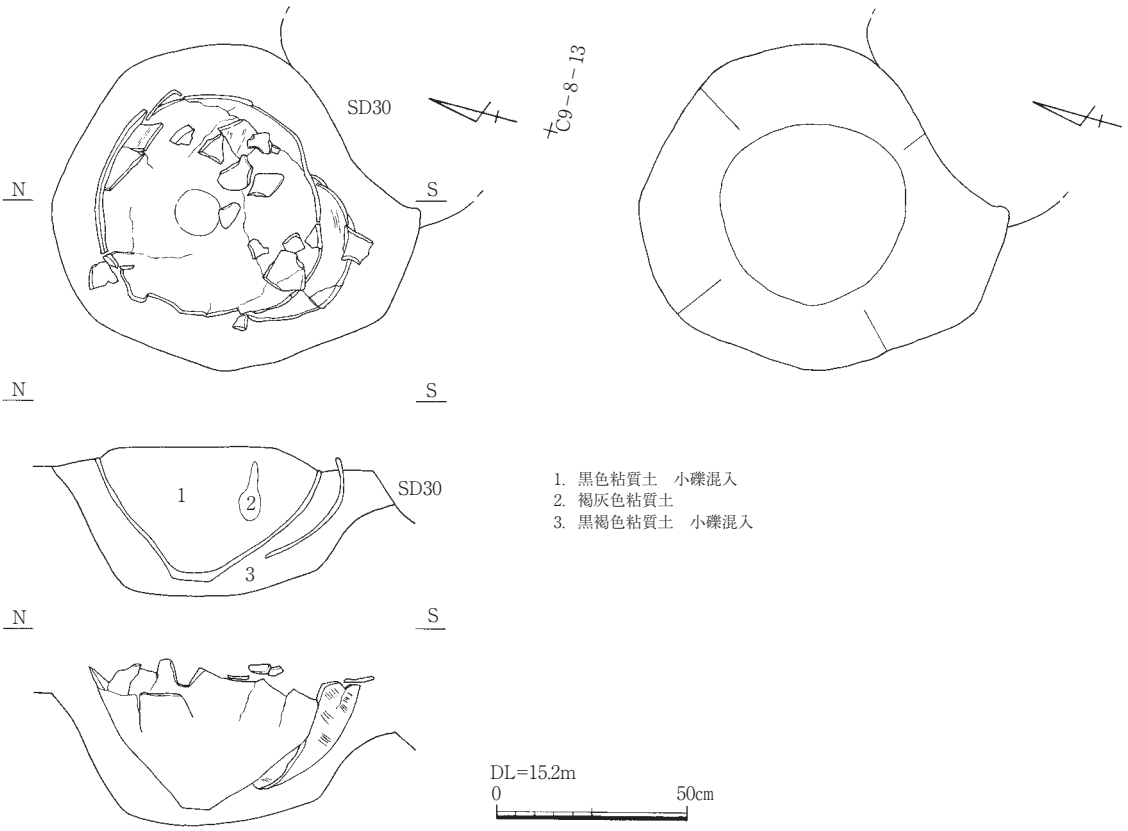


図 4-2　SG1 遺構図

出土遺物 (図 4-3 №1 、2)

№1 は弥生土器大型壺である。壺棺本体である。胴部上半、口縁部は欠損する。体部上半は丸味を持つ。残存高は 42.6cm、残存最大径は 56.4cm、底部は平底で径 10.3cmである。器肉は胴部は上半部に厚みがあり 1.3cm、下半は薄くなる。底部の厚さは 2.1cmである。整形は外面上半にはタタキ痕を残し、ハケ、ナデを施す。下半は若干タタキ痕を残すものの、主としてハケ整形である。内面は粗いハケ、ナデである。胎土は小礫を多量に含む。

№2 は弥生土器大型壺である。本体の外側から出土した壺である。上半部は欠損する。残存高は 20.4cm、残存最大径は 43.6cm、底部は丸底気味の平底で径 7.8cmである。器肉は 1 cm程度の厚さである。底部の厚さは 1.5cm程である。全体的に№1 より一回り小さい。整形は外面にはハケ、ナデを施す。下半は主としてハケ整形である。内面はハケである。胎土は小礫を少量含む。

SG2(図 4-3、4)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-7　**切り合い関係**；SD47 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；(0.72) × (0.58)m ×深さ (0.39)m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-82° -W　**覆土**；褐色土、黒褐色土主体

出土遺物；弥生大型壺 2 個体、大型鉢 1 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部、C9-8-7 グリッドに位置する。壺棺群の中でも北東部の SG2 から SG5 の 4 基に纏まりが認められる。SG3 とは 0.2m、SG4 とは 0.7m 程離れて位置する。古代の溝 SD47 に西側部を 1/3 程壊されている。上部も後世の削平を受け 1/3 程削り取られている。

埋納土坑の平面形は楕円形で残存長径 0.72m、残存短径 0.58m、深さ約 0.39m である。壁はなだらかに立ち上がる。底面もやや不整形の楕円形で長径 0.58m、短径 0.3m である。

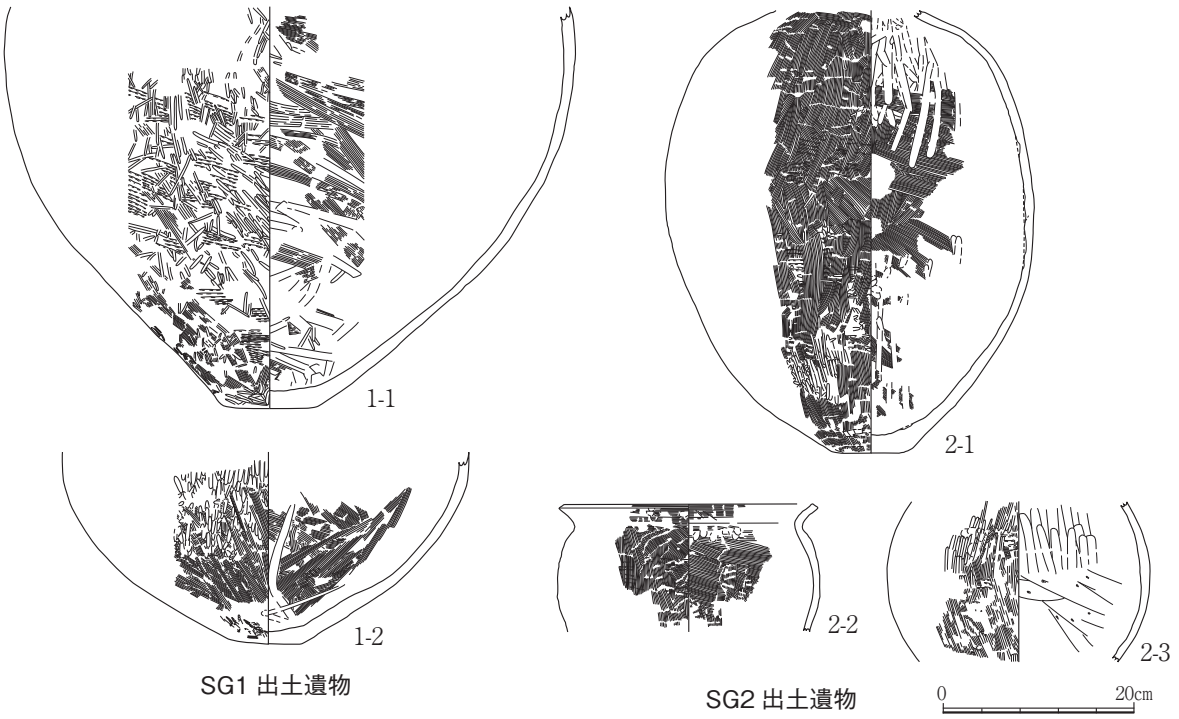


図 4-3　SG1・2 出土遺物実測図

壺棺本体№1の大型壺は斜位に埋納土坑の底面に密着するように埋置されていた。口縁部は意図的に打ち壊されており、№2の大型鉢を被せて蓋にしている。軸方向はN-82°-Wである。SG5と近い方位を採る。№3は壺棺本体№1の底部の下に敷かれたように置かれた状態で出土している。

土坑内覆土は褐色土、壺棺本体内は黒褐色土である。壺棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

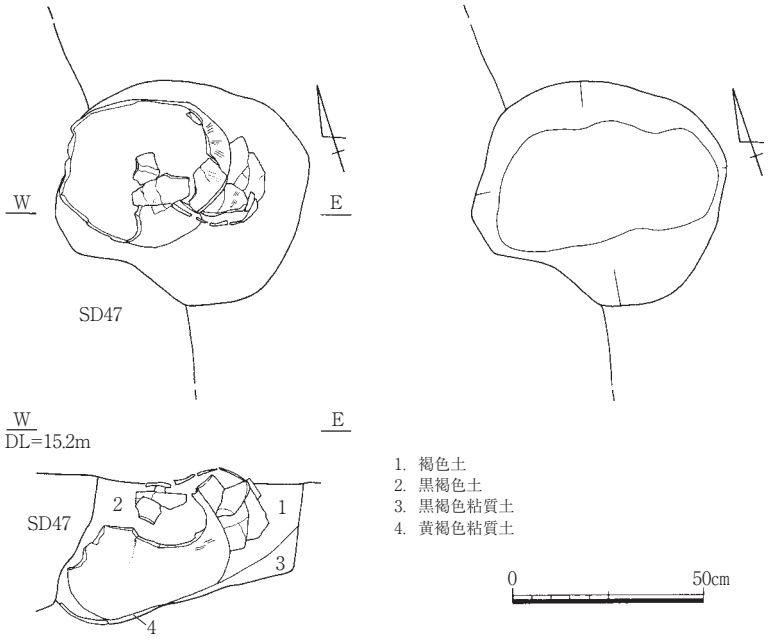


図 4-4　SG2 遺構図

出土遺物 (図 4-3 №1 ～ 3)

№1は弥生土器大型壺で壺棺本体である。胴部は半分程しか残存していない。口縁部は意図的に打ち欠かれている。器形は卵形で残存高 47cm、最大径は胴部中央で 43.6cm、底部はやや丸味を持った平底で径 8.4cmである。整形は外面がタタキ、ハケである。内面は上半が強いナデ、ハケである。外面には黒斑が認められる。胎土は小礫を少量含む。

№2は蓋に転用されていた弥生土器大型鉢である。胴部下半は欠損する。口縁部は「く」字状に屈曲する。口唇部は平坦である。胴部はやや丸味を持つ。整形は口縁外面はナデ、ハケである。胴部はタタキ、ハケである。内面はハケ整形である。胎土は小礫を少量含み、微白色鉱物粒を微量含む。

№3は中型壺の胴部上半部破片である。1/4 程しか残存していない。壺棺本体№1の底部下から出土したものである。肩部はなだらかで、体部は丸味を持つ。整形は外面がタタキ、ハケ、ナデである。内面上半は強いナデ、下半はヘラケズリである。胎土は小礫を少量含む。

SG3(図 4-5、8)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-7　**切り合い関係**；SD47 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；径 (0.45)m ×深さ (0.15)m　**形状**；円形？

主軸方向；－　**覆土**；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部、C9-8-7 グリッドに位置する。壺棺群の中でも北東部の SG2 から SG5 の 4 基に纏まりが認められ、SG2 の南側 0.2m に近接して構築されている。SG2 と同様に古代の溝 SD47 に西側部を 1/5 程壊されている。上部も後世の削平を受け削り取られている。

埋納土坑も残存している部分で径 0.45m、深さ 0.15m で極めて遺存状態は悪い。平面形も判然としない。底面も残存長は 0.54m で壁は緩やかに立ち上がる。壺棺本体は№1で埋納土坑の底面にへばりつくように残存していた。おそらく SG1 と同様に正位の状態で埋置されていた可能性がある。

上部も削平されているところから、蓋が伴うかどうかも不明である。主軸方位も不明である。

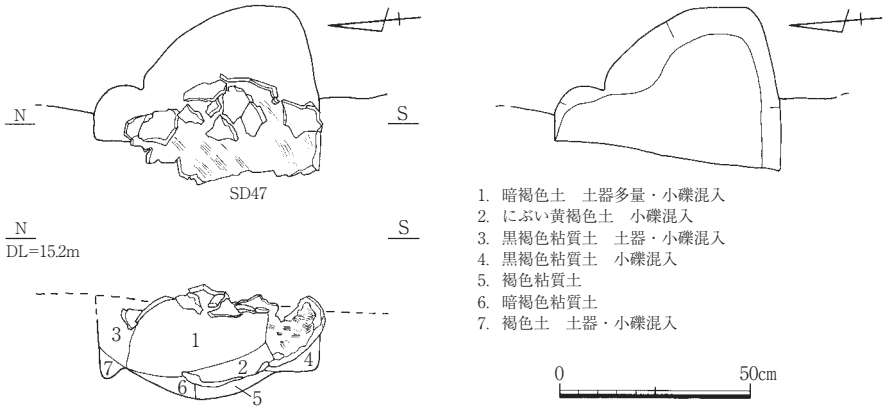


図 4-5　SG3 遺構図

覆土は埋納土坑の壁際が黒褐色粘質土、底面が暗褐色粘質土と褐色粘質土である。壺棺本体の中は暗褐色粘質土の単一層である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-8 №1)

№1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部下半が残存するだけである。体部は丸味を持ち、残存高 32cm、最大径は 56cmである。整形は外面がタタキ、ハケ、下半はミガキを多く施す。内面はハケ、ヘラケズリである。胎土は小礫を少量含む。

SG4(図 4-6、8)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-7　**切り合い関係**；ST25 を切る、SD47 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；0.84 × 0.65m ×深さ 0.4m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-14° -E　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体、大型鉢 1 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部、C9-8-7 グリッドに位置する。壺棺群の中でも北東部の SG2 から SG5 の 4 基に纏まりが認められ、SG2 の西側 0.7m に近接して構築されている。弥生後期後半の竪穴建物跡 ST25 を切って構築している。埋納土坑上端は古代の SD47 に若干壊されている。上部は後世の削平を受け削り取られている。

埋納土坑は部分的に壊されているものの楕円形を呈し、長径 0.84m、短径 0.65m、深さ 0.40m である。底面は円形に近く径 0.44m を測り、壁は僅かに丸味を持って直立する。

壺棺本体№1 は埋納土坑の底面より 2 ㎝程僅かに浮いて斜位に埋置されていた。№1 の口縁部は意図的に打ち欠き、大型鉢№2 で蓋をする。軸方向は N-14° -E で頭位は南向きでやや西に振る。

覆土は埋納土坑､壺棺本体も同一で黒褐色土の単一層である｡棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-8 №1 、2)

№1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。1/3 程胴部は壊されている。口縁部は意図的に打ち欠かれている。残存高は 43cm、最大径は胴部中央で 34.4cm、平底で径 8.2cmを測り体部の大きさに比してやや小さめである。胴部の器形は卵形である。肩部はなだらかで張らない。頸部はすぼまる。整形は外面がタタキ、ハケ、内面は落剥している部分が多いもののハケ、上半に指頭が認められる。胎土は小礫を多量に含む。

№2は蓋に転用された弥生土器大型鉢である。1/2程欠損する。口径31㎝、器高22㎝、底径は7.4㎝である。器形は口縁部が緩やかに外反し、口唇部は平坦である。片口部を1ケ所有する。体部はなだらかでやや丸味を持ち、底部は平底である。整形は外面が幅広のタタキ、内面がハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。体部外面に黒斑を有する。

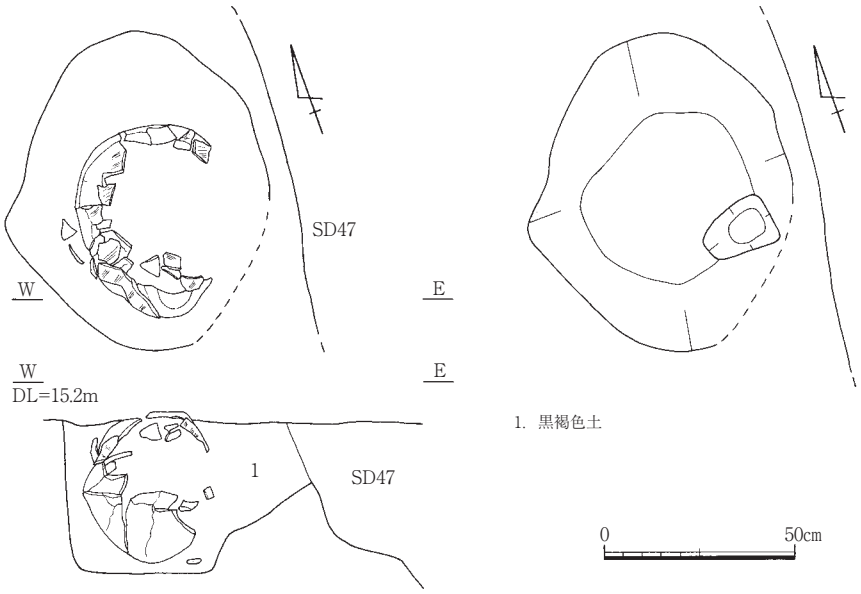


図4-6　SG4遺構図

SG5(図4-7、8)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-6　**切り合い関係**；ST25を切る

時期；弥生後期Ⅵ1期　**埋納土坑規模**；1.06 × 0.84m ×深さ0.4m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-80°-W　**覆土**；黒褐色粘質土

出土遺物；弥生大型壺1個体、大型鉢1個体

所見；Ⅷ区B西側部、C9-8-6グリッドに位置する。壺棺群の中でも北東部のSG2からSG5の4基に纏まりが認められ、SG4の南側0.2mに近接して構築されている。SG4と同様に弥生時代後期後半の竪穴建物跡ST25を切る。埋納土坑が深い為に上部は削平をほとんど受けておらず遺存状態は良い。

埋納土坑の平面形は楕円形で長径1.06m、短径0.84m、深さは上部は僅かに削られているものの残存部分では0.4mを測る。底面も楕円形を呈し、長径0.95m、短径0.68mで更に10㎝程一段落ち込む。東側壁部分には幅20㎝の段を有する。壁は底面は丸味を持ち、直立する。

壺棺本体は№1で斜位に埋置する。埋納土坑底面より僅かに浮いた状態で出土しており、東側の壺棺の肩部近くに径10㎝程の礫2個を置き安定させている。口縁部は意図的に打ち欠き、大型鉢№2で蓋をする。頭位はN-80°-Wで東方向を指す。壺棺の胴部下半には径10㎝程の礫が食い込むよう出土し、周辺の土器片が欠損している。埋納時か後世かは不明である。土層断面からは後世の掘り込みは検出できていない。

覆土は埋納土坑内が黒褐色粘質土、壺棺本体の中は全体的に締まりがなく上半分が黒色土、下半分が黒褐色土である。上下の境には黄褐色土が帯状に薄く入り、下層の黒褐色土もやや黄色を帯びる。締まりがないことから後に壺棺内への流入土と考えられる。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物(図4-8№1、2)

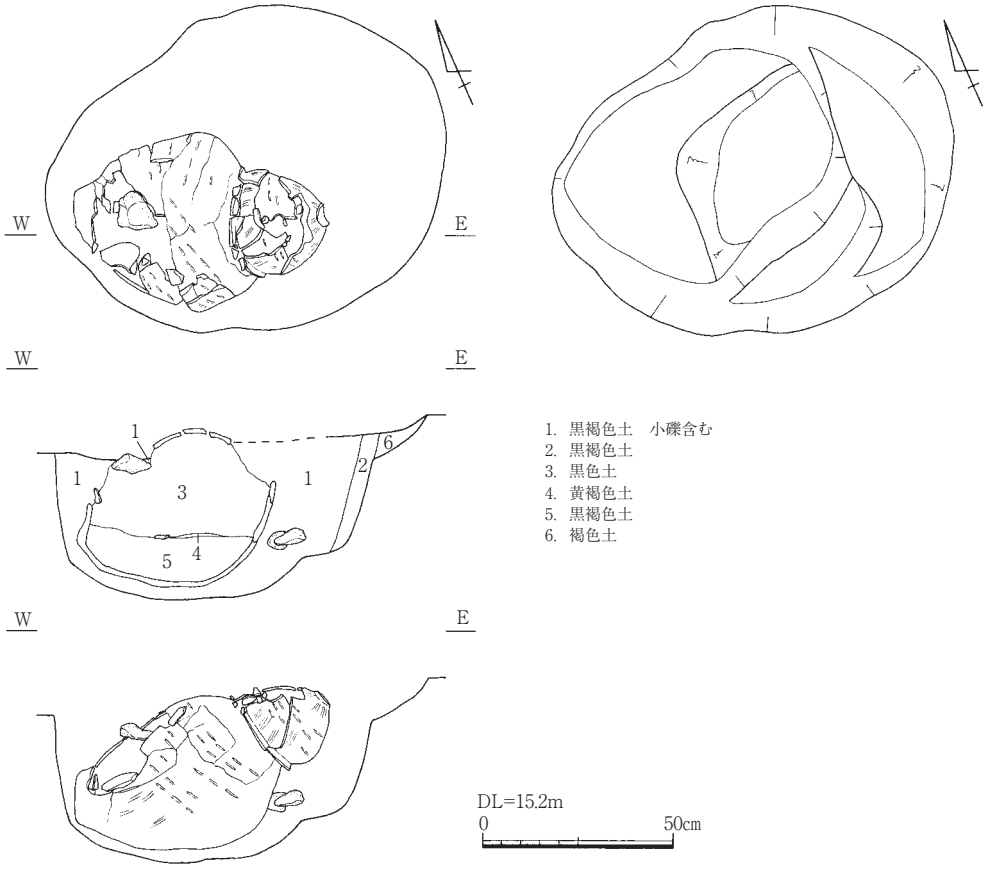


図 4-7　SG5 遺構図

№1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。1/3 程胴部は欠損する。口縁部は意図的に打ち欠かれている。残存高は 53.5cm、最大径は胴部中央で 46cm、底部は平底で径 11.1cmを測る。胴部の器形は卵形である。肩部はなだらかで張らない。整形は外面がタタキ、ハケで下半にはミガキを施す。内面はケズリ、ハケである。胎土は小礫を多量に含む。体部上半に黒斑が認められる。

№2は蓋に転用された弥生土器大型鉢である。ほぼ完形品である。口径29.6cm、器高21cm、底径は6.6cmである。器形は口縁部が緩やかに外反し、口唇部は平坦である。片口部を 1 ケ所有する。体部はなだらかでやや丸味を持ち、底部は平底である。整形は外面の口縁部、胴部上半がハケ、胴部中央がタタキ、ハケ、下半はハケである。内面はハケ整形である。胎土は小礫を少量含む。

SG6(図 4-9、14)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-11　**切り合い関係**；SD25・54 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；0.82 × 0.66m ×深さ (0.2)m　**形状**；楕円形？

主軸方向；N-31° -W　**覆土**；黒褐色粘質土、黒色土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体、大型鉢 1 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部の西端、C9-8-11 グリッドに位置する。壺棺群の中のほぼ中心部に位置する。北側部を古代の溝 SD25、西側部を SD54 に壊され、また上部は後世の削平を受け、遺存状態は悪い。

埋納土坑の底面は SD が浅いためにかろうじて残存している。平面形は楕円形と考えられ、残存部で長径 0.82m、短径 0.66m、深さ 0.2m で極めて浅い。底面は二段になっており、段部から 0.05m

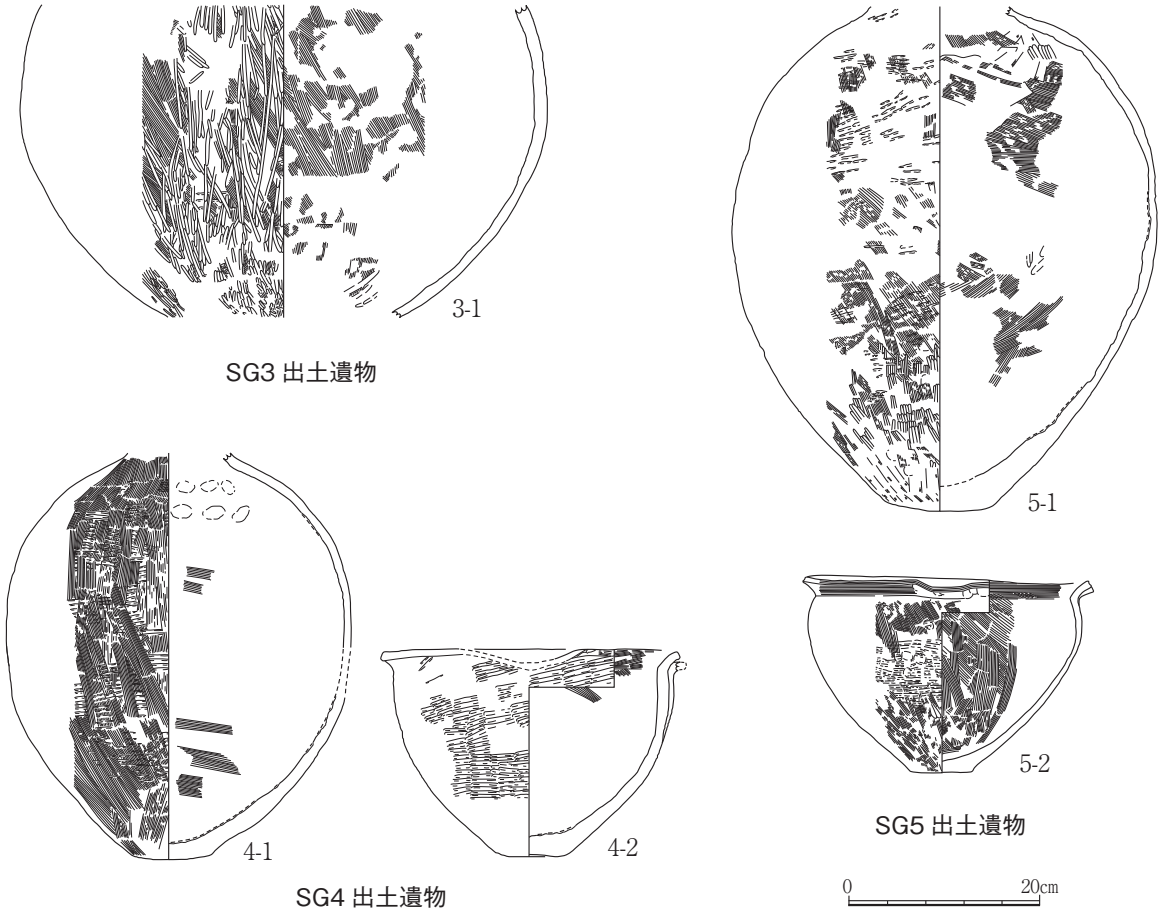


図 4-8　SG3 ～ 5 出土遺物実測図

程一段落ち込む。壁は緩やかに立ち上がる。

壺本体は№1で残存状態が良くないために判然としないが、おそらく斜位に埋置し、№2の鉢を蓋に転用している。№1の口縁部が№2の下から出土しており、本来は№1の口縁部を意図的に打ち欠いたものを№2の蓋の支えに利用したと考えられる。他の壺棺では打ち欠いた口縁部が埋納土坑から出土する例は SG6、14、18 の 3 例のみである。№1の大型壺は搬入品である。頭位は東方向向く。

覆土は壺棺本体内は黒色土で 2 層に分かれ、下層の黒色粘質土は上層より暗い。壺棺内から小礫が出土しているものの、他の遺物は出土していない。壺棺外は黒褐色粘質土である。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-14 №1、2)

№1は壺棺本体の弥生土器大型壺である。口縁部と胴部は別々に出土しており、接合部はない。本来意図的に口縁部が打ち欠かれたものが埋納土坑に共に埋置したものと考えられる。実測図は同一個体として掲載した。複合口縁壺で 1/2 程が残存する。胴部は張り、底部はやや丸味を持つ平底である。復元器高は 58.8cmである。口縁部は直立し、山形鋸歯文を 1 ケ所のみに施す。口唇部は平坦である。頸部は内傾気味に立ち上がり、頸部との境に刻み目突帯を施す。肩部はなだらかで、胴部上半に最大径を有し、径 44cmを測る。胴部下半はすぼまり、底部は径 8.4cmを測る。整形は口縁部外面がナデ、内面はハケ、頸部は外面がミガキ、胴部はハケ、ミガキである。内面は上半が指

頭、ハケ、下半はハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。胴部上半に黒斑が付く。阿波からの搬入品である。壺棺で搬入品はこれのみである。

№2は蓋に転用されていた弥生土器大型鉢である。1/3程残存し、底部も欠損する。口縁部は「く」字状に外傾し、口唇部は僅かに拡張し、平坦である。口径36.6cmを測る。肩部は僅かに張り、丸味を持つ。整形は口縁部外面がナデ、内面がハケ、胴部外面はタタキ、ナデ、内面上半が粗いハケ、下半はヘラケズリを施す。胎土は小礫を多量に含む。

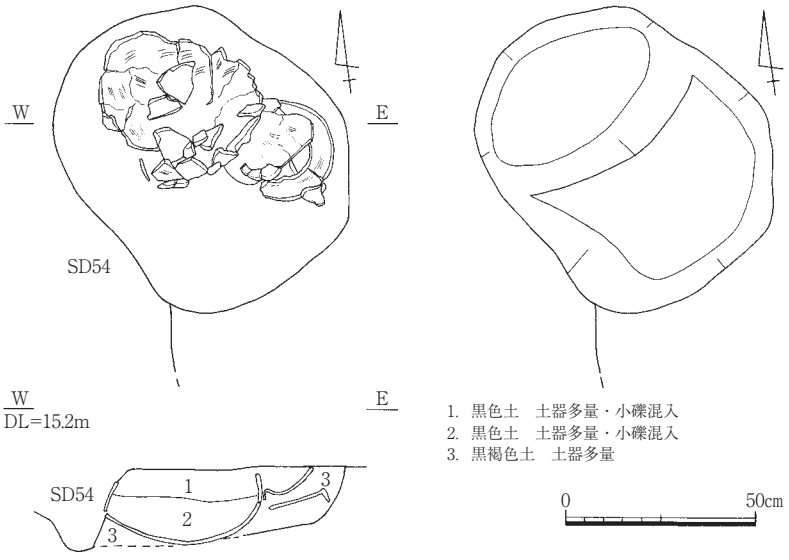


図 4-9　SG6 遺構図

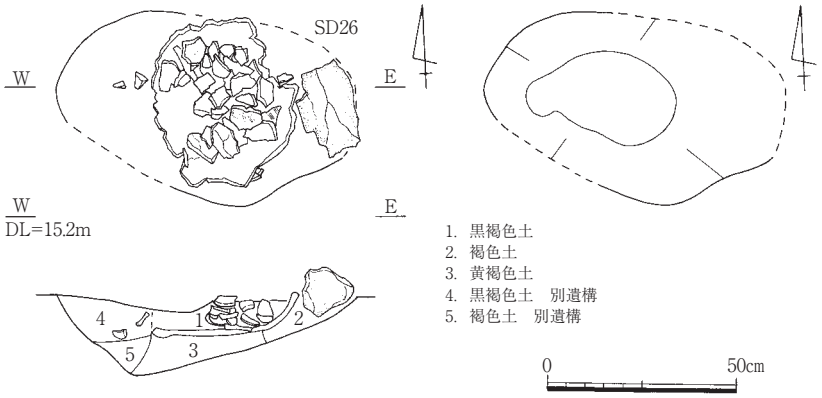


図 4-10　SG7 遺構図

SG7(図 4-10、14)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-11　**切り合い関係**；SD26 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；(0.8) × (0.43)m ×深さ (0.22)m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-83° -W　**覆土**；黄褐色粘質土、褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部、C9-8-11 グリッドに位置する。壺棺群の中のほぼ中心部に位置し、西側に壺棺 SG17、南東に SG13 と隣接する。上部を溝 SD26 に切られ、また部分的に柱穴にも壊されており遺存状態は悪い。

埋納土坑の平面形は楕円形で残存長径 0.8m、短径 0.43m、深さは上部は削られ残存部分で 0.22m を測る。底面は皿状に落ち、壁は緩やかに立ち上がる。

壺棺本体は№1で正位か斜位かは残存状態が悪い為に埋置の方法は判然としない。埋納土坑底面より 4 cmから 10cm程浮いた状態で出土している。壺棺の東側下で長径 23cm程の角礫が出土しており、壺棺の支えの可能性がある。軸方向は N-83° -W で東方向を指す。

覆土は埋納土坑底面が黄褐色粘質土で壁際の両脇は褐色粘質土、壺棺本体内は黒褐色粘質土である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-14 №.1)

№.1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。大きく欠損しており 1/3 程度が残存する。肩部から上半、及び底部は欠損する。残存高は 35.0cmを測る。最大径は胴部中央と考えられ、60cmを測る。器形は胴部中位が張り丸味を持つ。胴部下半は強くすぼまる。整形は外面胴部上半がハケ、ミガキ、下半はハケでミガキを少し施す。内面は落剥しているもののハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。

SG8(図 4-11、14)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-16　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；0.72 × 0.64m ×深さ 0.32m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-4° -E　**覆土**；暗褐色粘質土、褐色粘質土、黄褐色粘質土

出土遺物；弥生大型壺 2 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部、C9-8-16 グリッドに位置する。西南 1.3m 程離れ壺棺 SG9 が位置している。遺存状態は比較的良いものの、壺棺本体№.1 の上部から須恵器片が出土しているところから、一部破壊されていたようである。しかしながら、掘り込みは確認できていない。また土層断面でも柱穴等の痕跡は確認できていない。

埋納土坑の平面形はほぼ円形で 0.72m × 0.64m、深さ 0.32m 程を測る。底面は碗状で壁には幅の狭い段を有する。壁は緩やかに立ち上がる。

壺棺本体№.1 を斜位に埋置し、№.2 の中型壺の底部で蓋をする。埋納土坑底面より 2 cmから 5 cm 程浮いた状態で出土している。軸方向は N-4° -E で頭位は南方向を指す。

覆土は埋納土坑底面上部が暗褐色粘質土、中層は褐色粘質土で水平堆積である。壺棺№.1 の下の底面は黄褐色粘質土である。壺棺内は単一層で締まりのない黒色土で流入土と考えられる。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-14 №.1 、2)

№.1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部は 1/5 程欠損し、口縁部は意図的に打ち欠く。残存高 49cmである。器形は卵形で胴部が張る。最大径は胴部中位にあり 43.8cmを測る。胴部下半はすぼまり、底部はやや小さく、丸味のある平底である。底径は 9.3cmを測る。整形は外面がハケ、ミガキで肩部には放射線状のミガキの痕

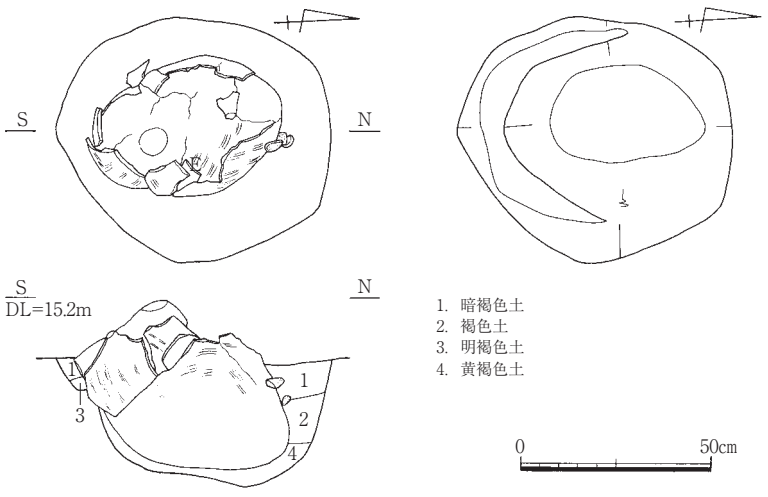


図 4-11　SG8 遺構図

跡が認められる。内面はやや剝落しているもののハケである。胎土は小礫を多量に含む。

№2は蓋に転用されていた弥生土器中型壺である。頸部の一部が残存する。胴部以下は1/4程が欠損する。残存高は37㎝である。器形は卵形で胴部が張る。最大径は胴部上半にあり29㎝を測る。胴部下半はすぼまり、底部は小さく丸味のある平底である。底径は5.6㎝を測る。整形は外面がやや摩耗するものの、タタキ、ハケ、内面上半がナデ、ハケ、下半はハケである。胎土は小礫を多量に含む。

SG9(図4-12、14)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-16他　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ1期　**埋納土坑規模**；0.6 × 0.46m ×深さ0.28m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-69°-E　**覆土**；褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；弥生大型壺1個体、中型壺1個体

所見；Ⅷ区B西側部、C9-8-16グリッドに位置する。南側に壺棺SG10と0.4m離れて隣接する。南側を溝SD35がかすめるように走る。上部は後世に削平されている。

埋納土坑の平面形はやや楕円形で長径0.6m、短径0.46m、深さは上部が削られ残存部分で0.28mを測る。底面は二段になり、壁は緩やかに立ち上がる。

壺棺本体は№1で正位の状態で埋置し、一回り大きな壺№2を胴部上半を打ち欠いたものを入り子状に覆い被せる。埋納土坑底面より20㎝程浮いた状態で出土している。壺棺は埋納土坑内に全体が埋置されていたと考えられるが、先に土器の方を検出し、その後埋納土坑を確認した。埋置時に壺棺が土坑から露出していたかどうかは不明である。壺棺が露出していた場合、盛土をしていた可能性があるものの、判然とはしない。上層で埋納土坑を検出できなかっただけの可能性もある。軸方向はN-69°-Eを指す。

覆土は埋納土坑底面が褐色粘質土で埋め土と考えられ、壺棺本体内は上層に黒色土、下層に黒褐色土が堆積する。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物(図4-14№1、2)

№1は壺棺本体の弥生土器中型壺である。胴部は1/3程欠損する。口縁部は意図的に打ち欠く。残存高40.5㎝である。器形は卵形を呈する。肩部は丸味を持つ。胴部は強く張り、胴部下半はすぼまる。残存最大径は胴部中位にあり30.6㎝である。底部は平底で径6.5㎝でやや小さい。整形は胴部上半外面がタタキ、ハケ、下位がハケ、ミガキ、内面はハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。

№2は入り子にしていた弥生土器大型壺である。胴部下半は欠損し、胴部上半は打ち欠き、胴部中位しか残存しない。

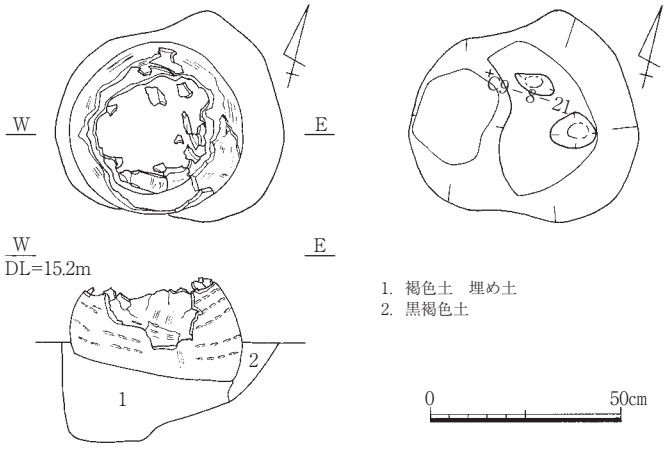


図4-12　SG9遺構図

全体として1/3程しか残存していないが、大型の壺である。体部は丸味を持ち、残存部の最大径は47.8cmを測る。整形は外面上半がハケ、ミガキ、下位がタタキ、ハケ、ミガキ、内面はハケ整形である。胎土は小礫を少量含む。外面には黒斑が付く。

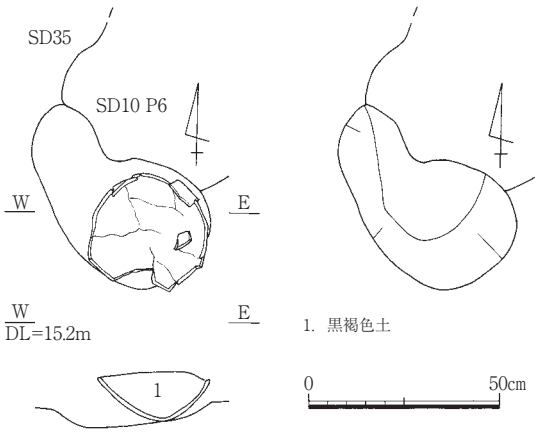


図4-13　SG10遺構図

SG10(図4-13、14)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-21　**切り合い関係**；SB10、SD35に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1期　**埋納土坑規模**；(0.54) × (0.36)m ×深さ (0.06)m　**形状**；円形

主軸方向；N-31° -W　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；弥生中型壺1個体

所見；Ⅷ区B西側部、C9-8-21グリッドに位置する。北側に壺棺SG9と0.4 m離れて隣接する。上部は後世に削平され遺存状態はきわめて悪い。

埋納土坑の平面形は楕円形に近い円形と考えられる。長径0.54m、短径0.36m、深さは上部が削られ残存部分で0.06mを測る。底面は残存長0.25mで壁は緩やかに立ち上がる。

壺棺本体は№1で正位の状態で埋置していたと考えられ、蓋は上部が削平されているためにあったかどうかは不明である。軸方向はN-31° -Wを指す。

覆土は壺棺内が黒褐色土の単一層である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物(図4-14№1)

№1は弥生土器中型壺である。大部分が欠損しており、胴部中位より上は欠損する。残存しているのは全体の1/2程度である。残存高は28.2cmである。器形は卵形で胴部はあまり張らない。最大径は胴部中位で29.2cmである。胴部下半はややすぼまり、底部は小さな平底である。底径は4.4cmである。整形は外面がタタキ、ハケ、内面の中位がハケ、下半がヘラケズリである。器肉はやや薄い。胎土は小礫を多量に含む。

SG11(図4-14、15)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-21 他　**切り合い関係**；SD46に切られる

時期；弥生後期Ⅵ 1期　**埋納土坑規模**；0.66 × 0.46m ×深さ0.25m　**形状**；不整形

主軸方向；N-53° -E　**覆土**；褐色土

出土遺物；弥生大型壺1個体

所見；Ⅷ区B西側部、C9-8-21グリッドに位置する。北側に壺棺SG10と1.4 m離れて隣接する。南側を古代の溝SD46がかすめ通る。上部は後世に削平され遺存状態はきわめて悪い。

埋納土坑の平面形は楕円形に近い不整形である。長径0.66m、短径0.46m、底面は上部が削られ残存部分で長径0.44m、短径0.3mを測り、南寄りに穿たれて深さ0.12mを測る。底面は更に一段

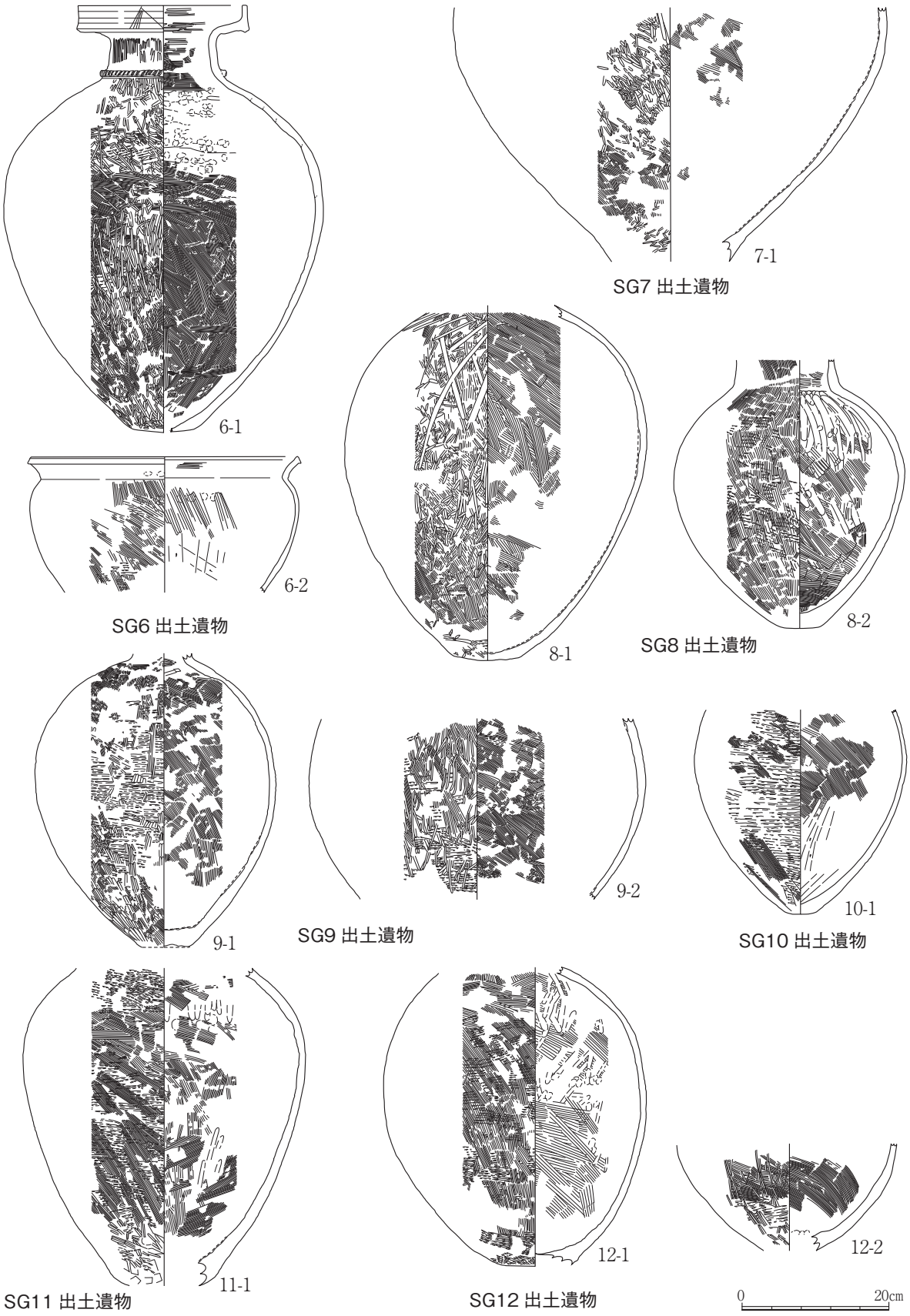


図 4-14　SG6 ～ 12 出土遺物実測図

柱穴状に落ち込む。径 0.2m、深さ 0.13m を測る。柱穴状の落ち込みの壁際には 18㎝の長楕円礫が出土しており、壺棺を安定させる為のものと考えられる。壁は底面際ではなだらかで上部は垂直近くに立ち上がる。

壺棺本体は№ 1 で遺存状態が悪い為に判然としないものの、斜位の状態で埋置していた可能性がある。蓋は上部が削平されているためにあったかどうかは不明である。埋納土坑底面より 5㎝程浮いた状態で出土している。西側部分の破片は大きいものの他は破片となり欠失している部分が多かった。軸方向は N-53° -E を指す。

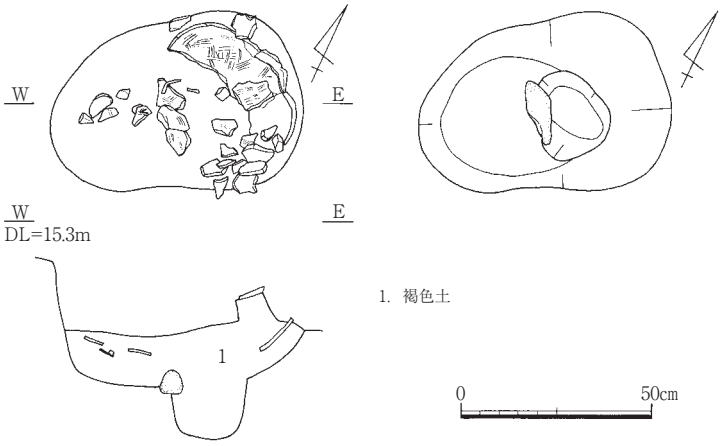


図 4-15　SG11 遺構図

覆土は褐色土の単一層である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-14 №.1)

№.1 は弥生土器大型壺である。1/2 程残存する。残存高は 43.8㎝である。器形はやや長い卵形で胴部上位がやや張る。最大径は胴部上位で 39.0㎝である。底部は欠損するものの平底か。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はナデ、ハケである。胎土は小礫を少量含む。胴部外面に黒斑が付く。

SG12(図 4-14、16)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-22　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；径 0.54m ×深さ 0.35m　**形状**；円形

主軸方向；N-41° -W　**覆土**；褐色土、黒色土、黒褐色土

出土遺物；弥生大型壺 2 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部調査区の東南部、C9-8-22 グリッドに位置する。更に南東部側に壺棺 SG16 と 1.7m 離れている。比較的遺存状態は良い。

埋納土坑の平面形は円形で径 0.54m、深さは 0.35m を測る。底面も円形でほぼ平らで径 0.3m を測る。壁の断面形は箱形でわずかに開き気味に立ち上がる。

壺棺本体は口縁部を打ち欠いた№ 1 で僅かに斜位の状態で埋置

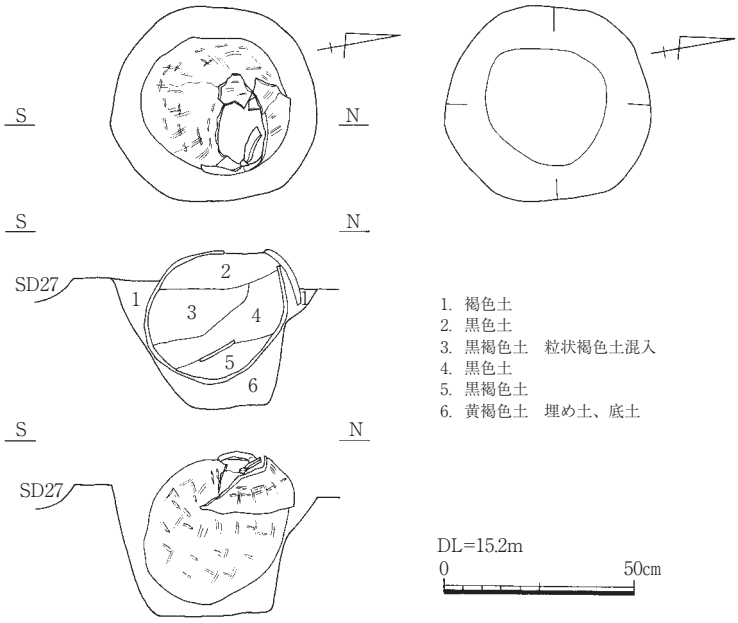


図 4-16　SG12 遺構図

し、壺№ 2 の底部破片で蓋をする。埋納土坑底面より 7 ㎝程浮いた状態で出土している。頭位の軸方向は N-41° -W を指す。

覆土は埋納土坑底面が黄褐色粘質土で埋め土と考えられ、上層の壁際は褐色土である。壺棺本体内は 5 層に分かれ、上層に黒色土、中層に黒褐色土、黒色粘質土、下層に黒褐色粘質土で締まりがない。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-14 №１、2)

№１は壺棺本体の弥生土器大型壺である。口縁部は打ち欠き欠損する。残存高は 41.2㎝である。器形は卵形で最大径は胴部中位で径 32.6㎝を測る。肩部はなだらかである。底部は部分的に欠損するものの、平底で径 11.6㎝である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面がハケ、ナデである。胎土は小礫を多量に含む。

№２は蓋に転用されていた弥生土器大型壺の胴部下半の破片である。残存高は 14.7㎝である。胴部は丸味を持つ。整形は外面がタタキ、ハケ、ミガキ、内面はハケ、ナデである。胎土は小礫を少量含む。

SG13(図 4-17、20)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-11 他　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；0.68 × 0.47m ×深さ 0.26m　**形状**；不整形

主軸方向；N-41° -W　**覆土**；黄褐色土、黒色土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体

所見；Ⅷ BW 区の西側中央部､C9-8-11 グリッドに位置する。北西部に壺棺 SG7 と 0.9m 離れている。遺存状態は悪く、上部は後世に大きく削平されている。

埋納土坑の平面形は長楕円気味の不整形で長径 0.68m、短径 0.47m で南側には柱穴状の張り出しがあるものの､別遺構の可能性が強い。底面も不規則で西側の落ち込みは調査ミスの可能性がある。中央部の落ち込みが本来の底面で深さは 0.26m を測る。壁はなだらかに立ち上がる。

壺棺本体は大型壺の№ 1 で上部が大きく削平されている為に判然としないものの正位の状態で埋置していた可能性がある。埋納土坑底面より 5 ㎝程浮いた状態で出土している。埋納土坑の軸方向は N-41° -W を指す。壺棺本体の頭位は不明である。

覆土は埋納土坑内が黄褐色土、壺棺本体内は黒色土である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-20 №１)

№１は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部下半で 1/4 程度が残存するのみである。残存高は 22.6㎝で

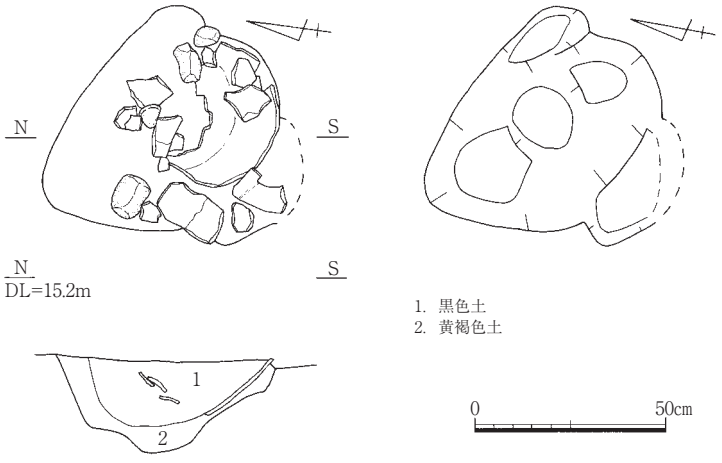


図 4-17　SG13 遺構図

ある。器形は卵形と考えられる。胴部は大きく開き、下半はすぼまる。底部は部分的に欠損するものの、平底で径 10.0cmである。整形は外面がタタキ、ハケ、内面の大部分が落剥するもののハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。胴部下半には黒斑が付く。

SG14(図 4-18、20)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-20 他　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；0.86 × 0.67m ×深さ 0.41m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-69° -E　**覆土**；褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体、弥生中型壺 2 個体

所見；Ⅷ区 B 西側部調査区の東側、C9-8-20 グリッドに位置する。他の壺棺群から離れ、単独で構築されている。遺存状態は横位に埋置した壺棺本体の上部は後世に削平されている。

埋納土坑の平面形は楕円気味で長径 0.86m、短径 0.67m で底面は２段になる。最深部で 0.41m を測る。壁は「U」字状になだらかに立ち上がる。

壺棺本体は大型壺の№ 1 で横位に埋置しており、胴部が大きく削平されている。埋納土坑底面より５cm程浮いた状態で出土している。頭位の軸方向は N-69° -E を指す。口縁部を打ち欠き、蓋をする。№ 2、３は共に壺で完形品近くに復元できている。№ 2 も蓋に転用されていたものと考えられる。№ 4 は胴部破片である。覆土は埋納土坑底面が褐色粘質土、上層が黒褐色粘質土、壺棺本体内は締まりのない黒色土である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-20 №.1 ～ 4)

№.1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部は 1/3 程度が欠損する。口縁部は意図的に打ち欠く。残存高は 56.5cmである。器形は卵形で肩部がなだらかである。底部は大部分が欠損しているものの平底と考えられる。最大径は胴部中位にあり、径 47.4cmである。整形は外面全面がタタキ、上半にミガキ、僅かにハケ、下半はハケ、僅かにミガキを施す。内面は落剥するものの、上半がナデ、ハケ、下半がハケである。胎土は小礫を多量に含む。

№.2 は弥生土器複合口縁壺の口縁部である。№.1 と同一個体の可能性が極めて高い。口縁部は内傾気味に立ち上がる。口径 19.3cmを測る。外面には櫛描波状文を２条、頸部には列点文を 1 条施す。整形は内外面共にハケである。内面には僅

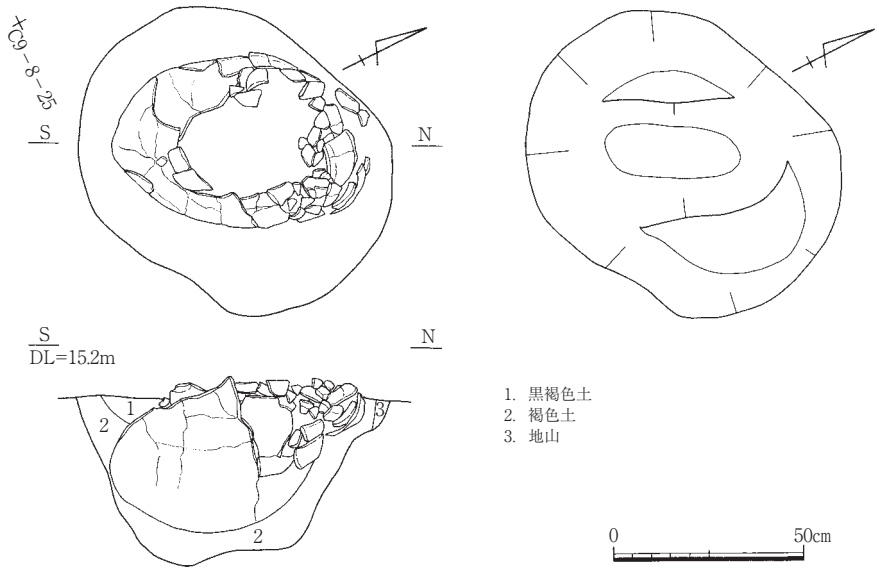


図 4-18　SG14 遺構図

かに指頭痕が残る。胎土は小礫を多量に含む。

№3は弥生土器直口壺である。ほぼ完形品で口縁部、胴部の一部のみが欠ける中型壺である。蓋として転用されていたものと考えられる。口径15.6cm、器高34.4cm、最大径は胴部中位で28.7cmを測る。口縁部は直立し､肩部はなだらかである。胴部は張りを持ち球形である。底部は丸底である。整形は口縁部外面がハケ、胴部はタタキを明瞭に残し、下半はハケである。内面はハケ、ナデである。胎土は小礫を多量に含む。

№4は弥生土器中型壺である。胴部下半のみ残存する。器形は卵形である。残存高は24.3cm、最大径は胴部中位にあり30cmを測る。整形は外面がタタキを明瞭に残し、内面はハケ、ナデである。胎土は小礫を多量に含む。

SG15(図4-19、20)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-10　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ1期　**埋納土坑規模**；0.78 × 0.62m ×深さ0.14m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-71° -W　**覆土**；黒褐色土、黒色土

出土遺物；弥生大型壺2個体、弥生大型鉢1個体

所見；Ⅷ区A 東側部調査区の北東、C9-7-10グリッドに位置する。遺存状態は悪く上部を大きく削平されている。

埋納土坑の平面形は楕円気味で長径0.78m、短径0.62mで底面は長径0.67m、短径0.56mで深さは0.14mで削平されている為に浅い。壁は直立気味に立ち上がる。

壺棺本体は大型壺の№1で正位の状態に埋置されていた可能性が強く、№2の大型鉢、№3の大型壺の破片で蓋をしている。壺棺本体は埋納土坑底面より2cm程浮いた状態で出土している。埋納土坑の底面から礫が3点出土している。№1の壺棺本体の下に敷くように出土していることから、壺棺を安定させる為に据え置かれた礫と考えられる。埋納土坑の軸方向はN-71° -Wを指す。覆土は埋納土坑内が黒褐色土と一部壁際に褐色粘質土、壺棺内は締まりのない黒色土である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物(図4-20 №1 ～ 3)

№1は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部は1/3程度が残存するのみである。残存高は37.0cmである。器形は卵形で底部は僅かに丸味を持つ平底である。最大径は胴部中位にあり､径36.2cmである。整形は外面に僅かにタタキ痕を残し、タテハケである。内面は上半が指頭、中位以下はハケである。胎土は小礫を多

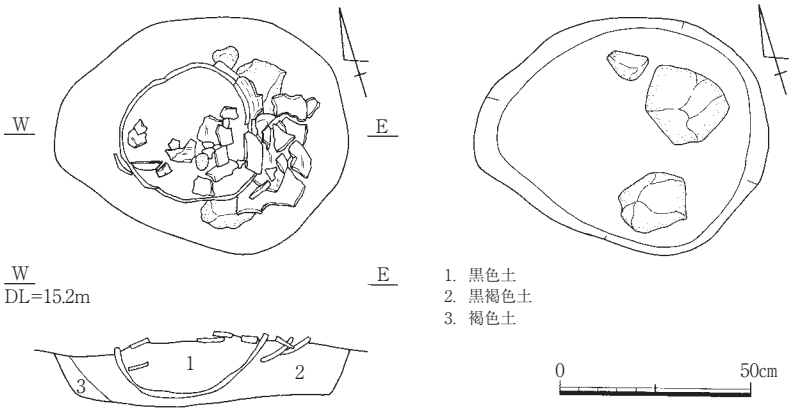


図4-19　SG15遺構図

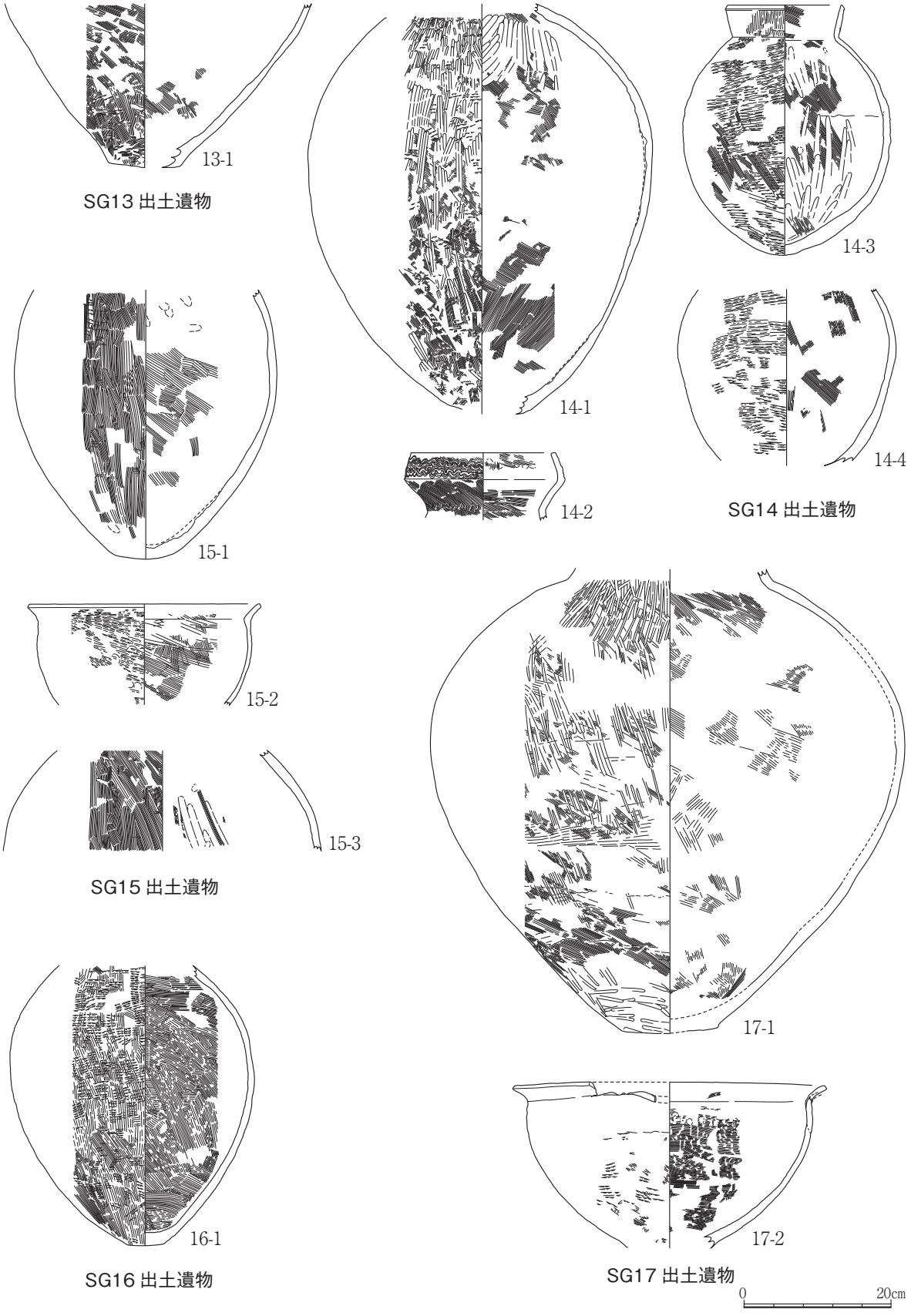


図 4-20　SG13 ～ 17 出土遺物実測図

量に含む。

№2は弥生土器大型鉢である。蓋に転用した鉢である。口縁部はタタキ伸ばしで短く外傾する。口径31.6cmを測る。口唇部は平坦である。肩部は張らない。整形は外面にタタキ痕を明瞭に残し、内面はハケ整形である。胎土は小礫を少量含む。

№3は弥生土器大型壺の肩部破片である。1/5以下しか残存していない。器形は卵形か。肩部はなだらかである。整形は外面が僅かにタタキを残し、ハケ、内面はハケ、ナデである。胎土は小礫を多量に含む。

SG16(図4-20、21)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-23　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ1期　**埋納土坑規模**；径0.47m×深さ0.35m　**形状**；円形

主軸方向；－　**覆土**；黒色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；弥生中型壺1個体

所見；Ⅷ区B西側部調査区の南東、C9-8-23グリッドに位置する。北西部には壺棺SG12が1.7m程離れて位置する。上部は後世の削平を受けているものの、下部の遺存状態は良い。

埋納土坑の平面形は円形で径0.47mで壺棺の埋納土坑としては最も小型のものである。深さは0.35mで小さいながらもしっかりした掘り方を持つ。底面径は0.21mで壁は「U」字状に立ち上がる。

壺棺本体は中型壺の№1で、正位の状態で埋置されていた。壺棺の最大径が30.2cmで下部では埋納土坑とほぼ同一の大きさであるところから、壁に密着するような形で埋置されている。狭い埋納土坑と壺棺のため、土層断面図は作成できていない。調査中での観察では壺棺内は黒色粘質土、壺棺の外側、埋納土坑の底面は黒褐色粘質土である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物(図4-20№1)

№1は壺棺本体の弥生土器中型壺である。口縁部は欠損する。意図的な打ち欠きか、後世の削平の為かは判断できない。残存高は38.5cmである。器形は卵形で肩部はなだらかである。最大径は胴部中位で径30.2cmである。胴部下半はすぼまり、底部は小さな平底で僅かに丸味を持つ。整形は外面がタタキ、ハケ、内面がハケである。胎土は小礫を少量含む。

SG17(図4-20、22)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-15

切り合い関係；－

時期；弥生後期Ⅵ1期　**埋納土坑規模**；0.94×0.78m×深さ0.33m　**形状**；楕円形

主軸方向；N-19°-E

覆土；黄褐色粘質土、黒褐色土、黒色土

出土遺物；弥生大型壺1個体、大型鉢1個体

所見；Ⅷ区A東側部調査区の東端、C9-7-15グ

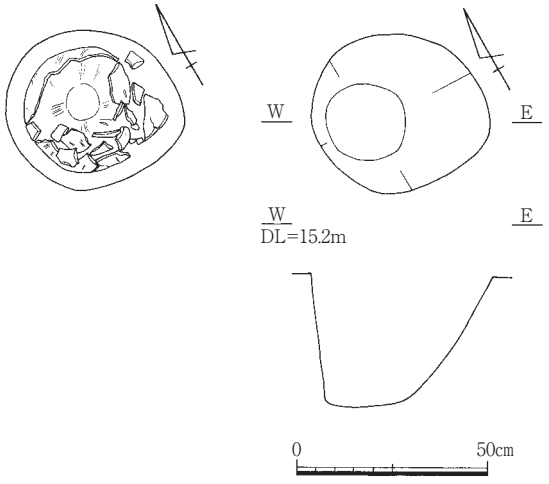


図4-21　SG16遺構図

リッドに位置する。遺存状態は悪く、上部を大きく削平され、壺棺本体は半分以下しか残存しない。

埋納土坑の平面形は楕円気味で長径 0.94m、短径 0.78m で底面は長径 0.65m、短径 0.55m で深さは残存で 0.33m を測る。壁は皿状を呈し、なだらかに立ち上がる。

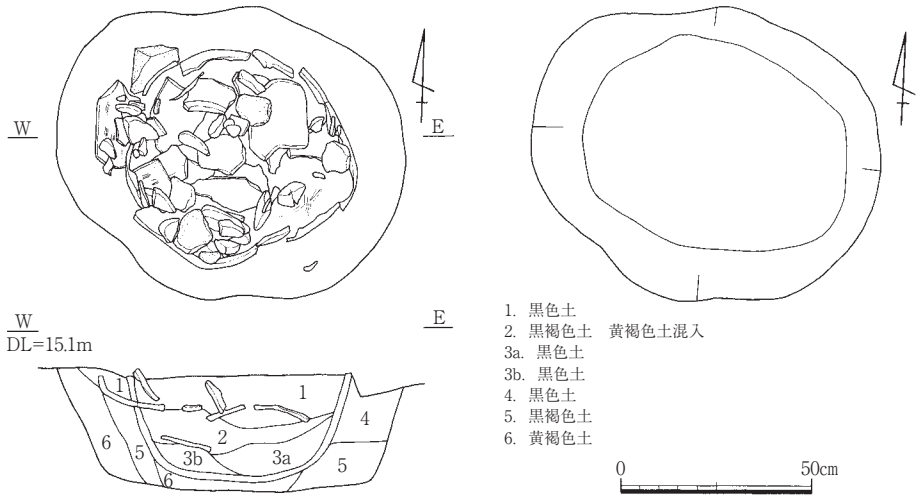


図 4-22　SG17 遺構図

壺棺本体は最大級の大型壺№ 1 で、横位の状態で埋置されていた可能性が強く、やや心持ち頭位を上げている。№2の大型鉢は蓋として転用されていたと考えられるが、削平を受けて破片となっており、壺棺の口からずれて出土している。壺棺本体は埋納土坑底面より２㎝程浮いた状態で出土している。埋納土坑の底面からは７点程礫が出土しており、壺棺を安定させる為の礫と考えられる。壺棺内からも２点礫が出土しているものの、意図的に礫を入れたものか、後世に入ったものかどうかは不明である。壺棺の頭位方向は N-19° -E を指す。

覆土は埋納土坑内の壁際は黄褐色粘質土、底面が黒褐色土である。壺棺内はレンズ状堆積で下から黒色土、黒褐色土、黒色土の順で堆積する。棺内からは礫以外に他の遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-20 №１、2)

№１は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部は 1/3 程度が残存する。口縁部は意図的に打ち欠く。残存高は 63.8㎝、最大径 64.6㎝、底径 13.2㎝を測る本遺跡では最大の壺棺である。器形は球形に近く、肩部はなだらかで最大径は胴部中位よりやや上にある。胴部下半はすぼまり、底部はやや丸味を持つ平底である。整形は外面胴部上半がハケ、ミガキ、下半はハケである。内面は落剥しているもののハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。胴部に黒斑が付く。

№２は弥生土器大型鉢である。1/2 程残存する。蓋に転用した鉢である。口径 42.6㎝を測り、鉢としては最大である。№１の壺棺本体にあった大きさである。口縁部はタタキ伸ばしで短く外反する。口唇部は平坦である。肩部は張らない。胴部はすぼまる。底部は欠損し、不明である。整形は外面がやや落剥しているもののタタキ、ハケ、内面はハケ整形である。胎土は小礫を多量に含む。

SG18(図 4-23、24)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-5　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期Ⅵ 1 期　**埋納土坑規模**；0.86 × 0.73m ×深さ 0.24m　**形状**；円形

主軸方向；N-3° -W　**覆土**；黄褐色粘質土、黒褐色土、黒色土

出土遺物；弥生大型壺 1 個体

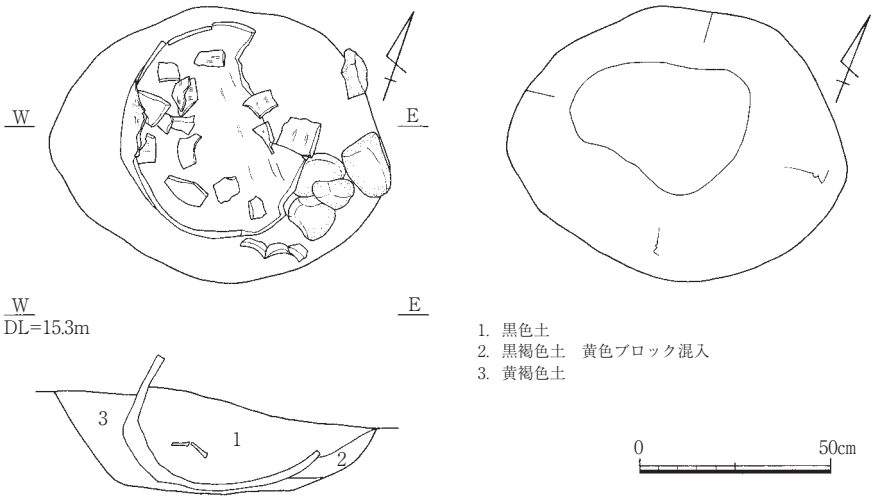


図 4-23　SG18 遺構図

所見；Ⅷ区 A 東側部調査区の北東、C9-7-5 グリッドに位置する。壺棺群の西北隅に単独に近い状態で検出している。遺存状態は悪く上部を大きく削平されている。

埋納土坑の平面形はほぼ円形で径 0.86m、底面は瓢箪形に近い楕円形で長径 0.46m、深さは 0.24m である。壁はなだらかに立ち上がる。

壺棺本体は大型壺の№ 1 で、横位の状態に埋置しており、上部を後世に真っ二つに削平されている。№ 2 の複合口縁壺の口縁部は№ 1 と同一個体と考えられ、№ 1 の肩部脇から出土してる。蓋はあったかどうかは不明である。壺棺本体は埋納土坑底面より２㎝程浮いた状態で出土している。壁際では５点礫が出土しており、壺棺にほとんど接しておらず、壺棺を安定させる働きをしていない。埋納土坑の軸方向は N-3° -W を指す。覆土は埋納土坑内底面が黄褐色土、黒褐色土で、壺棺内は黒色土である。棺内からは遺物は出土していない。

本壺棺は出土土器からして弥生時代後期後半である。

出土遺物 (図 4-24 №１、2)

№ 1 は壺棺本体の弥生土器大型壺である。胴部は 1/2 程度が残存するのみである。口縁部は意図的か削平による欠損かは不明である。残存高は 51.7㎝である。器形は胴部の張る卵形である。肩部はなだらかで最大径は胴部中位よりやや上にあり 52.4㎝を測る。胴部下半はすぼまり、底部はやや丸味を持つ平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はナデ、ハケである。底部内面には強いナデ痕が残る。胎土は小礫を少量含む。胴部下半に黒斑が付く。

№ 2 は弥生土器複合口縁壺の口縁部破片である。№ 1 と同一個体の可能性が極めて高い。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は平坦である。口径 23.4㎝を測る。口縁部の成形方法は広口壺に粘土帯を積み上げた接合痕を明瞭に残す。頸部は強く外反する。整形は外面がハケ、ミガキ、内面がハケ整形である。胎土は小礫を少量含む。

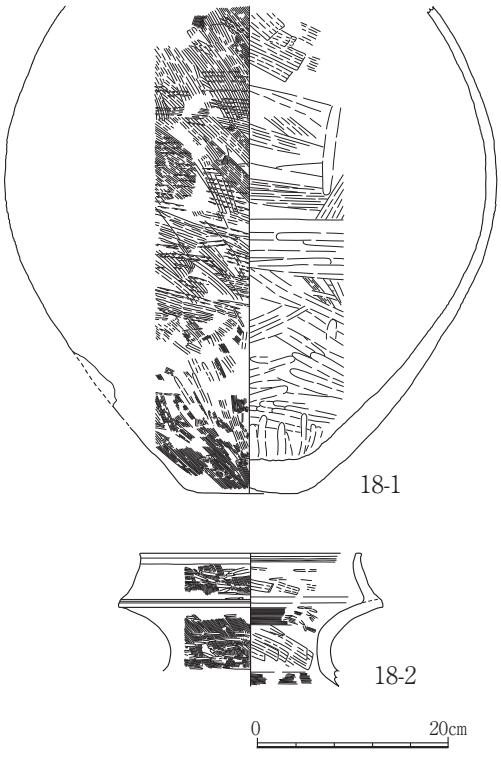


図 4-24　SG18 出土遺物実測図

表 4-2　壺棺墓遺物観察表

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径	特徴	胎土
図 4-3	SG1	1	弥生土器	壺・胴部		(42.6)	10.3	大型、胴部上半、口縁欠損、体部上半は丸味、底部平底、外面上半タタキ、ハケ、ナデ、下半ハケ、若干タタキ、内面粗いハケ、ナデ	小礫多量
図 4-3	SG1 －№ 13	2	弥生土器	壺・胴部		(20.4)	7.8	大型、上半部欠損、残存最大径は 43.6cm、底部丸底気味の平底、外面ハケ、ナデ、下半内面ハケ	小礫少量
図 4-3	SG2 －№ 2	1	弥生土器	壺		(47)	8.4	大型、胴部半分程欠損、口縁意図的に打ち欠き、卵形で残存高 47cm、最大径胴部中央 43.6cm、やや丸味を持った平底、外面タタキ、ハケ、内面上半強いナデ、ハケ、外面黒斑	小礫少量
図 4-3	SG2 －№ 1・2	2	弥生土器	鉢	(26.2)			大型、蓋に転用、胴部下半欠損、口縁「く」字状に屈曲、口唇平坦、胴部やや丸味、口縁外面ナデ、ハケ、胴部タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫少量、微白色鉱物粒微量
図 4-3	SG2 －№ 3	3	弥生土器	壺・胴部				中型、3/4 欠損、肩部なだらか、体部丸味、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面上半強いナデ、下半ヘラケズリ	小礫少量
図 4-8	SG3 －№ 1・3・5・6・8	1	弥生土器	壺・胴部		(32)		大型、胴部下半残存、体部丸味、最大径 56cm、外面タタキ、ハケ、下半ミガキ、内面ハケ、ヘラケズリ	小礫少量
図 4-8	SG4 －№ 2	1	弥生土器	壺		(43)	8.2	大型、1/3 程胴部欠損、口縁意図的打ち欠き、最大径胴部中央 34.4cm、平底、胴部卵形、肩部なだらか、頸部すぼまる、外面タタキ、ハケ、内面部分的に落剥、ハケ、上半指頭	小礫多量
図 4-8	SG4 －№ 1・2	2	弥生土器	鉢	(31)	22	7.4	大型、蓋に転用、1/2 程欠損、口縁緩やかに外反、口唇平坦、片口 1 ケ所、体部なだらかでやや丸味、平底、外面幅広タタキ、内面ハケ、体部外面黒斑	小礫多量
図 4-8	SG5 －№ 2	1	弥生土器	壺		(53.5)	11.1	大型、1/3 程胴部欠損、口縁意図的打ち欠き、最大径胴部中央 46cm、平底、胴部卵形、肩部なだらか、外面タタキ、ハケ、下半ミガキ、内面ケズリ、ハケ、体部上半黒斑	小礫多量
図 4-8	SG5 －№ 2	2	弥生土器	鉢	(29.6)	21	(6.6)	大型、蓋に転用、ほぼ完形、口縁緩やかに外反、口唇平坦、片口 1 ケ所、体部なだらかでやや丸味、平底、外面口縁、胴部上半ハケ、胴部中央タタキ、ハケ、下半ハケ、内面ハケ	小礫少量
図 4-13	SG6 －№ 1・4・6・ 7・8・10・11・16・18	1	弥生土器	壺	22.5	(58.8)	(8.4)	阿波搬入品、大型複合口縁壺、1/2 程残存、口縁直立、山形鋸歯文 1 ケ所、口唇平坦、頸部内傾気味、刻み目突帯、肩部なだらか、胴部上半最大径 44cm、胴部下半すぼまる、底部やや丸味のある平底、口縁外面ナデ、内面ハケ、頸部外面ミガキ、胴部ハケ、ミガキ、内面上半指頭、ハケ、下半ハケ、胴部上半黒斑	小礫多量
図 4-13	SG6 －№ 17	2	弥生土器	鉢	(36.6)			大型、蓋に転用、1/3 程残存、底部欠損、口縁部「く」字状に外傾、口唇僅かに拡張、平坦、肩部僅かに張る、丸味を持つ、口縁部外面ナデ、内面ハケ、胴部外面タタキ、ナデ、内面上半粗いハケ、下半ヘラケズリ	小礫多量
図 4-13	SG7 －№ 1・3・4	1	弥生土器	壺・胴部		(35)		大型、1/3 程残存、胴部強く張る、胴部下半すぼまる、残存最大径 60cm、底部欠損、外面ハケ、ミガキ、内面剝落、ハケ	小礫多量
図 4-13	SG8 －№ 5	1	弥生土器	壺・胴部		(49)	(9.3)	大型、胴部 1/5 程欠損、口縁意図的に打ち欠く、卵形、胴部張る、最大径胴部中位 43.8cm、胴部下半すぼまる、底部やや小さく丸味のある平底、外面ハケ、ミガキ、肩部放射線状のミガキ、内面やや剝落、ハケ	小礫多量
図 4-13	SG8 －№ 3・4・5	2	弥生土器	壺		(37)	5.6	中型、蓋に転用、頸部一部が残存、胴部以下 1/4 程欠損、卵形、胴部張る、最大径胴部上半 29cm、胴部下半すぼまる、底部小さく丸味のある平底、外面やや摩耗、タタキ、ハケ、内面上半ナデ、ハケ、下半ハケ	小礫多量
図 4-13	SG9 －№ 12	1	弥生土器	壺		(40.5)	(6.5)	中型、胴部は 1/3 程欠損、口縁意図的に打ち欠く、卵形、肩部丸味、胴部強く張る、胴部下半すぼまる、残存最大径胴部中位 30.6cm、平底やや小さい、胴部上半外面タタキ、ハケ、下位ハケ、ミガキ、内面ハケ	小礫多量
図 4-13	SG9 －№ 11	2	弥生土器	壺・胴部		(47.8)		大型、入り子、胴部下半欠損、胴部上半打ち欠き、胴部中位のみ残存、体部丸味、最大径は 47.8cm、外面上半ハケ、ミガキ、下位タタキ、ハケ、ミガキ、内面ハケ、外面黒斑	小礫少量

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径(cm)	器高	底径	特徴	胎土
図 4-13	SG10 －No.1	1	弥生土器	壺・胴部		(28.2)	(4.4)	胴部中位より上は欠損、1/2 残存、卵形、胴部はあまり張らない、最大径胴部中位 29.2cm、胴部下半ややすぼまる、小さな平底、外面タタキ、ハケ、内面中位ハケ、下半ヘラケズリ、器肉やや薄い	小礫多量
図 4-13	SG11 － No.7・11・12	1	弥生土器	壺・胴部		(43.8)		1/2 程残存、やや長い卵形、胴部上位やや張る、最大径胴部上位 39.0cm、底部欠損、平底か、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ、胴部外面黒斑	小礫少量
図 4-13	SG12 －No.2	1	弥生土器	壺・胴部		(41.2)	(11.6)	大型、口縁は打ち欠き欠損、卵形、最大径胴部中位径 32.6cm、肩部なだらか、平底径 11.6cm、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 4-13	SG12 － No.1・2	2	弥生土器	壺・胴部		(14.7)		大型、胴部下半、蓋に転用、胴部丸味を持つ、外面タタキ、ハケ、ミガキ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 4-20	SG13 －No.2	1	弥生土器	壺・胴部		(22.6)	(10.0)	大型、胴部下半 1/4 程度残存、卵形か、胴部大きく開く、下半はすぼまる、平底、外面タタキ、ハケ、内面大部分落剥、ハケ、胴部下半黒斑	小礫多量
図 4-20	SG14 － No.2・14	1	弥生土器	壺・胴部		(56.5)		大型、壺棺本体、胴部 1/3 程度欠損、口縁意図的に打ち欠く、卵形、肩部はなだらか、平底か、最大径胴部中位径 47.4cm、外面全面タタキ、上半ミガキ、僅かにハケ、下半ハケ、僅かにミガキ、内面落剥、上半ナデ、ハケ、下半ハケ	小礫多量
図 4-20	SG14 －No.1	2	弥生土器	壺・口縁	(19.3)			複合口縁壺、No.1 と同一個体か、口縁内傾気味に立ち上がる、外面櫛描波状文２条、頸部列点文１条、内外面共にハケ、内面僅かに指頭痕	小礫多量
図 4-20	SG14 －No.1	3	弥生土器	壺	(15.6)	34.4		直口壺、ほぼ完形品、蓋に転用、最大径胴部中位 28.7cm、口縁直立、肩部なだらか、胴部張る、球形、丸底、口縁外面ハケ、胴部タタキ明瞭、下半ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 4-20	SG14 －No.2	4	弥生土器	壺・胴部		(24.3)		中型壺、胴部下半残存、卵形、残存高 24.3cm、最大径胴部中位 30cm、外面タタキ明瞭、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 4-20	SG15 －No.1	1	弥生土器	壺・胴部		(37.0)	8.0	大型、壺棺本体、胴部 1/3 程度残存、卵形、僅かに丸味を持つ平底、最大径胴部中位径 36.2cm、外面僅かにタタキ痕、タテハケ、内面上半指頭、中位以下ハケ	小礫多量
図 4-20	SG15 －No.2	2	弥生土器	鉢	31.6			大型鉢、蓋に転用、口縁タタキ伸ばし、短く外傾、口唇平坦、肩部張らない、外面明瞭にタタキ痕、内面ハケ	小礫少量
図 4-20	SG15 －No.2	3	弥生土器	壺・肩部				大型壺肩部破片、1/5 以下残存、卵形か、肩部なだらか、外面僅かにタタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 4-20	SG16 －No.2	1	弥生土器	壺・胴部		(38.5)	7.0	中型、壺棺本体、口縁欠損、意図的打ち欠きか削平か不明、卵形、肩部なだらか、最大径胴部中位径 30.2cm、胴部下半すぼまり、小さな平底、僅かに丸味、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫少量
図 4-20	SG17	1	弥生土器	壺・胴部		(63.8)	(13.2)	大型、最大の壺棺、胴部 1/3 程残存、口縁部意図的打ち欠き、最大径 64.6cm、球形に近い、肩部なだらか、最大径胴部中位よりやや上、胴部下半すぼまる、平底、やや丸味、外面胴部上半ハケ、ミガキ、下半ハケ、内面落剥、ハケ、胴部黒斑	小礫多量
図 4-20	SG17	2	弥生土器	鉢	(42.6)	(22.8)		大型鉢、最大の鉢、1/2 程残存、蓋に転用、口縁タタキ伸ばし、短く外反、口唇平坦、肩部張らない、胴部すぼまる、外面やや落剥、タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫多量
図 4-24	SG18	1	弥生土器	壺・胴部		(51.7)	13.1	大型、壺棺本体、1/2 程残存、口縁意図的か削平による欠損かは不明、卵形、胴部張る、肩部なだらか、最大径胴部中位よりやや上、52.4cm、胴部下半すぼまる、やや丸味を持つ平底、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ、底部内面強いナデ痕、胴部下半黒斑	小礫少量
図 4-24	SG18	2	弥生土器	複合口縁壺・口縁部	(23.4)			複合口縁壺口縁破片、No.1 と同一個体、口縁内湾気味、口唇平坦、口縁成形方法広口壺に粘土帯を積み上げる、頸部強く外反、外面ハケ、ミガキ、内面ハケ整形	小礫少量

第５節　土坑

本調査区では土坑 (SK) は 106 基検出した。土坑の密集度は比較的少なく、調査区全体に点在している。形状は様々あるが楕円形、円形のものが多く認められる。

時期的には弥生時代後期後半の土坑は SK4、５、６等を上げることができる。古墳時代に含まれるものは SK69 で古墳時代後期の土坑墓と考えられるものである。遺物には須恵器長頸壺が出土している。古代のものは SK91、106 等が該当する。報告書では遺物が伴い時期決定が可能なものを主として取り上げた。

表 5-1　土坑一覧表

SK 番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模 (m)	規模 (m)	深さ (m)	遺物	切り合い
SK1	Ⅷ BE	C9-5-8		楕円形？	N-26° -W	0.87	0.44	0.49	弥生細片	
SK2	Ⅷ BE	C10-1-11	弥生後期			(0.82)		(0.29)	弥生甕、鉢	
SK3	Ⅷ BE	C9-10-4 他	近世	長楕円形	N-88° -W	(2.33)	1.08	0.42	陶磁器	ST10 切る、SD2 切られる
SK4	Ⅷ BE	C10-6-14 他	弥生後期	溝状	N-78° -W	1.86	0.49	0.12	弥生壺、甕、鉢	
SK5	Ⅷ BE	C10-6-8	弥生後期	楕円形	N-3° -W	1.00	0.80	(0.06)	弥生甕、鉢	
SK6	Ⅷ BE	C9-10-14	弥生後期	楕円形	N-9° -W	1.22	0.72	0.12	弥生壺、鉢	SD11 切られる
SK7	Ⅷ BE	C9-10-11	弥生後期	楕円形	N-62° -W	0.84	0.39	0.06	弥生甕	
SK8	Ⅷ BE	C9-5-24 他	近世	長楕円形	N-84° -W	2.42	0.92	0.72	陶器	ST9 切る、SD2 切られる
SK9	Ⅷ BE	C9-9-5	古代？	楕円形	N-11° -E	0.99	0.73	0.18	土師坏	
SK10	Ⅷ BE	C9-10-11 他	近世	長方形	N-7° -E	1.58	0.68	0.09		SK29、SD11 切る
SK11	Ⅷ BE	C10-6-9	弥生？	長楕円形	N-75° -W	0.82	0.45	0.24	弥生細片	
SK12	Ⅷ BE	C9-5-23 他	弥生後期	溝状	N-20° -W	(1.77)	0.58	0.21	弥生甕	SB2・3 切られる
SK13	Ⅷ BE	C9-5-18 他	弥生後期	溝状	N-61° -W	(0.79)	0.44	0.24	弥生甕	SB2・3 切られる
SK14	Ⅷ BE	C9-5-20	近世	円形？		(0.77)		(0.31)	握り鋏	SD17 切られる
SK15	Ⅷ BE	C9-5-12	近世	楕円形	N-77° -W	0.72	0.50	0.05	青磁	
SK16	Ⅷ BE	C9-4-15	弥生？	楕円形	N-19° -W	1.10	0.49	0.16	弥生細片	
SK17	Ⅷ BE	C10-6-19 他	弥生	長楕円形	N-11° -W	(1.37)	0.48	0.21	弥生細片	
SK18	Ⅷ BE	C10-6-14 他	弥生？	溝状	N-17° -W	1.52	0.38	0.06	須恵横瓶	
SK19	Ⅷ BE	C10-6-9 他	弥生	長楕円形	N-84° -W	0.92	0.42	0.06	弥生細片	
SK20	Ⅷ BE	C9-10-8	弥生	長楕円形	N-22° -W	(1.28)	0.71	0.09	弥生細片	
SK21	Ⅷ BE	C9-10-7 他	弥生？	長楕円形	N-71° -E	(1.18)	0.42	0.28	弥生細片	
SK22	Ⅷ BE	C9-10-7	弥生？	長楕円形	N-86° -E	0.37	0.32	0.13	弥生細片	SB4 切られる
SK23	Ⅷ BE	C9-10-3 他	弥生？	長方形	N-49° -E	(1.32)	0.72	0.05	弥生細片	SB4 切られる
SK24	Ⅷ BE	C9-10-11	弥生後期	長方形	N-8° -E	1.44	0.81	0.15	弥生甕	SD24 切られる
SK25	Ⅷ BE	C9-10-11	弥生？	長方形	N-45° -W	1.62	0.84	0.19	弥生細片	
SK26	Ⅷ BE	C9-9-15 他	弥生？	長方形	N-81° -E	0.78	0.62	0.23	弥生細片	ST14 切る
SK27	Ⅷ BE	C9-9-10	弥生？	楕円形	N-62° -W	1.24	0.53	0.43	弥生細片	SD15 切られる
SK28	Ⅷ BE	C9-9-20	弥生？	長楕円形	N-5° -E	1.22	0.40	0.35	弥生細片	
SK29	Ⅷ BE	C9-10-11 他	弥生？	楕円形	N-86° -W	1.54	0.73	0.30	弥生細片	SK10 切られる
SK30	Ⅷ BW	C9-8-15	古代？	方形	N-45° -E	1.08	0.72	0.13	須恵坏	SD37 切る
SK31	Ⅷ BW	C9-8-22 他	弥生？	楕円形	N-10° -E	1.28	0.89	0.36	弥生細片	SD27 切られる
SK32	Ⅷ BW	C9-8-21	弥生？	長楕円形					弥生壺、高坏	
SK33	Ⅷ BW	C9-8-21	弥生後期	長楕円形	N-19° -E	(0.72)	0.43	0.12	弥生甕	
SK34	Ⅷ BW	C9-9-17	弥生？	円形？					弥生甕	
SK35	Ⅷ BW	C9-9-18	弥生？	円形					弥生細片	
SK36	Ⅷ BW	C9-8-10 他	古代	大型長方形	N-6° -W	4.46	1.06	0.39	須恵坏	ST12 切る
SK37	Ⅷ BW	C9-8-18 他	弥生後期	円形		1.03		0.26	弥生細片	
SK38	Ⅷ BW	C9-8-3	弥生後期	溝状	N-4° -W	1.82	0.33	0.04	弥生鉢	
SK39	Ⅷ BW	C9-8-20 他	古代？	大型楕円形	N-82° -E	2.36	1.14	0.08	須恵甕片	SD25・26 切られる
SK40	Ⅷ BW	C9-3-25	弥生？	楕円形	N-81° -W	1.08	0.90	0.27	弥生細片	
SK41	Ⅷ BW	C9-13-1 他	古墳？	大型楕円形	N-45° -E	(2.41)	1.25	0.07	弥生甑、甕	SX45、SD46 切られる
SK42	Ⅷ BW	C9-4-21	弥生後期	長楕円形	N-47° -E	1.72	0.70	0.30	弥生甕	SB18 切られる
SK43	Ⅷ BW	C9-8-7	弥生？	円形		(0.60)		(0.10)	弥生細片	SD47 切られる
SK44	Ⅷ AE	C9-7-5	弥生	円形		0.72		0.34	弥生支脚	ST25 切る
SK45	Ⅷ BW	C9-8-24	弥生？	円形		(0.68)		(0.30)	弥生細片	
SK46	Ⅷ BW	C9-4-21 他	弥生後期	大型円形	N-82° -E	1.32	1.26	0.19	弥生甕	SB18 切られる
SK47	Ⅷ BW	C9-8-17 他	弥生後期	長楕円形	N-60° -E	(2.80)	(0.82)	0.21	弥生甕	
SK48	Ⅷ BW	C9-8-2 他	弥生？		N-65° -E	(2.35)	0.95	0.41	弥生甕	

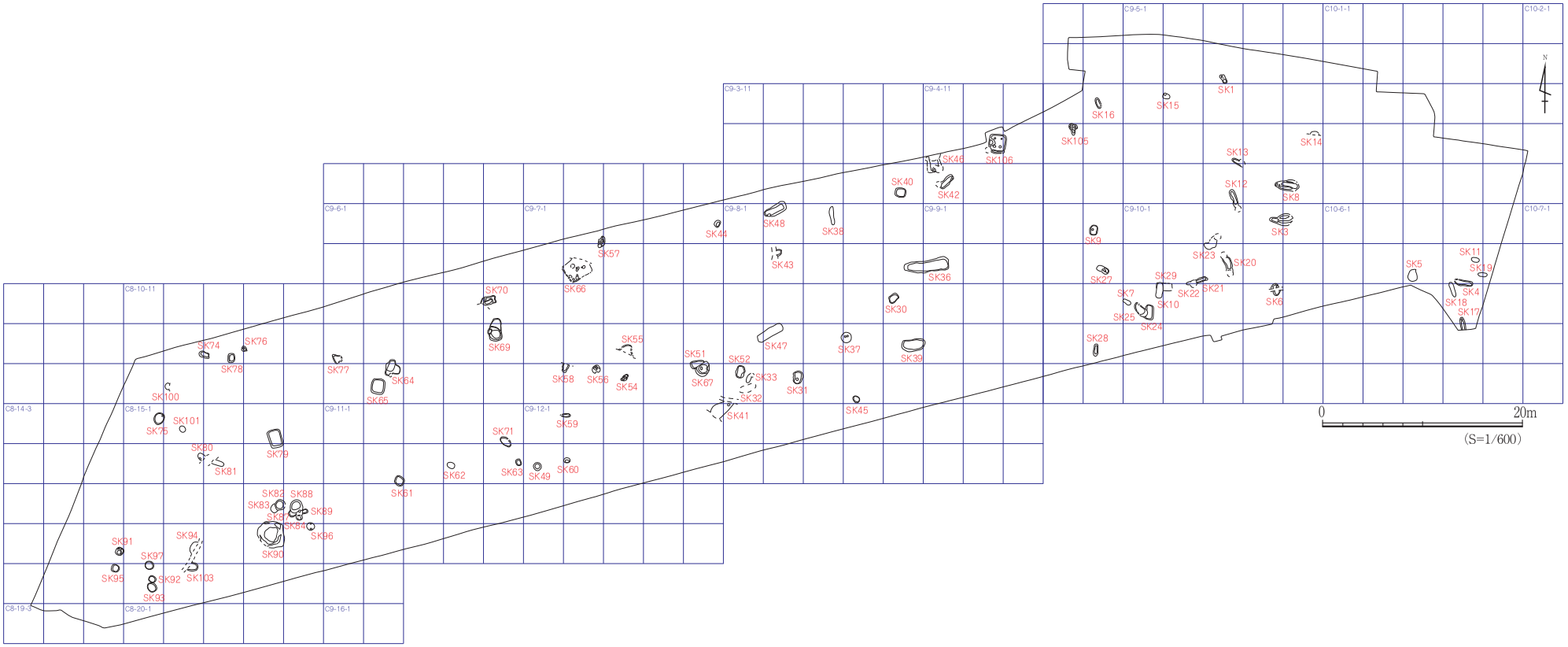

C8-10-11
C8-14-3
C8-15-1
C8-19-3
C8-20-1
C9-6-1
C9-7-1
C9-8-1
C9-9-1
C9-10-1
C9-11-1
C9-12-1
C9-16-1
C9-3-11
C9-4-11
C9-5-1
C10-1-1
C10-2-1
C10-6-1
C10-7-1
N
0
20m
(S=1/600)

図 5-1　土坑全体配置図

SK番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
SK49	Ⅷ AE	C9-12-6	古代	円形		0.80		0.23	須恵	SD79・80 切る
SK50	Ⅷ AE	C9-12-4 他		円形		1.08		0.08	弥生細片	SX47 切る
SK51	Ⅷ AE	C9-7-20 他		楕円形	N-83° -E	1.40	0.96	0.15	弥生細片	SK67 切る
SK52	Ⅷ BW	C9-8-21		楕円形	N-14° -E	1.22	0.86	0.27	弥生細片	
SK53	Ⅷ AE	C9-7-24 他	古代	楕円形？					土師甕	
SK54	Ⅷ AE	C9-7-23				(0.74)	(0.46)	(0.17)		
SK55	Ⅷ AE	C9-7-18				(1.08)	(0.90)	0.05	弥生細片	SD46 切られる
SK56	Ⅷ AE	C9-7-22		円形		0.80		0.31	弥生細片	SD76 切る
SK57	Ⅷ AE	C9-7-2 他	古代	楕円形	N-20° -E	1.20	0.68	0.09	須恵甕、土師坏	
SK58	Ⅷ AE	C9-7-21 他	古代	楕円形？	N-22° -E	(0.84)	0.70	0.13	土師甕、把手	
SK59	Ⅷ AE	C9-12-2 他		長楕円形	N-90°	(0.84)	0.35	0.08	弥生細片	ST30 切る
SK60	Ⅷ AE	C9-12-7		楕円形	N-83° -W	0.62	0.56	0.15	弥生細片	SK77 切る
SK61	Ⅷ AE	C9-11-7 他	古代	方形	N-64° -W	0.98	0.92	0.16	土師坏	ST35 切る
SK62	Ⅷ AE	C9-11-9		楕円形	N-66° -W	0.76	0.56	0.13	弥生細片	SD86 切る
SK63	Ⅷ AE	C9-11-10 他	古代	楕円形	N-15° -W	0.68	0.48	0.20	土師坏	SD79 切る
SK64	Ⅷ AE	C9-6-22 他	古代？	不整形	N-16° -E	1.67	1.44	0.22	土師坏	
SK65	Ⅷ AE	C9-6-22	古代	方形	N-8° -E	1.56	1.34	0.18	土師坏	ST34 切る
SK66	Ⅷ AE	C9-7-7 他	古代？	方形？	N-57° -E	2.44	2.00	0.15	土師甕	SD25 切られる
SK67	Ⅷ AE	C9-7-25 他	弥生後期	円形		1.44		0.42	弥生細片	SK51 切られる
SK68	Ⅷ AE	C9-7-25 他	弥生後期	楕円形					弥生細片	
SK69	Ⅷ AE	C9-6-20 他	古墳後期	長楕円形	N-8° -E	2.29	1.37	0.51	須恵長頸壺	SX21・25 切られる
SK70	Ⅷ AE	C9-6-15 他	弥生？	楕円形	N-78° -E	1.44	0.76	(0.12)	弥生細片	
SK71	Ⅷ AE	C9-11-5 他		楕円形	N-43° -W	(1.32)	(0.68)	(0.23)	弥生細片	
SK72	Ⅷ AE	C9-11-10		円形					弥生細片	
SK73	Ⅷ AE	C9-6-13		円形					弥生細片	
SK74	Ⅷ AW	C8-10-18 他		楕円形	N-82° -E	(0.68)	0.48	0.13	弥生細片	
SK75	Ⅷ AW	C8-15-1		楕円形	N-18° -E	1.20	1.00	0.08	弥生細片	
SK76	Ⅷ AW	C8-10-18 他		楕円形	N-50° -E	(1.44)	0.68	0.08	弥生細片	
SK77	Ⅷ AW	C9-6-16 他	弥生後期？	不整形	N-29° -W	1.00	0.85	0.06	弥生甕、鉢	ST49 切る
SK78	Ⅷ AW	C8-10-18	弥生？	長方形？	N-4° -E	(0.83)	(0.69)	0.33	弥生細片	
SK79	Ⅷ AW	C8-15-4 他	弥生？	長方形？	N-16° -W	1.84	1.28	0.27	弥生細片、土師？	
SK80	Ⅷ AW	C8-15-7 他	古代	長楕円形	N-60° -W	0.73	0.62	0.08	白磁、土師坏	ST45 切る、SD99 切られる
SK81	Ⅷ AW	C8-15-8	古代	長楕円形	N-65° -W	(1.16)	0.48	0.05	須恵壺、土師甕	ST45 切る、SD99 切られる
SK82	Ⅷ AW	C8-15-14 他	古墳？	円形		1.00		0.18	須恵坏蓋	SK83 切る
SK83	Ⅷ AW	C8-15-14		円形		0.76		0.07		SK82 切られる
SK84	Ⅷ AW	C8-15-15	弥生後期	楕円形	N-79° -E	0.60	(0.54)	0.07	弥生壺、鉄製品	
SK85	Ⅷ AW	C8-14-20	古代	楕円形					須恵甕片	
SK86	Ⅷ AW	C8-14-20 他	古代	楕円形					土師坏	
SK87	Ⅷ AW	C8-15-15	古代	円形		0.80		0.07	須恵坏片、土師坏片	
SK88	Ⅷ AW	C8-15-15	古代	楕円形	N-16° -E	(1.40)	(1.16)	0.16	土師甕、坏	
SK89	Ⅷ AW	C8-15-15	古代	円形		(0.60)		0.09	土師坏	
SK90	Ⅷ AW	C8-15-19 他	古代？	大型円形	N-73° -W	2.90	2.26	0.36	鉄製品	ST40・42 切る
SK91	Ⅷ AW	C8-14-20	古代	円形		0.78		0.50	土師甕	SD99 切られる
SK92	Ⅷ AW	C8-15-21	古代？	円形		0.72	0.64	0.09	須恵甕	ST43 切る
SK93	Ⅷ AW	C8-15-21	古代？	円形		1.00		0.15	土師坏	ST43 切る
SK94	Ⅷ AW	C8-15-17	古墳末	不整形		(1.28)	(0.52)	0.09	須恵坏蓋	SD108 切られる
SK95	Ⅷ AW	C8-14-25		方形	N-71° -W	0.80	0.68	0.17	弥生細片	SD115 切る
SK96	Ⅷ AW	C8-15-20 他	古代	円形		0.80		0.08	土師坏	ST39 切る
SK97	Ⅷ AW	C8-15-21 他	古代？	円形		0.88		0.10	須恵	ST44 切る
SK98	Ⅷ AW	C9-6-16	古代？	長楕円形？					土師甕、坏	ST49 切る
SK99	Ⅷ AW	C8-15-16	古代？	円形？					須恵坏蓋	
SK100	Ⅷ AW	C8-10-22	弥生後期	円形		0.65	(0.44)	0.16	弥生甕	SX34 切られる
SK101	Ⅷ AW	C8-15-2	弥生後期	円形		0.66	0.58	0.07	弥生甕	
SK102	Ⅷ AW	C8-15-18	弥生後期	楕円形					弥生壺、甕	SD91 切られる
SK103	Ⅷ AW	C8-15-22	弥生？	長楕円形	N-89° -W	1.22	0.88	0.18	弥生細片	SD108 切られる
SK104	Ⅷ AW	C8-15-18	古墳？	不整形	N-63° -W	2.86	1.50	0.93	須恵壺	ST42、SD91 切られる
SK105	Ⅷ BE	C9-4-19 他	弥生？	不整形		1.20	0.80	0.44	弥生細片	SD8 切られる
SK106	Ⅷ BW	C9-4-17 他	古代	方形	N-2° -E	1.89	1.73	0.79	土師坏、甕、紡錘車	SB19 切られる

SK2(図 5-2)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-1-11
切り合い関係；－
時期；弥生後期後半
形状；－　**断面形態**；－　**主軸方向**；－　**規模**；(0.82)m ×深さ (0.29)m
覆土；黒色粘質土
出土遺物；弥生土器甕、鉢

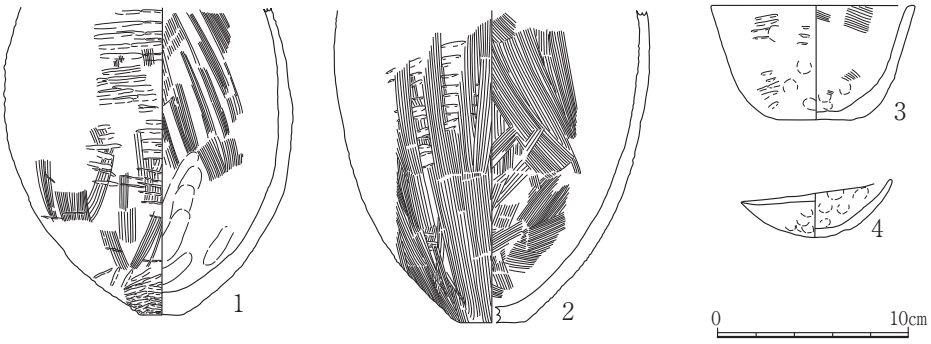


図 5-2　SK2 出土遺物実測図

所見；Ⅷ BE 区の北東に位置し、グリッドは C10-1-11 である。東側には弥生時代後期末の ST6、西側には古代の SB1 が位置している。確認されているのは土層断面のみで遺構自体は調査区を拡げた際に誤って削り取ってしまったのか消滅していた。覆土は黒色粘質土の単一層である。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期末と考えられる。

出土遺物 (図 5-2 №1 ～ 4)

№1、2 は弥生土器甕である。1 は底部がやや突底気味の小さな平底である。底径 2.4cmを測る。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。2 は平底で底径 3.6cmを測る。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。

3、4 は鉢である。3 は口径 10.8cm、器高 6.1cm、底径 5cmを測り、底部は平底である。整形は外面がタタキ、指頭、ナデ、内面はハケ、指頭、ナデを施す。4 は小型で口径 8cm、器高 3.1cm、底径 1.1cmを測る。底部は丸底気味で体部は大きく開く。整形は内外面共に指頭、ナデを施す。

SK4(図 5-3 ～ 5)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-14 他　**切り合い関係**；－
時期；弥生後期前半　**形状**；溝状　**断面形態**；皿状
主軸方向；N-78° -W　**規模**；1.86 × 0.49m ×深さ 0.12m　**覆土**；－
出土遺物；弥生土器壺、甕、鉢、高坏
所見；Ⅷ BE 区の南東に位置し、グリッドは C10-6-9、C10-6-14 に跨がる。北側は弥生時代後期末の ST50 と接しており、西側には同時期と考えられる SK18 が位置している。形状は溝状である。規模は長径 1.86m、短径 0.49m、深さ 12cmを測る。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-78° -W である。遺物出土状況は多量の弥生土器が纏まって出土している。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-4、5 №1 ～ 12)

№1 から 3 は弥生土器広口壺である。口縁部に凹線文を施したものである。1、2 は口縁部が外反して大きく開く。1 は口径 17.4cmを測る。肩部が張り、胴部は丸味を有する。整形は口縁部外面はナデ、内面はハケで胴部内面がナデ、底部外面にタタキを施す。胎土は砂粒を多量に含む。2 は口径 15.1cmを測る。肩部が張り、胴部がやや丸味を有する。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデ

である。３は口径 11.8cmを測る。口縁部がやや外反して開き、胴部に丸味を有する。整形は外面上半がハケ、ミガキ、下半がハケ、ナデで内面はナデを施す。

４から７は甕である。４、５は口縁部に凹線文を施したものである。４はやや小型の甕で口径 13.7cm、器高 23.4cm、底径 4.6cmを測る。口縁部は外反する。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデを施す。外面には煤が付着する。５は口縁部がやや外傾する。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデを施す。６は口縁部を欠損する。胴部は張り、底部はやや突出気味の平底である。整形は外面がハケ、ミガキ、内面はハケ、ナデを施す。７は底部破片で体部はやや丸味を持って立ち上がる。整形は外面がハケ、内面はナデを施す。胎土は小礫を多量に含む。

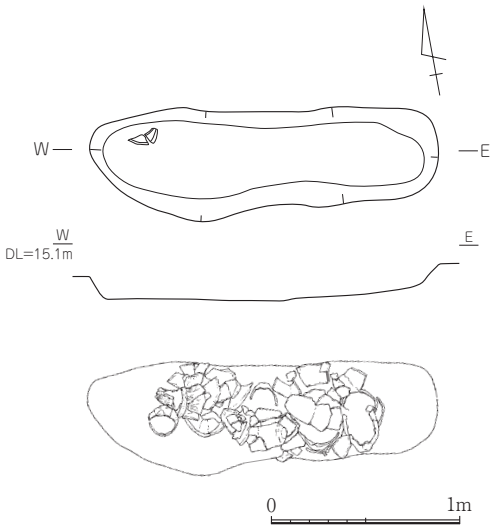


図 5-3　SK4 遺構図

８、９は碗状の鉢である。８はやや突出気味の底部から体部は丸味を持ち立ち上がる。口縁部はやや内傾気味で透かし円孔を有する。整形は口縁内外面共にハケ、体部は外面がハケ、ミガキ、内面はナデ、ミガキを施す。９は台付き鉢で低い脚がつく。ほぼ完形品である。整形は外面がハケ、脚部は指頭、内面はハケ、ナデを施す。

10 から 12 は高坏である。10 は口径 20cmで口縁部は大きくくびれる。裾部は底径 10.7cmを測り、開く。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデを施す。胎土は小礫を多量に含む。11、12 は坏部で体部に丸味を持つ。整形は口縁内外面共にハケ、体部は内外面共にミガキを施す。

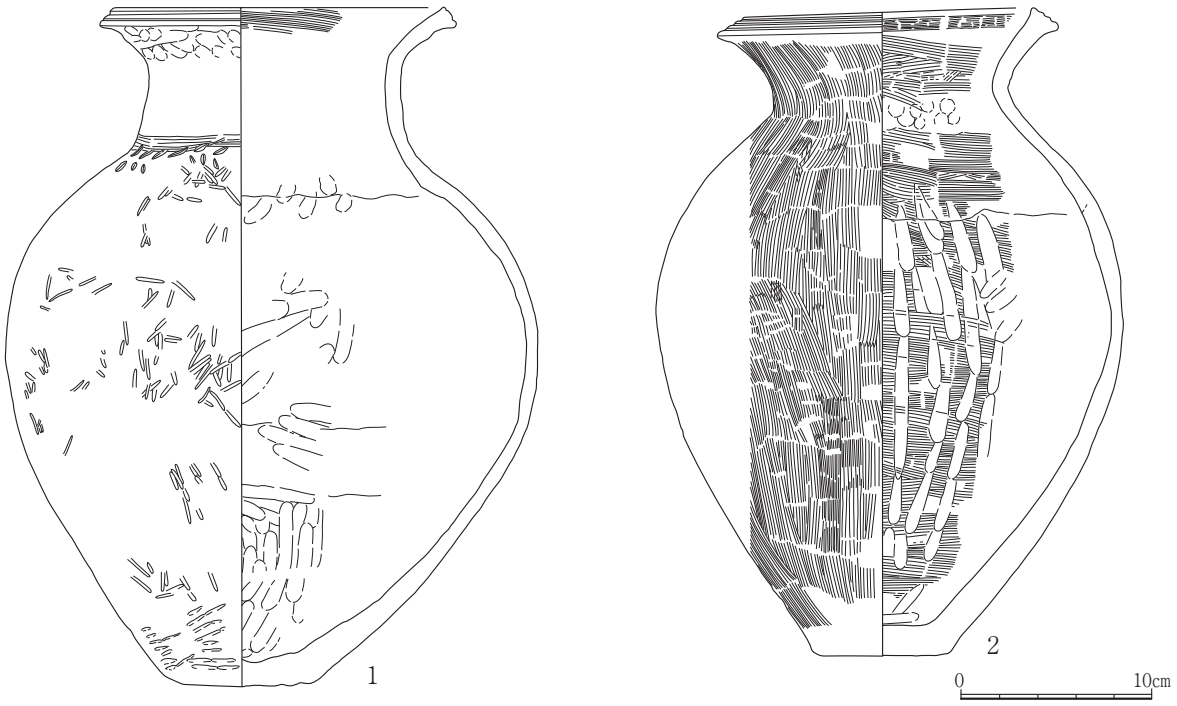


図 5-4　SK4 出土遺物実測図 (1)

図 5-5　SK4 出土遺物実測図 (2)

SK5(図 5-6、8)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-8　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半　**形状**；楕円形　**断面形態**；－　**主軸方向**；N-3° -W

規模；1.0 × 0.8m ×深さ (0.06)m　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器甕、鉢

所見；Ⅷ BE 区の南東に位置し、グリッドは C10-6-8 である。東側に弥生時代後期末の ST50 が位置している。形状は楕円形である。規模は長径 1.0m、短径 0.8m を測る。深さは遺物出土時に確認している 6cmと比較的浅い。正確な深さは平面図等が存在しない為明確ではないが、写真を見る限り浅いものである。長軸方向はほぼ真北を指し N-3° -W である。

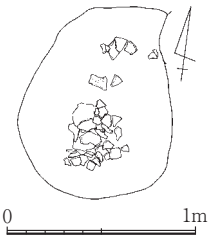


図 5-6　SK5 遺構図

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-8 №1 ～ 7)

№1 から 4 は弥生土器甕である。１は口径 13.1cmを測る。口縁部は外傾し、整形は口縁部内外面共にハケ、胴部は外面がタタキ、ハケ、内面はハケを施す。２は口縁部が「く」字状に外傾する。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。３は口縁部がやや外傾し、口唇部は平坦である。整形は外面がタタキ、口縁部内面にハケを施す。４は口縁部がやや外傾し、整形は内外面共にハケを施す。

５から７は鉢である。共に口縁部が開く。５は口径 25.6cmを測り、底部を欠損する。整形は内外面共ハケを施す。６は口径 20.4cmを測り、整形は外面にハケ、内面にミガキを施す。７は口径 20.3cmを測り、底部が丸底である。整形は外面がタタキ、ヘラナデ、内面はミガキを施す。

SK6(図 5-7、8)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-14　**切り合い関係**；SD11 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；楕円形　**断面形態**；皿状

主軸方向；N-9° -W　**規模**；1.22 × 0.72m ×深さ 0.12m　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器壺、鉢

所見；Ⅷ BE 区の中央部南側に位置し、グリッドは C9-10-14 である。東側に古墳時代後期の ST7 が位置しており、SD11 に中央部を切られている。形状は楕円形である。規模は長径 1.22m、短径 0.72m、深さ 12cmを測る。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-9° -W である。遺物出土状況は多量の弥生土器が纏まって出土している。

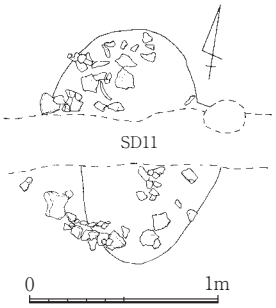


図 5-7　SK6 遺構図

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-8 №1 ～ 3)

№1、２は弥生土器壺である。１は口縁部が欠損する。肩部はやや張り、底部は平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。２は広口壺で口縁部が外反し大きく開く。口径は 14.8cmを測る。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデを施す。

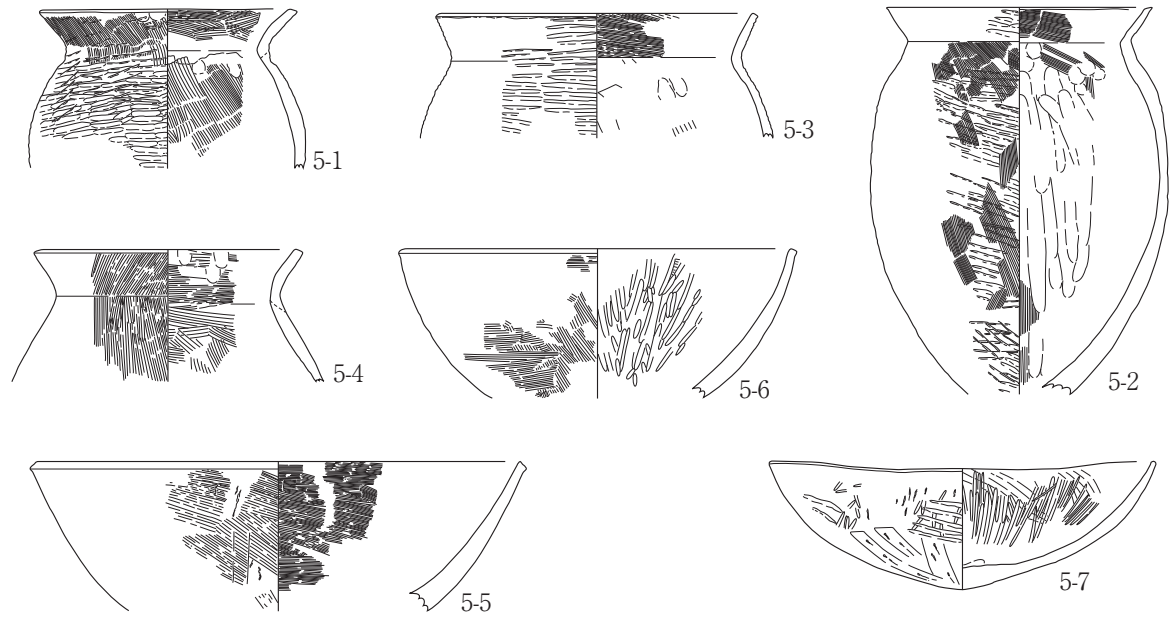
３は鉢である。口径 26.2cm、器高 10.4cm、底径 2.9cmを測る。口縁部は大きく開き、底部は小さな平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケを施す。胎土は小礫を多量に含む。

SK7(図 5-8、9)

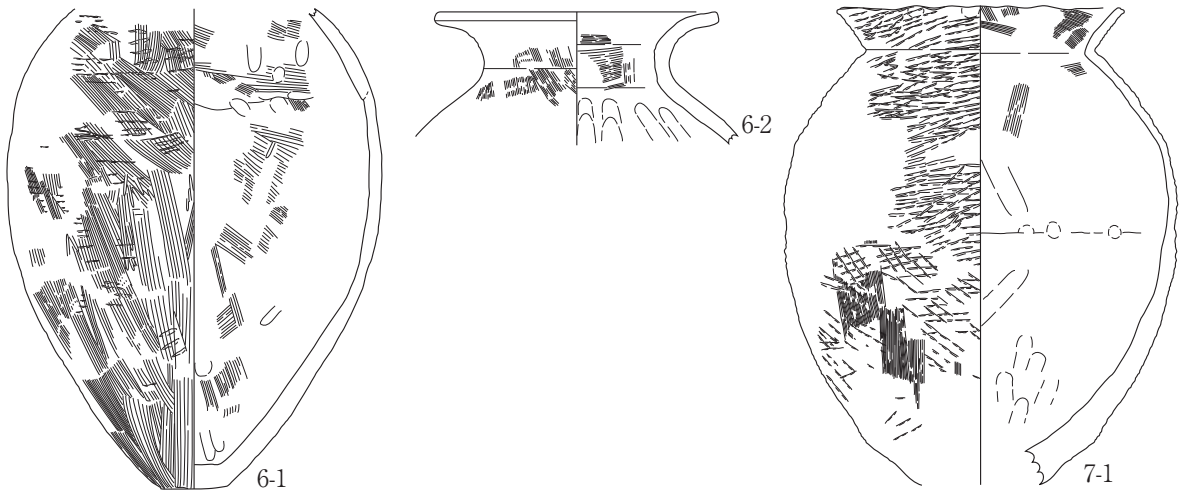
調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-11　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半　**形状**；楕円形　**断面形態**；皿状

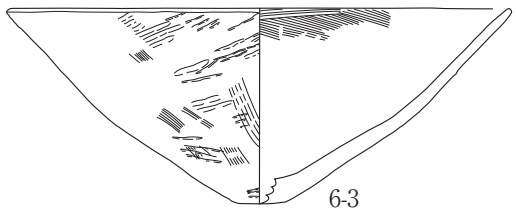
主軸方向；N-62° -W　**規模**；0.84 × 0.39m ×深さ 0.06m　**覆土**；－



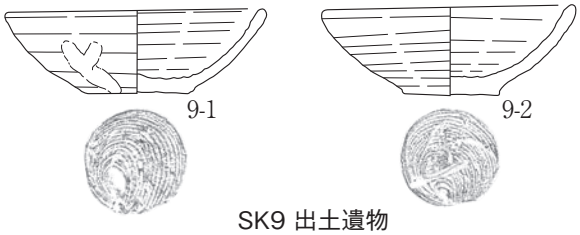
SK5 出土遺物



SK7 出土遺物



SK6 出土遺物



SK9 出土遺物

図 5-8　SK5 ～ 7・9 出土遺物実測図

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BE 区の南西に位置し、グリッドは C9-10-11 である。西側には弥生時代後期末の ST14、古代の SB5、南側には ST8 が位置している。形状は楕円形である。規模は長径 0.84m、短径 0.39m、深さ 6cmと比較的浅い。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-62° -W である。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-8 №1)

№1 は弥生土器甕である。口径 14.6cm、器高 25.4cmを測り、口縁部は「く」字状に外傾する。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。

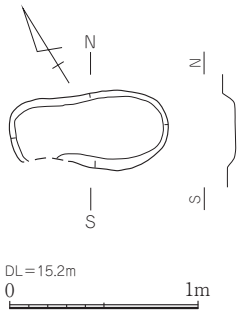


図 5-9　SK7 遺構図

SK9(図 5-8、10)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-5　**切り合い関係**；－

時期；古代？　**形状**；楕円形　**断面形態**；箱形　**主軸方向**；N-11° -E

規模；0.99 × 0.73m ×深さ 0.18m　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；土師器坏

所見；Ⅷ BE 区の西中央部に位置し、グリッドは C9-9-5 である。北東には弥生時代後期後半の ST51、近世の SB7 が位置している。形状は楕円形である。規模は長径 0.99m、短径 0.73m、深さ 18cmを測る。断面は箱形を呈し、長軸方向は N-11° -E である。覆土は黒褐色土の単一層である。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 5-8 №1、2)

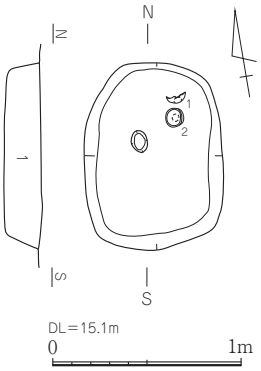


図 5-10　SK9 遺構図

№1、２は土師器坏である。１は口径 10.2cm、器高 3.4cm、底径 4.0cmを測る。体部は僅かに丸味を持ち、底部はやや突底ぎみで回転糸切りである。内外面共に回転ナデで内面底には回転渦巻き痕が残る。２も同様で底部に簀子状圧痕が付く。

SK12(図 5-11、13)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-23 他

切り合い関係；SB2・3 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；溝状　**断面形態**；皿状

主軸方向；N-20° -W　**規模**；(1.77) × 0.58m ×深さ 0.21m

覆土；黒色土

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BE 区の中央部に位置し、グリッドは C9-5-23、C9-10-3 に跨がる。２m 程北には同時期の SK13、南東には弥生時代後期末の ST10 が隣接しており、古代の SB2、SB3 の柱穴に切られている。形状は溝状である。規模は長径 1.77m、短径 0.58m、深さ 21cmを測る。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-20° -W である。覆土は黒色土の単

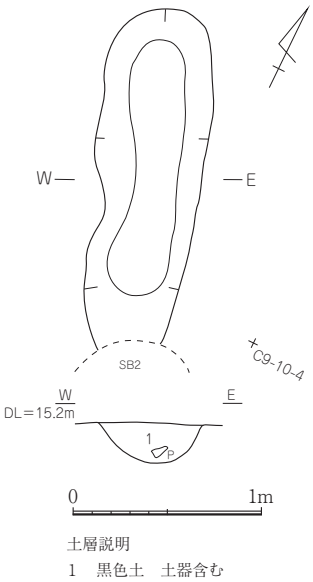


図 5-11　SK12 遺構図

一層である。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-13 №1)

№1 は弥生土器甕の口縁部である。口縁部は外傾し、口径 18.5cmを測る。整形は外面がハケ、ナデ、内面はハケを施す。

SK13(図 5-12、13)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-18 他　**切り合い関係**；SB2・3 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；溝状　**断面形態**；逆台形

主軸方向；N-61° -W　**規模**；(0.79) × 0.44m ×深さ 0.24m　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BE 区の中央部やや北寄りに位置し、グリッドは C9-5-18、C9-5-23 他に跨がる。2m 程南には同時期の SK12、東には弥生時代後期末の ST9 が位置しており、東側を古代の SB2、SB3 の柱穴に切られている。形状は溝状である。規模は長径 0.79m、短径 0.44m、深さ 24cmを測る。断面は逆台形で長軸方向は N-61° -W である。

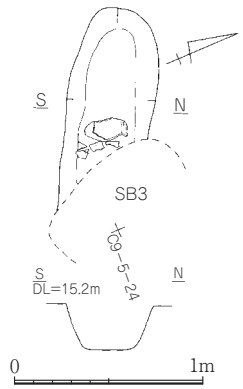


図 5-12　SK13 遺構図

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-13 №1 、2)

№1、２は弥生土器甕である。１は口径 15.6cmを測り、口縁部が「く」字状に外反する。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデを施す。２は小型で口径 11.0cmを測る。口縁部は短く外傾し、肩部は張らない。整形は口縁外面がナデ、内面はハケ、胴部外面がハケ、内面はナデを施す。

SK18(図 5-13、14)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-14 他　**切り合い関係**；－

時期；弥生？　**形状**；溝状　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；N-17° -W

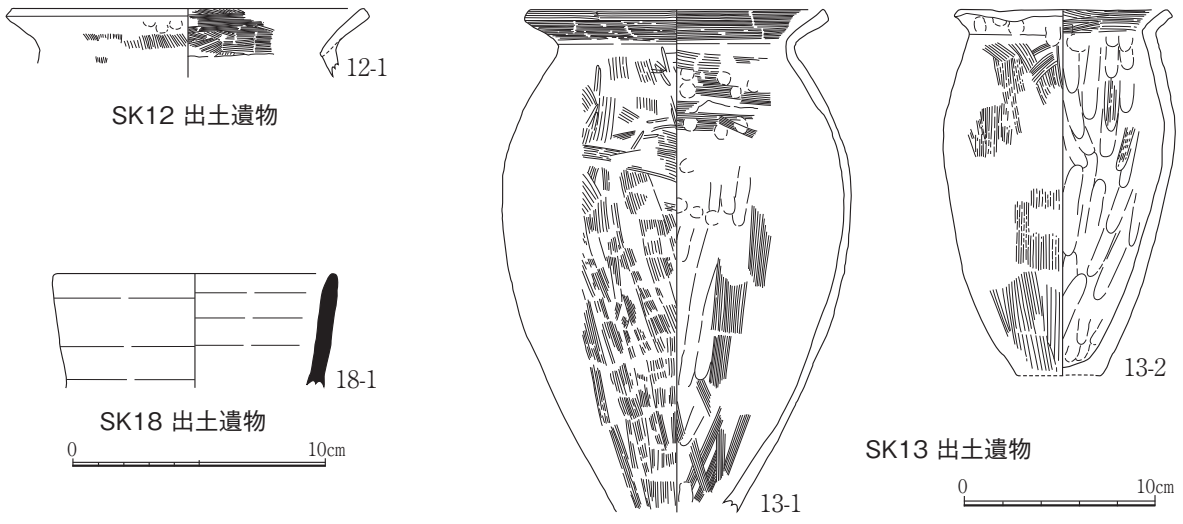


図 5-13　SK12・13・18 出土遺物実測図

規模；1.52 × 0.38m ×深さ 0.06m　**覆土**；黒色粘質土、黒褐色粘質土
出土遺物；須恵器横瓶
所見；Ⅷ BE 区の南東に位置し、グリッドは C10-6-9、C10-6-14 に跨がる。北側には弥生時代後期末の ST50、東側には弥生時代後期後半の SK4 が位置している。形状は溝状である。規模は長径 1.52m、短径 0.38m、深さ 6cmと比較的浅い。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-17° -W である。

所属時期は出土遺物からして古墳時代後期の可能性が考えられるものの判然としない。遺構の形状からは古墳の可能性が低く、弥生時代後期後半の可能性も考えられる。

出土遺物 (図 5-13 №1)

№1 は須恵器横瓶の口頸部である。口径 11cmを測り、整形は内外面共にロクロナデである。内面に自然釉がかかる。混入品か。

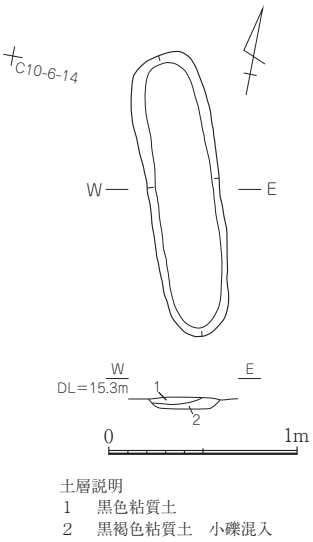


図 5-14　SK18 遺構図

SK30(図 5-15、19)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-15
切り合い関係；SD37 を切る
時期；古代？　**形状**；方形　**断面形態**；皿状
主軸方向；N-45° -E　**規模**；1.08 × 0.72m ×深さ 0.13m
覆土；黒褐色粘質土主体
出土遺物；須恵器坏
所見；Ⅷ BW 区の中央部に位置し、グリッドは C9-8-15 である。北側には古墳時代後期の ST12、ST20、東側には古代の SB9 が位置しており、SD37 を切っている。形状は方形である。規模は長径 1.08m、短径 0.72m、深さ 13cmを測る。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-45° -E である。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、床面上には褐色土が多量に混入、堆積している。

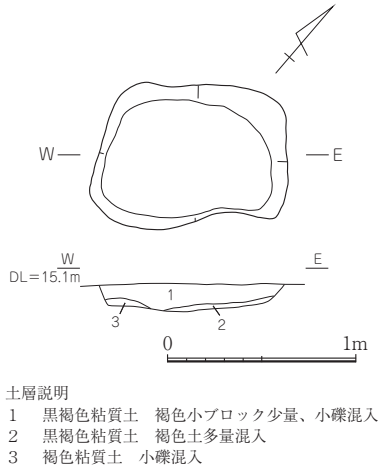


図 5-15　SK30 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられるものの判然としない。

出土遺物 (図 5-19 №1)

№1 は須恵器坏身である。受け部は短く内傾し、口径 13.2cmを測る。整形は内外面共にナデを施す。

SK32(図 5-16、19)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-21　**切り合い関係**；－
時期；弥生後期？　**形状**；長楕円形　**断面形態**；－　**主軸方向**；－　**規模**；－　**覆土**；－
出土遺物；弥生土器壺、高坏
所見；Ⅷ BW 区の南西に位置し、グリッドは C9-8-21 である。北には SK33 が隣接し、SB10 の内側に位置している。形状は検出時の配置図から長楕円形と考えられる。検出したものの掘り方は確認できなかった。規模、覆土等は平面、断面図が残っていない為不明である。遺物出土状況は検出面から少し浮いた状態で出土している。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期の可能性がある。

出土遺物 (図 5-19 №1 ～ 3)

№1、２は弥生土器壺の口縁部である。１は広口壺で口径 22.8 cmを測る。口縁部が外反し、大きく開く。整形は内外面共ハケを施す。２は口径 20.4cmを測り、整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデを施す。

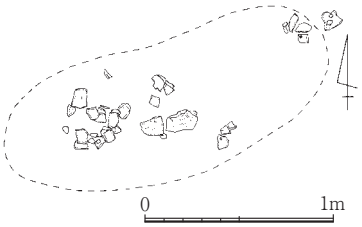


図 5-16　SK32 遺構図

３は高坏の裾部である。裾は大きく開き、透かし円孔を有する。整形は外面がミガキ、内面はナデを施す。

SK33(図 5-17、19)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-21　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半　**形状**；長楕円形　**断面形態**；逆台形

主軸方向；N-19° -E　**規模**；(0.72) × 0.43m ×深さ 0.12m　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BW 区の南西に位置し、グリッドは C9-8-21 である。北西には SK52、南には SK32 が隣接し、SB10 の内側に位置している。形状は長楕円形である。規模は長径 0.72m、短径 0.43m、深さ 12cmを測る。断面は逆台形で長軸方向は N-19° -E である。

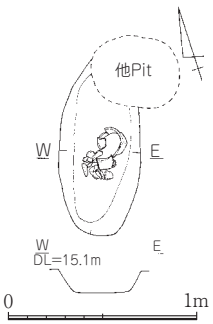


図 5-17　SK33 遺構図

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-19 №1 、2)

№1、２は弥生土器甕である。１は口径 11.2cmを測り、口縁部はやや外傾する。肩部はなだらかで底部は小さな平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。外面が部分的に落剥している。２は口縁部が短く外反し、肩部はなだらかである。整形は外面がタタキ、内面はハケ、ナデを施す。一部煤が付着する。

SK34(図 5-19)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-9-17　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半？　**形状**；円形？　**断面形態**；－　**主軸方向**；－

規模；－　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BW 区の南東に位置し、グリッドは C9-9-17 である。北側には古墳時代後期の ST17、東側には古墳時代後期末の SB5 が位置している。検出時の形状は円形である。規模、覆土等は遺構図が存在しない為不明である。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半の可能性が考えられるものの判然としない。

出土遺物 (図 5-19 №1)

№1 は弥生土器甕である。口径 15.6cmを測り、口縁部は「く」字状に外傾する。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。

SK36(図 5-18、19)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-10 他　**切り合い関係**；ST12 を切る　**時期**；古代　**形状**；大型長方形　**断面形態**；箱形　**主軸方向**；N-6° -W　**規模**；4.46 × 1.06m ×深さ 0.39m　**覆土**；黒色粘質土主体、黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏

所見；Ⅷ BW 区の中央に位置し、グリッドは C9-8-10、C9-9-6 に跨がる。南側には古代の SB9、北側には古墳時代後期の ST12 が位置しており、その南端を切っている。形状は大型長方形である。規模は長径 4.46m、短径 1.06m、深さ 39㎝を測る。断面は箱形で長軸方向は N-6° -W である。覆土は黒色粘質土を主体とし、床面上には黄褐色土、小礫が多量に混入した黒褐色粘質土が僅かに堆積している。

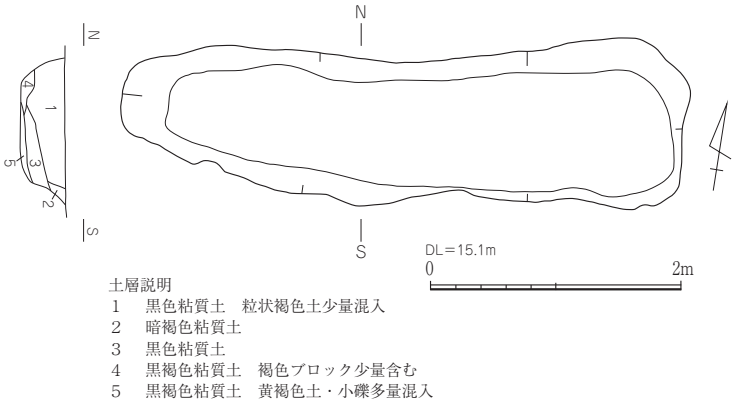


図 5-18　SK36 遺構図

所属時期は出土遺物、検出状況からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 5-19 №1)

№1 は須恵器坏の底部破片である。整形は内外面共にナデを施す。

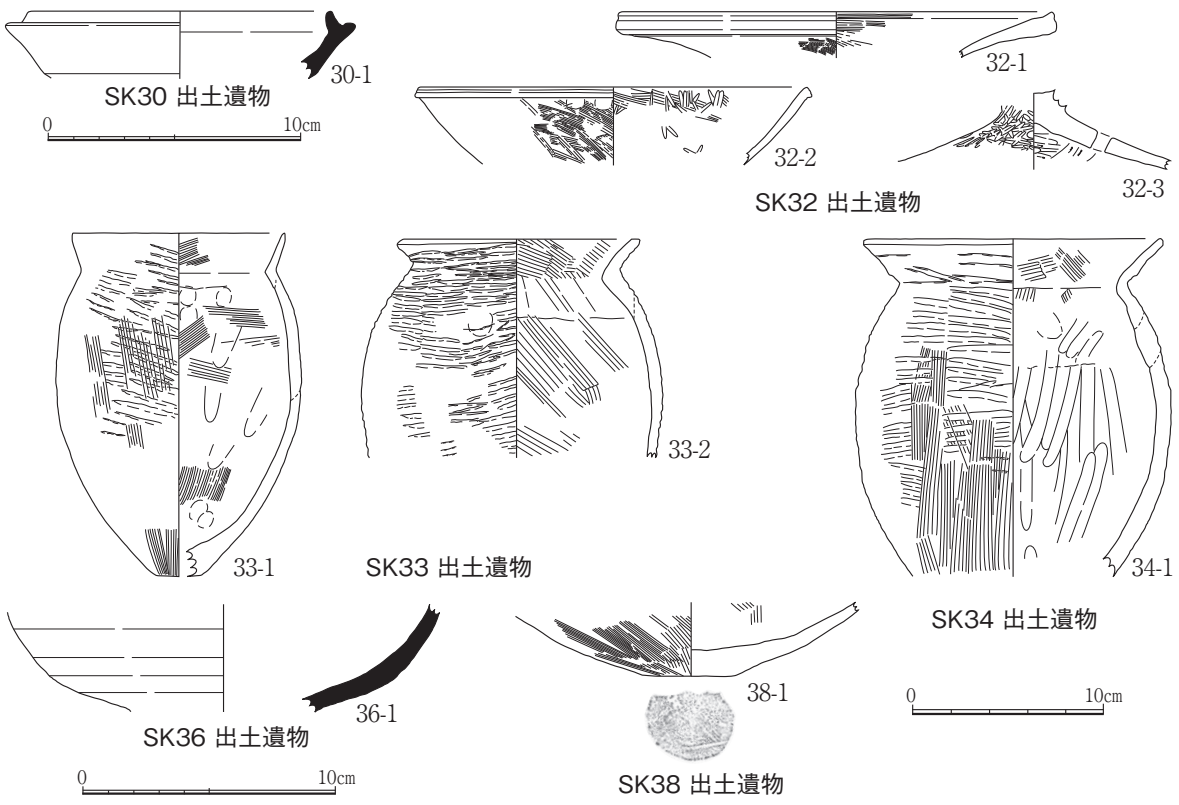


図 5-19　SK30・32 ～ 34・36・38 出土遺物実測図

SK38(図 5-19、20)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-3　**切り合い関係**；－
時期；弥生後期後半　**形状**；溝状
断面形態；皿状　**主軸方向**；N-4°-W
規模；1.82 × 0.33m ×深さ 0.04m　**覆土**；－
出土遺物；弥生土器鉢
所見；Ⅷ BW 区の北やや西寄りに位置し、グリッドは C9-8-3 である。南東には古墳時代後期の ST20 が位置している。形状は溝状である。規模は長径 1.82m、短径 0.33m、深さ 4㎝と極めて浅い。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-4°-W である。

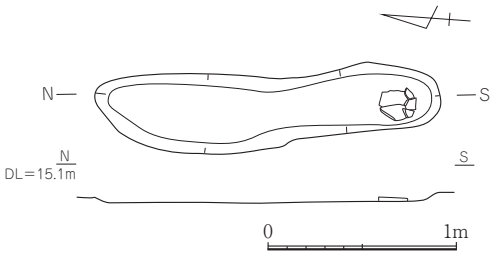


図 5-20　SK38 遺構図

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-19 №1)

№1 は弥生土器鉢の底部である。底径 4.8㎝を測る平底で体部は大きく開く。整形は外面がハケ、内面は部分的に落剥しているものの、ハケが施されていたと考えられる。

SK41(図 5-21、24)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-13-1 他
切り合い関係；SX45、SD46 に切られる
時期；弥生末～古墳初？
形状；大型楕円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；N-45°-E　**規模**；(2.41) × 1.25m ×深さ 0.07m　**覆土**；－
出土遺物；弥生土器甕、甕、鉢、土師器高坏、土製品
所見；Ⅷ BW 区の南西に位置し、グリッドは C9-8-21、C9-13-1 他に跨がる。南西を古代の SX45、北東を SD46 に切られている。形状は大型楕円形である。規模は長径 2.41m、短径 1.25m、深さ 7㎝と比較的浅い。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-45°-E である。

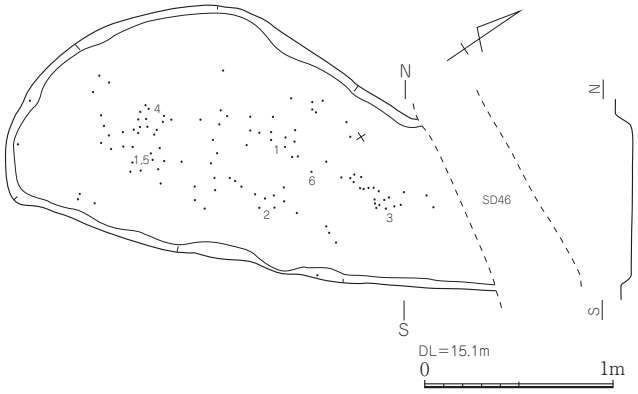


図 5-21　SK41 遺構図

所属時期は出土遺物からして古墳の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 5-24 №1 ～ 6)

№1 は弥生土器甕である。胴部を欠損する。口径 19.4㎝を測り、口縁部は短く外傾する。底部中央に単孔を有する。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ヘラナデ、口縁外面がタタキ、ナデ、内面はハケを施す。

２は甕である。口径 13.6㎝を測り、口縁部は「く」字状に外反する。肩部はなだらかである。整形は外面がハケ、内面はハケ、ヘラナデを施す。

３は鉢である。口径は 14.2㎝を測り、口縁部は開く。突底気味の小さな平底である。整形は外面がハケ、内面はハケ、ミガキ、ナデを施す。

４は土師器甕である。口縁部が「く」字状に外反し、端部を僅かに拡張する。整形は内外共にハ

ケを施す。

５は土師器高坏の脚部である。脚部裾は開き、透かし円孔を有する。整形は外面にミガキを施す。

６は土製品の器台である。高さ 6.2㎝を測り、整形は指頭、ナデ、刻みを施す。

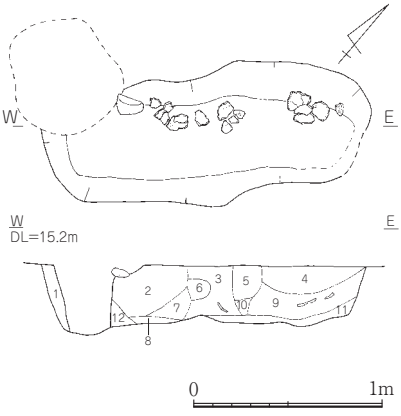


図 5-22　SK42 遺構図

SK42(図 5-22、24)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-4-21

切り合い関係；SB18 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；長楕円形　**断面形態**；箱形

主軸方向；N-47° -E

規模；1.72 × 0.7m ×深さ 0.3m　**覆土**；黒褐色粘質土主体

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BW 区の北東に位置し、グリッドは C9-4-21 である。西には古墳時代後期の ST19、北西には同時期と思われる SK46 が位置しており、SB18 に切られている。形状は長楕円形である。規模は長径 1.72m、短径 0.7m、深さ 30㎝を測る。断面は箱形で長軸方向は N-47° -E である。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、床面上には黄褐色粘質土塊が多量に混じる暗褐色粘質土が僅かに堆積している。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-24 №１)

№１は弥生土器甕である。口縁部を欠損する。底径 2.5㎝の小さな平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。

SK49(図 5-23、24)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-6

切り合い関係；SD79・80 を切る　**時期**；古代　**形状**；円形

断面形態；皿状　**主軸方向**；－　**規模**；径 0.8m ×深さ 0.23m

覆土；黒色土、黒褐色土

出土遺物；須恵器

所見；Ⅷ AE 区の中央部南側に位置し、グリッドは C9-12-6 である。北東には弥生時代後期後半の ST30、東西には同時期の SX48、SX29 等が位置しており、SD79、SD80 の一部を切っている。形状は円形で規模は直径 0.8m、深さ 23㎝を測る。断面は皿状である。覆土は上層に黒色土、下層に黒褐色土がレンズ状に堆積している。

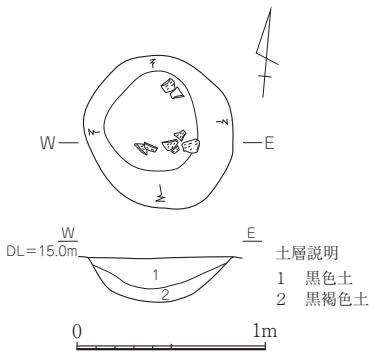


図 5-23　SK49 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 5-24 №１)

№１は須恵器で壺か甕の胴部破片である。外面にタタキを施す。

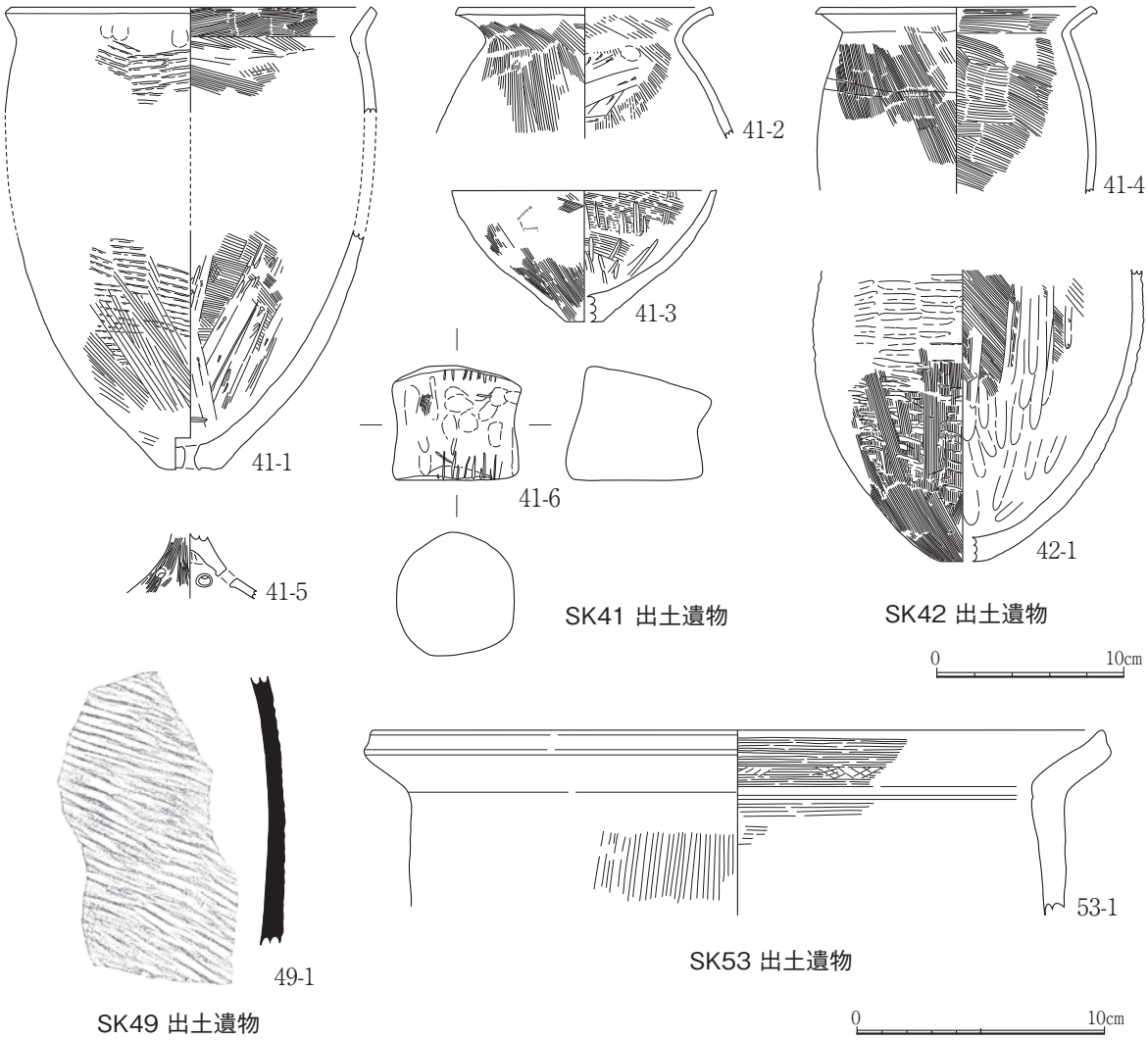


図 5-24　SK41・42・49・53 出土遺物実測図

SK53(図 5-24)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-24 他　**切り合い関係**；－

時期；古代　**形状**；楕円形？　**断面形態**；－　**主軸方向**；－

規模；－　**覆土**；－

出土遺物；土師器甕

所見；Ⅷ AE 区の東中央部に位置し、グリッドは C9-7-23、C9-7-24 他に跨がる。SD46 と SD47 が交差する所に位置している。規模、覆土等は遺構図が存在しない為不明である。

所属時期は出土遺物からして８世紀から９世紀前半と考えられる。

出土遺物 (図 5-24 №１)

№１は土師器甕の口縁部である。口径 29.4cmを測り、口縁部は外傾する。整形は口縁内外面共にナデ、肩部外面がハケ、内面はナデを施す。

SK64(図 5-25、28)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-22 他　**切り合い関係**；－

時期；古代？　**形状**；不整形　**断面形態**；－
主軸方向；N-16°-E　**規模**；1.67 × 1.44m ×深さ 0.22m
覆土；黒褐色粘質土
出土遺物；土師器坏
所見；Ⅷ AE 区の西中央部やや北寄りに位置し、グリッドは C9-6-17、C9-6-22 に跨がる。南西には SK65 や古墳時代後期の ST34 が位置している。形状は不整形である。規模は長径 1.67m、短径 1.44m、深さ 22㎝を測る。断面は皿状に近いものの、浅い落ち込みや東側にほぼ垂直な立ち上がりがみられる為判然としない。覆土は黒褐色粘質土に黄色ブロック、炭化物が混じるほぼ単一層である。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 5-28 №1)

№1 は土師器坏で完形品である。口径 11.2㎝を測り、口縁部は開く。底部はやや突底気味で回転ヘラ切りである。整形は内外面共にナデを施す。外面にロクロ目、内面底に回転渦巻き痕を残す。

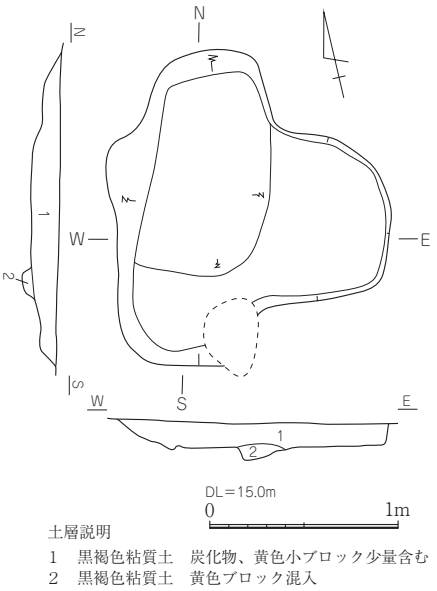


図 5-25　SK64 遺構図

SK65(図 5-26、28)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-22
切り合い関係；ST34 を切る
時期；古代　**形状**；方形　**断面形態**；皿状
主軸方向；N-8°-E
規模；1.56 × 1.34m ×深さ 0.18m　**覆土**；－
出土遺物；土師器坏
所見；Ⅷ AE 区の西端に位置し、グリッドは C9-6-22 である。南には古墳時代後期の ST34 が位置しており、その一部を切っている。形状は方形である。規模は長径 1.56m、短径 1.34m、深さ 18㎝を測る。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-8°-E である。

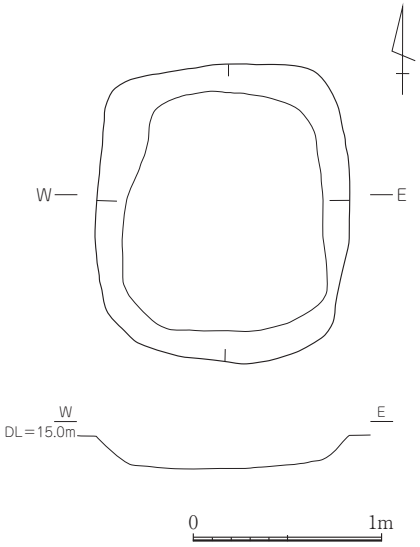


図 5-26　SK65 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 5-28 №1)

№1 は土師器坏の底部破片である。底径 7.4㎝を測り、整形は内外面共にナデを施す。

SK66(図 5-27、28)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-7 他　**切り合い関係**；SD25 に切られる
時期；古代？　**形状**；方形？　**断面形態**；箱形　**主軸方向**；N-57°-E
規模；2.44 × 2.0m ×深さ 0.15m　**覆土**；暗褐色粘質土主体、褐色粘質土
出土遺物；土師器甕

所見；Ⅷ AE 区の北中央部やや東寄りに位置し、グリッドは C9-7-6、C9-7-7 に跨がる。南には SB11 が位置しており、北側を SD25 に壊されている。柱穴をいくつか検出しているものの、殆どが本遺構に伴なうものだとは考えられない。形状は方形と考えられる。規模は長径 2.44m、短径 2.0m、深さ 15cm を測る。断面は箱形で長軸方向は N-57° -E である。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色ブロックを含み、褐色粘質土が混じる。遺物出土状況は北、西側の２ケ所、東側では炭化材が出土している。

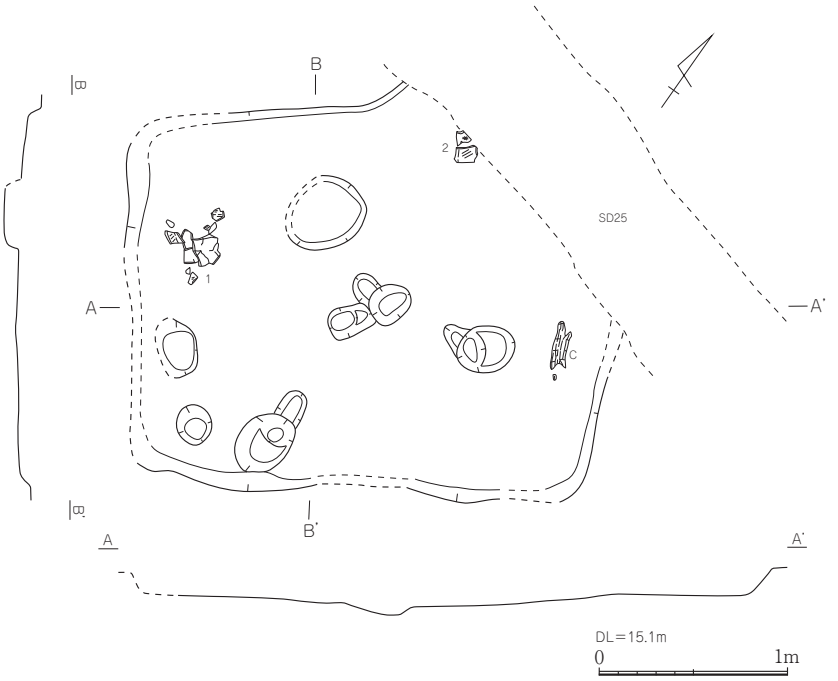


図 5-27　SK66 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 5-28 №1、2)

№1、２は土師器甕である。１は大型で口径 26.2cm を測る。口縁部は「く」字状に外傾し、肩部はなだらかである。整形は口縁部内外面共にハケ、胴部外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。２はやや小型で口径 12.4cm を測る。口縁部は「く」字状に外反し、肩部はなだらかである。整形は口縁部外面がタタキ、指頭、内面はハケ、胴部外面がタタキ、内面はハケ、ナデを施す。

SK69(図 5-29、30)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-20 他　**切り合い関係**；SX21・25 に切られる

時期；古墳後期　**形状**；長楕円形　**断面形態**；－　**主軸方向**；N-8° -E

規模；2.29 × 1.37m ×深さ 0.51m　**覆土**；暗褐色土主体、褐色土、黒褐色土

出土遺物；須恵器長頸壺

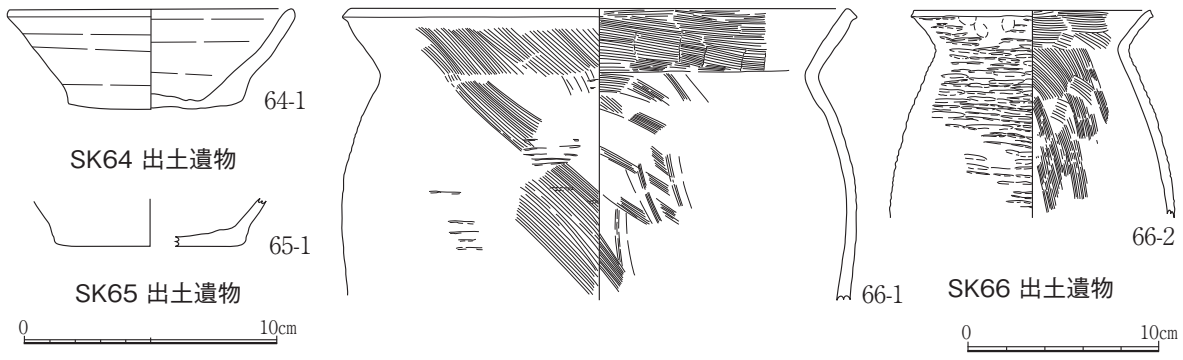


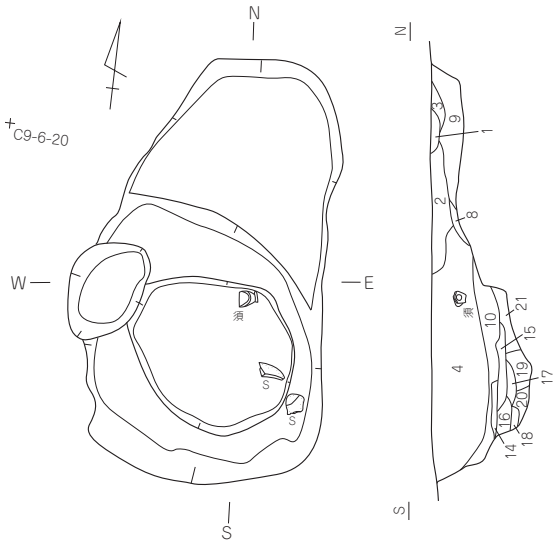
図 5-28　SK64 ～ 66 出土遺物実測図

所見；Ⅷ AE 区の中央部やや北西寄りに位置し、グリッドは C9-6-15、C9-6-20 に跨がる。古代の SX21、25 に切られており、SX25 を掘り上げた時点で検出した。形状は長楕円形である。規模は長径 2.29m、短径 1.37m、深さは北側 15㎝、南側は 51㎝と掘り下げられている。長軸方向は N-8° -E である。覆土は上層に暗褐色土が被覆し、中層に褐色土、下層には黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土等が混在しており、自然に堆積したものではなく埋め戻されたものだと考えられる。遺物出土状況は上層中央部から須恵器長頸壺の口頸部が出土している。

所属時期は出土遺物からして古墳時代後期から平安時代初頭と考えられる。

出土遺物 (図 5-30 №.1)

№.1 は須恵器で長頸壺の口頸部である。口径 9.4㎝を測り、胴部は欠損する。整形は内外面共に回転ナデである。



土層説明
1　暗褐色土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック含む
2　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
3　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
4　暗褐色土　褐色・粒状褐色ブロック、須恵器含む
5　暗褐色土　褐色ブロック含む
6　暗褐色土
7　暗褐色土　粒状褐色ブロック含む
8　にぶい黄褐色土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック含む
9　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
10　褐色粘質土　暗褐色土混入、黄色・粒状黄褐色ブロック、小礫含む
11　褐色粘質土
12　黒色土
13　黒褐色土　暗褐色土混入
14　暗褐色土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック含む
15　黒褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
16　黄褐色粘質土　黄色ブロック含む
17　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック、土器含む
18　黒褐色土　褐色ブロック含む
19　暗オリーブ褐色土　粒状黄褐色・黒褐色ブロック含む
20　暗オリーブ褐色土
21　暗オリーブ褐色土　粒状黄褐色ブロック含む

図 5-29　SK69 遺構図

SK77(図 5-30、31)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C9-6-16 他　**切り合い関係**；ST49 を切る

時期；弥生後期？　**形状**；不整形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；N-29° -W

規模；1.0 × 0.85m ×深さ 0.06m　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器甕、鉢

所見；Ⅷ AW 区の北東に位置し、グリッドは C9-6-16、C9-6-21 に跨がる。南に古墳時代後期の ST34、南西に ST48 が位置しており､ST49 の南端を切っている。形状は不整形である。規模は長径 1.0m、短径 0.85m、深さ 6㎝と比較的浅い。断面は

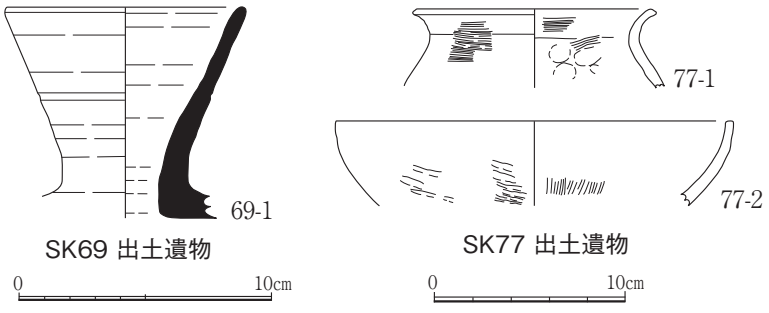


図 5-30　SK69・77 出土遺物実測図

皿状を呈し、長軸方向は N-29° -W である。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 5-30 №1、2)

№1 は弥生土器甕の口縁部である。口径 12.3cmを測り、口縁部は外反する。肩部はなだらかである。整形は外面にハケ、内面にハケ、ナデを施す。胎土は小礫を多量に含む。

２は鉢の口縁部と考えられる。底部は欠損する。口径 21cmを測り、体部はやや丸味を持つ。整形は外面がタタキ、ナデ、内面はハケ、ナデを施す。胎土は小礫を多量に含む。

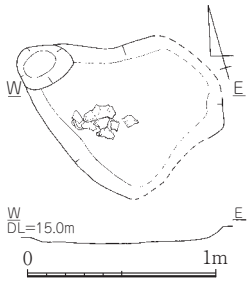


図 5-31　SK77 遺構図

SK80(図 5-32、36)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-7 他

切り合い関係；ST45 を切る、SD99 に切られる

時期；古代　**形状**；長楕円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；N-60° -W

規模；0.73 × 0.62m ×深さ 0.08m　**覆土**；－

出土遺物；白磁碗、土師器坏、須恵器

所見；Ⅷ AW 区の中央部に位置し、グリッドは C8-15-7、C8-15-8 に跨がる。弥生時代後期末の ST45 上を切り、南側を SD99 に切られている。形状は長楕円形である。規模は長径 0.73m、短径 0.62m、深さ 8cmと比較的浅い。断面は皿状で長軸方向は N-60° -W である。

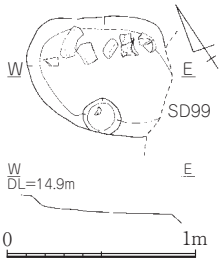


図 5-32　SK80 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 5-36 №1 ～ 4)

№1 は須恵器で壺か甕の胴部破片である。外面にタタキを施す。

２は土師器坏である。底部は回転糸切りで底径 7.2cmを測る。内外面共に回転ナデである。

３、４は白磁碗で玉縁口縁の破片である。３は口径 14.8cm、４は口径 16cmを測る。

SK81(図 5-33、36)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-8

切り合い関係；ST45 を切る、SD99 に切られる

時期；古代　**形状**；長楕円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；N-65° -W

規模；(1.16) × 0.48m ×深さ 0.05m　**覆土**；－

出土遺物；須恵器壺、土師器甕、坏

所見；Ⅷ AW 区の中央部に位置し、グリッドは C8-15-8 である。弥生時代後期末の ST45 の上面を切り、古代の SD99 に西側を切られている。形状は長楕円形である。規模は長径 1.16m、短径 0.48m、深さ 5cmと比較的浅い。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-65° -W である。

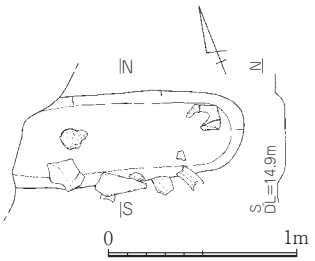


図 5-33　SK81 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 5-36 №1 ～ 4)

№1、２は須恵器壺である。１は口縁部で口径 20cmを測る。口縁部が「く」字状に外傾し、口唇部は平坦である。整形は口縁部内外面共にナデで肩部外面がタタキ、内面はナデを施す。２は口頸部で口縁部は外反し、内外面に自然釉が掛かる。整形は内外面共にナデを施す。

３、４は土師器である。３は甕の口縁部で口径 31cmを測る。整形は外面がハケ、指頭、ナデ、内面はナデを施す。４は坏で口縁部が欠損する。底径 7.6cmを測り、底部は回転糸切りである。整形は内外面共にナデを施し、外面にロクロ目を残す。

SK84(図 5-34、36)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-15　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半　**形状**；楕円形　**断面形態**；皿状

主軸方向；N-79° -E　**規模**；0.6 × (0.54)m ×深さ 0.07m　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；弥生土器壺、鉢、鉄製品

所見；Ⅷ AW 区の南東に位置し、グリッドは C8-15-15 である。南には弥生後期後半の ST39、古墳時代後期の ST40 が位置している。北側にはいくつか SK が隣接しているものの、切り合いについては判然としない。形状は楕円形である。規模は長径 0.6m、短径 0.54m、深さ 7cmと比較的浅い。断面は皿状で長軸方向は N-79° -E である。覆土は黒褐色土の単一層である。

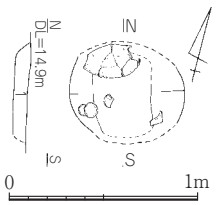


図 5-34　SK84 遺構図

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-36 №1 ～ 5)

№1 は弥生土器広口壺の口縁部である。口縁部が開き、口径 16.4cmを測る。整形は内外面共にハケ、ナデを施す。

２から４は鉢である。２は大型の鉢で口径 30cmを測る。口縁部は短く外反し、底部は欠損する。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケを施す。３、４は小型の鉢である。３は口径 9.6cm、器高 10.2cm、底径 2.2cmを測る。口縁部は余り開かず体部が立ち上がる。整形は外面がタタキ、内面はハケ、ナデを施す。４は口径 8cm、器高 4.1cm、底径 2.2cmを測る。底部は突底した丸底気味の平底である。整形は内外面共にナデを施す。外面は部分的に落剥している。

５は鉄滓で重量 285g を量る。

SK90(図 5-35、40)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-19 他

切り合い関係；ST40・42 を切る

時期；古代？　**形状**；大型円形

断面形態；皿状　**主軸方向**；N-73° -W

規模；2.90 × 2.26m ×深さ 0.36m

覆土；暗褐色粘質土

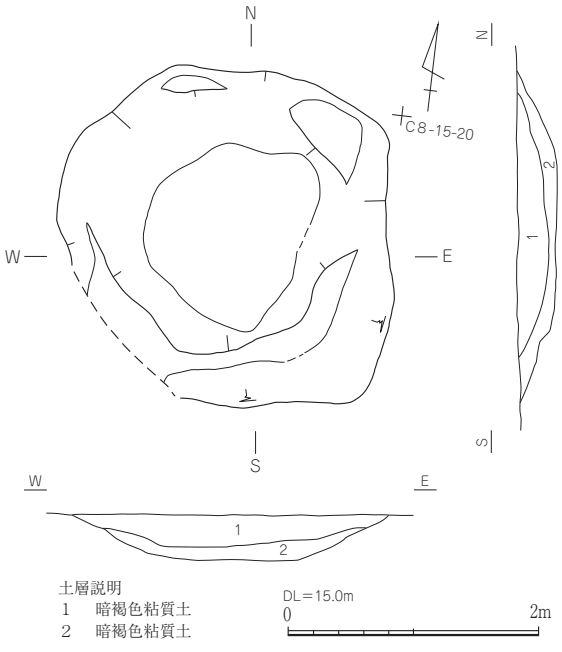
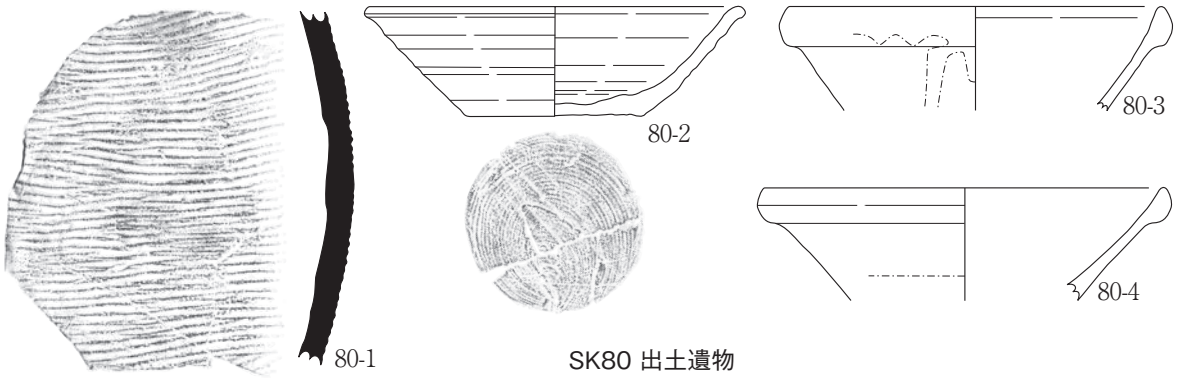
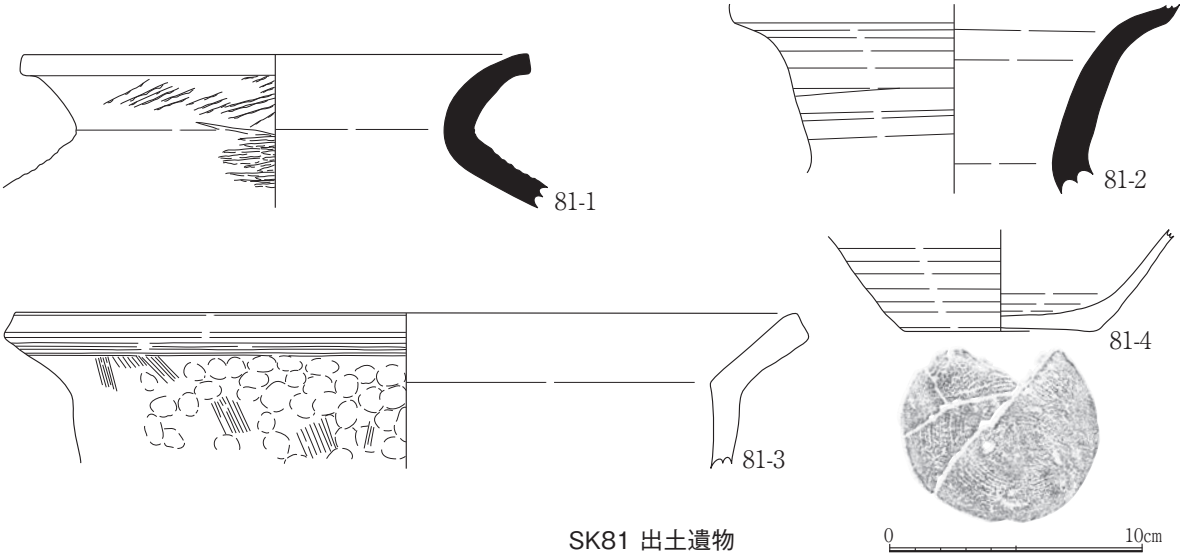


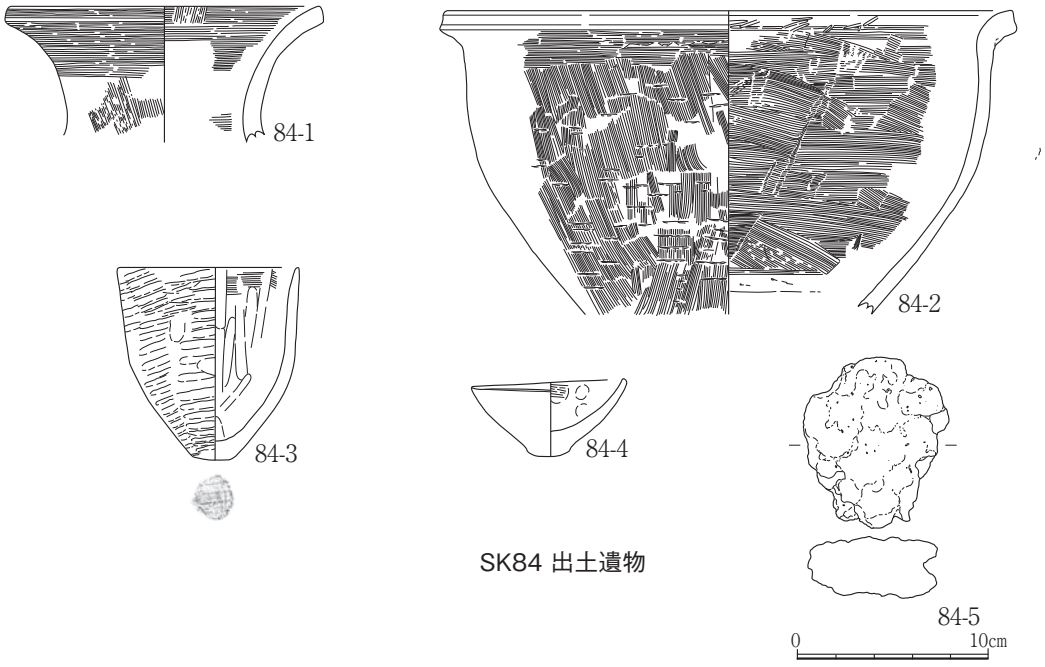
図 5-35　SK90 遺構図



SK80 出土遺物



SK81 出土遺物



SK84 出土遺物

図 5-36　SK80・81・84 出土遺物実測図

出土遺物；鉄製品

所見；Ⅷ AW 区の南東に位置し、グリッドは C8-15-19、C8-15-20 他に跨がる。南に位置する古墳時代後期の ST40、ST42 を切っている。形状は大型円形である。規模は長径 2.90m、短径 2.26m、深さ 36cmを測る。断面は皿状を呈し、長軸方向は N-73° -W である。覆土は暗褐色粘質土が２層に分かれ堆積している。

出土遺物 (図 5-40 №1)

№1 は鉄片である。全長 5.7cm、厚さ 0.6cmを測り、重量 23g を量る。

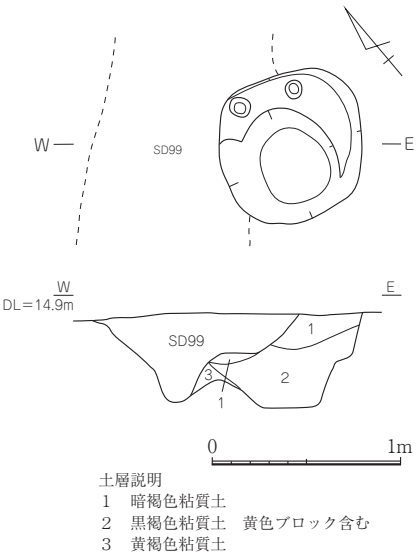


図 5-37　SK91 遺構図

SK91(図 5-37、40)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-14-20

切り合い関係；SD99 に切られる

時期；古代　**形状**；円形　**断面形態**；－　**主軸方向**；－

規模；0.78m ×深さ 0.5m　**覆土**；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；土師器甕

所見；Ⅷ AW 区の南西に位置し、グリッドは C8-14-20 である。東には古墳時代後期の ST44 が隣接しており、北西部を SD99 に切られている。形状は円形である。規模は直径 0.78m、深さ 50cmを測る。覆土は上層が暗褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。

所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 5-40 №1)

№1 は土師器甕の口縁部である。口径 23.6cmを測り、口縁部は外反する。整形は頸部外面、口縁部内面にハケを施す。

SK93(図 5-38、40)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-21　**切り合い関係**；ST43 を切る

時期；古代？　**形状**；円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；－

規模；1.00m ×深さ 0.15m　**覆土**；－

出土遺物；土師器坏

所見；Ⅷ AW 区の南西に位置し、グリッドは C8-15-21 である。古墳時代後期の ST43 の真上に位置し、上層を切っている。形状は円形である。規模は直径 1m、深さ 15cmを測り、断面は皿状を呈する。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられるものの判然としない。

出土遺物 (図 5-40 №1)

№1 は土師器坏の底部破片である。底径 6.8cmを測り、底部は回転糸切りである。整形は内外面共にナデを施す。

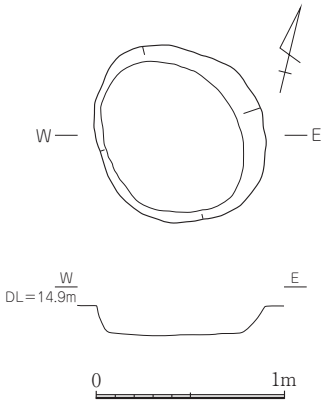


図 5-38　SK93 遺構図

SK97(図 5-39、40)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-21 他

切り合い関係；ST44 を切る

時期；古代？　**形状**；円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；－

規模；0.88m ×深さ 0.1m　**覆土**；暗褐色粘質土主体

出土遺物；須恵器

所見；Ⅷ AW 区の南西に位置し、グリッドは C8-15-16、C8-15-21 に跨がる。南には古墳時代後期の ST43、北には ST44 が隣接しており、ST44 の南端を切っている。形状は円形である。規模は直径 0.88m、深さ 10cmを測り、断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色ブロックを含み、褐色粘質土が混ざる。

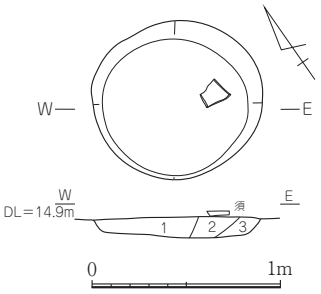


図 5-39　SK97 遺構図

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられるものの、出土遺物が 1 点のみであるため不確かである。

出土遺物 (図 5-40 №1)

№1 は須恵器で壺か甕の胴部破片である。整形は外面が格子タタキ、内面は渦巻きタタキを施す。

SK98(図 5-41)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C9-6-16　**切り合い関係**；ST49 を切る

時期；古代？　**形状**；長楕円形？　**断面形態**；－

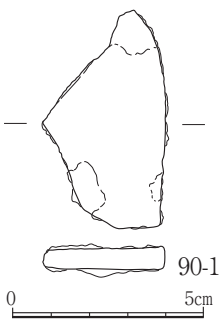
主軸方向；－　**規模**；－　**覆土**；－

出土遺物；土師器甕、碗、坏

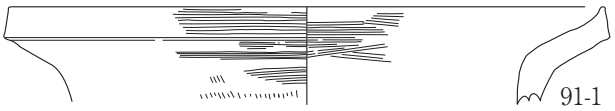
所見；Ⅷ AW 区の北東に位置し、グリッドは C9-6-16 である。弥生時代後期末の ST49 の真上に位置し、上面を切っている。検出時の形状は長楕円形であったが他の詳細は不明である。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられるものの判然としない。

出土遺物 (図 5-41 №1 ～ 6)

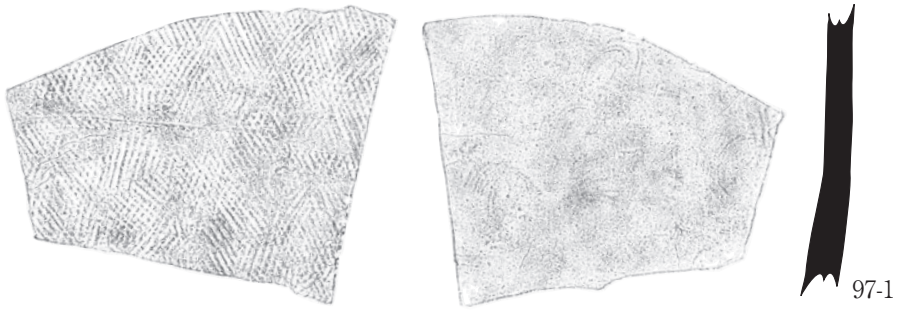


SK90 出土遺物



SK91 出土遺物

SK93 出土遺物



SK97 出土遺物

図 5-40　SK90・91・93・97 出土遺物実測図

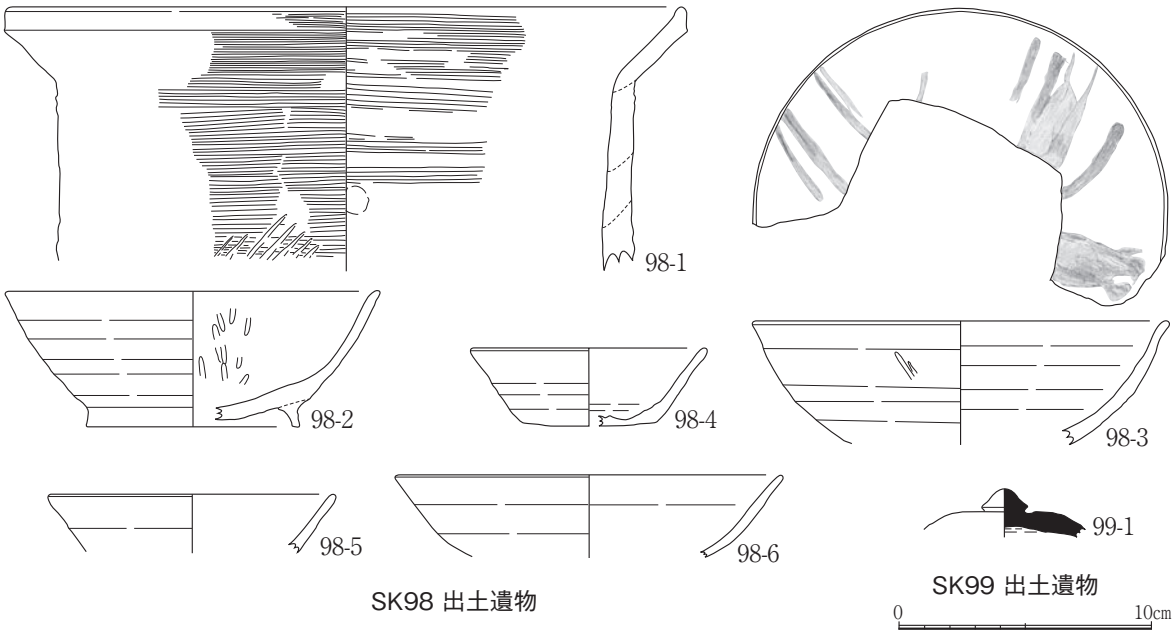


図 5-41　SK98・99 出土遺物実測図

№1から6は土師器である。1は甕で口径 26.6cmを測り、口縁部は外傾する。整形は外面がハケ、ナデ、タタキ、内面はハケ、ナデを施す。

2は高台付碗で口径 14.8cm、器高 5.4cmを測る。整形は外面がロクロナデ、内面はミガキ、ナデを施す。3は碗で口径 16.2cmを測り、底部は欠損する。整形は内外面共にロクロナデを施す。

4から6は坏である。4は口径 9.3cm、器高 3.1cm、底径 5.4cmを測る。整形は内外面共にナデを施す。底部は回転ヘラ切りである。5、6は口縁部で整形は内外面共にナデを施す。

SK99(図 5-41)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-16　**切り合い関係**；－

時期；古代？　**形状**；円形？　**断面形態**；－

主軸方向；－　**規模**；－　**覆土**；－

出土遺物；須恵器坏蓋

所見；Ⅷ AW 区の南西に位置し、グリッドは C8-15-16 である。古代の SD99 と重なり、SD99 を掘り上げた際に消滅した。切り合い、規模、覆土等は不明である。検出時の形状は円形と考えられる。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられるものの判然としない。

出土遺物 (図 5-41 №1)

№1は須恵器坏蓋である。小型で宝珠形の鈕が付く。整形は内面にロクロナデを施す。外面には釉と付着物が付く。

SK100(図 5-42、44)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-22　**切り合い関係**；SX34 に切られる

時期；弥生後期後半　**形状**；円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；－

規模；0.65 × (0.44)m ×深さ 0.16m　**覆土**；暗褐色粘質土

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ AW 区の北西に位置し、グリッドは C8-10-22 である。東側を同時期の SX34 に切られている。形状は円形と考えられる。規模は残存部で長径 0.65m、短径 0.44m、深さ 16㎝を測る。断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色粘質土の単一層で黄褐色ブロック、炭化物を含む。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-44 №1、2)

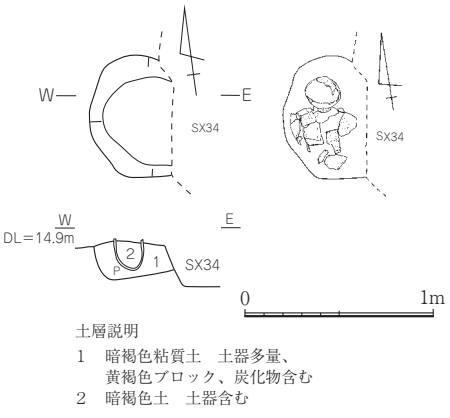


図 5-42　SK100 遺構図

№1、２は弥生土器甕である。１は完形品で口径 14㎝、器高 22.7㎝、底径 1.3㎝を測る。口縁部は外反し、肩部は張らない。底部は小さな平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。２は口縁部が欠損する。底部は平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面はハケ、ナデを施す。外面胴部下半は大きく剥がれている。

SK101(図 5-43、44)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-2　**切り合い関係**；－

時期；弥生後期後半？　**形状**；円形　**断面形態**；皿状　**主軸方向**；－

規模；0.66 × 0.58m ×深さ 0.07m　**覆土**；－

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ AW 区の北西に位置し、グリッドは C8-15-2 である。東には弥生時代後期末の ST45 が位置している。形状は円形である。規模は長径 0.66m、短径 0.58m、深さ 7㎝と比較的浅い。断面は皿状を呈する。

所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物 (図 5-44 №1)

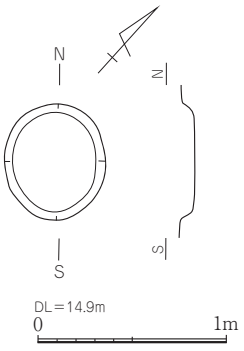


図 5-43　SK101 遺構図

№1 は弥生土器甕である。口径 15.4㎝、器高 24.3㎝、底径 3㎝を測り、口縁部は外傾する。整形は外面がタタキ、ハケ、ミガキ、内面は指頭、ナデを施す。

SK104(図 5-44)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-18　**切り合い関係**；ST42、SD91 に切られる

時期；古墳？　**形状**；不整形　**断面形態**；逆台形？　**主軸方向**；N-63° -W

規模；2.86 × 1.50m ×深さ 0.93m　**覆土**；黒色粘質土、暗褐色粘質土

出土遺物；須恵器壺

所見；Ⅷ AW 区の南中央部に位置し、グリッドは C8-15-18 である。南側を古墳時代後期の ST42、西側を古代の SD91 に切られている。形状は不整形で規模は長径 2.86m、短径 1.50m、深さ 93㎝を測る。覆土は下層に暗褐色粘質土、その上に黒色粘質土が堆積する。

出土遺物 (図 5-44 №1)

№1 は須恵器壺の胴部破片である。胴径 18.4㎝を測り、胴部上方に沈線が一条巡る。整形は内外面共にロクロナデを施す。

SK106(図 5-45、46)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-4-17 他　**切り合い関係**；SB19 に切られる

時期；古代　**形状**；方形　**断面形態**；箱形　**主軸方向**；N-2° -E

規模；1.89 × 1.73m ×深さ 0.79m　**覆土**；黒褐色粘質土主体

出土遺物；土師器甕、坏、皿、須恵器、鉄製紡錘車、板碑状礫

所見；Ⅷ BW 区の北東端に位置し、グリッドは C9-4-17、C9-4-18 に跨がる。調査区外へ若干延びていた為南側を調査した後、北へ拡張し全面を発掘した。東には古墳時代後期の ST52、ST53、南には SB19、弥生時代後期の ST11 が位置しており、SB19 に切られている。形状は方形である。規模は長径 1.89m、短径 1.73m、深さ 79cmと深い。断面は箱形で長軸方向はほぼ真北を指し N-2° -E である。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、床面から炭化物、中央やや南寄りと東隅から焼土を検出している。柱穴は 4 基検出しており、径 10cmから 28cm、深さ 5cmから 18cmと南北で規模に若干差があるが、配置からして柱跡だと考えられる。西側には幅 34cm、床面からの高さ 40cm程を測る足場を検出している。Ⅷ AW 区の SX33 と似たような形態をしている。

遺物出土状況は床面から土師器、須恵器、鉄製紡錘車が出土している。上層では礫の投棄が認められる。

所属時期は出土遺物からして古代と考えられる。

出土遺物 (図 5-46 №.1 ～ 18)

№.1 は須恵器で壺か甕の胴部と考えられる。整形は外面にタタキを施す。

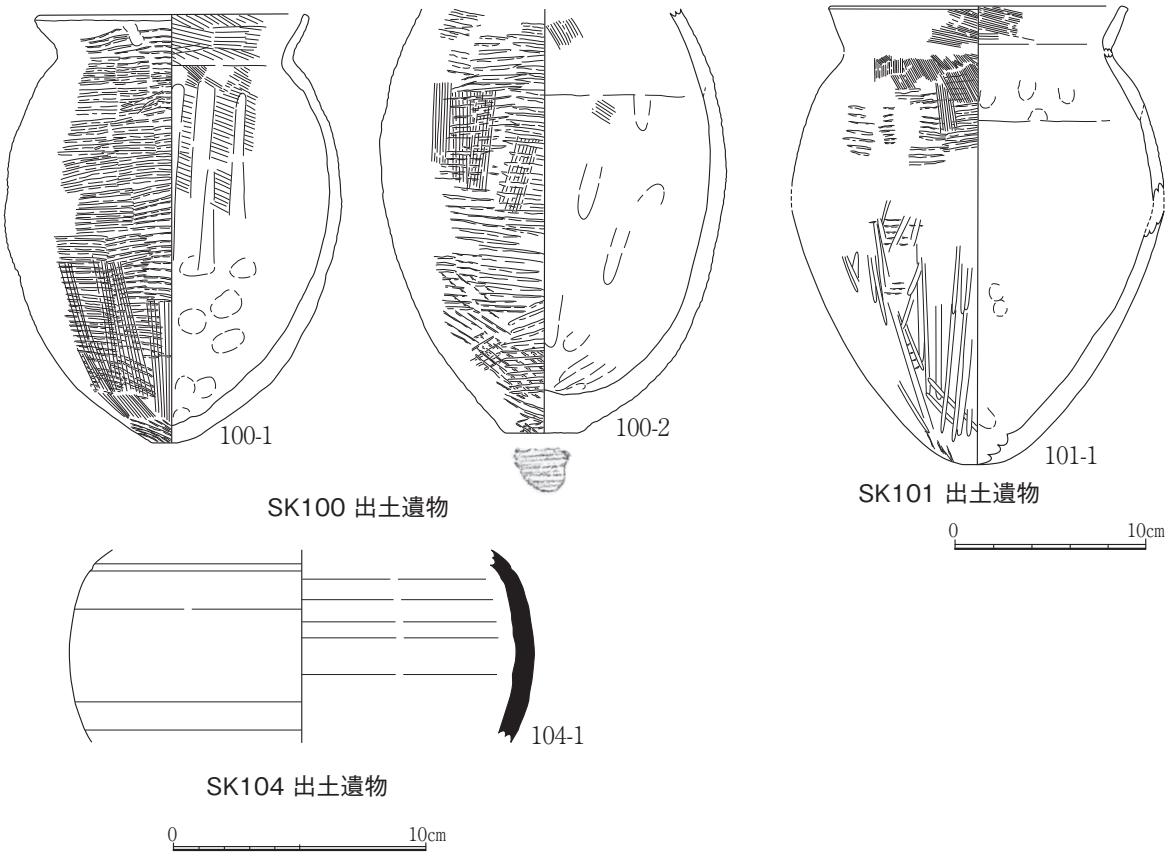


図 5-44　SK100・101・104 出土遺物実測図

２から４は土師器甕である。２は口径 27cm、器高 24cmを測り、口縁部は外反する。底部は欠損しているが、丸底気味だと考えられる。整形は外面上半がハケ、下半はタタキ、内面はナデを施す。胎土は砂粒を多量に含む。３は口縁部で口縁部が外反し、整形は外面がタタキ、ハケ、ナデ、内面はハケ、ナデを施す。４は底部破片で底径 10.8cmを測る。整形は外面がハケ、内面はハケ、ナデ、指頭を施す。

５から 10 は坏である。５から７は内外面共にナデ整形で内面底に回転渦巻き痕を残す。底部は回転ヘラ切りである。８、９も同様で８は外面、９は内外面共にロクロ目を残す。10 は内外面共にナデ整形で底部は回転ヘラ切りである。

11、12 は台付皿である。11 は口縁部が欠損する。内外面共にナデ整形で台裾部が僅かに開く。皿部底部は回転ヘラ切りで内面底に回転渦巻き痕を残す。12 は口径 16cm、器高 5.4cm、底径 9.2cmを測る。皿部は器高が低く開く。内外面共にロクロナデ整形で台裾部が僅かに開く。

13 から 15 は坏の口縁部細片である。13、14 は口径約 12cmを測る。内外面共にナデ整形である。15 も同様で外面にロクロ目を残す。

16 は鉄製紡錘車である。軸全長 12.6cm、錘径 6.1cmを測り、重量 48g を量る。

17、18 は板碑状の礫である。文字等は施されていない。結晶片岩製である。

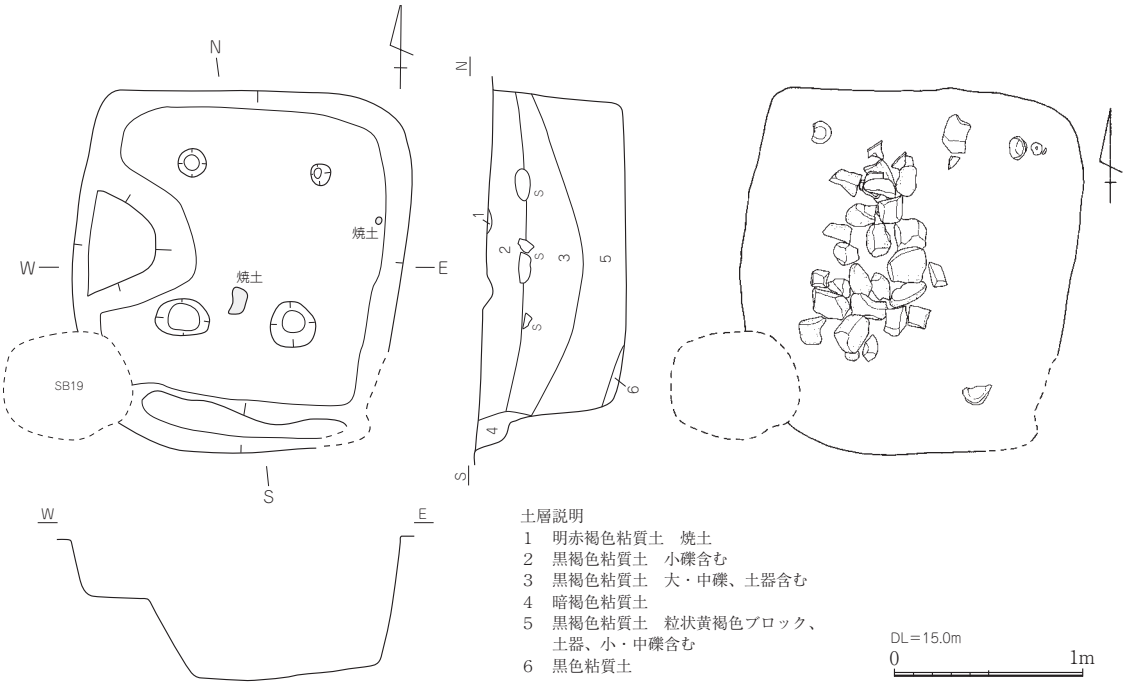


図 5-45　SK106 遺構図

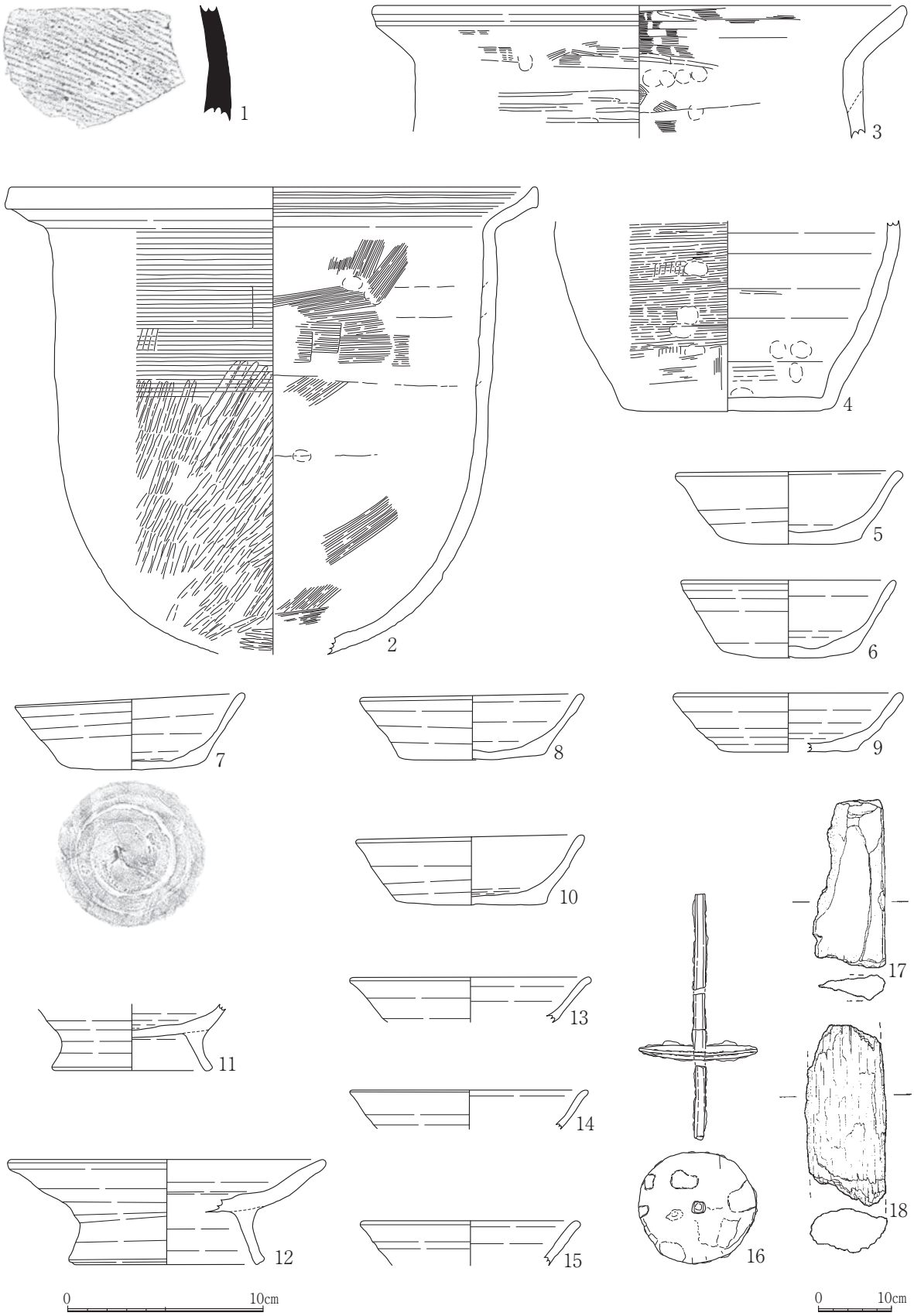


図 5-46　SK106 出土遺物実測図

表5-2　土坑遺物観察表

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 5-2	SK2	1	弥生土器	甕		(16.3)	2.4	小さな平底、底部やや突底気味、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-2	SK2	2	弥生土器	甕		(16.6)	(3.6)	平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒・小礫少量
図 5-2	SK2	3	弥生土器	鉢	10.8	6.1	5.0	平底、体部やや開く、外面タタキ、ナデ、指頭、内面ハケ、ナデ、指頭	砂粒・小礫少量
図 5-2	SK2	4	弥生土器	鉢	8.0	3.1	1.1	小型、丸底気味、体部開く、内外面ナデ、指頭	砂粒少量
図 5-4	SK4	1	弥生土器	壺	17.4	35.9	7.9	広口壺、口縁開く、頸部立ち上がる、口縁内面ハケ、内外面ナデ	砂粒多量小礫少量
図 5-4	SK4	2	弥生土器	壺	15.1	34.3	7.3	口縁外反、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-5	SK4	3	弥生土器	壺	11.8	30.7	8.0	口縁外反、頸部立ち上がる、外面ハケ、ミガキ、ナデ、内面ナデ	小礫少量
図 5-5	SK4	4	弥生土器	甕	13.7	23.4	4.6	口縁外反、外面煤付着、外面ハケ、底部指頭、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-5	SK4	5	弥生土器	甕	(13.6)	32.7	7.6	口縁僅かに外傾、頸部立ち上がる、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-5	SK4	6	弥生土器	甕		(15.0)	(5.6)	胴部丸味、外面ハケ、ミガキ、内面ハケ、ナデ	小礫微量
図 5-5	SK4	7	弥生土器	甕・底部		(14.5)	7.8	体部開く、外面ハケ、内面ナデ	小礫多量
図 5-5	SK4	8	弥生土器	鉢	13.4	10.5	4.8	やや突出した平底、口縁内傾気味、円形透孔、口縁内外面ハケ、外面ハケ、ミガキ、内面ナデ、ミガキ	小礫少量
図 5-5	SK4	9	弥生土器	鉢	13.4	12.0	6.6	高台付き、碗状、外面ハケ、台部指頭、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 5-5	SK4	10	弥生土器	高坏	20.0	14.9	10.7	口縁くびれる、裾部開く、外面ハケ、内面ハケ、ナデ、指頭	小礫多量
図 5-5	SK4	11	弥生土器	高坏	10.2	(4.1)		皿状の坏部、口縁内外面ハケ、内外面ミガキ	小礫微量
図 5-5	SK4	12	弥生土器	高坏	(14.3)	(5.1)		皿状の坏部、口縁内外面ハケ、内外面ミガキ	小礫微量
図 5-8	SK5	1	弥生土器	甕	13.1	(8.4)		口縁外傾、口縁内外面ハケ、胴部外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫微量
図 5-8	SK5	2	弥生土器	甕	(14.0)	(20.5)		口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫微量
図 5-8	SK5	3	弥生土器	甕・口縁	(16.5)	(6.6)		口縁僅かに外傾、口唇平坦、外面タタキ、内面ハケ、ナデ	小礫微量
図 5-8	SK5	4	弥生土器	甕・口縁	(13.4)	(7.0)		口縁外傾、内外面ハケ	小礫微量
図 5-8	SK5	5	弥生土器	鉢・口縁	(25.6)	(7.9)		体部開く、口唇斜傾、内外面ハケ	小礫微量
図 5-8	SK5	6	弥生土器	鉢・口縁	(20.4)	(7.9)		体部開く、口唇平坦、外面ハケ、内面ミガキ	小礫微量
図 5-8	SK5	7	弥生土器	鉢	20.3	6.8		丸底、体部開く、外面タタキ、ヘラナデ、内面ミガキ	小礫微量
図 5-8	SK6	1	弥生土器	壺		(25.5)	(3.5)	小さな平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-8	SK6	2	弥生土器	壺・口縁	(14.8)	(7.0)		広口壺、口縁開く、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-8	SK6	3	弥生土器	鉢	(26.2)	10.4	(2.9)	小さな平底、体部大きく開く、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫多量
図 5-8	SK7	1	弥生土器	甕	(14.6)	(25.4)		口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫多量、砂粒少量
図 5-8	SK9	1	土師器	坏	10.2	3.4	4.0	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ロクロナデ	砂粒微量
図 5-8	SK9	2	土師器	坏	9.9	3.6	3.8	底部回転糸切り、簀子状圧痕、内面底回転渦巻き痕、底部出っ尻気味、内外面ロクロナデ	砂粒微量
図 5-13	SK12	1	弥生土器	甕・口縁	(18.5)	(3.6)		口縁外傾、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
図 5-13	SK13	1	弥生土器	甕	(15.6)	(26.5)		口縁「く」字状に外反、肩部なだらか、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-13	SK13	2	弥生土器	甕	(11.0)	19.4	4.5	小型、平底、口縁短く外傾、肩部張らず、口縁外面ナデ、内面ハケ、胴部外面ハケ、内面ナデ	小礫・砂粒少量
図 5-13	SK18	1	須恵器	横瓶・口頸	(11.0)	(4.5)		内面に自然釉？、内外面ロクロナデ	白色鉱物粒少量
図 5-19	SK30	1	須恵器	坏身・口縁	13.2	(2.6)		受け部短く内傾、内外面ナデ	白色鉱物粒少量
図 5-19	SK32	1	弥生土器	壺・口縁	(22.8)	(2.4)		広口壺、口縁大きく開く、内外面ハケ	小礫微量
図 5-19	SK32	2	弥生土器	壺・口縁	(20.4)	(4.1)		外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
図 5-19	SK32	3	弥生土器	高坏・裾部		(4.2)		裾部大きく開く、透かし円孔、外面ミガキ、内面ナデ	小礫微量
図 5-19	SK33	1	弥生土器	甕	(11.2)	18.2	(2.4)	小さい平底、口縁緩やかに外傾、肩部なだらか、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 5-19	SK33	2	弥生土器	甕	12.0	(11.6)		口縁短く外反、肩部なだらか、外面タタキ、内面ハケ、ナデ、煤付着	小礫微量
図 5-19	SK34	1	弥生土器	甕	(15.6)	(17.9)		口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 5-19	SK36	1	須恵器	坏・底部		(4.3)		内外面ナデ	砂粒少量
図 5-19	SK38	1	弥生土器	鉢・底部		(3.9)	4.8	平底、体部大きく開く、外面ハケ、内面ハケ？、落剥	小礫少量
図 5-24	SK41	1	弥生土器	甑	(19.4)	(18.7)	3.4	口縁短く外傾、底部中央単孔、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面ハケ、ヘラナデ	小礫少量
図 5-24	SK41	2	弥生土器	甕・口縁	(13.6)	(7.1)		口縁「く」字状に外反、肩部なだらか、外面ハケ、内面ハケ、ヘラナデ	砂粒少量
図 5-24	SK41	3	弥生土器	鉢	(14.2)	7.1	(2.0)	突底気味の小さな平底、体部開く、外面ハケ、内面ハケ、ミガキ、ナデ	砂粒少量
図 5-24	SK41	4	土師器	甕	(14.5)	(10.1)		口縁「く」字状に外反、肩部なだらか、内外面ハケ	砂粒微量
図 5-24	SK41	5	土師器	高坏・脚部		(3.5)		裾部開く、透かし円孔、外面ミガキ	砂粒少量
図 5-24	SK41	6	土製品	器台	長 6.2	厚 6.7	重 332.6	指頭、ナデ、刻み	砂粒微量
図 5-24	SK42	1	弥生土器	甕		(15.8)	(2.5)	小さな平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫微量
図 5-24	SK49	1	須恵器	胴部				壺か甕の胴部破片、外面タタキ	砂粒少量
図 5-24	SK53	1	土師器	甕・口縁	(29.4)	(7.5)		口縁短く外傾、外面ハケ、ナデ、内面ナデ	砂粒多量
図 5-28	SK64	1	土師器	坏	11.2	4.0	6.9	底部回転ヘラ切り、やや突底気味、内面底回転渦巻き痕、内外面ナデ、外面ロクロ目	砂粒少量
図 5-28	SK65	1	土師器	坏・底部		(1.9)	(7.4)	内外面ナデ	精良
図 5-28	SK66	1	土師器	甕	(26.2)	(15.5)		口縁「く」字状に外傾、肩部なだらか、口縁内外面ハケ、胴部外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫微量
図 5-28	SK66	2	土師器	甕	(12.4)	(11.0)		口縁「く」字状に外反、肩部なだらか、口縁外面タタキ、指頭、内面ハケ、胴部外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 5-30	SK69	1	須恵器	長頸壺・口頸	(9.4)	8.4		内外面回転ナデ、外面自然釉？	砂粒多量
図 5-30	SK77	1	弥生土器	甕・口縁	(12.3)	(4.2)		口縁外反、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 5-30	SK77	2	弥生土器	鉢・口縁	(21.0)	(4.5)		体部やや丸味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
図 5-36	SK80	1	須恵器	胴部				壺か甕の胴部破片、外面タタキ	砂粒多量
図 5-36	SK80	2	土師器	坏	(14.7)	4.4	7.2	底部回転糸切り、内外面回転ナデ	砂粒少量
図 5-36	SK80	3	陶磁器	白磁碗・口縁	(14.8)	(4.2)		玉縁口縁、内外面透明釉	乳白色、精良
図 5-36	SK80	4	陶磁器	白磁碗・口縁	(16.0)	(4.5)		玉縁口縁、外面灰釉、露胎、内面灰釉	灰白色、精良
図 5-36	SK81	1	須恵器	壺・口縁	(20.0)	(6.1)		口縁「く」字状に外傾、口唇平坦、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	白色鉱物粒多量
図 5-36	SK81	2	須恵器	壺		(7.5)		口縁外反、内外面回転ナデ、釉	砂粒多量
図 5-36	SK81	3	土師器	甕・口縁	(31.0)	(6.2)		口縁外傾、外面ハケ、ナデ、指頭、内面ナデ	砂粒多量
図 5-36	SK81	4	土師器	坏		(4.1)	7.6	底部回転糸切り、内外面ナデ、外面ロクロ目	砂粒微量
図 5-36	SK84	1	弥生土器	壺・口縁	(16.4)	(7.2)		広口壺、口縁開く、内外面ハケ、ナデ	小礫・砂粒少量
図 5-36	SK84	2	弥生土器	鉢	(30.0)	(16.1)		口縁短く外反、外面ハケ、タタキ、内面ハケ	砂粒多量、小礫少量
図 5-36	SK84	3	弥生土器	鉢	(9.6)	10.2	2.2	小さい平底、口縁あまり開かず、体部立ち上がる、外面タタキ、内面ナデ	
図 5-36	SK84	4	弥生土器	鉢	8.0	4.1	2.2	小型、突底、丸底気味、内外面ナデ、外面部分落剥	小礫・砂粒少量
図 5-36	SK84	5	鉄製品	鉄滓			重 285		鉄
図 5-40	SK90	1	鉄製品		長 5.7	幅 3.2	重 23	茎断面長方形	鉄
図 5-40	SK91	1	土師器	甕・口縁	(23.6)	(3.9)		口縁外反、内外面ハケ、ナデ	砂粒少量
図 5-40	SK93	1	土師器	坏・底部		(1.4)	6.8	底部回転糸切り、内外面ナデ	砂粒微量
図 5-40	SK97	1	須恵器	胴部				壺か甕の胴部、外面格子タタキ、内面渦巻きタタキ	砂粒少量
図 5-41	SK98	1	土師器	甕	(26.6)	(10.5)		口縁外傾、内外面ハケ、ナデ、胴部外面タタキ	小礫少量、砂粒多量
図 5-41	SK98	2	土師器	碗	(14.8)	5.4	(8.4)	高台付、外面ロクロナデ、内面ミガキ、ナデ	砂粒少量
図 5-41	SK98	3	土師器	碗	16.2	(4.9)		内外面ロクロナデ	砂粒少量
図 5-41	SK98	4	土師器	坏	(9.3)	3.1	(5.4)	底部回転ヘラ切り、内外面ナデ	砂粒微量
図 5-41	SK98	5	土師器	坏・口縁	(11.3)	(2.3)		内外面ナデ	砂粒微量
図 5-41	SK98	6	土師器	坏・口縁	(15.2)	(3.3)		内外面ナデ	砂粒微量
図 5-41	SK99	1	須恵器	坏蓋		(1.9)		宝珠形の鈕付、外面釉、付着物、内面ロクロナデ	砂粒微量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 5-44	SK100	1	弥生土器	甕	14.0	22.7	1.3	完形品、小さな平底、口縁外反、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
図 5-44	SK100	2	弥生土器	甕		(22.5)	(3.9)	平底、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒多量
図 5-44	SK101	1	弥生土器	甕	(15.4)	(24.3)	(3.0)	口縁外傾、外面タタキ、ハケ、ミガキ、内面指頭、ナデ	砂粒・小礫多量
図 5-44	SK104	1	須恵器	胴部		(7.6)	胴径 (18.4)	壺か甕の胴部、沈線一条、内外面ロクロナデ	精良？
図 5-46	SK106	1	須恵器	胴部		(5.9)		壺か甕の胴部？、外面タタキ、自然釉？	砂粒多量
図 5-46	SK106	2	土師器	甕	27.0	24.0		丸底気味？、口縁外反、外面上半ハケ、下半タタキ、内面ナデ	砂粒多量
図 5-46	SK106	3	土師器	甕・口縁	(27.0)	(6.8)		口縁外反、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫・砂粒少量
図 5-46	SK106	4	土師器	甕・底部		(9.8)	10.8	平底、外面ハケ、内面ハケ、ナデ、指頭	砂粒少量
図 5-46	SK106	5	土師器	坏	11.2	3.8	7.3	底部回転ヘラ切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	6	土師器	坏	(10.9)	4.0	6.8	底部回転ヘラ切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	7	土師器	坏	11.6	3.9	7.5	底部回転ヘラ切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	8	土師器	坏	11.1	3.4	7.5	底部回転ヘラ切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ナデ、外面ロクロ目	砂粒少量
図 5-46	SK106	9	土師器	坏	(11.4)	3.1	(7.2)	底部回転ヘラ切り、内外面ナデ、ロクロ目	砂粒少量
図 5-46	SK106	10	土師器	坏	11.5	3.6	7.7	底部回転ヘラ切り、内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	11	土師器	台付皿		(3.4)	8.0	台部僅かに開く、底部回転ヘラ切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	12	土師器	台付皿	(16.0)	5.4	9.2	台部僅かに開く、内外面ロクロナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	13	土師器	坏・口縁	(12.2)	(2.4)		内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	14	土師器	坏・口縁	(12.1)	(2.0)		内外面ナデ	砂粒少量
図 5-46	SK106	15	土師器	坏・口縁	(11.0)	(2.3)		内外面ナデ、外面ロクロ目	砂粒少量
図 5-46	SK106	16	鉄製品	紡錘車	長 (12.6)	錘径 (6.1)	重 (48)		鉄
図 5-46	SK106	17	石製品	板碑状礫	長 (228)	幅 (9.5)	重 (840)		結晶片岩
図 5-46	SK106	18	石製品	板碑状礫	長 (236)	幅 (11.0)	重 (1820)		結晶片岩

第６節　竪穴状遺構

竪穴状遺構(SX)とした遺構は小竪穴､不整形のものを時代を問わずSXとした。時期は弥生時代、古墳時代終末から古代、近世の３時期に大きく分けることができる。近世のハンダ土坑を除いて、機能・性格等が判然としないものである。

弥生時代のものは小竪穴状遺構で土器が大量に出土する遺構(SX34、36)である。

古代のものは特徴的な平面形で半月状のもので一辺の弦の長さが５ｍから６ｍの竪穴状遺構(SX40、42～49)が主である。またSX22からSX30は検出時には大溝と考えられたものの半月状竪穴遺構群の纏まりと考えられる。半月状竪穴遺構の機能性格は判然としない。平面形は特徴的であるものの、他には柱穴、焼土は検出しておらず、付帯施設は皆無であった。出土遺物は須恵器、土師器類で特に変わったものは出土していない。こうした半月状竪穴遺構は県下では僅かに数例あるのみで全く注意が向けてこられず、本遺跡で初めて纏まって検出したものである。半月状竪穴遺構については当初竪穴建物跡ではないかと推測して、調査を進めた為に遺構名を竪穴建物跡STで番号を付した。しかし、竪穴建物跡とは全く別物であることが判明し、SXに改変した。SX41からSX49、51についてはSTからSXに改変したものである。本文中に元の遺構名も記載してある。古代のものはそれ以外にも方形の竪穴状遺構(SX21)も数例認められる。

近世については大きく分けて２種類のものが認められる。長方形で一辺が２ｍを超え、深さも１ｍと深いものと、円形で径1.5m前後のものはハンダ土坑(SX3、５～７、12～15)と呼ばれるものである。長方形の竪穴状遺構(SX1、2、4)は遺物も少なく陶磁器類が僅かに出土するのみで、室(芋穴？)の可能性が強い。ハンダ土坑は壁際に小礫を巡らせ、赤土に石灰を混ぜた半田で土坑に搗き固めたものである。木桶を据え置き、水溜にしたものと考えられる。検出した場所によって機能は違ってくる可能性があり、屋敷跡内のものは作業場に伴うもの、畑地のものは水溜であろう。SX3からは馬の歯と考えられる歯牙が出土している。また瓦片の出土するものもある。時期的には長岡台地の用水路開鑿寛永16年(1639)以降のものと考えられる。

上記以外にも時期決定できないSXの一部、及び近世の遺物については割愛した。

表6-1　竪穴状遺構一覧表

SX番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い	備考
SX1	Ⅷ BE	C10-6-8 他	近世	長方形	N-73° -W	2.64	1.80	0.73	擂鉢	ST50 切る	室か
SX2	Ⅷ BE	C10-6-4 他	近世	長方形	N-74° -W	2.78	2.02	0.69	土器		室か
SX3	Ⅷ BE	C10-6-2 他	近世	円形		1.78		0.15	染付碗	SX40、SD10 切る	ハンダ土坑
SX4	Ⅷ BE	C10-6-6 他	近世	長方形	N-11° -E	2.54	1.70	1.02	擂鉢	C10-6-7P3 切る	室か
SX5	Ⅷ BE	C9-10-10 他	近世	円形		1.45		0.05	陶器片	SX6 切られる	ハンダ土坑
SX6	Ⅷ BE	C9-10-5 他	近世	円形		1.50		0.06	天目茶碗	SX5、SD2 切る	ハンダ土坑
SX7	Ⅷ BE	C9-10-5 他	近世	円形		1.35		0.08		ST10 切る	ハンダ土坑
SX8	Ⅷ BE	C9-5-20	近世	長方形	N-3° -E	(2.06)	1.32			SK14、SD2・3・17 切る	
SX9	Ⅷ BE	C9-10-17	近世	長楕円形	N-9° -E	(0.48)	0.38	0.28	弥生細片		
SX10	Ⅷ BE	C9-9-14 他	近世	円形	N-73° -W	1.70	1.58	0.12	炻器甕片	SX41、SD11 切る	
SX11	Ⅷ BE	C9-9-14 他	近世	円形	N-76° -W	1.42	1.30	0.13	陶器細片	SX19、SD11 切る	
SX12	Ⅷ BE	C10-6-14 他	近世	円形						SD18 切る	ハンダ土坑
SX13	Ⅷ BE	C10-6-10 他	近世	円形						SD18 切る	ハンダ土坑
SX14	Ⅷ BE	C10-6-10	近世	円形						SD18 切る	ハンダ土坑

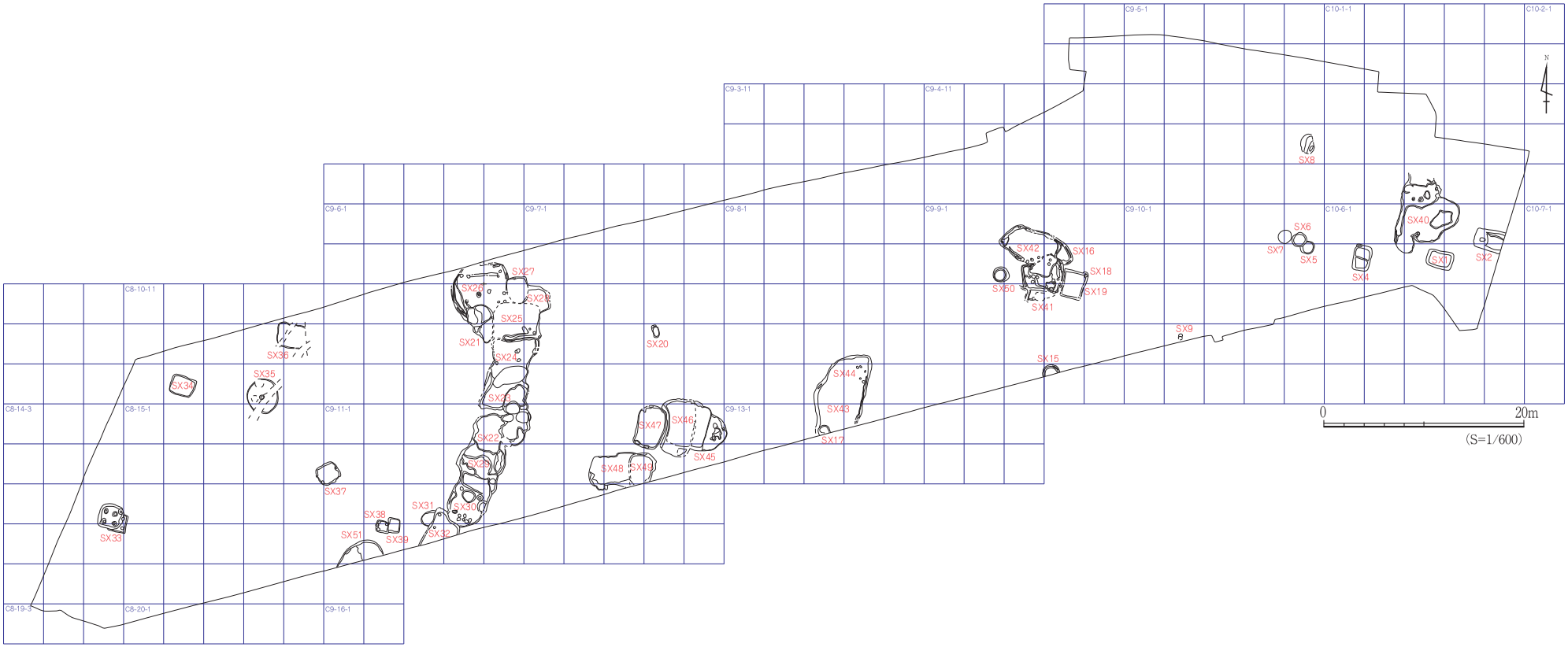


図 6-1　竪穴状遺構全体配置図

SX番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い	備考
SX15	Ⅷ BE	C9-9-24 他	近世	円形		1.72	(0.92)	0.36	陶器片	C9-9-24P1 切る	ハンダ土坑
SX16	Ⅷ BE	C9-9-9 他	古墳末	半月形	N-52° -W	(1.60)	(1.56)	0.32	須恵坏	SX19・41 切る、SD8 切られる	小竪穴、SX42と同一
SX17	Ⅷ BW	C9-13-3	古墳？	円形？		1.15	(0.70)	0.06	須恵坏	C9-13-3P1 切られる	
SX18	Ⅷ BW	C9-9-10	弥生？	円形？	N-0°	(0.60)	(0.40)	0.40	弥生細片		小竪穴
SX19	Ⅷ BE	C9-9-9 他	古墳？	長方形	N-15° -E	(2.76)	(2.23)	0.13	須恵長頸壺？	ST14、SX41 切る、SX10・11、SD11・12 切られる	小竪穴
SX20	Ⅷ AE	C9-7-19	中世	長楕円形	N-21° -W	1.29	0.62	0.20	土器皿		小竪穴
SX21	Ⅷ AE	C9-6-14 他	古代？	隅丸方形	N-12° -W	4.00	2.60	0.60	須恵長頸壺	SX25・26、SK69 切る	小竪穴
SX22	Ⅷ AE	C9-11-5 他	古代？	半月形	N-5° -E	5.34	4.10	0.53	須恵碗、小刀	SX23・29 切る、SK71 切られる	小竪穴
SX23	Ⅷ AE	C9-6-25 他	古代？	半月形	N-31° -E	4.54	(2.62)	0.38	須恵坏蓋	SX22・24 切られる	小竪穴
SX24	Ⅷ AE	C9-6-20 他	古代？	半月形	N-12° -E	(4.51)	3.82	0.37	須恵碗、土師甕	SX23・25 切る、SD73 切られる	小竪穴
SX25	Ⅷ AE	C9-6-15 他	古代？	半月形	N-90°	(4.86)	(3.72)	0.27	須恵坏、壺？	SK69 切る、SX21・24・26～28 切られる	小竪穴
SX26	Ⅷ AE	C9-6-15 他	弥生末	円形		5.88	(4.40)	0.24	弥生土器	SX21・25・27 切られる	竪穴建物跡？
SX27	Ⅷ AE	C9-6-15 他	古代？	半月形	N-4° -W	2.65	2.14	0.28	須恵坏	SX25・26・28 切る	小竪穴
SX28	Ⅷ AE	C9-7-11	古代？	半月形	N-11° -W	2.72	(2.72)	0.24	須恵甕片	SX25 切る、SX27 切られる	小竪穴
SX29	Ⅷ AE	C9-11-9 他	古代？	半月形	N-51° -W	4.82	(3.20)	0.54	土師碗	SX30 切る、SX22 切られる	小竪穴
SX30	Ⅷ AE	C9-11-14 他	古墳末	半月形	N-21° -E	(5.40)	3.78	0.59	須恵坏蓋	SX29・32、SD81 切られる	小竪穴
SX31	Ⅷ AE	C9-11-13 他	近世	円形	N-83° -W	1.92	1.65	0.18	石臼	SX32 切る	
SX32	Ⅷ AE	C9-11-18 他	古墳末	半月形	N-29° -E	(4.00)	(2.77)	0.30	須恵坏	SX30 切る、SX31 切られる	小竪穴
SX33	Ⅷ AW	C8-14-15 他	古代	隅丸方形	N-12° -E	2.50	2.47	0.80	土師坏	SD99・100・104 切られる	小竪穴
SX34	Ⅷ AW	C8-10-22	弥生後期Ⅵ	長方形	N-67° -W	2.44	1.96	0.28	甕、鉢他多量	SK100 切る、C8-10-22P4 切られる	小竪穴
SX35	Ⅷ AW	C8-10-24 他	弥生	円形	N-0°	3.41	3.18	0.08	弥生土器	SB13、SD99 切られる	小竪穴
SX36	Ⅷ AW	C8-10-20 他	弥生末	長方形	N-75° -W	2.91	2.40	0.19	甕、鉢他	ST49、SD99・100 切られる	小竪穴
SX37	Ⅷ AW	C9-11-6 他	古代？	隅丸方形	N-63° -E	2.24	2.10	0.32	鉄製品	ST46 切る、SD91 切られる	小竪穴
SX38	Ⅷ AW	C9-11-17 他	古代	方形	N-80° -W	1.24	1.19	0.63	耳付壺、移動式竈	ST35 切る	
SX39	Ⅷ AW	C9-11-17 他	古代	方形	N-11° -E	1.41	1.20	0.48	土師坏	ST35 切る	
SX40	Ⅷ BE	C10-6-3 他	古代	不整形	N-10° -E	(6.98)	(5.88)	0.65	須恵？、刀子	ST50 切る、SX3、SD1・3 切られる	小竪穴群
SX41	Ⅷ BE	C9-9-8 他	古代？	方形？	N-11° -W	(3.96)	(3.82)	0.26	須恵坏蓋、鉢	ST14 切る、SX10・16・42・19、SD8・9・11・12 切られる	ST15 を変更
SX42	Ⅷ BE	C9-9-3 他	古墳末	半月形	N-66° -W	(5.80)	(3.40)	0.34	須恵坏、土師甕	SD9 切られる	小竪穴、SX16と同一、ST16を変更
SX43	Ⅷ BW	C9-8-23 他	古代？	半月形	N-13° -E	(4.20)		0.41	須恵、土師	SK45、SD27 切られる	ST21 を変更、SX44 と同一か
SX44	Ⅷ BW	C9-8-24 他	古代？	半月形	N-13° -E	(4.60)		0.32	須恵、土師	SD27 切られる	ST22 を変更、SX43 と同一か
SX45	Ⅷ AE	C9-12-5 他	古代？	円形？	N-15° -E	4.50	(3.21)	0.47	須恵坏	SX46 切られる	ST27 を変更
SX46	Ⅷ AE	C9-12-4 他	古代？	方形？	N-4° -E	5.70	(2.66)	0.47	須恵蓋	SX45 切る、SX47 切られる	ST28 を変更
SX47	Ⅷ AE	C9-12-3 他	古代？	方形？	N-13° -E	4.34	2.82	0.44	須恵坏	ST30、SX46 切る、SK50 切られる	ST29 を変更
SX48	Ⅷ AE	C9-12-7 他	古代？	方形？	N-90°	(4.14)	3.42	0.56	須恵甕	ST30 切る、SX49 切られる	ST31A を変更
SX49	Ⅷ AE	C9-12-8 他	古代？	方形？	N-2° -E	(2.73)	(2.64)	0.55	土師坏蓋	SX48 切る	ST31B を変更
SX50	Ⅷ BE	C9-9-7 他	近世	円形	N-84° -W	1.60	1.50	0.23	瓦片	SB5、SD12 切る	SW1 を変更
SX51	Ⅷ AW	C9-11-16 他	古墳末？	円形？	N-76° -E	(4.84)	(1.80)	0.54	須恵壺		ST36 を変更

SX1(図 6-2)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-8 他　**切り合い関係**；ST50 を切る
時期；近世　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-73° -W
規模；2.64 × 1.8m ×深さ 0.73m　**覆土**；黒褐色粘質土
出土遺物；擂鉢、陶器碗他
所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の南東部、C10-6-8 グリッドに位置する。竪穴建物跡 ST50 の中心部に掘り込まれ、ST50 の床面も壊している。

平面形は長方形で長辺 2.64m、短辺 1.8m、深さ 0.73m を測る小竪穴状の遺構である。壁は垂直に立ち上がる。出土遺物は擂鉢、陶器碗他で時期は近世である。室の可能性が強い。同様のものに隣接する SX2 も同様のものである。遺物実測図は割愛した。

SX2(図 6-3)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-4 他　**切り合い関係**；－
時期；近世　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-74° -W
規模；2.78 × 2.02m ×深さ 0.69m　**覆土**；暗褐色土、黒褐色土　**出土遺物**；土器
所見；室か

SX3(図 6-4)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-2 他　**切り合い関係**；SX40、SD10 を切る
時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；－
規模；径 1.78m ×深さ 0.15m　**覆土**；褐色粘質土
出土遺物；染付け碗、瓦片、動物遺存体
所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の南東部、C10-6-2 グリッドに位置する。Ⅷ区 B 東側部の上層で検出した溝で囲まれた近世屋敷跡内のハンダ土坑である。西側の溝 SD1 に接して構築されている。円形の土坑の周りに一旦ハンダ混じりの土を敷き小礫で囲う。更に中に厚さ５㎝程のハンダを搗き固める。SD1 とは一体の遺構と考えられ、SD1 は排水溝と考えられる。

遺物は近世の染付け碗､瓦片､馬の歯と考えられる動物遺存体が出土した｡遺物実測図は割愛した。

SX4(図 6-5)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-6 他　**切り合い関係**；C10-6-7P3 を切る
時期；近世　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-11° -E
規模；2.54 × 1.7m ×深さ 1.02m　**覆土**；－
出土遺物；擂鉢、染付け碗、皿、瓦片
所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の南東部、C10-6-6 グリッドに位置する。平面形は長方形で長辺 2.54m、短辺 1.7m、深さ 1.02m を測るしっかりした掘り方を持つ。規模的には SX1、２と近い。底面は２段になり、北側部に幅約 90㎝の壇を設ける。壁は直立するものの、壁の下方はオーバーハングして掘り込まれている。遺物は近世の擂鉢､染付け碗､皿､瓦片が出土している。室の可能性が強い。遺物実測図は割愛した。

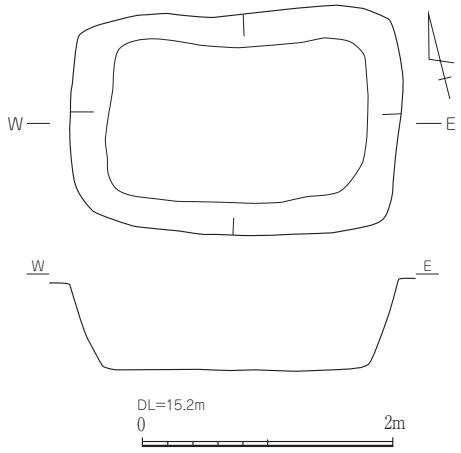
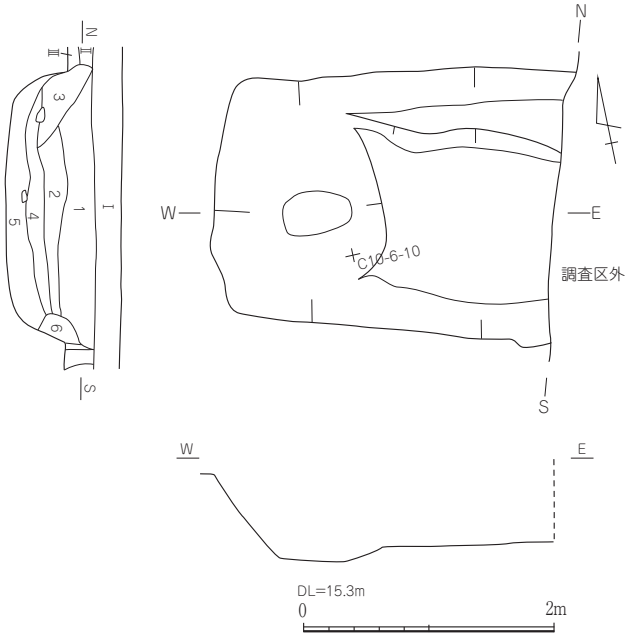


図 6-2　SX1 遺構図



土層説明

Ⅰ	褐灰色土　耕作土	1	暗褐色土　小礫多量混入
Ⅱ	黒色土	2	暗褐色土
Ⅲ	褐色土	3	暗褐色土
		4	暗褐色土
		5	黒褐色土　中礫多量混入
		6	黒褐色土

図 6-3　SX2 遺構図

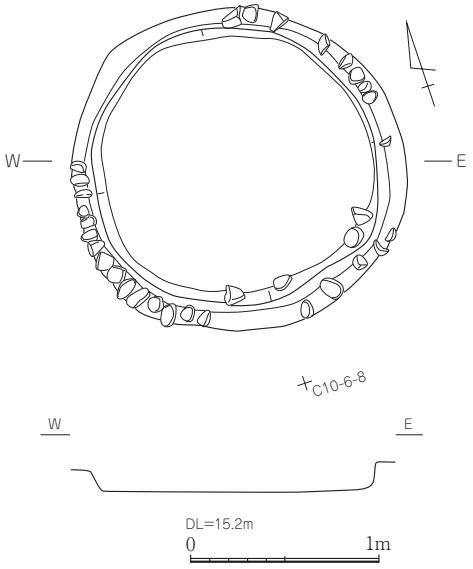


図 6-4　SX3 遺構図

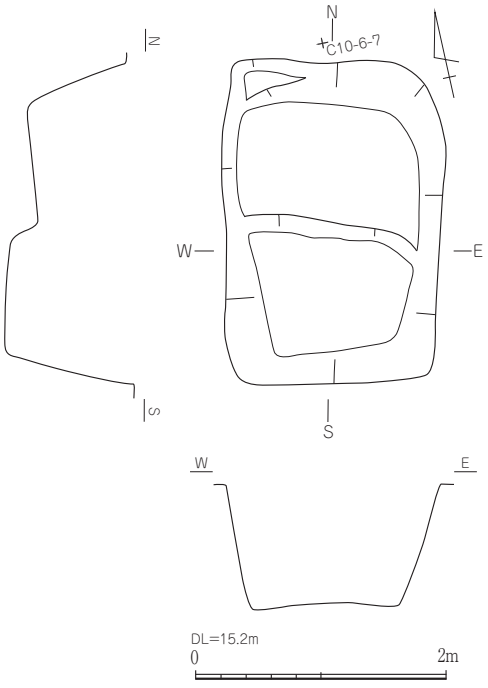


図 6-5　SX4 遺構図

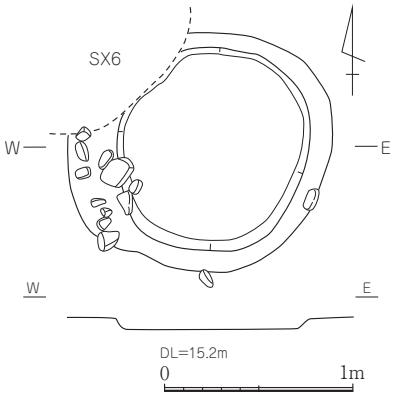


図 6-6　SX5 遺構図

SX5(図 6-6)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-10 他　**切り合い関係**；SX6 に切られる

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；－

規模；径 1.45m ×深さ 0.05m　**覆土**；黄褐色粘質土

出土遺物；陶器片

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の南東部、C9-10-10 グリッドに位置する。Ⅷ区 B 東側部の上層で検出した溝で囲まれた近世屋敷跡内のハンダ土坑である。東側に溝 SD2 に接して構築されている。同じハンダ土坑 SX6 に切られる。円形の土坑の周りに一旦ハンダ混じりの土を敷き小礫で囲う。更に中に厚さ５㎝程のハンダを搗き固める。

SX6(図 6-7)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-5 他　**切り合い関係**；SX5、SD2 を切る

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；－

規模；径 1.5m ×深さ 0.06m　**覆土**；黄褐色粘質土

出土遺物；天目茶碗

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の南東部、C9-10-5 グリッドに位置する。Ⅷ区 B 東側部の上層で検出した溝で囲まれた近世屋敷跡内のハンダ土坑である。溝跡 SD2 の先端部に取り付くように構築されている。SD2 の先端部西側部にはもう 1 基 SX7 が取り付いている。SX6 は同じハンダ土坑 SX5 を切る。円形の土坑の周りを一旦ハンダ混じりの土を敷き小礫で囲う。更に中に厚さ５㎝程のハンダを搗き固める。SD2 とは一体の遺構と考えられる。SD2 は排水溝と考えられる。遺物実測図は割愛した。

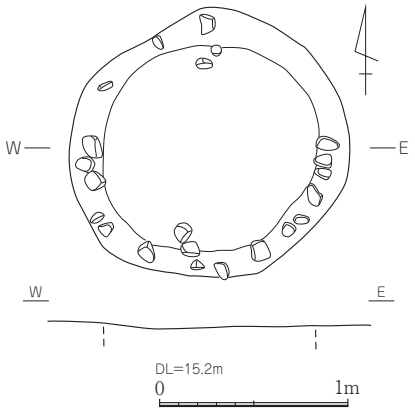


図 6-7　SX6 遺構図

尚、Ⅷ区 B 東側部では合計８基のハンダ土坑を検出している。調査区東端の調査区壁際に一列に並んだ３基を検出している。ハンダ土坑と考えられるものは SX3、5 ～ 7、12 ～ 15 である。

SX10(図 6-8)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-14 他　**切り合い関係**；SX41、SD11 を切る

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；N-73° -W

規模；1.7 × 1.58m ×深さ 0.12m　**覆土**；－

出土遺物；炻器甕片

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の西南部、C9-9-14 グリッドに位置する。SX11 が東側に並んで構築している。円形の大型の土坑である。径 1.7m を測る。壁の残存高は 0.12m でなだらかに立ち上がる。底面からは５点程中小礫が出土している。規模的にはハンダ土坑と似ているものの、ハンダ

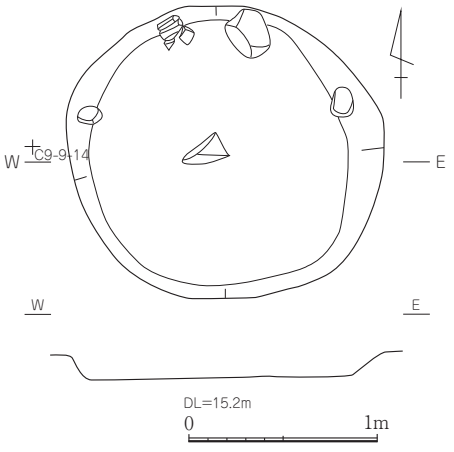


図 6-8　SX10 遺構図

を施さない点が相違する。機能的にはハンダ土坑と同一の可能性が強い。遺物実測図は割愛した。

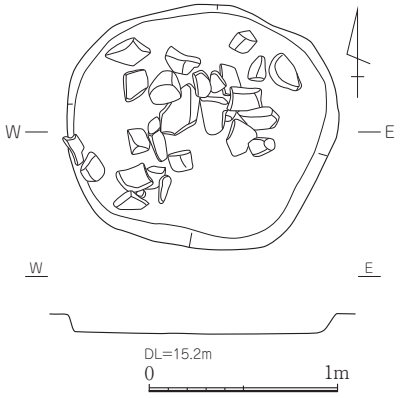


図 6-9　SX11 遺構図

SX11(図 6-9)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-14 他　**切り合い関係**；SX19、SD11 を切る

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；N-76° -W

規模；1.42 × 1.3m ×深さ 0.13m　**覆土**；－

出土遺物；陶器細片

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の西南部、C9-9-14 グリッドに位置する。SX10 が西側に並んで構築されている。円形の大型の土坑である。径 1.42m を測る。壁の残存高は 0.13m でなだらかに立ち上がる。底面からは 25 点程中小礫が纏まって出土している。規模的にはハンダ土坑と似ているものの、ハンダを施さない点が相違する。機能的にはハンダ土坑と同一の可能性が強い。遺物実測図は割愛した。

SX15(図 6-10)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-24 他　**切り合い関係**；C9-9-24P1 を切る

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；－

規模；1.72 × (0.92)m ×深さ 0.36m　**覆土**；黄褐色粘質土

出土遺物；陶器片、染付け

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の南西部、C9-9-24 グリッドに位置する。遺構の半分ほどは調査区外である。円形の大型のハンダ土坑である。径 1.72m を測る。壁の残存高は 0.36m でなだらかに立ち上がる。遺物実測図は割愛した。

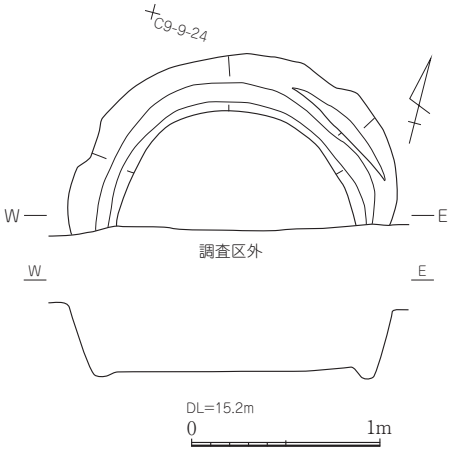


図 6-10　SX15 遺構図

SX16・42(図 6-11、17)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-9 他　**切り合い関係**；SX19・41 を切る、SD8・9 に切られる

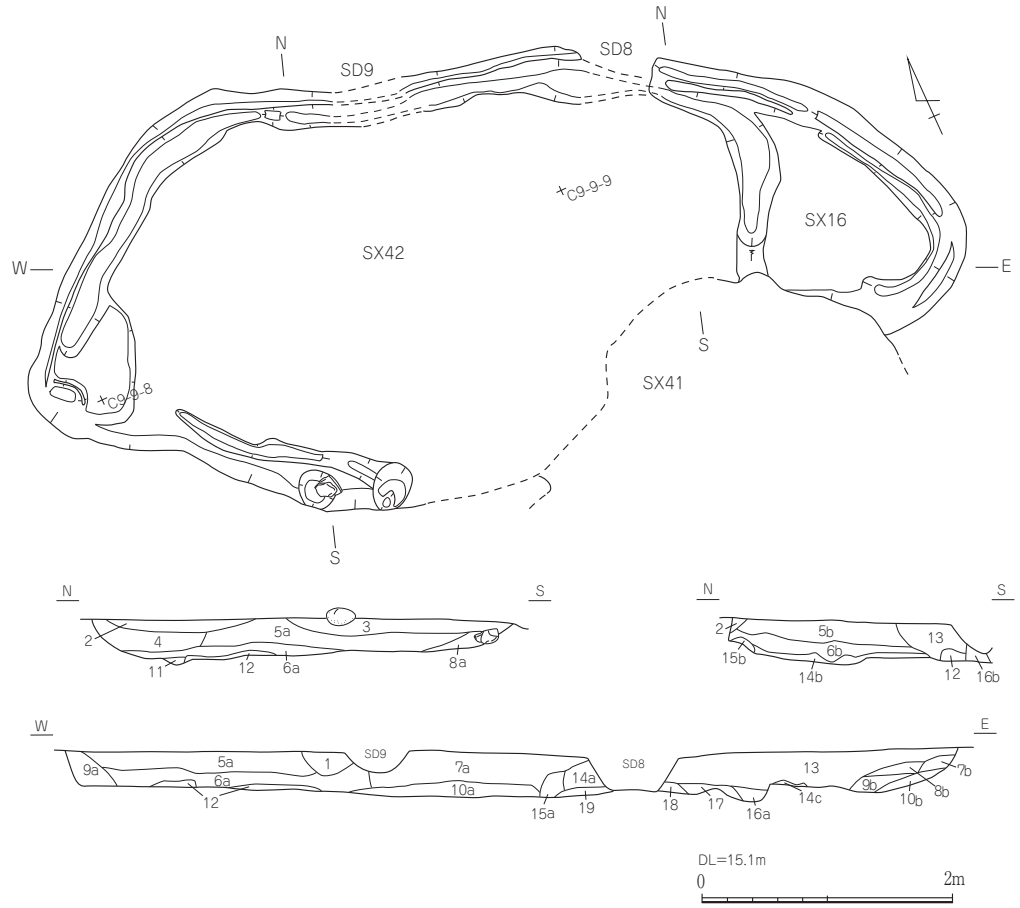
時期；古墳末　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-66° -W

規模；7.4(1.60) × 3.4(1.56)m ×深さ 0.32m　**覆土**；黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏 (SX16)、須恵器坏、土師器甕 (SX42)

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の西寄り中央、C9-9-9 グリッドに位置する。当初、竪穴建物跡と想定して調査を進めた。しかしながら調査過程で炉跡、柱穴等を検出できず竪穴建物跡とは違った遺構ではないかと SX とした。また SX42 とは別物として取り扱ったものの、本来は同一の遺構の可能性が高い。SX42、SX16 が一体のものであると弦部分の長さ 7.4m と極めて大きな遺構となる。しかしながら半月状竪穴遺構の SX43・44、SX45・46、SX48・49 も同様に 2 つの遺構の切り合い関係に見えるものも本来は同一の遺構と見なすと同程度規模と類例を求めることができる。

平面形は半月状を呈する。左右両端がやや狭まり、南側部はやや膨らみを持ち、北側部は直線的



土層説明

1　黒褐色粘質土　褐色・黒色ブロック含む
2　黒褐色粘質土
3　黒褐色粘質土　大礫含む
4　黒褐色粘質土　左上に炭化物・焼土含む
5 a 黒褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
5 b 黒色粘質土
6 a 黒褐色粘質土
6 b 黒色粘質土
7 a 黒褐色粘質土
7 b 黒色粘質土
8 a 黒褐色粘質土　黒色・粒状黄褐色土混入、大礫含む
8 b 黒色粘質土
9 a 黒褐色粘質土　黄褐色ブロック、粒状礫混入
9 b 暗褐色粘質土
10 a 暗褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
10 b 黒色粘質土　黄褐色ブロック混入
11　黒褐色粘質土　黄褐色ブロック混入
12　黄褐色粘質土　黒褐色土混入
13　黒褐色粘質土
14 a 暗褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
14 b 黄褐色粘質土　黒色土多量混入
14 c 黄褐色粘質土　黒褐色土混入
15 a 黄褐色粘質土　暗褐色土多量混入
15 b 褐色粘質土　黒色・黄褐色小ブロック多量、砂混入
16 a 暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック多量含む
16 b 暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
17　暗褐色粘質土　黄褐色土混入
18　暗褐色粘質土
19　黄褐色粘質土　小礫多量、暗褐色土混入

図 6-11　SX16・42 遺構図

である。壁はなだらかに立ち上がる。底面はほぼ平らである。柱穴が数基検出しているものの他の時期のものと考えられる。

覆土は黒褐色粘質土主体で下層で黄褐色粘質土ブロックを僅かに含む程度である。

所属時期は SX16 から古墳時代後期の須恵器坏、SX42 からは同時期と考えられる須恵器坏、土師器甕等の破片が出土しており該期の可能性が高い。

出土遺物 (図 6-17 №1 ～ 5)

№1 は SX16 から出土した須恵器坏である。小型の坏で口径 12.9cm、底径 5.8cm、器高 3.8cmを測る。底部はほぼ平らで体部は内湾気味に立ち上がる。受け部は外反気味にやや短く立ち上がる。底部から体部下半には放射状の線刻を施している。

２から５は SX42 側から出土した遺物である。２は須恵器坏の底部破片である。底部切り離しは

回転ヘラ切りか。底径は大きく 8.6㎝を測る。３は小型の坏である。口径 10.4㎝である。口縁部はほぼ直立し、腰部はやや屈曲する。胎土に白色鉱物粒を多く含む。４は土師器坏の口縁部破片である。口径 12.2㎝を測る。体部は開き気味に立ち上がる。口唇は丸味を持たない。口唇部及び下はハケを施す。他は内外面ともにミガキである。５は土師器甕である。1/4 程残存する。口径 17.0㎝を測る。口縁は緩やかに外反する。肩部は張らず、胴部も張らない長胴甕である。外面はハケ、内面は口縁部がハケ、体部はヘラケズリである。胎土には小礫を多量に含む。

SX19(図 6-12)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-9 他

切り合い関係；ST14、SX41 を切る、SX10・11、SD11・12 に切られる

時期；古墳？　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-15° -E

規模；(2.76) × (2.23)m ×深さ 0.13m

覆土；暗褐色土主体

出土遺物；須恵器長頸壺？

所見；Ⅷ区 B 東側部調査区の西寄り中央、C9-9-9 グリッドに位置する。SX16・42 に隣接する。切り合い関係は古墳時代初頭の ST14、古墳時代後期 SX41 を切る。また近世の SX10・11 が上層に構築されていた。

平面形は長方形と考えられる。長辺 2.7m、短辺 2.2m で深さは 13㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁際には小溝が巡る。小柱穴３基を検出しているものの、本遺構に伴わないと考えられる。

遺物は少なく須恵器の長頸壺と考えられる破片が出土しているのみで、他は混入の弥生土器細片である。所属時期は明瞭にし得ないが、切り合い関係等から判断して古墳時代後期から古代の可能性がある。

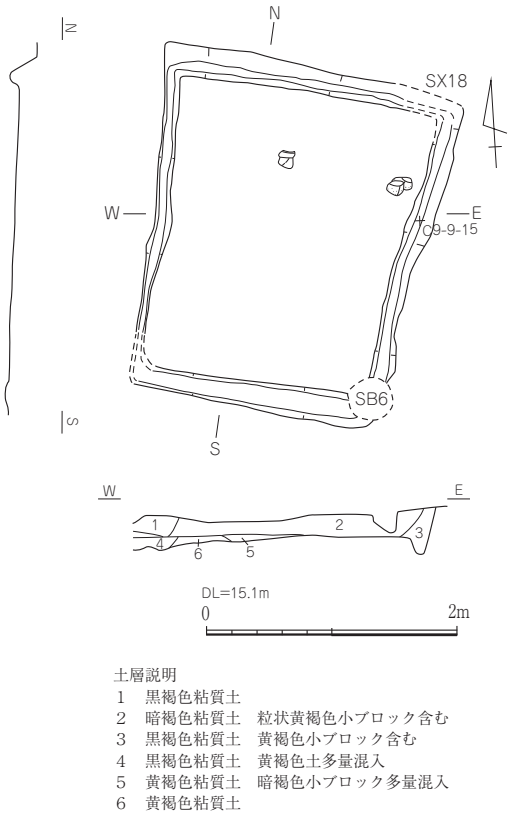


図 6-12　SX19 遺構図

SX20(図 6-13、17)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-19　**切り合い関係**；－

時期；中世　**形状**；長楕円形　**主軸方向**；N-21° -W

規模；1.29 × 0.62m ×深さ 0.2m　**覆土**；黒黄褐色土、黒褐色土

出土遺物；土器皿、須恵器碗 (混入) ？

所見；Ⅷ区 A 東側部調査区のやや東寄り中央、C9-7-19 グリッドに位置する。遺構密度がやや希薄になった地点である。平面形は楕円形で長軸 1.29m、短軸 0.62m で深さは 0.2m を測る比較的しっかりした遺構である。北側壁は壇上に僅かにせり出すが、別の遺構であろう。土坑底面は皿状を呈する。土坑内からは大型破損礫、小礫が底面より５㎝から 10㎝程浮いた状態で 30 点程出土している。東側壁際の礫下から完形に近い土器皿が１点出土している。覆土は礫の入った上層は黒黄褐色

土、底面は黒褐色土である。

遺物は土器皿の他に須恵器片が出土しているものの混入品と考えられる。他に遺物は出土していないものの土坑墓の可能性が強い。所属時期は土器皿からして 15 世紀前半と考えられる。

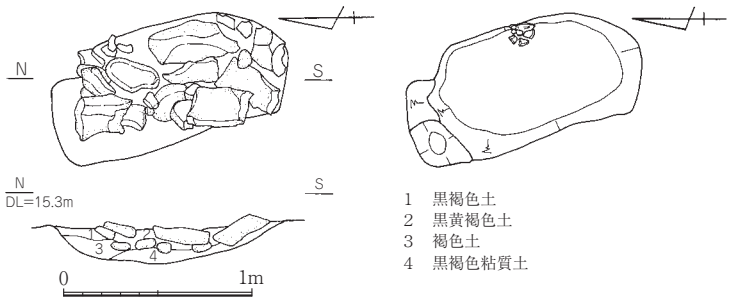


図 6-13　SX20 遺構図

出土遺物 (図 6-17 №1 、2)

№1 は土器皿である。手捏ね土器で外面には指頭痕を多く残す。口径 11.7cm、底径 8.0cm、器高 3.0 cmを測る。口縁部は強くナデ、僅かに外反気味になる。口縁下は稜線を明瞭に残し、体部に指頭痕が残る。底部は平底で底部脇は丸味を持つ。底部には簀子状圧痕が残り、ナデ消す。内面は指頭、ナデである。胎土は精良で黄褐色を呈する。京都系の皿と考えられる。

2 は須恵器鉢の底部か。底部は回転ヘラ切りで体部は開く。底径は 9.0 cmを測る。胎土に白色鉱物粒を多く含む。やや摩耗する。混入品である。

SX21 (図 6-14、17)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-14 他　**切り合い関係**；SX25・26、SK69 を切る

時期；古代？　**形状**；隅丸方形

主軸方向；N-12° -W

規模；4.0 × 2.6m ×深さ 0.6m

覆土；黒褐色土、暗褐色土

出土遺物；須恵器長頸壺、坏、坏蓋、甕片

所見；Ⅷ区 A 東側部調査区のやや西寄り北側、C9-6-14 グリッドに位置する。周辺域には SX 群があり、北側の SX26 を切る。主体部がやや方形に近い形状を示し、南側に張り出し部が付く。主体部の規模はおおよそ長軸 2.6m、短軸 2.1m で張り出し部は長さ 1.9m である。主体部の底面は 2 段になっており、東側部が幅 0.9m の壇になる。最深部は確認面より 0.6m を測るしっかりした掘り方を有する。壁はなだらかに立ち上がる。壇部分の深さは確認部より約 0.3m で、張り出し部分の深さは 0.1m と浅い。

遺物は№2 の須恵器長頸壺が壇部分の南側で№3 の須恵器把手付き台付き坏が主体部南側の落ち込み部分から浮いた状態で出土している。

覆土は黒褐色土、暗褐色土主体で下層には黄褐色土塊が多量に入る層が認められた。

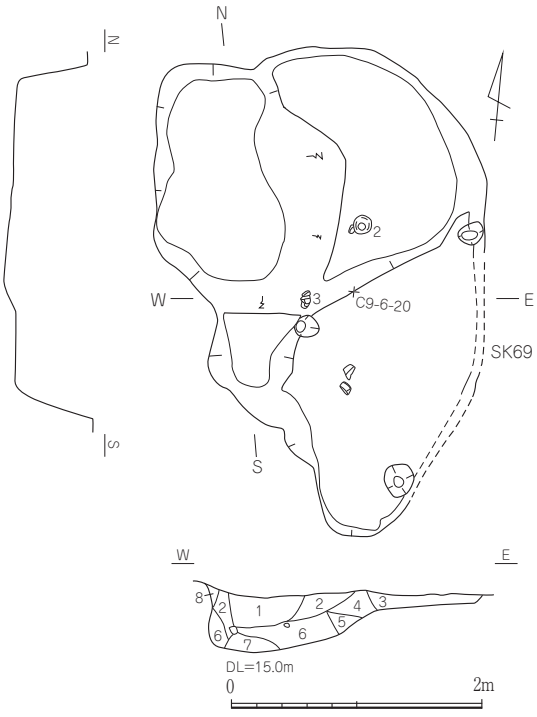


図 6-14　SX21 遺構図

須恵器長頸壺は頸の部分は意図的に打ち欠いており、供献用と考えられ、土坑墓の可能性が強い。

所属時期は出土遺物からして７世紀末から８世紀前半と考えられる。

出土遺物 (図 6-17 №１～３)

№１は須恵器坏蓋である。扁平な鈕が付く。天井部は平坦で回転ヘラケズリを施す。胎土は白色鉱物粒を少量含む。２は須恵器長頸壺である。頸部は欠損する。残存高は 10.4㎝である。肩部は屈曲する。底部は高台が付く。高台部分は開く。底径は 7.1㎝を測る。胎土には小白色礫を少量含む。肩部等には淡緑色の透明に近い自然釉が薄くかかる。３は須恵器台付き坏である。把手が付く。口径 10.5cm、残存高 5.5㎝を測る。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸味を持つ。台部分は開くものの端部は欠損する。胎土は白色鉱物粒を微量含む。色調は青灰色ではなく、黄褐色で軟質である。

SX22(図 6-15、17)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-11-5 他　**切り合い関係**；SX23・29 を切る、SK71 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-5°-E

規模；5.34 × 4.10m ×深さ 0.53m　**覆土**；暗褐色土、黒褐色土

出土遺物；須恵器碗、瑞、長頸壺、横瓶、土師器高坏、鉄製小刀、土器（かわらけ）坏

所見；Ⅷ区 A 東側部調査区のやや西寄り、C9-11-5 グリッドに位置する。SX 群の内の１つである。

SX 群は SX22 から SX30 が含まれる。SX 群全体を概観すると調査区の南端から北端まで連なり、調査区外へと更に続く。幅は 3.8m から 5.3m で西側部分はほとんど膨らみを持たず､直線的である。東側部分いくつかの膨らみを持つ。この膨らみは半月状竪穴遺構が連続的に構築されたものと考えられる。SX 群は半月状竪穴遺構の集合体である。切り合い関係があるものの、平面形では確認できておらず、覆土がほとんど同一で土層観察でやっと切り合い関係を見いだした。そのため個々の遺構の切り合い関係にあっても個別の壁を確認できていない。平面形は SX 群全体を掘り上げ、土層観察、床面の段差から個別の SX を特定した。

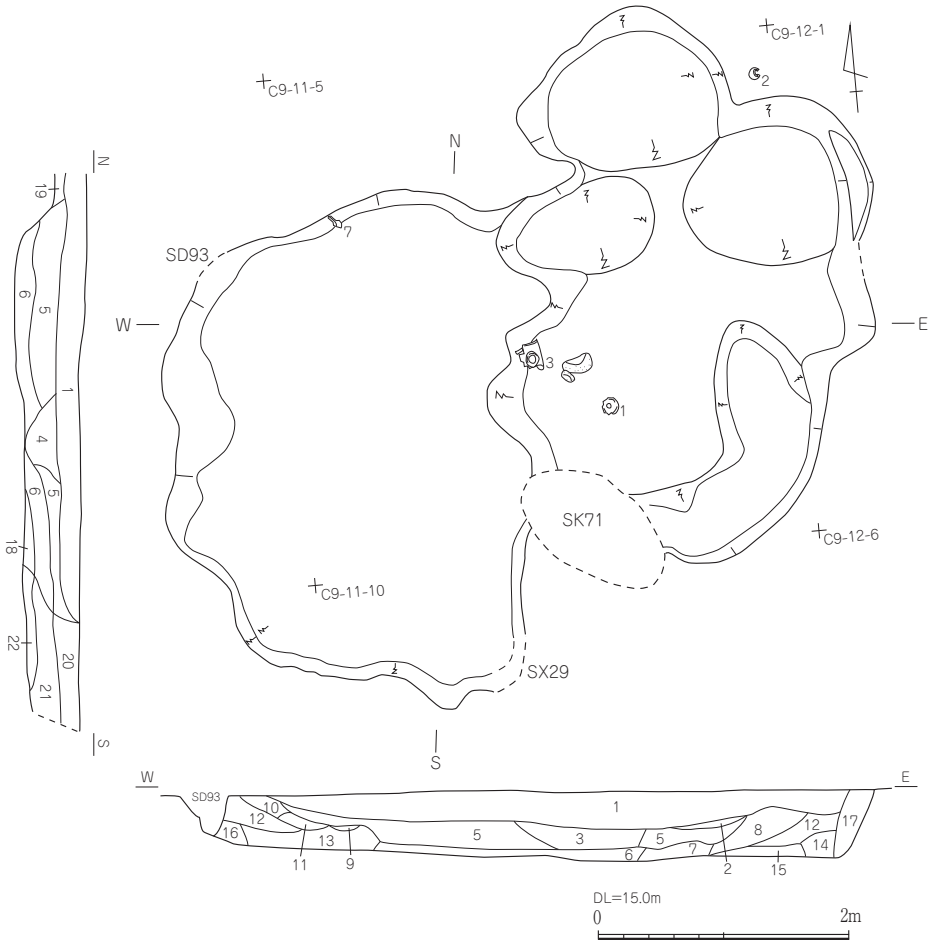
SX22 は SX 群の中のやや南寄りに位置し、北側の SX23 と南側の SX29 に挟まれる。平面形は不整形で、東側部と西側部では違っており、本来は２つの遺構の可能性が極めて高い。床面の形状も違っており、西側部は平坦で、東側は極めて不整形で幾つかの落ち込みが認められる。西側部の規模は長軸約 4m、短軸約 2.5m で深さ約 0.45m を測る。壁はなだらかに立ち上がる。東側部は長楕円の不整形である。長軸約 4.5m、短軸 2.5m から 2.7m で深さは約 0.5m で西側部より若干深い。また壁際には不整形の落ち込みが４ケ所程認められる。覆土は西側、東側共に上層は暗褐色土 (１層) が覆っている。下層は西側部が黒褐色土 (３層) で黄色土ブロックが混じる。東側は暗褐色土主体である。

出土遺物は遺構が広い為に混入品と考えられる土器が何点か認められる。№１の須恵器碗は東側部のやや南寄り平坦部で床面からやや浮いた状態で出土している。№２は東側部北で出土した須恵器瑞で床面から出土している。№３は西側部と東側部の境で出土した須恵器横瓶である。他に中世土器坏２点が出土している。混入品か中世の遺構が重複してあった可能性があるものの検出できていない。

所属時期は出土遺物に時期差があり明確にはし得ないが、古墳時代末から古代の可能性がある。

出土遺物 (図 6-17 №１～８)

№1は須恵器碗である。高台が付く。口径14.7cm、器高5.4cm、高台径7.9cmである。体部は外傾気味に開く。高台は「ハ」字状にやや開く。底部内面は凹む。整形は外面にロクロ目を残し、回転ナデである。胎土は小白色礫を少量含み、色調は灰白色を呈する。古代か。２は須恵器瑞か小壺である。体部は丸味を持つもののややひしゃげたような器形である。口縁部は欠損する。胴部は張り、上部に浅い沈線が１条巡る。胴部は1/3程が欠損している。瑞だとするとちょうど孔部分が欠損している可能性が強い。口縁部分は僅かに残るのみで僅かに外傾し、上方まで伸び、頸となるかは不明である。底部は僅かに尖り気味の丸底である。胎土には白色鉱物粒を多量に含む。色調は灰色を呈する。外面には自然釉がかかる。また口縁部内面にも僅かにかかる。古墳時代後期のものか。３は須恵器横瓶である。口縁部と肩部が残存する。口径11.8cmを測る。口縁部は短く端部が僅かに外反する。肩部は横長で丸味を持つ。口縁部はナデ、肩部はタタキ、内面は当て具痕が残る。胎土は白色鉱物粒を多量に含む。色調は灰色を呈する。古墳時代後期のものか。４は須恵器長頸壺の肩部



土層説明

1　暗褐色土
2　暗褐色土　黄色小ブロック含む
3　暗褐色土
4　黒褐色土
5　黒褐色土　黄色ブロック多量混入
6　黒褐色土
7　暗褐色土
8　暗褐色土　黄色小ブロック多量含む
9　黄褐色土　黄色ローム主体
10　暗褐色土
11　黒褐色土
12　暗褐色土
13　黒褐色土
14　黒褐色土
15　黒褐色土
16　褐色土
17　褐色土
18　褐色土　黄色小ブロック多量含む
19　褐色土　黄色ブロック多量含む
20　暗褐色土
21　暗褐色土
22　黄褐色粘質土　黄色ローム主体

図6-15　SX22遺構図

破片である。肩部で屈曲する。胴部下半はすぼまる。胎土は白色鉱物粒を少量含む。色調は灰白色を呈する。

５、６は中世土器坏で混入品である。共に口縁部が欠損し、体部は大きく開く。底部に孔が開く。底径は 4.5cm、4.8cmである。切り離しは回転糸切りである。整形は内面に強いロクロ目を残す。外面は回転ナデである。地鎮の鎮物に利用されたものか。時期は 15 世紀代と考えられる。

７は土師器高坏の脚部である。中実で裾部は僅かに開く。

８は鉄製小刀である。残存長 18.5cm、幅 1.5cm、厚さ 0.2cm、重さ 18g を量る。柄部分は残存長３cmである。柄部分の断面は長方形である。刃部との境には段を有する。刃部は段々幅広になり、再び鋒に向かってすぼまっていく。背部は平坦で刃部は尖る。

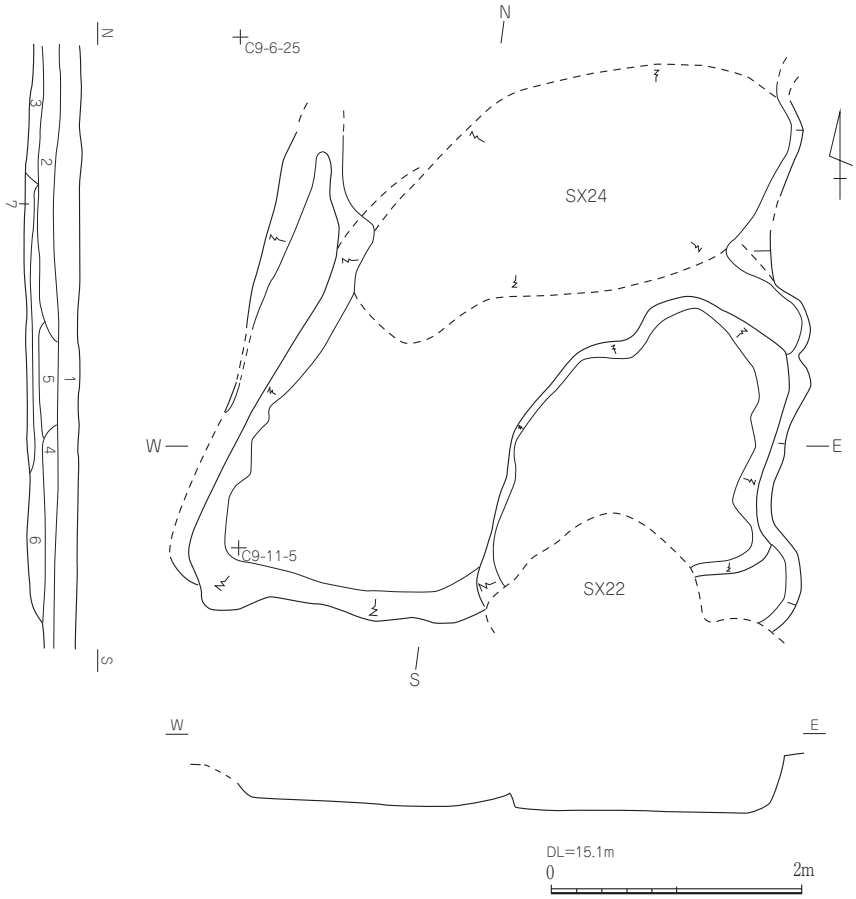
SX23(図 6-16、17)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-25 他　**切り合い関係**；SX22・24 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-31° -E

規模；4.54 × (2.62)m ×深さ 0.38m　**覆土**；褐色土

出土遺物；須恵器坏蓋 (№.1 混入品？)、土師器皿 (№.2)、羽釜 (№.3)



土層説明
1　暗褐色土
2　黒褐色土　SX24 覆土
3　暗褐色土　SX24 覆土
4　褐色土　黄色ブロック多量含む
5　褐色土
6　黒褐色土
7　黄褐色土

図 6-16　SX23 遺構図

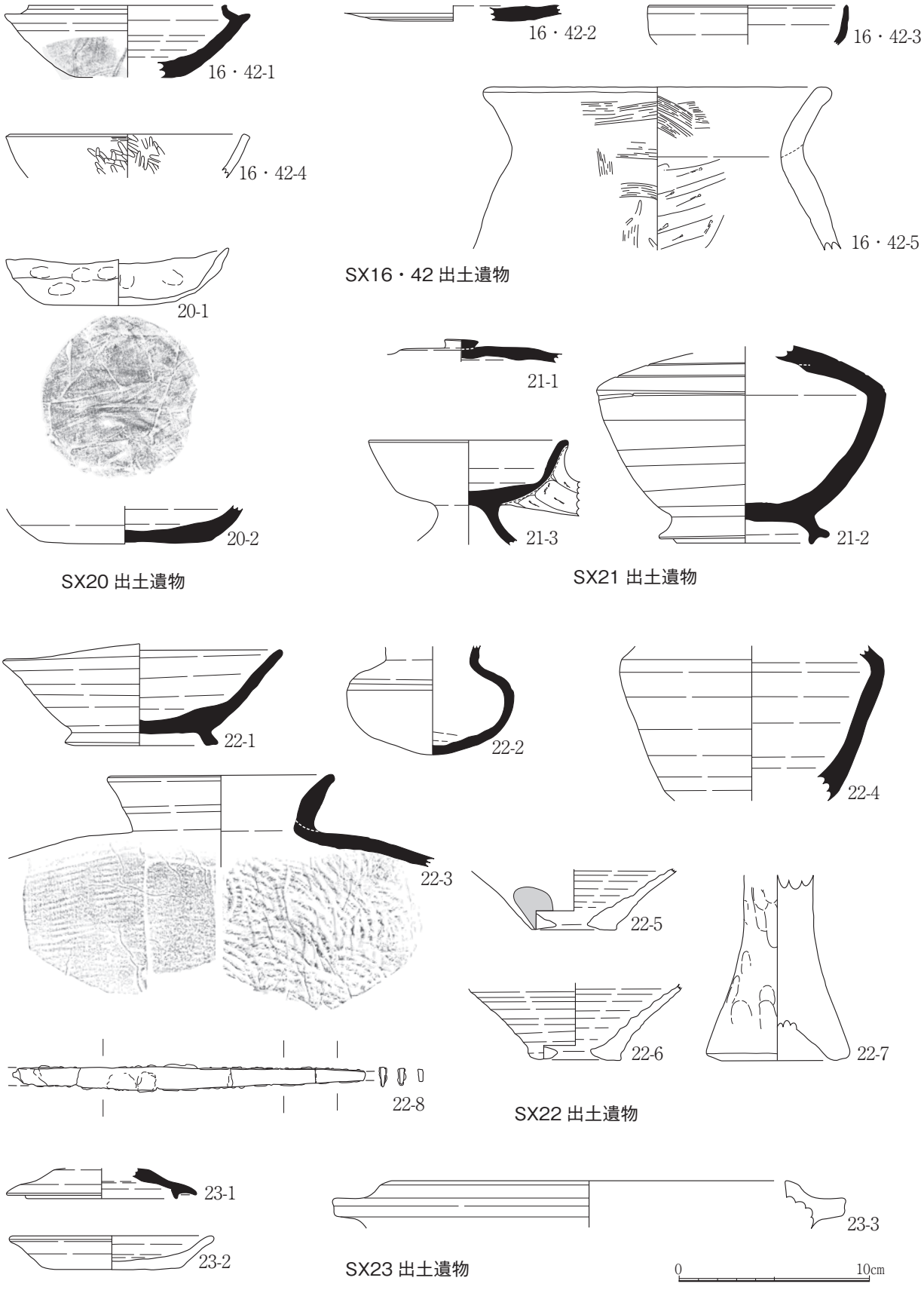


図 6-17　SX16・42・20 ～ 23 出土遺物実測図

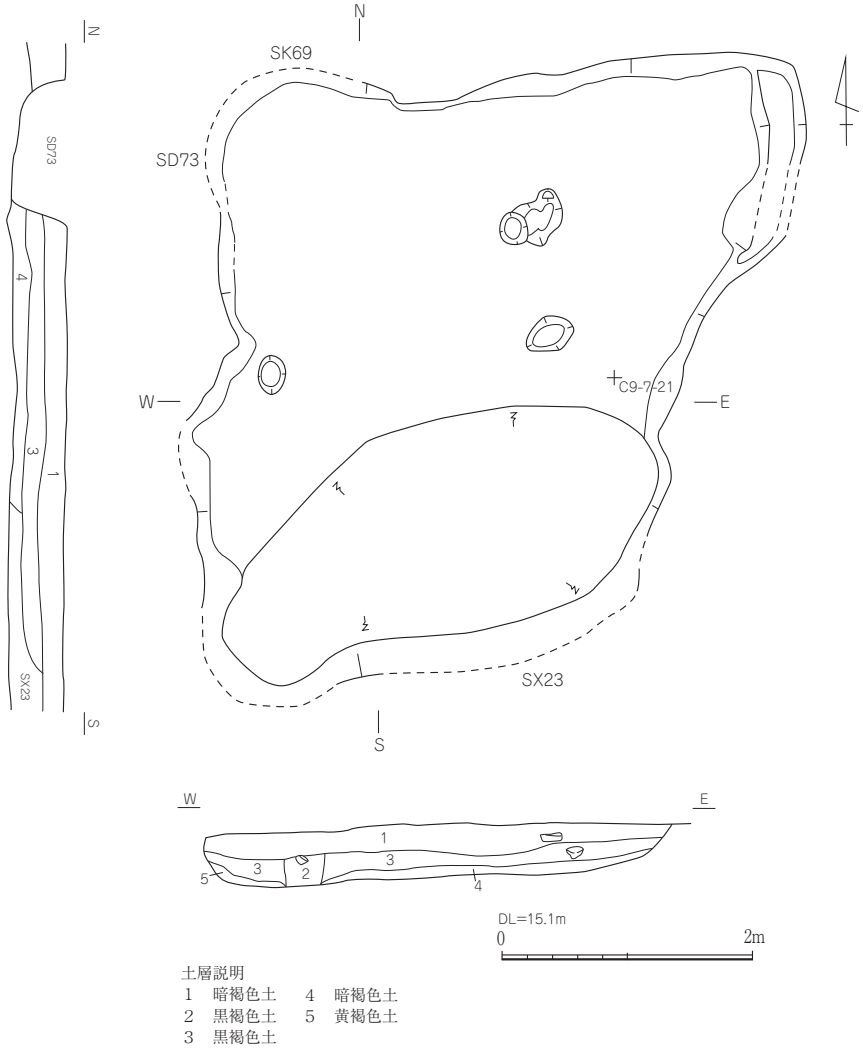


図 6-18　SX24 遺構図

SX24(図 6-18、19)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-20 他　**切り合い関係**；SX23・25 を切る、SD73 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-12° -E

規　模；(4.51) × 3.82m × 深さ 0.37m　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；須恵器碗 (№1、2)、須恵器長頸壺 ?(№3、4)、須恵器壺？ (№5)、土師器甕 (№6)、土師器甑把手 (№7)

SX25(図 6-19、20)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-15 他　**切り合い関係**；SK69 を切る、SX21・24・26 ～ 28 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-90°

規模；(4.86) × (3.72)m ×深さ 0.27m　**覆土**；黒褐色土、暗褐色土

出土遺物；須恵器坏 (№1 ～ 4)、須恵器壺 ?(№5)、須恵器甕 ?(№6)

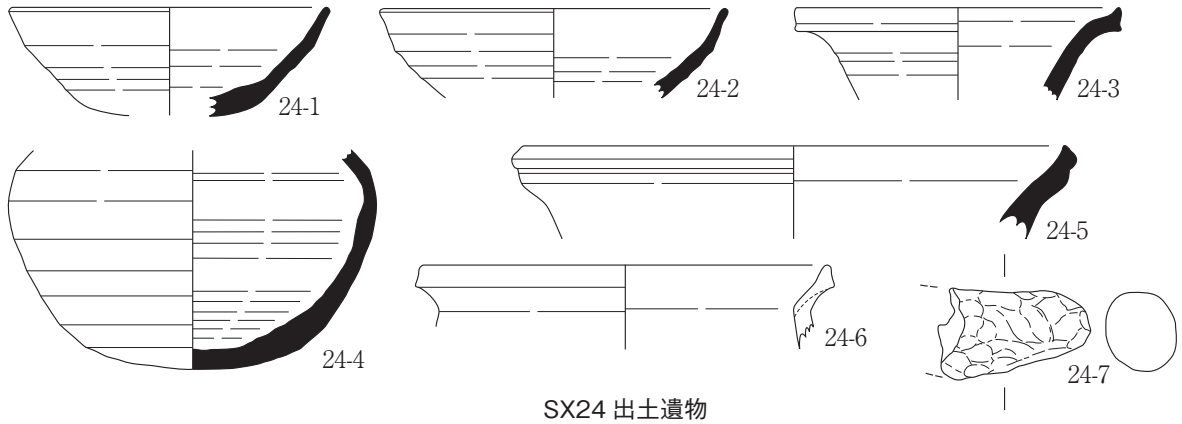
SX26(図 6-19)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-15 他　**切り合い関係**；SX21・25・27 に切られる

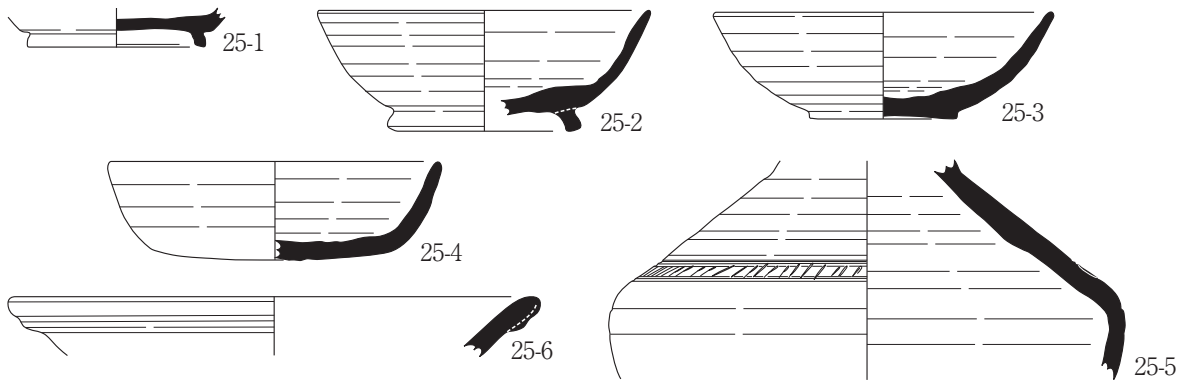
時期；弥生時代末　**形状**；円形　**主軸方向**；－

規模；5.88 × (4.40)m ×深さ 0.24m　**覆土**；暗褐色土

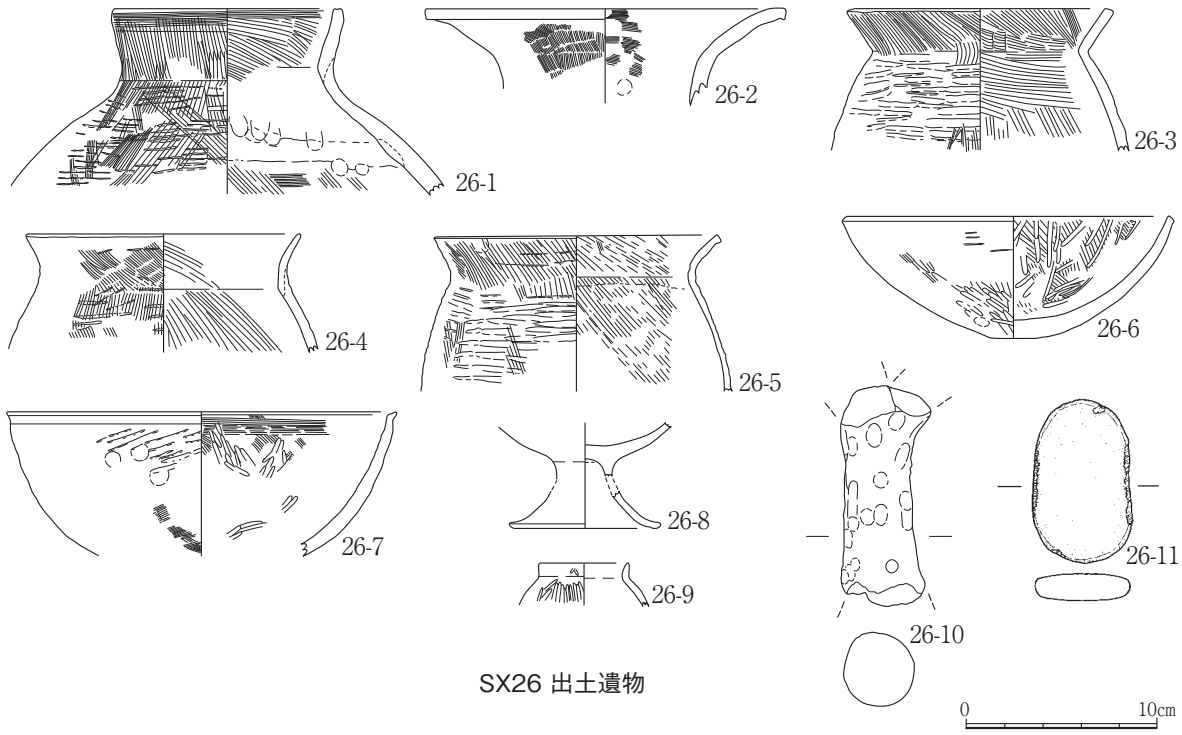
出土遺物；弥生土器壺 (№1、2)、弥生土器甕 (№3 ～ 5)、弥生土器鉢 (№6、7)、弥生土器高坏 (№8)、小壺 (№9)、支脚 (№10)、砂岩製叩石 (№11)



SX24 出土遺物

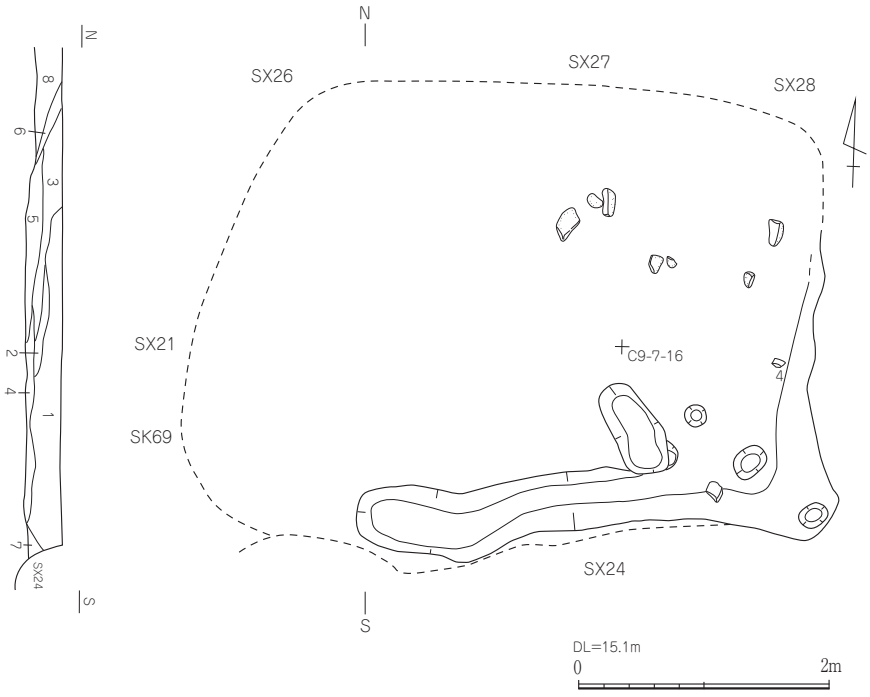


SX25 出土遺物



SX26 出土遺物

図 6-19　SX24 ～ 26 出土遺物実測図



土層説明
1　黒褐色土
2　暗褐色土　黄褐色土混入
3　黒褐色土　須恵器含む
4　暗褐色土　黄褐色土、土器混入
5　暗褐色土
6　暗褐色土　黄褐色土多量混入
7　黄褐色土　暗褐色土混入
8　暗褐色土

図 6-20　SX25 遺構図

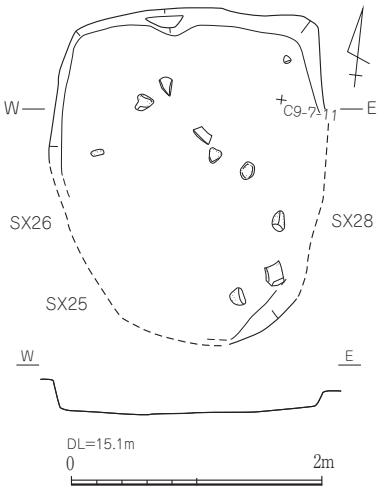


図 6-21　SX27 遺構図

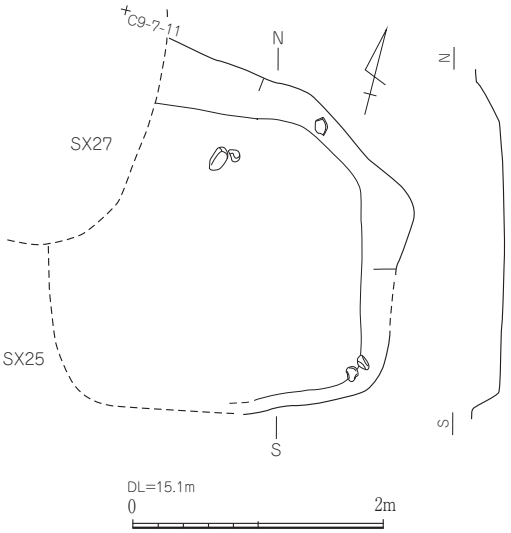


図 6-22　SX28 遺構図

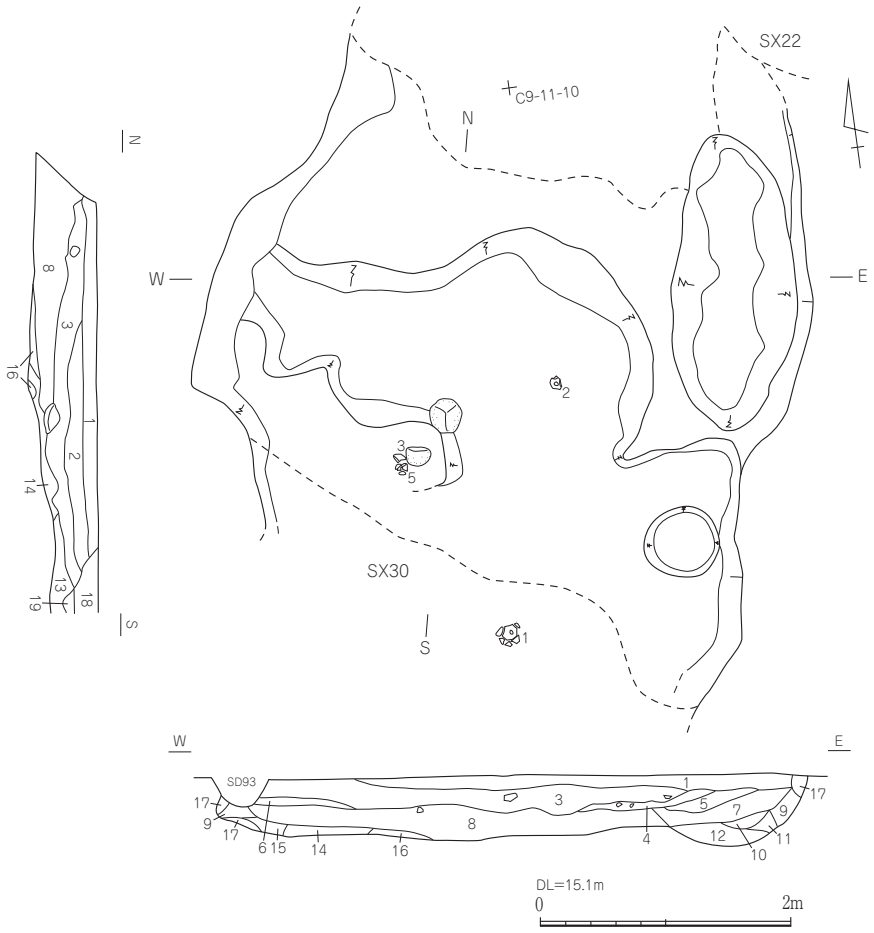
SX27(図 6-21)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-15 他　**切り合い関係**；SX25・26・28 を切る

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-4° -W

規模；2.65 × 2.14m ×深さ 0.28m　**覆土**；暗褐色土

出土遺物；須恵器坏



土層説明

1　黒褐色土　黒褐色・粒状褐色ブロック混入
2　暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
3　黒褐色土　粒状褐色・黒褐色ブロック混入
4　黒褐色土　粒状褐色ブロック混入
5　黒褐色土　粒状褐色・黒褐色ブロック混入
6　暗褐色土　褐色・黒褐色・粒状黄褐色ブロック混入
7　暗褐色土　褐色・黒褐色・粒状黄褐色ブロック混入
8　黒褐色土　褐色・黄褐色ブロック混入
9　黒褐色土　褐色ブロック混入
10　黒褐色粘質土
11　暗褐色土
12　黒褐色土　粒状褐色・褐色ブロック混入、炭化物含む
13　暗褐色土
14　暗褐色土　粒状褐色・褐色ブロック混入
15　暗褐色土　粒状褐色ブロック混入
16　黄褐色土
17　黄褐色土
18　黒褐色土　粒状褐色・黒色ブロック混入
19　黒褐色土　粒状褐色・黄褐色・黒色ブロック混入

図 6-23　SX29 遺構図

SX28(図 6-22)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-11　**切り合い関係**；SX25 を切る、SX27 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-11° -W

規模；2.72 × (2.72)m ×深さ 0.24m　**覆土**；暗褐色土

出土遺物；須恵器甕片

SX29(図 6-23、28)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-11-9 他　**切り合い関係**；SX30 を切る、SX22 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-51° -W

規模；4.82 × (3.20)m ×深さ 0.54m　**覆土**；黒褐色土主体

出土遺物；須恵器坏 (№1、2)、須恵器壺 (№3、4)、土師器碗 (№5)

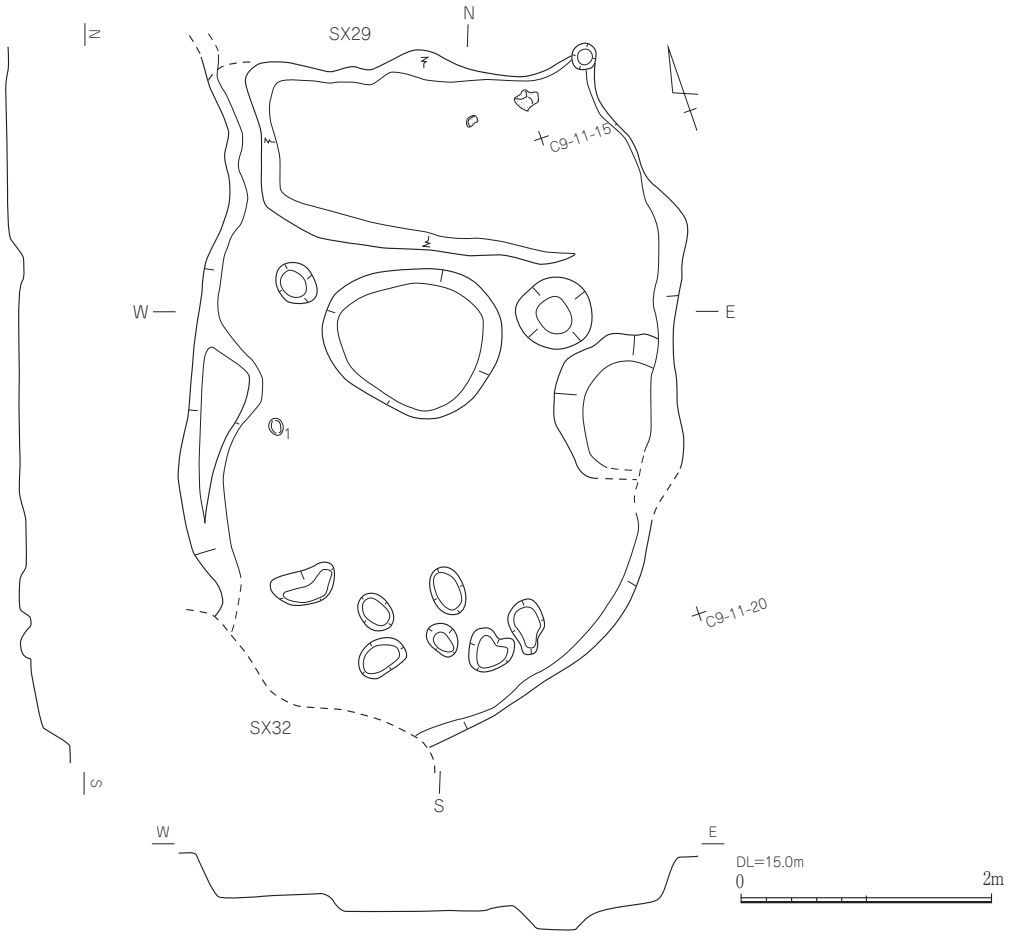


図 6-24　SX30 遺構図

SX30(図 6-24、28)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-11-14 他

切り合い関係；SX29・32、SD81 に切られる

時期；古墳末　**形状**；半月形

主軸方向；N-21° -E

規模；(5.40) × 3.78m ×深さ 0.59m

覆土；暗褐色土主体

出土遺物；須恵器坏蓋 (№1)、須恵器坏 ?(№2)

SX31(図 6-25、28)

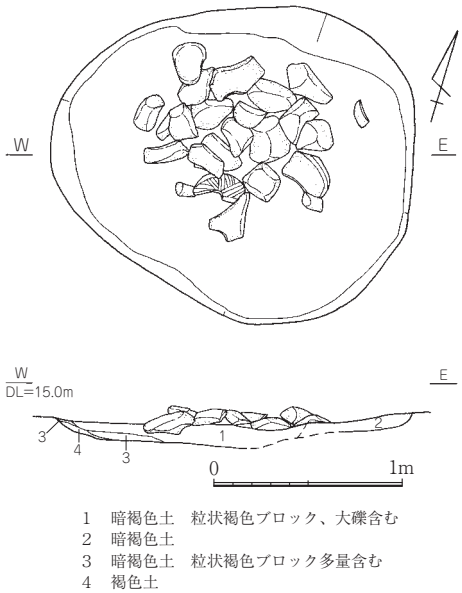
調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-11-13 他

切り合い関係；SX32 を切る

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；N-83° -W

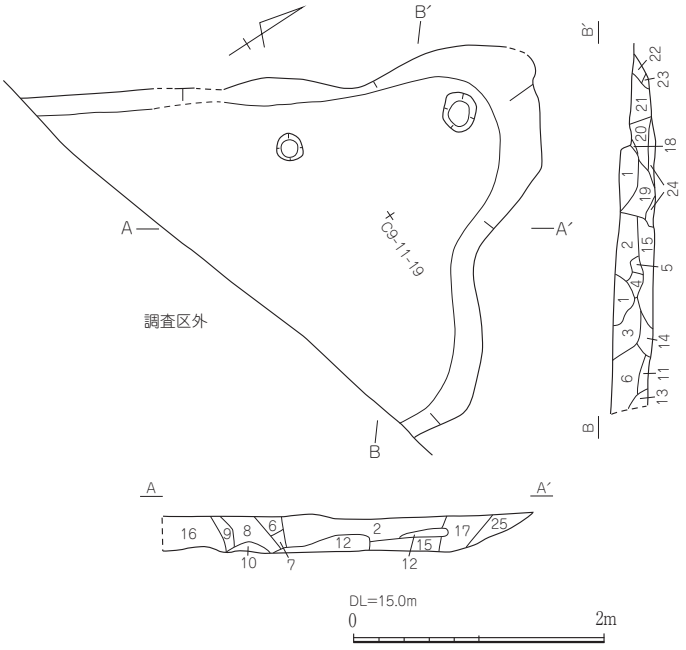
規模；1.92 × 1.65m ×深さ 0.18m　**覆土**；暗褐色土

出土遺物；石臼 (№1)、大礫 23 点



1　暗褐色土　粒状褐色ブロック、大礫含む
2　暗褐色土
3　暗褐色土　粒状褐色ブロック多量含む
4　褐色土

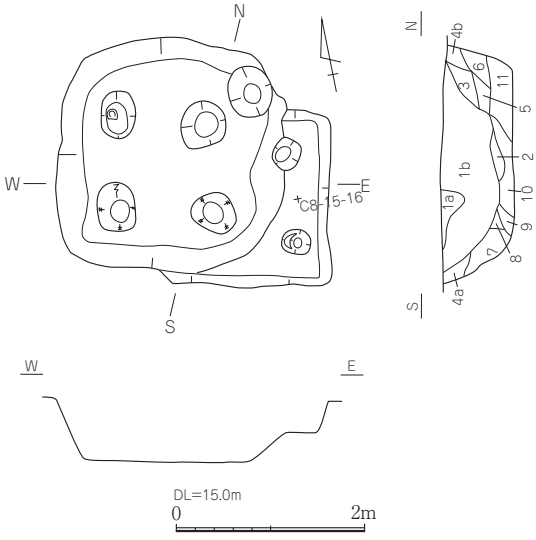
図 6-25　SX31 遺構図



土層説明

1	暗褐色粘質土	14	暗褐色粘質土　褐色土多量混入
2	暗褐色粘質土	15	暗褐色粘質土　褐色ブロック含む
3	暗褐色粘質土　褐色ブロック含む	16	暗褐色粘質土
4	褐色粘質土　粒状黄褐色土混入	17	暗褐色粘質土
5	暗褐色粘質土　粒状褐色土混入	18	暗褐色粘質土　褐灰色土混入
6	暗褐色粘質土	19	暗褐色粘質土　にぶい黄褐色土混入
7	暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む	20	暗褐色粘質土
8	暗褐色粘質土	21	暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
9	暗褐色粘質土	22	暗褐色粘質土　黄褐色ブロック多量混入
10	暗褐色粘質土	23	暗褐色粘質土
11	暗褐色粘質土	24	黄褐色粘質土　暗褐色ブロック混入
12	黄褐色粘質土　暗褐色ブロック多量含む	25	黄褐色粘質土　暗褐色土多量混入
13	暗褐色粘質土		

図 6-26　SX32 遺構図



土層説明

1 a	暗褐色粘質土　粒状褐色ブロック混入
1 b	暗褐色粘質土　粒状褐色ブロック混入
2	暗褐色粘質土　黄褐色・粒状褐色ブロック混入
3	暗褐色粘質土　粒状褐色・黄褐色ブロック、褐色ブロック混入
4 a	暗褐色粘質土　炭化物含む
4 b	暗褐色粘質土　炭化物含む
5	黒褐色粘質土　粒状褐色・黄褐色ブロック、褐色ブロック混入、炭化物含む
6	黒褐色粘質土
7	暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む
8	暗褐色粘質土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む
9	暗褐色粘質土
10	暗褐色粘質土　黄褐色・褐色ブロック混入
11	黒褐色粘質土　黄褐色・褐色ブロック混入

図 6-27　SX33 遺構図

SX32(図 6-26、28)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-11-18 他　**切り合い関係**；SX30 を切る、SX31 に切られる

時期；古墳 (7C 初頭？)　**形状**；半月形　**主軸方向**；N-29° -E

規模；(4.0) × (2.77)m ×深さ 0.30m　**覆土**；暗褐色土

出土遺物；須恵器坏 (№1)

SX33(図 6-27、28)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-14-15 他　**切り合い関係**；SD99・100・104 に切られる

時期；古代 (9 ～ 10C 前半)　**形状**；隅丸方形　**主軸方向**；N-12° -E

規模；2.5 × 2.47m ×深さ 0.80m　**覆土**；暗褐色粘質土

出土遺物;須恵器甕 (№1)、土師器坏蓋 (№2)、土師器坏 (№3 ～ 6)、土師器Ⅲ (№7、8)、土師器甕 (№9、10)

SX34(図 6-29、31)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-22　**切り合い関係**；SK100 を切る、C8-10-22P4 に切られる

時期；弥生後期Ⅵ－ 1 期　**形状**；長方形　**主軸方向**；N-67° -W

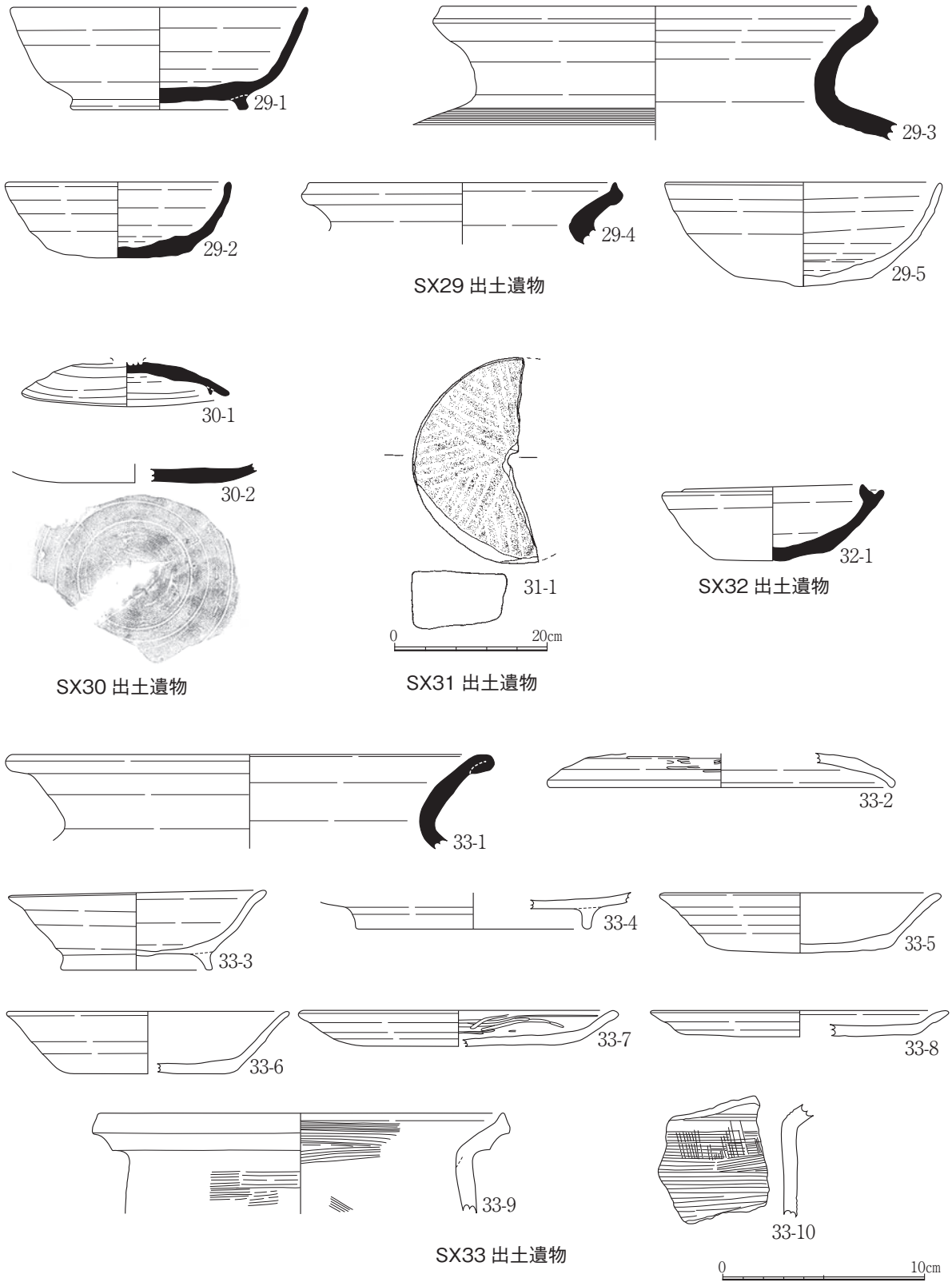


図 6-28　SX29 ～ 33 出土遺物実測図

規模；2.44 × 1.96m ×深さ 0.28m　**覆土**；暗褐色粘質土

出土遺物；弥生土器甕 (№1 ～ 10)、弥生土器鉢 (№11、12)

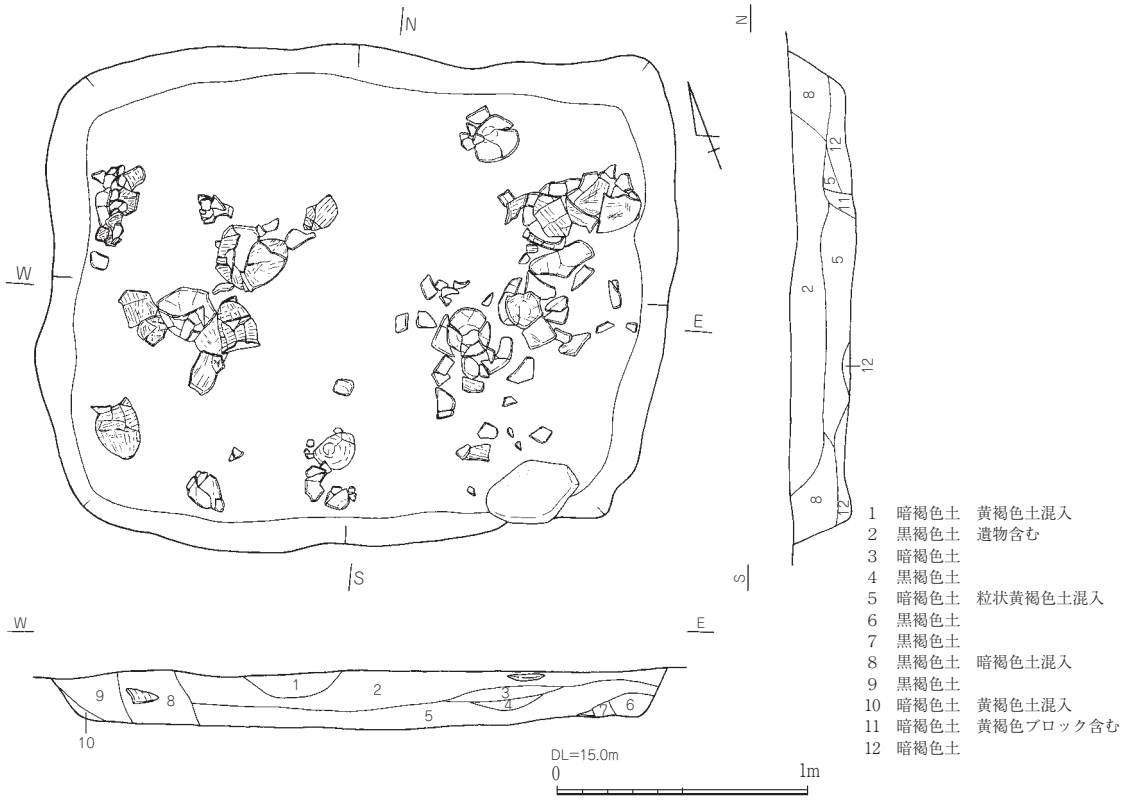


図 6-29　SX34 遺構図

SX35(図 6-30)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-24 他

切り合い関係；SB13、SD99 に切られる

時期；弥生　**形状**；円形

主軸方向；N-0°　**規模**；3.41 × 3.18m × 深さ 0.08m　**覆土**；暗褐色粘質土

出土遺物；弥生土器細片

SX36(図 6-32、34)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-20 他

切り合い関係；ST49、SD99・100 に切られる

時期；弥生後期末　**形状**；長方形

主軸方向；N-75° -W

規模；2.91 × 2.4m ×深さ 0.19m

覆土；暗褐色土

出土遺物；弥生土器甕 (№1)、弥生土器鉢 (№2 ～ 5)、土製支脚 (№6、7)、小型手捏ね土器 (№8)、砂岩製砥石 (№9)

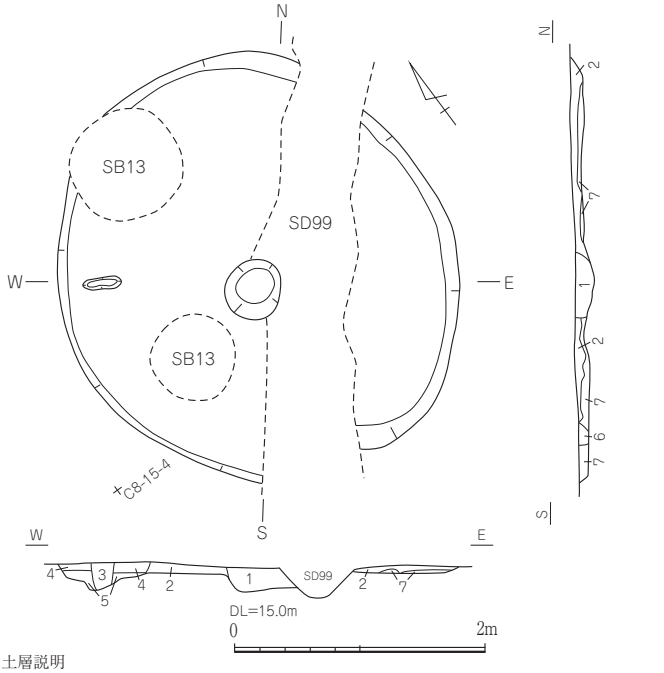


図 6-30　SX35 遺構図

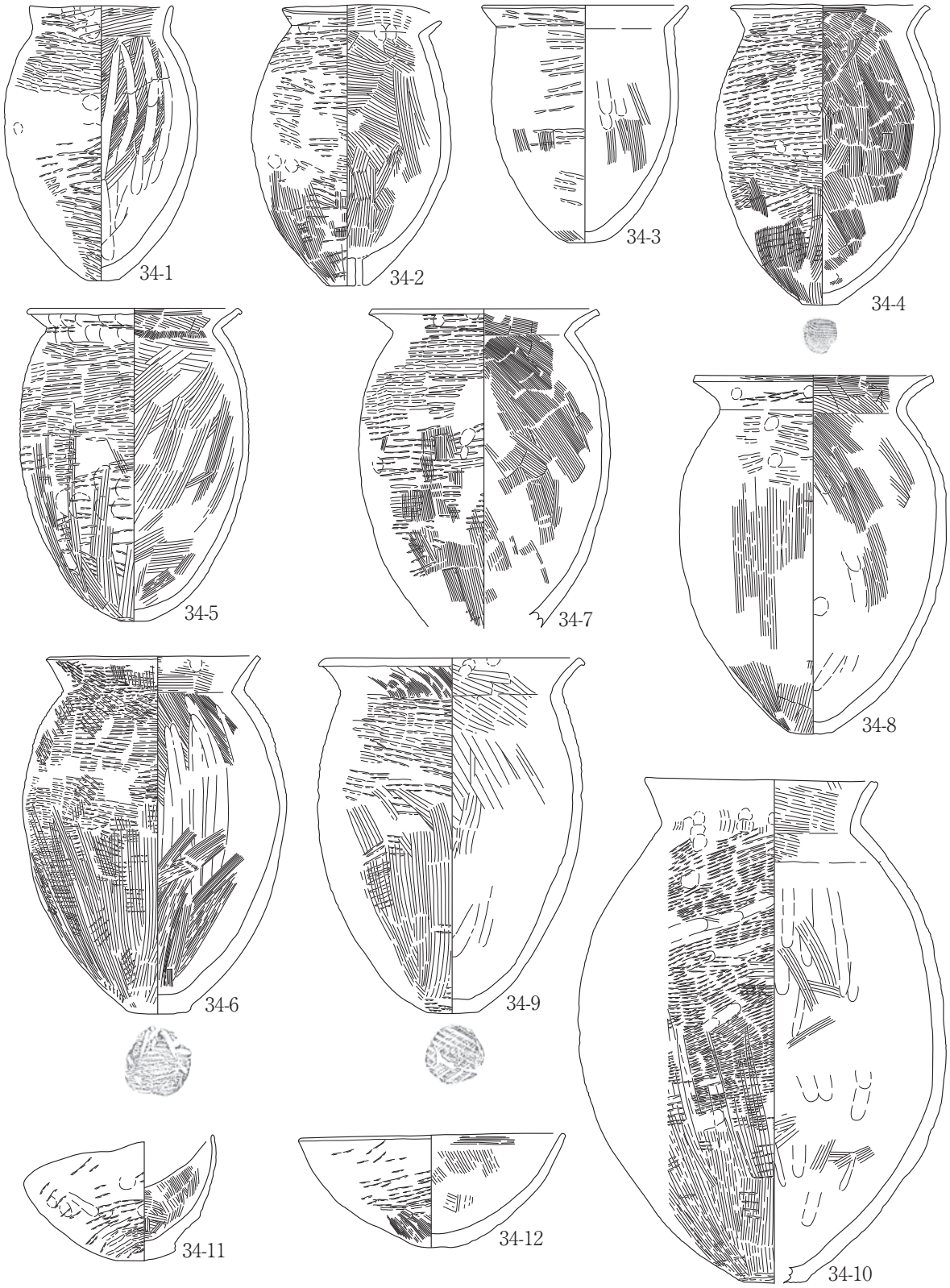


図 6-31　SX34 出土遺物実測図

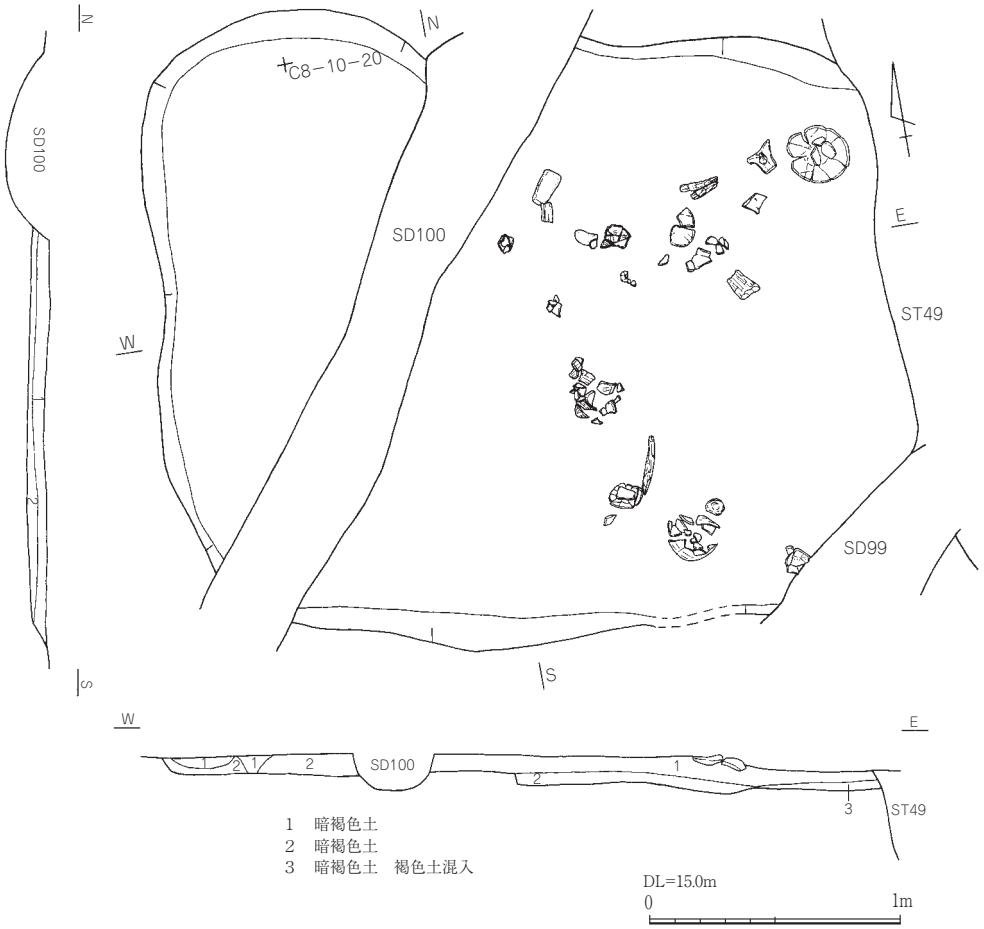


図 6-32 SX36 遺構図

SX37(図 6-33、34)

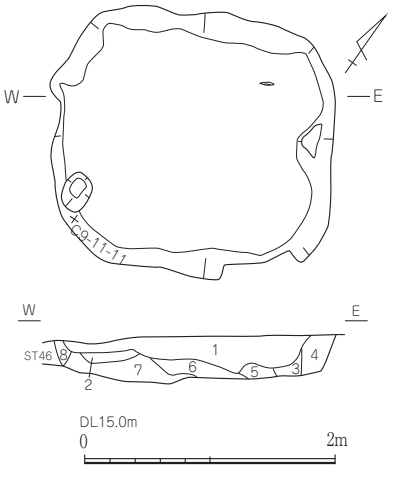
調査区；Ⅷ AW **グリッド**；C9-11-6 他

切り合い関係；ST46 を切る、SD91 に切られる

時期；古代？ **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-63° -E

規模；2.24 × 2.1m ×深さ 0.32m **覆土**；暗褐色粘質土

出土遺物；鉄製刀子 (№1)、弥生細片



土層説明
1 暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土 黄褐色土混入
3 黒褐色粘質土 暗褐色土混入
4 黒褐色粘質土
5 暗褐色粘質土 黄褐色ブロック含む
6 暗褐色粘質土 黄褐色ブロック、焼土・炭化物含む
7 暗褐色粘質土 黄褐色・黒褐色ブロック含む
8 暗褐色粘質土

図 6-33 SX37 遺構図

SX38(図 6-35、38)

調査区；Ⅷ AW **グリッド**；C9-11-17 他

切り合い関係；ST35 を切る

時期；古代 **形状**；方形 **主軸方向**；N-80° -W

規模；1.24 × 1.19m ×深さ 0.63m **覆土**；黒褐色土主体

出土遺物；須恵器耳付壺 (№1)、内黒土器 (№2)、土師器坏 (№3 ～ 5)、土師器皿 (№6)、土師器甕 (№7 ～ 9)、移動式竈 (№10)、土錘 (№11、12)、結晶片岩製板碑状礫 (№13)

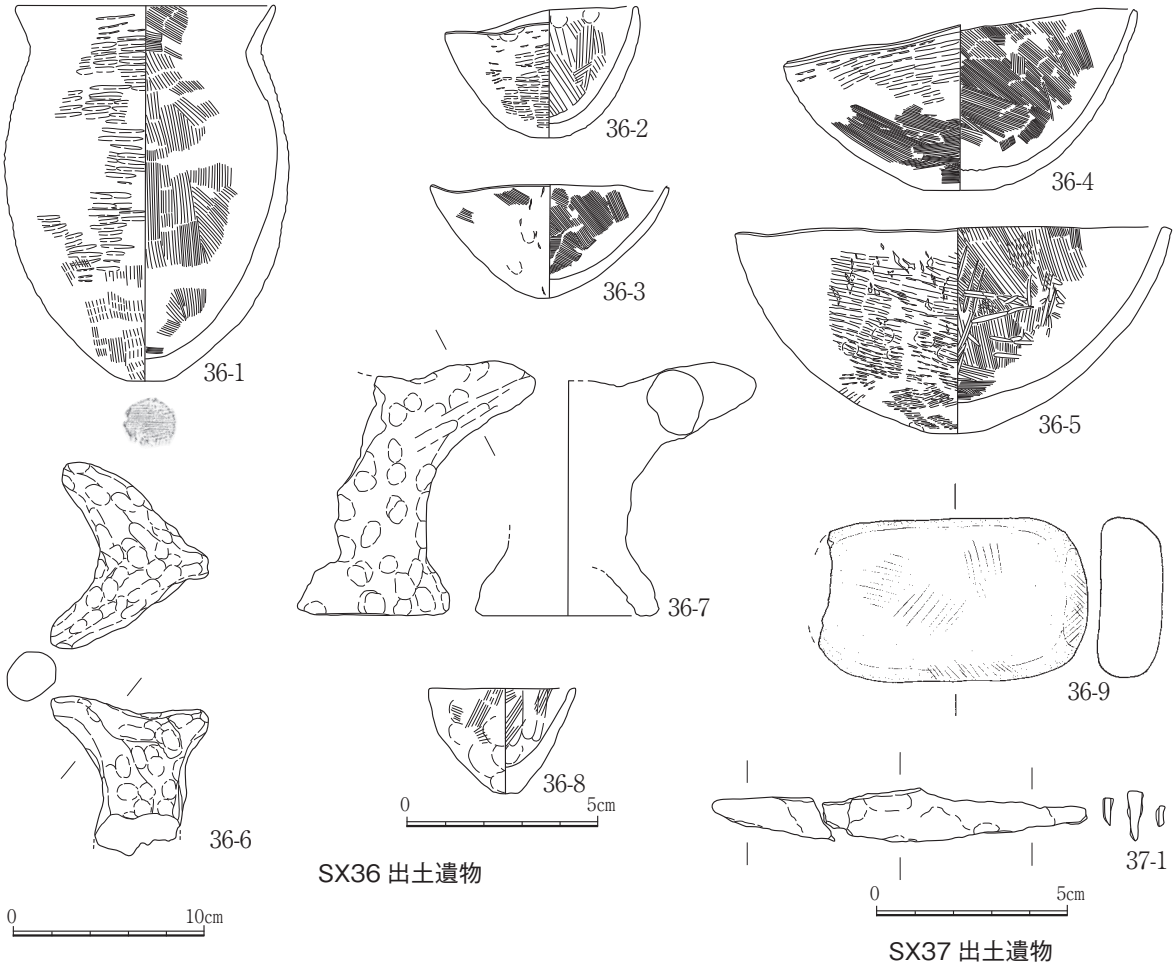


図 6-34　SX36・37 出土遺物実測図

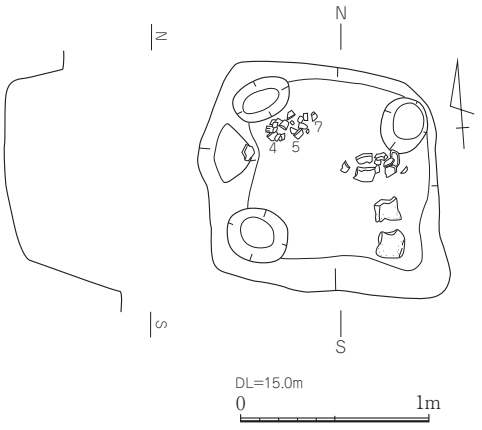


図 6-35　SX38 遺構図

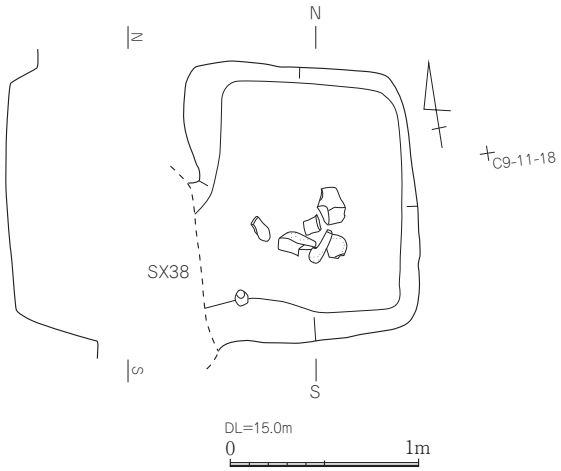


図 6-36　SX39 遺構図

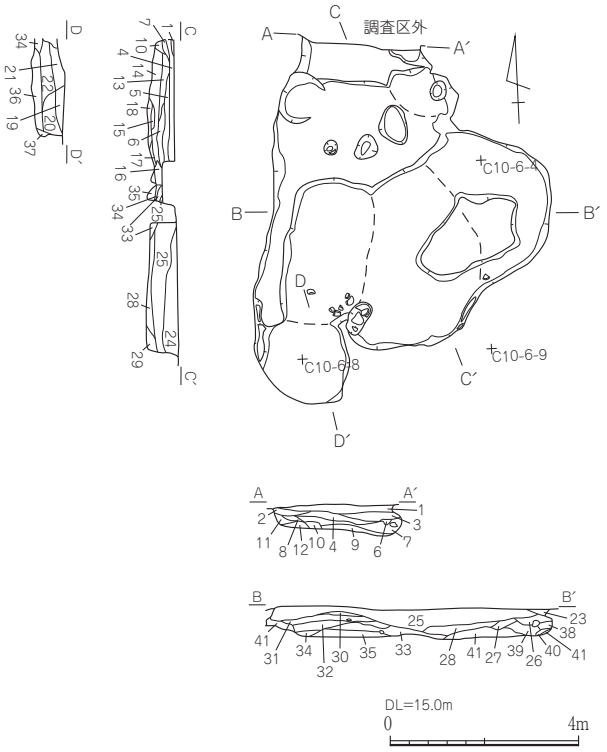
SX39(図 6-36、38)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C9-11-17 他　**切り合い関係**；ST35 を切る

時期；古代　**形状**；方形　**主軸方向**；N-11° -E

規模；1.41 × 1.2m ×深さ 0.48m　**覆土**；－

出土遺物；内黒土器 (№1)、土師器坏 (№2)、土師器甕 (№3)、移動式竈 (№4)



土層説明

1 黒褐色土
2 黒褐色土 粒状黄褐色土・土器・炭化物含む
3 暗褐色土 粒状黄褐色土、炭化物含む
4 暗褐色土 粒状黄褐色土多量、黄褐色ブロック含む
5 黒褐色土
6 暗褐色土 黄褐色ブロック混入
7 黒褐色土 粒状黄褐色土、礫含む
8 暗褐色土 粒状黄褐色土多量含む
9 褐灰色土 粒状黄褐色土多量、黄褐色ブロック含む
10 褐灰色土 炭化物・焼土、粒状褐色土含む
11 黒褐色土
12 暗褐色土 粒状黄褐色土多量、黄褐色ブロック含む
13 暗褐色土 粒状黄褐色土混入
14 暗褐色土 黄褐色ブロック・粒状黒褐色土混入
15 黒褐色土
16 黒褐色土
17 黒褐色土
18 黄褐色粘質土
19 黒褐色土 土器含む
20 暗褐色土 土器・炭化物含む
21 黒褐色土
22 暗褐色土 黄褐色ブロック多量、粒状黄褐色土含む
23 暗褐色土
24 黒褐色土 土器含む
25 黒色粘質土 土器含む
26 黒褐色土 礫含む
27 黒褐色土
28 黒褐色土
29 黒褐色土
30 暗褐色土
31 暗褐色土 粒状黄褐色土多量、黄褐色ブロック含む
32 黒褐色土 粒状黄褐色土含む
33 暗褐色土 粒状黄褐色・黄褐色ブロック多量含む
34 黒褐色土
35 暗褐色土 粒状黄褐色・黄褐色ブロック多量、炭化物含む
36 暗褐色土 粒状黄褐色土含む
37 暗褐色土 粒状黄褐色・黄褐色ブロック含む
38 黒褐色土
39 暗褐色土 黒褐色土混入
40 にぶい黄褐色土
41 黄褐色粘質土

図 6-37　SX40 遺構図

SX40(図 6-37、38)

旧遺構名；ST4

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-6-3 他　**切り合い関係**；ST50 を切る、SX3、SD1・3 に切られる

時期；古代　**形状**；不整形　**主軸方向**；N-10° -E

規模；(6.98) × (5.88)m ×深さ 0.65m　**覆土**；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏 (№1 混入？)、土師器皿 (№2)、鉄製刀子 (№3)

SX41(図 6-39・43)

旧遺構名；ST15　**調査区**；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-8 他　**切り合い関係**；ST14 を切る、SX10・16・19・42、SD8・9・11・12 に切られる

時期；古代？　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-11° -W

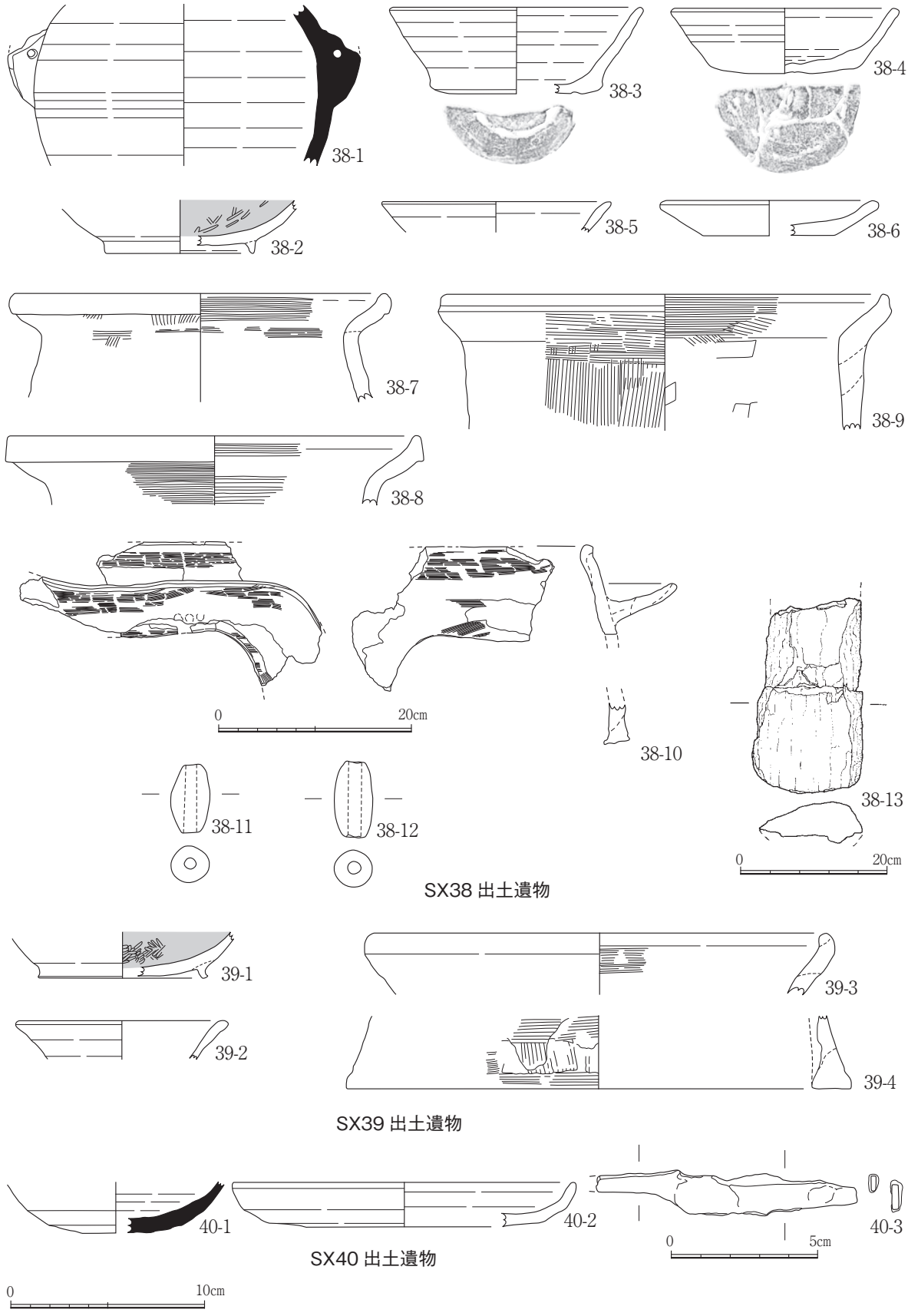


図 6-38　SX38 ～ 40 出土遺物実測図

規模；(3.96) × (3.82)m ×深さ 0.26m　**覆土**；黒褐色粘質土、暗褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏蓋 (№1)、須恵器坏 (№2、3)、須恵器鉢 (№4)、須恵器壺 (№5)、土師器甕 (№6)

SX43・44(図 6-40、43)

旧遺構名；ST21・22

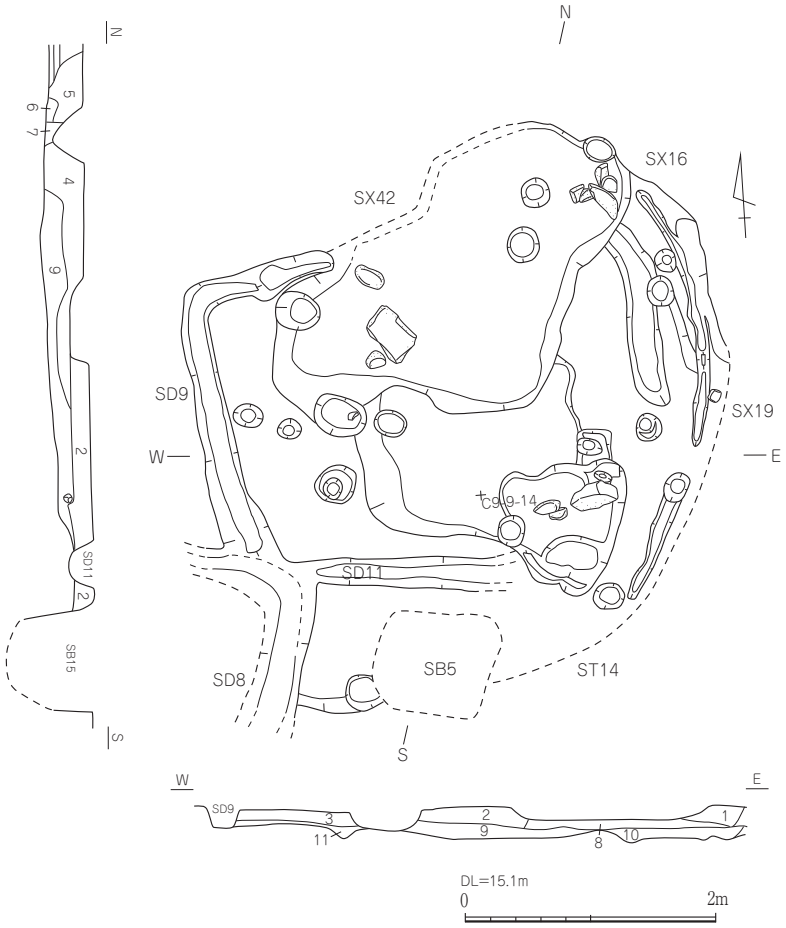
調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-23 他　**切り合い関係**；SK45、SD27 に切られる

時期；古代？　**形状**；半月形

主軸方向；N-13° -E

規模；(6.92) × 4.40m ×深さ 0.41m　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；須恵器坏蓋 (№1、2)、須恵器坏 (№3、4)、須恵器高台付坏 (№5)、土師器坏 (№6)、土師器皿 (№7、8)、須恵器坏 (№9 混入品)、須恵器横瓶 (№10 混入品)、粘板岩製石包丁 (№11 混入品)



土層説明

1　黒褐色粘質土
2　黒褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　黒褐色粘質土
5　黒褐色粘質土　粒状黄褐色小ブロック含む
6　暗褐色粘質土
7　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
8　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック多量混入
9　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック混入
10　黒褐色粘質土　黄褐色土多量混入
11　褐色粘質土　黄褐色土混入

図 6-39　SX41 遺構図

SX45(図 6-41、43)

旧遺構名；ST27

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-5 他　**切り合い関係**；SX46 に切られる

時期；古代？　**形状**；円形？　**主軸方向**；N-15° -E

規模；4.50 × (3.21)m ×深さ 0.47m　**覆土**；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏 (№1)、須恵器甕？ (№2、3)、須恵器壺 (№4、5)

SX46(図 6-42、43)

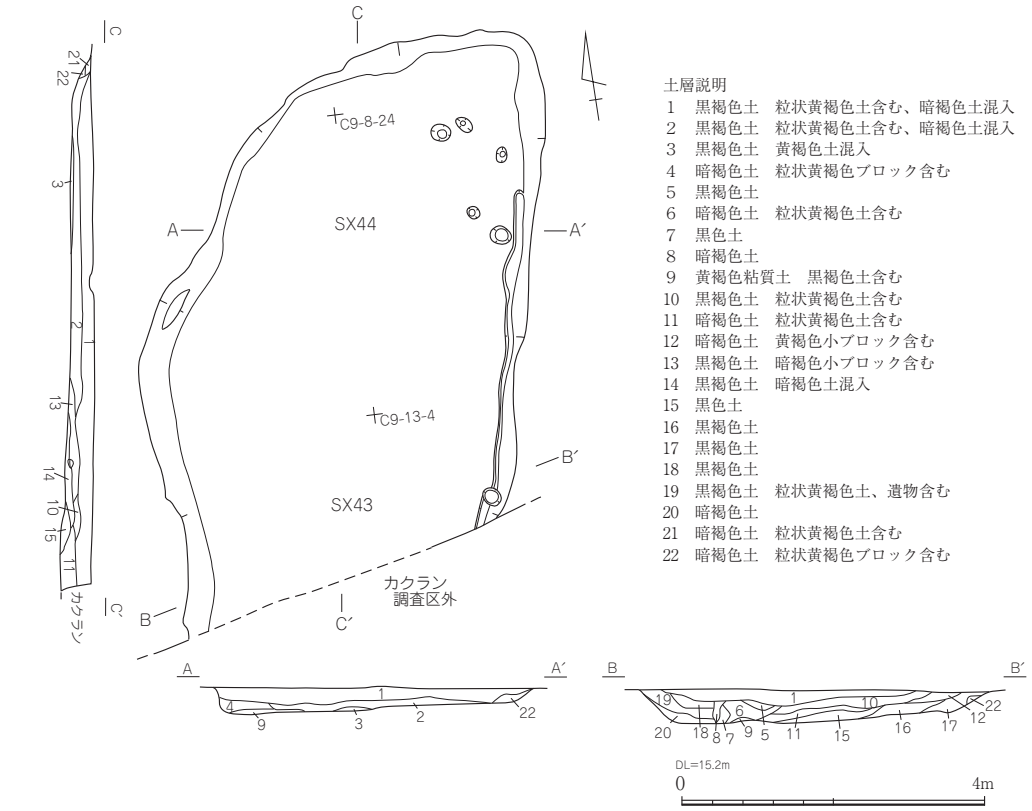
旧遺構名；ST28

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-4 他　**切り合い関係**；SX45 を切る、SX47 に切られる

時期；古代？　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-4° -E

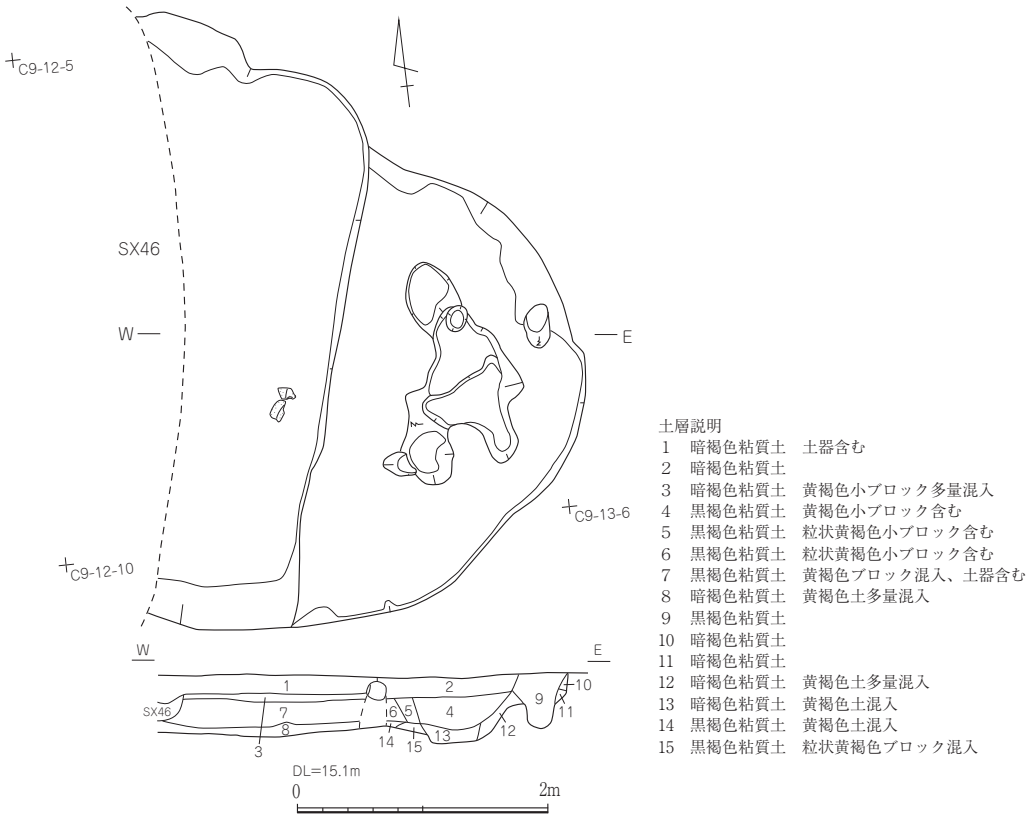
規模；5.70 × (2.66)m ×深さ 0.47m　**覆土**；黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器蓋 (№1 ～ 4)、須恵器高台付坏？(№5)、SX45- №3 須恵器と接合



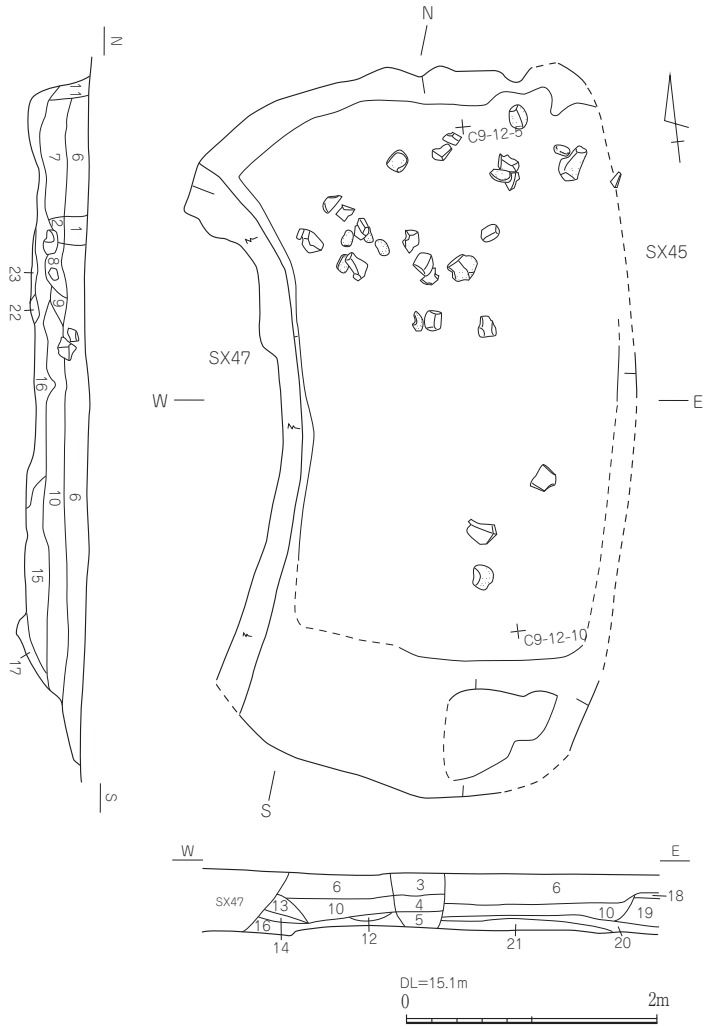
土層説明
1　黒褐色土　粒状黄褐色土含む、暗褐色土混入
2　黒褐色土　粒状黄褐色土含む、暗褐色土混入
3　黒褐色土　黄褐色土混入
4　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む
5　黒褐色土
6　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
7　黒色土
8　暗褐色土
9　黄褐色粘質土　黒褐色土含む
10　黒褐色土　粒状黄褐色土含む
11　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
12　暗褐色土　黄褐色小ブロック含む
13　黒褐色土　暗褐色小ブロック含む
14　黒褐色土　暗褐色土混入
15　黒色土
16　黒褐色土
17　黒褐色土
18　黒褐色土
19　黒褐色土　粒状黄褐色土、遺物含む
20　暗褐色土
21　暗褐色土　粒状黄褐色土含む
22　暗褐色土　粒状黄褐色ブロック含む

図 6-40　SX43・44 遺構図



土層説明
1　暗褐色粘質土　土器含む
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック多量混入
4　黒褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
5　黒褐色粘質土　粒状黄褐色小ブロック含む
6　黒褐色粘質土　粒状黄褐色小ブロック含む
7　黒褐色粘質土　黄褐色ブロック混入、土器含む
8　暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
9　黒褐色粘質土
10　暗褐色粘質土
11　暗褐色粘質土
12　暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
13　暗褐色粘質土　黄褐色土混入
14　黒褐色粘質土　黄褐色土混入
15　黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入

図 6-41　SX45 遺構図



土層説明

1	黒褐色粘質土	12	暗褐色粘質土
2	黒褐色粘質土	13	暗褐色粘質土　黄褐色土混入
3	暗褐色粘質土　土器含む	14	暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
4	黒褐色粘質土　土器含む	15	黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
5	黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む	16	黒褐色粘質土　黄褐色土混入
6	暗褐色粘質土　粒状褐色・黄褐色ブロック、土器含む	17	黒褐色粘質土　黄褐色土多量混入
7	黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む	18	暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック多量混入
8	黒褐色粘質土	19	黒褐色粘質土　黄褐色ブロック混入、土器含む
9	黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入	20	暗褐色粘質土　黄褐色土多量混入
10	暗褐色粘質土　土器含む	21	暗褐色粘質土
11	暗褐色粘質土　粒状褐色・黄褐色ブロック混入	22	暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
		23	にぶい褐色土

図 6-42　SX46 遺構図

SX47(図 6-43、44)

旧遺構名；ST29

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-3 他　**切り合い関係**；ST30、SX46 を切る、SK50 に切られる

時期；古代？　**形状**；方形？　**主軸方向**；N-13° -E

規模；4.34 × 2.82m ×深さ 0.44m　**覆土**；黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏 (№1)

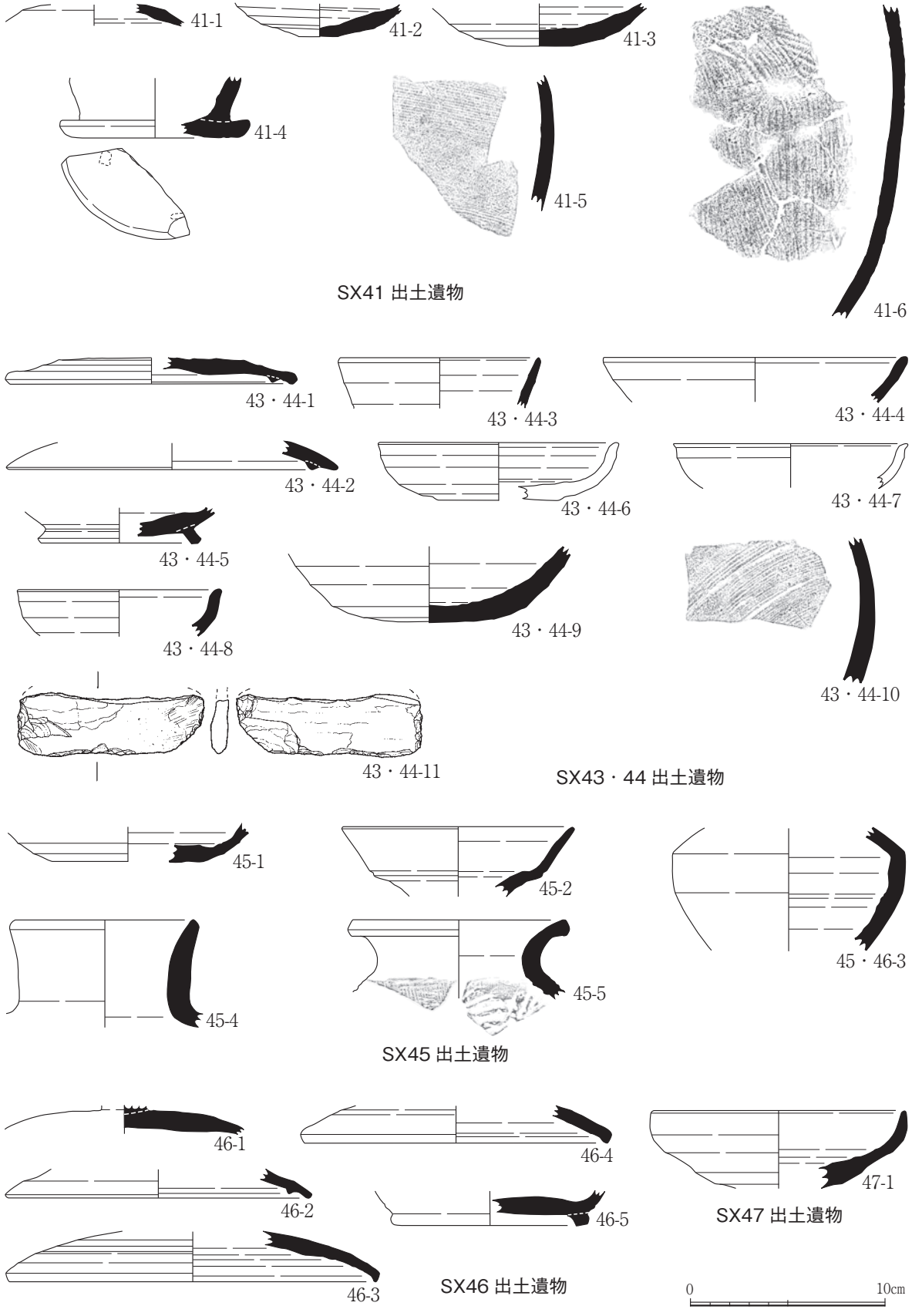


図 6-43　SX41・43 ～ 47 出土遺物実測図

SX48(図 6-45、49)

旧遺構名；ST31A

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-7 他　**切り合い関係**；ST30 を切る、SX49 に切られる

時期；古代？　**形状**；方形？

主軸方向；N-90°

規模；(4.14) × 3.42m ×深さ 0.56m

覆土；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏蓋 (№1)、須恵器坏 (№2)、須恵器高台付坏 (№3)、須恵器長頸壺 (№4、5)、須恵器大甕 (№6)

SX49(図 6-46、49)

旧遺構名；ST31B

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-8 他　**切り合い関係**；SX48 を切る

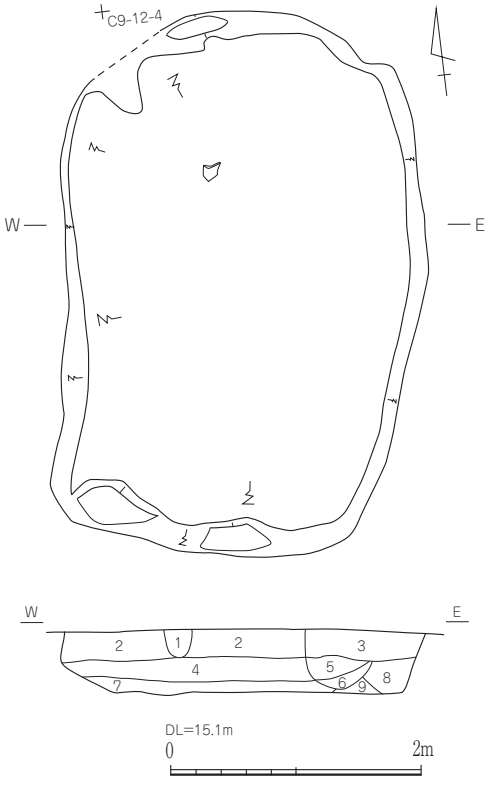
時期；古代？　**形状**；方形？

主軸方向；N-2° -E

規模；(2.73) × (2.64)m ×深さ 0.55m

覆土；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

出土遺物；土師器坏蓋 (№1)、土師器坏 (№2)、鉄鏃 (№3)



土層説明
1　黒褐色粘質土　土器含む
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　黒褐色粘質土
5　黒褐色粘質土
6　黒褐色粘質土
7　黒褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
8　黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック含む
9　黒褐色粘質土　黄褐色土混入

図 6-44　SX47 遺構図

SX50(図 6-47)

旧遺構名；SW1

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-7 他　**切り合い関係**；SB5、SD12 を切る

時期；近世　**形状**；円形　**主軸方向**；N-84° -W

規模；1.6 × 1.5m ×深さ 0.23m　**覆土**；－

出土遺物；瓦片、陶器片、中礫多量

SX51(図 6-48、49)

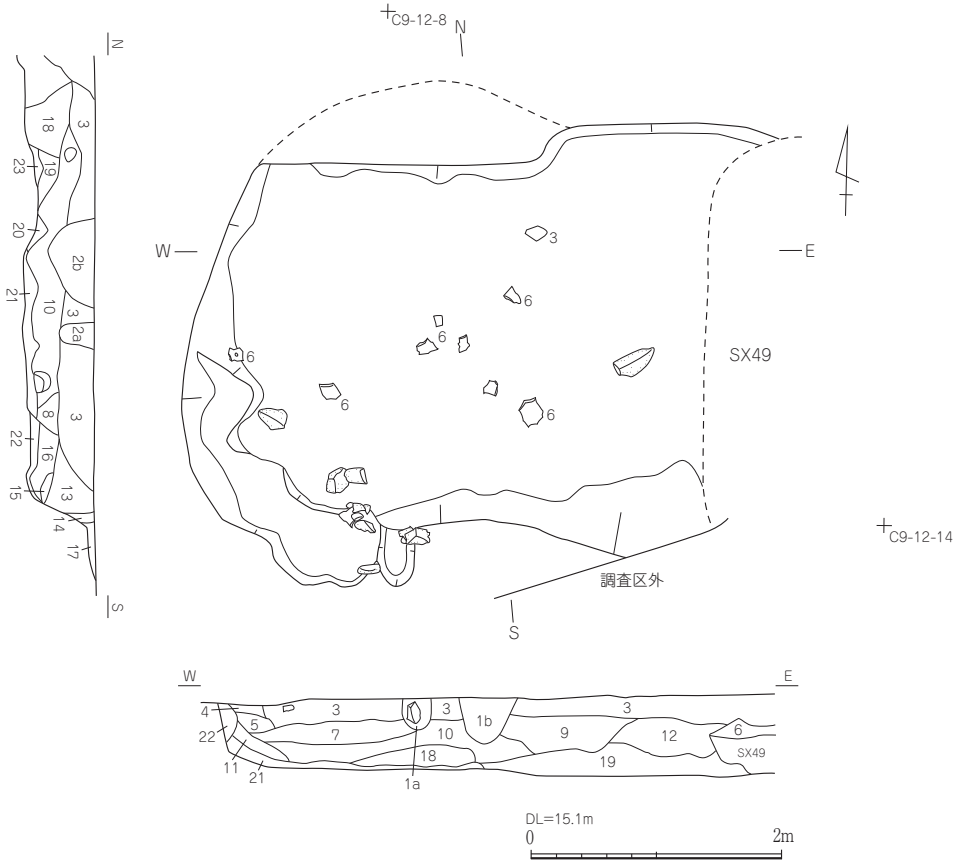
旧遺構名；ST36

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C9-11-16 他　**切り合い関係**；－

時期；古墳末？　**形状**；円形？　**主軸方向**；N-76° -E

規模；(4.84) × (1.8)m ×深さ 0.54m　**覆土**；暗褐色粘質土、黒褐色粘質土

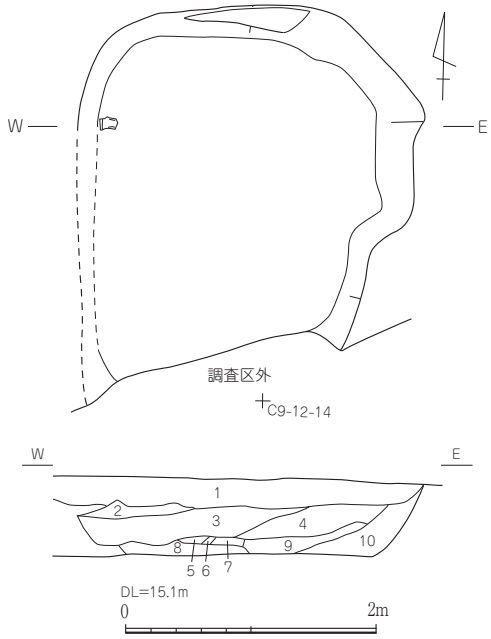
出土遺物；須恵器壺 (№1)、須恵器高坏 (№2、3)、土師器坏 (№4)、土師器碗 ?(№5)、砂岩製砥石 (№6)



土層説明

1 a 黒褐色粘質土　中礫含む、ピット
1 b 黒褐色粘質土　ピット
2 a 暗褐色粘質土　土器含む、ピット
2 b 暗褐色粘質土　ピット
3　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
4　暗褐色粘質土　粒状黄褐色・黄褐色ブロック混入
5　黒褐色粘質土
6　暗褐色粘質土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック混入
7　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
8　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む、にぶい黄褐色土混入
9　黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
10　黒褐色粘質土　礫・土器含む
11　黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
12　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
13　暗褐色粘質土
14　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック、炭化物含む
15　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック含む
16　暗褐色粘質土
17　暗褐色粘質土　黄褐色ブロック、土器含む
18　にぶい黄褐色粘質土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック多量混入
19　にぶい黄褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック多量混入
20　にぶい黄褐色粘質土
21　にぶい黄褐色粘質土　黄色ブロック多量、黒褐色・暗褐色ブロック混入、土器含む
22　褐色土
23　黄色土

図 6-45　SX48 遺構図



土層説明

1　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
2　暗褐色粘質土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック混入
3　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
4　暗褐色粘質土
5　黒褐色粘質土
6　暗褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入
7　黒褐色粘質土
8　暗褐色粘質土
9　にぶい黄褐色土　粒状黄褐色ブロック混入
10　黒褐色粘質土　粒状黄褐色ブロック混入

図 6-46　SX49 遺構図

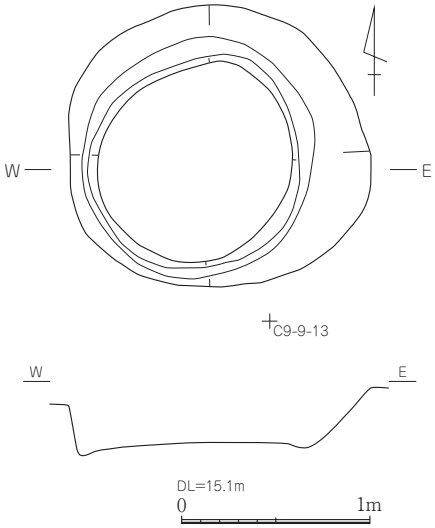
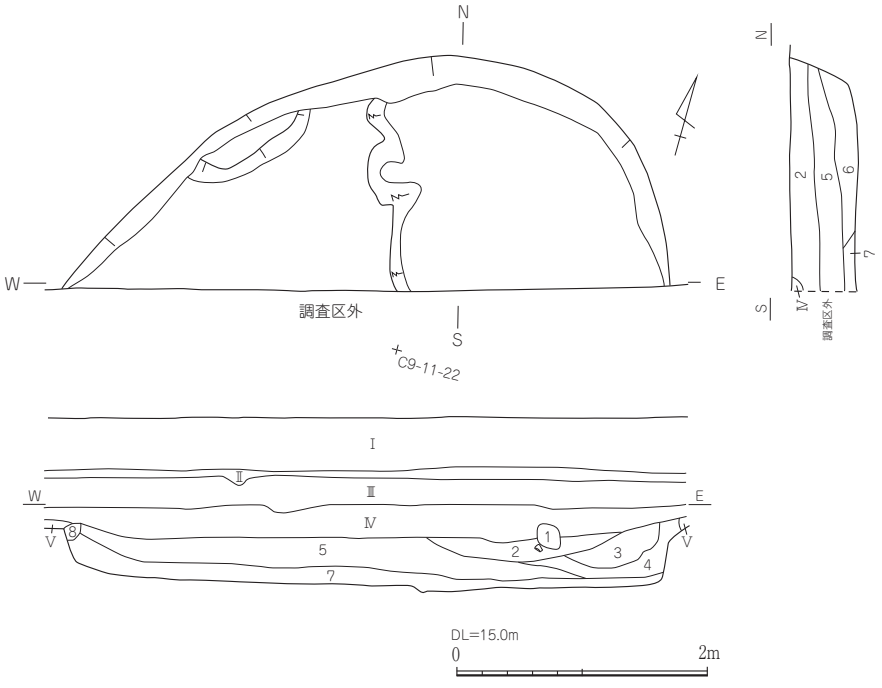


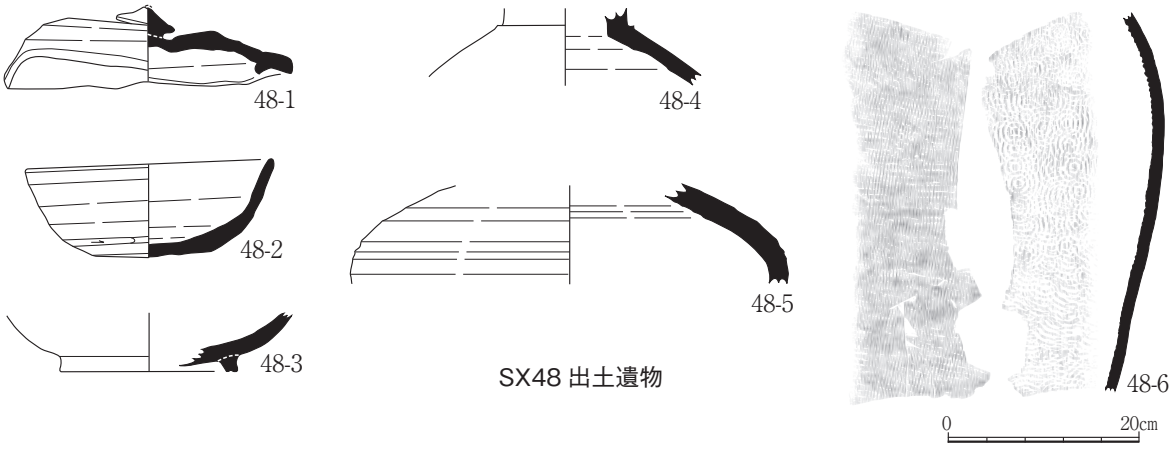
図 6-47　SX50 遺構図



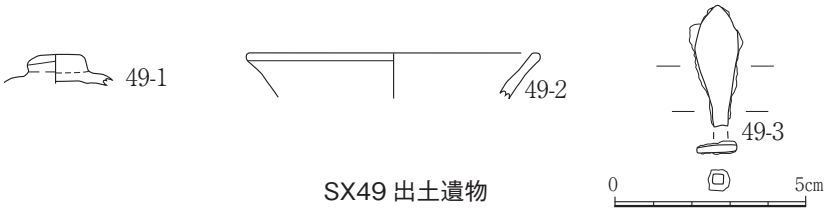
土層説明

Ⅰ　耕作土
Ⅱ　褐灰色土　床土
Ⅲ　暗褐色粘質土
Ⅳ　暗褐色粘質土
Ⅴ　にぶい黄褐色粘質土
1　暗褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土　小礫含む
4　暗褐色粘質土　褐色ブロック含む
5　黒褐色粘質土　褐色ブロック含む
6　暗褐色粘質土　褐色ブロック含む
7　黒褐色粘質土　褐色・黄褐色ブロック含む
8　にぶい黄褐色粘質土

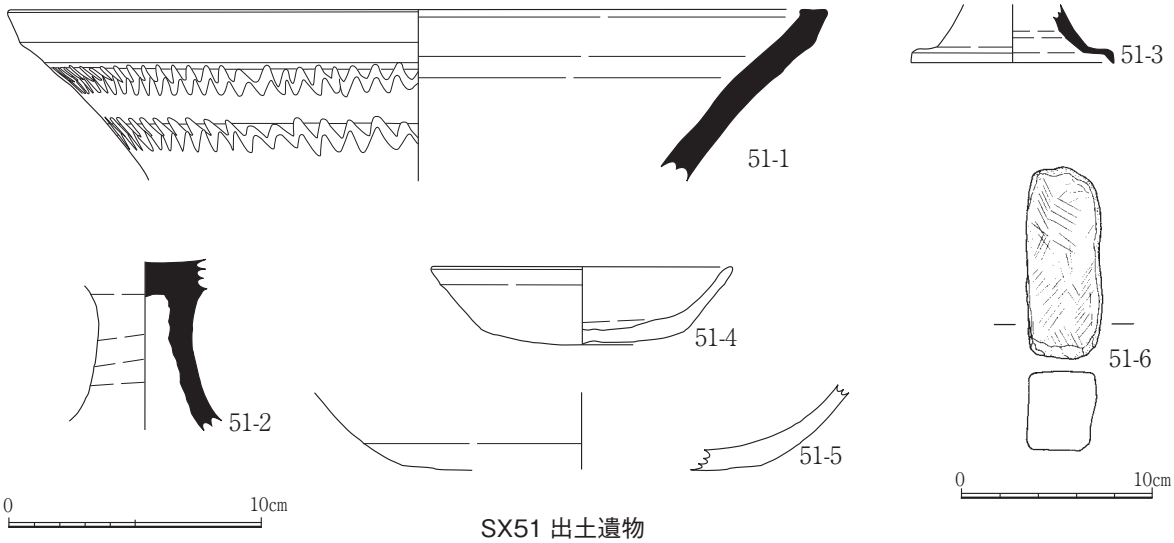
図 6-48　SX51 遺構図



SX48 出土遺物



SX49 出土遺物



SX51 出土遺物

図 6-49　SX48・49・51 出土遺物実測図

表 6-2　竪穴状遺構遺物観察表

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 6-17	SX16・SX42	1	須恵器	坏	(12.9)	3.8	(5.8)	底部ほぼ平ら、体部内湾気味、受け部外反気味、やや短く立ち上がる、底部から体部下半に放射状線刻	白色鉱物粒少量
図 6-17	SX16・SX42	2	須恵器	坏・底部			(8.6)	底径大きい、底部回転ヘラ切りか	白色鉱物粒少量
図 6-17	SX16・SX42	3	須恵器	坏	(10.4)			小型坏、口縁ほぼ直立、腰部やや屈曲	白色鉱物粒多量
図 6-17	SX16・SX42	4	土師器	坏	(12.2)			体部開き気味、口唇やや平坦、口唇及び下ハケ、他は内外面ともミガキ	小礫微量
図 6-17	SX16・SX42	5	土師器	甕	(17.0)			長胴甕、1/4 程残存、口縁は緩やかに外反、肩部張らない、胴部張らない、外面ハケ、内面口縁部ハケ、体部内面ヘラケズリ	小礫多量
図 6-17	SX20	1	土器	皿	11.7	3.0	8.0	手捏ね、口縁部強くナデ、僅かに外反気味、口縁下稜線、体部指頭痕、平底、底部脇丸味、簀子状圧痕、内面指頭、ナデ、京都系	精良
図 6-17	SX20	2	須恵器	鉢・底部			(9.0)	鉢底部か？回転ヘラ切り、体部は開く、混入品	白色鉱物粒多量
図 6-17	SX21	1	須恵器	坏蓋				扁平な鈕、天井部平坦、回転ヘラケズリ	白色鉱物粒少量
図 6-17	SX21 －№1	2	須恵器	長頸壺		(10.4)	7.1	頸部欠損、肩部屈曲、底部高台、高台部分は開く、淡緑色透明自然釉	小白色礫少量
図 6-17	SX21 －№2	3	須恵器	台付き坏	(10.5)	(5.5)		把手付く、口縁僅かに外反、口唇丸味、台部分開く、色調黄褐色、軟質	白色鉱物粒微量
図 6-17	SX22 －№2	1	須恵器	碗	(14.7)	5.4	7.9	高台、体部外傾気味に開く、高台「ハ」字状にやや開く、底部内面凹む、外面ロクロ目、回転ナデ、色調灰白色	小白色礫少量
図 6-17	SX22 －№1	2	須恵器	瓶？				瓶か小壺、体部丸味、口縁部欠損、胴部張る、上部に浅い沈線 1 条、孔欠損か、口縁僅かに残る、底部僅かに尖り気味の丸底、自然釉	白色鉱物粒多量
図 6-17	SX22 －№3	3	須恵器	横瓶	11.8			口縁、肩部残存、口縁短い、端部僅かに外反、肩部横長で丸味、口縁ナデ、肩部タタキ、内面当て具痕	白色鉱物粒多量
図 6-17	SX22	4	須恵器	長頸壺・肩部				肩部破片、肩部屈曲、胴部下半はすぼまる、色調灰白色	白色鉱物粒少量
図 6-17	SX22	5	土器	坏			4.5	口縁欠損、体部大きく開く、底部に孔、底部回転糸切り、内面強いロクロ目、外面回転ナデ	精良
図 6-17	SX22	6	土器	坏			4.8	口縁欠損、体部大きく開く、底部に孔、底部回転糸切り、内面強いロクロ目、外面回転ナデ	精良
図 6-17	SX22 －№4	7	土師器	高坏・脚部			(7.6)	高坏脚部、中実、裾僅かに開く	小礫少量
図 6-17	SX22	8	鉄製品	小刀	長 (18.5)	幅 (1.5)	重 (18)	柄部分断面長方形、背部平坦、刃部尖る	鉄製品
図 6-17	SX23	1	須恵器	坏蓋	(9.9)	(1.6)			
図 6-17	SX23	2	土師器	皿	(10.4)	1.8	7.4		
図 6-17	SX23	3	土師器	羽釜	(20.6)				
図 6-19	SX24	1	須恵器	碗	(12.6)				
図 6-19	SX24	2	須恵器	碗	(13.6)				
図 6-19	SX24	3	須恵器	長頸壺？	(12.8)				
図 6-19	SX24	4	須恵器	長頸壺？・胴部					
図 6-19	SX24	5	須恵器	壺？	(21.4)				
図 6-19	SX24	6	土師器	甕	(16.0)				
図 6-19	SX24	7	土師器	甑・把手					
図 6-19	SX25	1	須恵器	坏・底部			(7.0)		

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 6-19	SX25・SK69	2	須恵器	坏	(13.1)	4.8	(7.6)
図 6-19	SX25・SX27-№1	3	須恵器	坏	(13.4)	4.3	(5.8)
図 6-19	SX25 －№1	4	須恵器	坏	(13.0)	3.9	(9.8)
図 6-19	SX25	5	須恵器	壺？			
図 6-19	SX25	6	須恵器	甕？	(20.8)		
図 6-19	SX26 －№2、3・SX25	1	弥生土器	壺	(12.0)		
図 6-19	SX26 －№6	2	弥生土器	壺	(19.0)		
図 6-19	SX26 －№4	3	弥生土器	甕	(13.2)		
図 6-19	SX26 －№6・SX25	4	弥生土器	甕	(14.4)		
図 6-19	SX25・26 －№5・27	5	弥生土器	甕	14.8		
図 6-19	SX26	6	弥生土器	鉢	17.0	6.5	2.6
図 6-19	SX26 －№5	7	弥生土器	鉢	20.5	7.7	
図 6-19	SX26 －№7	8	弥生土器	高坏・脚部			(7.6)
図 6-19	SX26	9	弥生土器	小壺	(4.6)		
図 6-19	SX26 －№9	10	土製品	支脚			
図 6-19	SX26 －№8	11	石器	叩石	長 8.6	幅 5.2	重 109
図 6-28	SX29 －№4	1	須恵器	坏	(14.6)	5.1	8.6
図 6-28	SX29 －№1	2	須恵器	坏	(11.0)	3.8	7.1
図 6-28	SX29 －№2	3	須恵器	壺	(21.0)		
図 6-28	SX29	4	須恵器	壺	(15.2)		
図 6-28	SX29 －№3	5	土師器	碗	13.6	5.2	6.7
図 6-28	SX30 －№9	1	須恵器	坏蓋	(10.3)	(2.2)	
図 6-28	SX30	2	須恵器	坏・底部			(8.6)
図 6-28	SX31 －№1	1	石製品	砂岩製石臼	直径 (27.1)	厚 7.7	重 (4820)
図 6-28	SX32 －№1・SX31	1	須恵器	坏	(11.0)	3.8	6.0
図 6-28	SX33・SX32	1	須恵器	甕	(23.6)		
図 6-28	SX33	2	土師器	坏蓋	(17.0)		
図 6-28	SX33 －№1	3	土師器	坏	12.6	4.0	7.5
図 6-28	SX33	4	土師器	坏・底部			(11.7)
図 6-28	SX33	5	土師器	坏	(14.0)	3.0	9.0
図 6-28	SX33	6	土師器	坏	(14.0)	3.1	(8.8)
図 6-28	SX33	7	土師器	皿	(15.4)	1.8	(10.5)
図 6-28	SX33	8	土師器	皿	(14.8)	1.3	(11.5)
図 6-28	SX33	9	土師器	甕	(20.5)		
図 6-28	SX33	10	土師器	甕・胴部			
図 6-31	SX34 －№18	1	弥生土器	甕	(9.3)	18.1	2.2
図 6-31	SX34 －№10	2	弥生土器	甕	10.3	18.5	2.8
図 6-31	SX34 －№1、3	3	弥生土器	甕	(13.3)	15.6	2.2
図 6-31	SX34 －№8、12、13	4	弥生土器	甕	12.5	19.8	2.3
図 6-31	SX34 －№3、5、6	5	弥生土器	甕	(13.6)	20.6	1.9
図 6-31	SX34 －№14	6	弥生土器	甕	(13.6)	23.6	4.3
図 6-31	SX34 －№4 ～ 7、11、12	7	弥生土器	甕	(14.7)		
図 6-31	SX34 －№13	8	弥生土器	甕	(15.5)	23.6	3.0
図 6-31	SX34 －№6	9	弥生土器	甕	(16.6)	23.4	3.4
図 6-31	SX34 －№26 ～ 29	10	弥生土器	甕	14.5	33.1	4.0
図 6-31	SX34 －№20、23	11	弥生土器	鉢	12.8	8.3	4.0
図 6-31	SX34 －№25	12	弥生土器	鉢	17.1	7.5	3.1
図 6-34	SX36 －№11	1	弥生土器	甕	(13.6)	19.9	2.0
図 6-34	SX36 －№15	2	弥生土器	鉢	10.1	7.0	
図 6-34	SX36 －№12、13	3	弥生土器	鉢	12.4	6.0	
図 6-34	SX36 －№13	4	弥生土器	鉢	18.5	9.6	3.8
図 6-34	SX36 －№1	5	弥生土器	鉢	22.3	11.0	
図 6-34	SX36 －№2	6	土製品	支脚			
図 6-34	SX36 －№4	7	土製品	支脚		(13.5)	(8.8)
図 6-34	SX36 －№5	8	弥生土器	小型手捏ね	3.9	2.8	0.7
図 6-34	SX36 －№8	9	石器	砥石	長 14.0	厚 3.4	重 740
図 6-34	SX37	1	鉄製品	刀子	長 9.9	幅 1.45	厚 0.45
図 6-38	SX38 －№1	1	須恵器	耳付き壺			
図 6-38	SX38	2	内黒土器	碗・底部			(7.6)
図 6-38	SX38	3	土師器	坏	(12.8)	4.5	(8.9)
図 6-38	SX38 －№2	4	土師器	坏	(11.4)	3.8	(7.8)

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 6-38	SX38 －№ 2	5	土師器	坏	(11.8)		
図 6-38	SX38	6	土師器	皿	(10.6)	1.8	(6.8)
図 6-38	SX38 －№ 2	7	土師器	甕	(19.2)		
図 6-38	SX38	8	土師器	甕	(21.0)		
図 6-38	SX38	9	土師器	甕	(22.6)		
図 6-38	SX38	10	土製品	移動式竈			
図 6-38	SX38	11	土製品	土錘	長 3.6	径 2.0	重 11.5
図 6-38	SX38	12	土製品	土錘	長 4.0	径 2.0	重 13.0
図 6-38	SX38 －№ 4	13	石製品	結晶片岩製板碑状礫	長 26.0	幅 15.1	厚 5.7
図 6-38	SX39	1	内黒土器	碗・底部			(8.6)
図 6-38	SX39	2	土師器	坏	(10.6)		
図 6-38	SX39	3	土師器	甕	(23.4)		
図 6-38	SX39	4	土製品	移動式竈			(26.3)
図 6-38	SX40	1	須恵器	坏・底部			(6.9)
図 6-38	SX40	2	土師器	皿	(17.6)	(2.3)	(14.1)
図 6-38	SX40	3	鉄製品	刀子	長 (8.9)	幅 (1.8)	厚 (0.3)
図 6-43	SX41	1	須恵器	坏蓋			
図 6-43	SX41 －№ 2	2	須恵器	坏・底部			(2.0)
図 6-43	SX41	3	須恵器	坏・底部			(3.2)
図 6-43	SX41	4	須恵器	鉢・底部			(8.6)
図 6-43	SX41	5	須恵器	壺・胴部			
図 6-43	SX41	6	土師器	甕・胴部			
図 6-43	SX43・44	1	須恵器	坏蓋	(15.0)		
図 6-43	SX43・44	2	須恵器	坏蓋	(17.0)		
図 6-43	SX43・44	3	須恵器	坏	(10.2)		
図 6-43	SX43・44	4	須恵器	坏	(15.2)		
図 6-43	SX43・44 －№ 2	5	須恵器	高台付坏・底部			(8.0)
図 6-43	SX43・44	6	土師器	坏	(12.2)	(3.0)	(6.6)
図 6-43	SX43・44	7	土師器	皿	(12.0)		
図 6-43	SX43・44	8	土師器	皿	(10.4)		
図 6-43	SX43・44	9	須恵器	坏・底部			(6.6)
図 6-43	SX43・44	10	須恵器	横瓶・胴部			
図 6-43	SX43・44	11	石器	粘板岩製石包丁	長 3.2	幅 9.4	厚 0.9
図 6-43	SX45	1	須恵器	坏・底部			(5.6)
図 6-43	SX45	2	須恵器	瓶？	(11.8)		
図 6-43	SX45・46	3	須恵器	瓶・肩部	最大径 (12.0)		
図 6-43	SX45	4	須恵器	壺	(9.2)		
図 6-43	SX45	5	須恵器	壺	(10.9)		
図 6-43	SX46	1	須恵器	坏蓋			
図 6-43	SX46	2	須恵器	坏蓋	(15.4)		
図 6-43	SX46	3	須恵器	坏蓋	(18.8)		
図 6-43	SX46	4	須恵器	坏蓋	(15.6)		
図 6-43	SX46	5	須恵器	高台付坏？			(10.0)
図 6-43	SX47	1	須恵器	坏	(12.9)	4.0	
図 6-49	SX48	1	須恵器	坏蓋	11.2	3.2	
図 6-49	SX48	2	須恵器	坏	(9.7)	3.9	4.7
図 6-49	SX48 －№ 1	3	須恵器	高台付坏・底部			(7.0)
図 6-49	SX48	4	須恵器	長頸壺・肩部			
図 6-49	SX48	5	須恵器	長頸壺・胴部			
図 6-49	SX48 －№ 2、3、6 ～ 9	6	須恵器	甕・胴部			
図 6-49	SX49	1	土師器	坏蓋			
図 6-49	SX49 －№ 1	2	土師器	坏	(11.6)		
図 6-49	SX49	3	鉄製品	鉄鏃	長 (3.2)	幅 (1.2)	重 (2.0)
図 6-49	SX51 －№ 2	1	須恵器	壺	(32.4)		
図 6-49	SX51	2	須恵器	高坏・脚部			
図 6-49	SX51	3	須恵器	高坏・裾部			(8.0)
図 6-49	SX51	4	土師器	坏	(11.8)	3.1	8.0
図 6-49	SX51	5	土師器	碗？			(11.0)
図 6-49	SX51	6	石器	砂岩製砥石	長 10.1	幅 3.9	重 258.3

第7節　溝状遺構

本調査区では112条の溝状遺構を検出した。時期は大部分のものが古代に含まれるものが多く、SD5・11・29・12・30、99・100等の同一方向に長く平行して延びる道と考えられるもの、SD47・73の区画溝等を上げることができる。近世のものは調査区外へ延びる為全貌を知ることはできないが、屋敷溝と考えられるSD8・9、3・17が上げられる。調査区中央から西にかけて見られる短いものについては畝状遺構の可能性がある。

表7-1　溝状遺構一覧表

SD番号	調査区	グリッド	時期	断面形態	主軸方向	規模長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	切り合い	備考
SD1	Ⅷ BE	C10-1-22 他	近世	箱形	N-16° -E	(9.34)	0.95	0.65	土器	ST6 他切る、SX3 切られる	
SD2	Ⅷ BE	C9-5-25 他	近世	U 字状	N-9° -E	(8.60)	1.00	0.55	近世陶磁器	ST9・10 他切る、SX6・8 切られる	
SD3	Ⅷ BE	C9-4-20 他	近世	箱形	N-79° -W	(43.71)	0.64	0.54	近世陶磁器	SB2・3 切る、SX8 他切られる	
SD4	Ⅷ BE	C9-10-7 他	古代？	Ⅲ状	N-82° -W ～ N-74° -E	(10.0)	0.40	0.08			
SD5	Ⅷ BE	C9-10-9 他	古代	Ⅲ状	N-78° -E	(5.85)	0.30	0.08			
SD6	Ⅷ BE	C9-10-9	古代？	Ⅲ状	N-2° -E	0.96	0.35	0.05			畝？
SD7	Ⅷ BE	C9-10-9	古代？	Ⅲ状	N-2° -W	2.57	0.28	0.09		ST10 切る	畝？
SD8	Ⅷ BE	C9-4-19 他	近世	箱形	N-20° -E	(27.49)	0.55	0.41	土器、鉄製品	ST11、SB5、SX16・41 他切る	屋敷溝
SD9	Ⅷ BE	C9-4-14 他	近世	箱形	N-20° -E	(24.08)	0.50	0.29	土器・須恵細片	ST11・17・53、SB5 他切る	屋敷溝
SD10	Ⅷ BE	C9-10-8 他	古代？	Ⅲ状	N-2° -E	0.90	0.31	0.05			畝？
SD11	Ⅷ BE	C9-10-13 他	古代	Ⅲ状	N-86° -W	38.66	0.35	0.11	須恵坏	ST7 他切る、SX10 他切られる	
SD12	Ⅷ BE	C9-9-8 他	古代	Ⅲ状	N-85° -E ～ N-85° -W	(20.26)	0.45	0.10	須恵甕、坏	SX19・41 切る、SB6、SD8・9・16 切られる	
SD13	Ⅷ BE	C9-4-15 他	近世	Ⅲ状	N-13° -E	(5.37)	0.54	0.22	須恵甕	SD14 切られる	屋敷溝
SD14	Ⅷ BE	C9-4-14 他	近世？	Ⅲ状	N-80° -W	(2.79)	0.60	0.31		SD13 切る、SD9 切られる	
SD15	Ⅷ BE	C9-5-11 他	古代？	Ⅲ状	N-6° -E	(18.18)	0.37	0.08		ST2・51 他切る、SB6 他切られる	坪境溝？
SD16	Ⅷ BE	C9-10-7 他	古代？	Ⅲ状	N-5° -E	(1.55)	0.31	0.14	須恵坏	SD12 切る	畝？
SD17	Ⅷ BE	C9-5-20 他	近世	箱形	N-79° -W	(23.74)	0.90	0.55	近世陶磁器	ST6 他切る、SX8 他切られる	屋敷溝
SD18	Ⅷ BE	C10-6-10 他	古代？	Ⅲ状	N-16° -E	(7.80)	(0.35)			SX2・12 ～ 14 切られる	坪境溝？
SD19	Ⅷ BE	C9-5-11 他	近世	Ⅲ状	N-82° -W	(10.46)	0.30	0.11		ST5、SD15 切る	屋敷溝？
SD20	Ⅷ BE	C10-6-4 他	古代？	Ⅲ状	N-6° -E	4.19	0.32	0.14	弥生細片		
SD21	Ⅷ BE	C9-4-15 他	近世	箱形	N-84° -W	(29.94)	0.45	0.24	弥生細片	ST2・5・6、SB1、SK2 他切る	地境溝？
SD22	Ⅷ BE	C9-10-13 他		Ⅲ状	N-89° -W	1.82	0.35	0.08	弥生細片		畝？
SD23	Ⅷ BE	C9-10-13		Ⅲ状	N-78° -E	(1.03)	0.35	0.07		SB4 切られる	畝？
SD24	Ⅷ BE	C9-10-11 他	古代？	Ⅲ状	N-8° -E	(5.60)	0.30	0.07	弥生細片	ST8、SK24、SD11 切る	
SD25	Ⅷ BW・AE	C9-8-11 他	古代？	Ⅲ状	N-71 ～ 81° -W	(51.50)	0.58	0.13	弥生細片、須恵片	ST26、SB9、SG6、SK39・66、SD26・29・36・41・55・71・72 切る	道？
SD26	Ⅷ BW	C9-8-11 他	古代？	Ⅲ状	N-88° -E ～ N-75° -W	(18.70)	0.56	0.04	弥生細片	ST23、SG7、SK39 切る、SD25 切られる	
SD27	Ⅷ BW	C9-8-22 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	(14.34)	0.32	0.09	弥生細片、須恵片	ST13・18、SX43・44、SK31 切る	
SD28	Ⅷ BW	C9-9-11 他	古代？	Ⅲ状	N-74 ～ 84° -E	(9.27)	0.35	0.04	弥生細片、須恵片	ST17、SB9 切る	畝？
SD29	Ⅷ BW	C9-8-13 他	古代	Ⅲ状	N-75 ° -E ～ N-90°	(16.96)	0.43	0.10	弥生細片、須恵坏蓋	ST17・20、SD36 切る、SD25・35 切られる	道？
SD30	Ⅷ BW	C9-8-8 他	古代	Ⅲ状	N-79° -E ～ N-86° -W	(25.22)	0.45	0.11	弥生細片	ST12・20、SG1 切る、SD42 切られる	道？
SD31	Ⅷ BW	C9-4-21 他	古代？	Ⅲ状	N-90°	(4.92)	0.30	0.06	弥生細片	SD32 切られる	畝？
SD32	Ⅷ BW	C9-4-22 他	古代？	Ⅲ状	N-2° -E	(3.29)	0.40	0.07	弥生細片	SD31 切る	畝？
SD33	Ⅷ BW	C9-4-21 他	古代？	Ⅲ状	N-5° -E	4.65	0.25	0.04	弥生細片	ST12 切る	畝？
SD34	Ⅷ BW	C9-9-2	古代？	Ⅲ状	N-8° -E	1.42	0.40	0.09	弥生細片		畝？
SD35	Ⅷ BW・AE	C9-3-24 他	古代？	Ⅲ状	N-2° -E ～ N-74° -E	(39.32)	0.62	0.14	弥生細片、須恵器	ST19・20・23、SB10、SD29・36 切る、SD46・68 切られる	坪境溝？

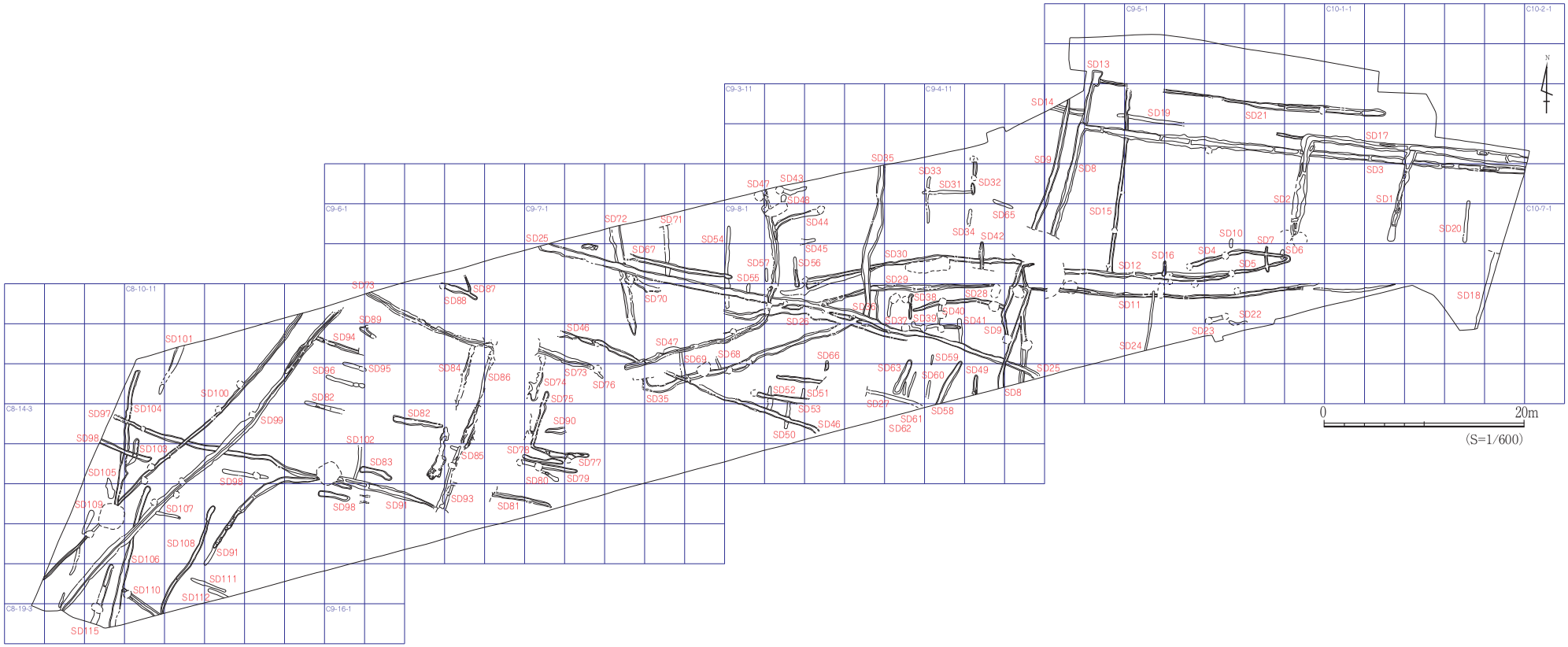


図 7-1　溝状遺構全体配置図

SD番号	調査区	グリッド	時期	断面形態	主軸方向	規模長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	切り合い	備考
SD36	Ⅷ BW	C9-8-14 他	弥生？	Ⅲ状	N-0°	(2.78)	0.65	0.06	弥生甕	SD25・29・35 切られる	
SD37	Ⅷ BW	C9-8-15	古代？	Ⅲ状	N-5° -E	1.83	0.27	0.05	弥生細片	SK30 切られる	畝？
SD38	Ⅷ BW	C9-8-15	古代？	Ⅲ状	N-0°	2.95	0.27	0.05	弥生細片		畝？
SD39	Ⅷ BW	C9-9-16 他	古代？	Ⅲ状	N-90°	(4.90)	0.35	0.10	弥生細片	SB9 切られる	畝？
SD40	Ⅷ BW	C9-9-11	古代？	Ⅲ状	N-5° -E	(1.80)	0.24	0.04			畝？
SD41	Ⅷ BW	C9-9-16 他	古代？	Ⅲ状	N-0°	(1.95)	0.25	0.07		SD39 切る、SD25 切られる	畝？
SD42	Ⅷ BW	C9-9-7	古代？	Ⅲ状	N-0°	(2.80)	0.43	0.18		SD30 切る	畝？
SD43	Ⅷ BW	C9-3-22 他	古代？	Ⅲ状	N-75° -E	2.34	0.40	0.08			畝？
SD44	Ⅷ BW	C9-8-2 他	古代？	Ⅲ状	N-77° -E	(4.16)	0.40	0.05		ST25 切る	
SD45	Ⅷ BW	C9-8-3	古代？	Ⅲ状	N-80° -E	(1.37)	0.30	0.04		ST24 切る	畝？
SD46	Ⅷ BW・AE	C9-8-21 他	古代？	Ⅲ状	N-67～72° -W	(27.20)	0.47	0.08	須恵坏	SK41・55、SD35・47 切る	坪境溝？
SD47	Ⅷ BW・AE	C9-3-21 他	古代	U 字状	N-10° -W～N-73° -E	(28.15)	0.50	0.25	須恵坏	ST23･25、SG2･3、SD69 切る、SD46 切られる	区画溝？
SD48	Ⅷ BW	C9-3-22 他	古代？	Ⅲ状	N-4～72° -E	(2.07)	0.55	0.11			
SD49	Ⅷ BW	C9-9-22	古代？	Ⅲ状	N-5° -E	(1.65)	0.38	0.13		ST13 切る	畝？
SD50	Ⅷ BW	C9-13-2	古代？	Ⅲ状	N-7° -E	(2.65)	0.35	0.04			畝？
SD51	Ⅷ BW	C9-8-22	古代？	Ⅲ状	N-11° -E	2.20	0.28	0.04			畝？
SD52	Ⅷ BW	C9-8-22 他	古代？	Ⅲ状	N-10° -E～N-2° -W	(2.23)	0.37	0.03			畝？
SD53	Ⅷ BW	C9-8-21 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	(5.00)	0.50	0.05			畝？
SD54	Ⅷ BW	C9-8-6 他	古代？	Ⅲ状	N-4° -E	8.26	0.28	0.07	須恵甕片	ST25 切る	畝？
SD55	Ⅷ BW	C9-8-11 他	古代？	Ⅲ状	N-6° -E	(0.90)	0.36	0.07		SD25 切られる	畝？
SD56	Ⅷ BW	C9-8-7 他	古代？	Ⅲ状	N-5° -W	(2.45)	0.30	0.10		SG1 切る	畝？
SD57	Ⅷ BW	C9-8-7 他	古代？	Ⅲ状	N-2° -W	1.30	0.25	0.05			畝？
SD58	Ⅷ BW	C9-9-21 他	弥生？	Ⅲ状	N-28° -E	(4.80)	0.56	0.05	高坏細片	ST13 切る	畝？
SD59	Ⅷ BW	C9-9-16 他	古代？	Ⅲ状	N-9° -E	1.02	0.15	0.04		ST13 切る	畝？
SD60	Ⅷ BW	C9-9-21	古代？	Ⅲ状	N-10° -E	(1.61)	0.25	0.05	須恵甕片	ST13・18 切る	畝？
SD61	Ⅷ BW	C9-8-25	古代？	Ⅲ状	N-17° -E	2.65	0.20	0.05	弥生細片	ST13・18 切る	畝？
SD62	Ⅷ BW	C9-8-25	古代？	Ⅲ状	N-7° -E	1.35	0.20	0.07	弥生細片	ST13 切る	畝？
SD63	Ⅷ BW	C9-8-25	古代？	Ⅲ状	N-23° -E	3.72	0.72	0.09	弥生細片	ST13 切る	畝？
SD64	Ⅷ BW	C9-9-17 他	古代？						弥生細片		
SD65	Ⅷ BW	C9-4-22 他	古代？	Ⅲ状	N-78° -W	2.10	0.32	0.08	土師坏片	ST11 切る	畝？
SD66	Ⅷ BW	C9-8-18 他	古代？	Ⅲ状	N-6° -E	0.98	0.33	0.03	弥生細片		畝？
SD67	Ⅷ AE	C9-7-8 他	古代？	Ⅲ状	N-71° -W	(14.80)	0.50	0.12	須恵甕片	ST26、SD71 切る	道？
SD68	Ⅷ AE	C9-7-20 他	古代？	Ⅲ状	N-18° -W	(1.22)	0.24	0.08	土師坏片	SD35 切る	畝？
SD69	Ⅷ AE	C9-7-19 他	古代？	Ⅲ状	N-6° -W	(4.68)	0.30	0.08	須恵坏蓋片	SD47 切られる	畝？
SD70	Ⅷ AE	C9-7-8 他		Ⅲ状	N-80° -W	(3.26)	0.49	0.03	弥生細片	ST26 切る	
SD71	Ⅷ AE	C9-7-4 他	古代？	Ⅲ状	N-0°	(4.95)	0.47	0.06	弥生細片	ST26 切る、SD25・67 切られる	畝？
SD72	Ⅷ AE	C9-7-3 他	古代？	Ⅲ状	N-10° -W	(10.87)	0.80	0.14	弥生細片	SD25 切られる	坪境溝？
SD73	Ⅷ AE	C9-6-12 他	古代	U 字状	N-64～82° -W	(24.00)	0.60	0.24	須恵鉢、土師坏、瓦器、把手	SX24 切る	区画溝？
SD74	Ⅷ AE	C9-7-21 他	古代？	Ⅲ状	N-15° -E	(4.50)	0.62	0.08	弥生細片		畝？
SD75	Ⅷ AE	C9-7-21 他	古代？	Ⅲ状	N-15° -E	(5.78)	0.35	0.05	土師坏片		畝？
SD76	Ⅷ AE	C9-7-22	古代？	Ⅲ状	N-50° -W	(0.80)	0.25	0.08	弥生細片	SK56 切られる	
SD77	Ⅷ AE	C9-12-6 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	(5.88)	0.50	0.07	弥生細片	SK60 切られる	畝？
SD78	Ⅷ AE	C9-12-6 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	4.10	0.50	0.07	須恵片		畝？
SD79	Ⅷ AE	C9-12-6 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	(5.56)	0.45	0.07	弥生細片	SK49・63 切られる	畝？
SD80	Ⅷ AE	C9-12-6 他	古代？	Ⅲ状	N-60～80° -W	(4.92)	0.33	0.06	弥生細片	SK49 切られる	畝？
SD81	Ⅷ AE	C9-12-11 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	(5.06)	0.40	0.15	土師坏	ST32、SX29・30 切る	畝？
SD82	Ⅷ AE	C9-11-3 他	古代？	Ⅲ状	N-80° -W	14.00	0.47	0.06	弥生細片	ST34・48 切る	畝？
SD83	Ⅷ AE	C9-11-7 他	古代？	箱形	N-80° -W	3.34	0.58	0.06	弥生細片	ST35 切る	畝？
SD84	Ⅷ AE	C9-6-19 他	古代？	Ⅲ状	N-18° -E	(16.0)	0.78	0.08	土師坏、羽釜		区画溝？
SD85	Ⅷ AE	C9-11-9 他	古代？	Ⅲ状	N-67° -W	(0.76)	0.30	0.10	弥生細片		畝？
SD86	Ⅷ AE	C9-6-24 他	古代？	Ⅲ状	N-20° -E	(16.60)	0.25	0.06	土師坏	SK62 切られる	区画溝？
SD87	Ⅷ AE	C9-6-9 他	古代？	Ⅲ状	N-19° -W	(1.60)	0.22	0.08	須恵坏	SX26 切る	畝？
SD88	Ⅷ AE	C9-6-14 他	古代？	Ⅲ状	N-70° -W	(3.15)	0.55	0.08	弥生細片	SX26 切る	
SD89	Ⅷ AE	C9-6-17 他	古代？	Ⅲ状	N-59° -W	2.16	0.44	0.16	弥生細片		畝？
SD90	Ⅷ AE	C9-12-1 他	古代？	Ⅲ状	N-86° -E	(3.29)	0.39	0.05	土師坏片	ST30 切る	畝？
SD91	Ⅷ AE・AW	C8-15-18 他	古代？	Ⅲ状	N-33° -E～N-81° -W	(27.22)	0.57	0.16	土師甕、鉄製品	ST35・41・46、SK102・104、SD97・98・102 切る	区画溝？
SD92	Ⅷ AE	C9-11-14 他									欠番

SD 番号	調査区	グリッド	時期	断面形態	主軸方向	規模長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	遺物	切り合い	備考
SD93	Ⅷ AE	C9-11-4 他	古代？	皿状	N-20° -E	(11.25)	0.25	0.10	須恵甕	SX22・23・29 切る	区画溝？
SD94	Ⅷ AW	C8-10-20 他	古代？	皿状	N-72° -W	(4.24)	0.43	0.08	弥生壺	ST49 切る、SD99 切られる	畝？
SD95	Ⅷ AW	C9-6-21	古代？	皿状	N-73° -W	2.42	0.40	0.05			畝？
SD96	Ⅷ AW	C9-6-21	古代？	皿状	N-74° -W	4.00	0.35	0.04	弥生細片	ST34・48 切る	畝？
SD97	Ⅷ AW	C8-14-5 他	古代	皿状	N-64～79° -W	(25.00)	0.44	0.07	土師皿、緑釉陶器	ST45・46、SD104 切る、SD91・99 切られる	道？
SD98	Ⅷ AW	C8-14-10 他	古代	皿状	N-70～82° -W	(25.45)	0.50	0.10	土師碗	ST38･45･46､SD103･104 切る、SD91 切られる	道？
SD99	Ⅷ AW	C9-6-11 他	古代	U 字状	N-43° -E	(40.3)	0.80	0.38	須恵壺、緑釉陶器、白磁碗	ST44・45・48・49、SB13 他切る	道？
SD100	Ⅷ AW	C8-10-15 他	古代	皿状	N-44° -E	(37.05)	0.38	0.1	土師坏	ST45 他切る、SD104 切られる	道？
SD101	Ⅷ AW	C8-10-17 他	古代？	皿状	N-24° -E	(4.93)	0.55	0.15	須恵甕片		坪境溝？
SD102	Ⅷ AW	C9-11-6	古代？	皿状	N-10° -E	(3.18)	0.28	0.03	土師坏片	ST34 切る、SD91 切られる	畝？
SD103	Ⅷ AW	C8-15-6 他	古代？	皿状	N-10° -E	(3.12)	0.50	0.15	弥生細片	SD98 切られる	畝？
SD104	Ⅷ AW	C8-10-21 他	古代？	皿状	N-9° -E	(13.35)	0.45	0.17	須恵坏蓋	SX33 他切る、SD97・98 切られる	坪境溝？
SD105	Ⅷ AW	C8-14-10 他	古代？	皿状	N-8° -W	2.07	0.50	0.10	弥生細片		畝？
SD106	Ⅷ AW	C8-15-11 他	古代	皿状	N-15° -E	(15.80)	0.56	0.07	内黒土器	ST44 他切る、SD99 切られる	坪境溝？
SD107	Ⅷ AW	C8-15-12 他	古代？	皿状	N-78° -W	(2.50)	0.23	0.06	土師片		畝？
SD108	Ⅷ AW	C8-15-13 他	古代？	皿状	N-20～40° -E	(12.02)	0.40	0.1	弥生細片	ST41・43、SK94・103 切る	畝？
SD109	Ⅷ AW	C8-14-15 他	古代？	皿状	N-21° -E	2.53	0.44	0.07	弥生細片		畝？
SD110	Ⅷ AW	C8-15-21 他	古代？	皿状	N-52° -W	(4.20)	0.52	0.22	須恵甕片、土師坏片	ST43 他切る、SD106 切られる	畝？
SD111	Ⅷ AW	C8-15-22 他	古代？	皿状	N-70° -W	3.70	0.28	0.04	須恵甕片	ST41 切る	畝？
SD112	Ⅷ AW	C8-15-23 他	古代？	皿状	N-68° -W	(1.85)	0.35	0.04	弥生細片	ST41 切る	畝？
SD113	Ⅷ AE	C9-11-13									欠番
SD114	Ⅷ AE										欠番
SD115	Ⅷ AW	C8-14-25 他	古代？	皿状	N-16° -E	(5.80)	0.52	0.08	砥石	SB16 切る、SK95 切られる	道？

SD1(図 7-2、5)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C10-1-22 他　**切り合い関係**；ST6、SX40、SD17 を切る、SX3 に切られる

時期；近世　**主軸方向**；N-16° -E　**規模**；長さ (9.34)m ×幅 0.95m ×深さ 0.65m

断面形状；箱形　**覆土**；－

出土遺物；土器灯明皿

所見；Ⅷ BE 区の東に位置する南北溝でグリッドは C10-1-22、C10-6-2 他に跨がる。９m 西に南北方向溝で同様の SD2 が位置している。北には弥生時代後期末の ST6、同時期の SD17、東には古代の SX40 が隣接し西側を切っている。南は近世の SX3 に若干切られている。規模は長さ 9.34m、幅 0.95m、深さ 65㎝と深い。軸方向は N-16° -E で断面は箱形を呈する。南北で礫が纏まって出土している。所属時期は出土遺物からして近世と考えられる。

出土遺物 (図 7-5 №.１～ 4)

№.１から４は土器の灯明皿である。内外面共に回転ナデを施し、底部は全て回転糸切りである。１はほぼ完形品で口縁部に煤が付着する。内面底中央が凹んでいる。２は口縁部内面に煤が付着し、内面底中央が若干凹んでいる。３は口径 6.7㎝、器高 1.4㎝、底径 4.8㎝を測り、底部がやや突底気味である。４は口縁部が直立し、底部は突底気味である。

SD2(図 7-2、5)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-25 他　**切り合い関係**；ST9・10、SK3・8、SD3 を切る、SX6・8 に切られる

時期；近世　**主軸方向**；N-9° -E　**規模**；長さ (10.08)m ×幅 1.0m ×深さ 0.55m

断面形状；U 字状　**覆土**；黒褐色土

出土遺物；近世陶磁器

所見；Ⅷ BE 区の中央部やや東寄りに位置する南北溝でグリッドは C9-5-25、C9-10-5 他に跨がる。９m 東に南北方向溝で同様の SD1 が位置している。弥生時代後期末の ST9、ST10、同時期の SK3、SK8、SD3 を切り、南北端をそれぞれ SX6･8 に切られている。規模は長さ 10.08m、幅 1.0m、深さ 55㎝と深い。軸方向は N-9° -E で断面は U 字状である。覆土は黒褐色土で下層に黄褐色小ブロック、褐色ブロックを含む。北側で礫が纏まって出土している。所属時期は出土遺物からして近世と考えられる。

出土遺物 (図 7-5 №.１～ 3)

№.１、２は陶磁器碗である。１は小碗で口径 6.7㎝、器高 3.8㎝を測る。２は口径 11.6㎝、器高 7.5㎝を測る。３は染付け皿である。

SD3・17(図 7-2、5、6)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-5-20 他

切り合い関係；ST6、SB2・3、SK14 を切る、SX8、SD1・2・15 に切られる

時期；近世　**主軸方向**；N-79° -W

規模；SD3 長さ (43.71)m ×幅 0.45 ～ 0.86m ×深さ 0.15 ～ 0.86m　**覆土**；黒褐色土

SD17 長さ (23.74)m ×幅 0.68 ～ 1.2m ×深さ 0.48 ～ 0.84m　**断面形状**；箱形　**覆土**；褐灰色土
出土遺物；近世陶磁器、土器高坏
所見；Ⅷ BE 区の北に位置する東西溝でグリッドは C9-5-20、C10-1-16 他に跨がる。弥生時代後期末の ST6、古代の SB2、SB3、同時期の SK14 を切り、SX8、SD1、SD2、SD15 に切られている。同一方向に平行して構築されており、両溝とも東端が調査区外へと続いている。SD3 の西端は SD8 と繋がっていると考えられ、SD17 は調査区内で収束している。軸方向は N-79° -W で断面は箱形を呈する。調査区内での規模は SD3 が長さ 43.71m、幅 45cmから 86cm、深さ 15cmから 86cm を測り、東から西にかけて徐々に深くなっている。SD17 は長さ 23.74m、幅 68cmから 120cm、深さ 48 から 84cmを測る。覆土はそれぞれ黒褐色土、褐灰色土のほぼ単一層である。

所属時期は出土遺物からして近世と考えられる。SD3 が SD8 と繋がり、近世の遺構を囲むように位置していることから屋敷溝の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 7-5SD3 №1 ～ 3、図 7-6SD17 №1 ～ 3)

SD3 №1 は土器の把手である。中空で透かし円孔を有する。焙烙の把手か。２は磁器碗である。３は能茶山産の皿で見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。

SD17 №1 は備前産の碗である。２は瀬戸美濃産の碗で 18 世紀のものと考えられる。３は京焼風の碗である。

SD5・11・29・12・30(図 7-2、6)

調査区；Ⅷ BW・BE　**グリッド**；C9-10-13 他
切り合い関係；ST7・12・14・17・20、SX19・41、SK6・36、SD36 を切る、SB6、SX10・11、SK10、SD8・9・24・25・35・42 に切られる
時期；古代　**主軸方向**；N-86° -W　**規模**；SD5 長さ (5.85)m ×幅 0.3m ×深さ 0.08m　SD11 長さ 38.66m ×幅 0.35m ×深さ 0.11m　SD29 長さ (16.96)m ×幅 0.43m ×深さ 0.1m　SD12 長さ (20.26)m ×幅 0.45m ×深さ 0.1m　SD30 (25.22)m ×幅 0.45m ×深さ 0.11m
覆土；黒色粘質土、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土　**断面形状**；皿状
出土遺物；須恵器坏
所見；Ⅷ BE 区の南からⅧ BW 区の中央部にかけて延びる東西溝で同一方向に平行して構築されている。Ⅷ BE、Ⅷ BW 区に分けて調査を行った為もあり、別の番号を付けていたが北側の SD5、SD12、SD30 は繋がる同一の溝で南側の SD11、SD29 も途切れてはいるが同一の溝であると後に判断した。遺構が密集しいる為接する多くの遺構を切り、切られている。軸方向は N-86° -W であるが、途中緩やかに曲がる傾向がみられる。断面は皿状を呈する。北側の SD5、SD12、SD30 を繋げた規模は長さ 52.33m、幅 40cm、深さ 10cm、南側の SD11、SD29 を繋げた規模は長さ 57.22m、幅 39cm、深さ 10cmを測る。遺物は細片が多く、所属時期は古代の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 7-6SD11 №1)

SD11 №1 は須恵器坏である。口縁部は欠損し、底径 5.2cmを測る。整形は外面が回転ナデ、内面はロクロ目を残す。

SD8・9(図 7-3、6)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-9-8 他

切り合い関係；ST11・53、SB5、SX16・41・42、SK105、SD11・12・14・25 を切る

時期；近世　**主軸方向**；N-20° -E　**規模**；SD8 長さ (27.49)m ×幅 0.55 ～ 0.78m ×深さ 0.14 ～ 0.72m **覆土**;黒褐色土､黒色土　SD9 長さ (24.08)m ×幅 0.45 ～ 0.68m ×深さ 0.15 ～ 0.29m　**覆土**;黒褐色土、暗褐色土　**断面形状**；箱形

出土遺物；土器灯明皿、染付皿、鉄製品

所見；Ⅷ BE 区の西に位置する南北溝でグリッドは C9-9-8、C9-9-13 他に跨がる。接する殆どの遺構を切っている。同一方向に平行して構築されているが、南側の 2 ケ所で SD9 が SD8 に合流し、更に SD8 が枝分かれして調査区外へと続いている。SD8 の北側は SD3 と繋がり、SD9 は調査区外へと続く。軸方向は N-20° -E で断面は箱形を呈する。調査区内での規模は SD8 が長さ 27.49m、幅 55cmから 78cm、深さ 14cmから 72cmと南から北にかけて深くなっている。SD9 は長さ 24.08m、幅 45cmから 68cm、深さ 15cmから 29cmを測る。SD8 からは灯明皿が約 80 点纏まって出土しており、その内 15 点を抽出し実測した。

所属時期は出土遺物からして近世と考えられる。SD8 が SD3 と繋がり、近世の遺構を囲むように位置していることから屋敷溝の可能性が考えられる。北へ同方向に延びる SD13 は深さ 23cm程と比較的浅いものの、後で付け足された同一の屋敷溝ではないかと考えられる。

出土遺物 (図 7-6SD8 №1 ～ 17)

SD8 №1 から 15 は土器の灯明皿である。 1 は口径 6.3cm、器高 1.4cm、底径 4.4cmを測る。 1 から 14 の大きさはどれも似ているが、15 は若干大きく口径 8.4cm、器高 2.0cm、底径 5.7cmを測る。内外面共に回転ナデを施す。底部は全て回転糸切りで内面底には回転渦巻き痕を残す。ほとんどのものに煤が付着しており、中には変色しているものもある。

16 は染付け皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、釉剥ぎ部分に重ね焼きの高台跡が残る。

17 は鉄製の刃で幅 3.5cm、厚さ 0.3cmを測り、重さ 122g を量る。鎌か。

SD16(図 7-3、6)

調査区；Ⅷ BE　**グリッド**；C9-10-7 他　**切り合い関係**；SD12 を切る

時期；古代？　**主軸方向**；N-5° -E

規模；長さ (1.55)m ×幅 0.31m ×深さ 0.14m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－

出土遺物；須恵器坏

所見；Ⅷ BE 区の中央部やや南西寄りに位置する南北溝でグリッドは C9-10-6、C9-10-7 に跨がる。南端部が SD12 を切っている。軸方向は N-5° -E で断面は皿状を呈する。規模は長さ 1.55m､幅 31cm、深さ 14cmを測る。遺物は少なく、所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。東に同様に延びる SD がみられることから畝の可能性も考えられる。

出土遺物 (図 7-6 №1)

№1 は須恵器坏身の口縁部である。口径 12.6cmを測る。口縁部は外反気味で受け部は短く内傾する。整形は内外面共にナデである。

SD35(図 7-3)

調査区；Ⅷ AE・BW　**グリッド**；C9-3-24 他

切り合い関係；ST19・20・23、SB10、SD29・36・69 を切る、SD46 に切られる

時期；古代？　**主軸方向**；N-2°-E ～ N-74°-E

規模；長さ (39.32)m ×幅 0.62m ×深さ 0.14m　**断面形状**；皿状

覆土；黒褐色粘質土主体、褐色粘質土

出土遺物；－

所見；Ⅷ BW 区の北からⅧ AE 区の東にかけて屈曲して延びる溝である。グリッドは C9-3-24、C9-8-4 他に跨がる。北側は調査区外へと続き、西側は調査区内で収束している。西には同様に屈曲した SD47 が位置し、SD46 に切られる以外はほとんどの遺構を切っている。軸方向は N-2°-E から N-74°-E に傾き、断面は皿状を呈する。調査区内での規模は長さ 39.32m、幅 62㎝、深さ 14㎝を測る。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、褐色粘質土が床面上に堆積する。遺物は細片が多く、須恵器片等も出土しているが掲載できるものはなかった。所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。西側が若干北を向き、その先に SD72 が位置していることから SD47、SD73 と同様の区画溝か坪境溝である可能性が考えられる。

SD36(図 7-3、7)

調査区；Ⅷ BW　**グリッド**；C9-8-14　**切り合い関係**；SD25・29・35 に切られる

時期；弥生後期後半？　**主軸方向**；N-0°

規模；長さ (2.78)m ×幅 0.65m ×深さ 0.06m　**断面形状**；皿状

覆土；黒褐色粘質土、暗褐色粘質土

出土遺物；弥生土器甕

所見；Ⅷ BW 区の中央部に位置する南北溝でグリッドは C9-8-14 である。南北端、西側を SD25、SD29、SD35 に切られている。軸方向は真北で断面は皿状を呈する。規模は長さ 2.78m、幅 65㎝、深さ 6㎝と比較的浅い。覆土は上層に黒褐色粘質土、下層に暗褐色粘質土が堆積する。遺物は細片が多く、所属時期は弥生時代後期後半の可能性があるものの判然としない。

出土遺物 (図 7-7 №1)

№1 は弥生土器甕の底部である。底径 4.2㎝を測る。整形は外面がハケ、内面はナデである。

SD46(図 7-3、7)

調査区；Ⅷ AE・BW　**グリッド**；C9-8-21 他　**切り合い関係**；SG11、SK41・55・68、SD35・47 を切る

時期；古代？　**主軸方向**；N-67°-W

規模；長さ (27.20)m ×幅 0.47m ×深さ 0.08m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－

出土遺物；須恵器坏身

所見；Ⅷ BW 区の西南端からⅧ AE 区の中央部にかけて斜めに延びる東西溝でグリッドは C9-7-25、C9-8-21 他に跨がる。東側は調査区外へと続き、西側は途切れるものの SD88 に繋がる可能性が考えられる。接するほとんどの遺構を切っている。軸方向は N-67°-W で断面は皿状を呈する。調

査区内での規模は長さ 27.20m、幅 47㎝、深さ 8㎝と比較的浅い。遺物は細片が多く、所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。

出土遺物 (図 7-7 №.1 、2)

№.1、２は須恵器坏身である。１は口径 14.4㎝、器高 4.1㎝、底径 6.2㎝を測る。口縁部が外反気味で受け部は短く内傾する。２の受け部も短く内傾する。内面底中央が凹み、外面にロクロ目を残す。

SD47・73(図 7-3、7)

調査区；Ⅷ AE・BW　**グリッド**；C9-3-21 他

切り合い関係；ST23・25、SG2・3、SX24、SD48・69 を切る、SK56、SD46 に切られる

時期；古代　**主軸方向**；N-10° -W ～ N-73° -E、N-64° -W ～ N-82° -W

規模；SD47 長さ (28.15)m ×幅 0.5m ×深さ 0.25m　SD73 長さ (24.0)m ×幅 0.6m ×深さ 0.24m

断面形状；U 字状　**覆土**；黒褐色粘質土、暗褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏、土師器坏、高台付碗、瓦器、把手

所見；Ⅷ BW 区の西北端から屈曲してⅧ AE 区の西北端に延びる溝でグリッドは C9-3-21、C9-3-22 他に跨がる。両溝とも片側が調査区外へと続き、もう片側が一定の距離を置き向かい合うように調査区内で収束している。SK56、SD46 に切られる以外、接するほとんどの遺構を切っている。軸方向は曲がる度に変わり、SD47 は N-10° -W から N-73° -E、SD73 は N-64° -W から N-82° -W に傾く。断面は U 字状を呈する。調査区内での規模は、SD47 が長さ 28.15m、幅 50㎝、深さ 25㎝、SD73 は長さ 24.0m、幅 60㎝、深さ 24㎝とほぼ同規模である。覆土は黒褐色粘質土に遺物、礫を含み、下層の暗褐色粘質土に黄褐色土が多量に混じる。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられる。完全には繋がっておらず、ほぼ同規模であることや検出状況からして区画溝である可能性が考えられる。

出土遺物 (図 7-7SD47 №.1 、SD73 №.1 ～ 9)

SD47 №.1 は須恵器坏である。高台付きで口径 13㎝を測る。体部は直線的に外傾する。

SD73 №.1 は瓦器鉢の口縁部である。口径 18㎝を測る。口縁部がくびれ、底部を欠損する。鉄鉢形で８世紀から９世紀のものと考えられる。

２から６は土師器である。２から４は高台付碗で２は口径 14.4㎝を測る。整形は外面がロクロ目、内面はナデを施す。９世紀末から 10 世紀前半のものと考えられる。３は口径 17㎝を測り、腰部に丸味を持つ。４は底部破片で整形は内外面共に回転ナデを施す。５は坏である。整形は外面がロクロ目、内面はナデを施す。底部は回転ヘラ切りである。６は甕の口縁部である。口径 21.2㎝を測り、口縁部は外反する。整形は内外面共にハケ、ナデを施す。

７は甑の把手である。整形は指頭、ナデを施す。

８は瓦器の碗である。口径 12.6㎝を測り、底部を欠損する。

９は搬入品で甕の口縁部である。口縁部は外反し、整形は外面がハケ、ナデ、内面は指頭、ナデを施す。

SD67(図 7-3)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-7-8 他　**切り合い関係**；ST26、SD71 を切る

時期；古代？　**主軸方向**；N-71°-W
規模；長さ(14.8)m ×幅 0.5m ×深さ 0.12m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－
出土遺物；－
所見；Ⅷ AE 区の北東に位置する東西溝でグリッドは C9-7-8、C9-7-9 他に跨がる。古墳時代後期の ST26、SD71 を切り、規模は異なるが SD25 と平行するように位置している。軸方向は N-71°-W で断面は皿状を呈する。調査区内での規模は長さ 14.8m、幅 50cm、深さ 12cmを測る。遺物は細片が多く、須恵器片等も出土しているが掲載できるものはなかった。所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。

SD81(図 7-3、8)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-12-11 他　**切り合い関係**；ST32、SX29・30 を切る
時期；古代？　**主軸方向**；N-80°-W
規模；長さ(5.06)m ×幅 0.40m ×深さ 0.15m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－
出土遺物；土師器坏
所見；Ⅷ AE 区の南端中央部に位置する東西溝でグリッドは C9-11-15、C9-12-11 他に跨がる。弥生時代後期後半の ST32、古代の SX29、古墳末の SX30 を切っている。軸方向は N-80°-W で断面は皿状を呈する。規模は長さ 5.06m、幅 40cm、深さ 15cmを測る。遺物は少なく、所属時期は古代の可能性が考えられるものの判然としない。畝の可能性も考えられる。
出土遺物(図 7-8 №1)
　№1 は土師器坏である。口径 12.6cm、器高 4.3cm、底径 6.5cmを測る。内外面共にロクロナデを施す。底部は回転糸切りで内面底には回転渦巻き痕を残す。

SD84・86(図 7-3、8)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-24 他　**切り合い関係**；SK62 に切られる
時期；古代？　**主軸方向**；N-20°-E
規模；SD84 長さ(16.0)m ×幅 0.78m ×深さ 0.08m　SD86 長さ(16.60)m ×幅 0.25m ×深さ 0.06m
断面形状；皿状　**覆土**；－
出土遺物；土師器坏
所見；Ⅷ AE 区の中央部西寄りに位置する南北溝でグリッドは C9-6-24、C9-11-4 他に跨がる。同一方向に平行して延びており、西側には古墳時代後期後半の ST34、東側には SX22、SX23 他や SD86 に隣接するように SD93 が位置している。SK62 に切られている。軸方向は N-20°-E で断面は皿状を呈する。規模は SD84 が長さ 16.0m、幅 78cm、深さ 8cm、SD86 は長さ 16.6m、幅 25cm、深さ 6cmと幅以外はほぼ同規模である。所属時期は古代の可能性が考えられるものの判然としない。区画溝の可能性が考えられる。
出土遺物(図 7-8SD84 №1 ～ 3、SD86 №1)
　SD84 №1 から 3 は土師器である。1 は高台付碗の底部で底径 6.1cmを測る。整形は内外面共にナデを施す。2 は坏の底部で底径 8.2cmを測る。底部は回転糸切りである。3 は甕か羽釜の口縁部で口径 16.2cmを測る。顎部は欠損し、内外面共にナデを施す。

SD86 №1 は土師器坏である。口径 13.0cm、器高 3.1cm、底径 8.4cmを測る。整形は内外面共に回転ナデを施し、底部は回転ヘラ切りである。

SD87(図 7-3、8)

調査区；Ⅷ AE　**グリッド**；C9-6-9 他　**切り合い関係**；SX26 を切る
時期；古代？　**主軸方向**；N-19° -W
規模；長さ (1.60)m ×幅 0.22m ×深さ 0.08m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－
出土遺物；須恵器坏身
所見；Ⅷ AE 区の北端中央寄りに位置する南北溝でグリッドは C9-6-9、C9-6-14 に跨がる。SX26 を切り、北側は撹乱により切られており、調査区外へ延びているかは不明である。軸方向は N-19° -W で断面は皿状を呈する。規模は長さ 1.6m、幅 22cm、深さ 8cmと比較的浅い。遺物は少なく、所属時期は古代の可能性が考えられるものの判然としない。畝の可能性も考えられる。
出土遺物 (図 7-8 №1)
№1 は須恵器坏身である。口径 13.4cm、器高 2.6cm、底径 6.4cmを測る。整形は内外面共に回転ナデを施す。

SD91(図 7-3、8)

調査区；Ⅷ AW・AE　**グリッド**；C8-15-18 他
切り合い関係；ST35・41・46、SK102、SD97・98・102 を切る
時期；古代？　**主軸方向**；N-33° -E ～ N-81° -W
規模；長さ (27.22)m ×幅 0.57m ×深さ 0.16m　**断面形状**；皿状　**覆土**；黒褐色粘質土
出土遺物；土師器甕、鉄製品
所見；Ⅷ AE 区からⅧ AW 区にかけて屈曲して延びる溝でグリッドは C8-15-13、C8-15-18 他に跨がる。接するほとんどの遺構を切っている。軸方向は屈曲する為 N-33° -E から N-81° -W に傾く。断面は皿状を呈する。規模は 27.22m、幅 57cm、深さ 16cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で粒状黄褐色小ブロックを含む。遺物は少なく、所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。
出土遺物 (図 7-8 №1 、2)
№1 は土師器甕の口縁部である。口径 19.6cmを測り、口縁部は外反する。整形は外面がハケ、指頭、内面はハケを施す。
２は鉄片で長さ 4.6cm、幅 1.8cm、厚さ 1.2cmを測り、重さ 12g を量る。釘か。

SD94(図 7-3)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-20 他　**切り合い関係**；ST49 を切る、SD99 に切られる
時期；古代？　**主軸方向**；N-72° -W
規模；長さ 4.24m ×幅 0.43m ×深さ 0.08m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－
出土遺物；－
所見；Ⅷ AW 区の北東に位置する東西溝でグリッドは C8-10-20、C9-6-16 他に跨がる。弥生時代後期末の ST49 を切り、東端を SD99 に切られている。軸方向は N-72° -W で断面は皿状を呈する。

規模は長さ4.24m、幅43cm、深さ8cmと比較的浅い。遺物は少なく細片のみで掲載できるものはなかった。写真では弥生土器壺の口縁部が出土しているが、混入と考えられる。所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。南に同様に延びるSDがみられることから畝の可能性も考えられる。

SD97・98(図7-4、8)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-14-5 他

切り合い関係；ST45・46、SD103・104 を切る、SD91・99 に切られる

時期；古代　**主軸方向**；N-64° -W ～ N-79° -W、N-70° -W ～ N-82° -W

規模；SD97 長さ (25.0)m ×幅 0.44m ×深さ 0.07m　SD98 長さ (25.45)m ×幅 0.5m ×深さ 0.1m

断面形状；皿状　**覆土**；黒褐色粘質土、暗褐色粘質土

出土遺物；土師器皿、高台付碗、緑釉陶器

所見；Ⅷ AW 区の中央を横切る東西溝でグリッドは C8-14-5、C8-14-10 他に跨がる。弥生時代後期末の ST45、古墳時代後期の ST46、SD103、SD104 を切り、SD91、SD99 に切られている。途切れていたため実際に確認はできていないが、おそらく SD100 にも切られているものと考えられる。両溝とも西側は調査区外へと続き、東側は調査区内で収束している。途中屈曲したり切れ切れになってはいるが同一の溝が平行して構築されているものだと考える。軸方向はほぼ同じ傾きで断面は皿状である。調査区内での規模はSD97が長さ25.0m、幅44cm、深さ7cm、SD98は長さ25.45m、幅50cm、深さ10cmとほぼ同規模である。覆土は黒褐色粘質土に小礫、遺物を含み、暗褐色粘質土に褐色土が混じる。所属時期は出土遺物からして古代の可能性が考えられる。

出土遺物 (図 7-8SD97 №1 、2、SD98 №1 、2)

SD97 №1、２は緑釉陶器の口縁部である。器肉は薄い。１は内外面に緑色の釉が掛かる。２は口縁部が僅かにくびれ、内外面に淡緑色の釉が掛かる。

SD98 №1、２は土師器である。１は小皿で口径 8.2cm、器高 1.5cm、底径 5.5cmを測る。底部は回転ヘラ切りである。２は高台付碗の底部で底径 6.6cmを測る。

SD99・100(図7-4、8)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-15 他

切り合い関係；ST44・45・48・49、SB13・14・15・16、SX33・35・36、SK80・81・91・99、SD94・97・106 を切る、SD104 に切られる

時期；古代　**主軸方向**；N-43° -E

規模；SD99 長さ (40.3)m ×幅 0.8m ×深さ 0.38m　SD100 長さ (37.05)m ×幅 0.38m ×深さ 0.1m

断面形状；U 字状、皿状　**覆土**；暗褐色土

出土遺物；須恵器壺、緑釉陶器碗、白磁碗、鉄製品

所見；Ⅷ AW 区の中央やや西寄りに位置する南北溝でグリッドは C8-10-15、C8-10-20 他に跨がる。北東端から南西端に平行して延びており、両端とも調査区外へと続いている。接する殆どの遺構を切り、SD104 に切られている。軸方向は N-43° -E である。断面は U 字状、皿状を呈する。調査区内での規模は SD99 が長さ 40.3m、幅 80cm、深さ 38cm、SD100 は長さ 37.05m、幅 38cm、深さ 10cm と長さ以外は半分程しかない。覆土は暗褐色土を主体とし褐色、黄褐色ブロックが混じり、上層で

は遺物、下層では炭化物を含む。所属時期は古代の可能性が考えられる。一定の幅を保って延びている為、道である可能性も考えられる。

出土遺物 (図 7-8SD99 №.1 ～ 6)

SD99 №.1 は須恵器壺の底部破片である。二重高台のような付け高台で体部は立ち上がる。底径 9.1 cmを測り、内面にロクロ目を残す。

２は土師器甕の口縁部である。口径 31.2cmを測り、口縁部は緩やかに外傾する。整形は外面がハケ、指頭、内面はハケを施す。

３は緑釉陶器碗の口縁部である。口径 14.4cm、器高 2.3cmを測る。

４、５は白磁碗である。４は底部で５は口縁部である。玉縁口縁部を持ち、口径 15.2cmを測る。

６は鉄片で重さ 56g を量る。

SD104(図 7-4、8)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-10-21 他　**切り合い関係**；SX33、SD100 を切る、SD97・98 に切られる

時期；古代？　**主軸方向**；N-9° -E　**規模**；長さ (13.35)m ×幅 0.45m ×深さ 0.17m

断面形状；皿状　　**覆土**；暗褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土

出土遺物；須恵器坏蓋

所見；Ⅷ AW 区の西に位置する南北溝でグリッドは C8-10-21、C8-15-1 他に跨がる。SX33、SD100 を切り、SD97、SD98 に切られている。軸方向は N-9° -E で断面は皿状を呈する。規模は長さ 13.35m、幅 45cm、深さ 17cmを測る。覆土は上層に暗褐色粘質土、下層ににぶい黄褐色粘質土が堆積する。所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。

出土遺物 (図 7-8 №.1)

№.1 は須恵器坏蓋である。小型で口径 9.2cm、器高 2.6cmを測る。天井部には鈕が付いていたと考えられる。内面にロクロ目を残す。

SD108(図 7-4)

調査区；Ⅷ AW　**グリッド**；C8-15-13 他　**切り合い関係**；ST41・43、SK94 を切る

時期；古代？　**主軸方向**；N-20° -E ～ N-40° -E

規模；長さ (12.02)m ×幅 0.4m ×深さ 0.1m　**断面形状**；皿状　**覆土**；－

出土遺物；－

所見；Ⅷ AW 区の南中央部に位置する南北溝でグリッドは C8-15-13、C8-15-18 他に跨がる。弥生時代後期末の ST41、古墳時代後期の ST43、SK94 を切っている。南側は調査区外へと続き、北側は調査区内で収束している。やや曲がる為、軸方向は N-20° -E から N-40° -E に傾く。断面は皿状を呈する。調査区内での規模は長さ 12.02m、幅 40cm、深さ 10cmを測る。遺物は少なく細片のみで掲載できるものはなかった。所属時期は古代の可能性があるものの判然としない。

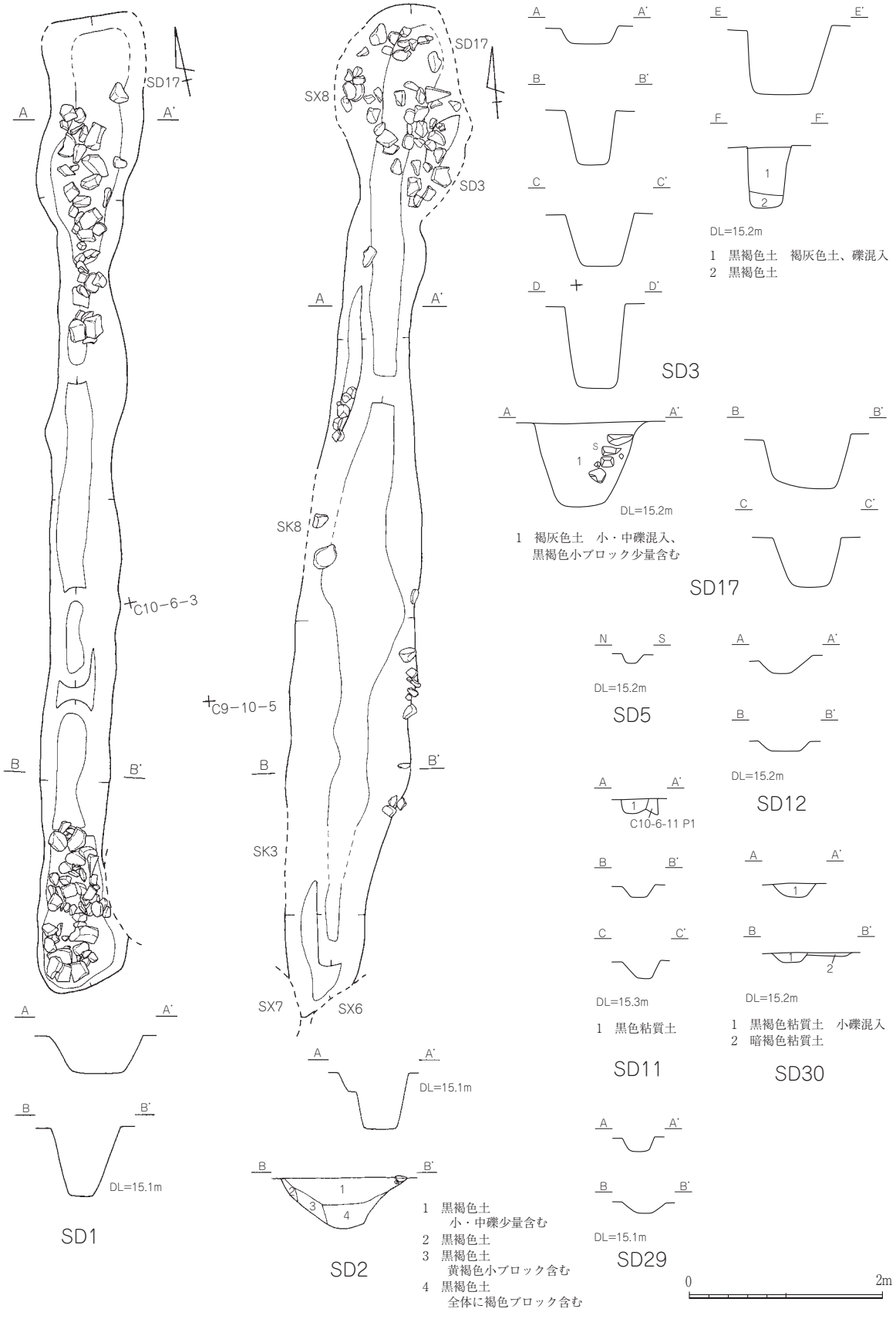

SD17
A
A'
B
B'
C10-6-3
DL=15.1m
SD1
SX8
SD3
SK8
C9-10-5
SK3
SX7
SX6
DL=15.1m
1 黒褐色土
小・中礫少量含む
2 黒褐色土
3 黒褐色土
黄褐色小ブロック含む
4 黒褐色土
全体に褐色ブロック含む
SD2
C
C'
D
D'
SD3
E
E'
F
F'
DL=15.2m
1 黒褐色土 褐灰色土、礫混入
2 黒褐色土
S
1 褐灰色土 小・中礫混入、
黒褐色小ブロック少量含む
SD17
N
S
SD5
C10-6-11 P1
SD12
DL=15.3m
1 黒色粘質土
SD11
SD29
1 黒褐色粘質土 小礫混入
2 暗褐色粘質土
SD30
0
2m

図 7-2　溝状遺構図 (1)

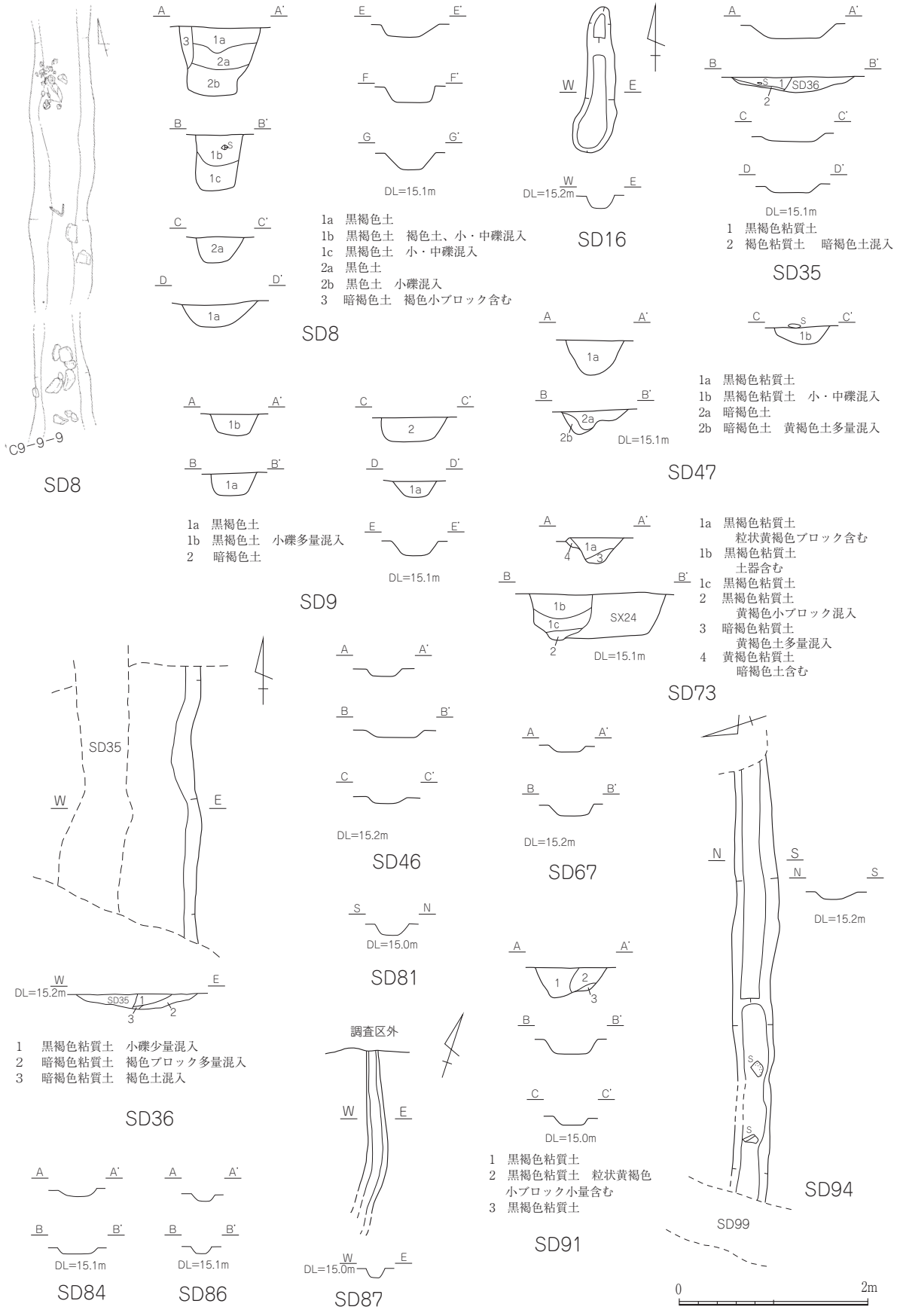

SD8
1a 黒褐色土
1b 黒褐色土　褐色土、小・中礫混入
1c 黒褐色土　小・中礫混入
2a 黒色土
2b 黒色土　小礫混入
3 暗褐色土　褐色小ブロック含む
DL=15.1m
SD16
DL=15.2m
SD35
1 黒褐色粘質土
2 褐色粘質土　暗褐色土混入
DL=15.1m
SD47
1a 黒褐色粘質土
1b 黒褐色粘質土　小・中礫混入
2a 暗褐色土
2b 暗褐色土　黄褐色土多量混入
DL=15.1m
SD9
1a 黒褐色土
1b 黒褐色土　小礫多量混入
2 暗褐色土
DL=15.1m
SD73
1a 黒褐色粘質土
粒状黄褐色ブロック含む
1b 黒褐色粘質土
土器含む
1c 黒褐色粘質土
2 黒褐色粘質土
黄褐色小ブロック混入
3 暗褐色粘質土
黄褐色土多量混入
4 黄褐色粘質土
暗褐色土含む
SD36
1 黒褐色粘質土　小礫少量混入
2 暗褐色粘質土　褐色ブロック多量混入
3 暗褐色粘質土　褐色土混入
DL=15.2m
SD46
DL=15.2m
SD67
DL=15.2m
SD81
DL=15.0m
SD91
1 黒褐色粘質土
2 黒褐色粘質土　粒状黄褐色
小ブロック小量含む
3 黒褐色粘質土
DL=15.0m
SD94
SD99
SD84
DL=15.1m
SD86
DL=15.1m
SD87
調査区外
DL=15.0m
0
2m

図 7-3　溝状遺構図 (2)

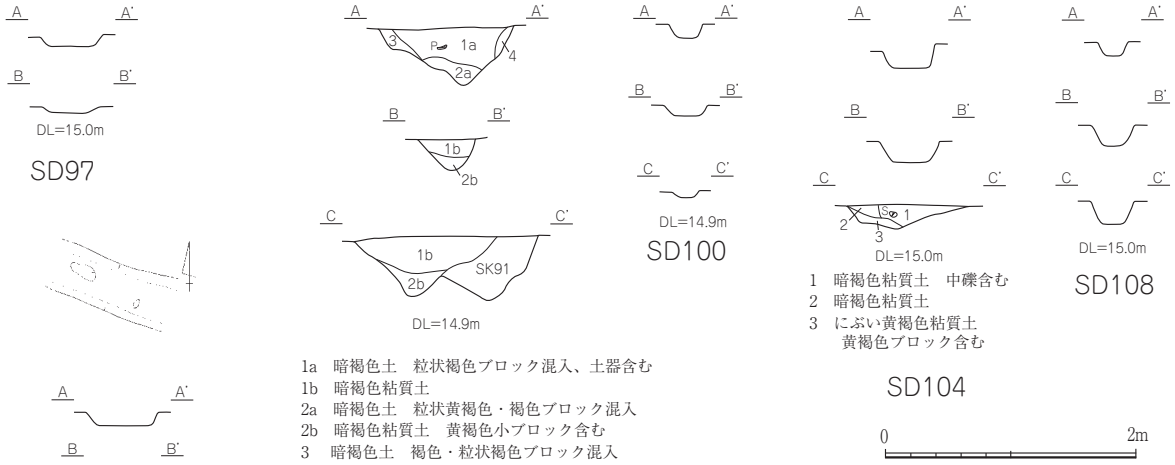


図 7-4　溝状遺構図 (3)

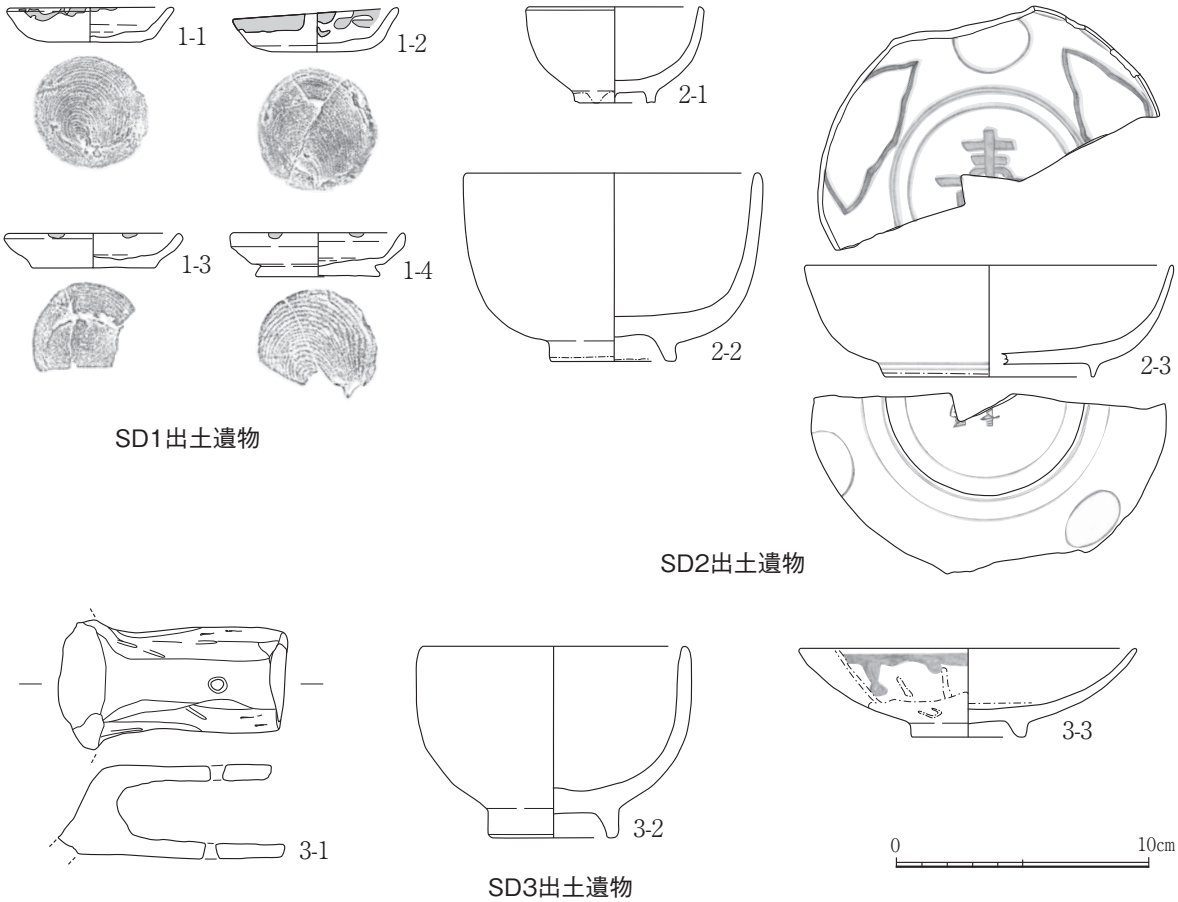


図 7-5　溝状遺構出土遺物実測図 (1)

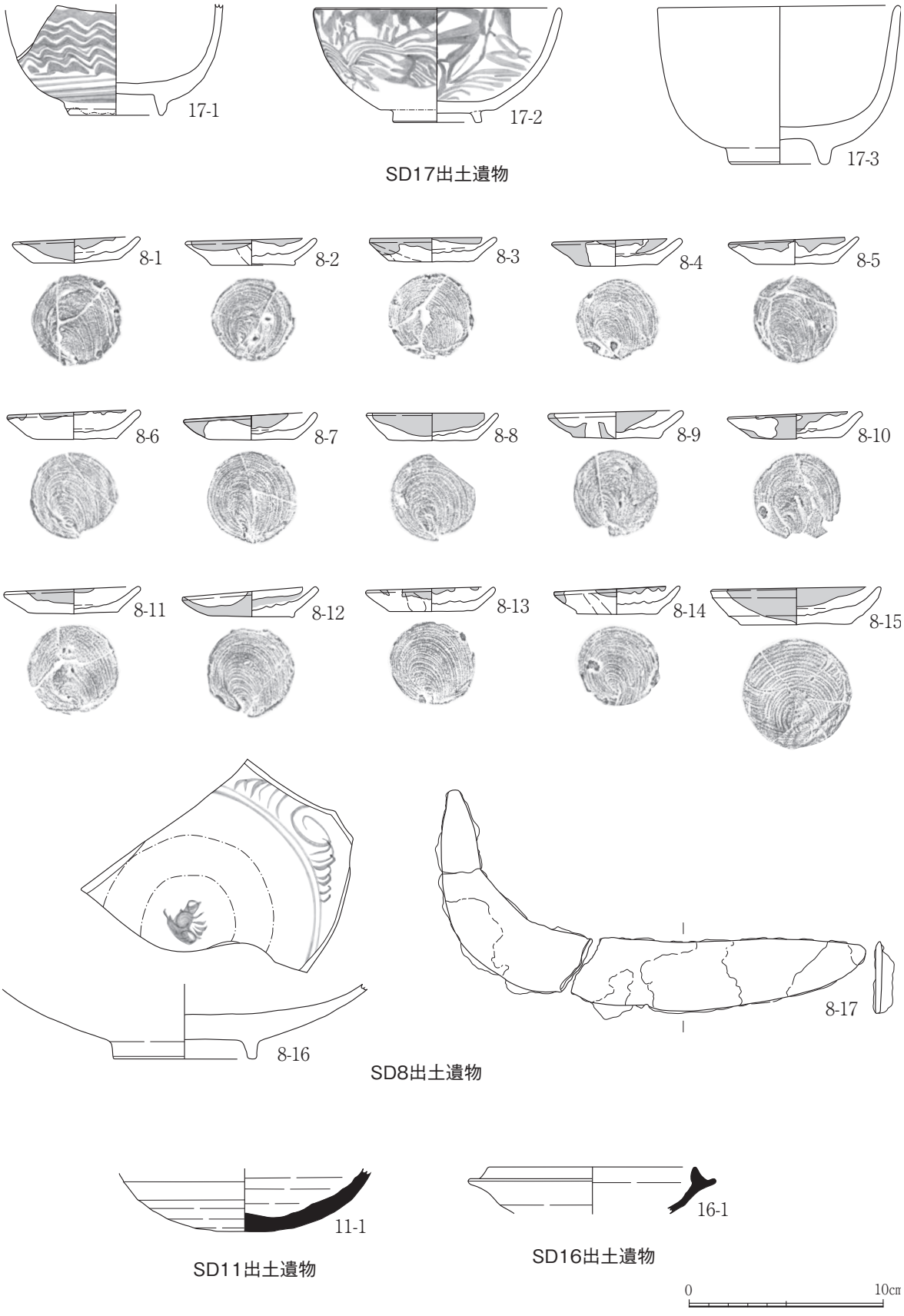


図 7-6　溝状遺構出土遺物実測図 (2)

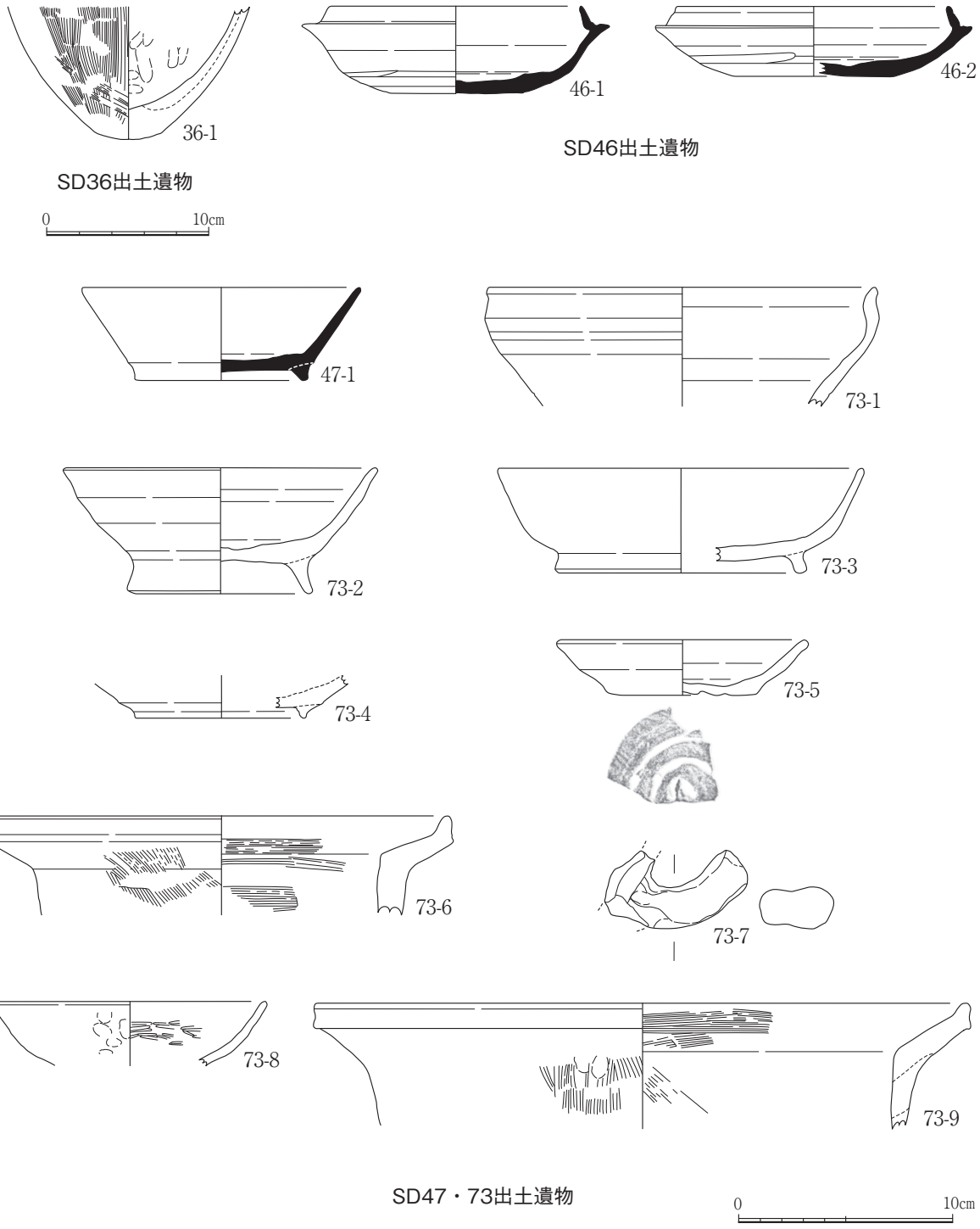


図 7-7　溝状遺構出土遺物実測図 (3)

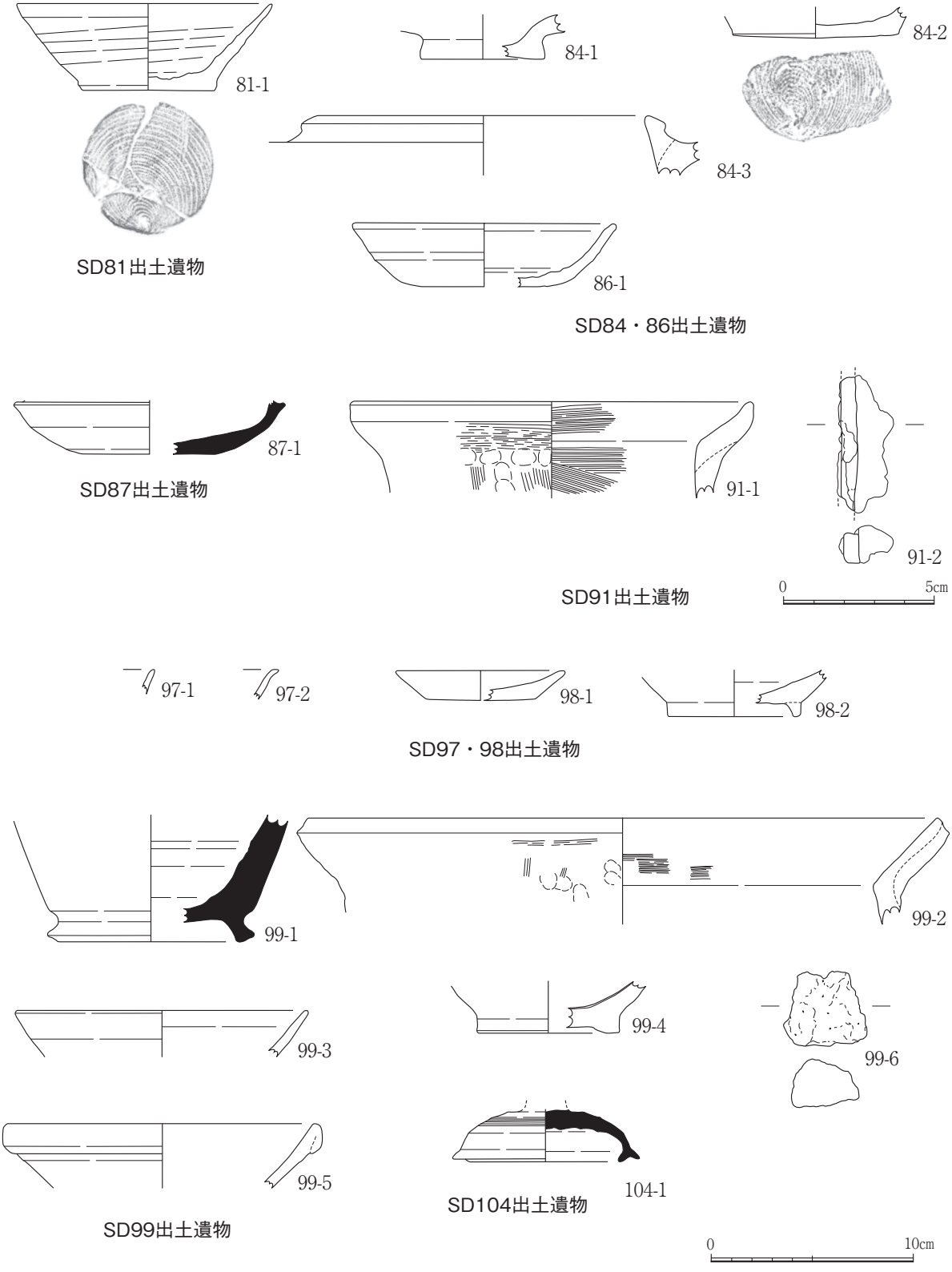


図 7-8　溝状遺構出土遺物実測図 (4)

表 7-2　溝状遺構遺物観察表

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 7-5	SD1	1	土器	灯明皿	6.6	1.4	4.9	完形品、底部回転糸切り、内面底中央凹む、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-5	SD1	2	土器	灯明皿	6.6	1.8	4.5	底部回転糸切り、内面底中央若干凹む、口縁内面煤付着	砂粒微量
図 7-5	SD1	3	土器	灯明皿	6.7	1.4	4.8	底部回転糸切り、やや突底気味	砂粒微量
図 7-5	SD1	4	土器	灯明皿	(6.8)	1.8	4.8	底部回転糸切り、片側突底気味	砂粒微量
図 7-5	SD2	1	陶磁器	小碗	(6.7)	3.8	3.1	灰釉、貫入、高台露胎	灰黄色、精良
図 7-5	SD2	2	陶磁器	碗	11.6	7.5	4.8	緑釉、貫入、畳付釉ハギ	灰色、精良
図 7-5	SD2	3	磁器	染付け皿	14.5	4.4	8.3	貫入、内外面文字	灰白色、精良
図 7-5	SD3	1	土器	把手				中空、透かし円孔、焙烙か	砂粒微量
図 7-5	SD3	2	磁器	碗	(10.4)	7.6	4.9	灰釉、貫入、畳付釉ハギ	灰黄色、精良
図 7-5	SD3	3	陶磁器	皿	13.2	3.5	4.5	見込みに蛇の目釉剥ぎを施す、外面灰釉・露胎、内面緑釉	灰色
図 7-6	SD17	1	陶器	碗		(5.7)	4.8	貫入、畳付釉ハギ、外面櫛刷毛目、内面打ち刷毛目	褐灰色、精良
図 7-6	SD17	2	陶器	碗	12.6	5.9	4.5	貫入、高台露胎	黄白色、精良
図 7-6	SD17	3	陶器	碗	12.3	8.2	4.9	貫入、畳付釉ハギ	黄白色、精良
図 7-6	SD8	1	土器	灯明皿	6.3	1.4	4.4	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	2	土器	灯明皿	6.4	1.4	4.3	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	3	土器	灯明皿	6.4	1.2	4.4	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	4	土器	灯明皿	6.5	1.4	4.2	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	5	土器	灯明皿	6.5	1.4	4.4	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	6	土器	灯明皿	6.7	1.5	4.4	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	7	土器	灯明皿	6.7	1.4	4.5	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	8	土器	灯明皿	6.7	1.6	4.6	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	9	土器	灯明皿	6.7	1.4	4.4	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒少量
図 7-6	SD8	10	土器	灯明皿	6.8	1.4	4.6	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	11	土器	灯明皿	6.8	1.4	4.7	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	12	土器	灯明皿	6.9	1.6	4.5	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	13	土器	灯明皿	6.5	1.3	4.4	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	14	土器	灯明皿	6.5	1.5	4.2	完形品、底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面回転ナデ、口縁煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	15	土器	灯明皿	8.4	2.0	5.7	底部回転糸切り、内外面回転ナデ、煤付着	砂粒微量
図 7-6	SD8	16	磁器	染付け皿・底部		(3.8)	7.3	見込みに蛇の目釉剥ぎを施す、釉剥ぎ部分に重ね焼きによる高台痕が残る、内面草花紋	白色、精良
図 7-6	SD8	17	鉄製品	刃	幅 3.5	厚 0.3	重 (122)	鎌？	鉄
図 7-6	SD11	1	須恵器	坏		(3.2)	(5.2)	内外面ロクロナデ、内面ロクロ目	白色鉱物粒少量
図 7-6	SD16	1	須恵器	坏	(12.6)	(2.4)		口縁外反気味、受け部短く内傾、内外面ナデ	砂粒多量
図 7-7	SD36	1	弥生土器	甕・底部		(8.3)	(4.2)	丸底気味？、外面ハケ、内面ナデ	砂粒・小礫微量
図 7-7	SD46	1	須恵器	坏	(14.4)	4.1	(6.2)	口縁外反気味、受け部短く内傾、内面底中央凹む、内外面回転ナデ	精良？、白色鉱物粒
図 7-7	SD46	2	須恵器	坏	(14.8)	3.3	(7.4)	受け部短く内傾、底部回転ヘラ切り、内面底中央凹む、外面ロクロ目、内面回転ナデ	精良？、白色鉱物粒少量
図 7-7	SD47	1	須恵器	坏	(13.0)	4.4	(8.0)	台付き、体部直線的に開く、内外面ナデ	白色鉱物粒少量
図 7-7	SD73	1	瓦器	鉢	(18.0)	(5.6)		鉄鉢形、口縁くびれる、内外面回転ナデ	白色鉱物粒微量
図 7-7	SD73	2	土師器	高台付碗	(14.4)	5.9	8.6	台部僅かに開く、底部回転ヘラ切り、外面ロクロ目、内面ナデ	砂粒少量
図 7-7	SD73	3	土師器	高台付碗	(17.0)	4.9	(11.4)	台部僅かに開く、腰部丸味、内外面ナデ	砂粒少量

図版番号	遺構名	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、重 (g)	特徴	胎土、材質
図 7-7	SD73	4	土師器	高台付碗・底部		(2.0)	(7.8)	内外面回転ナデ	小礫・砂粒少量
図 7-7	SD73	5	土師器	坏	(11.4)	2.6	(7.1)	底部回転ヘラ切り、外面ロクロ目、内面回転ナデ	砂粒少量
図 7-7	SD73	6	土師器	甕？	(21.2)	(4.6)		口縁外反、内外面ハケ、ナデ	砂粒多量
図 7-7	SD73	7	土師器	甑・把手				内外面指頭、ナデ	砂粒少量
図 7-7	SD73	8	瓦器	碗？	(12.6)	(3.0)		外面指頭、内面ミガキ	砂粒少量
図 7-7	SD73	9	土師器	甕	(30.4)	(5.5)		搬入品、口縁外反、外面ハケ、ナデ、内面指頭、ナデ	砂粒多量
図 7-8	SD81	1	土師器	坏	(12.6)	4.3	6.5	底部回転糸切り、内面底回転渦巻き痕、内外面ロクロナデ	砂粒微量
図 7-8	SD84	1	土師器	高台付碗・底部		(2.2)	(6.1)	摩耗、内外面ナデ	砂粒多量
図 7-8	SD84	2	土師器	坏・底部		(1.5)	(8.2)	底部回転糸切り、内面回転ナデ？	砂粒微量
図 7-8	SD84	3	土師器	羽釜？	(16.2)	(3.0)		甕か羽釜？、内外面ナデ	砂粒微量
図 7-8	SD86	1	土師器	坏	(13.0)	3.1	(8.4)	底部回転ヘラ切り、内外面回転ナデ	砂粒微量
図 7-8	SD87	1	須恵器	坏身	(13.4)	2.6	(6.4)	内外面回転ナデ	砂粒微量
図 7-8	SD91	1	土師器	甕	(19.6)	(4.8)		外面ハケ、指頭、内面ハケ	砂粒多量
図 7-8	SD91	2	鉄製品		長 4.6	幅 1.8 厚 1.2	重 12.0	釘？、断面長方形	鉄
図 7-8	SD97	1	緑釉陶器	口縁部		(1.3)		緑釉、貫入、器肉薄い	精良
図 7-8	SD97	2	緑釉陶器	口縁部		(1.8)		淡緑色の釉、口縁僅かにくびれる、器肉薄い	精良
図 7-8	SD98	1	土師器	皿	(8.2)	1.5	(5.5)	底部回転ヘラ切り、摩耗の為整形不明	精良
図 7-8	SD98	2	土師器	高台付碗・底部		(2.3)	(6.6)	摩耗	砂粒少量
図 7-8	SD99	1	須恵器	高台付壺・底部		(6.3)	(9.1)	二重高台？、体部立ち上がる、外面回転ナデ、内面ロクロ目	砂粒微量
図 7-8	SD99	2	土師器	甕	(31.2)	(5.9)		口縁緩やかに外傾、外面ハケ、指頭、内面ハケ	砂粒多量
図 7-8	SD99	3	緑釉陶器	碗？	14.4	(2.3)			精良
図 7-8	SD99	4	陶磁器	白磁碗・底部		(2.6)	7.0	外面露胎、内面灰釉、貫入	灰白色、精良
図 7-8	SD99	5	陶磁器	白磁碗	(15.2)	(3.2)		灰釉、玉縁口縁	灰白色、精良
図 7-8	SD99	6	鉄製品				重 56		鉄
図 7-8	SD104	1	須恵器	坏蓋	(9.2)	(2.6)		小型、内外面ロクロナデ	白色鉱物粒

第８節　柱穴跡

柱穴跡は膨大な数に上る。概数で 2,500 基程検出した。調査方法は検出時に覆土分類を行い、次いで半截を行い、特に遺物等の際立ったものが出土しない限り、土層観察を行った後に完掘を行った。遺構名は小グリッド単位で付した。例えば C8-10-11 グリッドで検出した柱穴跡は柱穴跡の略記号 P を付けて、C8-10-11P1 と言う具合にした。但し、柱穴跡は膨大な数に上る為、全ての柱穴跡に遺構名を付した訳ではなく、遺物の出土した柱穴跡のみに限り、名を付した。

大型方形、大型円形柱穴跡は掘立柱建物跡になるものの、他の小柱穴跡は余りにも多すぎて、近世の家屋跡以外の掘立柱建物跡、柵列等の構築物を比定することができなかった。

時期については、明確な遺物が出土したもの以外は混入品の弥生土器の細片ばかりで、時期比定も困難なものがほとんどである。時期的には本遺跡の存続期間と重複して、弥生時代から近世にかけてのものである。弥生時代と判断できるものは極めて少ない。と同時に弥生時代の掘立柱建物跡も特定することもできなかった。

古墳時代については大型の掘立柱建物跡は特定できているものの、小柱穴跡での掘立柱建物跡等は未検出である。古代については調査区西よりの SX 群の際に極めて多く、また SD73 に沿って多くの柱穴跡が穿たれている。これらの柱穴群は並びを明確にし得なかった。SX 群は古墳時代終末から古代の前半期のものと考えられるところから、これらの柱穴群も同時期の可能性が高い。

近世については調査区東側区域で SD3、８、９、13 に囲まれた中に SB7 が近世の家屋の一部と考えられ、他の柱穴群の一部も屋敷跡に伴う可能性がある。しかし、現場では SB7 以外に SB6 がかろうじて掘立柱建物跡と認定できただけである。

多くの柱穴跡を検出できたにも関わらず、性格、機能は明確にし得なかった。ここでは、特徴的な遺物のみを取り上げる。

C8-10-22P1（図 8-3 №1）

１は須恵器坏蓋である。内面に端部からやや離れてかえりがつく。天井部はヘラケズリである。口径 14㎝、器高 2.5㎝を測る。

C8-14-5P4（図 8-1、3 №1）

１は須恵器高坏の脚部である。坏部、脚部裾も欠損する。胎土に白色鉱物粒を多量に含む。

C8-14-5P5（図 8-1、3 №1）

１は土師器円盤状高台付碗である。口縁部は欠損する。底部はベタ底で円盤状を呈するやや高い底部である。底部切り離しは摩耗しているものの回転糸切りか。

C8-14-10P3（図 8-3 №1）

１は土師器坏である。口径 12㎝、器高 4.5㎝、底径 6.8㎝を測る。器高のやや高い深みのある坏である。体部は外傾気味に立ち上がる。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

C8-14-10P4(図 8-3 №1)

1は土師器甕である。口径 23.6cmを測る。口縁部は大きく開き、口唇部はつまみ上げる。整形は内外面共にハケである。外面に煤が付着する。

C8-14-14P1(図 8-3 №1、2)

1は内黒土器碗である。内面は黒色処理を施す。口縁部は欠損する。底部は小振りな高台が付く。高台径は 7.6cmである。

2は土師器高台付碗である。口縁部は欠損する。やや高めの高台が付く。高台径 9.4cmを測る。破損部は摩耗する。

C8-14-15P3(図 8-1、3 №1)

1は土師器皿である。口径 12cm、器高 1.6cm、底径 8.4cmである。口縁は大きく開く。底部切り離しは回転ヘラ切りである。内面及び外面上半はロクロナデである。

C8-15-5P1(図 8-3 №1)

1は土師器坏である。口径 12cm、器高 4.6cm、底径 6.7cmを測る。器高のやや高い深い坏である。体部は外傾気味に開く。底部切り離しは回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。

C8-15-7P6(図 8-3 №1)

1は弥生土器甕である。口径 14cmを測る。３つの部分片になって出土しており、２つは接合するものの、もう１点は接合しない。口縁部は強く屈曲し、口唇部は小さく面をなす。口唇部端部を僅かに摘み上げる。頸部は短く、なだらかな肩部となる。胴部下半は欠損する。整形は外面がタテハケ、内面口縁はヨコハケ、内面胴部は強い指ナデである。器肉は薄く、胎土には金雲母、微白色鉱物粒を含む。搬入品である。

C8-15-12P8(図 8-3 №1)

1は砂岩製の叩石である。扁平な楕円礫で長さ 9.1cm、厚さ 2.7cm、重さ 280g である。両端部を顕著に敲打痕が残る。一端部は面取り状に磨り減る。側面全周にも敲打痕が残り、線状を呈する箇所もある。表面の中央部にも小さな敲打痕が残る。

C8-15-14P3(図 8-1、3 №1)

1は弥生土器鉢である。小型の鉢で口径 10.1cm、器高 5.7cm、底径 3.3cmを測る。体部は丸味を持ち、直線気味に立ち上がる。底部は丸味のある平底である。内面の調整は粗いハケ、外面はタタキの後ナデである。

C9-3-23P6(図 8-1、3 №1)

1は炻器碗である。口径 15.0cm、器高 5.1cm、底径 5.4cmを測る。体部は丸味を持ち開く。口唇部は素口縁である。底部には小さな高台が付く。整形は内面が丁寧なナデ、口縁部外面は強いヨコナ

デ、体部は指頭圧痕を顕著に残す。色調は黒灰色を呈せず、赤褐色、明褐色である。胎土は微砂粒と極めて微細な白色鉱物粒 (石英か) を微量含む。軟質である。

C9-4-22P1(図 8-1、3 №. 1)

1 は須恵器坏である。口径 11.4cm、器高 3.0cm、底径 6.2cmの小型の坏で、受け部を有する。胎土には白色鉱物粒を有する。

C9-6-12P7(図 8-3 №. 1)

1 は土師器台付碗の底部破片である。高台径 9.0cmを測る。僅かに高い高台が付く。体部は開く。内面は丁寧なナデ、外面は明瞭なロクロ目を残す。

C9-6-13P1(図 8-1、3 №. 1)

1 は須恵器高坏である。坏部と脚部の裾端部は欠損する。胎土に白色鉱物粒を含む。

C9-6-13P3(図 8-3 №. 1)

1 は土師器高坏の脚部と考えられる。坏部は大部分が欠損、また脚部裾も欠損する。脚部は回転ナデと考えられる。胎土は精良で微白色鉱物粒を極微量含む。色調は赤褐色を呈する。

C9-6-16P11(図 8-1、3 №. 1)

1 は土師器の足高高台碗である。高台部が残存する。高台部径 7.2cmを測る。高台は高く 1.3cmである。胎土は精良で色調は内外面共に赤褐色を呈する。

C9-6-17P2(図 8-3 №. 1)

1 は須恵器高台付碗と考えられる底部破片である。高台径は 11.2cmを測るやや大きなものである。体部は開き気味で、高台断面は方形を呈し、やや「ハ」の字状に開く。胎土は精良である。

C9-7-7P9(図 8-1、3 №. 1)

1 は土師器坏である。口径 12.4cm、器高 3.4cm、底径 7.7cmを測る。体部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部下をやや強くナデる。底部内面は渦巻き状の成形となり、外面も粘土紐の渦巻き状の成形で僅かに簀子状の圧痕が残存する。胎土は赤色の微砂粒を少量含み、色調は黄赤褐色を呈する。

C9-7-8P1(図 8-3 №. 1)

1 は須恵器壺の底部破片と考えられる。高台径は 12.9cmを測る。高台は底部すぐ脇に貼付けている。断面は方形を呈する。体部は僅かに外傾気味に開く。整形は全体的に粗い。胎土は精良で僅かに白色鉱物粒を含む。色調はやや暗い灰色を呈する。

C9-7-17P7(図 8-2、3 №. 1)

1 は壺の底部か。高台の付かない壺の底部の可能性がある。底部は丸味を持ち、整形は粗い。体

部も丸味を持ち立ち上がる。底部内面はナデで、体部は底部に接合し、体部内外面共に回転ナデ整形を施す。胎土は精良で微白色鉱物粒を極微量含む。色調は灰色を呈する。

C9-7-19P1(図 8-2、4 №. 1)

1は土師器坏である。口径 13.0cm、器高 2.8cm、底径 8.3cmを測る。体部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部下をやや強くナデる。底部内面は渦巻き状の成形となり、外面も粘土紐の渦巻き状の成形で、胎土は微砂粒、微白色鉱物粒を微量含み、色調は黄褐色を呈する。

C9-7-21P2(図 8-4 №. 1)

1は土師器甕である。口縁部は「く」字状に屈曲する。口径 21.2cmを測る。口唇部は平坦で僅かに上に摘み上げる。胴部は張らない。整形は口縁部内面、胴部上半がヨコハケ、胴部下は指頭である。口縁部外面はナデ、胴部はヨコとタテハケを交互に繰り返す。胎土は砂粒を少量含む。

C9-7-23P2(図 8-4 №. 1)

1は須恵器の壺の底部破片と考えられる。高台径 10.8cmを測る。体部は開く。高台は断面方形でしっかりした作りである。砂粒、微白色鉱物粒を少量含む。

C9-7-23P9(図 8-4 №. 1)

1は青銅製の襖引き手の可能性がある。円環で幅 0.8cmである。両脇は折り返す。内面下 0.7cmには小孔を穿っている。径２㎜で釘孔と考えられる。

C9-8-7P1(図 8-2、4 №. 1)

1は須恵器瑞である。口縁部は欠損する。頸部は細く伸びる。胴部で強く屈曲し、円孔を穿つ。円孔径は 1.2cmを測る。胴部下半はすぼまり、底部には高台を貼付する。高台の断面は方形を呈し、中央は沈線状に凹む。底径は 6.8cmを測る。胎土は微砂粒、微白色鉱物粒を微量含む。色調は僅かに黄色味を帯びた灰色である。

C9-8-9P4(図 8-4 №. 1)

1は須恵器鉢と考えられる。口径 25cmを測り、大きく開く。口唇部は平坦で中央部が沈線状に僅かに凹む。整形は内面がナデ、外面上半もヨコナデ、下半は斜縦ヘラケズリである。胎土は精良で、色調は暗青灰色を呈する。

C9-8-14P4(図 8-4 №. 1)

1は須恵器甑の把手と考えられる。側面に１対で付いていたものと考えられる。先細りでヘラケズリで調整する。胎土は砂粒、白色鉱物粒を少量含む。

C9-8-18P14(図 8-4 №. 1)

1は土師器坏底部である。口縁部は欠損する。底部は平底でやや厚みがあり、成形は粘土紐を渦

巻き状にして、整形は回転ヘラ切りか。底径 8.3cmを測る。内面も渦巻き状の痕が残る。体部の調整は内面が丁寧なナデ、外面には顕著なロクロ目を残す。胎土は精良で砂粒を微量含む。色調は黄赤褐色を呈する。

C9-8-22P3(図 8-2、4 №1)

1 は須恵器高坏である。口縁部は欠損する。裾部が大きく開く。底径 11.4cmを測る。裾部端部は上方向に少し摘み上げる。胎土は精良で微白色鉱物粒を多量に含む。

C9-9-1P1(図 8-4 №1、2)

1 は須恵器坏蓋である。口径 11.5cm、器高 3.4cmのやや小型の蓋である。天井部は回転ヘラケズリ整形を施すものの、粗い。胎土は砂粒、白色鉱物粒を少量含む。外面に自然釉がかかる。

2 は須恵器瑞の肩部破片と考えられる。肩部上端割れ口に部分的に頸部に繋がる部分が残存している。肩部は丸味を持ち、外面上半はカキ目調整である。胎土は精良で微白色鉱物粒を微量含む。肩部上半には自然釉がかかる。

C9-9-9P7(図 8-4 №1)

1 は須恵器坏蓋である。口径 11.6cm、器高 3.6cmのやや小型の蓋である。天井部は回転ヘラケズリ整形を施す。胎土は精良である。外面に自然釉が僅かにかかる。

C9-9-13P1(図 8-4 №1)

1 は土師器坏である。ほぼ完形品で口径 14.9cm、器高 4.4cm、底径 7.1cmを測る。体部は直線的に開く。底部は回転糸切りで切り離し部分は中央部に残る。整形は全体が回転ナデである。外面口縁部はやや強くナデる。胎土は精良できめ細かく微砂粒を微量含む。色調は赤褐色を呈する。口縁部内面のほぼ全周に黒色タールが付着する。外面も部分的に煤ける。

C9-9-19P3(図 8-4 №1)

1 は須恵器坏蓋の鈕部分である。扁平な潰れた擬宝珠状の鈕である。鈕径 2.5cm、高さ 0.5cmを測る。蓋の天井部分は回転ヘラケズリである。胎土は微白色鉱物粒を微量含む。全体にやや摩耗する。

C9-10-4P1(図 8-4 №1)

1 は弥生土器鉢である。口径 10.2cm、器高 6.1cmの小型品である。体部は丸味を持ち、口唇部は尖り気味である。底部は尖底である。整形は内面がナデ、外面はタタキ後、丁寧にナデ消す。胎土は小礫を少量含む。

C9-10-6P1(図 8-5 №1)

1 は弥生土器甕である。底部は欠損する。口径 15.1cmの中型甕である。口縁部は強く外反する。口唇部は僅かに面になりナデて浅い凹線状になる。肩部は張らず、体部は長胴である。整形は口縁部内面はヨコハケ、胴部内面はヘラケズリ後、上半がヨコ、ナナメハケで、下半がタテハケである。

外面は口縁部、胴部上半がヨコハケ、下半がタテハケである。器肉は薄く、胎土は小礫を少量含む。色調は赤褐色を呈し、外面には煤が付着する。

C9-10-11P6(図 8-5 №1)

1は弥生土器甕である。口径 22.2cmを測る中型甕である。口縁部は叩き出しで「く」の字状に外傾する。口唇部は僅かに面となる。肩部は張らず胴部中位が張る卵形である。整形は外面がヨコタタキで僅かにハケを施す。内面はハケの後、ナデである。胎土は小礫を少量含む。外面には煤が付着する。

C9-11-10P1(図 8-5 №1、2)

1は内黒土器碗の底部破片である。口縁部は欠損する。高台付で高台径9.4cmを測る。体部は開く。内面は黒色処理を施す。整形は内面には僅かにミガキを施す。外面はロクロ目を顕著に残す。胎土は微白色鉱物粒を微量含む。外面の色調は暗褐色を呈する。

2は土師器皿である。口径 11.8cm、器高 2.0cm、底径 7.3cmを測る。体部は大きく開く。口唇部はやや肥厚し、僅かに外反する。底部は回転ヘラ切りである。胎土は精良でやや赤味を帯びた黄褐色を呈する。

C9-11-16P1(図 8-5 №1)

1は緑釉陶器碗である。口径 16.2cm、器高 4.6cm、底径 7.3cmを測る。体部は直線的に開き、素口縁で僅かに外反する。体部外面にはロクロ目を残す。高台が付き、高台端にヘラケズリを施し面取りを行う。緑釉は緑黄色の発色で濃緑色の斑紋が疎らに付く。底裏は無釉ではあるが、極僅かに釉がかかる。底裏の色調は薄橙色である。胎土は精良できめ細かい。

C9-11-17P1(図 8-5 №1、2)

1は土師器高台付坏である。口径 11.8cm、器高 4.3cm、底径 7.9cmを測る。体部は直線的に開き気味に立ち上がる。口唇部はやや尖り気味である。高台は底部端に付き、高台の端部は丸味を持つ。整形は内面が丁寧なナデ、外面はロクロ目を若干残す。底部の切り離しはヘラ切りか。胎土は精良で赤褐色を呈する。

2は土師器足高高台付碗の底部破片である。高台径 8.3cmで、高台の高さは 1.2cmである。高台は極僅かに外に開く。碗部内面はやや粗く、渦巻き状の粘土紐痕を残す。胎土は精良で赤褐色を呈する。

C9-12-6P1(図 8-2、5 №1 ～ 5)

1、2は土師器坏である。1は口径 12.2cm、器高 3.6cm、底径 8.3cmを測る。体部下半は僅かに丸味を持ち、上半はやや開く。底部は簀子状圧痕で、渦巻き状の粘土紐痕を残す。底部脇は丁寧に丸く削る。整形は内外面共にロクロナデである。胎土は精良で黄褐色を呈する。2は口径 12.3cm、器高 3.4cm、底径 8.5cmを測り、№1と法量等は近似する。体部下半は僅かに丸味を持ち、上半はやや開く。底部はヘラケズリか。底部脇も丁寧に丸く削る。整形は内外面共にロクロナデである。胎土は精良で黄褐色を呈する。

３、４は土師器碗である。３は口径 13.6cm、器高 5.0cm、底径 8.0cmを測る。体部は直線的に開く。底部脇は粘土がはみ出たままである。底裏には粘土紐が渦巻き状に残る。整形は内外面共に丁寧なナデでロクロ目を消す。胎土は微砂粒を多量に含み、色調はやや赤味を帯びた黄褐色である。４は口径 12.6cm、器高 5.0cm、底径 8.0cmを測る。完形品で№３とほぼ法量等は同じである。体部は直線的に開く。底部脇は粘土がはみ出たままである。底裏には粘土紐が渦巻き状に残る。整形は内外面共に丁寧なナデでロクロ目を消す。胎土は微砂粒を少量含み、色調はやや赤味を帯びた黄褐色である。外面には煤が付着する。

５は土師器皿である。口径 12.6cm、器高 1.8cm、底径 9.9cmを測る。完形品である。体部は開く。底部は粘土紐を渦巻き状に成形し、ナデ消す。底部脇も丁寧にケズリを施した丸味を持ち、丁寧なナデを施す。胎土は微砂粒を少量含み、赤褐色を呈する。

C10-6-1P1(図 8-5 №１)

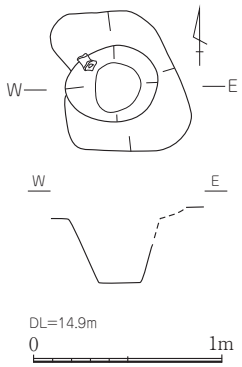
１は須恵器坏である。口径 10.0cm、器高 3.0cm、底径 6.0cmを測る小型の坏である。体部は直線的に立ち上がり、底部脇は丸味を持つ。底部切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は精良で外面には自然釉がかかる。

C10-6-8P1(図 8-5 №１)

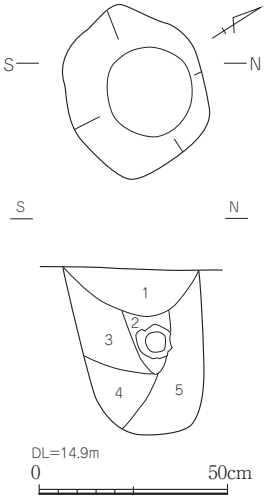
１は須恵器台付壺か長頸壺の脚部である。台部径 11.6cmを測る。全体的に器肉は厚い。端部は沈線状になり、坏の受け部の様になる。脚部に小円孔を穿つものの、貫通はしていない。胎土は白色鉱物粒を少量含む。

C10-6-8P5(図 8-5 №１)

１は須恵器高坏の坏部である。口縁部、脚部は欠損する。大型品である。胎土には白色鉱物粒を多量に含む。

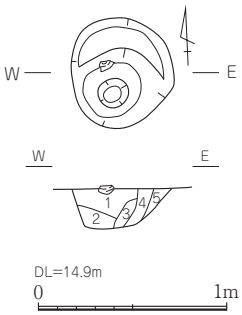


C8·14·5P4



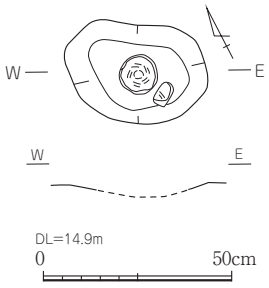
土層説明
1　暗褐色粘質土　粒状黄褐色土混入、土器含む
2　暗褐色粘質土　土器含む
3　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
4　暗褐色粘質土　粒状黄褐色土混入、土器含む
5　暗褐色粘質土　粒状黄褐色土混入

C8·14·5P5

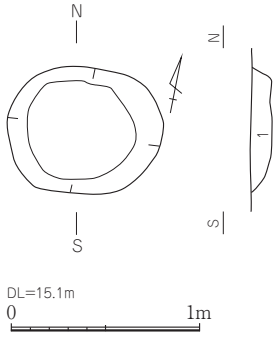


土層説明
1　暗褐色土　褐色・粒状黄褐色ブロック混入
2　暗褐色土　黄褐色・粒状黄褐色ブロック混入
3　黒褐色土　粒状黄褐色ブロック混入、炭化物含む
4　暗褐色土　黄褐色ブロック混入
5　暗褐色土

C8·14·15P3

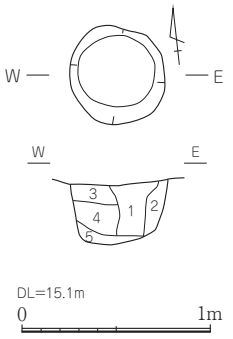


C8·15·14P3



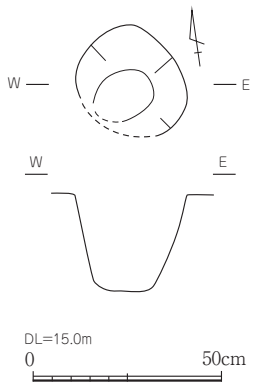
土層説明
1　黒色土　土器混入

C9·3·23P6

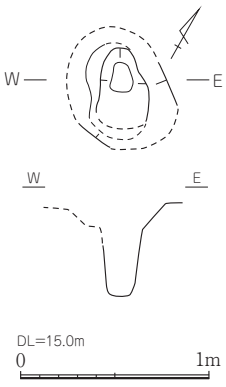


土層説明
1　黒色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　暗褐色粘質土　黄褐色小ブロック含む
5　褐色粘質土　黒褐色土混入

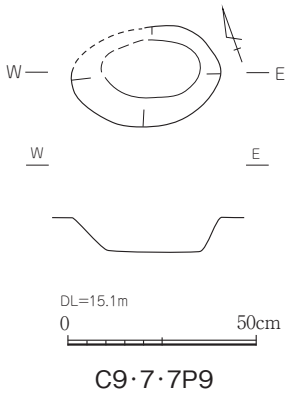
C9·4·22P1



C9·6·13P1

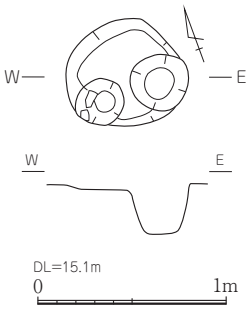


C9·6·16P11

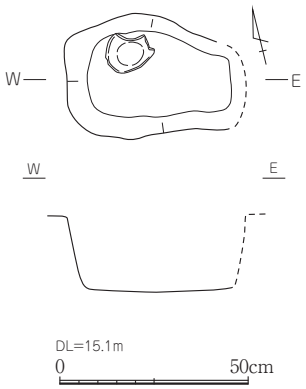


C9·7·7P9

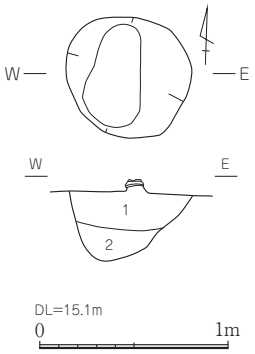
図 8-1　柱穴跡遺構図 (1)



C9·7·17P7

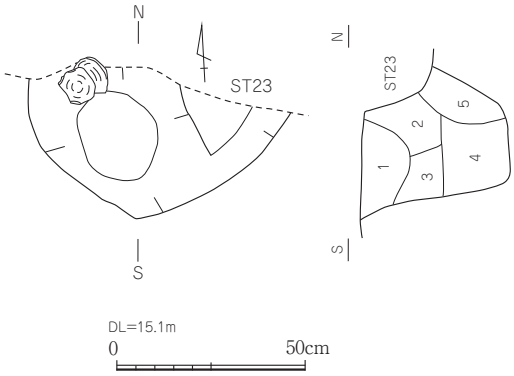


C9·7·19P1



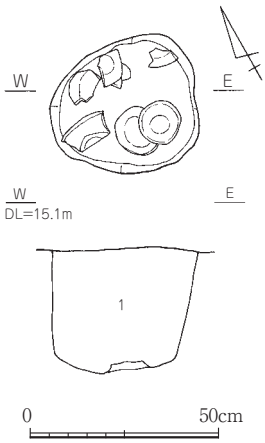
土層説明
1　黒褐色土
2　黒褐色土　土器、地山土混入

C9·8·7P1



土層説明
1　暗褐色粘質土　黄褐色土少量混入
2　黒褐色粘質土
3　黒褐色粘質土　黄褐色土多量混入
4　黒色土
5　黄褐色粘質土　黒褐色土少量混入

C9·8·22P3



土層説明
1　黒色土

C9·12·6P1

図 8-2　柱穴跡遺構図 (2)

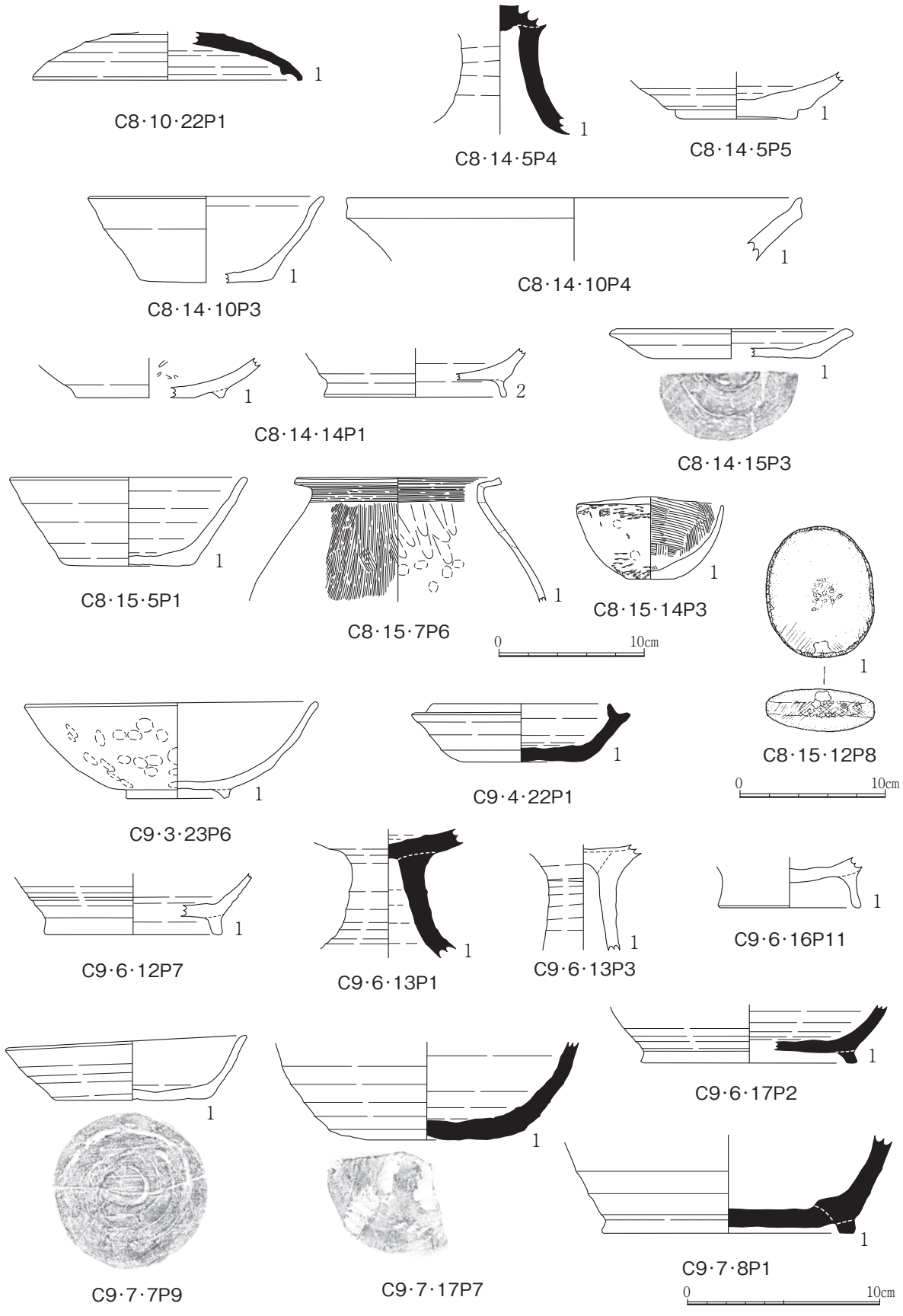
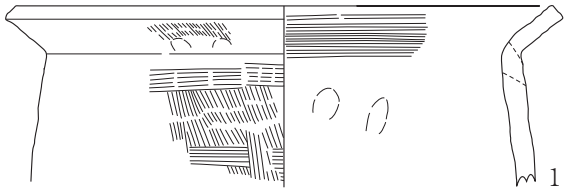
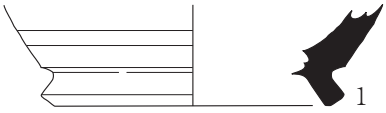


図 8-3　柱穴跡出土遺物実測図 (1)

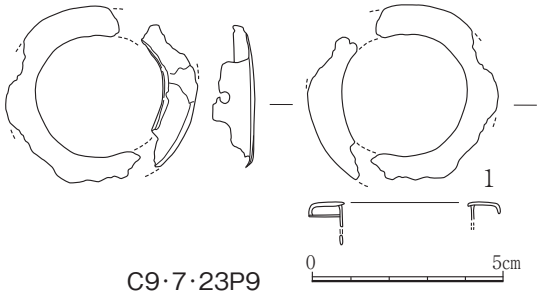
C9·7·19P1



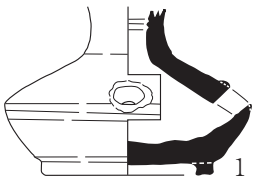
C9·7·21P2



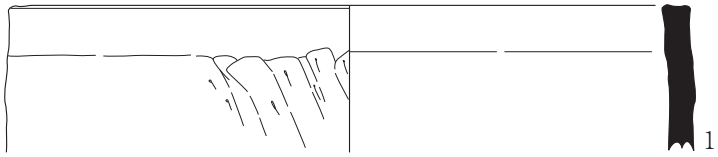
C9·7·23P2



C9·7·23P9

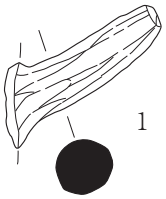


C9·8·7P1

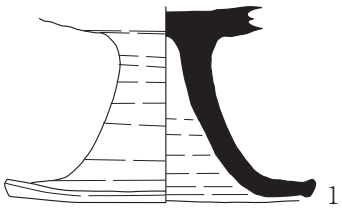


C9·8·9P4

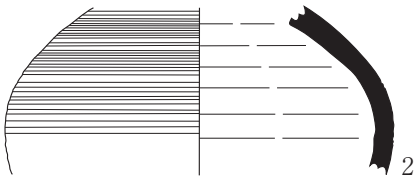
C9·8·18P14



C9·8·14P4

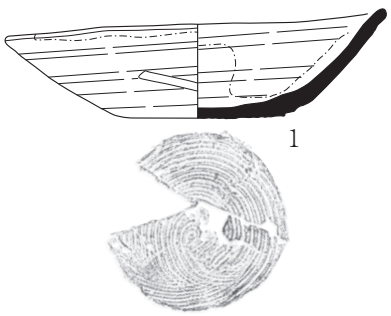


C9·8·22P3



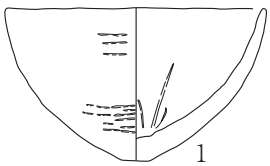
C9·9·1P1

C9·9·9P7



C9·9·13P1

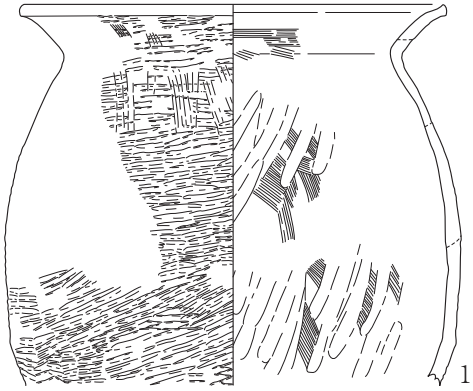
C9·9·19P3



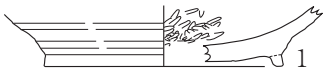
C9·10·4P1

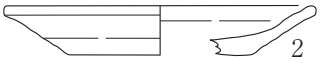
図 8-4　柱穴跡出土遺物実測図 (2)

C9·10·6P1

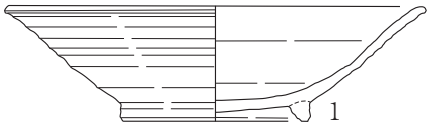


C9·10·11P6

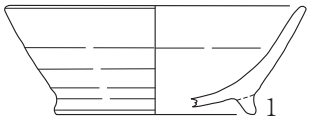


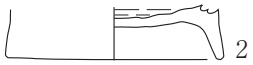


C9·11·10P1

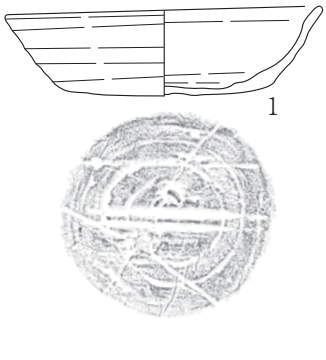


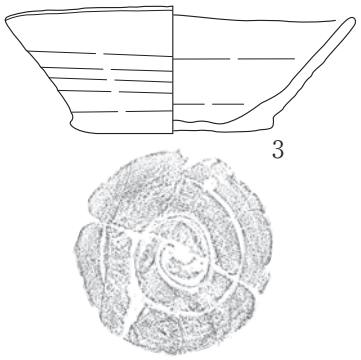
C9·11·16P1

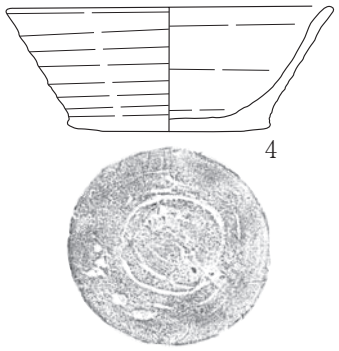


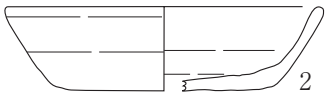


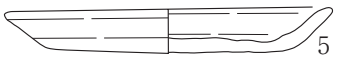
C9·11·17P1



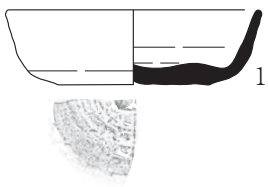




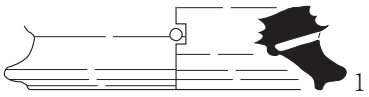




C9·12·6P1



C10·6·1P1



C10·6·8P1·5

図 8-5　柱穴跡出土遺物実測図 (3)

表 8-1　柱穴跡遺物観察表

図版番号	遺構名・取り上げ番号	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 8-3	C8-10-22P1	1	須恵器	坏蓋	(14)	(2.5)	
図 8-3	C8-14-5P4	1	須恵器	高坏・脚部			
図 8-3	C8-14-5P5	1	土師器	円盤状高台付碗			6.2
図 8-3	C8-14-10P3	1	土師器	坏	(12.0)	4.5	(6.8)
図 8-3	C8-14-10P4	1	土師器	甕	(23.6)		
図 8-3	C8-14-14P1	1	内黒土器	碗・底部			(7.6)
図 8-3	C8-14-14P1	2	土師器	高台付碗・底部			(9.4)
図 8-3	C8-14-15P3	1	土師器	皿	(12.0)	1.6	(8.4)
図 8-3	C8-15-5P1- №1	1	土師器	坏	(12.0)	4.6	6.7
図 8-3	C8-15-7P6	1	弥生土器	甕	(14.0)		
図 8-3	C8-15-12P8	1	石器	叩石	長 9.1	厚 2.7	重 280
図 8-3	C8-15-14P3- №1	1	弥生土器	鉢	10.1	5.7	3.3
図 8-3	C9-3-23P6	1	炻器	碗	15.0	5.1	5.4
図 8-3	C9-4-22P1	1	須恵器	坏	(11.4)	3.0	(6.2)
図 8-3	C9-6-12P7	1	土師器	台付碗・底部			(9.0)
図 8-3	C9-6-13P1	1	須恵器	高坏・脚部			
図 8-3	C9-6-13P3	1	土師器	高坏・脚部			
図 8-3	C9-6-16P11	1	土師器	足高高台碗・底部			(7.2)
図 8-3	C9-6-17P2	1	須恵器	高台付碗・底部			(11.2)
図 8-3	C9-7-7P9	1	土師器	坏	(12.4)	(3.4)	(7.7)
図 8-3	C9-7-8P1	1	須恵器	壺・底部			(12.9)
図 8-3	C9-7-17P7	1	須恵器	壺？・底部			(7.6)
図 8-4	C9-7-19P1	1	土師器	坏	13.0	2.8	8.3
図 8-4	C9-7-21P2	1	土師器	甕	(21.2)		
図 8-4	C9-7-23P2	1	須恵器	壺？・底部			(10.8)
図 8-4	C9-7-23P9	1	青銅器	襖引き手？	径 (3.2)		
図 8-4	C9-8-7P1	1	須恵器	甕			6.8
図 8-4	C9-8-9P4	1	須恵器	鉢	(25.0)		
図 8-4	C9-8-14P4	1	須恵器	甑・把手			
図 8-4	C9-8-18P14	1	土師器	坏・底部			8.3
図 8-4	C9-8-22P3	1	須恵器	高坏			11.4
図 8-4	C9-9-1P1	1	須恵器	坏蓋	(11.5)	3.4	
図 8-4	C9-9-1P1	2	須恵器	甕・肩部			
図 8-4	C9-9-9P7	1	須恵器	坏蓋	(11.6)	3.6	
図 8-4	C9-9-13P1	1	土師器	坏	14.9	4.4	7.1
図 8-4	C9-9-19P3	1	須恵器	坏蓋			
図 8-4	C9-10-4P1	1	弥生土器	鉢	(10.2)	6.1	
図 8-5	C9-10-6P1	1	弥生土器	甕	15.1		
図 8-5	C9-10-11P6	1	弥生土器	甕	(22.2)		
図 8-5	C9-11-10P1	1	内黒土器	碗・底部			(9.4)
図 8-5	C9-11-10P1	2	土師器	皿	(11.8)	2.0	(7.3)
図 8-5	C9-11-16P1	1	緑釉陶器	碗	(16.2)	(4.6)	(7.3)
図 8-5	C9-11-17P1	1	土師器	高台付坏	11.8	4.3	7.9
図 8-5	C9-11-17P1	2	土師器	足高高台付碗・底部			8.3
図 8-5	C9-12-6P1- №5、8	1	土師器	坏	12.2	3.6	8.3
図 8-5	C9-12-6P1- №4	2	土師器	坏	(12.3)	3.4	(8.5)
図 8-5	C9-12-6P1- №1、4	3	土師器	碗	13.6	5.0	8.0
図 8-5	C9-12-6P1- №2	4	土師器	碗	12.6	5.0	8.0
図 8-5	C9-12-6P1- №3	5	土師器	皿	12.6	1.8	9.9
図 8-5	C10-6-1P1	1	須恵器	坏	(10.0)	3.0	(6.0)
図 8-5	C10-6-8P1	1	須恵器	台付壺			(11.6)
図 8-5	C10-6-8P5	1	須恵器	高坏・坏部			

第９節　遺物包含層出土遺物

本調査区での遺物は細片も含めると 15 万点にも上る。その内 877 点を報告書に掲載した。遺物包含層から出土した遺物は膨大になり、大部分が弥生土器の細片である。遺物包含層は基本土層Ⅱ層黒褐色土である (Ⅰ章２節「(3) 土壌堆積」の項参照)。

遺物包含層出土遺物として掲載したものは、本遺跡でも時期的に重要なものを抽出した。特に時期別、グリッド別に満遍なく抽出したものではない。弥生時代については遺構の方で多く取り上げており、弥生土器は極僅かに留めた。また近世陶磁器類は全て割愛した。

掲載順は種別、器種の順で取り上げた。

1. 須恵器 (図 9-1)

(1) 須恵器坏蓋 (図 9-1 №. 1 ～ 5)

１、２は小振りな擬宝珠状鈕を有する蓋である。内面には共に端部から離れてかえりが付く。天井部は回転ヘラケズリである。１は口径 14.4cm、器高 4.2cm、２は口径 10.7cm、器高 3.3cmを測り、２は小型品である。3、４は鈕部分は欠損する。３のかえりは端部から離れるものの、４は端部に近い。共に天井部はヘラケズリである。口径は３が 11.5cm、４は 10.5cmである。５は扁平なボタン状の鈕の蓋である。鈕の中央部は僅かに凹む。鈕径は 3.0cmを測る。

時期的には１から４は７世紀前半、５は８世紀前半のものと考えられる。

(2) 須恵器坏身 (図 9-1 №. 6 ～ 8)

６から８は口径 11cmから 12cmのやや小振りな坏である。共に底部の切り離しはヘラ切りで粗い。体部下半には丸味を持ち、立ち上がる。胎土には白色鉱物粒を含む。時期は７世紀後半か。

(3) 須恵器碗 (図 9-1 №. 9)

９は碗の高台部分と考えられる。高台径 7.1cmを測る。体部が欠損するため、器形が判然としないため坏の可能性もある。高台としてはやや高めものである。高台端部はつまみ出す。体部と底部の境は強いナデを施す。胎土には微白色鉱物粒を少量含む。７世紀前半のものか。

(4) 須恵器壺甕類 (図 9-1 №. 10 ～ 13)

10 は壺の底部と考えられる。丸底で回転ヘラケズリを施す。内面は渦巻き状の回転成形のままである。微白色鉱物粒を少量含む。11 は壺の頸部破片と考えられる。肩部は張り、頸部はやや喇叭状に開く。頸部には２本沈線間に斜行刻みを施す。肩部は平行タタキ、内面は波状タタキである。胎土には微鉱物粒を多量に含む。12 は壺の口縁部と考えられる。口径 19.9cmを測る頸部は短く、外反気味である。口縁部は肥厚させ、内面端部をつまみ出す。肩部は張る。調整は外面肩部がカキ目、内面は渦巻き状のタタキである。微白色鉱物粒を多量、砂粒を微量含む。13 は壺の口縁部と考えられる。口径 25.3cmを測る。頸部は外反し、口縁部は外側に小さく面になる。肩部はややなだらかである。調整は肩部が平行タタキである。微白色鉱物粒を少量、砂粒を微量含む。色調は灰褐

色を呈する。

時期は判然としないものの６世紀末から７世紀前半か。

(5) 須恵器高坏 (図 9-1 №. 14)

14 は高坏で口径 16.2㎝、器高 12.2㎝、底径 11.0㎝を測る。坏部は底部が広く、器高は低い。口縁部は緩やかに外反する。内面底には渦巻き状成形痕が残る。脚部には透かし等の装飾は施さない。裾部は開き、端部をつまみ出し沈線状になる。坏部、裾部はへたれを起こし、やや歪みが生じている。胎土には微白色鉱物粒を多量に含む。時期は判然としないが８世紀前半か。

(6) 須恵器小型瓶 (図 9-1 №. 15)

15 はほぼ完形品の小型瓶である。古墳時代後期の竪穴建物跡 ST47 から出土しているものの混入品と考えられる。徳利形で口径 5.8㎝、器高 10.4㎝、底径 7.6㎝を測る。頸部から緩やかに口縁部は開き、胴部下半が下膨れになる。底部は中央部は切りっぱなしだが、周りはヘラケズリを施した後、粗くナデる。体部はロクロ目を残すものの、胴部下半の一部にヘラケズリが認められる。小型の割には重量感がある。胎土には白色鉱物粒を少量含む。時期は８世紀代と考えられる。

(7) 須恵器長頸壺 (図 9-1 №. 16)

16 は長頸壺の口縁部と考えられる。口径 8.7㎝を測る。頸部から口縁部は僅かに外反気味に開いて立ち上がる。素口縁である。胎土は精良である。時期は７世紀から８世紀代のものか。

(8) 須恵器小型甕 (図 9-1 №. 17)

17 は小型甕の孔の開いた胴部破片である。孔の部分で胴部は屈曲し、沈線を１条巡らせる。孔径は 1.4㎝である。胎土は微白色鉱物粒を微量含む。時期は８世紀前半と考えられる。

2. 緑釉陶器 (図 9-2 №. 18 ～ 22)

器種の分かるものは 18 のみの皿で他は底部破片のため、碗か皿か不明である。18、19 は貼付けの輪高台の皿である。18 は口径 14.1㎝、器高 2.8㎝、底径 6.6㎝を測る。体部は大きく開き、口縁部端部を僅かに外反させる。高台は貼付蛇の目で断面は三角形を呈する。底部切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で青灰色を呈し、釉は濃緑色で部分的に施釉する。19 は高台の形態が 18 と違う以外は他は同じである。底径は 7.2㎝を測る。高台断面は長方形で端部は平坦である。９世紀後半のものか。

20 も輪高台で底径 7.6㎝を測る。腰部が屈曲するところから碗の可能性がある。高台は内面端にヘラケズリの痕が２条認められる。胎土は灰色である。釉は全面施釉で淡緑色の発色で濃緑色の斑点が認められる。10 世紀代のものか。

21 は蛇の目高台の碗の可能性がある。底裏中央部を削り出し、蛇の目高台となる。高台部分には１条浅い沈線が巡る。底径 6.8㎝を測る。体部は大きく開きそうである。胎土は火熱を受け、灰白色を呈し、精良である。釉は全面に施釉し、淡緑色である。９世紀後半から 10 世紀か。

22 はベタ高台である。底部切り離しは糸切りで、底部脇がややはみ出る。胎土はやや褐色味を

帯びた灰白色である。底裏以外に施釉し、僅かに黄色味を帯びた淡緑色である。９世紀代か。

3. 内黒土器・黒色土器 (図 9-2)

(1) 内黒土器 (図 9-2 №. 23 ～ 25)

23 から 25 は内黒土器碗である。23 は輪高台の底部破片で、高台は丸味を持ち、腰部は丸味を持って立ち上がる。内面は黒色処理を施し、僅かにミガキを施す。外面はナデ仕上げである。胎土は精良である。24 は内黒土器碗の口縁部破片である。口径 14.4cmを測る。腰部は丸味を持ち、体部から口縁部はやや開き気味である。口縁部内面を僅かに肥厚させる。内面は黒色処理を施し、ミガキを加える。外面にはロクロ目を残す。胎土は精良で微白色鉱物粒を極微量含む。25 は内黒土器碗の輪高台の底部破片である。底径 8.0cmを測る。高台は細く低い断面三角形を呈する。内面は黒色処理を施し、丁寧なミガキを施す。胎土は金雲母を多量に含む。

時期は９世紀から 10 世紀代と考えられる。

(2) 黒色土器 (図 9-2 №. 26)

26 は黒色土器碗の口縁部破片である。口径 16.1cmを測る。内外面に黒色処理を施す。体部はやや丸味を持って開く。口唇部は丸味を持ち、内面に１条沈線を巡らせる。内外面共にミガキを施す。胎土は精良で金雲母を多量に含む。10 世紀代と考えられる。

4. 陶磁器 (図 9-2)

(1) 白磁 (図 9-2 №. 27、28)

27 は玉縁口縁碗の破片である。口径 19.2cmを測る。口縁部外面を肥厚させ、下に沈線を巡らせる。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は乳白色で厚い。28 は碗で削り出し高台の破片である。底径 8.1cmを測る。高台は幅広で内側を斜めに削ぎ落とす。胎土は精良で淡褐白色を呈し、釉は高台、底裏は無釉である。釉の発色は褐色味を帯びた乳白色で厚い。時期は 27、28 共に 11 世紀から 12 世紀か。

(2) 青磁 (図 9-2 №. 29 ～ 35)

35 以外は碗の破片と考えられる。29 は櫛描文の碗である。口径は 16.1cmを測る。腰部は丸味を持ち、口縁部は開く。外面には幅広のタテ方向の櫛描文、内面にもジグザクの櫛描文を施す。胎土は精良で乳白色で釉は貫入の入った透明感のある淡緑色である。30、31 は同一個体の可能性がある。30 は底部破片で底径 5.0cmを測る。底部は回転糸切り後、輪高台を貼付し、回転ヘラケズリを施す。断面は長方形を呈し、端部は平坦である。見込み内は胴部との境を強くナデる。腰部にはタテ方向の櫛描文が残る。胎土は乳白色で精良である。釉は浸けがけで高台、底裏は無釉である。釉の発色は透明感のある淡緑色である。31 は胴部破片である。外面には幅広のタテ方向の櫛描文、内面にもジグザクの櫛描文を施す。胎土は精良で乳白色を呈し、釉は透明感のある淡緑色である。32 は蓮弁文に櫛描文を施した碗の腰部破片である。胎土は精良で乳白色である。釉は透明感のある淡緑色である。腰部下半は無釉である。33 は内面に劃花文を施した碗である。口径 15.2cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。外面は無文である。胎土は精良で青灰色を呈し、釉は濁った薄い青色の発色である。34 は 33 に似た碗の口縁部細片である。内外面には文様は認められない。釉の発色

は 33 より明るい青色である。

35 は皿の可能性がある。底部は碁笥底である。見込み内は飛鉋風のジグザク櫛描文である。胎土は精良で灰白色である。釉は薄い青色の発色である。底裏、腰部は無釉である。

青磁の時期は 12 世紀後半と考えられる。

5. 炻器 (図 9-2 №36 ～ 39)

36 は碗の口縁部である。口径 14.0㎝を測る。体部下半は丸味を持つ。口唇部は丸味を持つ。成形は内型作りで外面から指押さえである。その後、口縁部外面を強くヨコナデを施す。内面にはミガキを施す。胎土は精良で内外面の色調は灰黒色である。焼きは軟質である。12 世紀から 13 世紀のものか。

37 は捏鉢の口縁部である。口径 31.7㎝を測る。成形は粘土紐巻き上げ後に指頭押さえ後、粗いヨコナデを施す。外面下半は成形時のままである。口縁部はつまみ出し、端部は尖る。胎土は微砂粒を微量含む。色調は灰色を呈し、口縁部外面のみ黒灰色を呈する。焼きは軟質である。13 世紀のものか。

38、39 は鍋である。38 は口径 27㎝を測る。口頸部は直立する。口唇部は尖る。胴部上半で緩く屈曲する。成形は粘土紐巻き上げで、体部は指頭痕を残す。口縁部及び内面はナデ調整である。胎土は精良である。色調は黒灰色を呈する。39 は小型品の口縁部である。口頸部は僅かに外反する。口唇部は粘土を潰し、ナデを施し端部が尖る。また口縁部は水平にならず、波状になる。調整は外面が粗い指頭痕を残し、内面は丁寧なナデを施す。胎土は微白色鉱物粒を少量含み、砂質である。色調はやや褐色味を帯びた灰白色である。焼きは軟質である。外面下半には煤が付着する。在地産と考えられる。共に 14 世紀代か (注 1)。

6. 土器 (図 9-3 №40 ～ 49)

(1) 弥生土器 (図 9-3 №40 ～ 42)

40、41 は小型鉢である。法量はほぼ同じで、出土グリッドも同じことから本来共に遺構のものの可能性が強い。40 は口径 9.3㎝、器高 4.8㎝、底径 3.0㎝、41 は口径 9.2㎝、器高 4.6㎝、底径 2.7㎝である。器形は全体的に丸味を持つ。口唇部は薄く尖り気味である。底部は平底である。整形は外面がタタキで体部上半はナデである。内面はハケである。胎土は小礫を少量含む。

42 は小型壺である。出土グリッドは 40、41 と同じである。口径 5.6㎝、器高 6.3㎝を測る。口縁部は大きく屈曲して開く。胴部は丸味を持ち、底部は丸底である。整形は外面がハケの後ナデ消す。内面は口縁部がハケ、体部は指頭である。胎土は小礫を微量含む。

時期は３点共に弥生時代後期後半である。

(2) 土師器 (図 9-3 №43 ～ 45)

43 は坏である。口径 13.6㎝、器高 3.8㎝、底径 6.9㎝を測る。体部は直線的に開く。底裏には渦

※ (注 1) 本報告書では須恵器、土師器の用語は古墳時代から律令期までに限定し、中世以降の焼き締め陶器は焼き物の基本区分である炻器を使用する。また、素焼きの土器についても中世以降は「かわらけ」とした。

巻き状の粘土紐痕が残る。体部外面はロクロ目を残し、内面は回転ナデである。底部脇は粘土がはみ出る。胎土は精良で赤褐色を呈する。9 世紀から 10 世紀代と考えられる。

44 は皿である。口径 10.1cm、器高 1.7cm、底径 6.6cmを測る。器高は低く、体部は大きく開く。底部は厚みがある。渦巻き状の粘土紐痕が僅かに残り、また簀子状圧痕も残り、粗いナデ整形を施す。体部外面及び内面は回転ナデである。胎土は微白色鉱物粒を少量含む。色調は黄褐色を呈する。9 世紀から 10 世紀代と考えられる。

45 は甕である。口径 28.2cmを測る。口縁部は外傾し、口唇部は強くナデ、摘み上げる。胴部は張らない。整形は外面胴部がタテハケで、口縁部内外面はナデ、内面胴部はハケの後、ナデである。胎土は白色鉱物粒を多量に含み、色調は暗褐色である。9 世紀から 10 世紀代と考えられる。

これらと同様の土師器が近隣の小籠遺跡 SK130 から出土している (出原 1996)。

(3) かわらけ (図 9-3 №46 ～ 49)

46 は坏である。ほぼ完形品で法量は口径 10.7cm、器高 3.5cm、底径 4.3cmを測る。口径に比して底径は小さい。底部切り離しは回転糸切りである。体部は丸味を持ってやや開く。整形は回転ナデでロクロ目を消す。内面はロクロ目を残し、内面底には螺旋状のロクロ目が残る。胎土は砂粒を少量含み、黄褐色を呈する。時期的には判然としない。16 世紀代か。

47、48 は羽釜である。大きな鍔が口縁部下に付くもので、47 の口径は 21.7cm、48 の口径は 23.8cmである。器形、整形はほとんど同じで、鍔の付く位置が相違するだけである。口唇部は外を面にして斜めに尖る。鍔端部は強くナデ凹む。全てナデ整形である。胴部は欠損している為に不明である。胎土は白色鉱物粒を多量に含み、金雲母を少量含む。色調は暗褐色を呈する。時期は共に 14 世紀代か。

49 は鉢である。口径 21.8cm、器高 10.4cm、底径 10.5cmを測る。体部は僅かに内湾気味に開く。口縁部は平坦で端部を内側に摘み出す。底部が平底で底部脇ははみ出たままである。成形は粘土紐巻き上げで、ナデ調整を内外面共に施す。胎土は微白色鉱物粒を多量に含む。須恵器の可能性があるものの、色調は淡褐色で焼成は軟質である。体部下半には「田物」と線刻文字を施す。文字は底部から逆位に書いており、「田」は部分的に欠落している為に「田」かどうかは不確かである。また破損しているため残存部は 1 行のみである。書体は行書体か。「田物」としても意味は不明である。「たなつもの」(穀物) か。

7. 瓦 (図 9-3 №50、51)

50 は三巴の軒丸瓦である。ほとんどが欠損しており、一部巴文が残る。裏には布目圧痕が残る。全体的に摩耗する。51 は鬼瓦の破片か。表面は斜格子、裏面には布目圧痕が残る。厚さ 2.8cmを測る。胎土は微砂粒を少量含み、色調は表面は黒灰色、中は赤褐色を呈している。共に中世のものか。

8. 土製品 (図 9-3 №52、53)

52、53 は土製円盤である。53 は転用品である。52 が径 4.9cm、厚さ 1.1cm、孔径 0.8cm、重さ 25g、53 が径 3.2cm、厚さ 0.6cm、孔径 0.6cm、重さ 7.0g である。52 は全体をナデで仕上げ、孔は焼成前に穿つ。胎土は砂粒を少量含み、赤褐色を呈する。53 は土器片を打ち欠き円盤にする。孔は

焼成後に両面から穿つ。胎土は砂粒を少量含む。色調は灰色を呈し、被熱している可能性がある。共に弥生時代のものである。

9. 石器 (図 9-4)

(1) 石鏃 (図 9-4 No. 54)

54 はチャート製の凹基鏃である。長さ 2.5cm、幅 1.7cm、厚さ 0.3cm、重さ 1 g である。側縁部から押圧剥離による樋状剥離を行う。三角形を呈し、基部は凹基で脚は尖る。一脚部の先端部は欠損する。断面形態は菱形を呈する。縄文時代の可能性が強い。

(2) 石包丁 (図 9-4 No. 55、56)

55、56 共に砂岩製の打製石包丁である。裏面には一次剥離痕を残し、表面は礫皮を大きく残す。両端には紐掛けの抉りを設ける。刃部は薄く 56 は僅かに剥離を施し、使用痕の光沢が認められる。背部は刃潰し状の剥離を施す。55 は長さ 6.2cm、幅 4.1cm、厚さ 0.9cm、重さ 22g、56 は長さ 8.1cm、幅 4.6cm、厚さ 1.7cm、重さ 64.5g で 54 は小型品である。弥生時代のものである。

(3) 石斧 (図 9-4 No. 57、58)

57 は太型蛤刃石斧である。緑色岩製で基部が欠損する。残存長 10.5cm、幅 7.4cm、厚さ 4.0cmである。全面を研ぎ、刃部を研ぎ出す。58 は緑色岩製の打製石斧である。裏面は大きく剥がれ、刃部を再生する。一側面は面をなし、自然面である。表面にも自然面を残し、調整はほとんど施さない。基部は尖る。残存長 12.5cm、幅 4.1cm、厚さ 1.9cm、重さ 133g である。共に弥生時代のものである。

(4) 砥石 (図 9-4 No. 59)

上部に携帯用の孔を穿った砥石である。長さ 8.8cm、最大厚 2.6cm、孔径 0.8cm、重さ 70g である。四面を使用するものの、特に一面は頻度が高く大きく抉れる。石質は粘板岩か。時期は不明である。

(5) 叩石 (図 9-4 No. 60)

60 は叩石である。楕円形の砂岩である。長さ 12.0cm、幅 7.8cm、厚さ 3.6cm、重さ 486g である。両端部を顕著に敲打する。両側縁には僅かに敲打痕が見られる。表裏面は使用の痕跡はない。時期は弥生時代か。

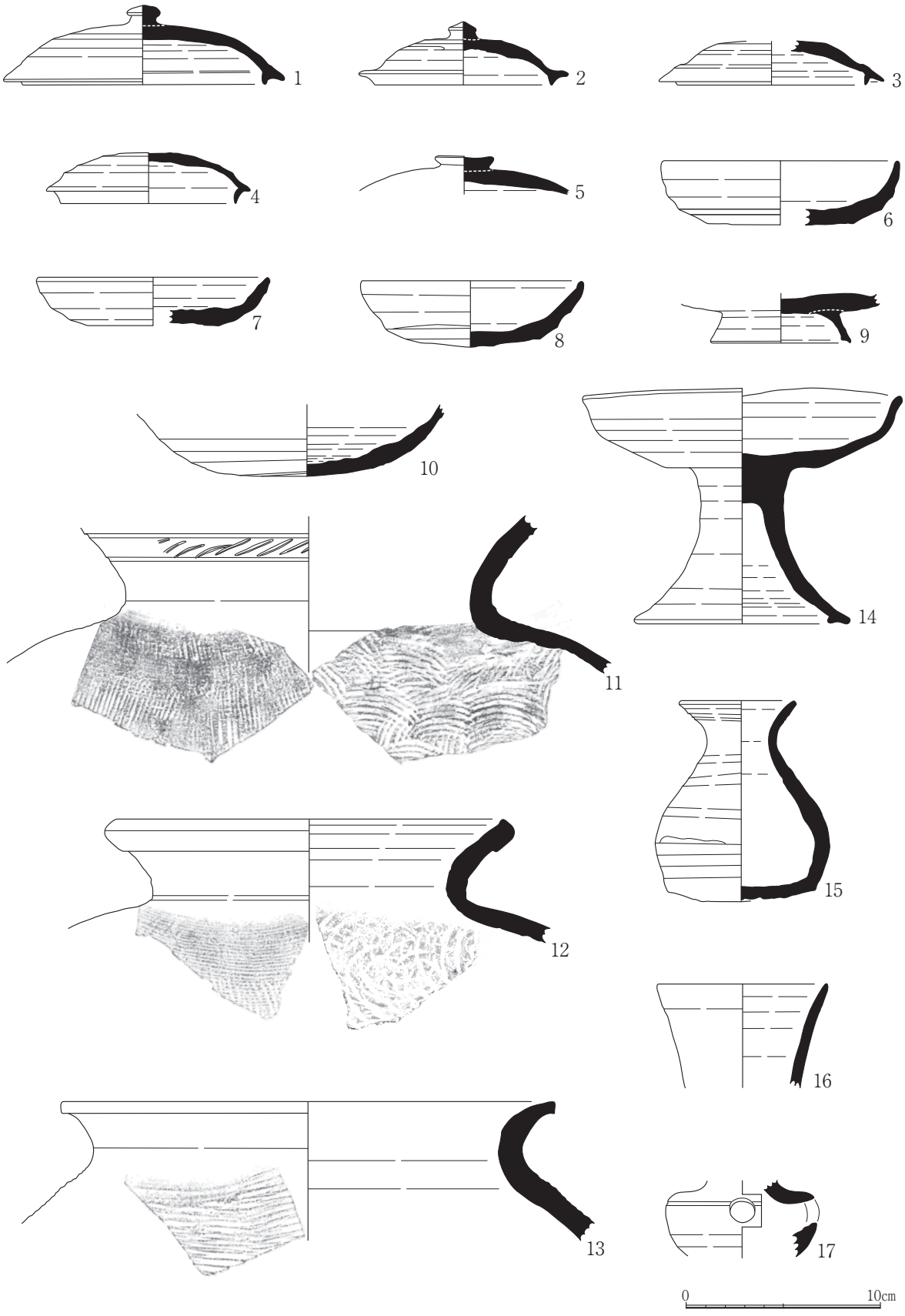


図 9-1　遺物包含層出土遺物実測図 (1)

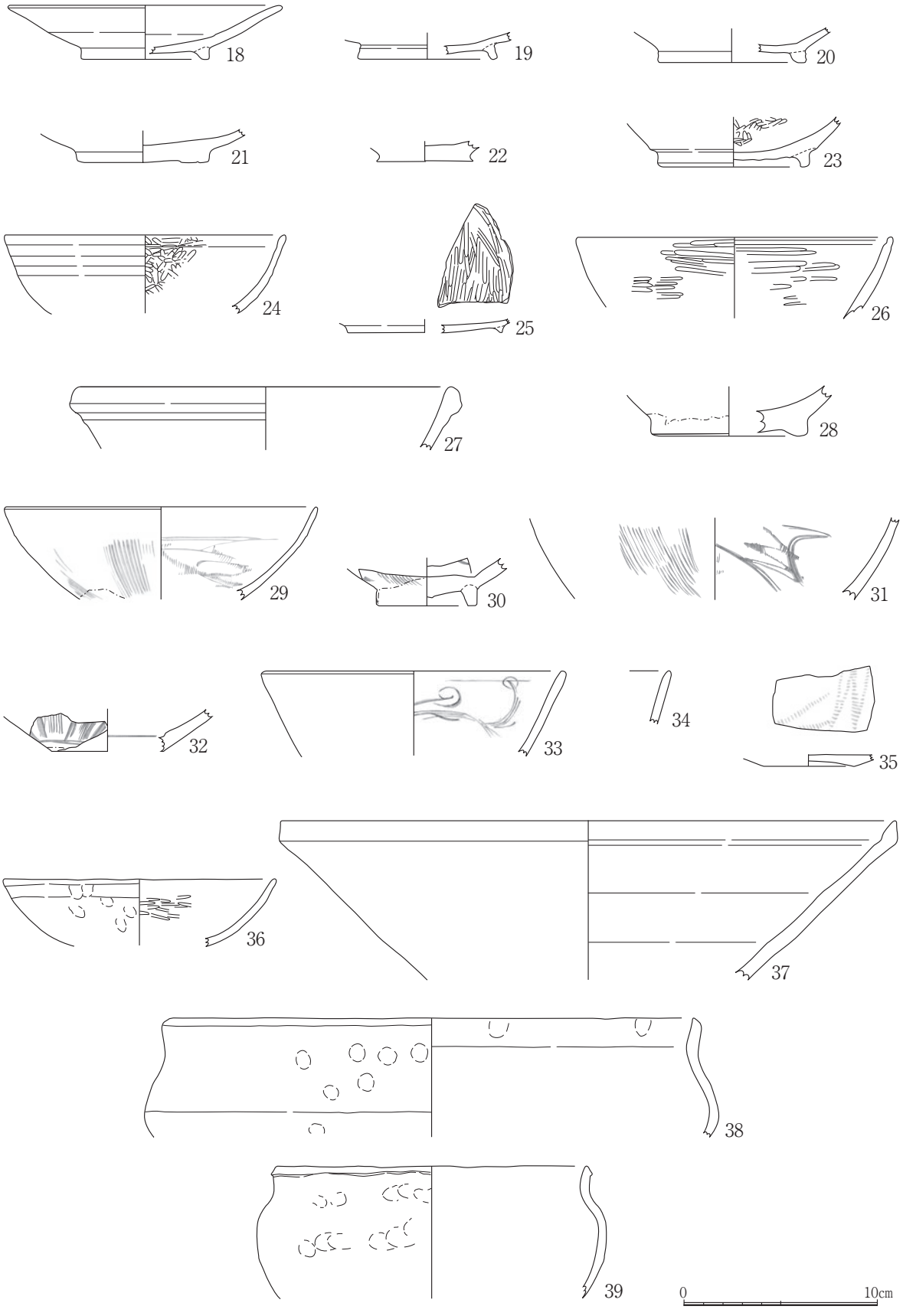


図 9-2　遺物包含層出土遺物実測図 (2)

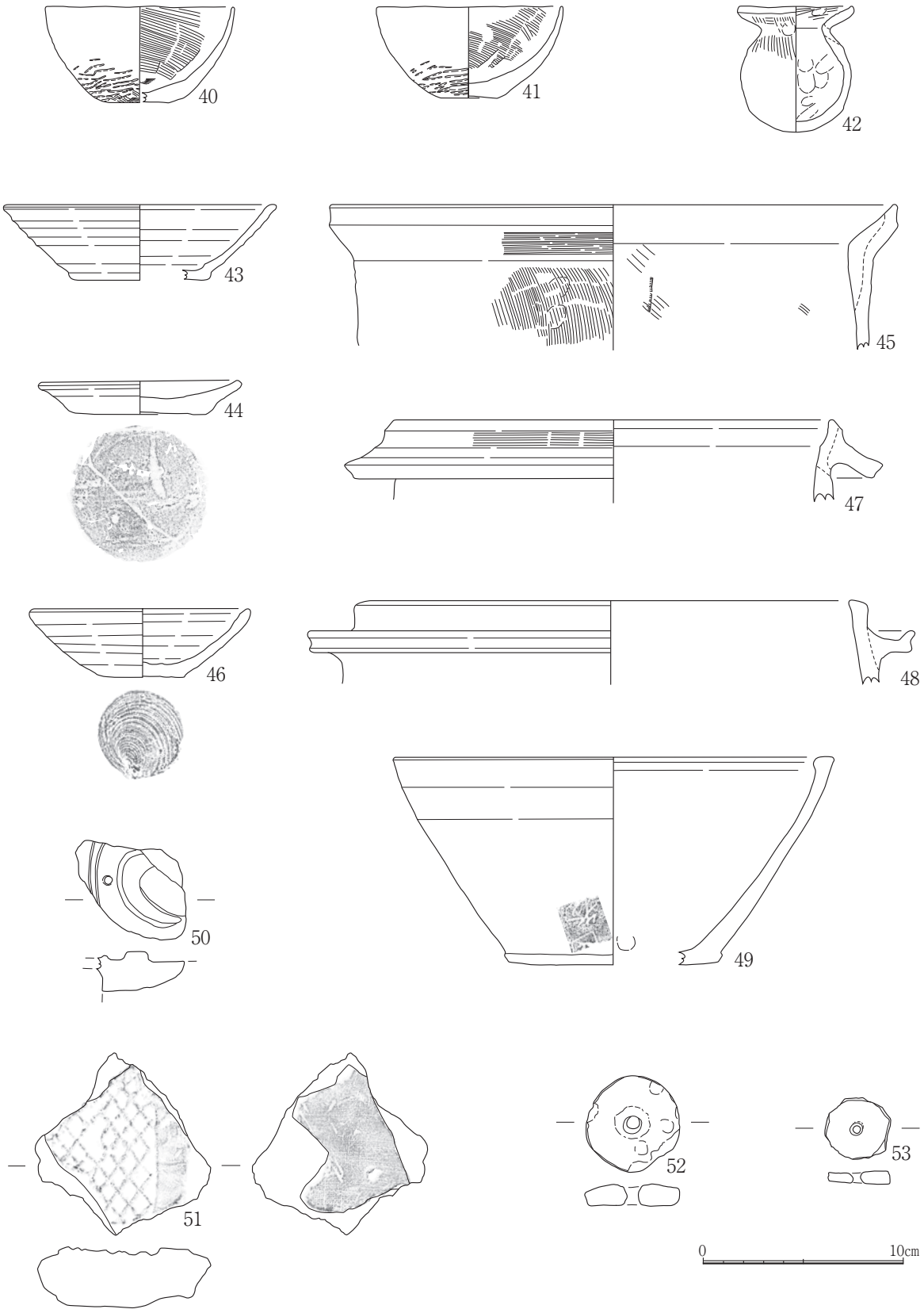


図 9-3　遺物包含層出土遺物実測図 (3)

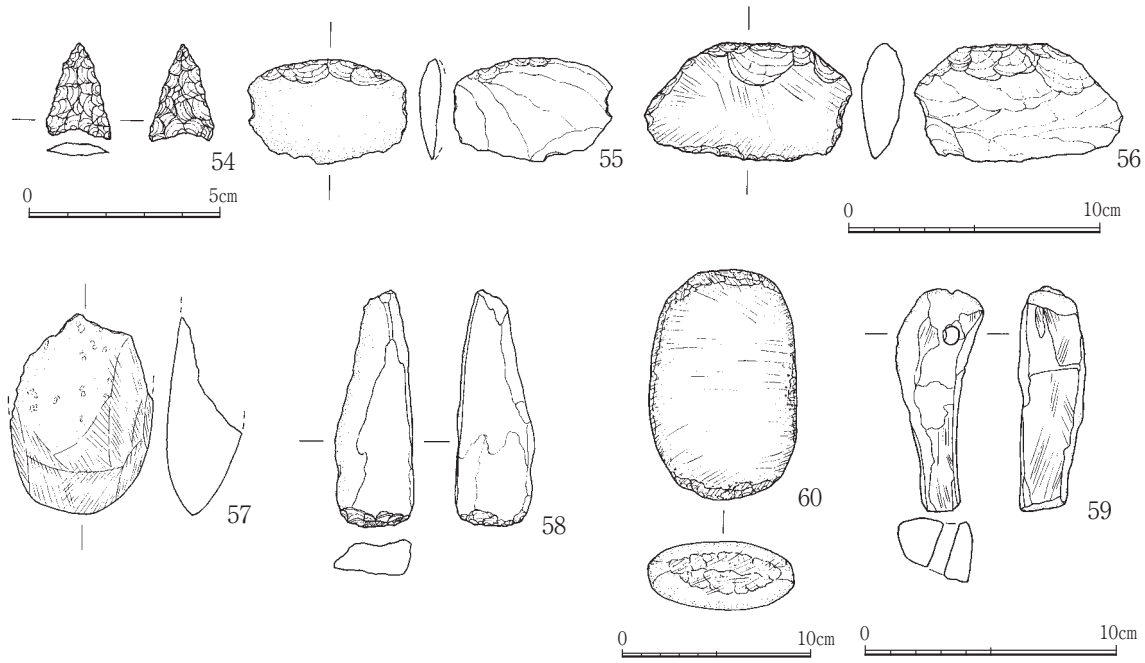


図 9-4　遺物包含層出土遺物実測図 (4)

表 9-1　遺物包含層遺物観察表

図版番号	出土地点	遺物番号	種別	器種・部位	口径 (cm)	器高	底径、重 (g)
図 9-1	C10-6-3 グリッド	1	須恵器	坏蓋	(14.4)	4.2	
図 9-1	Ⅷ BE 区	2	須恵器	坏蓋	(10.7)	3.3	
図 9-1	C10-6-3 グリッド	3	須恵器	坏蓋	(11.5)	(2.3)	
図 9-1	C10-6-9 グリッド	4	須恵器	坏蓋	(10.5)	(2.6)	
図 9-1	C9-8-23 グリッド	5	須恵器	坏蓋			
図 9-1	C10-6-9 グリッド	6	須恵器	坏	(12.0)	3.3	(7.5)
図 9-1	C9-9-9 グリッド	7	須恵器	坏	(11.8)	2.5	(6.8)
図 9-1	C10-6-8 グリッド	8	須恵器	坏	11.3	3.4	6.9
図 9-1	C8-14-15 グリッド	9	須恵器	高台付碗・底部			7.1
図 9-1	Ⅷ AW 区	10	須恵器	壺・底部？			7.1
図 9-1	C9-6-14 グリッド	11	須恵器	壺・肩部			
図 9-1	C9-12-7 グリッド	12	須恵器	壺	(19.9)		
図 9-1	Ⅷ A 区	13	須恵器	壺	(25.3)		
図 9-1	C9-7-18 グリッド	14	須恵器	高坏	16.2	12.2	11.0
図 9-1	ST47	15	須恵器	小型瓶	(5.8)	10.4	7.6
図 9-1	C9-4-23 グリッド	16	須恵器	長頸壺	(8.7)		
図 9-1	Ⅷ A 区	17	須恵器	甕・胴部			
図 9-2	C8-14-15 グリッド	18	緑釉陶器	Ⅲ	(14.1)	2.8	(6.6)
図 9-2	Ⅷ A 区	19	緑釉陶器	Ⅲ・底部？			(7.2)
図 9-2	C9-11-13 グリッド	20	緑釉陶器	碗・底部？			(7.6)
図 9-2	C9-7-14 グリッド	21	緑釉陶器	碗・底部？			6.8
図 9-2	Ⅷ A 区	22	緑釉陶器	底部			5.0
図 9-2	Ⅷ A 区	23	内黒土器	碗・底部			(7.6)
図 9-2	Ⅷ A 区	24	内黒土器	碗	(14.4)		
図 9-2	C9-11-12 グリッド	25	内黒土器	碗・底部			(8.0)
図 9-2	Ⅷ区	26	黒色土器	碗	(16.1)		
図 9-2	Ⅷ A 区	27	白磁	碗	(19.2)		
図 9-2	Ⅷ A 区	28	白磁	碗・底部			(8.1)
図 9-2	C9-7-15 グリッド	29	青磁	碗	(16.1)		
図 9-2	Ⅷ A 区	30	青磁	碗・底部			5.0
図 9-2	C9-7-23 グリッド	31	青磁	碗・胴部			
図 9-2	Ⅷ A 区	32	青磁	碗・腰部			
図 9-2	C9-11-7 グリッド	33	青磁	碗	(15.2)		
図 9-2	Ⅷ A 区	34	青磁	碗			
図 9-2	Ⅷ A 区	35	青磁	Ⅲ・底部			(4.6)
図 9-2	C9-6-23 グリッド	36	炻器	碗	(14.0)		
図 9-2	C9-6-14 グリッド	37	炻器	捏鉢	(31.7)		
図 9-2	C9-12-3 グリッド	38	炻器	鍋	(27.0)		
図 9-2	Ⅷ B 区	39	炻器	鍋	(16.0)		
図 9-3	C8-15-13 グリッド	40	弥生土器	鉢	(9.3)	4.8	3.0
図 9-3	C8-15-13 グリッド	41	弥生土器	鉢	(9.2)	4.6	2.7
図 9-3	C8-15-13 グリッド	42	弥生土器	小型壺	(5.6)	6.3	
図 9-3	C9-6-24 グリッド	43	土師器	坏	(13.6)	3.8	(6.9)
図 9-3	C8-10-19 グリッド	44	土師器	Ⅲ	10.1	1.7	6.6
図 9-3	Ⅷ A 区	45	土師器	甕	(28.2)		
図 9-3	Ⅷ B 区	46	かわらけ	坏	10.7	3.5	4.3
図 9-3	C9-6-25 グリッド	47	かわらけ	羽釜	(21.7)		
図 9-3	C9-11-9 グリッド	48	かわらけ	羽釜	(23.8)		
図 9-3	Ⅷ A 区	49	かわらけ？	鉢	(21.8)	10.4	(10.5)
図 9-3	C9-6-22 グリッド	50	瓦	軒丸瓦			
図 9-3	C9-11-11 グリッド	51	瓦	鬼瓦？		厚 2.8	
図 9-3	Ⅷ A 区	52	土製品	土製円盤	径 4.9	厚 1.1	重 (25)
図 9-3	Ⅷ A 区	53	土製品	土製円盤	径 3.2	厚 0.6	重 (7.0)
図 9-4	Ⅷ BW 区	54	石器	石鏃	長 2.5	厚 0.3	重 1
図 9-4	Ⅷ A 区	55	石器	打製石包丁	長 6.2	厚 0.9	重 22
図 9-4	Ⅷ AW 区	56	石器	打製石包丁	長 8.1	厚 1.7	重 64.5
図 9-4	Ⅷ AW 区	57	石器	太型蛤刃石斧	長 (10.5)	厚 (4.0)	重 (300)
図 9-4	Ⅷ AW 区	58	石器	打製石斧	長 (12.5)	厚 (1.9)	重 (133)
図 9-4	Ⅷ A 区	59	石器	砥石	長 8.8	厚 2.6	重 70
図 9-4	C9-11-4 グリッド	60	石器	叩石	長 12.0	厚 3.6	重 486

第Ⅲ章　自然科学分析

第１節　祈年遺跡出土土器の胎土分析

－周辺遺跡出土ヒビノキ式土器との胎土比較－

岡山理科大学　白石　純

１．はじめに

この胎土分析では祈年遺跡より出土している「ヒビノキ式土器」の自然科学的な胎土分析を実施し、以前分析したミトロ、介良野、伏原の各遺跡出土のヒビノキ式土器の胎土と比較することで、この土器の生産地を推定する。

そして、各遺跡におけるヒビノキ式土器の胎土の特徴などを検討し、今後のヒビノキ式土器の生産地と流通に向けての基礎データの蓄積を行うことを目的としている。

２．分析方法と試料

分析方法は、蛍光Ｘ線分析法と実体顕微鏡による土器表面の胎土観察の２つの方法で検討した。

蛍光Ｘ線分析法では、胎土の成分(元素)量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分(元素)は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Ｐの 10 成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計(ｾｲｺｰｲﾝｽﾂﾙﾒﾝﾂ社製SEA2010L)を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約 15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒(岩石・鉱物)の種類、大きさなどの大まかな含有量を調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、多量･中量･少量・まれに、の４段階で表した。

祈年遺跡出土土器の分析試料は、101 点である。試料の時期は「ヒビノキⅡ～Ⅲ式」で、器種は甕である。また､比較したヒビノキ式土器の遺跡は高知市介良野遺跡､ミトロ遺跡､伏原遺跡である。

３．分析結果

(1) 蛍光Ｘ線分析結果について

この分析では測定した 10 成分のうち、分析試料に顕著な差が見られたのは、Ti、Ca、Ｋの３成分であった。この３成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

第１図 K-Ca 散布図では、祈年遺跡内から出土したヒビノキ式土器の比較を行った。その結果、試料番号 27 の１点以外は、ほぼ一つのグループにまとまった。なお 27 は、ほかの土器よりＫ量が多く単独で分布した。また、１点だけ中世土師器(試料番号 101)が含まれていたが、ほかの遺跡内出土のヒビノキ式土器と胎土が同じであった。

第２図 K-Ca、第３図 K-Ti、第４図 Ti-Ca の各散布図では、祈年遺跡と伏原遺跡、介良野遺跡、ミトロ遺跡の各遺跡出土のヒビノキ式土器の胎土比較を行った。すると、第２･３図では、祈年遺跡と伏原遺跡、ミトロ遺跡の３つの遺跡のあいだで分布範囲が重複し、識別できないことがわかっ

た。したがって、これらの散布図では、祈年・伏原・ミトロの各遺跡と介良野遺跡の２つに大きく分類できた。

第４図では祈年・ミトロ・介良野の各遺跡と伏原の２つに大きく分類が可能である (一部重複するとことがあるものの)。

(2) 実体顕微鏡観察結果について

祈年遺跡出土土器の胎土を観察した結果、ほぼ一つの胎土であった。それは以下のようになる。
·0.5mm 以下の石英を多量～中量程度含み、3 mm 以下のチャート、砂岩、片岩の岩石片を少量含む。素地土は基本的に精緻な粘土で 0.5mm 以下の火山ガラス・金雲母を含んでいる。

なお、素地土に含まれる火山ガラスと金雲母の量は、土器によってまちまちである。

(第 5 図 - 写真 1・2・3・4・5、試料番号 4・10・46・66・75)

また試料番号 101(第 5 図 - 写真 6) は中世土器で、ヒビノキ式土器に比べて 3 mm 前後の岩石片が含まれない。

以上の観察結果から、祈年遺跡の胎土は 1 種類の胎土で、素地土はきめの細かい、火山ガラスと金雲母を含む粘土で、３mm 以下の亜円礫の岩石片（チャート、砂岩、片岩）を少量含んでいる胎土で構成されていることがわかった。なお 27 の試料は、K 量がほかのものに比べ多く含まれて異なっていたが、胎土観察では目立った差異はみられなかった。

４．考察

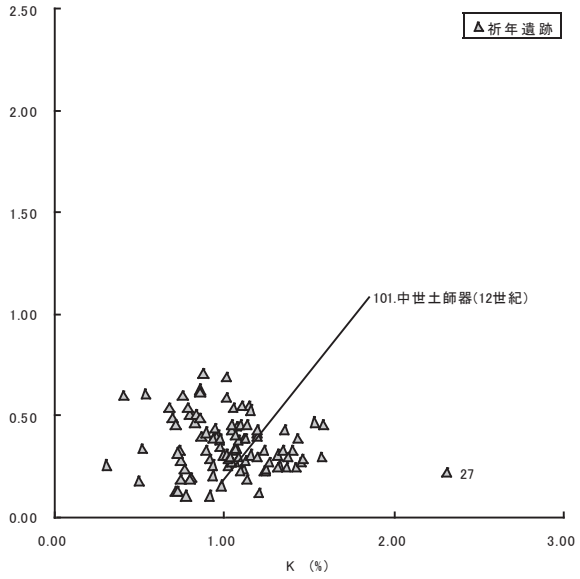
蛍光Ｘ線分析と実体顕微鏡観察により祈年遺跡出土土器の胎土分析を行った結果、以下のことが推定された。

(1) 蛍光Ｘ線分析では、祈年遺跡出土のヒビノキ式土器はほぼ１つにまとまった。また祈年遺跡とミトロ、介良野、伏原の各遺跡から出土したヒビノキ式土器の胎土比較では、一部重複する部分もあるが、３つの胎土に分類される。それは、祈年とミトロ、介良野、伏原である。ただ祈年とミトロ、伏原は、分布域が半分ほど重なる結果となったが、分布域の集中 (試料分布ドットが集中するところ) はそれぞれ異なるような分布であった。

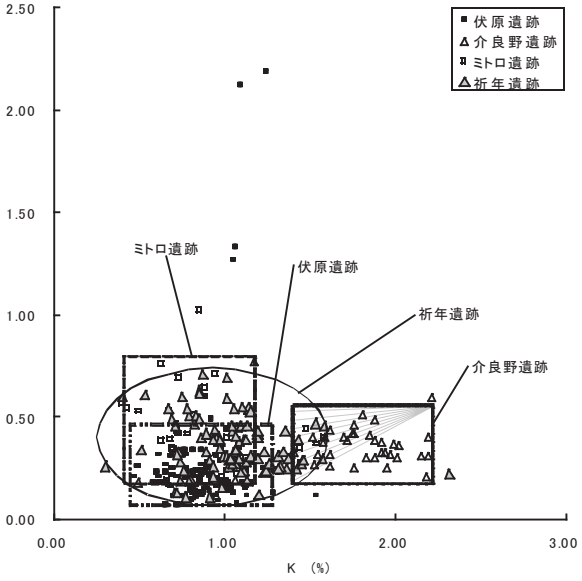
(2) 実体顕微鏡による砂粒観察では、祈年遺跡出土のヒビノキ式土器は素地土に含まれる火山ガラス、金雲母の量が異なる程度で、構成される砂粒は同じであった。そしてミトロや伏原と砂粒構成や大きさもほぼ同じであることがわかった。

以上の分析結果から、今回の祈年遺跡出土「ヒビノキ式土器」はこれまで分析したミトロ、介良野、伏原の各遺跡は近接し、地質的によく似た構造であるが、蛍光Ｘ線分析法による胎土分析で、異なることが推定された。これは、各遺跡ごとで「ヒビノキ式土器」が生産されたことが想定されるのではないだろうか。

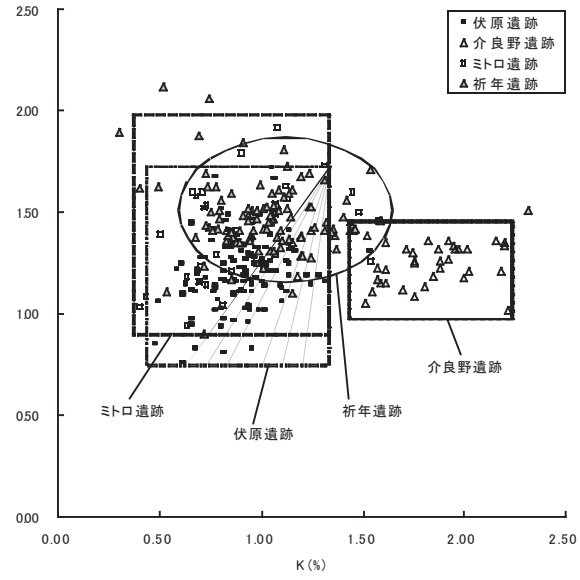
この分析の機会を与えていただいた、前田光雄氏、久家隆芳氏をはじめ、高知県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろとお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。



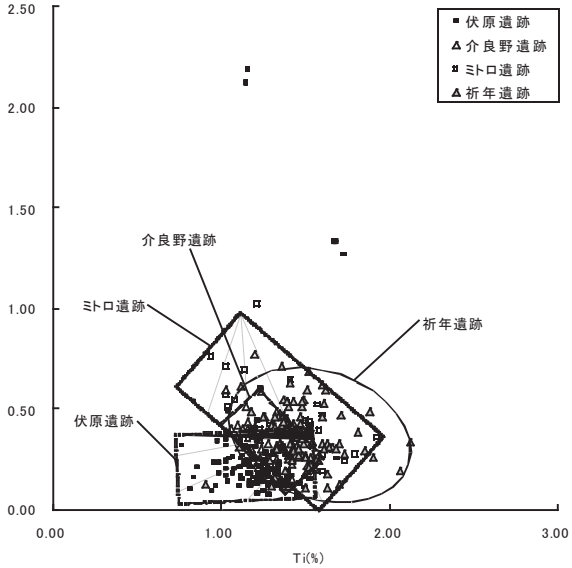
第１図　祈年遺跡内出土土器の比較（K-Ca散布図）



第2図　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較（K-Ca散布図）



第3図　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較(K-Ti散布図）



第4図　各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較（Ti-Ca散布図）

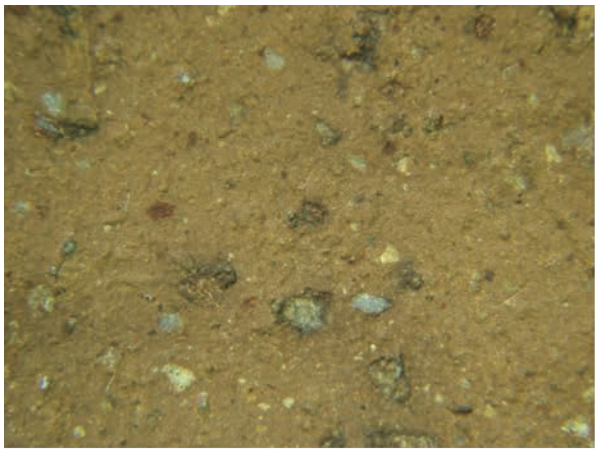


写真 1.試料番号 4

写真 2.試料番号 10

写真 3.試料番号 46

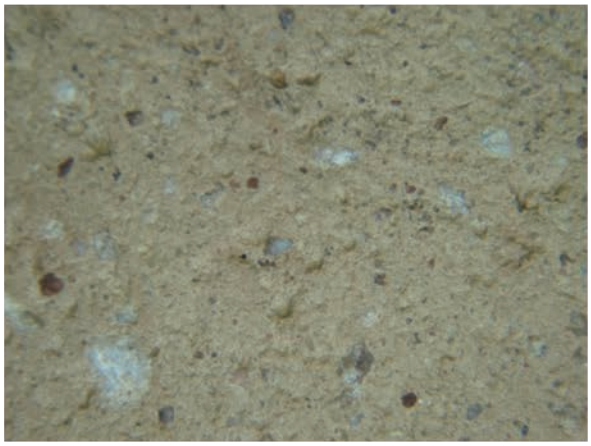
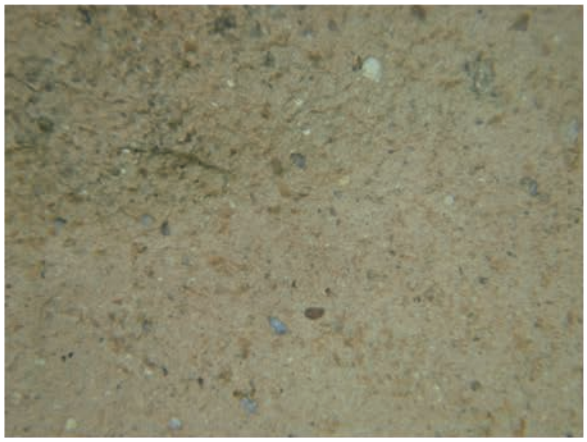


写真 4.試料番号 66

写真 5.試料番号 75



0 3m

第 5 図　祈年遺跡出土ヒビノキ式土器 実体顕微鏡 写真

第２節　重鉱物・火山ガラス、土壌理化学分析、植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社　矢作健二、斎藤紀行、馬場健司、辻康男

はじめに

⑴遺跡の立地

祈年遺跡は、高知平野東部の長岡台地上の西部に立地する（第１図）。高知平野の東部は、土佐山田町の山田堰付近を扇頂とする比高の異なる上下２面の開析扇状地（古期扇状地面）と現成の扇状地（新規扇状地面）が分布する (太田ほか編 ,2004)。開析扇状地については、上位が物部川右岸に存在しており長岡台地、下位が物部川左岸に存在しており野市台地とそれぞれ称されている（第２図）。これらの開析扇状地の形成年代は更新世と考えられるが、離水年代等の詳細は明らかにされていない。現成の扇状地は物部川扇状地と称され、沖積扇状地面と扇状地性低地からなる。沖積扇状地面は、更新世末期以降に形成されたと考えられ、離水時期が異なると推測されるいくつかの地形面からなる。このうち、相対的に下流側に位置する下位の沖積扇状地面については、介良野遺跡の調査成果から、5000 年前頃に離水した可能性が示唆される（辻ほか、2007）。

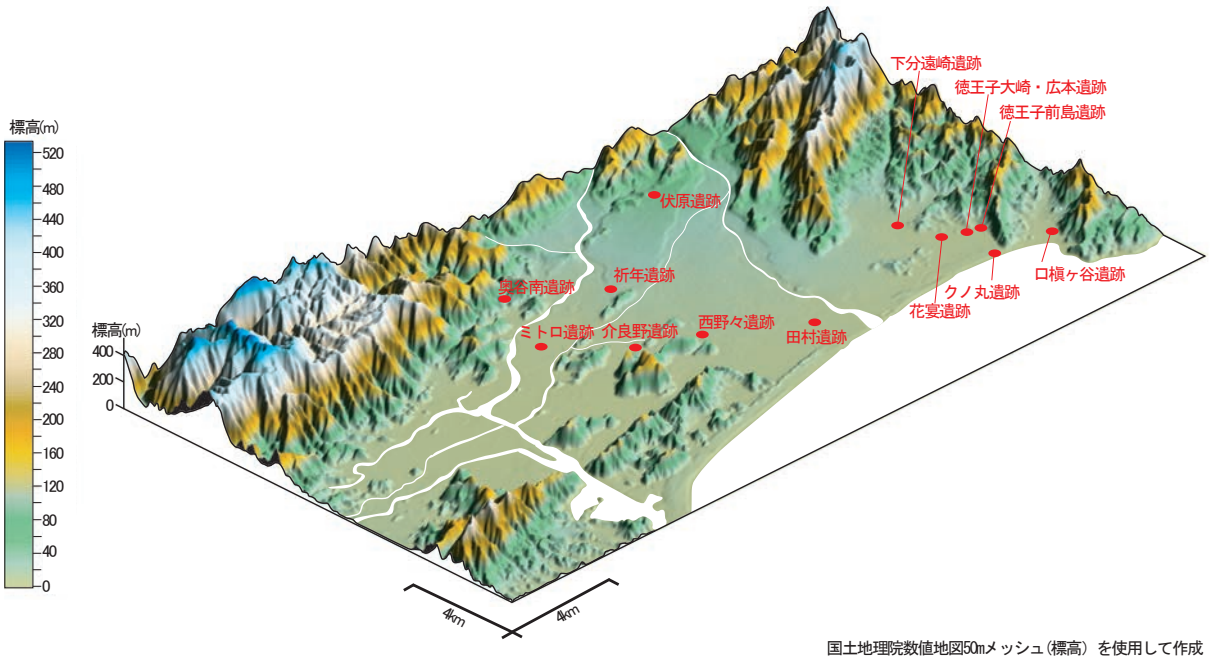
⑵分析目的

祈年遺跡の発掘調査では、開析扇状地表層を覆う厚さ 120㎝ほどの土壌断面が確認され、上部の黒色土と下部の褐色土という比較的明瞭な層位が認められ、さらに、黒色土や褐色土の中でも色調や砕屑物の状況から細分される状況が看取された。この土壌は、その層相から、長岡台地離水後に表層に堆積した風成砕屑物を母材として形成された累積成の土壌と考えられ、したがって、その形成過程においてテフラの降灰があれば土壌中に保存される可能性も考えられた。この場合、降灰年代の明らかなテフラ (指標テフラ) が検出されれば、長岡台地における土壌の形成年代に関わる資料を得ることができる。そこで本報告では、調査区南壁を構成する土壌を対象として、含有される重鉱物の組成および火山ガラスの量比を明らかにし (重鉱物・火山ガラス比分析)、火山ガラスの屈折率を測定することにより、指標テフラの検出と同定を行い、土壌断面における層序対比資料を作成することを試みた。

また、上述したように土壌断面で認められた上部の黒色土と下部の褐色土という状況は、累積成の土壌の形成過程における生成環境の変化を示唆している可能性もあると考えられる。本報告では、黒色土をいわゆる黒ボク土として捉え、その重要な特性の一つとされているアロフェン質か非アロフェン質かを検証し、さらに腐植含量および腐植の形態も確認する。これらの特性から、長岡台地離水後の表層の環境について検討する。

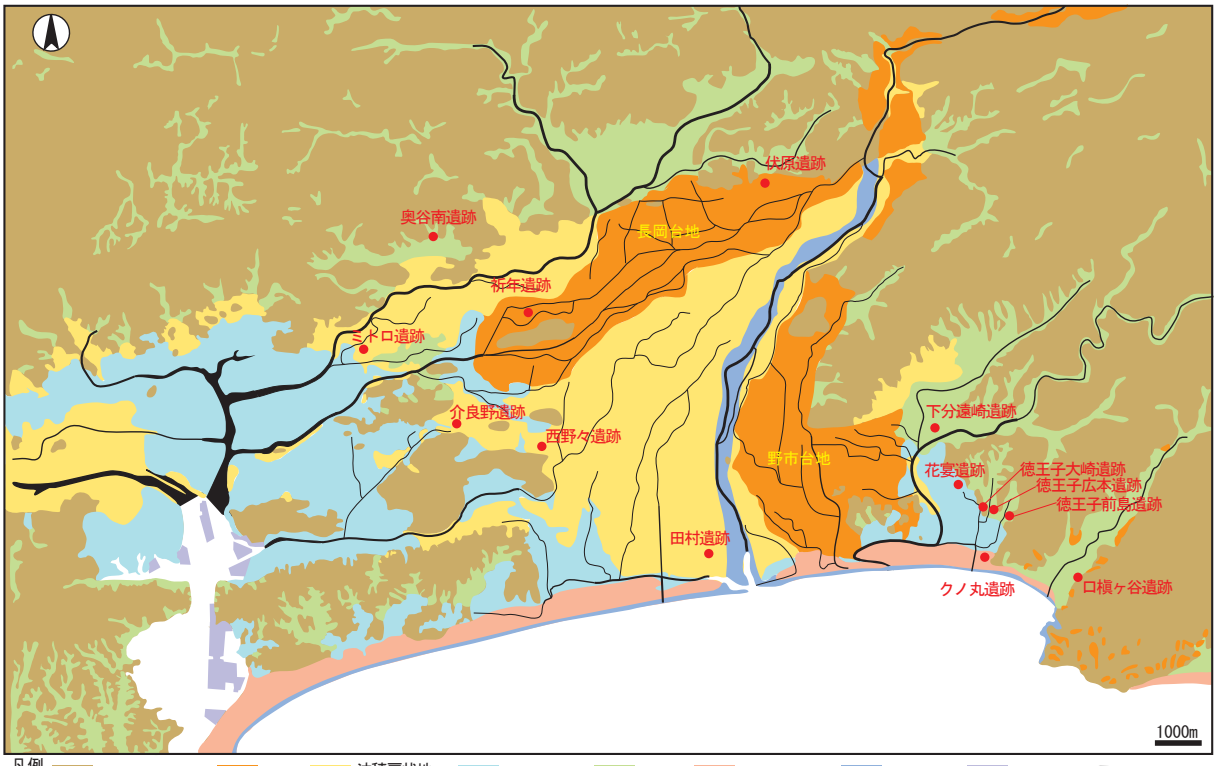
なお、発掘調査で検出された遺構を埋積する堆積物はほとんどが黒色土とされているが、その中で、弥生時代住居跡埋土の最下部を構成する堆積物については、古代の柱穴埋土に比べるとその色調がやや明るいことが発掘調査所見により指摘されている。本報告では、これらの埋土についても上述した土壌特性を調べ、その由来について考察する。

さらに本報告では、土壌断面の各層位および上述の各遺構の埋土を対象とした植物珪酸体分析を



国土地理院数値地図50mメッシュ(標高)を使用して作成

第1図　調査地点位置図



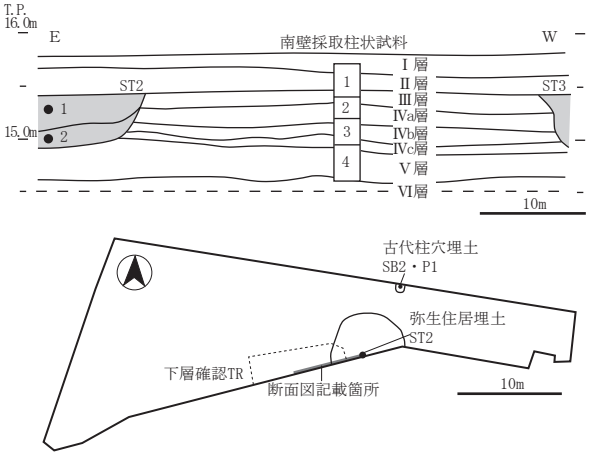
(高知県, 1966を一部を改変して作成)

第2図　香長平野の地形と遺跡の立地

行い、各時代における祈年遺跡周辺の植生を検討する。

1. 試料

試料は、Ⅸ区南壁で連続的に採取した不撹乱柱状土壌試料、弥生時代後期後半の弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土断面および古代の柱穴（Ⅸ SB02.P1）埋土断面の各箇所から採取した（第3図）。以下に各箇所ごとに述べる。



第3図　08-5NS調査区試料採取位置図

⑴Ⅸ区南壁採取土壌試料

Ⅸ区南壁土壌断面では、現表土から扇状地礫層上面までの厚さ約120cmほどの土壌が確認された。現表土下の黒褐色土から下位に向かって、黒色土、黒褐色土、黒褐色土から暗褐色土への漸移層、上位の暗褐色土、上位の褐色土、下位の暗褐色土、下位の褐色土そして礫層直上の黄褐色土という層位に分層される(第4図)。断面からは、指標テフラの検出を目的としたテフラ分析試料と土壌理化学分析および植物珪酸体分析を目的とした２種類の試料を採取した。

不撹乱柱状土壌試料は、層位的に連続したテフラの組成の変化を求めることから、角柱状のブロックにして採取した。現表土から層位方向にそれぞれ長さ25cm、20cm、20cm、25cmのブロックを採取、上位よりサンプル１～サンプル４とした。これらのブロック試料は、室内にて層位を考慮して厚さ5cm前後で分割し、15点の重鉱物・火山ガラス比分析用の試料とした。各分割試料には上位より２～16までの番号を付した。また、南壁断面試料の土壌理化学分析および植物珪酸体分析については、上記の不撹乱柱状土壌試料から、黒色土（試料１）、黒褐色土（試料２）、黒褐色土から暗褐色土への漸移層（試料４）、下位暗褐色土（試料11）を採取した。土壌理化学分析では、試料１、４、11の３点を選択し、植物珪酸体分析では試料１、２、４、11の４点を選択した。

⑵遺構埋土試料

弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）の埋土断面では、上部と下部よりそれぞれ１点ずつ、計２点を採取した。上部の埋土は黒褐色を呈し、下位に比べ腐植含量が高い。下位の埋土は、上位よりも黒みが薄く、層内に偽礫（ブロック土）を多く含む。試料名は、それぞれ弥生時代住居跡埋土１および２とする。土壌理化学分析は、弥生時代住居跡埋土１の１点を選択し、植物珪酸体分析では２点を対象とする。

古代柱穴（Ⅸ SB02.P1）の埋土断面からは、最下部から採取した１点の試料を採取した。試料名は古代柱穴埋土１とする。土壌理化学分析および植物珪酸体分析の対象とする。

2. 分析方法

⑴重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4㎜-1/8㎜の砂分をポリタング

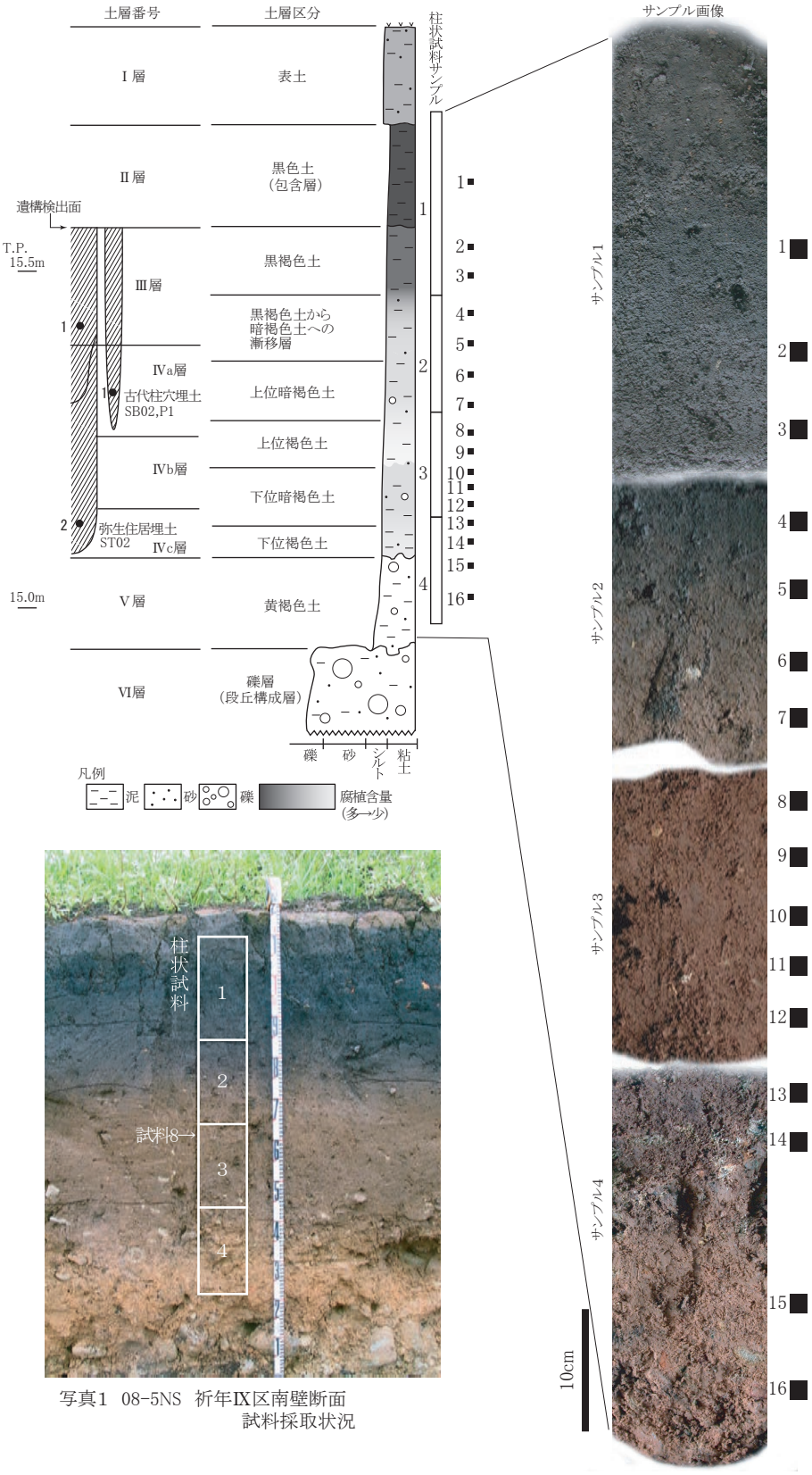


写真1　08-5NS　祈年Ⅸ区南壁断面
試料採取状況

第4図　Ⅸ区南壁断面の土壌試料採取地点

ステン酸ナトリウム (比重約 2.96 に調整) により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を 250 粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

屈折率の測定は検出された火山ガラスを対象とし、特に重要とされる産状を示す試料を 2 点選択する。測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

⑵土壌理化学分析

ここでは、１）土壌腐植の量や質 (光学特性) に関するの調査、２）三枝ら (1993) に準じたアロフェン質、非アロフェン質黒ボク土の区分に関する調査を行う。

腐植含量はチューリン法 (土壌標準分析･測定法委員会 ,1986)、腐植の光学特性は本名･山本 (1992) による簡易分析法 (Melanic index) に準じた。また、アロフェン質、非アロフェン質の区分は選択溶解分析法の酸性シュウ酸塩可溶ケイ素、アルミニウムおよびピロリン酸塩可溶アルミニウムを L.P.van Reeuwijk(1986) に従って定量した上で、三枝ら (1993) における判定基準により区分した。以下に各分析項目の操作工程を示す。

①試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して２㎜の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル (平工製作所製 TI100；10ml 容タングステンカーバイト容器) で微粉砕し、微粉砕試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

②腐植含量

微粉砕試料 0.100 ～ 0.500 g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

③ Melanic Index(腐植簡易分析法)

風乾細土試料約 1.0g を 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5% NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し､室温で 1 時間振とうした後､0.1%高分子凝集剤溶液１～２滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15min の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約 1ml を試験管にとり、0.1% NaOH 溶液 20ml を分注器で加え (NaOH の濃度は約 0.1%となる)、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する (450nm の吸光度が 1 を越えた

試料は、さらに 0.1% NaOH 溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、３時間以内に行い、結果の表示を MI(=K450/K520) で示す。

④酸性シュウ酸塩可溶ケイ素 (Sio)、アルミニウム (Alo)

微粉砕試料 300mg に 0.2M 酸性シュウ酸塩溶液 (pH3) を 30ml 加え、暗所で４時間振とうする。振とう後、0.4％高分子凝集剤を２滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計によりケイ素 (Si) およびアルミニウム (Al) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのケイ素とアルミニウムの含有量 (%) を求める。

⑤ピロリン酸塩可溶アルミニウム (Alp)

微粉砕試料 300mg に 0.1M ピロリン酸ナトリウム溶液を 30ml 加え、16 時間振とうする。振とう後、0.4％高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、原子吸光光度計によりアルミニウム (Al) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのアルミニウムの含有量 (%) を求める。

⑶植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水･塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3. 結果

(1) 重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

結果を第 1 表、第 5 図に示す。重鉱物組成では、全試料とも斜方輝石、角閃石、不透明鉱物が主体をなし、微量～少量の単斜輝石を伴う。ただし、主体をなす鉱物の量比は層位によって異なっている。黄褐色土から下位暗褐色土下部まで (試料 16 ～ 12) は、多量の角閃石と中量の不透明鉱物という組成であり､斜方輝石は微量である。下位暗褐色土上部から上位褐色土にかけて (試料 11 ～８) は、上位ほど斜方輝石が多く、角閃石は少ない。不透明鉱物は中量であり、層位的な傾向は認められない。上位褐色土上部 (試料８) では斜方輝石の方が角閃石よりも多くなる。上位暗褐色土から黒褐色土下部まで (試料７～３) は､斜方輝石と不透明鉱物が同量程度に多く､角閃石は少量である。

第１表　重鉱物・火山ガラス比分析結果

層位	試料名	試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ザクロ石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
黒褐色土	サンプル1	2	0	75	26	6	0	0	0	0	142	1	250	77	0	14	159	250
		3	0	83	12	39	0	0	0	0	114	2	250	54	0	2	194	250
黒褐色土(漸移層)	サンプル2	4	0	101	15	46	0	1	0	0	85	2	250	61	0	8	181	250
		5	0	95	3	54	1	1	0	0	93	3	250	50	0	14	186	250
上位暗褐色土		6	0	98	4	42	1	0	0	0	105	0	250	60	0	10	180	250
		7	0	72	3	62	1	0	0	0	111	1	250	35	0	7	208	250
上位褐色土	サンプル3	8	0	103	1	62	0	1	0	0	82	1	250	47	0	3	200	250
		9	2	84	2	86	0	0	0	0	73	3	250	30	0	8	212	250
下位暗褐色土		10	0	65	2	80	1	0	0	1	101	0	250	18	0	4	228	250
		11	0	37	0	102	0	0	0	1	109	1	250	17	0	3	230	250
		12	0	14	0	143	0	1	0	2	88	2	250	10	0	1	239	250
	サンプル4	13	0	10	2	189	0	0	1	1	46	1	250	2	0	1	247	250
下位褐色土		14	0	12	0	153	0	1	0	0	84	0	250	4	0	0	246	250
黄褐色土		15	0	8	0	153	0	0	0	0	88	1	250	8	0	1	241	250
		16	0	5	1	141	0	0	0	1	102	0	250	1	0	0	249	250

黒褐色土上部 (試料２) では、多量の不透明鉱物と中量の斜方輝石および少量の単斜輝石からなり、角閃石は微量である。

火山ガラス比では、下位暗褐色土以下の層位ではバブル型火山ガラスが微量かほとんど含まれないが、下位暗褐色土上部から上位褐色土上部にかけて (試料 11 ～８) は上位ほどバブル型火山ガラスの多くなる傾向が認められる。上位暗褐色土下部 (試料７) では下位の試料に比べて若干バブル型火山ガラスが減少するが、上位暗褐色土上部 (試料６) では下位の試料よりも多くなり、その量比が黒褐色土下部 (試料３) まで続き、黒褐色土上部 (試料２) では、それよりも若干多くなる。バブル型火山ガラスはほとんどが無色透明であるが、微量の褐色を呈するものも認められる。なお、下位暗褐色土上部以上の層位には軽石型火山ガラスも微量含まれている。

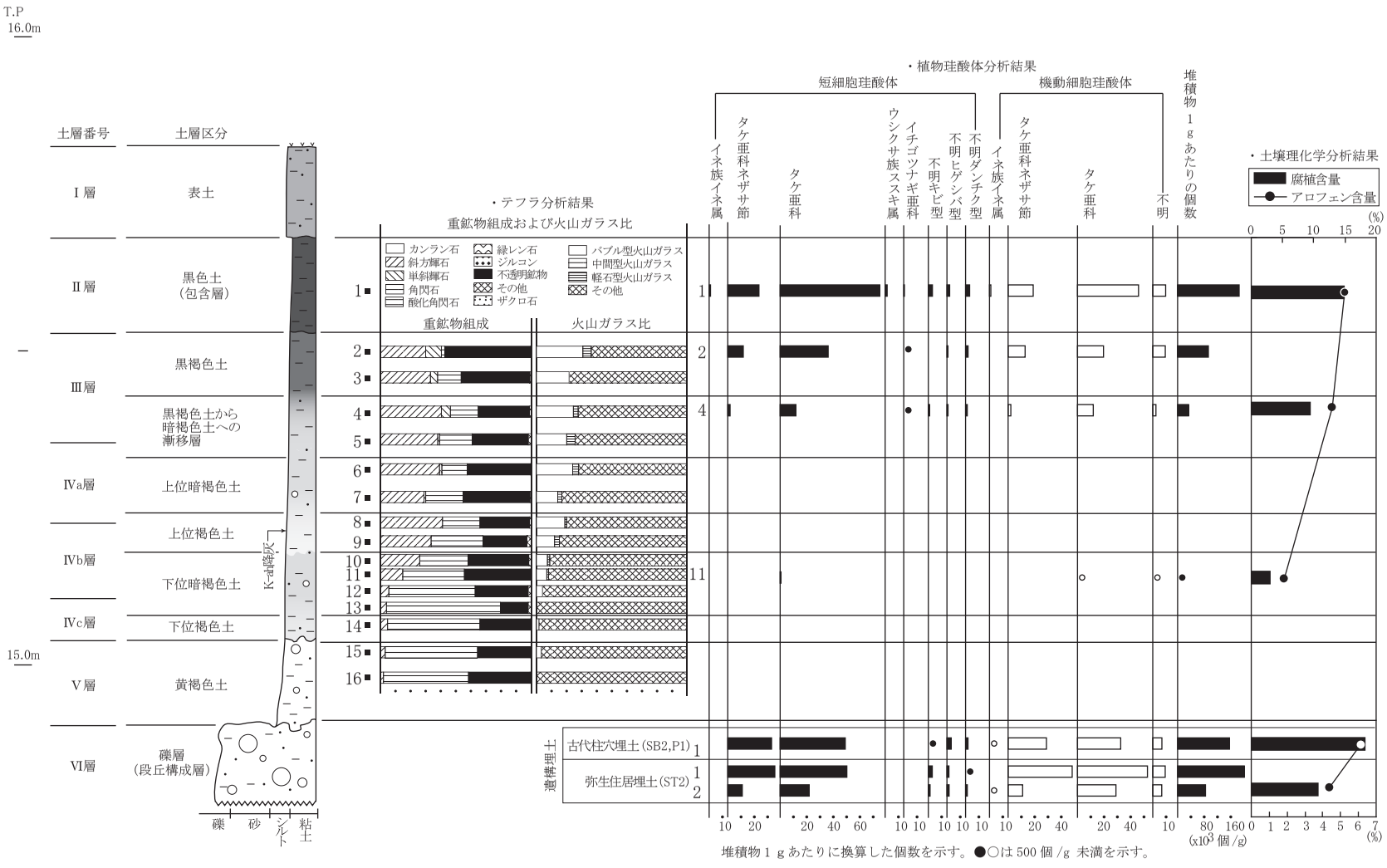
屈折率の測定は、試料８と試料２の２点におけるバブル型火山ガラスを対象とした。測定結果を図６に示す。試料８は、n1.506-1.515 のレンジを示し、n1.508-1.510 にモードがある。また、このレンジからはずれた低屈折率 (n1.499-1.500) の火山ガラスが微量混在する。試料２は、n1.508-1.515 のレンジを示し、モードは n1.510-1.512 である。試料２には、低屈折率の火山ガラスは認められない。

⑵土壌理化学分析

土壌理化学分析結果を第２表、第５図に示す。以下に項目ごとに述べる。

①土壌腐植の特性

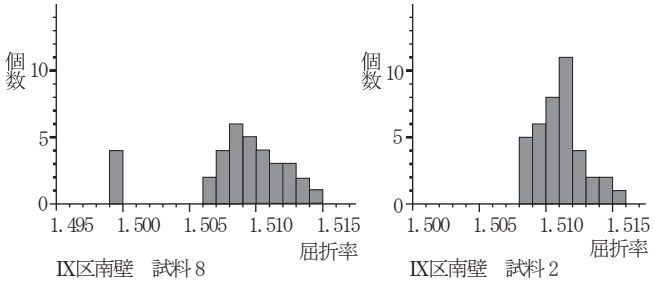
腐植含量は、試料 11 で 2.91%、試料４では 9.32%、試料１では 14.78%と増加する。腐植酸の型は、いずれもＡ型であり、腐植化度の高い腐植酸が集積している。ただし、試料 11 における Melanic



第５図　Ⅸ区南壁断面採取土壌、遺構埋土のテフラ・植物珪酸体・土壌理化学分析結果

Index 値 (MI 値) は 1.69 と試料 1 および４と比して大きいことから、試料 11 の腐植化の進行程度は試料 1 や 4 より低い状況にあることが推察される。

弥生時代住居跡 (Ⅸ ST2) 埋土２は、腐植含量は 10.56%、腐植酸の型はＡ型である。古代柱穴 (Ⅸ SB02,P1)　埋土 1 については、腐植含量は 18.14%、腐植酸の型はＡ型である。腐植の集積量が著しく多い特徴を示す。



第6図　火山ガラスの屈折率測定結果

②アロフェン質、非アロフェン質の区分

アロフェン質、非アロフェン質黒ボク土の類型区分は、三枝ら (1993) に従い、Alp/Alo 比、Sio 含量および粘土含量をもとに判定する。ただし、本調査では試料の土性 (野外土性) が軽埴土 (LiC) ～重埴土 (HC) であり、25%以上の粘土含量を有していることが推量されたため、粘土含量に関する分析調査は省略し、いずれの試料も粘土含量は８%以上の条件を満たすことを前提に判定を行った。

第２表　土壌化学分析結果

試料名(層位)	土性	土色		腐植含量 (%)	腐植の簡易分析		選択溶解分析					
					"Melanic Index"	腐植酸型	Sio (%)	Alo (%)	Alp (%)	Alp/Alo	(Alo-Alp)/Sio (mol.ratio)	アロフェン含量 (%)
試料 1(黒色土)	LiC	10YR2/1	黒	14.78	1.57	A	0.86	3.86	1.64	0.42	2.6	6.1
試料 4 (黒褐色土･漸移層)	LiC	10YR2/2	黒褐	9.32	1.59	A	0.63	3.04	1.44	0.47	2.5	4.5
試料11 (下位暗褐色土)	HC	10YR3/3	暗褐	2.91	1.69	A	0.25	1.67	0.60	0.36	4.3	1.8
弥生時代住居跡(ST2)埋土2	LiC	10YR2/1	黒	10.56	1.56	A	0.64	2.79	1.19	0.43	2.5	4.5
古代柱穴(SB2,P1)埋1	LiC	10YR1.7/1	黒	18.14	1.56	A	0.73	3.61	1.85	0.51	2.4	5.2

注.　(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

LiC･･･ 軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 45%、砂 10 ～ 55%）

HC･･･ 重埴土（粘土 45 ～ 100%、シルト 0 ～ 55%、砂 0 ～ 55%）

(3)Sio：酸性シュウ酸塩可溶ケイ素（Si)。

(4)Alo：酸性シュウ酸塩可溶アルミニウム（Al)。

(5)Alp：ピロリン酸塩可溶アルミニウム（Al)。

(6) アロフェン含量：Sio に 7.1 を乗じて算出。

第３表　土壌化学分析結果

Alp/Alo比	Sio含量(%)	粘土含量(%)	類型区分
≧0.5	-	-	非アロフェン質黒ボク土
＜0.5	≧0.5%	-	アロフェン質黒ボク土
	＜0.5%	≧8%	非アロフェン質黒ボク土
		＜8%	アロフェン質黒ボク土

第４表　植物珪酸体分析結果 (植物珪酸体含量)

(個 /g)

種　類		遺構･試料番号						
		Ⅸ区南壁採取試料				弥生時代住居 (Ⅸ ST2)埋土		古代柱穴 (Ⅸ SB2,P1)
		試料1	試料2	試料4	試料11	1	2	1
イネ科葉部短細胞珪酸体								
	イネ族イネ属	1,000	-	-	-	-	-	-
	タケ亜科ネザサ節	23,500	11,700	1,700	-	35,400	10,900	33,000
	タケ亜科	75,000	36,100	11,900	600	50,200	21,800	49,000
	ウシクサ族ススキ属	1,500	-	-	-	-	-	-
	イチゴツナギ亜科	500	400	200	-	-	-	-
	不明キビ型	3,100	-	900	-	3,000	1,300	500
	不明ヒゲシバ型	2,000	800	800	-	1,500	1,600	3,200
	不明ダンチク型	3,100	1,900	1,300	-	500	1,300	1,800
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
	イネ族イネ属	1,000	-	-	-	-	300	500
	タケ亜科ネザサ節	18,900	12,800	2,100	-	48,200	10,900	28,800
	タケ亜科	45,900	19,600	11,900	400	52,600	28,900	32,500
	不明	9,700	9,400	2,400	200	9,300	6,700	6,900
合　　計								
	イネ科葉部短細胞珪酸体	109,600	50,800	16,800	600	90,500	36,900	87,400
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	75,500	41,800	16,300	600	110,200	46,900	68,700
	総　計	185,100	92,500	33,100	1,200	200,700	83,900	156,100

含量は、10 の位で丸めている (100 単位にする)

なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

類型区分の基準を一覧としてまとめたものを表３に掲げたが、本基準に従えば試料１と４および弥生時代住居跡 (Ⅸ ST2) 埋土２はアロフェン質黒ボク土、試料 11 および古代柱穴１は非アロフェン質黒ボク土に区分される。ただし、古代柱穴 (Ⅸ SB02,P1) １に関しては Alp/Alo 比が区分基準の境界上にあることから、実際にはアロフェン質と非アロフェン質の中間的な性格を示していると捉えた方が妥当である。

③アロフェン含量

アロフェン含量は、Parfitt,R.L., and Wiison,AD.(1985) に従い、(Alo-Alp)/Sio 比および Sio 含量から求めた。アロフェンの Al/Si 比は (Alo-Alp)/Sio 比によって評価でき、普通１～２のものが大部分である。アロフェン含量は、(Alo-Alp)/Sio 比が１の場合には Sio 含量に５を、(Alo-Alp)/Sio 比が２の場合には Sio 含量に 7.1 を乗ずることによって求められる。

調査対象試料における (Alo-Alp)/Sio 比は試料 11 で 4.3 と大きいが、それ以外の試料では約 2.5 である。したがって、今回は Sio 含量に 7.1 を乗ずることによってアロフェン含量を推量し、結果を第２表に併記している。

アロフェン含量はアロフェン質黒ボク土に区分された試料１で 6.1%と最も多く、非アロフェン質黒ボク土に区分された試料 11 で 1.8%と少ない。

なお､試料 11 において (Alo-Alp)/Sio 比が高い値を示すのはアロフェンの生成量が少ないために、2:1 ～ 2:1:1 型中間種鉱物の層間のヒドロキシアルミニウムなどから溶解された Al が (Alo-Alp)/Sio 比に影響し、誤差を生じさせたためと思われる。

⑶植物珪酸体分析

結果を第４表、第５図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。すべての試料では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。イチゴツナギ亜科は、試料２、４、ススキ属は試料１にみられる。栽培種であるイネ属は、試料１、古代柱穴 (Ⅸ SB2,P1) 埋土、弥生時代住居跡 (Ⅸ ST2) 埋土２に認められる。南壁断面試料では、試料 11 の約 1,200 個 /g から試料１の約 18.5 万個 /g と上位に向かって植物珪酸体含量が急増する。弥生時代住居跡 (Ⅸ ST2) 埋土では、腐植含量の高い上位の埋土１で植物珪酸体含量が増える。

4. 考察

⑴テフラ層序

火山ガラス比分析により、Ⅸ区南壁断面の上位褐色土から少なくとも黒褐色土までの広い層位にわたってバブル型火山ガラスが多く含まれていることが確認された。試料８と試料２のバブル型火山ガラスは、屈折率のモードには若干のずれがあるもののレンジがほぼ一致することから、同一テフラに由来すると考えられ、その屈折率の値と形態および、高知県域における既存のテフラの分布 (例えば町田・新井 ,2003) などから、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah: 町田・新井 ,1978) に由来すると考えられる。なお、試料８における微量の低屈折率の火山ガラスは、その形態と屈折率から、姶良 Tn 火山灰 (AT: 町田・新井 ,1976) に由来する可能性がある。

K-Ah の噴出年代については、町田・新井 (1978) 以来、放射性炭素年代である 6300 年前という年代が広く知られている。ただし最近では、第四紀学および考古学において放射性炭素年代をそのまま使用するのではなく、それを「換算」した暦年代が使用されることが多い。また、湖底堆積物における年縞による K-Ah の年代も推定されている (福沢 ,1995)。これらのことから、K-Ah の噴出年代については暦年代である 7300 年前という年代が表示されるようになってきている (例えば町田・新井 (2003) など)。また、AT の噴出年代については、80 年代後半から 90 年代にかけて行われた放射性炭素年代測定 (例えば松本ほか (1987)、村山ほか (1993)、池田ほか (1995)、宮入ほか (2001) など) から、放射性炭素年代ではおよそ 2.5 万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおける AT の発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ 2 と 3 との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は 2.5 ～ 3.2 万年前におよぶとされている (町田・新井 ,2003)。町田・新井 (2003) は、AT の放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく 2.6 ～ 2.9 万年前頃になるであろうとしている。

町田・新井 (2003) に描かれた K-Ah と AT の等層厚線図によれば、高知市付近は、K-Ah は 20 ～ 30㎝、AT は 50 ～ 20㎝の範囲に入る。この分布状況から、高知市付近では、K-Ah も AT もほぼ同程度あるいは AT の方がやや多い降灰量であったことが推定される。したがって、離水後の長岡台地に K-Ah と AT の両テフラの降灰があった場合には、その後の撹乱と再堆積を受けたとしても、両テフラの降灰を示唆する２層準の火山ガラス比の濃集層準が明瞭に検出されると考えられる。しかし、今回の土壌断面では、試料８における AT の火山ガラスは K-Ah に対して微量であり、火山ガラス全体の量比の層位変化をみても試料８より下位に濃集層準は認められない。したがって、今回の土壌断面では AT の降灰層準は存在しない。すなわち、AT の降灰は、長岡台地が離水

する以前であったと考えられる。試料８で検出されたATの火山ガラスは、周辺から供給された風成砕屑物中に混在していたものであると考えられる。

分析結果により示された火山ガラス比の層位的変化は、K-Ahの降灰とその後の撹乱および再堆積を示している。このように土壌中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている(早津,1988)。今回の断面では、やや不明瞭ではあるが、最濃集部の下限を上位褐色土上部の試料８付近に認めることができる。したがって、K-Ahの降灰層準は上位褐色土上部に推定することができる。

このことは、同時に行った重鉱物組成からも支持される。長岡台地の地質学的背景は、物部川流域に分布する物部川層群や秩父帯および四万十帯などほとんど堆積岩類からなる地質である(日本の地質「四国地方」編集委員会(1991)など)から、土壌中から検出された輝石類や角閃石などの重鉱物は、台地の基盤や周辺の河川砂に由来するものではないと考えられる。基盤以外の由来としては、遠隔地から飛来して降下堆積したテフラを考えることができる。すなわち、重鉱物組成により検出された重鉱物のほとんどはテフラに由来する可能性が高い。この場合、累積成土壌における層位的な重鉱物組成の変化は、長岡台地におけるテフラの降灰を反映している可能性がある。K-Ahは輝石デイサイト質テフラとされており、その重鉱物組成は斜方輝石(紫蘇輝石)が多く、単斜輝石(普通輝石)と不透明鉱物(強磁性鉱物)を伴うとされている。今回の分析では、上位褐色土上部から下位暗褐色土下部にかけて斜方輝石が下位に向かって減少する傾向が認められるが、それと同様の層位で火山ガラスが同様に下位に向かって減少する傾向が認められる。このことは、火山ガラスと斜方輝石とが同じテフラすなわちK-Ahに由来することを示唆しており、その量比の層位的変化はK-Ahの産状を示していると考えられる。斜方輝石の量比の高い層位の下限も試料８にあり、上述した火山ガラスから推定されたK-Ahの降灰層準と一致する。なお、角閃石はK-Ahにはほとんど含まれることはないため、K-Ah降灰以前に長岡台地およびその周辺域に降灰した様々なテフラに由来するものが混在していると考えられる。また、今回の土壌断面では、上位褐色土は、その上下を暗褐色土に挟まれているが、K-Ahの降灰の影響により、この層位だけ色調が明るくなっていると考えることもできる。

以上のことから、長岡台地の離水は、AT降灰以降であると考えられるが、K-Ahの降灰よりはかなり以前であったと考えられる。また、今回の調査区南壁断面を構成する土壌をいわゆる黒ボク土層とローム層としてみるならば、ローム層の上部にK-Ahの降灰層準があるということができる。日本におけるいわゆる火山灰土としてのローム層の代表とされている関東ローム層の分布域では、指標テフラの産状から、黒ボク土層の下限すなわちローム層の上限の年代として約１万年前という例が多いが、それに比べると長岡台地におけるローム層上限の年代は約3000年ほど新しいことになる。このことは、黒ボク土層とローム層との層界が広域的な年代対比指標にはならないことを示唆している。

⑵土壌の特性

松山･三枝(1994)は西日本における黒ボク土について、アロフェン質と非アロフェン質の分布は、気候条件だけではなく、完新世テフラの堆積状況と密接に関係しているとした。すなわち、テフラの風化により多量に供給されたアルミニウムが腐植と結合する他にケイ素とも結合し、アロフェ

ンを形成すると考えられている。同著による調査では、高知県に分布する黒ボク土のほとんど(約94%)は、非アロフェン質に分類されており、これは完新世テフラの影響の少ないことを反映していると説明されている。

今回の分析では、試料１と４の黒色土および黒褐色土(漸移層)はアロフェン質に分類された。これは、火山ガラス比分析により、この層位に比較的多量のK-Ahに由来する火山ガラスが含まれていたことから、火山ガラスによる多量のアルミニウムの供給が原因であると考えられる。K-Ahは、噴出時には高知県全域にほぼ同量の降灰があったはずであるが、上述のように高知県下の黒ボク土のほとんどは非アロフェン質を示している。長岡台地上の黒ボク土が特にアロフェン質である理由として、既に離水した地形面であることから、K-Ah降灰後もその火山ガラスの流失が他の沖積氾濫原よりも少なかったということが考えられる。試料11の下位暗褐色土は、非アロフェン質に分類されたが、火山ガラスが微量しか含まれない層位であることと整合する結果と言える。

なお、試料１、４、11のいずれも、土性区分から推量される粘土含量は25%以上であるが、アロフェン含量はこの半量にも満たない。試料11については言うまでもないが、アロフェン質とされた試料に関してもアロフェン以外の結晶性粘土鉱物が比較的多く存在する可能性があると考えられる。

ところで、各層位の腐植含量は、その色調に従い、黒いほど高い傾向が明瞭に認められた。これは、長岡台地における土壌の黒い色調は、腐植含量に起因することを示唆している。腐植の由来は、当時の表層に繁茂していた植生が主体とされるが、腐植含量の少ない試料11の下位暗褐色土形成時の植生が、黒褐色土や黒色土形成時の植生に比べて必ずしも貧弱であったことを示すものではない。累積成の土壌では下位の土壌ほど経年変化を長く受けており、その影響により腐植含量も減少する可能性があるからである。後述するように植物珪酸体の産状からも下位暗褐色土と黒褐色土・黒色土との植生の違いは現時点では明瞭ではない。

⑶遺構埋土の由来

弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土２の土壌理化学性は、今回分析した調査区南壁断面試料の中では試料４(黒褐色土(漸移層))に近似する。特に、色調の主な由来と考えられる腐植含量が近い値を示すことから、弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土２の薄い土色とは、黒色土に比べればやや少ない腐植含量に起因すると考えられる。層相から、弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土２については、住居廃絶後に周囲から流入した住居構築物に関係する堆積物や埋め戻し土が含まれると推測される。土壌理化学分析結果については、このような堆積物の成因を反映したものと判断される。なお、弥生時代住居跡埋土１については、黒褐色を呈し、遺構廃絶時に地表を構成していた黒ボク土に由来するものと思われる。本層については、重力性の土壌クリープなどの営力で住居内を埋積した自然堆積層である可能性が示唆される。ただし、黒ボク土を主体とする人為的な埋め戻し土であることも想定される。この点については、土壌薄片や軟Ｘ線写真による住居埋土の堆積・土壌構造の詳細な観察・分析によって検証していくことが課題である。

古代柱穴（Ⅸ SB2,P1）埋土１の腐植含量は、試料１の黒色土よりも高く、その黒い色調も腐植含量に由来すると考えられる。これについては、柱穴埋土ないし柱抜き取り後の流入土が地表を構成する黒ボク土に由来するためと推察される。

比較対照とされた古代柱穴（Ⅸ SB2,P1）埋土１の腐植含量は、試料１の黒色土よりも高く、そ

の黒い色調も腐植含量に由来すると考えられる。ただし、古代柱穴（Ⅸ SB2,P1）埋土１はアロフェン質と非アロフェン質の中間的な性格を示しており、今回分析した調査区南壁断面試料の中には、その由来となった層位は認められない。この点については、現段階で要因が不明であり、今後の検討課題としたい。

⑷古植生について

試料 11 の下位暗褐色土ではタケ亜科などがわずかに認められたに過ぎず、詳細な植生を検討することが難しい。

試料４～１の黒褐色土 (漸移層) から黒色土では、ネザサ節をはじめとしてイチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと考えられる。産出の目立ったネザサ節を含むタケ亜科は乾いた土地条件を好むことから、遺跡の立地と調和的と言える。なお、今回の植物珪酸体分析結果のみでは、長岡台地上の植生景観を復原することが難しい。今後、台地を開析する谷部において、花粉分析や種実分析を行い、さらに古植生について検討を進めていければと思う。

弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土や古代柱穴（Ⅸ SB2,P1）埋土では、イネ属の植物珪酸体が検出されている。本遺跡周辺は、これらの時期に水田立地に適した場所でなかったと推測され、周囲に水田が広がっていた景観を想定することが難しい。従って、これらのイネ属については、人間が調査区内へ持ち込んだイネに由来するものと判断される。この点については、埋土の水洗別による種実遺体の回収も併せて行い、さらに検討を進めていくことが必要であろう。

5. 小結

・上位褐色土では、AT と K-Ah の火山ガラスの混在が確認された。ただし、火山ガラスの屈折率から推定される両テフラの量比、火山ガラスと重鉱物組成の層位的な分布から、K-Ah 降灰層準が上位褐色土上部の試料８付近である可能性が示唆された。

・上記のテフラ層序から、長岡台地の離水は、AT 降灰以降であると考えられるが、K-Ah の降灰よりはかなり以前であることが推測された。この点については、今後、本台地や周辺の台地での類例蓄積をふまえ、台地におけるテフラクロノロジーの観点から、検証していくことが課題である。

・既往の分析結果では、高知県下のほとんど地域において、完新世テフラの影響の少ない非アロフェン質黒ボク土が分布するとされるが、試料１と４の黒色土および黒褐色土 (漸移層) は、アロフェン質黒ボク土に分類された。この要因については、テフラ降灰時期に既に離水していた長岡台地の地形的特性によるものと判断された。

・弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土２は、住居廃絶後に周囲から流入した住居構築物に関係する堆積物や埋め戻し土が含まれる可能性が示唆された。

・古代柱穴（Ⅸ SB2,P1）埋土１は、柱穴埋土ないし柱抜き取り後の流入土が地表を構成する黒ボク土に由来すると考えられた。

・調査区周辺では、ネザサ節をはじめとしてイチゴツナギ亜科などのイネ科の草本植物が生育していたと考えられ、地形から判断される土地環境とも調和的な化石群集であった。

・弥生時代住居跡（Ⅸ ST2）埋土や古代柱穴（Ⅸ SB2,P1）埋土で産出したイネ属は、分析地点周辺へ人為的に持ち込まれたイネに由来するものと推定された。

引用文献

土壌標準分析・測定法委員会編 ,1986, 土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.

福沢仁之 ,1995, 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物 . 第四紀研究 ,34,135-149.

古澤明 ,1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.

早津賢治 ,1988, テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー -AT にまつわる議論に関係して -. 考古学研究 ,34,18-32.

本名俊正・山本定博 ,1992, 腐植の簡易分析法 . 土壌構成成分解析法 . 博友社 ,7-35.

池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 ,1995, 南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による 14 Ｃ年代 . 第四紀研究 ,34,377-379.

近藤錬三 ,2004, 植物ケイ酸体研究 . ペドロジスト ,48,46-64.

町田洋・新井房夫 ,1976, 広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－ . 科学 ,46,339-347.

町田洋・新井房夫 ,1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰 . 第四紀研究 ,17,143-163.

町田洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 ,1987, 姶良Ｔｎ火山灰の 14 Ｃ年代 . 第四紀研究 ,26,79-83.

松山信彦・三枝正彦 ,1994, 西日本におけるアロフェン質黒ボク土と非アロフェン質黒ボク土の分布 . ペドロジスト ,38,2-9.

宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎 ,2001, 姶良Ｔｎ火山灰のＣ -14 年代のクロスチェック (演旨). 地球惑星科学関連学会合同大会予稿集 (CD-ROM),2001,Qm-010.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安尚登・平朝彦 ,1993, 四国沖ピストンコア試料を用いたＡＴ火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14 Ｃ年代－ . 地質学雑誌 ,99,787-798.

日本の地質「四国地方」編集委員会 ,1991, 日本の地質 8　四国地方 . 共立出版 ,266p.

農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

太田陽子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編 ,2004, 日本の地形 6　近畿・中国・四国.　東京大学出版会 ,383p.

Parfitt,R.L. and Wiison,AD.,1985.Estimation of allophone and halloysite in three sequences of volcanic

soils.Catena Suppl,7,1-8.

ペドロジスト懇談会 ,1984, 野外土性の判定 . ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック , 博友社 ,39-40.

Reeuwijk,L.P.van,1986,PROCEDERES FOR SOIL ANALYSIS.International Soil Reference and Information Centre.106p.

三枝　正彦・松山　信彦・阿部　篤郎 ,1993. 東北地方におけるアロフェン質黒ボク土と非アロフェン質黒ボク土の分布 . 土肥試 ,64,423-430.

辻康男・田中義文・馬場健司・松元美由紀・高橋敦 ,2007, 介良野遺跡の自然科学分析 . 高知県埋蔵

文化財センター発掘調査報告書第 100 集　介良野遺跡－県道高知東インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ ,(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター ,163-194.

文 献

参考論文

池澤俊幸、1997、高知平野における古墳時代後期の竪穴住居について－カマドより見た予察－、下ノ坪遺跡Ⅰ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、115 － 124 頁

池澤俊幸、2001、四万十川下流域における古代の土器、具同中山遺跡群Ⅳ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、385 － 405 頁

池澤俊幸、2000、ユニット出土の土器、2000、下ノ坪遺跡Ⅲ、高知県野市町教育委員会、67 － 73 頁

池澤俊幸、2000、土佐からみた平安時代の土器、中近世土器の基礎研究 XV、日本中世土器研究会、121 － 150 頁

池澤俊幸、1998、南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心として－、下ノ坪遺跡Ⅱ、高知県野市町教育委員会、222 － 262 頁

池澤俊幸、2000、土佐における古代前期の建物群－研究の現状と課題－、古代文化第 52 巻第 6 号、古代学協会、44 － 52 頁

池澤俊幸、2000、土佐における古代前期の建物群、古代文化第 52 巻第 6 号、古代学協会、368 － 376 頁

池澤俊幸、2006、土佐の古代遺跡と南海道、特別企画展記念シンポジウム古代の南海道を考える、徳島市考古資料館、120 － 139 頁

池澤俊幸、1998、4. 下ノ坪遺跡出土の八稜鏡、「緑釉単彩陶器」、古代掘立柱建物跡、下ノ坪遺跡Ⅱ、高知県野市町教育委員会、263 － 265 頁

泉　幸代、1996、小籠遺跡出土の搬入品について－弥生時代終末～古墳時代初頭、小籠遺跡Ⅱ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、134 － 139 頁

大脇保彦、1982、土佐の条里、高知の研究２、清文堂、7 － 39 頁

岡本健児、1979、第二章 弥生前期時代、南国市史上巻、高知県南国市、67 － 180 頁

岡本健児、1979、第３編 古代、南国市史上巻、高知県南国市、451 － 461 頁

金田章裕、1985、条里と村落の歴史地理学研究、大明堂

久家隆芳、2006、田村遺跡群出土の南四国型甕、田村遺跡群Ⅱ第 9 分冊、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、197 － 205 頁

久家隆芳、2007、高知県中央部における弥生～古墳時代の集落について、土佐山田史談第 31 号、土佐山田史談会、23 － 32 頁

坂本憲昭、2006、弥生時代中後期の土器群、田村遺跡群Ⅱ第 9 分冊、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、171 － 195 頁

島田豊寿、1979、第３編 古代 第２章第３節条里、南国市史上巻、高知県南国市、336 － 372 頁

島田豊寿、1979、第１編 地理、南国市史上巻、高知県南国市、1 － 31 頁

田川　憲、2004、大柿遺跡出土の土師器の編年について、大柿遺跡Ⅱ、（財）徳島県埋蔵文化財センター、135 － 155 頁

竹崎　仁、2004、古代土佐国における物部川流域の歴史地理学的考察、土佐山田史談第 28 号、土佐山田史談会、54 － 84 頁

武吉眞裕、2000、里改田遺跡、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

田辺昭三、1981、須恵器大成、角川書店

出原恵三、1993、ST5・6 出土の古式土師器について、拝原遺跡、高知県香我美町教育委員会、55 － 59 頁

出原恵三、1996、小籠遺跡出土の弥生後期土器及び古式土師器、小籠遺跡Ⅱ、（財）高知県文化財団埋蔵文化

財センター、130 － 133 頁
出原恵三、1996、小籠遺跡出土の古代土器について、小籠遺跡Ⅱ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、144 － 152 頁
出原恵三、1997、高知平野の古式土師器Ⅰ・Ⅱ期について、小籠遺跡Ⅲ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、165 － 168 頁
出原恵三、1997、搬入土器について、下ノ坪遺跡Ⅰ、高知県野市町教育委員会、202 － 204 頁
出原恵三、1997、下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落、下ノ坪遺跡Ⅰ、高知県野市町教育委員会、200 － 208 頁
出原恵三、2000、土佐地域、弥生土器の様式と編年－四国編－、木耳社、367 － 435 頁
出原恵三・満塩大洸、2000、高知県における後期更新世・完新世の環境変化－第四紀地質学的及び考古学的成果から－、高知大学学術研究報告 第 49 巻 自然科学、高知大学、67 － 110 頁
出原恵三・満塩大洸、2001、第四紀（人類世紀）における高知県の環境変遷－自然環境と考古学遺跡の変遷史－、高知大学黒潮圏研究所 所報特別号№ 11、高知大学黒潮圏研究所、3 － 78 頁
出原恵三、2002、考察竪穴住居跡の廃絶について、林田遺跡Ⅱ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、29 － 37 頁
出原恵三、2004、高知平野西部の古代土器、馬場末遺跡、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、98 － 110 頁
筒井三菜、2006、Ⅸ 古代の掘立柱建物跡と遺物、田村遺跡群Ⅱ 第 9 分冊 総論、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、315 － 341 頁
徳平涼子、2010、カマド跡について、伏原遺跡Ⅰ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、102 頁
中村　浩、1981、和泉陶邑窯の研究、柏書房
浜田恵子、2001、具同中山遺跡群Ⅳ出土の弥生時代から古墳時代初頭の土器、具同中山遺跡群Ⅳ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、362 － 380 頁
廣田典夫、1979、考古編、土佐山田町史、高知県土佐山田町、37 － 154 頁
廣田佳久、1995、南四国の須恵器－周辺地域における須恵器の変遷－、王朝の考古学大川清博士古稀記念論集、雄山閣、352 － 373 頁
廣田佳久、2008、第Ⅳ章考察 4. 古代、西野々遺跡Ⅰ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、208 － 209 頁
藤川智之、2004、大柿遺跡出土須恵器の型式分類と編年、大柿遺跡Ⅱ、（財）徳島県埋蔵文化財センター、119 － 134 頁
前田和男、1979、古代の山田郷と条里、土佐山田町史、高知県土佐山田町、155 － 174 頁
前田光雄、2000、第 4 節 1 古代駅家について、松ノ木遺跡Ⅴ、高知県本山町、13 － 15 頁
前田光雄、2000、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の土器と集落、松ノ木遺跡Ⅴ、高知県本山町教育委員会、303 － 307 頁
前田光雄、2006、田村遺跡群弥生時代中後期の集落、田村遺跡群Ⅱ第 9 分冊、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、97 － 136 頁
松村信博、2001、奥谷南遺跡Ⅲ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
山本純代、1999、高知平野の弥生墓制、奥谷南遺跡Ⅰ、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター、173 － 185 頁

報告書等

大柿遺跡Ⅱ、2004、（財）徳島県埋蔵文化財センター
奥谷南遺跡Ⅰ、1999、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

奥谷南遺跡Ⅲ、2001、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
具同中山遺跡群Ⅳ、2001、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
小籠遺跡Ⅱ、1996、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
小籠遺跡Ⅲ、1997、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
小籠北遺跡、1999、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
栄エ田遺跡、1995、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
里改田遺跡、2000、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
下ノ坪遺跡Ⅰ、1997、高知県野市町教育委員会
下ノ坪遺跡Ⅱ、1998、高知県野市町教育委員会
下ノ坪遺跡Ⅲ、2000、高知県野市町教育委員会
新改西谷遺跡、2002、高知県土佐山田町教育委員会
陣山遺跡・陣山北三区遺跡、1997、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
須江上段遺跡松ノ本地区、2004、高知県土佐山田町教育委員会
田村遺跡群Ⅱ、2004 − 2006、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
土佐国衙発掘調査報告書第 2 集、1981、高知県教育委員会
土佐国衙発掘調査報告書第 3 集、1982、高知県教育委員会
土佐国衙発掘調査報告書第 5 集、1984、高知県教育委員会
土佐国衙発掘調査報告書第 9 集、1988、高知県教育委員会
土佐国衙発掘調査報告書第 12 集、2001、高知県南国市教育委員会
土佐神社西遺跡・土佐神社、2006、高知県高知市教育委員会
土佐山田町史、1979、高知県土佐山田町
ナシヶ森遺跡、2001、高知県大月町教育委員会
南国市史上巻、1979、高知県南国市
西分増井遺跡Ⅱ、2004、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
拝原遺跡、1993、高知県香我美町教育委員会
林田遺跡Ⅲ、2005、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
馬場末遺跡、2004、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
東崎遺跡Ⅰ、1991、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
ひびのきサウジ遺跡、1990、高知県土佐山田町教育委員会
伏原遺跡Ⅰ、2010、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
深渕遺跡発掘調査報告書、1989、高知県野市町教育委員会
辺路石南遺跡・五反地遺跡、1999、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
松ノ木遺跡Ⅴ、2000、高知県本山町教育委員会
山田三ツ又遺跡、1997、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

写真図版

Ⅷ区合成写真

写真１

遺跡空撮・Ⅷ Ｂ区　西より

写真２

遺跡空撮・Ⅷ Ｂ 区　東より

遺跡空撮・Ⅷ Ｂ 区　南より

長岡台地　西より

長岡台地　岡豊城より

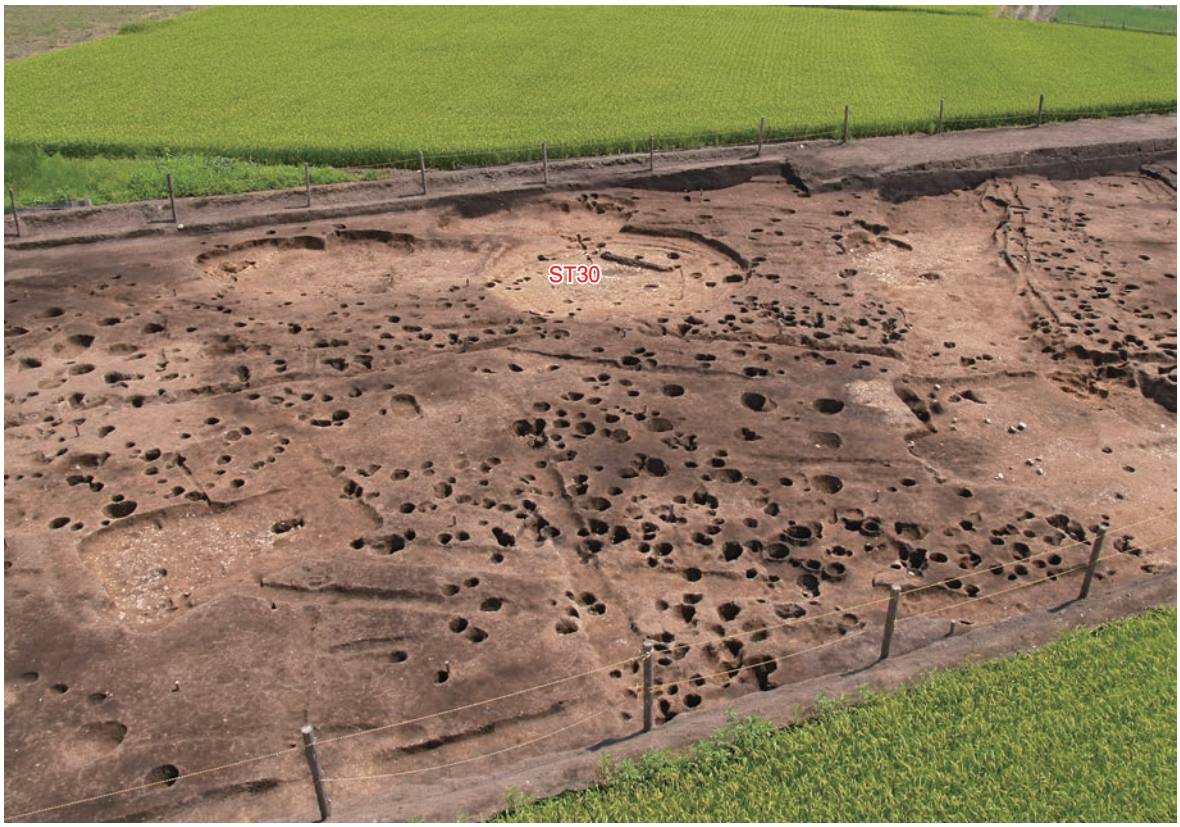
写真４

Ⅷ AW 区空撮上層　西上より

Ⅷ AW 区空撮下層　西上より

写真６

Ⅷ AE 区空撮下層　西上より



Ⅷ AE 区全景下層　北より

Ⅷ AW 区全景下層　西より

写真８

Ⅷ BW 区空撮下層　西上より

Ⅷ BW 区全景上層　西より

Ⅷ BW 区全景下層　西より

写真10

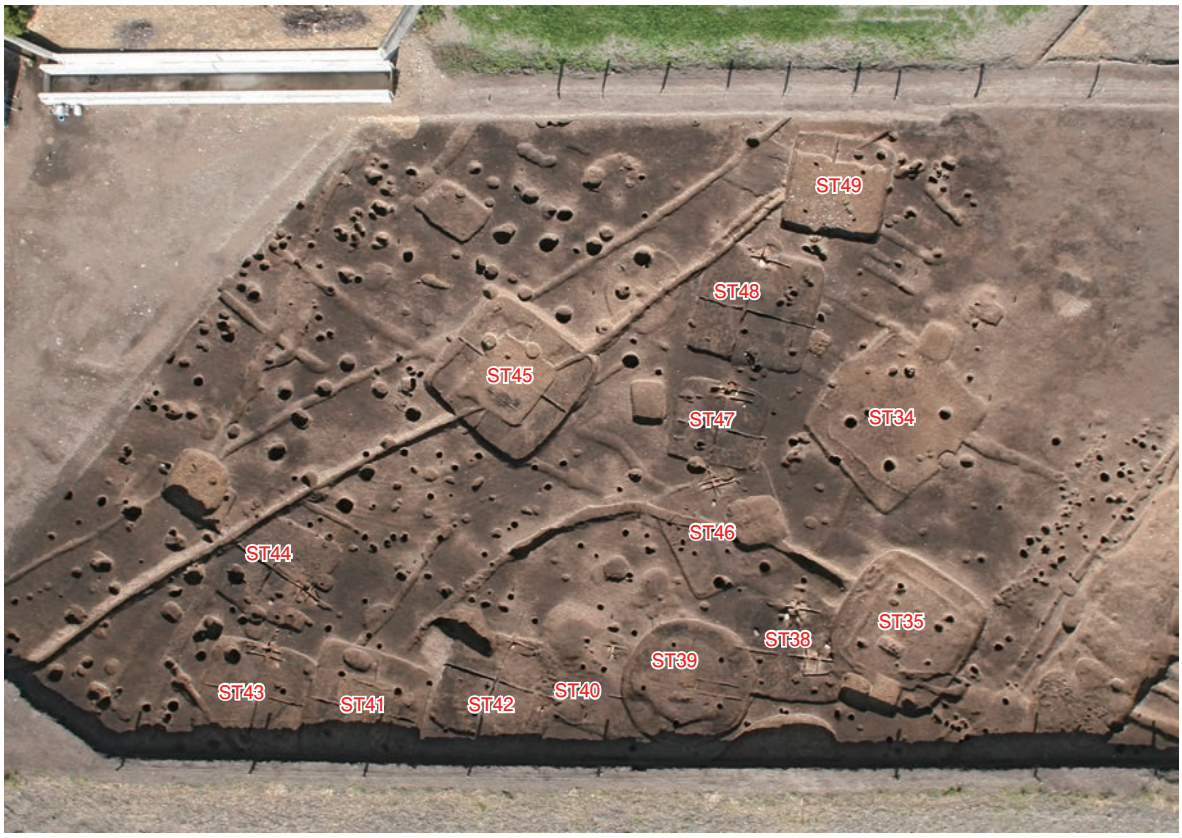
Ⅷ BE 区空撮上層　西上より

Ⅷ BE 区空撮下層　西上より

写真12

Ⅷ BE 区全景上層　西より

Ⅷ BE 区全景下層　東より



Ⅷ AW 区 ST 群空撮　南上より

Ⅷ AE 区 ST 群空撮　南上より

写真14

Ⅷ BW 区 ST 群空撮　南上より

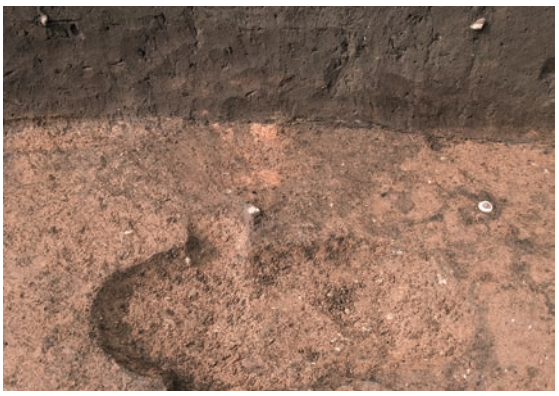
Ⅷ BE 区 ST 群空撮　南上より

Ⅷ B 区 ST1 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST1 土層　東より

Ⅷ B 区 ST1 土層・遺物　南より

Ⅷ B 区 ST1 完掘　南より



Ⅷ B 区 ST1 炉跡　南より

写真16

Ⅷ B 区 ST2 完掘　北より

Ⅷ B 区 ST2 土層南北　東より

Ⅷ B 区 ST2 土層東西　北より

Ⅷ B 区 ST2 炉跡　北より

Ⅷ B 区 ST2 遺物　北より

Ⅷ B 区 ST2 遺物　西より

Ⅷ B 区 ST2 遺物鉢

Ⅷ B 区 ST3 完掘　北上より

Ⅷ B 区 ST3 土層　南より

Ⅷ B 区 ST3 遺物　東より

写真18

Ⅷ B 区 ST5 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST5 土層東西　南より

Ⅷ B 区 ST5 遺物　北より

Ⅷ B 区 ST5 カマド　南より

Ⅷ B 区 ST5 カマド　南上より

Ⅷ B 区 ST6 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST6 土層　南より

Ⅷ B 区 ST6 炉跡　南より

Ⅷ B 区 ST6 遺物　西より

Ⅷ B 区 ST6 遺物　南より

写真20

Ⅷ B 区 ST7 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST7 土層　北より

Ⅷ B 区 ST7 柱穴跡　北より

Ⅷ B 区 ST7 カマド　西より

Ⅷ B 区 ST7 カマド　南より

Ⅷ B 区 ST8 完掘　北より

Ⅷ B 区 ST9・ST10 完掘　西上より

写真22

Ⅷ B 区 ST9 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST9 完掘　北より

Ⅷ B 区 ST9 土層　南東より

Ⅷ B 区 ST9 炉跡土層　南より

Ⅷ B 区 ST9 遺物　西より

Ⅷ B 区 ST10 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST10 完掘　南より

Ⅷ B 区 ST10 土層　南東より

Ⅷ B 区 ST10 炉跡炭化物　北より

Ⅷ B 区 ST10 炉跡　南より

写真24

Ⅷ B 区 ST11 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST11 土層　南東より

Ⅷ B 区 ST11 焼土・遺物　北西より

Ⅷ B 区 ST11 炉跡　北より

Ⅷ B 区 ST11 炭化材　南より

Ⅷ B 区 ST12 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST12 完掘　南より

Ⅷ B 区 ST12 土層　南より

Ⅷ B 区 ST12 カマド　西より

Ⅷ B 区 ST12 カマド　南より

写真26

Ⅷ B 区 ST13 完掘　北上より

Ⅷ B 区 ST13 土層　北東より

Ⅷ B 区 ST13 遺物　東より

Ⅷ B 区 ST13 焼土・遺物　東より

Ⅷ B 区 ST13 鉄鏃

Ⅷ B 区 ST14 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST14 完掘　北より

Ⅷ B 区 ST14 土層　南西より

Ⅷ B 区 ST14 炉跡　南より

Ⅷ B 区 ST14 遺物　南より

写真28

Ⅷ B 区 ST17 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST17 完掘　南より

Ⅷ B 区 ST17 カマド　南西より

Ⅷ B 区 ST17 カマド　南より

Ⅷ B 区 ST17 遺物

Ⅷ B 区 ST18 完掘　北西より

Ⅷ B 区 ST18 土層　西より

Ⅷ B 区 ST19 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST19 土層　東より

Ⅷ B 区 ST19 土層　南西より

写真30

Ⅷ B 区 ST20 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST20 完掘　西南より

Ⅷ B 区 ST20 土層　西南より

Ⅷ B 区 ST20 カマド　南より

Ⅷ B 区 ST20 鉄鏃

Ⅷ B 区 ST23 完掘　東上より

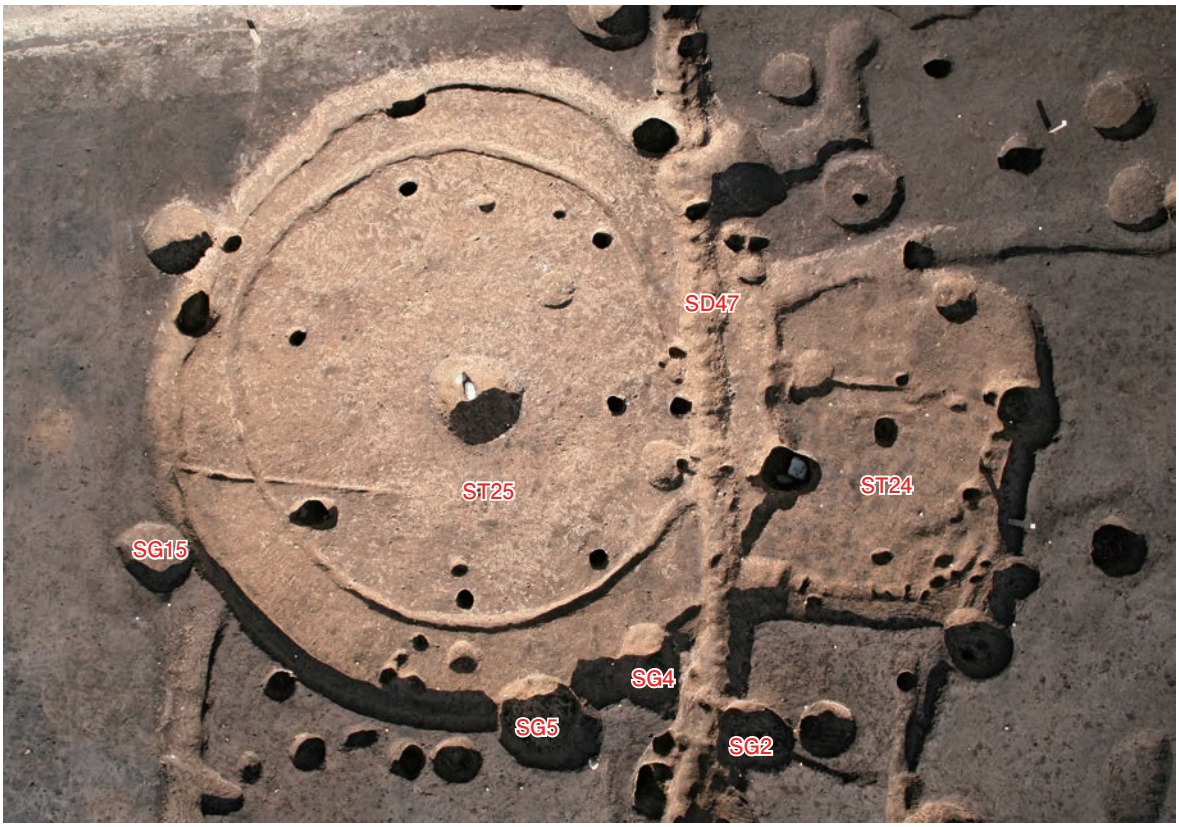
Ⅷ B 区 ST23 完掘　西より

Ⅷ B 区 ST23 土層　東北より

Ⅷ B 区 ST23 カマド　東より

Ⅷ B 区 ST23 遺物

写真32



Ⅷ B 区 ST24・ST25 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST24 土層　南東より

Ⅷ B 区 ST24 カマド　南より

Ⅷ B 区 ST24・ST25 検出　西より

Ⅷ B 区 ST25 土層　東南より

Ⅷ B 区 ST25 完掘　西南より

Ⅷ B 区 ST25 遺物　西より

Ⅷ B 区 ST25 炉跡土層　南より

Ⅷ B 区 ST25 柱穴

Ⅷ B 区 ST25 遺物

写真34

Ⅷ A 区 ST26 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST26 完掘　南より

Ⅷ A 区 ST26 土層　西より

Ⅷ A 区 ST26 遺物　北より

Ⅷ A 区 ST26 カマド　南より

Ⅷ A 区 ST30 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST30 完掘　南西より

写真36

Ⅷ A 区 ST30 完掘　東より

Ⅷ A 区 ST30 焼土・炭化材　西より

Ⅷ A 区 ST30 土層　南より

Ⅷ A 区 ST30 土層　南西より

Ⅷ A 区 ST30 遺物　西より

Ⅷ A 区 ST30 遺物　南より

Ⅷ A 区 ST30 遺物 1

Ⅷ A 区 ST30 遺物 2

Ⅷ A 区 ST30 遺物 3

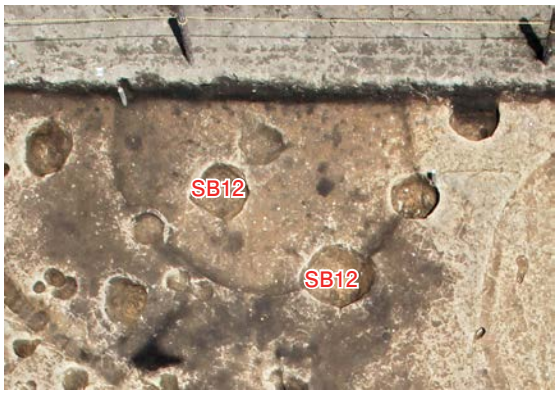
Ⅷ A 区 ST30 遺物 4

Ⅷ A 区 ST30 炭化材　西より

Ⅷ A 区 ST30 炉跡　北より

Ⅷ A 区 ST32 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST32 土層　北西より



Ⅷ A 区 ST33 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST33 土層　南より

写真38

Ⅷ A 区 ST34 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST34 完掘　南西より

Ⅷ A 区 ST34 土層　南より

Ⅷ A 区 ST34 カマド　東より

Ⅷ A 区 ST34 カマド完掘　東より

Ⅷ A 区 ST35 完掘　南より

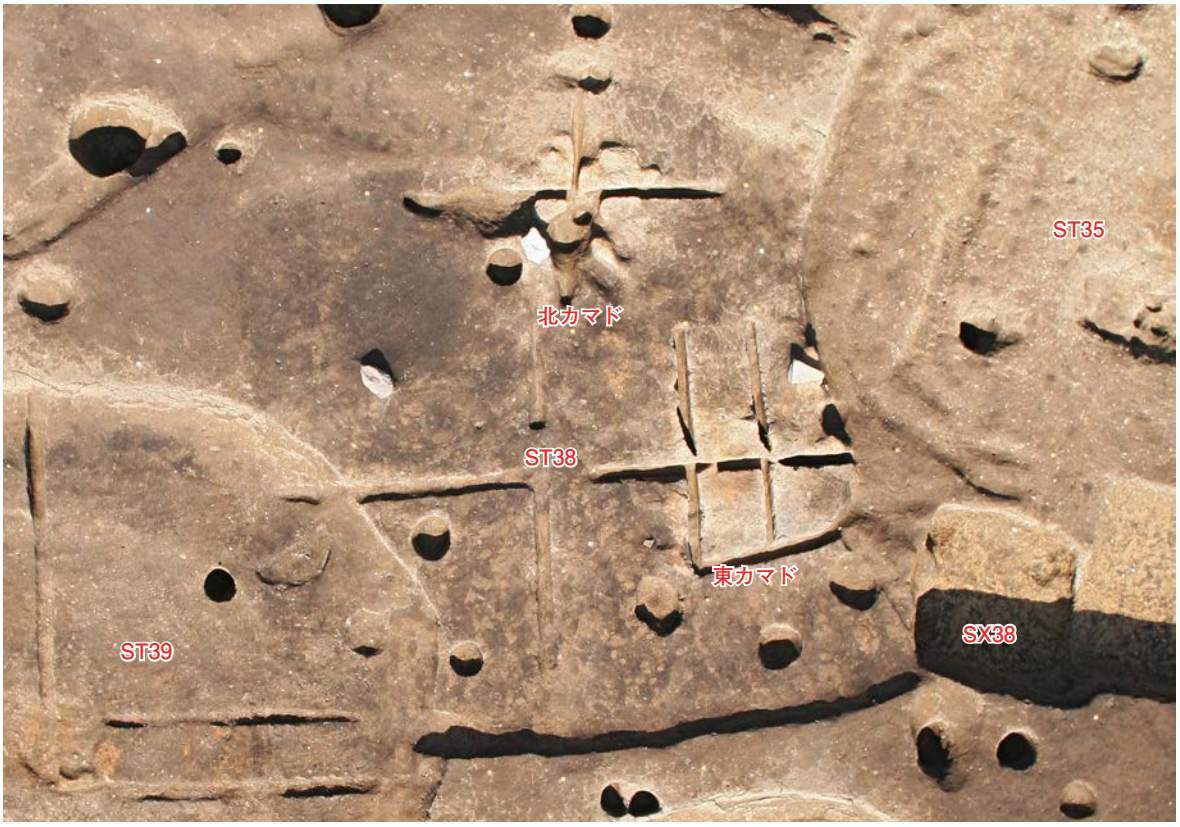
Ⅷ A 区 ST35 完掘　東より

Ⅷ A 区 ST35 土層　北より

Ⅷ A 区 ST35 遺物　南より

Ⅷ A 区 ST35 炉跡　南より

写真40



Ⅷ A 区 ST38 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST38 土層　西より

Ⅷ A 区 ST38 遺物　南より

Ⅷ A 区 ST38 北カマド　南より

Ⅷ A 区 ST38 東カマド　西より

Ⅷ A 区 ST39 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST39 完掘　北より

Ⅷ A 区 ST39 土層　南より

Ⅷ A 区 ST39 遺物　北より

Ⅷ A 区 ST39 炉跡土層　南より

写真42

Ⅷ A 区 ST40 完掘　西上より

Ⅷ A 区 ST40 土層　西より

Ⅷ A 区 ST40 遺物　北より

Ⅷ A 区 ST40 カマド　西より

Ⅷ A 区 ST40 カマド　北より

Ⅷ A 区 ST41 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST41 完掘　北より

Ⅷ A 区 ST41 完掘　北西より

Ⅷ A 区 ST41 土層　南西より

Ⅷ A 区 ST41 鉄斧

写真44

Ⅷ A 区 ST42 完掘　西上より

Ⅷ A 区 ST42 土層　西より

Ⅷ A 区 ST42 遺物　西より

Ⅷ A 区 ST42 北カマド　南より

Ⅷ A 区 ST42 東カマド西より

Ⅷ A 区 ST43 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST43 完掘　西より

Ⅷ A 区 ST43 土層　南西より

Ⅷ A 区 ST43 遺物　北より

Ⅷ A 区 ST43 カマド　南より

写真46

Ⅷ A 区 ST44 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST44 完掘　東より

Ⅷ A 区 ST44 土層　南より

Ⅷ A 区 ST44 遺物　西より

Ⅷ A 区 ST44 カマド　西より

Ⅷ A 区 ST45 完掘　南上より

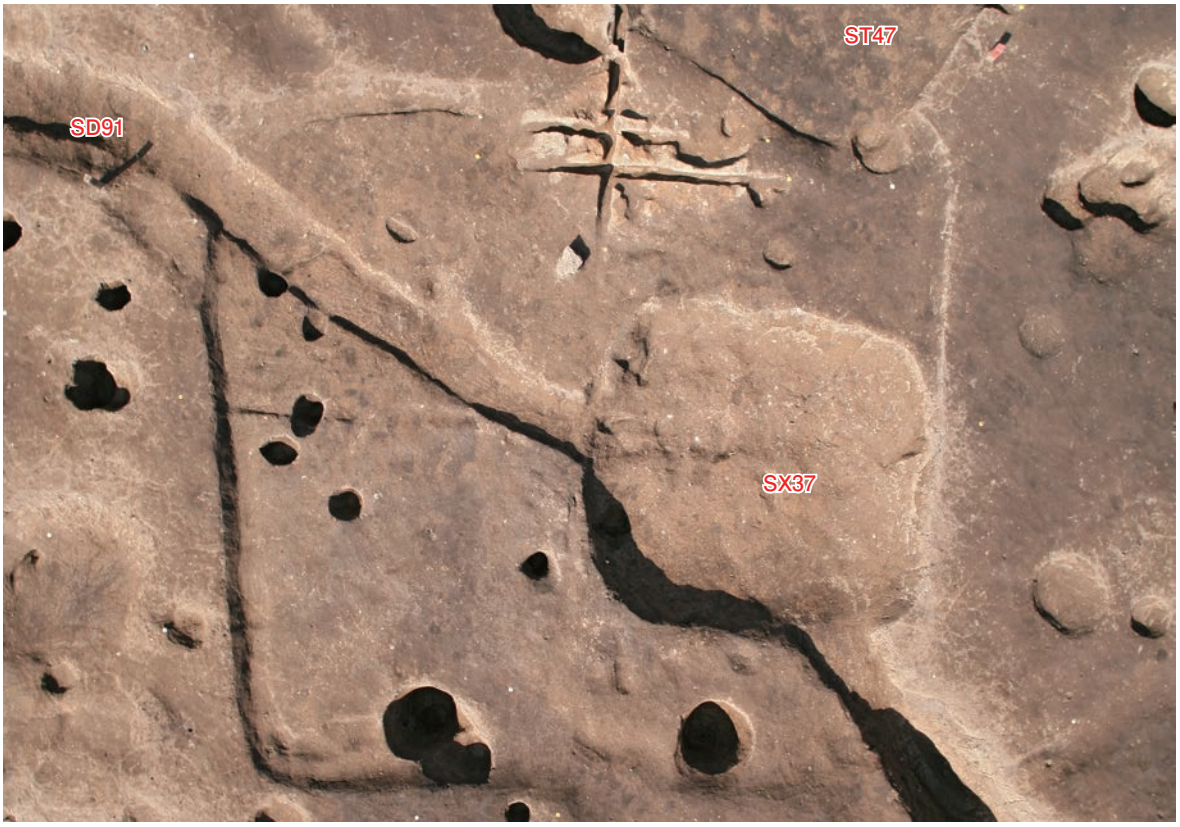
Ⅷ A 区 ST45 完掘　南より

Ⅷ A 区 ST45 土層　南西より

Ⅷ A 区 ST45 焼土・遺物　北より

Ⅷ A 区 ST45 炉跡　北より

写真48



Ⅷ A 区 ST46 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST46 完掘　南より

Ⅷ A 区 ST46 土層　南より

Ⅷ A 区 ST46 カマド　南より

Ⅷ A 区 ST46 カマド内遺物　南より

Ⅷ A 区 ST47 完掘　西上より

Ⅷ A 区 ST47 土層　南西より

Ⅷ A 区 ST47 遺物　西より

Ⅷ A 区 ST47 カマド　南より

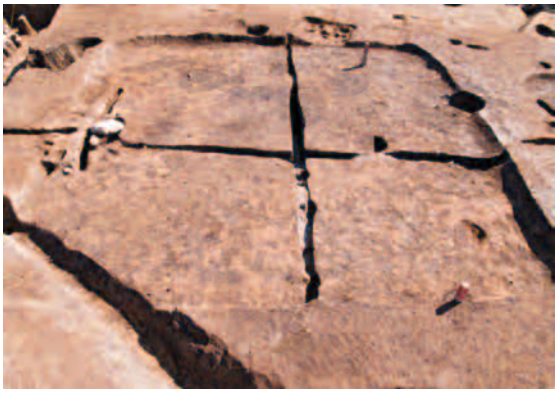
Ⅷ A 区 ST47 遺物 (混入)

写真50

Ⅷ A 区 ST48 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST48 完掘　西より

Ⅷ A 区 ST48 土層　西より



Ⅷ A 区 ST48 遺物　西より

Ⅷ A 区 ST48 カマド　南より

Ⅷ A 区 ST49 完掘　南上より

Ⅷ A 区 ST49 完掘　南より

Ⅷ A 区 ST49 遺物　南より

Ⅷ A 区 ST49 焼土・炭化材　南より

Ⅷ A 区 ST49 遺物　南西より

写真52

Ⅷ B 区 ST50 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST50 完掘　東より

Ⅷ B 区 ST50 土層　東より

Ⅷ B 区 ST50 遺物 1

Ⅷ B 区 ST50 遺物 2

Ⅷ B 区 ST51 完掘　西上より

Ⅷ B 区 ST51 焼土・遺物　東北より

Ⅷ B 区 ST51 土層　南より

Ⅷ B 区 ST51　炉跡・土層　南より

Ⅷ B 区 ST51 遺物

写真54

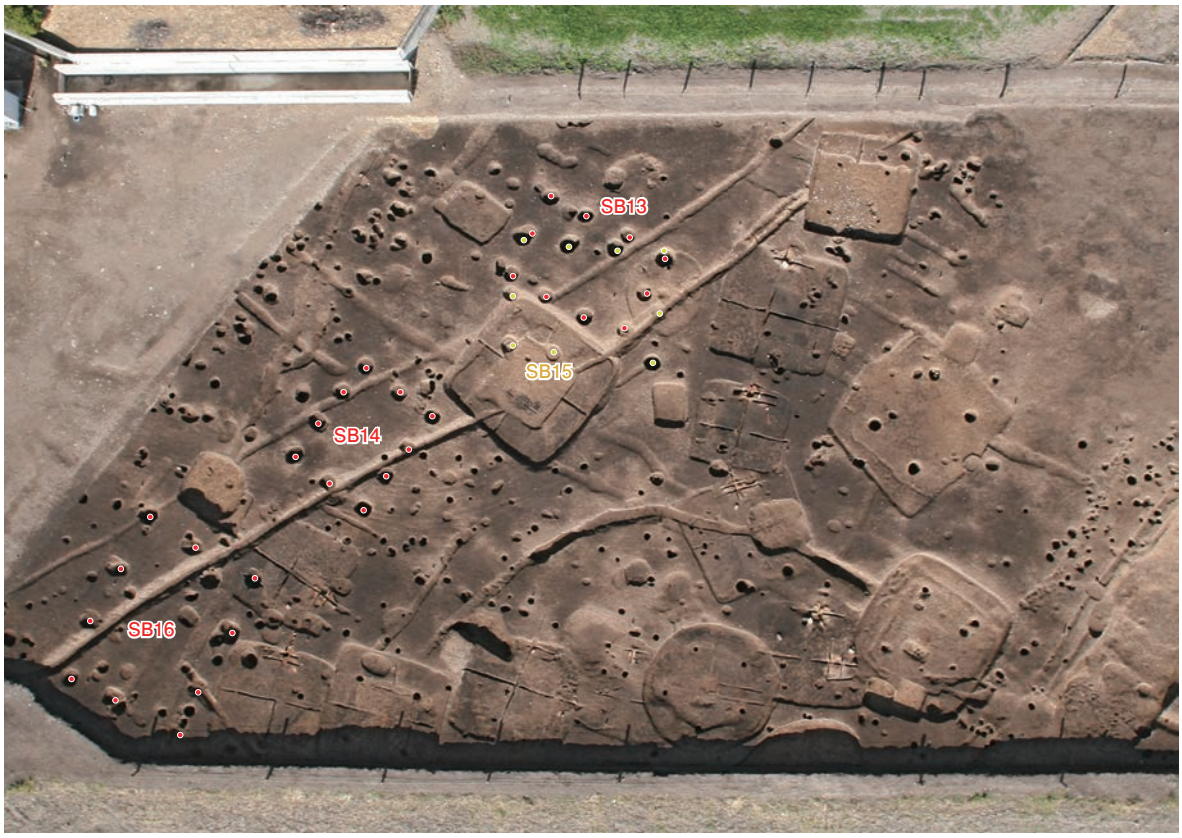
Ⅷ B 区 ST52・ST53　東北より

Ⅷ B 区 ST52 完掘　南上より

Ⅷ B 区 ST52 カマド　西より

Ⅷ B 区 ST53 完掘　東より

Ⅷ B 区 ST53 カマド　南より



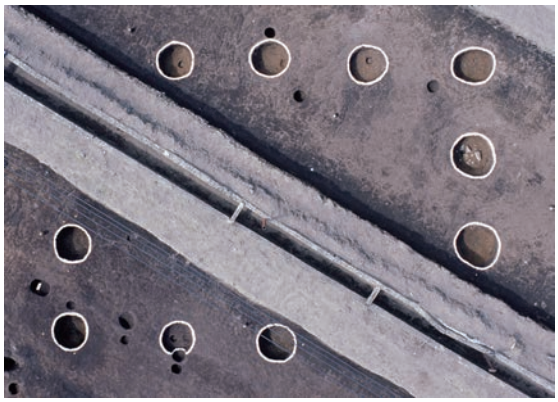
Ⅷ AW 区 SB 群空撮　南上より

Ⅷ AE 区 SB 群空撮　南上より

写真56

Ⅷ BW 区 SB 群空撮　南上より

Ⅷ BE 区 SB 群空撮　南上より


Ⅷ B 区 SB1　南上より

SB1P5

SB1P8

SB1P9

SB1P12

SB2P4

SB2P5

SB2P7

SB2P9

Ⅷ B 区 SB2　東上より

Ⅷ B 区 SB3　東上より

SB3P2

SB3P7

SB3P8

SB3P9

SB4P1

SB4P2

SB4P5

SB4P10

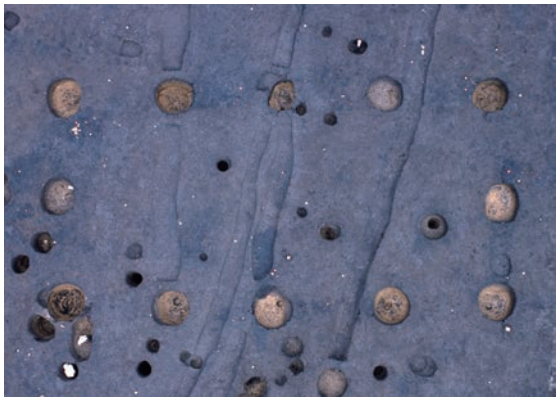
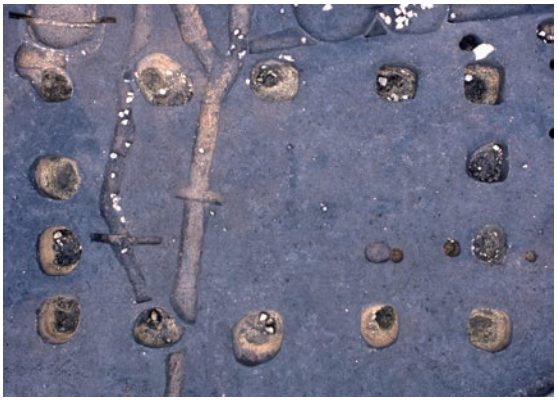

Ⅷ B 区 SB4　西上より

写真58



Ⅷ B 区 SB5　南上より

SB5P2

SB5P3

SB5P4

SB5P6

Ⅷ B 区 SB5 検出　東より

SB5P7

SB5P8

SB5P11

SB5P13

SB6P2

SB6P6

SB6P8-1

SB6P8-2

Ⅷ B 区 SB6　北東より

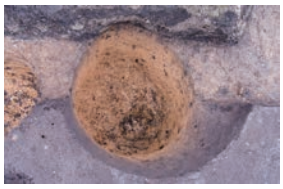
Ⅷ B 区 SB7　東より

SB7P5

SB7P6

SB7P7

SB7P11


SB8P1

SB8P2

Ⅷ B 区 SB8　北より

SB8P4

SB8P5

Ⅷ B 区 SB9　南上より

SB9P1

SB9P3

SB9P4

SB9P6

SB10P1

SB10P4

Ⅷ B 区 SB10　南上より

SB10P5

SB10P7

Ⅷ A 区 SB11　南上より

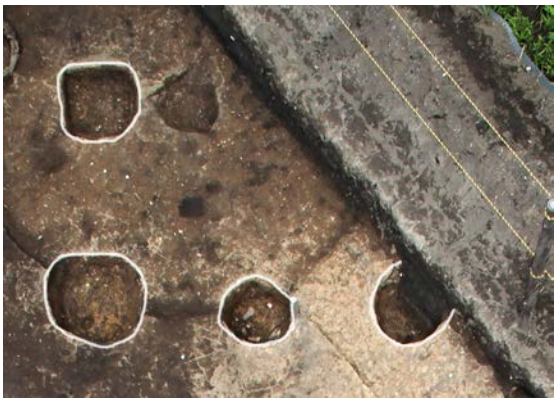
SB11P3

SB11P5

SB11P7

SB11P8

写真60


Ⅷ A 区 SB12-1　南東上より

Ⅷ A 区 SB12-2

SB12P1

Ⅷ A 区 SB13　南上より

SB13P2

SB13P5

SB13P8

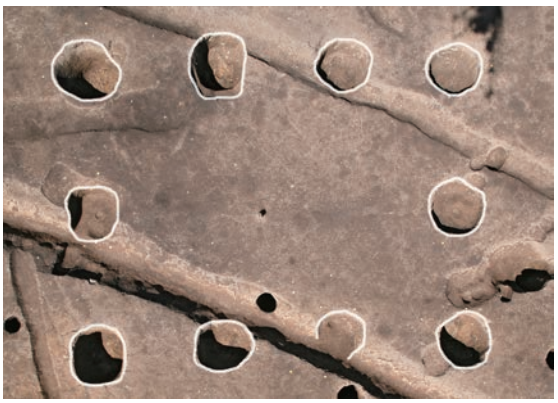
SB13P9

SB14P1

SB14P4

SB14P7

SB14P9


Ⅷ A 区 SB14　東上より

Ⅷ A 区 SB15　南上より

SB15P5

SB15P7

SB15P9

SB15P10

SB16P1

SB16P2

SB16P6

SB16P9

Ⅷ A 区 SB16　西上より

Ⅷ B 区 SB18　北東より

SB18P4

SB18P5

SB18P6

SB18P9

SB19P1-1

SB19P1-2

SB19P7-1

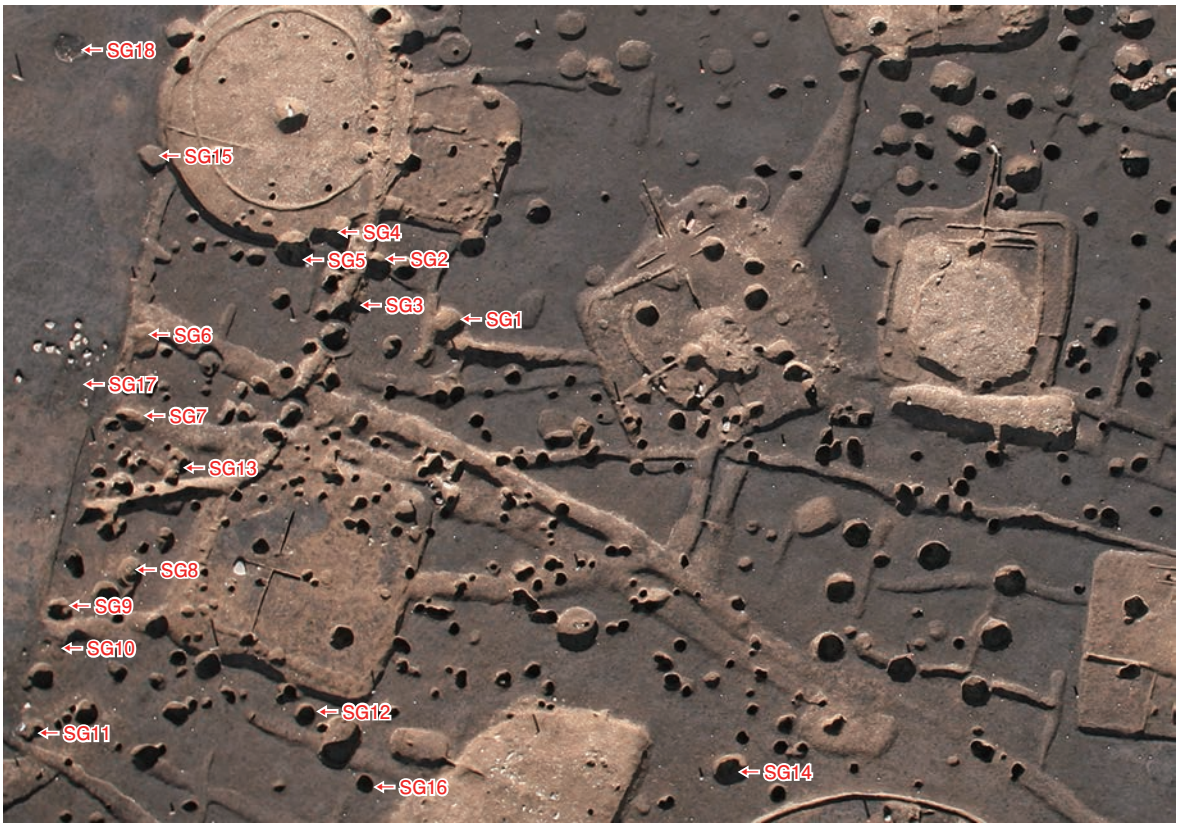
SB19P7-2

Ⅷ B 区 SB19　東より

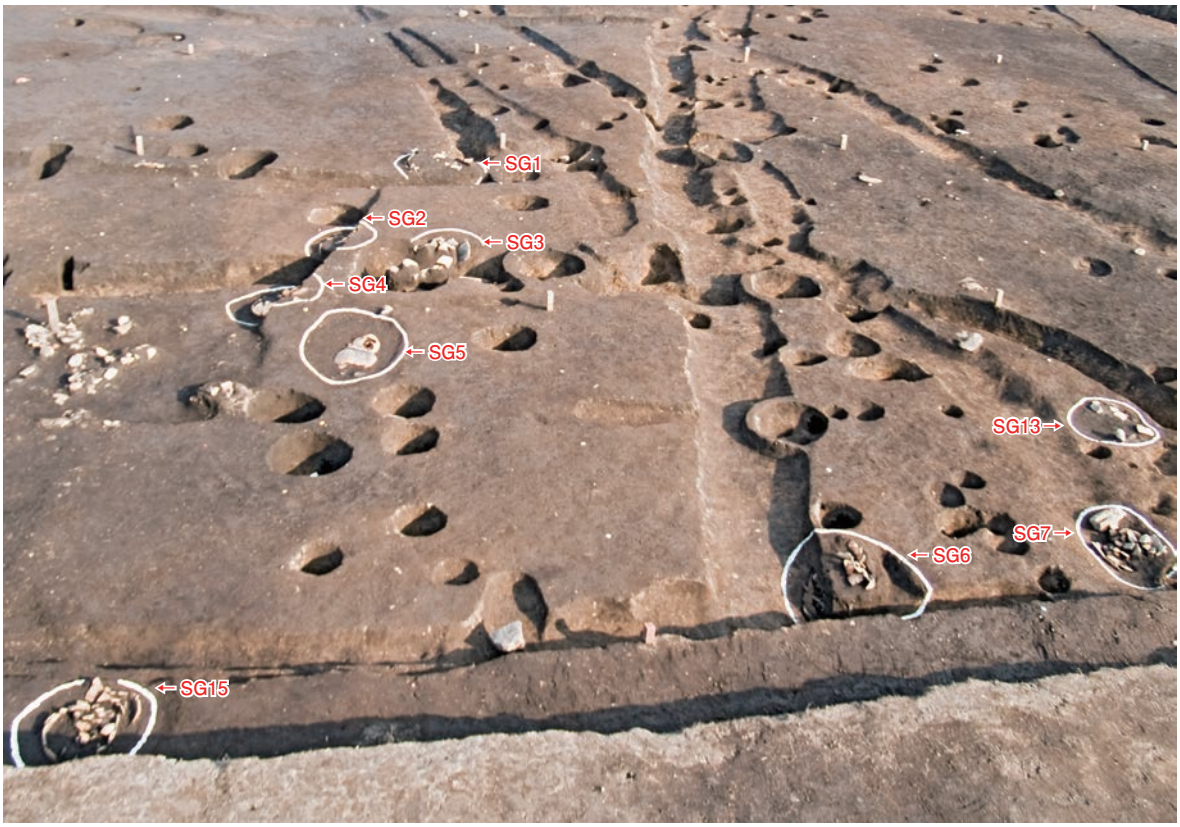
Ⅷ B 区 SB20　南上より

Ⅷ B 区 SB20　北東より

写真62



Ⅷ B 区 SG 群空撮　南上より



Ⅷ B 区 SG 群北側部　西より

Ⅷ B 区 SG 群南側部　西より

Ⅷ B 区 SG 群　南より

写真64

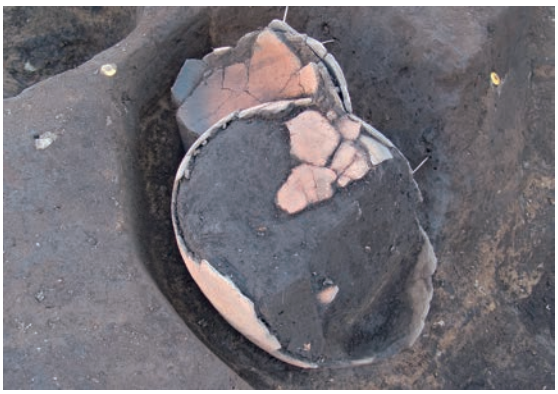
Ⅷ B 区 SG1 検出

Ⅷ B 区 SG1 土層

Ⅷ B 区 SG1 遺物

Ⅷ B 区 SG1 完掘

Ⅷ B 区 SG2 土層



Ⅷ B 区 SG2 遺物 1

Ⅷ B 区 SG2 遺物 2

Ⅷ B 区 SG2 完掘

Ⅷ B 区 SG3 遺物 1

Ⅷ B 区 SG3 遺物 2

Ⅷ B 区 SG3 遺物 3

Ⅷ B 区 SG3 完掘

Ⅷ B 区 SG4 検出

Ⅷ B 区 SG4 土層

Ⅷ B 区 SG4 遺物

Ⅷ B 区 SG4 完掘

写真66

Ⅷ B 区 SG5 検出

Ⅷ B 区 SG5 土層

Ⅷ B 区 SG5 遺物 1

Ⅷ B 区 SG5 遺物 2

Ⅷ B 区 SG5 遺物 3

Ⅷ B 区 SG5 壺内土層

Ⅷ B 区 SG5 土坑底面

Ⅷ B 区 SG5 完掘

Ⅷ B 区 SG6 土層

Ⅷ B 区 SG6 遺物

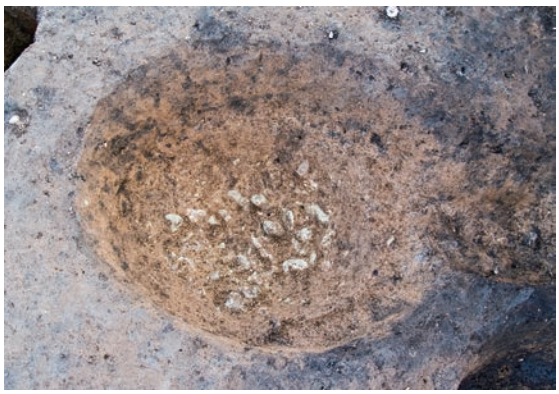
Ⅷ B 区 SG7 土層

Ⅷ B 区 SG7 完掘

Ⅷ B 区 SG8 検出

Ⅷ B 区 SG8 遺物

Ⅷ B 区 SG8 壺内土層



Ⅷ B 区 SG8 完掘

写真68

Ⅷ B 区 SG9 検出

Ⅷ B 区 SG9 遺物 1

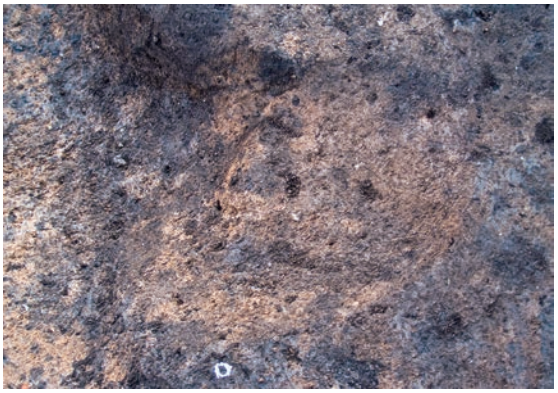
Ⅷ B 区 SG9 遺物 2

Ⅷ B 区 SG9 完掘

Ⅷ B 区 SG10 検出

Ⅷ B 区 SG10 土層

Ⅷ B 区 SG10 遺物



Ⅷ B 区 SG10 完掘

Ⅷ B 区 SG11 検出

Ⅷ B 区 SG11 土層

Ⅷ B 区 SG11 遺物

Ⅷ B 区 SG11 完掘

Ⅷ B 区 SG12 遺物 1

Ⅷ B 区 SG12 遺物 2

Ⅷ B 区 SG12 壺内土層

Ⅷ B 区 SG12 完掘

写真70

Ⅷ B 区 SG13 検出

Ⅷ B 区 SG13 土層

Ⅷ B 区 SG13 遺物

Ⅷ B 区 SG13 完掘

Ⅷ B 区 SG14 検出

Ⅷ B 区 SG14 土層

Ⅷ B 区 SG14 遺物

Ⅷ B 区 SG14 完掘

Ⅷ B 区 SG15 検出

Ⅷ B 区 SG15 土層

Ⅷ B 区 SG15 遺物

Ⅷ B 区 SG15 完掘

Ⅷ B 区 SG16 遺物 1

Ⅷ B 区 SG16 遺物 2

Ⅷ B 区 SG16 完掘

SG 調査風景

写真72

Ⅷ A 区 SG17 検出

Ⅷ A 区 SG17 土層

Ⅷ A 区 SG17 遺物

Ⅷ A 区 SG17 完掘

Ⅷ A 区 SG18 検出

Ⅷ A 区 SG18 土層

Ⅷ A 区 SG18 遺物

Ⅷ A 区 SG18 完掘

Ⅷ AW 区 SK 群空撮　南上より

Ⅷ AE 区 SK 群空撮　南上より

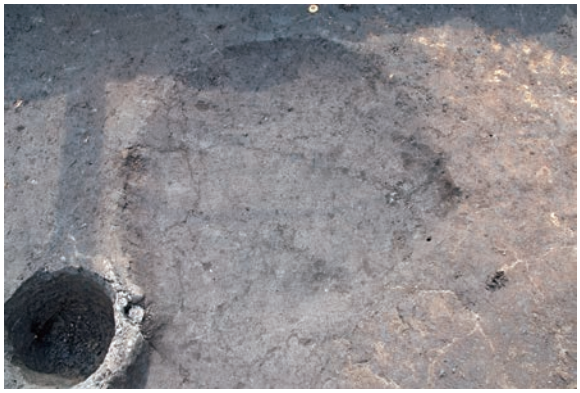
写真74

Ⅷ BW 区 SK 群空撮　南上より

Ⅷ BE 区 SK 群空撮　南上より

Ⅷ B 区 SK4

Ⅷ B 区 SK4 遺物



Ⅷ B 区 SK5

Ⅷ B 区 SK5 遺物

Ⅷ B 区 SK6

Ⅷ B 区 SK6 遺物

Ⅷ B 区 SK9

Ⅷ B 区 SK9 土層

写真76

Ⅷ B 区 SK12

Ⅷ B 区 SK13

Ⅷ B 区 SK32

Ⅷ B 区 SK33

Ⅷ B 区 SK38

Ⅷ B 区 SK41

Ⅷ B 区 SK42

Ⅷ B 区 SK49

Ⅷ A 区 SK64

Ⅷ A 区 SK64 遺物

Ⅷ A 区 SK66

Ⅷ A 区 SK69

Ⅷ A 区 SK69 土層

Ⅷ A 区 SK69 長頸壺

Ⅷ A 区 SK77

Ⅷ A 区 SK80

写真78

Ⅷ A 区 SK84

Ⅷ A 区 SK91

Ⅷ A 区 SK97

Ⅷ A 区 SK100

Ⅷ B 区 SK106

Ⅷ B 区 SK106土層　東より

Ⅷ B 区 SK106土層　南より

Ⅷ B 区 SK106礫

Ⅷ B 区 SK106遺物

Ⅷ B 区 SK106鉄製紡錘車

Ⅷ B 区 SK106坏1

Ⅷ B 区 SK106坏2

Ⅷ B 区 SK106甕

写真80

Ⅷ AW 区 SX 群空撮　南上より

Ⅷ AE 区 SX 群空撮　南上より

Ⅷ BW 区 SX 群空撮　南上より

Ⅷ BE 区 SX 群空撮　南上より

写真82

Ⅷ B 区 SX1

Ⅷ B 区 SX2

Ⅷ B 区 SX3

Ⅷ B 区 SX3 動物遺存体

Ⅷ B 区 SX3 陶磁器

Ⅷ B 区 SX4

Ⅷ B 区 SX5

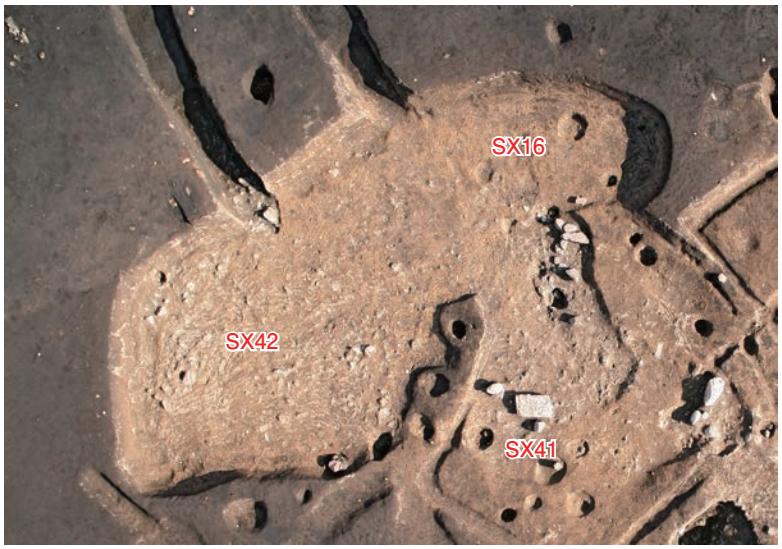
Ⅷ B 区 SX6

写真84

Ⅷ B 区 SX10

Ⅷ B 区 SX11

Ⅷ B 区 SX15



Ⅷ B 区 SX16・SX42

Ⅷ B 区 SX16・SX42 土層

Ⅷ B 区 SX19

写真86

Ⅷ A 区 SX20

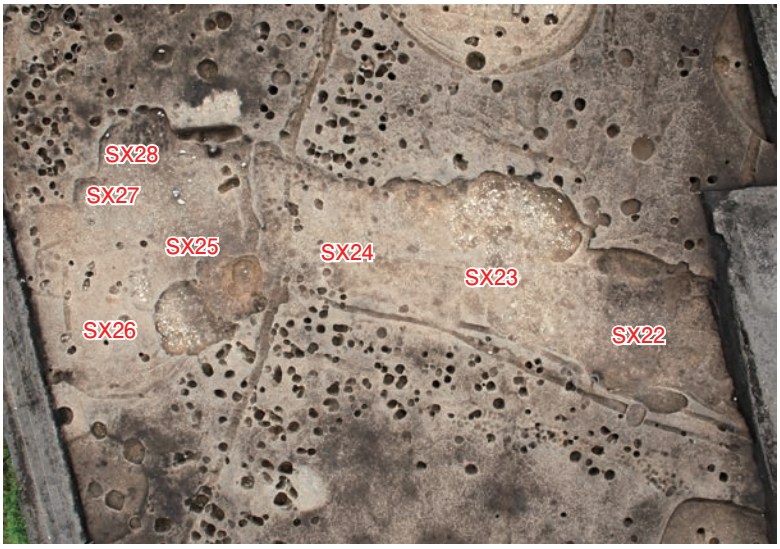
Ⅷ A 区 SX20 礫

Ⅷ A 区 SX20 土層

Ⅷ A 区 SX21 土層

Ⅷ A 区 SX21 長頸壺

Ⅷ A 区 SX21



Ⅷ A 区 SX22 ～ SX28　西上より

Ⅷ A 区 SX22 ～ SX28 検出　西より

Ⅷ A 区 SX22 ～ SX28 土層　南より

Ⅷ A 区 SX22

Ⅷ A 区 SX22 土層

Ⅷ A 区 SX22 遺物

写真88

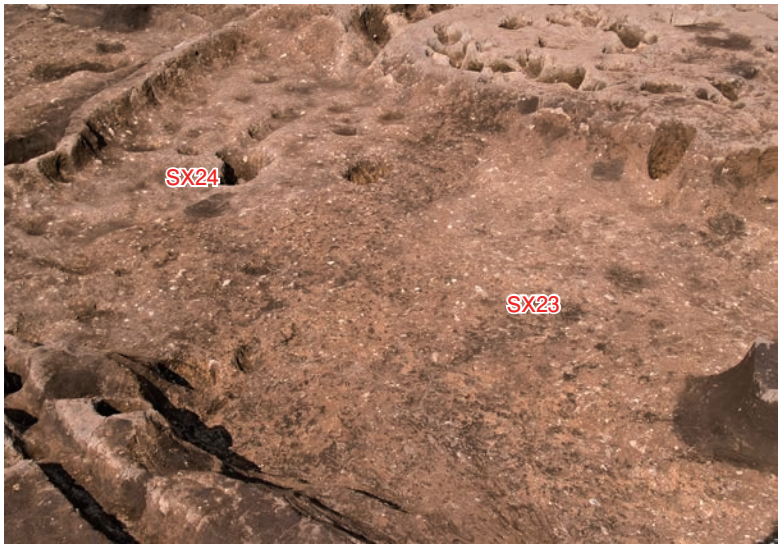
Ⅷ A 区 SX22

Ⅷ A 区 SX22 鉄製品

Ⅷ A 区 SX23 土層

Ⅷ A 区 SX24 土層 1

Ⅷ A 区 SX24 土層 2



Ⅷ A 区 SX24

Ⅷ A 区 SX25

Ⅷ A 区 SX25　土層 1

Ⅷ A 区 SX25　土層 2

Ⅷ A 区 SX26

Ⅷ A 区 SX27

Ⅷ A 区 SX28

写真90

Ⅷ A 区 SX29

Ⅷ A 区 SX29 土層

Ⅷ A 区 SX29 土師器碗

Ⅷ A 区 SX30

Ⅷ A 区 SX31

Ⅷ A 区 SX31 土層

Ⅷ A 区 SX31 石臼

Ⅷ A 区 SX32

Ⅷ A 区 SX33 土層

Ⅷ A 区 SX33 土師器碗

Ⅷ A 区 SX33

Ⅷ A 区 SX34

Ⅷ A 区 SX34　土層

Ⅷ A 区 SX34　甕

写真92

Ⅷ A 区 SX35

Ⅷ A 区 SX36 土層

Ⅷ A 区 SX36 遺物

Ⅷ A 区 SX36

Ⅷ A 区 SX37

Ⅷ A 区 SX37 土層

Ⅷ A 区 SX37 遺物

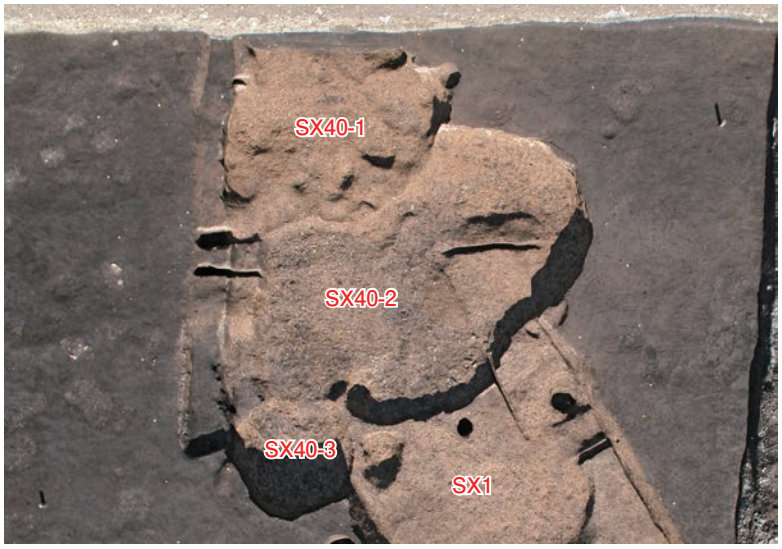
Ⅷ A 区 SX38・SX39

Ⅷ A 区 SX38・SX39 土層

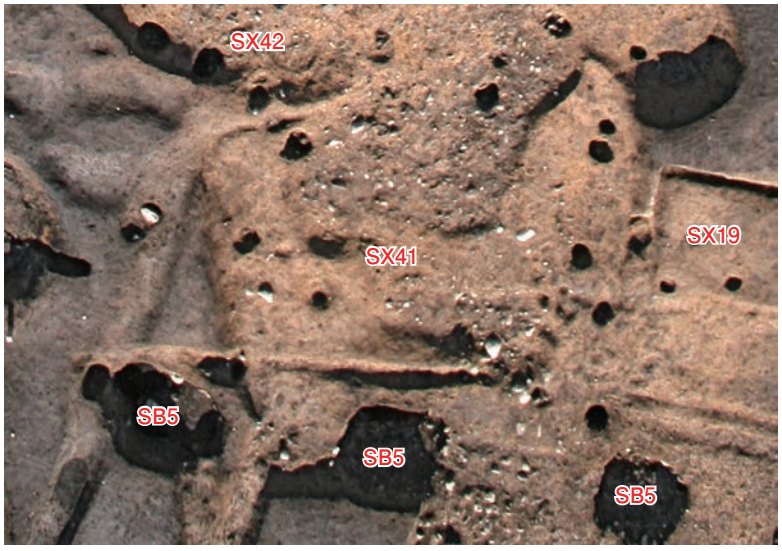
Ⅷ A 区 SX38 遺物

Ⅷ A 区 SX40 土層　西南より

Ⅷ A 区 SX40 土層　西より

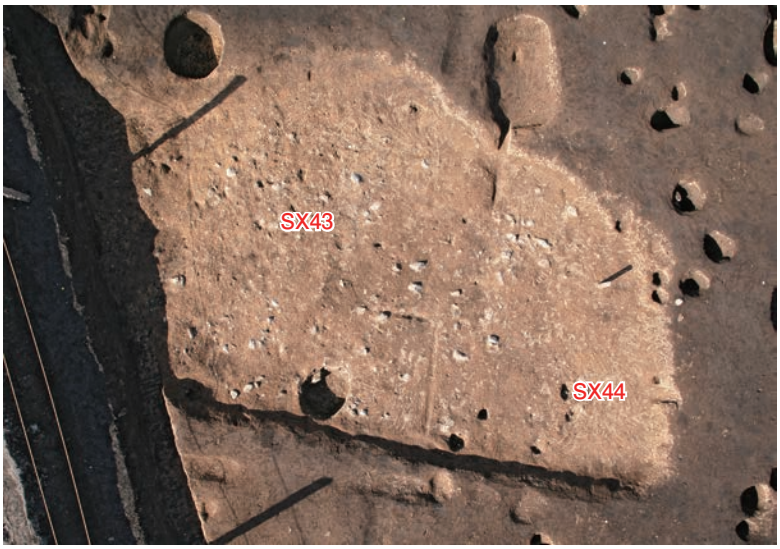


Ⅷ A 区 SX40



Ⅷ B 区 SX41

写真94



Ⅷ B 区 SX43・SX44

Ⅷ B 区 SX43・SX44 土層

Ⅷ B 区 SX43・SX44 長頸壺

Ⅷ A 区 SX45 ～ SX47

Ⅷ A 区 SX45 ～ SX47 土層

Ⅷ A 区 SX45

Ⅷ A 区 SX46

Ⅷ A 区 SX47

写真96

Ⅷ A 区 SX48・SX49

Ⅷ A 区 SX48 土層

Ⅷ A 区 SX49 土層

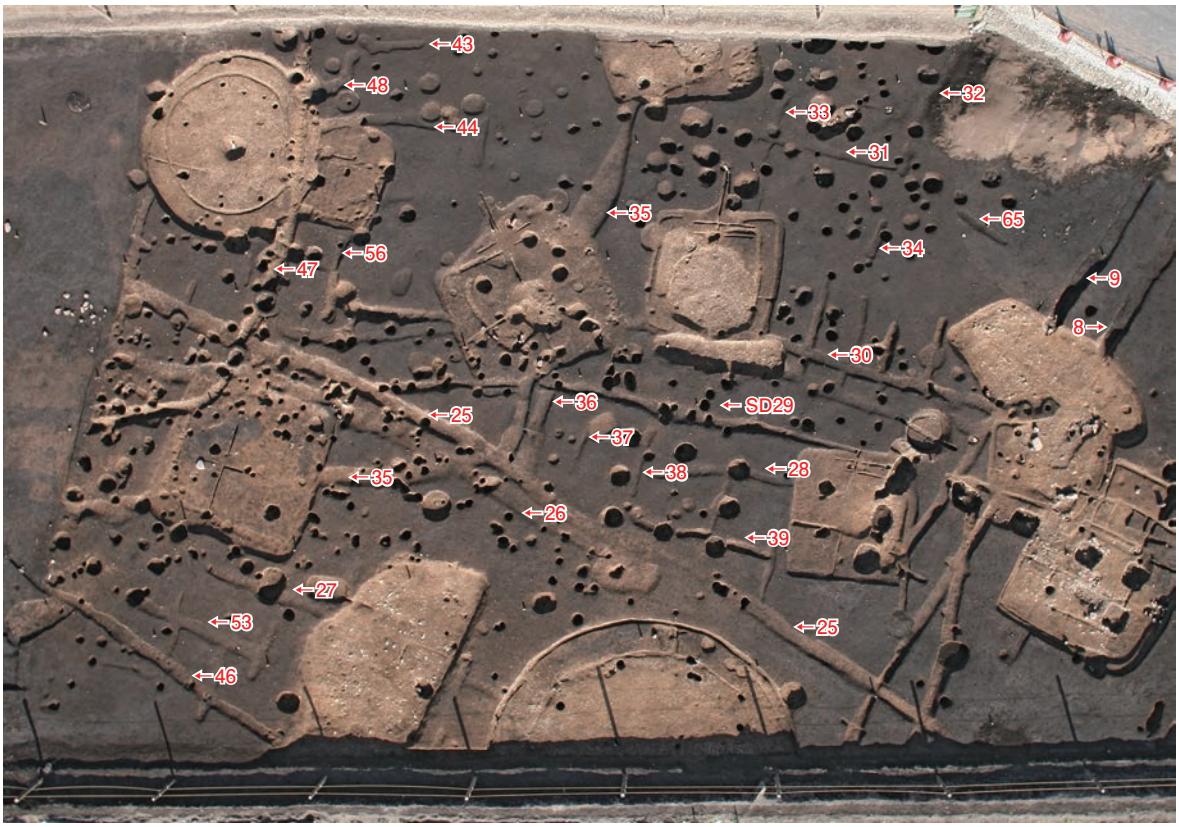
Ⅷ A 区 SX48

Ⅷ A 区 SX51 完掘　東北より

Ⅷ AW 区 SD 群空撮　南上より

Ⅷ AE 区 SD 群空撮　南上より

写真98



Ⅷ BW 区 SD 群空撮　南上より

Ⅷ BE 区 SD 群空撮　南上より

Ⅷ B 区 SD1

Ⅷ B 区 SD1 礫・瓦

Ⅷ B 区 SD1 陶器

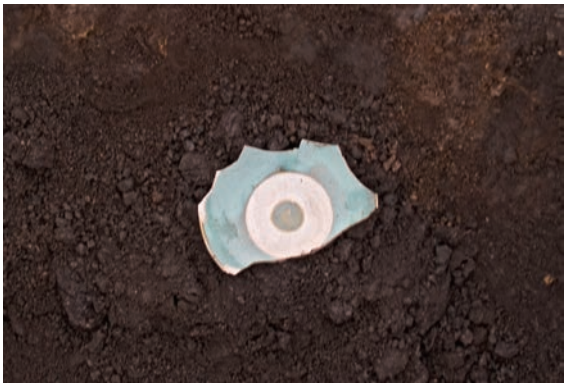
Ⅷ B 区 SD2

Ⅷ B 区 SD2 礫

Ⅷ B 区 SD2

写真100

Ⅷ B 区 SD3



Ⅷ B 区 SD3陶磁器

Ⅷ B 区 SD3把手

Ⅷ B 区 SD8土器皿

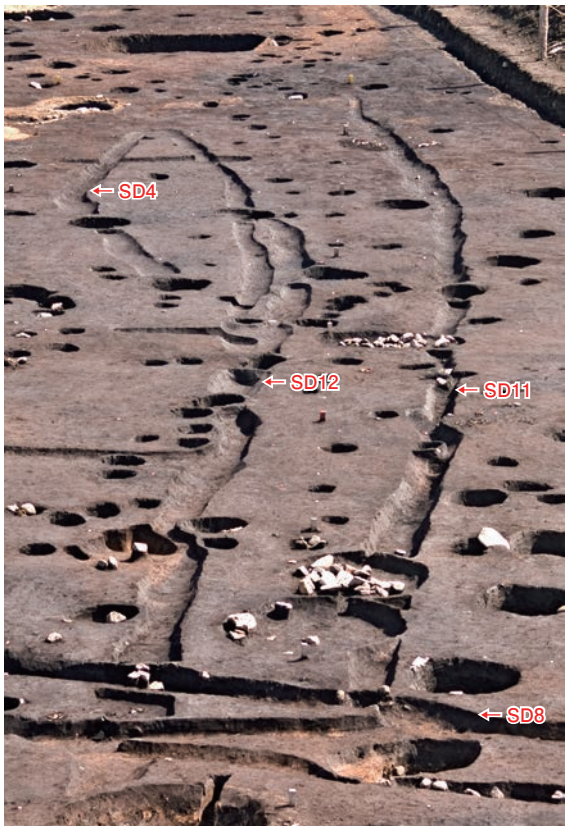
Ⅷ B 区 SD8鉄製品

Ⅷ B 区 SD8・9

Ⅷ B 区 SD3・17

Ⅷ B 区 SD17　陶磁器1

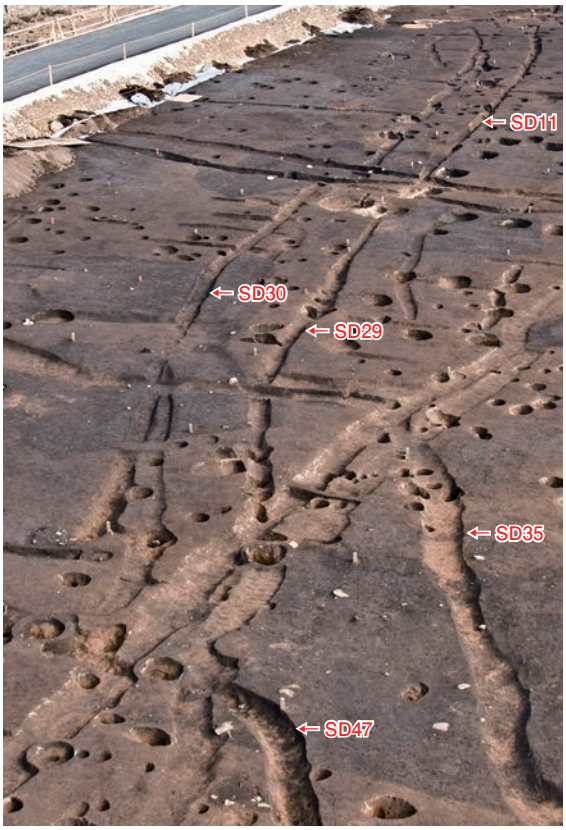
Ⅷ B 区 SD17　陶磁器2



Ⅷ B 区 SD11・12

Ⅷ B 区 SD25

写真102



Ⅷ B 区 SD29・30・35・47

Ⅷ A 区 SD73

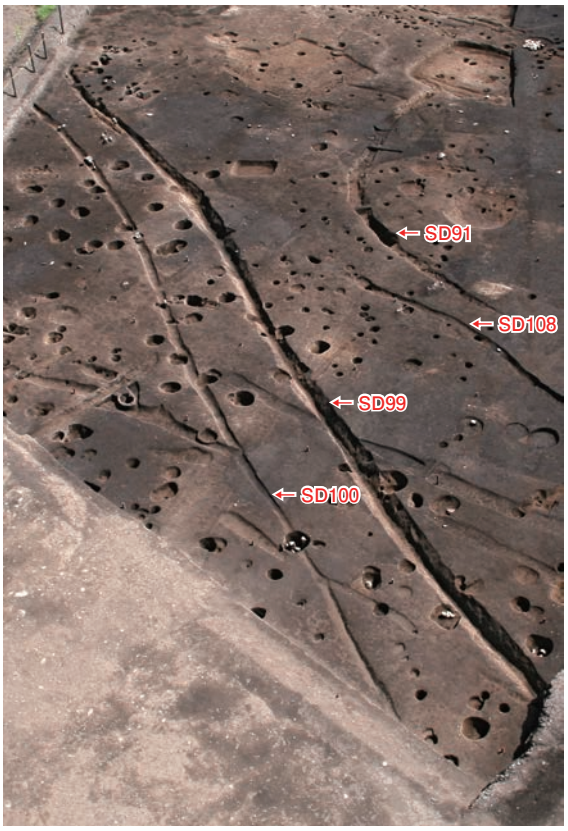
Ⅷ A 区 SD46 須恵器坏

Ⅷ A 区 SD73 土師器坏

Ⅷ B 区 SD47 須恵器坏

Ⅷ A 区 SD94 弥生土器壺

Ⅷ A 区 SD91



Ⅷ A 区 SD99・100

Ⅷ A 区 SD98 土師器碗

Ⅷ A 区 SD104　須恵器坏蓋

Ⅷ A 区 SD99・100

写真104

Ⅷ A 区 C8-14-5P4

Ⅷ A 区 C8-14-5P5

Ⅷ A 区 C8-14-15P3

Ⅷ A 区 C8-15-14P3

Ⅷ A 区 C9-6-13P1

Ⅷ A 区 C9-6-16P11

Ⅷ A 区 C9-7-7P9

Ⅷ A 区 C9-7-17P7

Ⅷ A 区 C9-7-19P1

Ⅷ A 区 C9-12-6P1-1

Ⅷ A 区 C9-12-6P1-2

Ⅷ B 区 C9-3-23-P6

Ⅷ B 区 C9-4-22P1

Ⅷ B 区 C9-8-7P1

Ⅷ B 区 C9-8-22P3

Ⅷ B 区 C9-10-6P1

写真106

Ⅷ区 ST1-1

Ⅷ区 ST1-3

Ⅷ区 ST1-2

Ⅷ区 ST1-5

Ⅷ区 ST1-6

Ⅷ区 ST1-7

Ⅷ区 ST1-8

Ⅷ区 ST1-9・底部

Ⅷ区 ST1-10・底部

Ⅷ区 ST1-11

Ⅷ区 ST2-1

Ⅷ区 ST2-2

Ⅷ区 ST2-4

Ⅷ区 ST2-5

※遺物写真は縮尺不同一

Ⅷ区 ST2-3

Ⅷ区 ST2-6

Ⅷ区 ST2-7

Ⅷ区 ST2-8

Ⅷ区 ST2-9

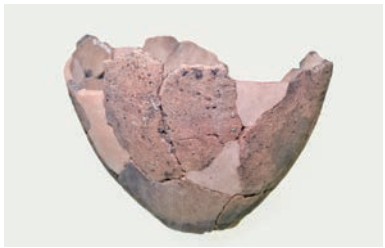
Ⅷ区 ST2-10

Ⅷ区 ST2-8・底部

Ⅷ区 ST2-9・底部

Ⅷ区 ST2-10・底部

Ⅷ区 ST2-11


Ⅷ区 ST2-12

Ⅷ区 ST2-14

Ⅷ区 ST2-15

Ⅷ区 ST3-1

Ⅷ区 ST3-2

Ⅷ区 ST3-3

Ⅷ区 ST5-1

Ⅷ区 ST5-1・底部

写真108

Ⅷ区 ST5-4

Ⅷ区 ST5-4・内面

Ⅷ区 ST5-5

Ⅷ区 ST5-6

Ⅷ区 ST5-7

Ⅷ区 ST5-8

Ⅷ区 ST5-12

Ⅷ区 ST5-13

Ⅷ区 ST5-2

Ⅷ区 ST5-2・底部

Ⅷ区 ST5-3

Ⅷ区 ST5-9

Ⅷ区 ST5-10

Ⅷ区 ST5-11

Ⅷ区 ST5-14

Ⅷ区 ST6-1

Ⅷ区 ST6-2

Ⅷ区 ST6-3

Ⅷ区 ST6-4

Ⅷ区 ST6-5

Ⅷ区 ST6-6

Ⅷ区 ST6-7

Ⅷ区 ST6-7・底部

Ⅷ区 ST6-8

Ⅷ区 ST6-9

Ⅷ区 ST6-10

写真110

Ⅷ区 ST6-11

Ⅷ区 ST6-12

Ⅷ区 ST6-13

Ⅷ区 ST7-1

Ⅷ区 ST7-1・内面

Ⅷ区 ST7-2

Ⅷ区 ST7-3

Ⅷ区 ST8-1

Ⅷ区 ST8-2

Ⅷ区 ST8-3

Ⅷ区 ST8-4

Ⅷ区 ST8-5

Ⅷ区 ST8-6

Ⅷ区 ST9-1

Ⅷ区 ST9-2

Ⅷ区 ST9-3

Ⅷ区 ST9-4

Ⅷ区 ST9-5

Ⅷ区 ST9-6

Ⅷ区 ST9-7

Ⅷ区 ST9-8

Ⅷ区 ST9-9

Ⅷ区 ST9-9・底部

Ⅷ区 ST9-10

Ⅷ区 ST9-11

Ⅷ区 ST9-12

Ⅷ区 ST9-13

Ⅷ区 ST10-1

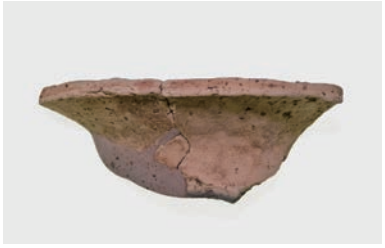
Ⅷ区 ST10-2

Ⅷ区 ST10-3

Ⅷ区 ST10-4

Ⅷ区 ST11-1

Ⅷ区 ST11-4


Ⅷ区 ST11-2

Ⅷ区 ST11-3

写真112

Ⅷ区 ST11-5

Ⅷ区 ST11-6

Ⅷ区 ST11-7

Ⅷ区 ST11-8

Ⅷ区 ST11-10

Ⅷ区 ST11-11

Ⅷ区 ST11-9

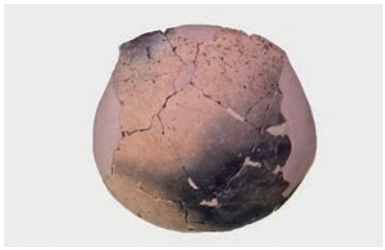
Ⅷ区 ST11-12

Ⅷ区 ST11-13

Ⅷ区 ST11-14

Ⅷ区 ST11-15

Ⅷ区 ST11-16・底部


Ⅷ区 ST11-17・底部

Ⅷ区 ST11-18

Ⅷ区 ST11-19

Ⅷ区 ST11-20

Ⅷ区 ST11-20・底部

Ⅷ区 ST11-21

Ⅷ区 ST11-22

Ⅷ区 ST11-23

Ⅷ区 ST11-24

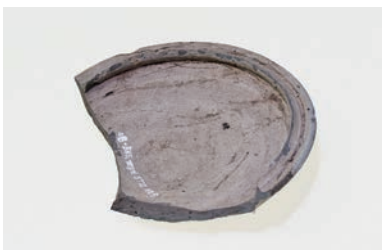
Ⅷ区 ST12-1

Ⅷ区 ST12-1・底面

Ⅷ区 ST11-25

Ⅷ区 ST12-2

Ⅷ区 ST12-2・底部

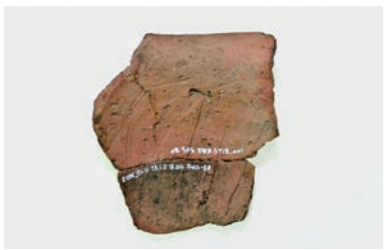

Ⅷ区 ST12-3

Ⅷ区 ST12-3・底部

Ⅷ区 ST12-4

Ⅷ区 ST12-5

Ⅷ区 ST12-7


Ⅷ区 ST12-7・内面

Ⅷ区 ST12-6

Ⅷ区 ST12-8

Ⅷ区 ST12-9

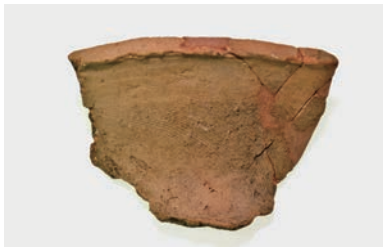
写真114

Ⅷ区 ST12-10

Ⅷ区 ST12-11

Ⅷ区 ST13-1

Ⅷ区 ST13-2


Ⅷ区 ST13-3

Ⅷ区 ST13-4

Ⅷ区 ST13-5

Ⅷ区 ST13-6

Ⅷ区 ST13-7

Ⅷ区 ST13-8

Ⅷ区 ST13-9

Ⅷ区 ST13-10

Ⅷ区 ST13-11

Ⅷ区 ST13-12

Ⅷ区 ST13-12・底部

Ⅷ区 ST13-13・底部

Ⅷ区 ST13-14

Ⅷ区 ST13-15

Ⅷ区 ST13-16

Ⅷ区 ST13-17

Ⅷ区 ST13-18

Ⅷ区 ST13-19

Ⅷ区 ST13-20

Ⅷ区 ST13-22

Ⅷ区 ST14-1

Ⅷ区 ST14-2

Ⅷ区 ST14-3

Ⅷ区 ST14-4

Ⅷ区 ST14-5

Ⅷ区 ST14-6・底面

Ⅷ区 ST14-7

Ⅷ区 ST14-8

Ⅷ区 ST14-9

Ⅷ区 ST14-10

Ⅷ区 ST14-11

写真116

Ⅷ区 ST14-12

Ⅷ区 ST14-13

Ⅷ区 ST14-14

Ⅷ区 ST17-1

Ⅷ区 ST17-3

Ⅷ区 ST18-1

Ⅷ区 ST17-2

Ⅷ区 ST17-3・底部

Ⅷ区 ST19-1

Ⅷ区 ST19-2

Ⅷ区 ST19-3

Ⅷ区 ST19-4

Ⅷ区 ST19-5

Ⅷ区 ST19-6

Ⅷ区 ST19-7

Ⅷ区 ST19-8

Ⅷ区 ST20-1

Ⅷ区 ST20-2

Ⅷ区 ST20-3

Ⅷ区 ST20-4

Ⅷ区 ST20-5

Ⅷ区 ST20-6

Ⅷ区 ST20-7

Ⅷ区 ST23-1

Ⅷ区 ST23-2

Ⅷ区 ST23-3

Ⅷ区 ST24-1

Ⅷ区 ST24-2

Ⅷ区 ST25-1

Ⅷ区 ST25-2

Ⅷ区 ST25-3

Ⅷ区 ST25-4

Ⅷ区 ST25-5

Ⅷ区 ST25-7

写真118

Ⅷ区 ST25-6

Ⅷ区 ST25-8

Ⅷ区 ST25-9

Ⅷ区 ST25-11

Ⅷ区 ST25-10

Ⅷ区 ST25-13・底部

Ⅷ区 ST25-12

Ⅷ区 ST25-12・底部

Ⅷ区 ST25-14

Ⅷ区 ST25-15

Ⅷ区 ST25-16

Ⅷ区 ST25-17

Ⅷ区 ST25-18

Ⅷ区 ST25-19

Ⅷ区 ST25-20

Ⅷ区 ST25-21

Ⅷ区 ST26-1

Ⅷ区 ST26-2

Ⅷ区 ST26-3・底部

Ⅷ区 ST26-4

Ⅷ区 ST26-5

Ⅷ区 ST26-6

Ⅷ区 ST26-7

Ⅷ区 ST26-8

Ⅷ区 ST30-1

Ⅷ区 ST30-2

Ⅷ区 ST30-4

Ⅷ区 ST30-8

Ⅷ区 ST30-9

写真120

Ⅷ区 ST30-10

Ⅷ区 ST30-11

Ⅷ区 ST30-12

Ⅷ区 ST30-13

Ⅷ区 ST30-14

Ⅷ区 ST30-15

Ⅷ区 ST30-16

Ⅷ区 ST30-17

Ⅷ区 ST30-18

Ⅷ区 ST30-19

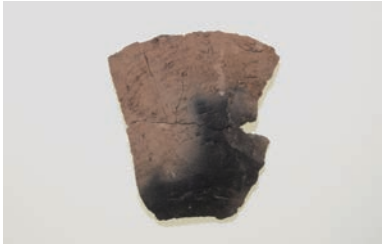
Ⅷ区 ST30-20

Ⅷ区 ST30-21

Ⅷ区 ST30-22

Ⅷ区 ST30-23

Ⅷ区 ST32-1


Ⅷ区 ST32-2

Ⅷ区 ST32-3

Ⅷ区 ST33-1

Ⅷ区 ST33-2

Ⅷ区 ST34-1

Ⅷ区 ST34-2

Ⅷ区 ST35-1

Ⅷ区 ST35-3

Ⅷ区 ST35-2

Ⅷ区 ST35-5

Ⅷ区 ST35-7

Ⅷ区 ST35-8

Ⅷ区 ST35-9

Ⅷ区 ST35-7・底部

Ⅷ区 ST35-8・底部

Ⅷ区 ST35-9・底部

Ⅷ区 ST35-12

Ⅷ区 ST35-14・底部

Ⅷ区 ST35-15

写真122

Ⅷ区 ST35-15・底部

Ⅷ区 ST35-16

Ⅷ区 ST35-18

Ⅷ区 ST38-1

Ⅷ区 ST38-3

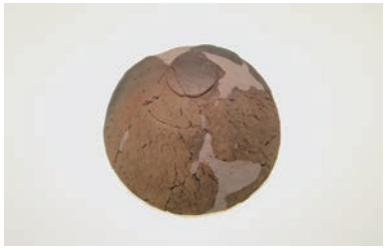
Ⅷ区 ST38-5

Ⅷ区 ST39-4

Ⅷ区 ST39-6

Ⅷ区 ST39-7

Ⅷ区 ST39-6・底部


Ⅷ区 ST39-7・底部

Ⅷ区 ST39-8

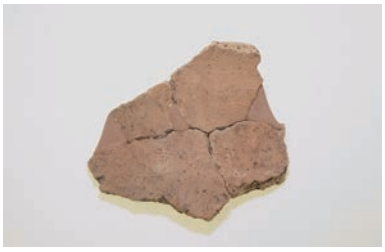
Ⅷ区 ST39-11

Ⅷ区 ST39-12

Ⅷ区 ST39-8・底部

Ⅷ区 ST39-13

Ⅷ区 ST40-1


Ⅷ区 ST40-2

Ⅷ区 ST40-3

Ⅷ区 ST41-1

Ⅷ区 ST41-4

Ⅷ区 ST42-2

Ⅷ区 ST42-3

Ⅷ区 ST41-5

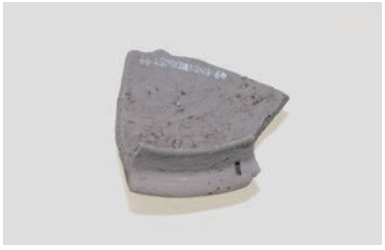
Ⅷ区 ST42-2・底部

Ⅷ区 ST42-3・底部

Ⅷ区 ST42-6

Ⅷ区 ST43-3

Ⅷ区 ST43-6


Ⅷ区 ST44-1・内面

Ⅷ区 ST44-2・底部

Ⅷ区 ST44-4

Ⅷ区 ST45-2

Ⅷ区 ST45-4

Ⅷ区 ST45-5

写真124

Ⅷ区 ST45-5・底部

Ⅷ区 ST45-7・底部

Ⅷ区 ST45-8・底部

Ⅷ区 ST45-9・底部

Ⅷ区 ST45-10・底部

Ⅷ区 ST45-11・底部

Ⅷ区 ST45-12

Ⅷ区 ST45-13

Ⅷ区 ST45-13・内面

Ⅷ区 ST46-1

Ⅷ区 ST46-2

Ⅷ区 ST47-3・底部

Ⅷ区 ST47-4・底部

Ⅷ区 ST48-1・内面

Ⅷ区 ST48-4・底部

Ⅷ区 ST48-7

Ⅷ区 ST48-7・底部

Ⅷ区 ST49-1

Ⅷ区 ST49-2

Ⅷ区 ST49-3

Ⅷ区 ST49-4

Ⅷ区 ST49-5

Ⅷ区 ST49-7

Ⅷ区 ST49-8

Ⅷ区 ST49-9

Ⅷ区 ST49-10

Ⅷ区 ST49-13

Ⅷ区 ST49-14

Ⅷ区 ST49-15・底部

Ⅷ区 ST49-17・底部

Ⅷ区 ST49-19・底部

Ⅷ区 ST49-20

Ⅷ区 ST49-20・底部

Ⅷ区 ST49-21

写真126

Ⅷ区 ST49-22

Ⅷ区 ST49-22・底部

Ⅷ区 ST49-26

Ⅷ区 ST50-1

Ⅷ区 ST50-4

Ⅷ区 ST50-5

Ⅷ区 ST50-2

Ⅷ区 ST50-4・底部

Ⅷ区 ST50-5・底部

Ⅷ区 ST50-6

Ⅷ区 ST51-1

Ⅷ区 ST51-2

Ⅷ区 ST51-4

Ⅷ区 ST51-5

Ⅷ区 ST51-6

Ⅷ区 ST51-8・底部

Ⅷ区 ST51-11・底部

Ⅷ区 ST51-13

Ⅷ区 ST51-13・底部

Ⅷ区 ST51-14・底部

Ⅷ区 ST51-16

Ⅷ区 ST51-17

Ⅷ区 ST51-15・底部

Ⅷ区 ST51-16・底部

Ⅷ区 ST51-17・底部

Ⅷ区 ST51-18

Ⅷ区 ST51-19

Ⅷ区 ST51-20

Ⅷ区 ST51-18・底部.

Ⅷ区 ST51-19・底部

Ⅷ区 ST51-20・底部

Ⅷ区 ST51-21・底部

Ⅷ区 ST51-23

Ⅷ区 ST51-24

写真128

Ⅷ区 ST52-1

Ⅷ区 ST53-1

Ⅷ区 ST53-2

Ⅷ区 ST53-3

Ⅷ区Ⅷ区 ST53-5

Ⅷ区 SB4-1

Ⅷ区 SB5-1

Ⅷ区 SB5-2

Ⅷ区 SB5-2・内面

Ⅷ区 SB5-3

Ⅷ区 SB5-3・内面

Ⅷ区 SB5-5

Ⅷ区 SB6-1

Ⅷ区 SB9-1・底部

Ⅷ区 SB10-1

Ⅷ区 SB13-1・内面

Ⅷ区 SB13-1・底部

Ⅷ区 SB14-1

Ⅷ区 SB15-1

Ⅷ区 SB16-1

Ⅷ区 SB16-1・底部

Ⅷ区 SB16-2

Ⅷ区 SB16-3

Ⅷ区 SB16-4・内面

Ⅷ区 SG1-1

Ⅷ区 SG1-2

Ⅷ区 SG2-1

Ⅷ区 SG2-2

写真130

Ⅷ区 SG2-3

Ⅷ区 SG3-1

Ⅷ区 SG4-1

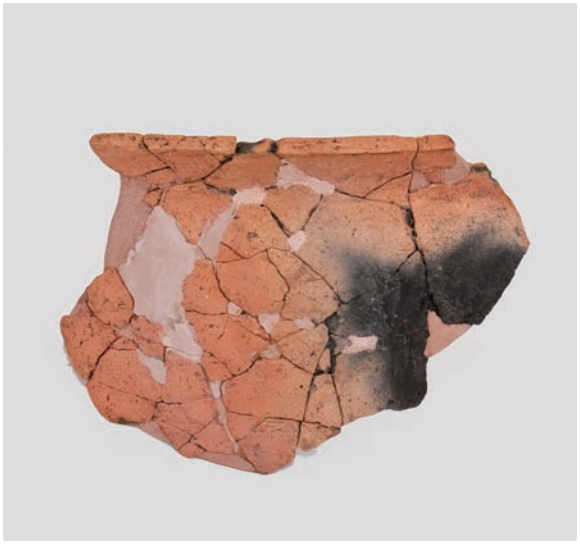
Ⅷ区 SG4-2

Ⅷ区 SG5-1

Ⅷ区 SG5-2

Ⅷ区 SG6-1・口縁部

Ⅷ区 SG6-1・胴部



Ⅷ区 SG6-2

Ⅷ区 SG7-1

Ⅷ区 SG8-1

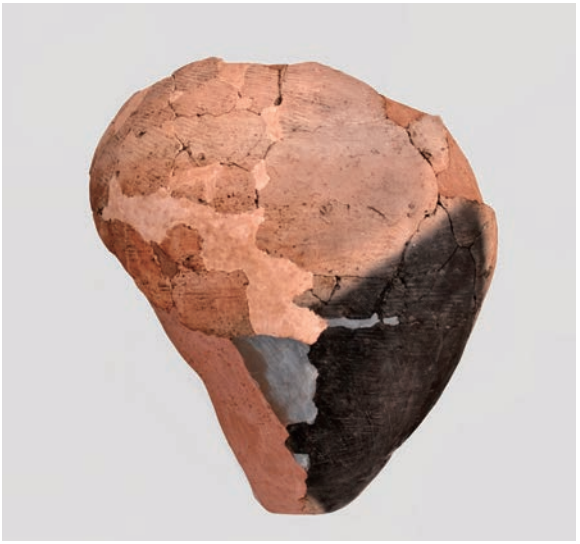
Ⅷ区 SG8-2

写真132

Ⅷ区 SG9-1

Ⅷ区 SG9-2

Ⅷ区 SG10-1



Ⅷ区 SG11-1

Ⅷ区 SG12-1

Ⅷ区 SG12-2

Ⅷ区 SG13-1

Ⅷ区 SG14-1

Ⅷ区 SG14-2

Ⅷ区 SG14-3

Ⅷ区 SG14-4

Ⅷ区 SG-15-1

写真134

Ⅷ区 SG15-2

Ⅷ区 SG15-3

Ⅷ区 SG16-1

Ⅷ区 SG17-1

Ⅷ区 SG17-2

Ⅷ区 SG18-1

Ⅷ区 SG18-2

Ⅷ区 SK2-1

Ⅷ区 SK2-2

Ⅷ区 SK2-3

Ⅷ区 SK2-4

Ⅷ区 SK4-1

Ⅷ区 SK4-2

Ⅷ区 SK4-3

Ⅷ区 SK4-4

Ⅷ区 SK4-5

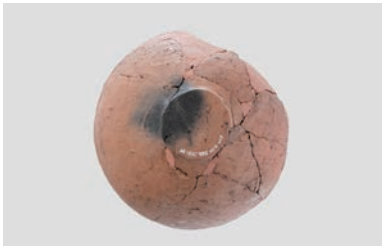
写真136

Ⅷ区 SK4-6

Ⅷ区 SK4-8

Ⅷ区 SK4-9

Ⅷ区 SK4-7


Ⅷ区 SK4-8・底部

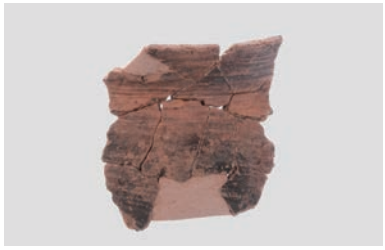
Ⅷ区 SK4-9・底部

Ⅷ区 SK4-10

Ⅷ区 SK4-11

Ⅷ区 SK4-12

Ⅷ区 SK5-1


Ⅷ区 SK5-3

Ⅷ区 SK5-2

Ⅷ区 SK5-4

Ⅷ区 SK5-5

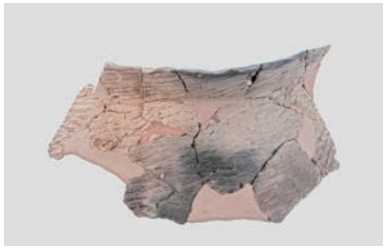
Ⅷ区 SK5-6

Ⅷ区 SK5-7

Ⅷ区 SK6-2

Ⅷ区 SK6-1

Ⅷ区 SK6-3

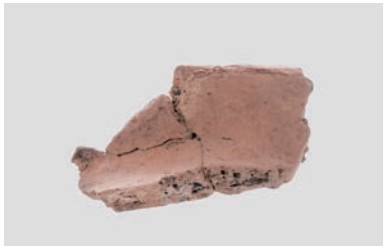

Ⅷ区 SK7-1

Ⅷ区 SK9-1

Ⅷ区 SK9-1・底部

Ⅷ区 SK9-2

Ⅷ区 SK9-2・底部


Ⅷ区 SK12-1

Ⅷ区 SK13-1

Ⅷ区 SK13-2

Ⅷ区 SK18-1

Ⅷ区 SK30-1

Ⅷ区 SK32-1

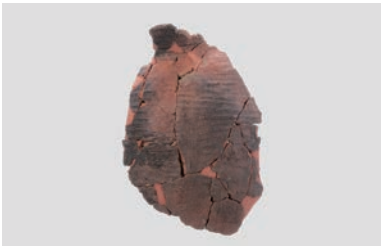
Ⅷ区 SK32-2

Ⅷ区 SK32-3

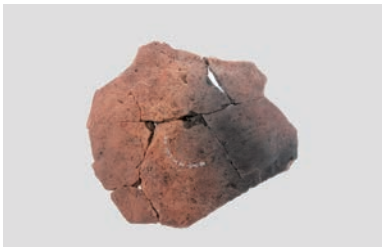
写真138

Ⅷ区 SK33-1

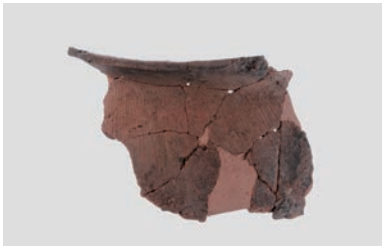
Ⅷ区 SK33-2


Ⅷ区 SK34-1

Ⅷ区 SK36-1


Ⅷ区 SK38-1・底部

Ⅷ区 SK41-1


Ⅷ区 SK41-2

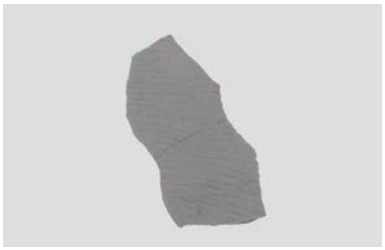
Ⅷ区 SK41-3

Ⅷ区 SK41-4

Ⅷ区 SK41-5

Ⅷ区 SK41-6

Ⅷ区 SK42-1

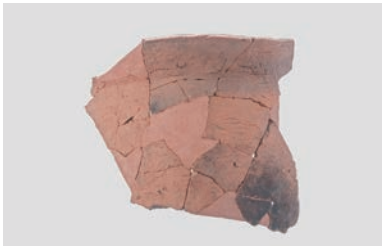

Ⅷ区 SK49-1

Ⅷ区 SK53-1

Ⅷ区 SK64-1

Ⅷ区 SK64-1・底部

Ⅷ区 SK65-1・底部


Ⅷ区 SK66-1

Ⅷ区 SK66-2

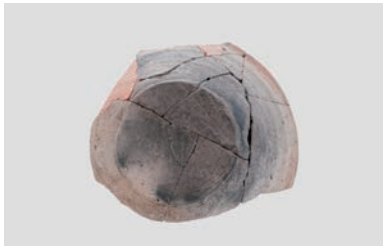
Ⅷ区 SK69-1

Ⅷ区 SK77-1

Ⅷ区 SK77-2

Ⅷ区 SK80-1

Ⅷ区 SK80-2


Ⅷ区 SK80-2・底部

Ⅷ区 SK80-3

Ⅷ区 SK80-4

Ⅷ区 SK81-1

Ⅷ区 SK81-2

Ⅷ区 SK81-3

Ⅷ区 SK81-4・底部

Ⅷ区 SK84-1

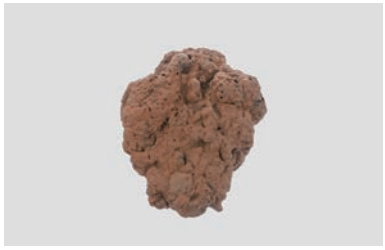
Ⅷ区 SK84-2

Ⅷ区 SK84-3

Ⅷ区 SK84-4

写真140

Ⅷ区 SK84-4・底部

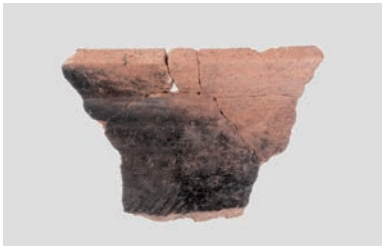

Ⅷ区 SK84-5

Ⅷ区 SK90-1

Ⅷ区 SK91-1

Ⅷ区 SK93-1

Ⅷ区 SK97-1


Ⅷ区 SK98-1

Ⅷ区 SK98-2・底部

Ⅷ区 SK98-3

Ⅷ区 SK98-4

Ⅷ区 SK98-6

Ⅷ区 SK99-1

Ⅷ区 SK100-1

Ⅷ区 SK100-2

Ⅷ区 SK101-1

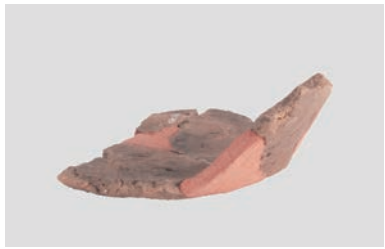
Ⅷ区 SK101-2・底部

Ⅷ区 SK104-1

Ⅷ区 SK106-1

Ⅷ区 SK106-2

Ⅷ区 SK106-3


Ⅷ区 SK106-4

Ⅷ区 SK106-5

Ⅷ区 SK106-5・底部

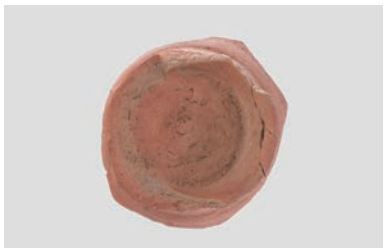
Ⅷ区 SK106-6

Ⅷ区 SK106-8

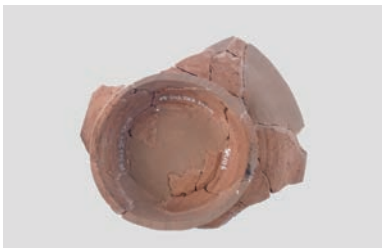
Ⅷ区 SK106-11

Ⅷ区 SK106-6・底部

Ⅷ区 SK106-8・底部


Ⅷ区 SK106-11・底部

Ⅷ区 SK106-12


Ⅷ区 SK106-12・底部

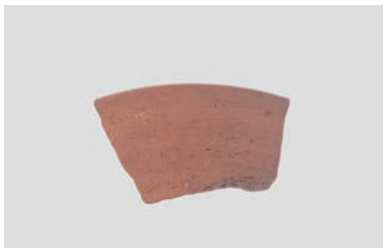

Ⅷ区 SK106-15

写真142

Ⅷ区 SK106-16

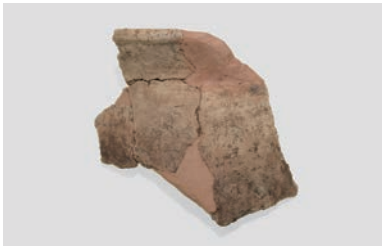
Ⅷ区 SK106-17

Ⅷ区 SK106-18

Ⅷ区 SX16・42-1・内面

Ⅷ区 SX16・42-1・底部

Ⅷ区 SX16・42-2


Ⅷ区 SX16・42-5

Ⅷ区 SX20-1

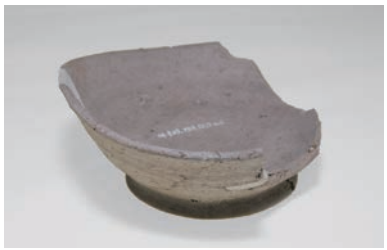
Ⅷ区 SX20-1・底部

Ⅷ区 SX20-2・底部

Ⅷ区 SX21-1

Ⅷ区 SX21-2

Ⅷ区 SX21-3


Ⅷ区 SX22-1

Ⅷ区 SX22-3

Ⅷ区 SX22-5

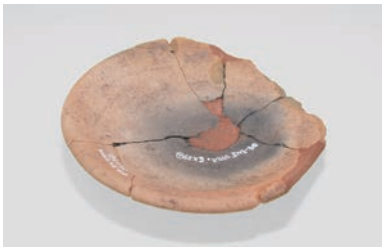
Ⅷ区 SX22-6

Ⅷ区 SX22-7

Ⅷ区 SX22-8

Ⅷ区 SX23-1

Ⅷ区 SX23-1・内面


Ⅷ区 SX23-2

Ⅷ区 SX23-2・底部

Ⅷ区 SX24-1・底部

Ⅷ区 SX24-2

Ⅷ区 SX24-3

Ⅷ区 SX24-4

Ⅷ区 SX25-2

Ⅷ区 SX25-3・底部

Ⅷ区 SX25-4・底部

Ⅷ区 SX25-5

Ⅷ区 SX26-1

Ⅷ区 SX26-5

Ⅷ区 SX26-6・底部

Ⅷ区 SX29-1

Ⅷ区 SX29-1・底部

写真144

Ⅷ区 SX29-2

Ⅷ区 SX29-5

Ⅷ区 SX30-1

Ⅷ区 SX29-3

Ⅷ区 SX29-5・底部

Ⅷ区 SX30-1・内面

Ⅷ区 SX30-2・底部

Ⅷ区 SX32-1

Ⅷ区 SX33-1

Ⅷ区 SX31-1

Ⅷ区 SX32-1・底部

Ⅷ区 SX33-2

Ⅷ区 SX33-3

Ⅷ区 SX33-5

Ⅷ区 SX33-7・内面

Ⅷ区 SX33-3・底部

Ⅷ区 SX33-5・底部

Ⅷ区 SX33-7・底部

Ⅷ区 SX33-6・底部

Ⅷ区 SX33-9

Ⅷ区 SX33-10

Ⅷ区 SX34-1

Ⅷ区 SX34-2

Ⅷ区 SX34-3

Ⅷ区 SX34-4

Ⅷ区 SX34-5

Ⅷ区 SX34-6

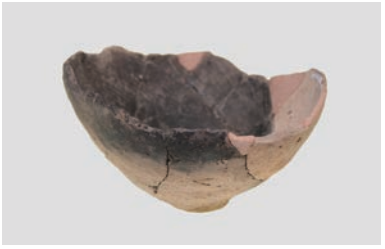
Ⅷ区 SX34-7

写真146

Ⅷ区 SX34-8

Ⅷ区 SX34-9

Ⅷ区 SX34-10



Ⅷ区 SX34-11

Ⅷ区 SX34-12

Ⅷ区 SX36-1

Ⅷ区 SX34-11・底部

Ⅷ区 SX34-12・底部

Ⅷ区 SX36-2

Ⅷ区 SX36-3

Ⅷ区 SX36-4

Ⅷ区 SX36-2・底部

Ⅷ区 SX36-3・底部

Ⅷ区 SX36-4・底部

Ⅷ区 SX36-5

Ⅷ区 SX36-7

Ⅷ区 SX36-8

Ⅷ区 SX36-9

Ⅷ区 SX37-1

Ⅷ区 SX38-1

Ⅷ区 SX38-2・内面

Ⅷ区 SX38-2・底部

Ⅷ区 SX38-3・底部

Ⅷ区 SX38-4・底部

Ⅷ区 SX38-6・底部

Ⅷ区 SX38-9

Ⅷ区 SX38-10

Ⅷ区 SX38-11

Ⅷ区 SX38-13

Ⅷ区 SX39-1・内面

Ⅷ区 SX39-1・底部

Ⅷ区 SX39-2

写真148

Ⅷ区 SX39-4

Ⅷ区 SX40-1

Ⅷ区 SX40-2

Ⅷ区 SX40-3

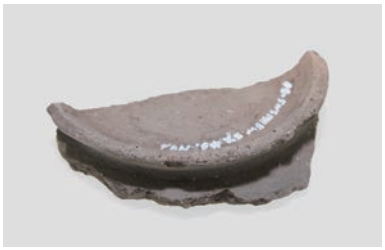
Ⅷ区 SX41-2

Ⅷ区 SX40-2・底部

Ⅷ区 SX41-4

Ⅷ区 SX43･44-1

Ⅷ区 SX43･44-1・内面


Ⅷ区 SX43･44-5・底部

Ⅷ区 SX43･44-6・底部

Ⅷ区 SX45・46-3

Ⅷ区 SX46-1

Ⅷ区 SX46-3

Ⅷ区 SX46-3・内面

Ⅷ区 SX46-5・底部

Ⅷ区 SX47-1・底部

Ⅷ区 SX48-1

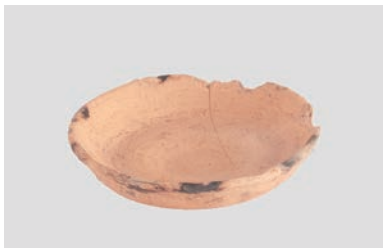
Ⅷ区 SX48-1・内面

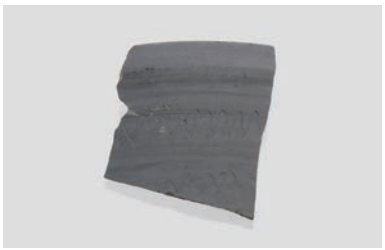
Ⅷ区 SX48-2

Ⅷ区 SX48-2・底部

Ⅷ区 SX49-3

Ⅷ区 SX51-4


Ⅷ区 SD1-1


Ⅷ区 SX51-1

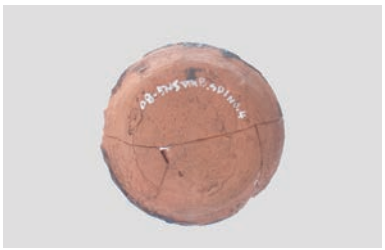
Ⅷ区 SX51-4・底部

Ⅷ区 SD1-1・底部

Ⅷ区 SD1-2

Ⅷ区 SD1-4

Ⅷ区 SD2-1


Ⅷ区 SD1-2・底部

Ⅷ区 SD1-4・底部

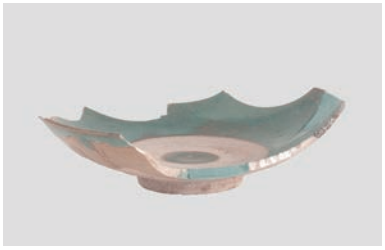
Ⅷ区 SD2-2

Ⅷ区 SD2-3

Ⅷ区 SD3-1

Ⅷ区 SD3-2

写真150


Ⅷ区 SD3-3

Ⅷ区 SD8-2

Ⅷ区 SD8-2・底部

Ⅷ区 SD8-4

Ⅷ区 SD8-9

Ⅷ区 SD8-15

Ⅷ区 SD8-4・底部

Ⅷ区 SD8-9・底部

Ⅷ区 SK8-15・底部

Ⅷ区 SD8-16

Ⅷ区 SD8-17

Ⅷ区 SD11-1・底部

Ⅷ区 SD16-1

Ⅷ区 SD17-1

Ⅷ区 SD17-2

Ⅷ区 SD17-3

Ⅷ区 SD36-1

Ⅷ区 SD46-1

Ⅷ区 SD46-1・底部

Ⅷ区 SD46-2

Ⅷ区 SD46-2・底部

Ⅷ区 SD47-1

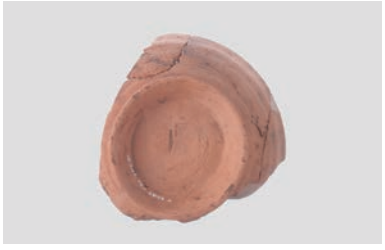
Ⅷ区 SD47-1・底部

Ⅷ区 SD73-1

Ⅷ区 SD73-2

Ⅷ区 SD73-3

Ⅷ区 SD73-4・底部


Ⅷ区 SD73-2・底部

Ⅷ区 SD73-3・底部

Ⅷ区 SD73-5・底部

Ⅷ区 SD73-6

Ⅷ区 SD73-7

Ⅷ区 SD73-8

Ⅷ区 SD73-9

Ⅷ区 SD81-1

Ⅷ区 SD81-1・底部

写真152

Ⅷ区 SD84-1・底部

Ⅷ区 SD84-2・底部

Ⅷ区 SD84-3

Ⅷ区 SD86-1・底部

Ⅷ区 SD87-1・底部

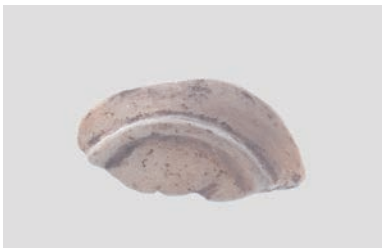
Ⅷ区 SD91-1

Ⅷ区 SD91-2

Ⅷ区 SD97-1

Ⅷ区 SD97-2

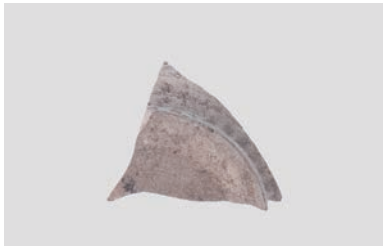
Ⅷ区 SD98-1・底部


Ⅷ区 SD98-2・底部

Ⅷ区 SD99-1・底部

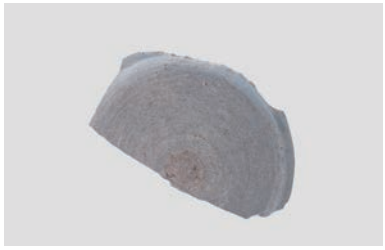
Ⅷ区 SD99-2

Ⅷ区 SD99-3


Ⅷ区 SD99-4・底部

Ⅷ区 SD99-5

Ⅷ区 SD99-6


Ⅷ区 SD104-1

Ⅷ区 SD104-1・内面

Ⅷ区 C8-10-22P1・内面

Ⅷ区 C8-14-5P5-1・底部

Ⅷ区 C8-15-5P1-1・底部

Ⅷ区 C8-15-7P6-1

Ⅷ区 C9-3-23P6-1・底部

Ⅷ区 C9-7-7P9-1・底部

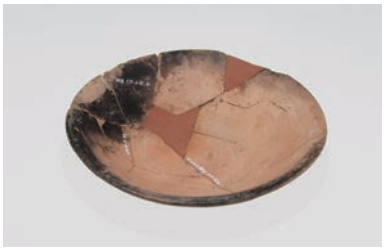
Ⅷ区 C9-7-19P1-1・底部

Ⅷ区 C9-8-7P1-1

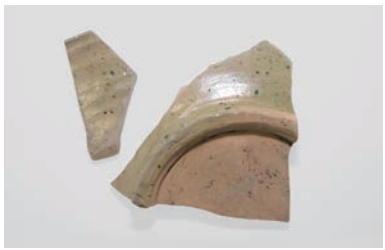
Ⅷ区 C9-8-14P4-1

Ⅷ区 C9-8-22P3-1

Ⅷ区 C9-9-1P1-1


Ⅷ区 C9-9-13P1-1

Ⅷ区 C9-10-6P1-1


Ⅷ区 C9-11-16P1-1・底部

Ⅷ区 C9-9-13P1-1・底部

Ⅷ区 C9-11-17P1-1・底部

写真154

Ⅷ区 C9-12-6P1-1・底部

Ⅷ区 C9-12-6P1-3・底部

Ⅷ区 C9-12-6P1-4・底部

Ⅷ区 C9-12-6P1-5・底部

Ⅷ区包含層 1

Ⅷ区包含層 2

Ⅷ区 C10-6-8P1-1

Ⅷ区包含層 1・内面

Ⅷ区包含層 2・内面

Ⅷ区包含層 5

Ⅷ区包含層 6・底部

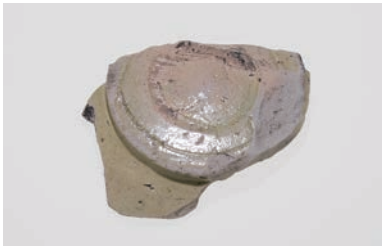
Ⅷ区包含層 8

Ⅷ区包含層 14

Ⅷ区包含層 15

Ⅷ区包含層 8・底部

Ⅷ区包含層 18・底部


Ⅷ区包含層 21・底部

Ⅷ区包含層 26・内面

Ⅷ区包含層 29

Ⅷ区包含層 29・内面

Ⅷ区包含層 32

Ⅷ区包含層 33・内面

Ⅷ区包含層 37

Ⅷ区包含層 38

Ⅷ区包含層 39

Ⅷ区包含層 44・底部

Ⅷ区包含層 46・底部

Ⅷ区包含層 49

Ⅷ区包含層 49・文字拡大

Ⅷ区包含層 51

写真156

調査風景

クレジットタイトル

埋蔵文化財発掘調査原因者・委託者	高知県 中央東土木事務所
埋蔵文化財発掘調査受託者	(公財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
発掘調査担当調査員	近藤孝文　前田光雄
整理作業担当調査員	前田光雄
技術補助員	宮地啓介
測量補助員	池 宣宏　前田早苗
発掘調査協力調査員	久家隆芳　筒井三菜
発掘現場測量協力補助員	都築 愛　秋山英洋
発掘作業・整理作業・遺物指導等	出原恵三　廣田佳久　吉成承三　松村信博　池澤俊幸　久家隆芳 筒井三菜　辻 康男
調査課担当	出原恵三　廣田佳久
総務関係担当	里見敦典　弘末節子　黒岩千恵　榊 琴美　濱田 晶　友永可奈　奥宮千恵子
管理担当	森田尚宏　嶋崎るり子
現場測量委託会社	株式会社四航コンサルタント
自然科学分析委託会社	パリノ・サーヴェイ株式会社 大阪支店
発掘調査作業	清遠 正　高野良夫　久家 瑞　横田輝子　中沢二男　木下敏彦　岩本みかを 武内順一　武内昌子　浜田友喜　徳久道子　吉本美代子　橋本佐与子 大石嘉久　黒岩幸子　中谷沙織　宮添 彬　小笠原正貴
現場遺構実測	宮地啓介　近藤孝文　池 宣宏　前田早苗　筒井三菜　都築 愛　秋山英洋 久家隆芳
現場写真撮影	近藤孝文　宮地啓介　前田早苗　筒井三菜　前田光雄
現場空撮写真	株式会社四航コンサルタント
遺物基礎データ整理	前田早苗　山中美代子　門田美知子
遺物洗浄・注記・接合	門田美知子　竹村延子　松山真澄　久家朋子　志磨村美保　高橋洋子 友田ひとみ　大谷亜紀子　竹村加奈子　吉田誉香　山本美佳　恒石陽子 野中典子　中尾 希
遺物復元	門田美知子　竹村延子
遺物実測図	山中美代子　吉本由佳　高橋加奈　岡崎千枝　加来安由美　橋田美紀 土居初子　入野三千子　畑平裕美　藤原ゆみ
遺物デジタルトレース	吉本由佳　高橋加奈　岡崎千枝　加来安由美　山中美代子　高橋由香
石器アナログトレース	山中美代子
遺物図版作成	吉本由佳　高橋加奈
遺構基礎データ整理	近藤孝文　宮地啓介　前田早苗　山中美代子
遺構図作成	前田早苗　山中美代子
遺構図デジタルトレース	山中美代子　吉本由佳　高橋加奈　岡崎千枝　前田早苗
遺構図アナログトレース	山中美代子　加来安由美
遺構図版作成	山中美代子　前田早苗　加来安由美
遺物写真撮影	前田早苗　前田光雄
遺物写真図版作成	前田早苗　岡崎千枝
遺物写真撮影指導	久家隆芳
遺構写真図版作成	前田光雄
胎土分析寄稿	白石 純
報告書校正	山中美代子　門田美知子　前田早苗　吉本由佳　高橋加奈　岡崎千枝 加来安由美
報告書本文執筆	前田光雄　前田早苗
報告書編集	前田光雄　前田早苗

報告書抄録

ふりがな	きねんいせき
書　名	祈年遺跡Ⅳ
副書名	国道 195 号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 4 分冊　Ⅷ区
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 131 集
編著者名	前田光雄　前田早苗　白石 純　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
所在地	〒 783 － 0006　高知県南国市篠原 1437 － 1　　TEL 088 － 864 － 0671　FAX 088 － 864 － 1423
発行年月日	2012 年 9 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
祈年遺跡 （きねんいせき）	高知県南国市東崎他 （こうちけんなんこくしひがしざき）	39204	0166	33° 35′ 10″	133° 38′ 28″	20070401 ～ 20091225	21,707	国道 195 号線改築に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祈年遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 竪穴状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、壺棺	弥生時代後期の集落及び壺棺 22 基を検出。古墳時代後期の竈付き竪穴建物跡県下最多。古代道路状遺構検出。

要　約

弥生時代竪穴建物跡約 40 軒、古墳時代竪穴建物跡約 30 軒、古代掘立柱建物跡約 50 棟である。長岡台地での調査事例としては最大規模の内容となった。

弥生時代は後期中葉、後期後半、終末から古墳時代初頭にかけての 3 区分である。後期後半の住居跡の規模は円形で径 8 ～ 10m を超える。住居跡以外に壺棺を 22 基検出した。集落の中央部に纏まる。壺の口を割り別の土器で蓋をしたもの、壺にさらに一回り大きな土器をすっぽり覆い被せ、入り子にしたものなどがあった。壺は穴を掘り、壺を安定させるために穴の底に数個の石を置いたものなどもあった。高知県下では最も多い。

古墳時代後期終末の住居跡は 27 軒検出している。方形で一辺 5、6m の中型の住居跡で占められ、北側部に造り付けの竈を有する。高知県下では最も多い。

古代では掘立柱建物跡が 50 棟余りである。柱穴の形状が円形、方形のものがそれぞれ認められる。径 50 ～ 70㎝程の掘り方を持つものが多い。古代の中で最も重要な遺構は、道路状遺構である。2 条の溝の幅員約 6m 程あり、溝自体は幅約 70 ～ 90㎝、深さ 30㎝の規模で南北方向に縦走する。上部は後世に削平を受けているために、轍跡等は検出できなかった。古代香長条里に則し、国分寺の東側に直線上に通じることから、土佐国の国衙に通じる主要道路の可能性が極めて高い。今まで高知県では古代官道関連の調査例はなく、初めての検出例である。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 131 集

祈年遺跡Ⅳ

国道 195 号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 4 分冊　Ⅷ区

編　集　（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
発　行　（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原 1437 － 1
電話　088 － 864 － 0671
発行日　2012 年 9 月 30 日
印　刷　共和印刷株式会社

Printed in Japan

Copyright © 2012 Kochi Archaeological Research Center

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~maibun/